LA REKONSTRUO

改造

九月特大号

1922

ガンヂ審判の日

新刊發賣

饒平名智太郎編

定價壹圓五拾錢

◇送料十五錢◇

◇四六判布裝◇

地上にかくの如き聖哲を見ることは現代の奇蹟である、釋迦、プラトー、基督の再生とも見らるべき我がガンヂの存在は神靈の存在そのものと同一だ、三億印度民生のために彼は囚はれて囹圄の人となつた、本書は彼が今回印度官憲に審問されし以後の彼及び印度の行動を描く、被告にして審判官を審くが如きかの法廷の森嚴水を打てるが如き狀態に見よ、そして現在獄中の彼の悠容たる神格の光りに接するとき我々は地上に投げられたる二つの太陽あることに思ひ至つた。「理想主義的革命」「眞理の把持」その二つは實に彼の神格より分化されたる光輝ある二大文字である。本書は「ガンヂと眞理の把持」の續篇として我國民否世界民の必讀に値すべき書である。

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二



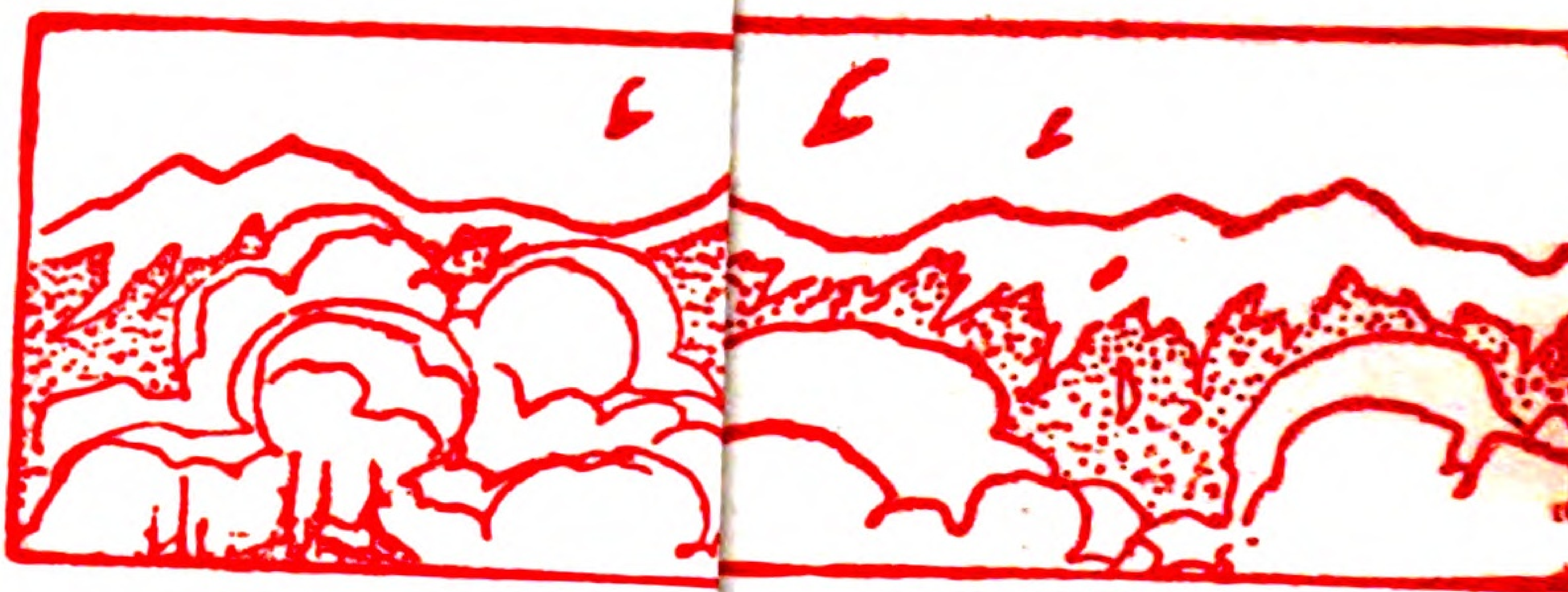


改造 九月增大號 目次

貢

るときこの創作が眞に我々の心をシッカリ捉へて離さぬことに氣づかれる。

東京二〇



早大教授 伊達保美著（上卷）

哲學概論

◇四六版ボプリン表裝五五〇頁◇

◇定價金參圓五拾錢 送料金十五錢◇

第五版

本書は著しく一般化され又深められた現時の哲學的要求を嚮導すべき嚴重なる前提として同時に又過現一切の哲學的努力に對する批判的研究として、學として成立すべき哲學の本質及課題を究明し、其諸問題の起點と發展と歸向を展示し論述したものである。殊に此上卷に於ては其基礎として理論哲學の諸問題が取扱はれ、讀者をして現代哲學の諸傾向との接觸に導いて居る。涉獵の該博と敍述の嚴正と批判の透徹とは、單り其量に於て、我國哲學概論の文獻中斬然頭角をあらはせる名著として推す可きものである。

◇時事新報評：：哲學の概念及課題を序論に述べ純正哲學の基調たる認識と實在の二部門に就き前者は認識の可能性と起源及び對象、後者は實在の數量と本質及び生成の各三方面に互つて嚴正に取扱ひ、論理の整然として然も文章の明徹なるは、新しき時代の哲學に對する要求を充たす可き最近の傑作である。

◇解放評：：哲學的諸原理諸問題に就ての客觀的資料を豐富に採り入れ。入門者をして哲學の何たるかを知らん、生るに努められた點及び哲學上最近の諸傾向を評論されてゐる點等は、既出の概論書に得られぬ所で、批判的哲學概論として白眉であらう。

早大教授 横山有策著

七版

文學概論

▼四六版 三〇〇頁▼

▼價貳圓 送料八錢▼

發兌 東京牛込早稻田鶴卷町 振替東京六〇六九三番 泰文社

四版發賣

物理學と認識

理學博士 桑木彧雄著

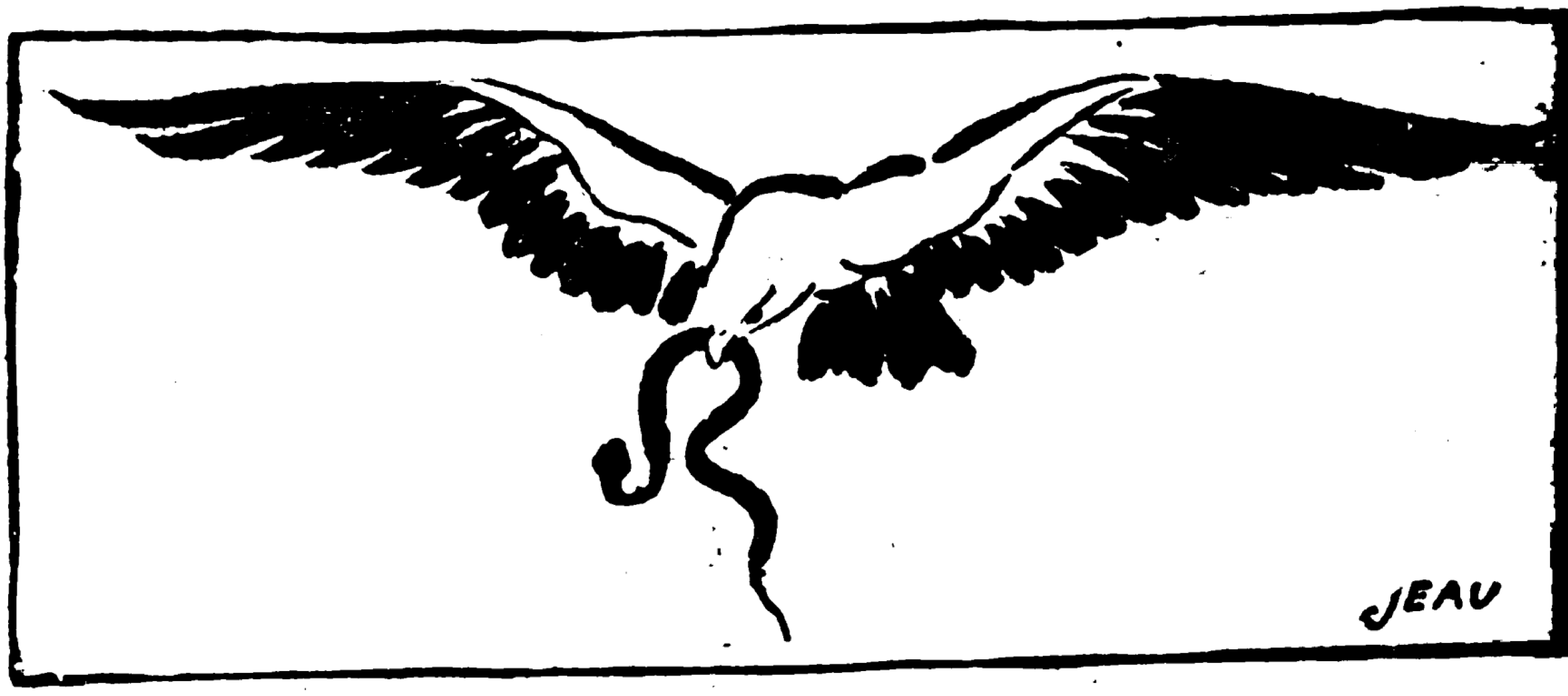
定價壹圓五拾錢
送料十五錢
四六版布製

従來科學と哲學との目的、方法は全然相違したもので兩者は相互に無關渉であると思はれた、ところが、アインスタインの原理は科學と哲學とを密接な關係にまで導きよせたこの物理學上の新原理が惹起した空間や、時間の考方の變化は明かに哲學上の問題であるが、さう云ふ哲學的な考方の變化から科學に影響を生ずるであらうことは從來の科學が毫も豫期しなかつたことだ、本書は實に科學と哲學との密接な關係につき博士が蘊奥を傾けたものだ。博士の物理學に對する造詣は石原博士のそれの如く世既に定評がある。

=內容=

(物理學と認識)(文藝上の描寫論と科學)(物理學上の認識の問題)(絶對運動論)(一)序論(二)ニユートンの説 (三) ニユートンの説の繼承(四)ライフニツツの説 (五) 運動律の標準體系説 (六)マツハの説 (七)空間の表象 (八)エーテルの概念 (九)電子説上の絶對運動説 (一〇) 結論(アインスタインの哲學 (熱力學の方法)(力の觀念の歴史的發達)(ダランベールの力學) 附錄一(研究と科學教育)研究所の三種 研究所の組織 獨逸流の大學 英佛學者の評 學界の覇王 科學の人道化 附錄二(九州に於ける理學の先驅) 西川加見 本木仁太夫

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二



==((改造九月號))==

人生答辯

我々は何の爲めに生きておる、我々はどんな仕事をすればよい、一生にどれだけ出來るか、子が一千年を通じてどれだけ意義ある事業が出來る、科學と哲學は絶對的にこの證明が出來るか　そして宗教はどうだ、かく人生を眺望すれば自分は何に依るべきであるか、何によりて人生への意義を求むべきか。

自分は自　で得た體驗と智識とが一番尊く、一番強いとすれば、自分は自分の理念で六十年を押通さねばならぬ、そして氣持よく社會に生きねばならぬ、自分の所思が世に入れられずば喜んで孤獨になる、孤獨はさびしい、しかし自個の意思に反して社會に生きるよりましだ、だが自分の六十年が自分の肉體のためにのみ存在するものとは　けぬ。

かく〳〵生を念へ、玩味すればなか〳〵におもしろい、六十まで僕が生きるとして――あと二十二年――をいかにして生きる、僕の好きなあの庭の椎木ももう二十二年しか友達ではないか、お前が二尺も太さを増した時分に僕もからだは一塊の土くれだ、むぐらの小世にけがされておる。二十二年は夢や幻のやうだろう、夢や幻には物慾がなく、飯も喰はず、着物も纏はずですむ、飯を喰ひ、慾があることに依って七面倒の生問題が起る、階級鬪爭が起る、長屋の喧嘩から國際戰爭となる。それなら僕や、お前はいかにして生くればよいか、別段お前と僕が各個の生活、慾望に對して妥協する必要もなかろう、しかしお前も自分もその與へられたる年限をいかに働くか、どれほど事業が出來るか、自分の半歳位は默念して見ようぢゃないか、自分の確たる目的もないのに、その日〳〵を暮らしていてはあまりに馬鹿らしいことではないか、半歳も、着物も幽まず、何事もせず、人生への默想をつゞけたら何かの目安も立たう、目安が立ったらそれを目がけてまっしぐらにつき進めば二十二年では可なりの事業も成しやう、一生を世間體でごまかすのは愚にもつかぬことだ、人が海水に行けば自分も海へ、また山へと轉々して流動するのでは何の役にも立つまいぢゃないか、組織に至るまで、實行に至るまでは根本をつきつめるため自分だけの心血を犧牲にせねばならぬ、人生の根本問題――基礎理念――そう云ふ絶對のものはあり得ない、だから自分は自分で思想し、その思想を勇まし　行爲し　い。

山や川に　くのもよい、しかし何のために行く、廿位の若さでは體をつくることの緊要事の第一だが、三十にも做くころから靜に自分の行くべき三十年の後半生涯を凝視し、思索するがよい、最終の目的地を豫測し思念せずしてどこへ歩いて行く、目なき努力にどうして力がはいろう、血が湧かう、

事は強ち日本人とのみを云はない、總ての文明人と稱する人がお　はたとこに人間として！いて行　かと問は　たときに答辯の用意ある人が　人あろう、諸君は答辯の用意があるか、そして一生のプログラムが立っておるか、



私の主意主義の意味

西田幾多郎

私はまだ何主義といふ様に自分の考が定まつた譯ではなく、又さういふ風に定めるのが善いか惡いかは問題である。併し私は所謂主知主義よりも主意主義に傾いて居ることは事實である。私は私の主意主義の意味を少し明にして置きたい。

普通に意志と云へば、意識現象の一種と考へられ、而も意識現象の中で、最も後に發達する意識現象と考へられる。かゝる意識現象がすべての意識現象の基であるのみならず、實在の根本的形式であるといふのは、受け入れ難いと考へる人のあるのも無理ならぬことである。

併し現に心理學上、主意主義を取る人は多いであらうし、又今は却つてその方が心理學の大勢であると云つてよいかと思ふ。ヴントは自分でどれだけ實際の說明に主意主義を用ゐて居るか知らぬが、自分は主意主義であると明言して居る。勿論、心理學上の主意主義と云つても、所謂意識された意志と云ふものがすべての意識現象の基であると云ふのではない唯すべて意識現象は知覺の如きものでも衝動的であつて、所謂意識的意志といふのは、意志の動機の衝突より現れる現象と考へるのである。

私の主意主義といふのは心理學で云ふ如き主意主義ではない、カントの認識論の立場といふものを十分に顧慮した上の主意主義である。無論、私は心理學の上でも主意主義を取らうと思ふものではあるが、私の主張するのは哲學的主意主義である。カントはすべての表象に伴ふ「私が考へる」といふ純粹統覺を、すべての知識の成り立つ基として居るが、私は「私が考へる」といふ基に「私が意志する」といふことがあると思ふ、純粹統覺の根柢に純粹意志があると思ふのである。純粹意志は純粹統覺よりも深くして且つ廣い、後者は前者の中に含まれ得ると思ふのである。私は斯く考へることによつて思惟と直觀との內面的結合を明にすることができ、之によつて思惟の範疇と直觀の形式との結合を明にし得るのみならず、知識の形式と內容との結合をも明にし得ると思ふ。何となれば、意志的行爲といふのは客觀界を主觀化することである、主客の合一を意味するからである。カントの云ふ如く我々の客觀的知識の世界が思惟と知覺との結合によつて成立するものとするならば、かゝる結合の根柢に意志の形式がなければならぬ。私は此の如き考から意志といふよりも行爲と云つた方がよい樣に考へる、その方が客觀的な意味を一層能く表はし得るとも思ふのである。

私の主意主義といふのは、因果律の立場に於て意志を原因と考へるのではない。私は知識的對象界の根柢に動的統一を見出すことが意志することであると考へる。物が欲求の對象となる時、既に我々は意志的統一の立場に立つて居るの

である。意志の立場は知識の立場よりも高次的であつて、知的對象界に於ては意志的現象を求めることはできぬ。意志は對象化することはできぬ、對象化すれば意志ではなくなる。自覺とか、意志とかいふものが幻覺か錯覺かに過ぎないと云ふならばとにかく、然らざれば知識以上の立場といふものを認めねばならぬと思ふ。私はフイヒテなどの様に、知識成立の根柢に意志を認めるものである。

或は私の云ふ如き意志は、普通に自己の欲求を中心として考へる意志と異なると云ふかも知れない。併し普通に小さな自己を中心として考へて居る場合でも、我々の自己はその見て居る世界の外に立つて居るのである。而して我々が之を意志の對象とすることは、之を動的統一の立場に於て見ることである。無論我々の自己は無限に深く大きなものであるから、此の如き意志に對して外に無限に廣く大なる純知識的な客観界と思はれるものがあるであらう。併し我々は又意志の立場に於て何處まで動的統一の立場を進めて行くことができるのである。動的統一の立場の進むだけそれだけ客観界を主観化することができるのである。

我々の意志といふ現象が時間上後に發達するからと云つて、主意主義に反對する人があるならば、それは意志を單なる知識對象界に映して、因果の範疇に當嵌めて考へて居るのではないかと思ふ。併し前に云つた如く我々の意志の自覺が所謂知識の範疇以上に出づるものとするならば、私は意志の立場に於て知識以上の世界を見ると考へねばならぬ。而して私はカントが知識は經驗と共に始まるが經驗から生ずるのではないと云つた様に、意志の自覺は時間上知識の後に現れるかも知らぬが、知識から來るのではないと云ひたい。意志に對しても與へられるものは求められたものでなければならぬ。而して意志が知識より一層深いものであるとすれば、その對象界も知識の對象界より一層深いものと考へねばならぬ。此處に我々の意識現象を衝動的と考へる心理學的主意主義に哲學的意味を與へることもできる。

體驗といふのは知識でないと云ふのはカント學者の能く云ふ所である、認識以前としてそこには立ち入つてはならぬと考へられて居る。無論知識といふことの定義の仕方によつては、さうも考へられるであらう。併しかういふことを主張する人に對して、私は先づ認識論といふ學問は如何なる認識の範疇によつて成立するのであるかを尋ねて見たい、知識を反省する知識は如何なる立場に於て可能なるかを聞いて見たい。私は知識以上の立場といふものが認められて、知識の成立を論じ得るのではないかと思ふ。私はかゝる立場を作用の作用の立場合、即ち意志の自覺の立場と考へる。哲學的知識は自己が自己を反省する、或は意志が意志自身を反省する自覺の立場に於て成立すると思ふ。それは知識でないと云はれるかも知らぬが、それでは知識成立の範疇を論ずる認識論は知識でないのであるか。或はかういふ知識の一般的妥當性が問題となるかも知れない。併し私は超越的認識主觀によつて知識の客觀性が立せられる如く、超越的意志主觀によつて、かゝる意味の意識の客觀性が立せられると思ふ。意志には經驗内容が一致せないから、意志の要求はポスチュレートに過ぎぬとも考へられるが、經驗の客觀的要素と考へられる感覺といふ如きものも單なる所與ではない、構成せられたものである。意志の對象界に於て感覺に相當するものは衝動であると云ひ得るであらう。

それで私の主意主義といふのは意志を原因と見るのではなく、直接にして具體的なる實在は意志の形式を具して居ると云ふのである。客觀的に力といふものを考へるのは却つて意志の射影を見るに過ぎないと思ふのである。主客合一の創造的眞實在は意志であり、行爲である。認識對象の世界はその抽象的一面に過ぎない。我々の自覺は此の如き意志の形式を明にするものであつて、一面に於て自己が自己を知ることは他面に於て行爲であり、創造である。我々の意志的

行爲も一方に於て知なると共に一方に於て行である。行なくして知といふことなく、知なくして行はない。知なき行爲は單なる運動に過ぎないのである。理性の立場といふのは、我々が自覺に於て無限に自己を省みる如く、超越的意志が無限に深く自己の内に省みる反省的方面であつて、超越的意志はかゝる理性の世界を包含して、更に無限に創造的なる己自身の世界を有つて居る。是に於て自然界の上に藝術道德宗教の文化現象の世界が成立するのである。私の知識以上の意志の世界といふのは單なる無意識と混同せられ度ない。普通の無意識といふのは矢張り意識の對象化である、知識を離れた意志である、物力と擇ぶ所はない。眞の意志は明なる知的内容を含んだものでなければならぬ、理性を含んだものでなければならぬ。眞の神秘は徹底せる理性の上に立たねばならぬ、反理性的なる神秘は即迷信である。私の意志といふのはショーペンハウエルの云ふ如き盲目的意志ではない、文化的意志である。盲目的に働くものは物力であつて意志ではない。或は私の意志といふのはヘーゲルの理性といふのと同様ではないかと云ふ人もあるかも知れない。私はヘーゲルのデイヤレクチックに於て理性自身が自己矛盾によつて新なる綜合的内容を得來ると云ふ所を意志の創造と考へる。特に私はヘーゲルの論理より自然哲學に移る所に意志的統一の深き體驗の自省なくして内面的推移を見出し得ないと思ふ。併し私はヘーゲルの理性はその語の示す如く矢張り理性であつて、知的に偏して居ると考へる。私は理性の背後に於ける情意的内容を一層深く鮮に見たいと思ふ。

最後に私の超越的意志（これは先驗的といつた方がよいかも知れぬが）といふのは、誰の意志でもない一般的な抽象的な意志と解せられたくない。意志は何處までも個性的でなければならぬ。誰の意志でもない一般的意志といふ如き意志は意志ではない。併し意志はかういふことを云ふ人々の考へる様に、單に特殊的ではない。單に特殊的なるものは、認識對象界に於て限定せられた或一點といふ如きものであつて、意志ではない。意志は特殊の中に一般を含んだもので

ある。知識に於ては一般の中に特殊を含むと考へられるが、意志に於ては特殊の中に一般を含むと考へねばならぬ。之によつて意志は知識を包含して創造的となることができるのである。私の超個人的といふのは知識の對象として考へられた即ち對象化せられた個人を超越するといふ意味である。對象化せられた個人は個物と擇ぶ所はないと思ふ。意志の對象界に於ては互に目的其物となることが一つに統一せられることである。」

此論文は詳細なる私の考の意義や證明を目的としたものではない。唯その誤解せられ易い點を多少辨明したまでである。

宗教の獨自的絕對性より普遍的絕對性へ

石原純

一

宗教は私たちの本能的な心のなかに宿る敬虔觀念によりて成り立ち、その對象として立てられた至聖なるものに對する尊崇、讃仰の信念を中核となし、依りて人生に於ける道を自から高めることに資するものです。私たちはこの至聖なるものを神と名づけ、これにあらゆる絕對、究竟、完全なる理想內容を想像します。宗教に關する一切の論議はこれだけの根本義を承認した上で始められなければならないと私は思ひます。

宗教によりて教へられる人生行爲のなかには、私たちの死後の生や、謂はゆる最後の審判等に關する信念によるものが多いでありませう。少くとも既成宗教の多くに於てこれ等は宗教的信仰の重要な部分をつくるものであります。併し私の考へでは之等は、至聖なる神の觀念と必然的に結びついたものではありません。宗教の最も直接的な本質的價値はどこまでも現在する生命に關したものでなければならないからです。從つて之れ等の附隨信念の伴はない宗教の可能性をも私は思考することが出來ます。私はこゝで宗教の最も本質的な範圍を論ずることに止めておきたいと思ひます。

二

宗教的信仰は固より論理や概念的知識によりて與へられるものではなく、只或る感激的體感によりて生れるものです燃ゆるが如き熱烈な感激、これがより強い信仰心を生む處の母體でなければなりません。この感激のまへにその外の何ものが權威をもつことが出來るでせう。こゝに宗教の絶對性が依存するのです。

けれども宗教的信仰は絶對なるだけに、それだけに獨り自我のなかに生れ出でて、その他の何ものにも關しない筈です。しかも各の自我の内容は個性的に色づけられて、すべての他我と異なりてゐます。それですからそれぞれの自我の信念が、現實の影響をうけてゐて、全く之れを脱却した理想の世界に到達し得ない限り、之れから生れる宗教的信仰も亦それぞれによりて異つてゆくことは當然でなければなりますまい。嚴確に云へば純粹に個性的感激によりて生れた宗教的信仰は各の自我毎に異つた内容をもたなければなりません。從つてそれが自我の發達によりて變つたものになることは、そして絶えず進展してゆくべきことは、肯定されなければならない事がらです。

原始時代の人々には理性の鋭さがまだ發達しきらないで、素朴的な感性に多く支配されてゐました。彼れはその圍繞された自然のなかに自分たちの知識で解し得られない一切のものを、神秘の幕のなかに閉ぢこめて感ずるより外はなかつたのです。殆どすべての自然は不思議に充ちてゐました。彼れらは先づその著大なるものに驚異をそゝられずにはゐなかつたのです。無限の光と熱とを私たちにおくる太陽、底知れない天空、厚く藏されてゐる地底、樹林や靄霧で深く包まれた山嶽、生活狀態の知悉されなかつた諸生物、これらの具象的な自然の事物が先づ彼れらの心に宗教的感激を促がして、こゝに神の存在を歸趨せしめました。あらゆる偶像崇拜の根源は斯の如き驚異から始まつてゐると云つてよいのでありませう。事物それ自からに不思議を感じないものであつても、例へば一片の石塊に觸れて或る一人のものが偶然な事情のもとに病を癒やされたと云ふやうな事實があると、この現象そのものを石塊に結びつけてこれを崇拜するや

うになります。彼れらの思考の對象としては、現象それ自からは餘りに複雜であり、之れに反してその起因を單純なる一物體に歸するとに、安易的な解決を見出さうとしたからです。けれども事物そのものは之に伴ふ適當な條件なしには常に同一の結果を生じはしません。すべての事物に對する觀察が鋭くせられ、深められてゆくうちに、之れが神秘性は絶えず減退されて來ました。之れらの經驗は遂に彼れらに於ても、偶像によりて宗教的感激を體驗するとに不充分を感ぜしめるやうになりました。少しの疑惑、躊躇はひたむきな感激を既に冷たきものに化してしまふのに足りるからです。

宗教的信仰の中心たる神を自然の具象的物體から離して、より神秘的な生命のなかに求めやうとするおのづからな傾向がこゝに始まりました。それは偉人尊崇となり、同族始祖の敬拜となり、遂に現實的人間を超越した最高理想者としての眞神の崇拜に到達しました。けれどもこの眞神は具象的に現實にあらはれるものではありません。それ故に之れが性格內容を宗教的感激によりて體得するためには之れをなし得るだけの準備を自分のなかに具へ有つてゐる必要があります。そしてこれが完全に近づけば近づくだけ眞神の內容が亦ほんとうに優れたものになることが出來ます。どんなに強い宗教的感激は湧かせ得ても、若し自我それ自からにこの準備を缺いてゐたなら、充分に深い神の全姿はこれにあらはれることは出來ません。こゝに自我人格內に於ける神性の反射なる事實が存在します。それですから最も完備せる眞神の姿はひとり或る偉大なる人格者に於てのみ捉むことが出來るのであつて、彼は自から體感し得たる神及びその言葉を普ねく他の人々にも傳へ知らしめ、それらをして再び各の宗教的感激のなかに捉ましめやうとします。私たちはこの意味で、聖人の出現とその傳道との一般者に必要であり、又尊重すべきものであることに對し、正しい根據を見ることが出來るでありませう。聖人の說き得た神の言葉をしるすものとしての宗教的聖典が尊ばれなければならない所以は實にこゝに在るのです。

併し私たちはこの事を認めると同時に、どこまでも之れが許容される限界を超えてはなりません。私はこゝに繰り返して云ひたいと思ひます。各の自我の宗教的感激は絶對なのです。他の何ものも之れを束縛し强要することは出來ません。外部からの少しの强要壓迫は感激を減衰せしめ、若くは之れを知識的に概念化せしめてしまいます。神に對する概念的固定は決して眞の絶對な宗教に達する道ではありません。布教者に對する受教者の歸依が、後者の宗教的感激の一部を形ちづくることが出來る場合にのみ、布教の價値があるのです。若しさうでなかつたなら、布教なるものは、宗教の絶對性と相容れないのでありますまいか。布教傳道のなかには一切の概念的な說明はあつてはなりません。そして又宗教的聖典は少しでも概念的な神の言葉として取り扱はれてはなりません。それは只宗教的感激を湧かせる一の本源に過ぎないのです。

三

すべての宗教內容に關する懷疑は、謂ゆる聖人の人格と、彼の綴れる聖典とを、あらゆる限界を超えた絶對のものとする事實から起ります。

聖人その人が自分の强烈な宗教的感激によりて神の言葉として體感したものを聖典があらはすとするならば、彼れ自からに取りて之れが絶對なものであり、之れの外に神の示現するものゝないことは確實です。そして之れに從ふ布教者等がやはり等しく之れを絶對のものとして各自の感激をつくり得ることも認めることが出來ます。併し私はこの故にそれがあらゆる限界を超えて絶對であり得るとは思ふわけにゆきません。それは之に接して同樣な感激を起し得る人々の範圍に於てのみ絶對なのです。この範圍を超えて誰が他の人々に感激を强要する權利があるでせう。たとへ之れを强要

したとしても、それはもはや正當な効果を收めることの出來ないものです。布教はもはやそこにはその本來の意味に於て成立しません。それは宗教の本質と既に矛盾してゐるからです。私は布教者等が自からの感激を同様に他の人たちにも體感せしめやうとして努力する熱心さを諒解することが出來ます。彼等は自分の體感した處がすべての人たちに起り得ない筈はないと云ふことを假定して、自からの布教の正當さを肯定します。そして感激を强要することの矛盾から免がれやうとします。私はこの心をも至當なものとして認めたいのです。彼等にありてこの假定は矛盾を免がれるために設けられたのではなくて、やはり彼等自からの宗教的感激のなかにつくられた信條なのでせう。けれども落ちついて考へて見たなら、この感激の一部をつくる信條は再び彼等に取りて絶對ではあつても、それは普遍的にすべての人たちに於ける絶對ではありません。そして當然之れに矛盾する事實に衝き當ります。

彼等と等しい宗教的感激をもち得ない人たちの存在の事實を、彼等はもはやどうすることも出來ません。彼等はそれでも自分の布教を宗教の本質と矛盾せざらしめんが爲めに、こゝに再び惡魔を假定し、之れに從ふ人たちを神の子と區別しやうとしました。一の宗教形式のなかに於て惡魔が認められ、又異教者が排斥せられることは、この形式を絶對とする上に於て止むを得ないことと思ひます。

私は一々の細かい點に立ち入りてこゝに論ずることはしますまい。併し近代的文化の發達に伴つて古來の既成宗教が屢々その權威を減失してゆく重要な事實を見逭がすわけにはゆきません。その最も著しい現象は多くの聖典にしるされた謂はゆる奇蹟なるものが、近代科學によりて證せられた事實と矛盾することによりて惹き起された宗教對科學の論爭であります。或るものは之れによりて少くも聖典が神の言葉として承認し得るかどうかを疑ひ、或るものは科學と兩立し難いものとして宗教を否定しやうとするに至ると共に、一方では奇蹟も私たちの知らない將來の科學的知識によりて

は或は可能なものとせられるであらうと推察し、若くは奇蹟は歴史的に現實にあり得たものとして之れを證據だてやうとします。此の兩者の調和がどうしたら成立し得るであらうかは今日まで屢々困難な問題とせられました。科學を楯として宗教を排し去らうとするのは固より健全な文化を立てる正しい道ではありますまい。科學がどれ程進歩しても、私たちは宇宙の創造者としての神を體感することは出來るからです。又之れに反して宗教的聖典をあらゆる限界を超えて絶對なものとし、科學の相對的知識は少しも之れに關與するに足らないとすることも、私は之れに肯ふことは出來ません。科學の教ふる處はたとへ概念的な世界であるとは云へ、之れはもと直觀的感覺から集められた事實の綜合に外ならないのであつて、それが再び私たちの新らしい直觀乃至感情に根本的な影響をもつことは否定することが出來ないからです。私たちはこれを特更に歴へつけて宗教的感激に向ふことは恐らくは不可能でもありませう。私はこれらの何れにも依らないで兩者の最も美しい調和を得るの道として、只聖典内容にそれの妥當な限界をおくことより外はないと思ひます。

四

宗教的聖典を絶對なものとしてその云ひあらはす處をその儘に信じやうとすることは、布教者の立場として諒せられないことはありません。けれども之れは既成の宗教形式をばその正當な限界を超えて固定的に押し徹さうとするひた向きな態度から起る結果であると私は思ひます。既成の宗教形式の固定は之れを完備な卓れたものであると信ずることから當然從ふことでもありませう。併しそこにはいろ〳〵な困難が伴ふことも必然です。奇蹟に對する問題の外に、異宗教對立の問題もその一つです、或る一つの宗教の内部に立つて云ふならば、彼れ自からの信ずる形式そのものが絶對であつて、

その外に異つた宗教形式は成り立ち得ない筈です。彼の信條が宗教的眞理ならばそれは唯一であつてその外の一切は眞理ではありません。彼の信ずるものと共に、異宗教が存在し得ることをどうしてゆるすことが出來るでせう。しかも人間は生れながらにして一定の既成宗教形式を知るものではありません。若し一たび局外に立つて見るなら、現代に至るまでに多くの宗教形式が對立存在することは否定することの出來ない事實です。そればかりでなくたとへ一定の宗教信者といへども、自分の信ずるものゝ外に、他の宗教の對立する事實を恐らくは無視することは敢てしないでありませう。それにも拘らず異宗教の對立を眞實の心の底から否定すると云ひ切ることが出來る程、強い信念をもつた人がゐたとしたなら、私はその人の宗教心を尊敬したいと思ふと同時に、それが稀有者であつて一般の人々は少くとも現實的に然うでないことを感ぜずにはゐられません。異宗教の對立の事實をゆるすために、一の宗教信者がその絕對の道に入ることに、或る純粹さを欠かねばならないと云ふのは悲しむべきことではないでせうか。私はこれも宗教形式の固定から起る結果であると思はずにゐられません。

私は甞て聖典に於ける奇蹟を如何にして私たちが正當に解し得るかに就いて論じたことがありました(雜誌玄土大正十年一月及三月號)。私はそこで奇蹟を科學的に若くは歷史的に事實でないとして疑ふことの無意味であるのをも述べました。それはどこまでも宗教的に解すべきものであつて、科學や歷史の對象として與へられた材料ではないからです奇蹟は宗教的靈感をもつた人々に神の示現としてあらはれた宗教的事實なのでありませう。彼れらの燃ゆる信仰のなかにそれは眼のあたりに視られたものに相違なかつたのです。私は少しの疑をも容れることなく素直にさう解したいと思ひます。併し私は更に批判的に之を見ると、之れ等の奇蹟は聖人のあらはれた時代に、之れを取り圍む人々のまへに行はれた事實であることを度外視するわけにゆきません。そしてこの時代が私たち人間の歷史に於て科學の生れるより以

前であつたことをも考慮せずにはゐられません。若し現代の私たちのまへに聖人が出て神の示現を説くとしたならば、やはり聖典に於けると同一の奇蹟がそこに行はれるでありませうか。私たちは宗教的感激によりて斯様な奇蹟を眼前に見ることが出來るでせうか。科學的の知識をより多く具へてゐる後代の人々のもち得る宗教的感激には、それと全く異つた奇蹟が必要ではなかつたのでせうか。宗教的の言葉で之れを云ひあらはすなら、神は之を知らうとする人々に最も適切な形に於て、神自からの言葉を與へるのでありませう。時代を異にし習俗を異にする人々に對してその形式内容を變へることは、却つて神の深い心なのではないでせうか。科學を知らない人たちに取つて奇蹟は神を仰視する最も直接な最も手近い道であつたのでありませう。けれどもそれがいつまでも保たれるとは限りません。聖典はその書かれた時代に於ける神の言葉です。併し神の言葉は本來形のないものです。その内容は無限、無窮でなければなりません。只これを聽き取る人々が理解し得る最も適切な形に於て時々處々にあらはれるのです。聖典を尊重することは宗教的に必要なことであると思ひますが、この形式を絶對としてすべての時處を超えて之を固定せしめることは、やがて聖典を偶像化するものでなければならないのです。眞の神の言葉はもつと自由な無限内容をもつてゐなければならないのではありますまいか。私たちはいつも謙虚になつて直接に之れに聽かなければなりません。そこには私たち自からの文化の發達と共に、神の言葉の無限の發展がある筈です。

聖典を尊重して之をあらゆる限界を超えた絶對のものとする教義は、宗教始祖としての聖人の人格に神性を與へて、之れを神と人との中間におかうとすることと相關聯してゐます。之れはやはり宗教的感激の絶對性から出來してゐることであつて、私はその神學的價値を充分に認めることが出來ます。併しそれはたとへ宗教的にゆるし得ることではあつても、之が許容される限界のあることをも亦聖典に對すると等しく肯定しなければなりますまい。現代の私たちの直觀

はどこまでも人間をすべて一つの人格所有者としてゆるします。それですからたとへ無形なる神が或る一人の人間の形に於てその性格をあらはすことがあつたとしても、人間の形を取る限りに於て、他の人間の受くる法則の下に從つたものでなければなりません。そこには生死の事實もあり、又その性格も時代習俗のなかにつくられるべきものであります從つて彼の言葉はどこまでもその生れた時代習俗の環境に於て發せられたものであつて、之を超越して數十世紀後の人間に對して直接に語られたのではありません。固よりその神に關する言葉の核心はいつまでも保續せられてもいゝのでありませう。只それを出現したいろ〳〵な周圍は飽くまでその時代に繋がつてゐるものであることを忘れてはなりません。私はこれだけの理解のもとに、たとへば基督の神性を少しも損ふことなしに、しかもその行爲の記錄たる聖書の內容のあるものを時代的に制限することの妥當さを悟ることが出來ると思ひます。そして之と同時に多くの異教の對立をも習俗的相異のもとにゆるすことが出來るでありませう。習俗的交歡が行はれて、世界の人間が一團として立ち得るときに至りて、尙ほその宗教形式を固定して互に相排斥する如きことは、恐らくは最も愚昧なものであるか又は神の眞意に反した怖ろしい冒瀆なのではありますまいか。宗教をその一切の歷史的形式から解放することは、將に起されなければならない最も緊要な運動であると思ひます。私はこゝに更に宗教的感激の絶對性を高調します。既成宗教の存在は私たちに取りて歷史的事實ではありますけれども、その本質的な意味を超えては、私たちの新らしい感激に向つて、何の形式的束縛を及ぼしてはならないと思ひます。

五

宗教的信仰が絶對のものであることを私は上に繰り返しました。併しながらこの絶對は信仰者みづからに取りての獨

自的絶對なのであつて、あらゆる人々に對しての普遍的絶對ではありません。それですから個々の人々のもつ自我內容と共に絶えず發展しなければなりません。嚴確に云へば聖典そのものは各人がその宗教的感激によりて神の言葉を聽き得て書き綴るべき筈のものです。そこには神の奇蹟は亦各の異なつた形に於て各人にあらはれることも可能でありませう。その形式は異つたとしても神は之れらのあらゆる有形を超越した唯一絶對として宗教的に信ぜられ得るものです。

既成宗教は私たちの過去にあり得たそれらの形式の一に過ぎません。

これだけの事がらは餘りに明瞭であつても、尙ほ私たちの思想を混雜せしめる事情は各人が直接に神に接觸し得るために餘りに多くの距離を感じて謂はゆる聖人の體感を媒になす必要をもつ處にあります。つまり私たちが自分の力弱さを感ずる處に既成宗教の私たちに對する價値が生じます。けれどもこの價値は無限のものではないことを能く理解しなければなりません。既成宗教の創始の時代に於てその聖人の周圍の人々にありてはその價値がやはり絶對であつたことをゆるすことは出來ますけれども、これは時處を超えたものではありません。

私は誤解のないやうに更に言ひ添へておきたいと思ひます。布教に從事する或る人々から私は、實際その人たちが現時に於ても聖典をその儘絶對として承け容れることが出來ると云ふのを屢々聞きます。私は本當にその宗教のなかにはひり込んでゐる眞摯な人たちに在りてそれは當然でなければならないとも思ひます。けれどもその人たちに於てこの事の可能なのは、彼れらの心がその宗教的感激に際して全く聖典時代の人々の心もちと同樣になり切ることが出來るからであつて、その素直さに浸り得ることに就いて私は彼れらを宗教的に惠まれたものと見たいと思ひます。けれども彼れらの心の窓は現代の懷疑に對して堅く閉されてゐなくてはなりません。彼れらが他のさうでない人々に對して同じ心もちでどれ程道を說いたとて、多くの懷疑をどうして消散することが出來るでせう。この場合に彼れらの取るべき正し

い手段は、恐らくは自分の心の窓を開いて外部の懐疑をうち破ることではなくて、却つて靜かに自からの立場に確信の礎を固めて、他の人々の心をしておのづから現代を離れて聖典時代に還り化せしめることでなくてはならないでせう。私はこゝにのみ斯やうな布教者たちの徹底的な道を認めることが出來るだけです。この道は既成宗敎をその儘の形式に於て永遠に保つことの出來る唯一の可能なものであると私は信じます。その正否は暫らくおくとするも、之れがあらゆる時代の人たちに向つて踏み得るものであるとは思はれません。少くとも現代の心に生きやうとする人々に取つてその懐疑をその儘に觸れずに殘すものです。布教者たちの崇むる神は之れらの人々に對してその生命の究極を拒むやうなものではなかつたのでありませう。しかもこの拒否の端は布教者たちがその既成宗敎の形式を固定するためにつくられたものではなかつたのでせうか。私はこの點に對する深い考慮を彼れらにお薦めしたいと思ひます。

六

私は以上に於て宗敎に對する私たちの思想上のいろ／＼な困難が宗敎形式の固定に由來することを說きました。若し宗敎形式が固定されずにその自由なる發展が文化の發展と共にゆるされたとしたならば、それは私たちの宗敎をどこに導いてゆくでありませうか。これは極めて大切な問題であると私は信じます。

一くちに私の解答をこゝに述べるとすれば、それは宗敎の絶對性を、獨自的絶對から普遍的絶對に導くものでなければならないと云ふことです。この普遍はもとより現實的に到達せられるものではなくて、それは一つの理想的究竟であります。私たちの文化がこのやうな理想的究竟に向つて絶えず發展すると共に、宗敎も亦斯やうにして無限の發展を續けることが出來ます。神の全內容は無限無盡です。この見地からすれば一片の聖典のあらはす處はその一時的な一局面

に過ぎません。私たちは常に新らしいものを汲み取つてその泉の包藏する全容を想望しなければなりません。絶對究竟なる神はいつまでもその最奥に安座するでありませう。

或る人たちは之に反對して云ふでせう。普遍は直觀の絶對性から導き得られはしないと。併しそれは決して獨自的絶對の發展が普遍的絶對に導かるゝことを否定する理由にはなりません。私たちは自我の絶對內容を自覺します。併し之と同時に他我の存在、及び自我と他我との客觀的一致を見ずにはゐられません。宗教が自我の生命と神との交渉にのみ關するものであつて、一歩も自我以外に出ないものであるならば、私は或はこの論旨をも中止しなければならないことを感じたかも知れませんが、事實は恐らくは然うではありますまい。生命は自我にのみ感ぜられるのではなくて、宗教的に於ても亦一般の他我に認めなくてはならないものであり、人間相愛は神の眞意に協ふものとして何れの場合にも提唱せられるべきものなのです。之れ等の思想はそのおのづからな發展によりて普遍に導かれることが出來ないと誰が斷じ得るでありませうか。

一方に私たちの理性は常に普遍的認識をもとめて、私たちの文化の無限の向上を形づくらうとしてゐます。この普遍的認識の究竟は一つの普遍的絶對であつて、あらゆる人間が相一致して同じ得る處のものであります。そこには自我の個性的即ち獨自的な絶對は消滅して、自我と他我との相對のみがあらはれますけれども、同時に之れ等のすべてが融合一致して、唯一の普遍的絶對をつくり上げることが出來ます。之れは私たちの理想的な神境でなくして何でありませう神の天國の一つのあらはれは斯やうにして私たちの前におかれてゐるのです。私たちは自分の周圍における自然のいろいろな現はれに對して先づ驚異を感じます併しそれらの現象の間に嚴然として成り立つ自然法則を見出すときに、更に遙かに大いなる驚異をもたなければなりません。私たちがそこに深く立ち入れば入る程、その幽玄精妙な關係に嘆美の

感をもたずにはゐられないのです。私はこゝに注意したいと思ひます。之れ等の自然法則的關係そのものは私たちの概念的知識から生れたものに相違ありません。けれどもその關係の整齊完美に對する驚嘆は、自然そのものに對すると等しく、私たちの直觀的感情に外ならないのです。私たちは之れによりて宗教的感激を湧かせ神の觀念に到達することが出來ることは疑ひもありません。自然の創造者としての神がこれによりて私たちの前に明らかにあらはれると同時に、私たちの普遍的認識の究竟は神に於けるものに無限に近づき得ることを體感せずにはゐられません。私は私たちのもつ文化のうちで、科學が最も確かな根據に於て普遍的絶對としての神の具體的内容を私たちに啓示するものであることを思ひます。科學對宗教は斯くして爭闘の兩端に立つものではなくて、却つて完全なる調和の先頭におかれるものであることを思つてごらんなさい。蓋しそれは多くの人々に取りて意想の外にあつたことでもありませう。

概念的認識に至らない他の直觀的感情に就いては、私たちは容易くその普遍的一致を斷定することが出來ません。それらは多く個性的なる處にその獨自的な價値を見出すべきものであるからです。併しながら私たちはすべての藝術や道德的行爲に於て、それらが單に個性的獨自なるの故をもつて之れに價値を付與することは出來ないのであつて、却つて藝術の理想境としての美、道德的行爲の理想境としての善に對し、或る普遍的判斷の可能さを豫想するのが常です。若しさうでなければ藝術鑑賞や行爲批判は私たち人間全般に就いて成り立ち得ないことになるでありませう。固より之れらの美や善の具體的内容はやはり人間文化の發展と共に無限に發展變化すべきものではありませうが、併しそこには或る普遍的究竟のあり得べきことを豫想するのは、發展なるものゝ本質から云つても至當のことゝ思はれます。何故なれば究竟のない發展は終極の目的を缺くものと謂はなければならないからです。私は之れ等の點から考へて私たちの個々の人格の發展の究竟として或る完美なる普遍的理想的人格を想像し、こゝに神性を見やうとしました（雜誌雄辯大正九

年二月及び七月號）。若し私たちが神を普遍的に認めることが出來るとすれば、斯樣なる神の人格的內容は即ち之れでなければならないと思ひます。之に反して現實の私たちはこの理想的人格に比して多くの缺陷をもつてゐます。こゝに個性的差別を生じ、又その缺陷によりて惡なる行爲を醸します。この意味で惡は神の善に對立する別種の要素ではなくして、善のあらはれの充分でない陰影に過ぎないと解することが出來ます。恰も醜が美の欠除によりてあらはれる如くに私はひとり此の解釋によりて神が何故にこの世界に惡の存在をゆるすかと云ふ古來の疑問に答へることが出來ると思ひます。善の缺除としての惡の存在は、神が人間に自由意志をゆるしてその自己發展の道程に立たしめ、その個性的價値の發現を享樂せしむる深い心からであるとすることが出來るでありませう。

この見解に立つことが私たちにゆるされるならば、私たちは普遍的絶對としての神をこゝにも見ることが出來なければなりません。只この考察は少くとも斯やうな神の可能を示すものではありますが、その具體的內容は固より科學の法則に於けるが如く概念的に論斷せられるものではありません。けれども一たび之が可能を認識した私たちはその各によりてゆるされた宗教的感激によりて之を具現することがあり得るのを私は信じたいと思ひます。さうして之は自我の發展としての普遍化と共に私たちの宗教をも普遍的絶對に導くものでなければなりません。

七

以上說く處の普遍的絶對としての理想宗教はいろ〳〵な點に於て私たちの思惟のなかに安住し、近代的文化の全體系のうちに完全に調和せらるべきものであることを私は感じます。

その宗教內容は各の自我の宗教的感激によりて成立する點に於て當然絶對なものであり、一切の束縛的形式を有しま

せん。聖典は各の自我が親しく神に聽き得た言葉を綴つたものなのです。しかも各の自我がその普遍化への進展にあると共に、この宗教內容は亦普遍化して一の絶對究竟に到達するのですから、そこにはもはや異宗教の對立の事實は存在しません。すべての人間はこの意味に於て究竟的に等しく神の子なのであつて、そこにはもはや異教徒なるが故に救はれないと云ふ見解は主義的に存在しなくなります。人間相愛の基礎はこのなかに見出されなくてはなりません。

獨自的絶對は只一人の信仰のなかに成立して、その他と緣を欠くものでありますから、それは絶對の一つの道ではあるけれども、謂はゆる不安定であることを免がれません。恰かも山嶺の頂上を傳はる一つの道のやうに。そこを歩む人はその儘他に轉ずることなしにこの道をゆくことは出來ますけれども、一たびそれを踏み外したなら、もはや轉がり落ちて之に歸ることは出來ますまい。それと同樣にこの絶對の途に於て一たび自分への懷疑を挾んだなら、彼は疑へば疑ふ程自らを深みへもがき落とすに過ぎないでせう。事實多くの人は斯やうにして宗教から離れるに至つたことを私たちは悲しくも經驗してゐます。之に反して普遍的絶對は安定の道程であります。何故なればそれは理性が普遍的に歸趨する處と合致するものであつて、恰かも溪谷を通ずる道のやうに、之から外れ出たときに、私たちの論理はいつも私たちをそこに導き落ちつかせるやうに私たちにはたらくからです。之は理性を超越して成立するのではなくして、理性の窮極と一致するものなのです。宗教的感激そのものは理性のはたらきではありませんけれども、理性を完備せるものゝ宗教的感激が、理性の歸趨する普遍的絶對と融合すべきことは、至當のことでなければなりません。

私たちは舊と神の奇蹟を天地の異變のなかに探し求め、若くはあり得べからざる不思議の事實に於て見やうとしました。けれどもそれらの異變は却つて神のゆるさない處のものであることを私たちは悟らなければなりません。私たちの神は妄りなものではない筈です。そのあらゆる絶對な自由のなかに、最高價値の唯一の道を行うて一歩もそれ以外には

出ることはありません。嚴正なる自然法則は即ちこの最高價値のものとして私たちの前にあらはれるのです。私たちのふだん到る處に眼に觸れてゐる自然の事實、それは慣れたるものに何ごとをも意味しないとして見過ぐされてしまふでありませうが、すべてそれらは自然法則の至妙な關係に從つて起つてゐるのです。理性に眼ざめた私たちに取りて、その驚くべき嚴正細密の關係の存在が、神の奇蹟でなくて何でありませう。そればかりではありません。私たちの現實に見る生命そのものを支配する法則、それはたとへ私たちのまだ知悉しないものではありますが、それの可能を信ずる上に於て、之もやはり神の奇蹟でなくて何でありませう。私たちはすべてこれらの現實のなかに神の姿を視ることが出來るのです。聖典時代の人たちの求めた奇蹟は私たちに取りてもはや少しの必要もないのでありませう。嘗て基督によりてのみ行はれた奇蹟は、今すべての人々によりて現實に行はれてゐるのです。私たち自からの爲し行ふことそれ自からが、悉く神の奇蹟なのではありますまいか。

私は最早や恐らくこの上に言葉を重ねる必要を多くもちますまい。すべての人間の文化、即ち科學や藝術や道德が各の自我の向上發展によりて無限に發展しゆくが如くに、宗教も亦只自我の向上發展によりて進められるものであります。布教者は徒らに神の崇拜の形式を說き、若くは神の言葉を外部的に示し聞かすものであつてはなりません。宗教的感激を湧かす敬虔の心への導きと、之によりて深い神の內容に接し得る自我修養への道を敎へれば、それで宜いのです、斯やうにして私は地上のあらゆる人たちと共に一の普遍的絶對としての神を知ることが出來るのを信じたいと思ひます。

新經濟政策治下の勞農露國

(モスコー及極東共和國間の汽車中よりの所見)

片山潜

モスコーからチタまで、ゆつくり落着いた汽車に乘つたとき私は考へた――歐羅巴の他の國に起る代りに、露國に於て社會革命が起つたといふことは、天帝が正しい――と。露國が三年以上も經驗したような外部よりの封鎖や攻撃に對しては、歐羅巴のどの國だつて堪え得るものでない。佛蘭西、英吉利や獨逸は、容易に匈牙利と同じ運命に遭逢して崩壞したであらう。が露國が、さうでなかつたのは、第一に面積に於て廣漠たる國であり、そして凡ゆる豐富な物資と夥多な資源を與へられて居るからである。實に、露國は事實上の自足自給國であつて、米合衆國のそれよりすらも、此點に於ては遙かに優越してゐる。

露國は、多くの航行し得られる大河があり、そして其等の河に沿ふて肥沃な土地を有する茫漠たる國である。モスコーからクラスノヤルスクに至る鐵道の兩側には、近代の機械にて耕作のできる肥沃な土地が廣がり續いてゐる。それは恰度、大洋を航海する時のように、視線の達する限りの土地は、濃い綠色の森林の映像で覆はれてゐて、機械に依る耕作を妨げるような斷崖や山脈がない。私は幾度も亞米利加を旅行するに。大陸やロツキイ山脈を横斷したことがある。そこには到る所茫漠たる領土があつた。けれど大部分は、荒蕪たる沙漠じみた土地で、殆んど灌木さへ生へない、人間の開發のためには、全然役立たないような土地であつた、露國または南米に於ける諸國に於てもさうである。勞農露國は、私の知れる範圍に於ては、リガからモスコー、モスコーからペトログラード、又はツウヴエルに到る沿道に於て、有利に耕作のできない土地とてはない、それに澤山の畑や農場は、該沿道に連續してゐてそしてよく耕作されてゐる。けれどそれらの耕作された土地は、比較的な部分であるといふことを、私は自分の眼で確かめた。さうだ勞農露國は開發の餘地は、十分であると云へる。

クラスノヤルスクからチタまで、汽車の通過する所は、松や他の有用な用材樹木を以て覆はれた豊饒な森林があつて丘陵の多い地方である。そしてそれらの丘陵と丘陵との間には、種類の異つた肥沃な耕作の可能な地質があつて、各種の作物に適する。到る所、四方に茫漠として廣がつた上等な農耕地を見出すであらう。けれど鐵道線路に沿ふた所さへ、ほんの稀にしか植民されてゐない。かうした露國のような國に、社會革命が始めて建設されたといふことは、幸運であつた。それは今や、頑強に確乎と露國に建設された、そして數年の中には、乾度…………………………………あらう。聯合國は、帝政時代の將軍やメンシエヴヰキや社會革命黨の援助を得て、凡ゆる方面から武力干渉に依つて露國ボルシエヴヰキ革命を打ち碎かうと試みた、が悉く失敗であつた。私は十分なる確信を以て云ふことができるが、勞農露國は饑饉なり經濟的封鎖があるにも拘らず、歐羅巴のどの國よりもより速く、戰爭の損害又たは内亂の創痍より回復しつゝある。露國の農民は、どこでも裕福に暮してゐる、そして彼等は經濟的改造事業に於ける最活動分子である。彼等は新經濟政策をば熱心に歡迎し且つそれを實行しつゝある、

勞働者と農民のソヴヰエット露西亞共和國の新經濟政策とは何であるか？それを少しく十分に説明するには、ボルシエヴヰキ政府の歴史を顧みる必要がある。ボルシエヴヰキ黨が、一九一七年の十一月に政治上の權力を握つたとき。その指導者たちは直ちに、純然たる共產主義的政策を採用する意味は毛頭なかつた。これはソヴヰエット政府の勞働法規を一讀すれば判然することである、該法規には、傭主と被傭人との關係を、非常に詳細に規定してある。政府は土地の私有を禁じてゐるが、中產階級地主の問題には觸れなかつた。彼等は當初、工業を即時に國有にすることをしなかつた。が銀行と大工業とは、先づ國有にするよう餘義なくされた、といふのは、大資本家傭主は、政府に對して怠業してそして月給を與れ乍ら頭腦勞働者をして工場を休ましめ、勞働者は工場閉鎖（ロツクアウト）した。しかも是等大資本家は、反動的指導者や反革命運動に加勢したばかりでなしに。彼等は聯合國資本家政府と共に、ソヴヰエット政府を顚覆しようと企てゝゐたものだ。かくして各方面から聯合的の干渉が同時に企てられたので、ボルシエヴヰキ政府は、敵を十六個所の戰陣に於て防禦せねばならない時もあつた。

このような事情が、ソヴヰエット政府を餘義なくさせて、そして好く考案されたプロレタリアの獨裁政策を踏襲する代りに、非常政策を採用させたのであつた。即ち政府は、種々考慮したに拘はらず、遂に戰時共產主義と食料徵發——農民には罪

に生活の必要量のみを遺して一とを採用せねばならなかつた。そして思ひ切つて、小工業の國有政策をも採用したのであつた。この農民から食料を徴發するの制度は、農民心理と個人的利益にとつては大いなる打撃であつたとは云へ、彼等農民は、ソヴヰエツト政府の政策に默從はしてゐたのだが、要するに近視眼だつたのである。して彼等の多數は、本當に尚ほ無學で、國家の狀態がその最も危機にあることを知つてゐながらもかくては家族の生活に足りる程度の土地を耕やした方が得策だと考へた、隨つて耕作面積は、非常に減少するに至つた。それは政府が農民から徴發した物資に對しては、約束手形を交附したけれども、その手形なりルーブル紙幣は、價格が暴落して戰前の標準に比較すれば殆んど何んにも價しなくなつたからでもあつた。この制度たるや、外國からの戰爭と內亂のため、たま〱採用されたもので、政府は以前から外國貿易をも國營にしてゐたのだが、戰爭狀態と聯合國政府の封鎖とで、農民の必要品を輸入することが出來ず、そして又た都會の勞働者は、軍需品を何物に代へても造らねばならなかつたから、農民の必需品を製造することが出來なかつたのである。この無理な狀態は、露西亞の穀倉とも云ふべきボルガ地方に饑饉が起こつたため、一層惡化せられた。

是等の狀態は、今や歷史的なるクロムスタツト暴動の發生機會を與へ、そしてソヴヰエツトの支配に一大危險を惹起した卽ちソヴヰエツト露西亞共和國の旆は、——ボルシエヴヰキなしの勞農露西亞共和國——といふ吶喊（スローガン）を採用した、所で、それはクロムスタツトの保守的で且つ無智な農民兵士に依つて多少共鳴された。けれどもそれは、共產黨兵士に依つて首尾よく鎭壓されてしまつた。そしてソヴヰエツト政府は、拔目なくしかも大膽に、その戰時共產主義の政策をば新經濟政策、卽ち、プロレタリア獨裁治下の國家社會主義に變更した、それが現在の勞農露西亞に於ける制度である。

勿論、クロンスタツトの反亂が、新經濟政策を採用するの機運を促進するに刺戟とはなつたが、けれどもそれは他の事情に依つて强ひられたのである、その事情といふのは、最早、勞農露國の領土を侵略……………………、……………………………………。そこで勞農露西亞は、再び經濟的改造——聯合國の干涉と、それから最近では波蘭の敵對と勞農露西亞の攻勢のために、遷延されてゐた——の準備を始めた。平和的政策を遂行すべき時機が今や到來したので、露西亞の共產黨は、新經濟政策を採用したのである、該政策に就いては、しば〱人々の噂にのぼり、誤解されそしてその本當の動機なり

目的は曲解されたものだ。勞農露西亞が、三年以上も施行した戰時共產主義の立場から見れば、現在の新經濟政策はともすれば、戰時共產主義から平和共產主義への移行を阻害すると見るかも知れないが、それは皮相の見である。そして新經濟政策は私が既に述べたような事情に餘儀なくされたものである。今日勞農露國の欲する所は、生產の增加と、工業、商業及び農業上の生產能率とである。そして戰時共產主義から農民及び小工企業者間に於ける制限された自由貿易又は自由競爭への變更は、未だ共產的理想にまで進步してゐない人民の生產能力を鼓舞するために考へられたものである。そしてわれ〳〵が、見ることのできる限りの其結果に依れば、この新經濟政策は大成功である。

現在の勞農露國の經濟は、全く新らしいものである、それは過去に於て、どの國に於ても曾て試みられたことがない。それはプロレタリア獨裁の下に於ける國家社會主義であつて、大資本家も大地主もなければ、又將來それ等が出來る可能性をもたぬソヴヰエット政府みたいな國に於ての試みである。勞働者と農民のソヴヰエット政府では、全國の土地を支配し所有してゐる、それに大工業と、陸上又は水利に依る全運輸組織を獨占しそして勞農共和國の開發にとつて有用なる地下の資源と茫漠たる森林とを所用してゐる。是等のすべてのソヴヰエット政府の優越の外に、尙ほ今日ではこの政府は、有力なる赤衞軍と軍需品工業をも管理してゐる。ソヴヰエット政府は、更に、一黨派の政府即ち露西亞共產黨の政府であつて、その黨員は、露西亞のプロレタリアの最優秀なる前衞である。そして今日では、六百萬若くはそれ以上もある露西亞の共產黨員は、無論、實力と勢力とが、全然疑問とする必要のない國際共產主義者に依つて援助されてゐる。

資本家新聞と、彼等から娼婦みたように墮落させられた新聞記者とは、勞農露國の新經濟政策の將來の結果をば、資本主義への可能的復歸とみて、凱歌を擧げつゝある。そして新經濟政策は、資本主義への第一步であるかの如く思はせて解釋してゐる。が此種資本主義寄生動物の誤解なり誤述は、資本家國のプレタリアを欺いて、ソヴヰエットの權力を信ぜしめまいとするからである。この型（タイプ）の熱心なる擁護者は、第二及び二半インターナショナルの指導者の中によくある。そしてかゝる報告なり解釋は、全世界の資本家新聞に充滿してゐる。けれど實際の事情が、眼前に持ち來たされたときは、かういふことは本當ではない。たとひ、露西亞に於ける眞の狀態を見ないでも、敏感な人は誰でも、この新經濟政策の本當の方向と目的とを諒解することが出來るものだ。資本家的世界は、ソヴヰエット政府の將來に

は、その當初から失望してゐた。ボリシエヴイキがケレンスキイ政府を乘取つたとき、ペトログラードに居つた資本家政府の代表者は、それが數週間にして挫折するだらうと思つた、だから彼等は、その考で行動した、所が、彼等はこの算定に美事失望させられた。次に、彼等は反動的將軍たるコルチヤツク、デニキン、ユデニツチ等を援助することによつてボルシエヴキキを打碎くことが出來ると考へ、そして彼等は襲擊した、が是等の企ては盡く失敗に終つた。彼等は又た、プリンキポ會議を召集して反動的將軍を援けようと計劃した、けれどそれがコルチヤツクやデニキンの代りに却て勞農政府を助けることゝなつたので、遂ひに×××もその考を放擲した。かくして武力にてソヴイエツトの權力を打破しようとの凡ゆる劃策に失敗した揚句、彼等は××××××勞農政府の頑強な××××××との漢とした希望を以て、ゼノア會議を召集したが再び失敗して、×××××××へたのが落ちであつた。

恰度、資本家政府とその政治家たちが、露西亞革命の成功と彼等の意志と希望に反する露西亞の努力とに失望したと同じように、勞農政府の新經濟政策は、近い未來に於て、確かに實地に成功して彼等を失望せしめるであらう。ブルジョア經濟學の教科書が、これに就いて正しい説明を與へることは全然出來ないのであるから、彼等が勞農政府の新經濟政策を諒解することができないのは、それは當然である。それは世界の經濟學的範域どの全く新しい經驗である。資本主義は、プロレタリアの獨裁に依つて搾取されねばならない、そして世界史の上で、最初の勞働者と農民との國である。それは資本主義獨裁の下に、今日存在するような資本主義とは全然違ふ。資本主義獨裁の下の資本主義は、僅かの國家を支配する資本家のためにあるのだが、プロレタリア獨裁の下の資本主義は、勞農露西亞共和國の勞働者と農民に依つて支配されてゐる。露西亞に於ける資本主義は、去勢牛のように教化された動物である。それは勞働者と農民の利益に忠實に仕へるであらう。それは又た、勞働者と農民の代表者であつて、金力の代表者若くは資本家でもない人民委員の訓練に服從せねばならない。勞働者と農民の國の總ての機關、即ち法廷、監獄又たは赤衞軍の如きは、勞働者と農民の味方であつて、そして勞農國家の性質から云つても、資本主義とは反對である。英國や亞米利加に於ける資本主義は、選ばれたる小數のために在るので、その小數の人々は、彼等の利己的利益のみのために、大多數の勞働者や農民を搾取する、然るに勞農露西亞の資本主義は、全プロレタリヤの利益のためと、露西亞の農民×××××××××××××、そして搾取するにしてもさ

ういふ目的のためである。その相違たるや、しかく大で、且つ資本家界にとつては全然新しい試みであるから、彼等資本家國は、見當違ひにもこれから有利の結果を期待してゐるが彼等は過去に於て勞農政府に對して經驗したように此度も亦、乾度失望するであらう。

先づ資本主義が、露西亞に於けるプロレタリア獨裁國の官憲の下に、全世界の見てゐる前で試驗されてゐるのである。われ〳〵は資本主義の中に包含される凡ゆる最良のものを、勞働者と農民の利益のために、採擇することが出來る。現勞農露亞西に於ける資本主義は、一大溫室の中で特殊用のために培養されてゐるようなもので、その世話人を勞農露西亞の共產黨と名づけるのである、それは培養され教化され、さうして出來るだけ勞働者と農民のために、良果を結ばしめられる。そして必要な仕事が成就されたときこそ、それは共產主義と稱へる『喬木のために推しのけられる。勞農露西亞に於ける資本主義の使命は、資本家國に於けるそれとは全然趣が違ふ。その發展する活動は全然狹い範圍に制限せられ、そして完全に勞農政府によつて管理されてゐる、この勞農政府は、資本家國に行はれてゐる、凡ゆる近代の國家機關を有つてゐるから、資本主義を敎化したり管理するに全ての必要な機能を持つてゐるものである。即ち法廷も法律も監獄もある、たゞ違つてゐるのは警察任務の遂行と反革命に對して戰ふ所の赤衞軍の組織のみである　勞農政府の國家的權力は、資本家國のそれに比較すれば、よりよく組織されてゐる何故なら人民の大多數即ち勞働者と農民とは、政府の直接の支持者である。否なそれ以上で、彼等は實に、政府自體でありそして勞農共和國の魂である。

疑ひもなく、勞農露西亞に於ける資本主義の新しい型は、ブルジョア階級の固執者に依つて、その從來の形式をも發達させようと試みられるであらう。けれど現在の勞農露西亞に於て、資本主義從來の形式なりその特徵を發達させると云つたところが、それは何にもなるものでない。露西亞に於ける勞働組合は資本主義の聯合した權力なり勢力よりも强いのである。彼等は法律、法廷、監獄若くは赤衞軍を背景としてゐる。露西亞で資本主義は、政治的意義に於て孤立させられてある。だからそれは、プロレタリアの支配階級にとつての忠犬でなくてはならない、外國の資本家が露西亞の資源を彼等の我利的、目的のために搾取しに來るであらう。本當に、非常に限られた範圍に於ては、彼等もさうすることが出來よう。土地も河も、大きくて必要な工業も共に、皆勞農政府が壟斷してゐるのだから、彼等外國の資本家が、土地なり運輸機關を資本主義化することは不可能であ

る。彼等が利權として獲得するものは、凡て嚴密に限度がありそしてプロレタリアの獨裁の下にあるのである。勞農露西亞の新經濟政策の下で、資本主義の全ての見方は、資本家國のそれとの間に根本的の相違がある。かくしてそれは經濟科學上の新經驗である。ペチイブルジョアの經濟學者たちが、それを正解することの不可能なるは怪しむに足りないことである。ブルヂョア政治家も、新經濟政策の本當の意味が諒解できないものだから彼等が帝政時代の政府に貸した金が取れはしないかとの空望を懷いて、勞農露西亞をゼノア會議に招待したものだ、×××××××××、彼等は露西亞代表の面前で、彼等間の××××××××××。勞農露西亞の地位は、この會議に依つて非常に強められそして、露獨條約の種を蒔く機會は與へられたのであつた。

勞働者と農民とは、ゼノア會議の結果に全く滿足し切つてゐる、彼等は新經濟政策の下で、急速に彼等の力を回復しつゝある、そして特に、勞働者と聰明な農民とは、ソヴキエツトの權力を顚覆しようと企てたメンシエヴキキと社會革命黨の審問に依つて惹起された事情に基因して、革命的精神を、今正して復活させてゐる。第二及二半インターナショナルの指導者たちや代表者も、その審問には列つた。その最も有名な人物は、第二インターナショナルのエミル・ヴアンダヴエルドである。ボルシエヴイキと彼等の審問とを判定するかはりに、ヴアンダエルト共他は、勞働者と農民の唯一の國、勞農共和國の公廷で、事實審問されたのだ彼等は、その機會主義やメンシエヴイキや社會革命黨や反革命的黨派の一團やらを辯護しに、この勞働者と農民の國まで來た彼等の馬鹿さを、既に示しつゝある。勞働者や農民は、諷刺と冗談と、又た圖星を指した批評や攻擊の刺すような皮肉を以つて、彼等を馬鹿にしつゝある。是等の出來事のため。××××××××××××××。

經濟的改造の新狀態は、私が旅行した西から東への六萬哩以上の長程の到る所で、明かに觀取された、農民は彼等の日々の農事に勤勉しそして土地は美しく耕作され、麥其他の作物は鐵道の兩側に沿ふてよく實つてゐた。彼等はボルシエヴイキ革命の偉大なる獲得者である。彼等は長年の抑壓者と、搾取者たる地主とをば取除いた、そして農村に於ける守錢奴の資本家から全然自由となつた。彼等は勞農政府の支持者であり捧持者である、けれど共產主義者と云ふのではなくして特に、共產主義の主義に同情してゐるといつたようなものだ、とは云へ、彼等は決して反革命將軍やメンシエヴイキや社會革命黨には加擔するものでない。彼等は、私が旅行した通過した多くの地方で、コ

ルチヤツク軍やデニキン軍若くば他の反動將軍――西伯利の到る所の地方を荒廢させた――からの壓制と反動的恐怖とに、痛切なる經驗を持つてゐる。彼等は決して、地主と勞働者の搾取者とを含む資本主義の再建に同意しないのである。これが全露西亞に於て、動かざる確かな事實である。

新經濟政策は、勿論、共産主義の窮極の完成に到達すべき一時的の手段である。その單一なる目的は、生産を增加しそして勞働者と農民の間に、經濟的にも一層の社會的にも諒解を容易に成立せしめようとするにあるのである。實際に、しかも疾うに彼等は、この新經濟政策に依つて、大いに利せられてゐる。都會と田舍とは、早や復活しつゝあつて、そして都會勞働者と地方人の間には、賣買が經濟的に再設されかくて日々に盛大になりつゝある、諸君は到る所で、それを目擊し且つ感ずることができるのである。

極東共和國の領內に入つて、私が最もはつきり觀察したことは、勞農露西亞の直接の影響である。そこは四民平等主義的共和國ではあるが、勞働者と農民とが支配權を持つた國である、現在のチタ政府は、多數黨卽ち共産黨が組織してゐる、私はヴエルフネウヂンスクに寄つて、直ちに民主的共和國の狀態を見てとつた、卽ちそこの鐵道ステーションに沿うた所、又たは市の中にも澤山の支那人店舖があつた。此地方には支那人の農民なり勞働者も多くゐるといふとを聞かされた。そこの市には又た、英米人の店舖もあつて、繁盛してゐた。一人の同志が私に云つた――日本の西伯利干涉の爲、日本商品が市場に一つもないといふのは遺憾なとである。もしさうしたとがなければ、日本商品は他の國からの輸入品よりも餘計賣れたであらう、日本は就中、地の利があるしそして露西亞の需要するもの、例へば家庭用の日常生活必要品だとか、露西亞が最も必要に迫まられてゐる農具の如きものを多量に生産することもできる、支那人はよく商賣上の眼識に敏活でありそして實地に、彼等の出來るだけのことはしてゐるのだが、何しろ彼等は、露西亞の都市で賣られるような商品を、彼等の自國から幾らも出せないのであるまだ〳〵支那は、これらの商品を自國の工場で生産して供給するまでには進歩してゐないからである。以前は、彼等は日本から輸入したものを賣つたものだ。けれど今日では、支那に流行してゐる排日感情のため、さう旨くは行かないのである、随つて彼等は、露西亞の立場で賣る品物を殆んど持つてゐない。

極東共和國は、四民平等主義國でそして政府も形式なり行爲から云つて、四民平等的であるが、その支配しつゝある黨派が共産黨であるから、精神に於て、それは多數黨の政府である。

そして極東共和國と勞農露西亞間の相違は、單に、勞農露西亞はプロレタリアの獨裁の下にあるし、極東共和國は四民平等主義國でそして、ボルシエヴイキとメンシエヴイキと社會革命黨とが、共和國に於ては等しい權利と特權があるといふのにあるけれど實際は私が前に云つた如く、勞農露西亞の勢力は非常に强いばかりでなく、チタ政府は、一黨派共産黨の政府である。議會の現在行はれてゐる選擧は、屹度共産黨の勝利に歸するだらうが、その結果として、革命露西亞の主義が、勢ひよくなるであらう、

　この新經濟政策は、勞農露西亞をして、勞働者と農民の國としての確乎たる基礎の上に据え付けそして此國を改造するに、政府が既に計劃したように、勞農露西亞の電氣化の場合に於ける近代的進歩を以つてするであらう。この大事事業が首尾よく進歩した曉には、露西亞の農民の共産主義化も困難ではなからう。××

勞働反對

室伏高信

一

勞働反對は、ロシヤにおいて、ボルシエヴヰキの內部にあつて、內からボルシエヴヰキを救はふとした。その絕望であることが證據立てられた時に、彼等は自らその多年立て籠つてゐた城廓を捨てゝ、彼等の久しく苦難をともにした兄弟と手を分つて、外部から共產主義を救はうと決心して立つた。

だから勞働反對は、ボルシエヴヰキの本流を糾彈する多くのメンシエヴヰキ、社會革命黨、第二、第二半、若しくはその他の日和見黨、ウランゲル、デニキン、コルチヤク、その他の反動派、落武者、匪徒の類ではない。彼は共產主義を仆そうとしてボルシエヴヰキを難んずるのではない。彼等自身共產主義者である、彼等自身ボルシエヴヰキである 共產主義者中の共產主義者、ボルシエヴヰキ中のボルシエヴヰキである。若しくはマーキスト中のマーキストであると、彼等は自ら深くそう考へてゐる。そう考へてゐることが深ければ深いほど、彼等は今日のボルシエヴヰキの中流に對して、黨中に黨を立て、黨外に袂を分ち、あくまでも反對の必要であることを信ずる。

勞働反對は 嘗つて黨內黨を立てながら、嘗つて黨を去らないといふた。ボルシエヴヰキの幹部派も、彼等の多年の功勞のために、この一團を除名しないといふことを決してから未だ幾月にもならぬ。しかし彼等は遂にその多年の僚友と袂を分つた。「人を魅する力」のあるレニンとも、その雄辯がよくロシヤの勞動者を隨喜せしめるといふトロツキーとも分れて、黨外に黨を立てた。ボルシエヴヰキ中流の一大敵國を共產ロシヤのうちに立てゝ、レニン、トロツキーの鐵血政治に反抗しながら、勞働反對が、歷史的必然の行程であることを叫びながら、絕對非妥協を標榜しながら、彼等の戰を戰ひつゝある。

私はこゝに、勞働反對と、レニン、トロツキー等のボルシエヴヰキ政治家の諸君と、何れが眞正のボルシエヴヰキであるか、若しくは何れが正統にマーキシズムの精神を傳へてゐるか

を、こゝに述べようとするのではない。勞働反對が、今日のボルシエヴヰキ・ロシヤの治下において、彼等のいふとほり、「歷史的必然」に生れ出たものであるかどうか。ボルシエヴヰキ的マークス主義の治世において、勞働反對の生れることが、果して人類進化の約束であるかどうか。人類の歴史のうちで、最初ではないにしても最大といはれるこの無産者革命が、過去五ケ年に近い經驗によつて、何をロシヤの勞働者に印象し、何を世界の將來に敎へてゐるか。私はこゝに勞働反對の立場をとほして、その一端だけを語りうるかに思ふ。

二

勞働反對には有名な指導者がない。コロンタイ女史が述べてゐるとほり、勞働反對は有名な指導者の團體、それによつて左右に指導される團體、有名な理論家と雄辯な討論家とデマゴーグと政治家の引廻しのもとに、そして「訓練」の名のもとに人間を奴隷とする一團の名稱ではない。それは凡て勞働組合員である。凡ての工場勞働者が勞働組合への加入を强制されてきた國において（註二）勞働組合は、保守的、進歩的、あらゆる革命段階の勞働者によつて組織されてゐるのである。勞働反對は、その勞働組合の中にある、純粹の、そして體力勞働者の一團である。彼等の一團のうちで、世間的にその名を知られてゐるのは、コロンタイ女史と、シリアプニコブの二人である。この二人を除くと、彼等の一團は名も無き、下積みの、勞働者の群である。それは勞働貴族からではなしに、勞働役員からではなしに、そは急造の勞働者、人氣取りのための自稱勞働者、勞働運動を餌食とする職業的運動家からではなしに、工場勞働者の群の、最深のどん底から生れてきた、勞働者によつて、勞働者自身の、勞働者のための、自然的な産物である。しかも彼等はメンシエヴヰキでもない。エス・エルでもない革命後の共産ロシアの勞働組合に於けるメンシエビヰキやエス・エルの勢力が殆んど大部分驅逐され盡した時に、從つてボルシエヴヰキが勞働組合を獨占して、共産黨の幹部とソビエツトの役人の手によつて、七百萬の勞働組合員を自由に操縦もし、强制もし、命令もすることができるようになつてから、その共産黨の中にあつて、即ちプロレタリヤの中のプロレタリヤ、勞働者のうちの勞働者、レニンの言葉でいふと、プロレタリヤのアバントガルテの中にあつて、しかも尙ほプロレタリヤのアバントガルテの職分が、彼等自身のうへにあることを意識して立つた、アバントガルテ中のアバントガルテである。

だからロシヤ共産黨の間で、その中央地方の役員、幹部、現代ロシヤに羽振りをきかせてゐる人たちの間では、勞働反對

は、レニンのいふてゐるとほり「精神錯亂」なのである。それはドクトリネーアの一團、それは共産主義とは「命令」を亂發することにあると考へてゐる一團の共産獨裁官、共産貴族の間では「精神錯亂」なのである。

共産黨の梯子段を上に登れば登るほど、勞働反對は無勢力なのである。梯子段を下れば下るほど、勞働反對の聲を聽くのである。冬宮やクレムリン宮殿の役員派ボルシエヴヰキに對して、彼等の一團は、工場の機械とともに寢食する、油と泥と汗の、ザールの闇黑時代から、ミリユーコフのブルヂョア時代、ケレンスキーのプチ・ブルヂョア時代、そしてレニンの無産者の獨裁時代になつても、舊によつて永久奴隷であることに何の變化もない人々の群である。彼等が、油と泥と汗の間にあつて、彼等の周圍を見廻してみた時に　彼等自身を意識し始めた。彼等は彼等の周圍を見廻し、そして彼等自身を意識した時に、勞働反對は歴史的必然的に生れたのである。だから勞働反對は、理論によつて生れたのではなく、理論獨裁官のデクリーによつて生れたのではなく、彼等は、彼等の自身の立場に意識し始めた時には、まだ彼等自身の共同の綱領、共同の論題、共同の理論をもつことができなかつたほどの、憐れむべき無知な、あわれむべき非學究的な人たちである。しかし彼等は一つの共通したものをもつてゐた。彼等の自己意識がこれであつた。理論からではなしに、日々の體驗と實感の深みから本能的に生れてきた階級意識がそれであつたのである。だから勞働反對こそ、ほんとうの共産意識、ほんとうのプロレタリヤ運動、ほんとうのボルシエヴヰキ、ほんとうのプロレタリヤのアバントガテル若しくはほんとうのマークス主義でもあると、彼等は主張するのである。此立場からクレムリン宮殿の役員派ボルシエヴヰキに對して、彼等自身を「勞働反對」に組織したのである。(註二)

(註一) 昨年十二月以後勞働組合への加入が強制されなくなつた。(Leitsätze des Zentralkomitees der Kommunistischen Partei Russlands über die Gewerkschaftsverbände の第五節參照)

(註二) 勞働反對 (Arbeiteropposition) の立場を明瞭にしてゐるのはコロンタイ女史の「ロシヤに於ける勞働者反對黨」(A. Kollontay, The Workers, Opposition in Russia, 1921) である。この書物はロシヤでは絶版である。また第十回ロシヤ共産黨會議で、共産黨の現時の政策と衝突するものであると宣言された。尚ほこの一團は「勞働者反對黨」といふのが正確であるかもしれぬが、私は便宜上「勞働反對」の名を用ゐる。

三

共産ロシヤは勞働者の國だといはれる。そこは世界の資本主義國家の間にあつて、獨り勞働者の國だといはれる。そこはソ

ルヂョアジーの獨裁の代りに、無産者階級の獨裁政治の國だとされる。「人權宣言」が、凡ての人民の平等權を宣言したのに對して、この國の憲法は、『勞働し且つ絞取される人民の權利』を宣言する。(註三) この無産者の國で、ウランゲルが起り、セミヨノフ、コルチヤク、デニキン、軍閥、匪徒が叛旗を樹てるのは、何人にも理解のできることである。チヤーチル、ポアンカレー、波蘭の提琴家、日本の軍閥が赤色ロシヤに向けて十字軍を起さうとすることもまた何等の奇蹟ではない。しかしこれ等のロシヤの内外の反動派、貴族、富豪、軍人、匪徒の諸君が手を燒いて、各國の十字軍がロシヤから引揚げ、日本の官僚内閣でさへ後れ走せながら、十字軍引揚げの殿りの榮譽を担はうとしてゐる時に、何故に、また如何にして、勞働反對が猛然として頭をもたげてきたのであらうか。何故に、また如何にして、「勞働者の國」で、勞働者自身の間から勞働者反對黨が生れてきたのであらうか。何故に、また如何にして、プロレタリヤのアバントガルテ、共産黨の間から、勞働反對の一團が彼等自身を意識するやうになつたであらうか。

更にまた、ボルシエヴヰキの役員派に從順でない一切のものが、「メンシエヴヰキ」であり、「社會的愛國者」であり、「日和見主義者」であり、「變節漢」であり「カウツキー・エンド・コムパニー」であり、「アナキスト」であり、「異端」であり、「ブルヂョア」である時に、勞働反對もまたかくのごときブルヂョア・イデイオロギーの一團なのであらうか。或はまたトロツキーのいつてゐるとほり、それは「政治的に」危險な一團であり、レニンのいふとほり「精神錯亂者」の一團なのであらうか。

勞働反對は、役員派ボルシエヴヰキ、理論派ボルシエヴヰキの、論理的の相續者である。私はこの命題を支持する。マークス主義的社會主義、ボルシエヴヰキ的獨裁政治のもとで、勞働反對の生れることとは、何等の奇蹟でもなくて、その論理的必至である。私はこの命題を支持する。そしてまたこゝに、私は勞働反對の意義を認めようとするものである。

勞働反對の生れたのは、極めて自然であつた。何人がこれを促すともなしに、何人がこれを計劃するともなしに、宣傳と命令とを待たないで、自然に「無産階級の獨裁政治」のもとに生れ出でた。それはブルジョア階級が、企圖的にその地上に生れたものでないと同樣に、またプロレタリヤ階級が意識的にこの地上に發生したのでないと同樣に、企圖的に、ロシヤに生れたのではない。役員的ボルシエヴヰキの政策の論理的必然として、自らに、全ロシヤに、彼等自身を意識し始めたのである。そはどこからともなく起つてきた、下積みの、不幸なる勞働者の

僞らざる叫び聲であつた。「モスコウでどのような事實が起つてゐるかは少しも知らないで、しかもあなた方の問題と同じようなものが、私たちの心をそゝる。」西伯利亞の曠野から出てきた一人の勞働者が、坑夫會議に出てゐる他の一人の勞働者にこういふた。實に勞働反對の背後に、すゝめるともなく、多くの勞働者の心があつたのであると。(註四)

(註三) Die Verfassung der Russischen Sozialistischen Föderativen Sowjetrepublik, Erster Abschnitt, Die Deklaration der Rechte des werktätigen und ausgebeuteten Volkes.

(註四) Kollontay, op. cit., p. 5

四

勞働反對の成立には、少くとも四つの反對原因が考へられる。ボルシエヴヰキ役員派の「無産者階級の獨裁政治」の特種形態、官僚政治、集産主義、及び日和見政策がそれである。

五

無産者階級の獨裁政治については、こゝに詳細を論じてゐる必要はない。こゝに必要なのは獨裁政治の形態と運用と、從つてその權力の中心についての概説である。

無産階級の獨裁政治が、その文字通りに無産者の獨裁政治であるか、若しくは一黨派の獨裁政治であるか。カウツキーの言葉でいへば、「階級獨裁か政黨獨裁か」。(註五)この問題も形式問題としては愚ろかな問題である。賢明なボルシエヴヰキは、今日では、最早や何人も、彼等の所謂無産者階級の獨裁政治が、形態のうへで、一黨派の獨裁政治であることを匿しはしない。共産黨宣言が、共産主義者は、他の勞働者の政黨に反對する。」「別個の一政黨」でないと宣言してゐる時に、また共産主義者が、決して「種別の原理」をもつものでなく、彼が他の勞働者の政黨と異るところは、たゞプロレタリヤの全體のうへに立つの點にあると宣言してゐる時に、(註六)ボルシエヴヰキは共産黨を各國に立てゝ、カウツキー、ヒルフエルディング、チユラチイ、マクドウナルド、ロンゲー其他の、各國勞働運動の無數の日和見主義者、社會的愛國者、平和的革命論者を驅逐することを彼れの有名な二十一ケ條に加へ(註七)共産黨を通じて、世界革命を指導し、共産黨によつて無産者階級の獨裁政治を實現しようとする。勿論、獨裁政治の形態は、形態としてはソビエツト、勞働者會議、ショップ・スチユワード・コムミテイその他の、無産者階級全體の組織であると宣言する。しかしロシヤのソビエツトも、獨逸のレーテシステムも、英國のショップ・スチユアート・コムミテイも、彼等が彼等自身を廻轉するのではなくて、共産黨がこれを廻轉するのである。「共産黨の會員はプロ

レタリヤのうちの最も進歩した、勇敢な一團である。……從つてその會員の數はプロレタリヤの全員の數より少けない……しかしそは全プロレタリヤ階級を指導する。」（註八）カール・ラデツクに從へば、無產者階級の獨裁政治は、共產黨の獨裁政治としてのみ可能である。」（註九）しかも彼等の理論に從へば、無產者階級の統一は不可能である。それを支配するものが、それの頭であることは明らかである。そして勞働者階級はその頭を支配するから、頭即ち共產黨の獨裁政治（Diktatur des Hauptes（der Partei）と階級の獨裁政治（Diktatur der Klase）とは同一であると。（註十）かくしてボルシエヴヰキの「無產者階級の獨裁政治」は「共產黨の獨裁政治」へと發展する。しかも尚そは「共產黨の獨裁政治」に止まつてはゐない。そは窮局において指導者の獨裁政治にと發展しないでは止まない。

レニンはテーラー制度の崇拜者である。能率的組織と訓練とは、ボルシエヴヰキの治下において最も急要な二つのものである。彼に從へば、獨裁政治とは鐵血的權力である。この獨裁政治が個人の手によつて行はれること（Diktatur von einzelnen personen）は歷史上の敎訓であり、しかも凡ての無產者が一つの統一意思に服從するとが絕對に必要であるばかりではなしに、その活動の間は、ソビエットの指導者、一人の獨裁官の意思に（den Willens Sowjet-Leiters, eines Diktators）服從することが絕對に必要なのである。（註十一）何故にそうなのであるか。ブハリンに從へば共產黨はプロレタリヤのアバントガルテではあるが、しかもこのアバントガルテのうちにあつても、常に完全な統一が存在するといふわけにはゆかぬ。從つて指導的人物の一群即ち指對者によつて指導されなければならないと。（註十二）しかもレニンは一步を進める。凡てのボルシエヴヰキの間にあつて、戰のためにも、妥協のためにも、レニンは常に最も大膽である。彼に從へば無產者階級がその指導者、共產黨中の指導者によつて指導されべきこと、或は統制されべきとに異論を挾むのは、無意味でもあり、暗愚でもある。（註十三）

ロシヤの共產黨は曾つて七十萬の會員をもつてゐた。それが昨年末までは約五十五萬であり、昨年末の「大掃除」の後に、今日では卅五萬の會員をもつてゐる。（註十四）この共產黨には十九人の中央委員がある。それが共產黨の最高役員である。トロツキー、レニン、ブハリン、チノヴヰエブ、カリニン、トムスキー、カメネフ、ラデック等みなこのうちに屬してゐる（註十五）しかもこの十九人のうちから、ポリトビユロウとオルビユロウの二つが組織されて、ともに五人から成立してゐる。この二つの組織、十人の共產黨員がロシヤにおける共產黨の最高指導

者であり、また從つてソビエツトの最高指導者であり、全プロレタリヤ運動の最高の指導的役員なのである。彼等は勿論一年に一二回開かれる一週間の共產黨會議に責任を負はなくてはならないが、しかし軍隊は彼等の側にあり、資力は彼等の側にあり、無產者階級の國家、「無產者によつての壓迫の機關」は彼等の側にあり、言論の自由さへも彼等と彼等の隨從者の獨占するところである以上、彼等は疑もなく獨裁官である。そこでロシヤの獨裁政治は、事實上、共產黨の指導者、十人の委員、十九人の中央委員を中心とする一團の指導者の獨裁政治にまで發展する。十人若しくは十九人の指導者が命令を發して、三十五萬の共產黨員、七百萬の勞働組合員、凡ての無產者階級が、「訓練」に服するのである。これが無產者階級のテーラー・システムであり、これが「無產者階級の民主主義」なのである。

この制度、この權力、この獨裁形態に異論を挾むものは、ブルヂョア・デモクラートであり、プチ・ブルヂョアであり、メンシエヴヰキであり、でもなければ「小兒病患者」であり、「アナーコ・サンヂカリスト」であり、「無意義」であり、「暗愚」であり、「政治的」に危險なのである。

今日のロシヤに時めく二人、ブハリンとラデツクとは嘗つてこの後者の傾向に向つてゐた。しかしこの態度を一貫するのには、彼等はあまりに賢明でもあり、政治家でもあつた。(註十六)彼等は改過遷善の道を進んだのである。しかも尙ほボルシエヴヰキ革命が五ケ年の久しきに及んで、多くの小兒病患者、アナーコ・サンヂカリスト、無意義、暗愚、トロツキーの所謂政治的に危險な一團が、共產黨の足元から、共產黨の下積から、押ゆることのできない本能的の抗議をもつて、だん〳〵と彼等の力を發展させてきた。

彼等は共產黨の下積みであつた。彼等は勿論無產者階級の獨裁政治の原理を深く信んじてゐた。しかも尙ほ彼等はボルシエヴヰキの治下において、凡ての反革命派が閉息した時において彼等自身の階級が、何ものかによつて犯されつゝあることを見た。

彼等はレニンの人格を疑ひはしなかつた。彼等はトロツキーの雄辯を尊敬することを忘れてはゐなかつた。しかも尙ほ彼等は、彼等の指導者の獨裁のもとに、彼等自身勞働者の階級が、何ものかを失ひつゝあることを知つた。」

彼等は、彼等が依然として被支配者階級であり、依然として奴隸階級であることを知つた。

（註四）、"Der Kampf" August 1921, Klassendiktatur oder Partei-diktatur, von Karl Kautsky

(註五) Das Kommunistische Manifest, Proletarier und Kommunisten

(註六) Leitsätze über die Bedingungen der Aufnahme in die Kommunistische Internationale

(註七) Leitsätze über bürgerliche Demokratie und proletarische Diktatur

(註八) N. Bucharin und E. Preobraschensky, Das A B C des Kommunismus, S. 73-74

(註九) Karl Radek, Der X. Kongress der K. P. R., S. 18

(註十) Russische Korrespondenz, Nr. 7-9, 1921, Die Partei der Arbeiterklasse, von N. Bucharin

(註十一) N. Lenin, Die nächsten Aufgaben der Sowjet-Macht, S. 23-29

(註十二) Russische Korrespondenz, Nr. 7-9, S. 797

(註十三) Lenin, Der Radikalismus die Kinderkrankheit des Kommunismus, S. 24

(註十四) レニンが「ラヂイカリズムス」を書いてゐた時(一九二〇年四月)には共産黨員の數は六十一萬一千人であつた。三月革命の後(一九一七年四月)には、その會員は七萬六千五百九十七人であつた。(Zinowjew, Die Kommunistische Partei Russlands während der vier Revolutionsjahre

(註十五) 最近には中央委員を二十七名とし今年四月選擧の結果、中央委員にはアンドレフ、ブハリン、ヴオロシロフ、ゼルシンスキー、セレンスキー、チノヴヰエフ、カリニン、カメネフ、コロトコフ、クイビシエフ、レニン、モロトフ、オルジヨニキデ、ペトロフスキー、ラデツク、ラロウスキー、ルドスタツク、リコウ、サプロノフ、スタリン、トムスキー、トロツキー、フルンセ、チユバリ、ヤロスラウスキー當選

(註十六) Lenin, Der Radikalismus, S. 17

六

凡ての指導者の地位はその性質上殆んど半永久的である。勞働組合が抽籤によつてその代表者を定めてゐた時代には、代表者の地位は不安定でもあり、またほんとうの意味の指導者なるものもない。指導者の地位が直ちに權力である場合には、それは半永久的である。ボルシエヴヰキのように、指導者を獨裁官とするところにおいて、この半永久性はいよ〳〵確實である。首領の地位が半永久的になる時に、勞働者の地位、被指導者の地位は、半永久的の奴隷である。共産黨の間では、ロシヤのプロレタリヤの間では、かくのごとき半永久的奴隷制度が押し立てられたのである。彼等の首領が命令を濫發し、「訓練」を強

要し、その獨裁官としての地位を確實にすればするほど、即ち役員派ボルシエヴヰキの理想を實現すればするほど、この半永久的奴隷制度もまた確立するのである。勞働反對は、彼等自身を意識し始めた時に、かくのごとき危險の横はつてゐることを知り始めたのである。

彼等のあるものは、共産ロシヤの危機の場合に、一兵卒として戰場に戰つた。あるものは、凡ての社會的榮擧と、華やかな役割とが、政治上の活動舞臺に、多くの勞動者の才能と野心とを求めてゐた革命の時代に、靜に工場の油の中にあつて、質實な勞働組合の中に彼の下積みの勤めを勤めてゐた。

ロシヤの數百萬の工場勞働者は、革命の前から、革命の間へと、慘じめな生活に堪えてきた。その慘めさは、革命とともに無産者階級獨裁政治の治世のもとで、内外の事情から、益々激しさを加へて行つた。多くの無知な勞働者、自己を意識もせず自己を表現することもできない多くの無産者は、暗默の間に、彼等の苦しい訴へを訴へてゐた。

無産者のほんとうの心は、彼等自身の健全な階級感だけがこれを知る。共産ロシヤの危機を救ふために戰線に立つた多くの正直な勞働者が、その軍服を捨てゝ、その軍營を退いて、彼等の同僚のもとにと歸つてきた時に、彼等は所謂無産者階級の獨裁政治が、彼等自身の、彼等の階級自身の、ほんとうの勞働者の支配でないことを見た。

「彼等は、何ものか惡しきものの存在するのを見た。彼等はこの數年間に勞働者の共和國の原理を支持してきた。しかも勞働者階級が、階級として、このソビエット共和國のもとで、日一日と、重要な要素でなくなつてきたのを見た。彼等は、彼等の政府の一行動のうへに、彼等の階級の色彩が、日一日と淡れゆくのを見た。彼等は、彼等の中央權力の政策を指導し、その仕事と思想の傾向とに勢力を及ぼすことから、日一日と遠ざかりつつゝあるのを見た。」

「ボルシエヴヰキ革命の初めには、何人か果して「上層」と「下層」とを口にすることを敢てしたのであらうか？　勞働する群も、共産黨の中心も、みな一つであつた。その當時には、生活と鬪爭とから生れた凡ての願望が、共産黨の中心に、正確な反映を見せてゐた。そこには上層と下層との間に隔ての線は引かれてはゐなかつたし、また引かれることもできなかつた。今日はその隔ての線が引かれてゐる……勞働組合員、勞働反對の中核は、この事實を知つた。否、寧ろ彼等の健全な階級本能によつてこれを感得したのである。

こゝに私たちは先づ勞働反對の出發點を見る。

（註十七）Rollontay, op. cit., p. 3-4

七

この傾向は、共産政府の他の政策によつて一層强められた。知識階級、特に産業的專門家に對する日和見政策がこれであつた。

ロシヤの共産政府は、專門家、特に技術家を優遇するの政策をとつた。先づ專門家に對して、資本主義時代におけると同様に、高給を與へることによつて、專門家のブルヂョア的精神に投じようとした。このことはレニンが夙に共産政府の第一の任務として主張したところであつた。またブルヂョア專門家の一般的サボターヂの前に、何等かの特種な對專門家政策の必要であつたことは何人も承認しなくてはならないところであつた。レニンは、ブルヂョア專門家の力に俟たなくては、社會主義への轉移は不可能であると論じた。彼は勿論この專門家優遇の道が、明らかに妥協であることを認めた。それが巴里コムムーネと、凡ての無産者階級の支配の原理とにとつての背反であることを認めた。しかし尚ほこの妥協と背反との價を拂つても尚ほ專門家に對するブルヂョア政策の必要であることを認めたのである。（註十七）

勿論、私はこゝに何人かゞ專門家を使用することに反對してゐるといはうとするのでない。中世紀的手工業制度への復歸を說くものでない限り、何人も專門家を不用だといふのではない。勞働反對もまた素より專門家無用論の主張者ではない。しかも資本主義から社會主義への過渡期において、無産階級の側に、彼自身の專門家を用意してゐない場合に、勞働反對は、このブルヂョア專門家をさへ、何等かの形における有用の要素であると認めてゐるものなのである。問題は專門家の有用無用の爭ではなくて、ブルヂョア專門家を、過渡期の政治及び經濟組織のもとで、如何なる地位と役割とに置くべきかの點にある。

ロシヤの共産政府の、幾多の矛盾撞着のうちで、專門家に對する彼等の政策も、またレニンの認めてゐるとほり、パリザー・コムムーネと勞働者支配の原理に對する、明らかな冒瀆である。何となれば、この共産政府は、彼等の國家を、絞取者に對する壓迫の機關であると稱してゐるにもかゝわらず、專門家ブルヂョアの遺物に對して、それをプロレタリヤとすることの代りに、一つの支配階級に再組織したからである。

專門家は、資本主義時代には、資本家の主人のもとに、一つの被傭階級、一つの奴隷階級を形づくつてゐたのであるが、無産者階級の獨裁政治のもとでは、彼等は一つの支配階級に組織された。

彼等は先づ産業の指導者となつた。彼等は財政及び金融政策

の指導者となつた。工場において、工場聯合において、トラストにおいて、やがて國有事業において、若しくは最高經濟會において、彼等は指導的の地位を與へられた。彼等は廣大なロシヤの、工業の領域において、若しくはその一般經濟の政策のうへで、指導的な役割を演ずべく、彼等の地位を樂しむだ。

經濟的指導は直に權力である。産業的指導は直に權力である權力の最も基礎的なものなのである。こゝに專門家、ブルヂョア階級の遺物が、共産ロシヤにおいて、支配階級にと再組織されたのである

獨り專門家だけではない。各種の商人、中間者、小役人が、共産黨に、共産政府に、ソビエツト權力のうちに、續々として入りこんできたのである。供給大臣ツルパが十八回共産黨會議で報告してゐるところによると、供給省に働いてゐる役人の分類は、一割七分が勞働者、一割三分が農民、二割弱が專門家、五割強が商人、若しくはその類似者であると。

「知識階級、專門家、事務家ー全小ブルヂョア階級と、似而非專門家とが、專門家の假面のもとに、今やソビエツトの梯子段を、一段々々と、登攀しつゝある

「革命の以前には、勞働者の生活狀態は尚ほ幾分か忍びえらるものであつた。………革命三年の間に、勞働者階級の經濟的狀態、工場と仕事場に働く人々の經濟狀態は、たゞに改善されなかつたばかりではなしに、それは益々堪ゆる能はざるものとなつた。

陣笠勞働者は、ソビエツトの役人と、實際家とが、如何に生活してゐるかを知つてゐる。………革命によつて、たゞ農民だけが得た。中等階級は、富めるブルヂョアジィとともに、新らしい狀態に、彼等自身を適せしめた。そしてソビエツト制度のうちで、産業組織のうちで、若しくは外國民との商業關係の再興において、責任あり、且つ指導的な地位を占めた。ソビエツト共和國の下層階級だけが、恥づべきほどの憐れむべき生計、細い煙を立てゝゐる」（註十八）

共産黨の幹部は、この再興支配階級、ブルヂョアの遺物とともにあつた。勞働者自身を信ずることの代りに、この再興階級を信じた。

不幸な勞働者階級は、役員でない限り幹部でない限り、役員派ボルシエヴヰキの盲目的崇拜者でない限り、そして彼等と彼等の周圍とに眼を開いてゐる限り、彼等と彼等の指導者との間に、工場の油汗の職工と、クレムリン宮殿の獨裁官との間に、冷やかな溝渠の横はつてゐるのを見た。

マークスのいふた言葉は屢々教訓的であつた。勞働者階級の

解放は、たゞ勞働者自身によつてのみ可能であると。ロシヤの勞働者の間で、共產黨の下積みのどん底から、一つの共通の聲が、自らに生れてきた。勞働者を救ふものは、たゞ勞働者自身であり、勞働者の階級本能であり、勞働者の階級的創造力であるとするの聲がこれであつた。

こゝに勞働反對への第二の道があつた。

(註十八) Nächsten Aufgaben der Sowjet-Macht, S. 10-11

(註十九) Kollentay, op. cit., pp. 10-18

八

獨裁官と勞働者との分裂、專門家の假面を被るブルヂョア遺物の再興は、ボルシエヴヰキ・ロシヤに、必然的に官僚政治の再興を伴つてきた。

勿論ボルシエヴヰキの間に官僚政治に、對する警戒はあつた。ロシヤ共產黨は一九一九年三月の第八回會議で採用された現在の黨綱領のうちで、官僚政治の興隆を恐れ、官僚政治に對して「斷乎たる戰」をなすこと、そして「官僚政治の害惡」を除くために數ケの遂行條件さへ擧げてゐるのである。(註廿)しかし官僚政治は、彼等の政策と矛盾するものではなくて、却つて彼等の根本政策から、論理的に結果したことを忘れてゐたのである。共產黨內のビューロークラシーは、深い原因をもつてゐる。それは共產黨とその政府との、過去數年の間にとつた政策の必然の結果である。「ソビエット制度の間に、共產主義と、そして勞働者の群衆の初步的な願望に對しても、精神において敵對するこれ等の要素(專門家その他)の勢力の增大」の結果なのである。

「トロツキーは、われ〳〵は官僚政治の害惡の方面を採用したゝめに苦しむでゐるのではない。その善き方面を學ぶことに失敗したからであるといふた。……しかし官僚政治は、われ〳〵の政黨とソビエット制度の骨髓を犯した鞭である。この事實は勞働反對によつて痛論されるばかりではなしに、この一團に加はらなくても多くの思慮ある人々によつて認められてゐるところである。

「勞働者の創意についての拘束は、たゞに無黨派勞働者に對して行はれてゐるばかりではなしに、共產黨員自身の創意もまた制抑されてゐる。凡ての獨立の企ては、われ〳〵の幹部の檢閲を經ない凡ての新思想は、異端として、黨紀の違反として、幹部の特權に對する侵害を企てるものとして、考へられてゐる。幹部は凡てのことを先見し、凡てのことを命令する。何ごとでも、まだ命令されてゐないとすれば、人々は、幹部が暇の時に、命令を發するの時のくるのを待つてゐなくてはならぬ。

そして人々は、極度に拘束された間に立つて、彼の創意を表現しなくてはならぬ。

「若しもロシヤ共產黨員のあるものが、——例へば非常に烏好きの人たちが——烏の保護のために一つの協會を組織しようと決したら、如何なることが起るだらうか？　思ひつきそれ自身は非常に有益に思はれ、如何なる方法でも、國家の計畫を轉覆することはない。しかし忽ちに官僚的制度が現はれ、そしてこの特種の事業の管理權を要求するであらう。その制度は直にこの協會をソビエットの機關に合併し、かくして創意を虛勢する。そしてその代りに紙上命令と規則との一山が現はれるであらう。それがまた他の數百人の役人に充分な仕事を與へ、郵便や交通の仕事をもつと複雜にするであらう。

「官僚政治の害惡はたゞ繁文縟禮にあるのではない。それは凡ての問題の解決を意見の公開的交換、凡ての事件の直接的努力によつてしないで、中央から交附され、そして極めて少數の人々によつて受取られる（そこには利害關係ある人は殆んどゐない）形式的決定によつてされる、第三者が、人々の運命を決定する。それが官僚政治の要素なのである。

こゝに「許可と命令の教權政治」が樹立される。（註廿一）

レニンは、彼の獨裁政治、ソビエットの權力をもつて、プロレタリヤのデモクラシーであるとなした。（註廿二）ブルヂョア・デモクラシーに對してプロレタリヤ・デモクラシーは、勞働者階級の獨裁政治であるといふた。レニンがこの意見を發表するとともに、大小のボルシエヴヰキの理論家が、世界の各地からそれに和した。しかしレニンの謂ふところのプロレタリヤのデモクラシーは、プロレタリヤのデモクラシーであることの代りに「許可と命令の教權政治」を押し樹てた。プロレタリヤは、支配することの代りに、たゞ彼等の新らしい主人に奉仕した。官僚政治がこれであつたのである。

勞働反對は、官僚政治を彼等の敵であると宣言した。たゞに彼等自身の敵であるばかりではなく、共產黨それ自身の將來の存在にとつても、敵であり、鞭であり、最大の危險であると宣言して立つた。

官僚政治の代りに勞働反對は、勞働者の創意を主張した。許可と命令と檢閱との代りに、批評と思想の自由とを求めた。抑制と規則とブルヂョア化との代りに、勞働者自身の自己活動を要求したのである。要するに、眞正の、勞働者のデモクラシーを要求したのである。

こゝに勞働反對への第三の道がある。

（註七）Das Programm der Kommunistischen Partei Russlan

An … objet

(註廿一) …, op. cit., pp. 34-37

(註廿二) Lenin, Die Diktatur des Proletariats und der Renegat K. Kautsky, S. 1off

九

更に重要な問題は、生産管理についての、生産者の立場である。

ロシヤの工場生産者、その工場生産者を代表する勞働組合は彼等自身の生産について、如何なる地位を與へられてゐるか。また如何なる地位と原理とを要求してゐるか。

ロシヤの共產黨は、早く一九一三年、勞働組合に關するそのメンシエヴヰキとの爭ひにおいて、產業的組合主義の原理を採用した。そしてこの產業的組合は、勞働者の經濟的闘爭を處理し、賃銀奴隷の廢止を要求するものであることを決議したことがある。(註廿三)しかしこの一決議だけをもつて、ボルシエヴヰキが產業組合主義者であり、產業自治、生產者民主主義の主張者であると考へたら、もとより根本的な誤謬である。

ボルシエヴヰキはマークス主義を標榜する。マークス主義の正統相續者であることを標榜する。或はそうであるか、そうでないか、私はこゝではこの問題に觸れる必要はない。しかしこゝに言ひえられることは、またいはなくてはならないことは、ボルシエヴヰキが、マークスとゝもに、集產主義の主張者であることである。第一インタナショナルの昔に、プルウドン派の生產者民主主義に對して、マークスが集產主義の立場を城廓としてゐたことは人のよく知ろところである。ボルシエヴヰキは、少くともこの集產主義の點では、マークスの正當相續人の一人である。

レニンは夙に革命の後に、「ソビエット權力の第一の任務」の一書を著はして、社會主義革命がブルヂョアジーを轉覆した最初の朝に、根本的な第一の問題は、生產と分配との管理の問題であることを論じてゐる。そしてこの管理とは、レニンに從へば、いふまでもなく、國家的管理の問題である レニンの言葉でいへばそはソビエット國家管理(Sowject-Staatskontrolle)の要求なのである、この國家的管理の思想を普及することが最も肝要なのである。そしてこの國家的管理に反對するものは、「社會主義とも、プロレタリヤの獨裁政治とも、共產主義とも兩立することのできないアナーコ・サンヂカリズム」であつて それはブルヂョアの傾向であると。(註廿四)だからレニンの立場は明瞭である。彼は集產主義的國家管理の信者である。生產民主主義、產業自治の思想は、社會主義ではない。共產主義ではない。プロ

レタリヤの獨裁政治とは兩立することができない。それはたゞアナーコ・サンヂカリズムであり、ブルヂョアの思想である！

レニンが原理を與へて、組織と訓練の天才、トロツキーがこれを組織し、且つ訓練する。レニンとトロツキーとは共產ロシヤに欠くべからざる二本の大黒柱でる。

トロツキーは中央集權主義の權化である。凡ての革命期の英雄のように、トロツキーは權力の集中が一切の革命的成功の根本條件であると考へる。凡てのものを集中せよと彼は叫ぶ。凡てのものを訓練せよと彼は叫ぶ。「集中制度の普及は、或は官僚政治を伴ふのであらう。しかしそは社會主義的產　制度の發展に必要欠くべからざる條件である。」「行政的ソビエット、官僚政治なくては國家はなく、共產主義への過渡期に、國家の存在する間は、官僚政治が存在する。」一切の犧牲を拂つても、トロツキーにおいては、集中主義、國家的中央集權は絕對的必要條件なのである。(註廿五) 彼にとつては、勞働強制はもとより當然である。「働かないものは食はない。從つて食ふものは働かねばならぬ。」しかしトロツキーにとつては、働いて食ふだけでは共產主義の國民たることに價ひしない。働くも食ふも、規則と權力とソリダリテとに服從しなくてはならぬ。でなくては、所罰と復讐とによつて報いられなくてはならぬ。(註廿六)

しかもこの理論は、更に產業の個人的統制へと發展する。產業の民主的管理は、トロツキーに從へば實生活から遠ざかつた議論である。そは責任をもたずに、河岸に立つ、世を離れた人の議論であるに過ぎない。專門家は、縱令資本主義時代の遺物であるにしても、今日まで獲得した技術と技術的習慣とを繼續する必要は專門家の必要である。「個人的原理のもとに、學ぶことが最良の學校である。」——トロツキーは產業の個人的管理の必要を力說する。(註廿七)

(註廿三) G. Zinoviev, The Communist Party and Industrial Unionism, p.3

(註廿四) Nächisten Aufgaben, S. 15

(註廿五) Soviet Russia, March 5, 1921 The Single Economic Plan, by Leon Trotsky

(註廿六) L. Trotzki, Terrorismus und Kommunismus Anti-Kautsky, S. 112, 125

(註廿七) Ebenda, S. 135-139

十

ボルシエヴヰキの天下となつてから、ロシヤの勞働組合は、強制加入制度のために、その會員を著しく增加した。(註廿八) またその組合員のうちからメンシエヴヰキの分子を掃蕩して、

ルシエヴヰキの勢力を浸透させた。(註廿九) しかしそれは勞働組合の革命化を意味するのではなくて、却つて勞働組合の骨拔きを導いた。

骨拔きの原理は簡單直截である。赤色勞働組合インタナショナルの執行委員長ロソウスキーは次のように述べる。十月革命は勞働者階級を支配階級に組織した。そして有產階級を從屬階級に陷落させた。この事實が、勞働者と資本家との以前の關係を一變し、そして勞働組合に新らしい問題が提供された。勞働組合はその性質と職分とを變へなければならなくなつた。……それは先づその戰鬪機關としての性質を必要としなくなつた。……ソビエツトと勞働組合との全任務が勞働及び生產の組織の點に集中されて、その非產業的職分が廢止される。勞働組合とソビエツトの經濟機關とは渾一體となる。そして勞働組合とソビエツトとから一つの經濟機關が成立する。勞働組合は、こゝに國家機關に進化すると。(註卅) ヂノヴヰエブもまた勞働組合の國家機關への進化論者である。(註卅一) ラデツクに從へば、勞働國のもとでは、凡ての政治的並に經濟的權力が勞働者に歸する。從つて生產職分の解決もまた勞働者の掌中にあると。(註卅二) トロツキーは一層簡單直截である。彼曰く、勞働組合の獨立は不可能事である。勞働組合は共產黨の指導のもとに立つと。(註卅三)

ロシヤの政府と、ロシヤ共產黨の役員派とは中央集權主義の讃美のもとに、勞働組合をも國家化した。彼等は先づ勞働組合の鬪爭力を骨拔きにするために、そのストライキ基金を奪つた。クロンスタツトのストライキは勞働國の恥辱であるといふた。彼等は第一回全露勞働組合大會をして、ロシヤの勞働組合を、國家權力の組織に渾一化（Verschmelzung）させることの決議を通過させ、勞働組合の獨立性を奪つて、ソビエツトの、從つて共產黨の、また從つて共產黨幹部、勞働獨裁官の官僚政治のもとに、從屬させることに成功したのである。(註卅四)

共產黨の第九回會議は、產業管理問題がようやく喧しくなつてきた時であつた。勞働反對が、既にこの會議に彼等自身を意識し始めた時であつた。しかし共產黨の獨裁官は、こゝに權力集中の指導に成功した。この會議では個人的管理の必要を高唱し、その個人的管理が勞働者管理と少しも衝突するものでなく、またそれが毫末も勞働者階級の權利を制限するものでないとさへ決議した。(註卅五) 昨年末の共產黨中央委員會の決定は、勞働組合についての、各種の新政策をもちきたした。勞働組合は再び資本に對する鬪爭の性質を帶び、ストライキ基金を許るされる。しかし工場内においては、權力が集中され、個人的責任の原則（Prinzip der individuellen Verantwortung）が高唱

されてゐる。(註廿六) 個人的責任の原則とは、産業上における個人的獨裁政治の意味である。政治上においてのように、ボルシエヴヰキ役員派は、工場における獨裁政治、産業上の獨裁政治、トロツキーの言葉でいふと産業上の「軍事化」を樹立したのである。

勞働組合が産業管理に關與することは最も有害であるとされた。勞働組合の最大の任務は、「學校」となつた。(註廿七) レニン、トロツキー、チノヴヰエブ、ブハリンのいふところに多少の隔りはある。トロツキーは、勞働組合は單なる「學校」でなくてはならないと主張する。ブハリンは勞働者組織の内部におけるデモクラシーを主張する。しかし勞働組合がその産業管理の職分を奪はれた以上、勞働組合は、レニン、チノヴヰエブのいふとほり國家的資本制度のもとでは、「學校」以上の何ものでもない。(註廿八) 若しそれ以上だとしたら、たゞトロツキー的「訓練」の一奴隸制度であるに過ぎないのである。

ロシヤの勞働者は、その自己の勞働のうへに、彼等の權利を失つた。ロシヤの勞働組合は、「勞働國」において、たゞ共産黨の從屬者となつた。生産者は生産についての創意と發言權とを失つて、政治團體としての共産黨と、ブルヂョアの遺物が、指導權を掌握する。(註廿九) ブルヂョアの遺物が共産主義を命令する！ 三十五萬の政黨員、しかも工場勞働者はその四割四分にしか足らない共産黨の、そしてその獨裁官によつて、最後の指揮が行はれる！

しかし、ロシヤの勞働者は、デイゼルの機關でも、ピラミツトを造り上げたエヂプトの奴隸でもなかつた。勞働反對はこの間に、勞働者の、民主主義の本能を代表して立つた。

(註廿八) ロシヤの勞働組合員は一九一八年一月には組合員百八十七萬八千人であつたのが第四回勞働組合會議の際には六百八十萬六千餘人に增加してゐる。

(註廿九) 第一回全勞働組合會議の時には、ボルシエヴヰキ及びその同情者は既に六十五パーセント餘、第三回會議の時は七十八パーセント餘に達してゐるとされてゐる。

(註卅) A. Losowski, Die Gewerkschaften in Sowjetrussland, S. 56-59

(註廿一) Zinoviev, op. cit., pp. 2-

(註廿二) Karl Radek, Programm des sozialistischen Wirtschaftsaufbaues, S. 34-37

(註廿三) Trotzki, Terrorismus, S. 90

(註廿四) Losowski, a. a. O, S. 60-61

(註廿五) Die Beschlüsse des IX. Kongresses der Kommunistis-

chen Partei Russlands, S. 45

（註卅六）Leitsätze des Zentralkomitees der K. P. R. über die Gewerkschaftsverbände (Russische Korrespondenz Jan.-März 1922

（註卅七）Ebenda

（註卅八）Soviet Russia, March 26, 1921, The Trade Union Movement

（註卅九）國家產業の管理者のうち三分の一は專問家であることが必要とされてゐる。

十一

勞働反對は、勞働者のために、勞働者のデモクラシー、生產自治を要求する。彼は產業制度の獨裁と官僚政治とに反對して「共產主義を命令することは不可能である」と主張する。

彼等は決して一切の專問家を驅逐せよといふてゐるのではない。彼は勞働者の自己活動を要求するのである。

「產業制度は、二、三の個人的天才によつて變更されるものではなくて、階級の要求に從つて變化する。

「勞働反對は彼自身の階級の創造力に信頼する。——この前提から一切のわれ〳〵の綱領が生じてくるのである。

「共產黨幹部、「十人」は、勞働組合の教育的性質を高唱する。………共產黨の指導者たちは、彼等自身を忽ち「敎師」に變んぜしめる怜悧な政治家である。

「しかも彼等の謂ふところの學校とは群衆の自己活動を敎ゆるのではなく、從つてそれは共產主義への學校ではなくて、單なる門番の養成所である。

「われ〳〵は生產力の改造と發展の問題は、たゞ人民經濟の統制の全制度を變へることによつてのみ解決することができると信んずる。爭ひの根本は、過渡時代において、共產黨が、階級組合に組織された勞働者の方法か、若しくは彼等の頭——官僚的方法かの、二つのうちの何れの方法によつて、その經濟政策を遂行するかの問題に歸着する。

「勞働者の組合は、經濟制度への今日の消極的援助の地位から、全經濟構造の管理への積極的參加へと引入れられなくてはならぬ。………社會經濟上における統制の組織は、職業及び產業組合に統一された全露生產者會議の特權である。」

勞働反對は、勞働者——生產者自身によつての、人民經濟の行政をなすべき團體の組織を要求する。それは國家的管理に反對して、勞働者によつての產業の管理を要求する。

こゝに勞働反對の最も重要な立場の一つが存在する。（註四十）

（註四十）Kollontay, op. cit., pp. 19-34

十二

首領專制か、黨内のデモクラシーか。思想の自由か、思想の命令か。官僚政治か、プロレタリヤの内部的デモクラシーか。專門家萬能か、勞働者の階級的創意か。産業の個人的經營か、所謂Kollegialitätか。勞働者の不信用か、信用か。共産主義は命令と許可によつて製造されべきか、自由創造に俟つべきか。共産國の經濟的建設はブルヂョア遺物の手に俟つべきか、勞働者の、日常の、平凡な、實生活の經驗と階級感とによつて指導されべきか。マホガニーの簿記臺からか、工場の油と汗と苦惱とからか。生産の管理は國家機關によるべきか、生産者自身の手に委すべきか。國家機關は、直に生産者の意思の完全な表現であるか、否か。勞働組合は單なる「學校」であるべきか。生産の管理者であるべきか。集産主義か、生産自治か。問題は多岐多端に分類することができよう。一本の樹から數十の枝が茂る。一つの原理から、限りなき問題が生れる。ロシヤの勞働獨裁官と、勞働反對との對立も、一つの原理に要約することができると思ふ。奴隷制度か、勞働者の自己表現か。爭ひはこの一點に歸着する。

問題は古るい。人間の歴史とともに存在する爭ひなのであるしかし「眞理は新らしくもなく、古るくもなく、たゞ若い。」集産主義か、生産自治か。われ／＼の先輩が、既に屢々繰返してきた問題なのである。國家資本主義のもとで、もしくは國家社會主義のもとで、如何に奴隷制度の危險の存在するかの警告は、既に人々の耳に熟した。私たちはロシヤにおいて、ロシヤの勞働國において、國家社會主義が一つの奴隷制度であることの、僞らざる證明を見た。

彼等は、ロシヤの今日は、たゞ過渡時代だといふ。過渡時代の名のもとに、多くの勞働者に、鐵鎖が繋がれる。ボルシェヴヰキに非ざるものが、牢獄に繋がれる。若しくは國事犯の名のもとに銃殺される。「過渡時代」は實に萬能の神である。人間の生命は短かくて、「過渡時代」は永い！

ロシヤの權力の渇仰者、ロシヤの獨裁崇拜者、人間の心に信を置かないで、チエツカの銃劍を信んずる不幸な科學的社會主義の實驗者は、その國を勞働者の國とすることの代りに、無上の機會をもちながら、永久奴隷の國を　クレムリン宮殿の四方に建てた。

十三

勞働反對が、ロシヤの「勞働國」のうちで、一團としての存在を知り始めたのは、一九二〇年からであつた。この年九月、勞働反對の一團は、既にボルシエヴヰキの役目派に向つて、批

評の自由を要求した。思想の自由、黨内における言論の自由がなくては、プロレタリヤ階級の創意は死滅すると論じた。チノヴヰエブは幹部派を代表して、批評の自由を約した。しかし批評の自由は彼には恐怖であつた。恐怖は凡ての專制政治の精髄であつた。批評の自由は、常に專制政治の足元に穴を掘らないでは止まない。批評の自由は、たゞチノヴヰエブの約束に止まつてゐた。第八回ソビエツト會議以來、勞働反對の勢力は、漸やくロシヤの全野に知られてきた。モスコウから、西伯利亞から、目醒めた勞働者の群が相呼應して立つた。一九二一年春の共產黨大會では、勞働反對は、既にボルシエヴヰキ獨裁官の一大敵國であつた。懷柔と壓迫とは、昔から獨裁官の二つの秘策である。チノヴヰエブは、勞働組合の功勞を稱讚して措かなかつた。勞働組合なくては、ロシヤの革命は、二週間とは續かないとまでいふた。勞働反對の一首領シリアプニコブは中央委員の一人に擧げられた。それは勿論賄賂であつた。片手に經典片手に劍。懷柔とともに樣々の壓迫が働いた。コロンタイ女史の小冊子も「反則」として禁んぜられた。ボルシエヴヰキ革命始まつて以來の、この最高の革命婦人は、世界の多くの革命婦人の羨望の的となりながらも、その小冊子を、國外においてでなくては發表することを許されてはゐなかつた。

今年の共產黨大會は、勞働反對の問題を中心としての會議であつた。この會議では、勞働反對に對して斷乎たる態度が決せられた。共產黨の獨裁官は、遂にその異分子を驅逐することの高壓手段を聲明した。レニンは、シリアプニコブの立場を「無意義」だと罵しつた。勞働反對の幾人かの人々は共產黨から除かれた。メドヴエデイエフ、コロンタイ、シリアプニコブの三人は、反省を促された。この反省の催告に應じない時は、彼等もまた除名されることに決定された。(註四十一)

しかし懷柔も高壓も、賄賂もチエツカも、勞働反對を、壞滅することはできなかつた。人間の心が、劍よりも强いとしたら勞働反對は、永久に滅することはできなかつた。

勞働反對は共產黨を去つた。彼等は、共產黨の外に出て、共產勞働黨を組織した。そして獨逸のカーアーペーデーの同志等とともに、一方資本主義、黄色勞働運動と戰ふとともに、ボルシエヴヰキの首領專制、日和見主義、ブルヂョア化、奴隷制度と戰ふことに決して立つたのである。

(註四十一) Resolution und Beschlüsse des XI. Kongresses der K. P. R.; Die äussere und innere Lage, von Lenin.

農村法律問題

其の二　永小作の問題

末弘嚴太郎

三

本來から云ふと、分割所有權の一部として地主——「底地持」——の權利と對立して居た作主——「上地持」「中地頭」等——の權利が、明治維新の地租改正と共に單なる他物權に變つた今までは同じ一つの土地の上に地主も權利をもち作主も權利をもつて居た、作主の作り得た收穫は彼等の間に分割された。所が明治政府の土地政策に於てはローマ法流の土地制度に於けると同じやうに、土地所有權の確立を計つた。土地は必ず何人かの獨占的所有に屬するものとし他人はすべて其所有者から土地を借りて居るものと考へることになつた。從來同じ土地が地主と作主とに分屬したのとは全く違つた考へ方である

其所で從來は或る程度の所有權者であつた所の作主が新に他人の所有地の借主として考へられることになつた。而して此の新しい考方に更に一歩を進めて、作主の權利を薄弱ならしめたものは實に、明治二十九年の新民法であつた。即ち民法は作主の權利——「永小作權」——をして單なる借地權たらしめたのみならず、其の中從來は永代存續する筈であつたものさへも單に「民法施行ノ日ヨリ起算シテ五十年」存續するに過ぎないものにして仕舞つた（民法施行法第四七條參照）。本來は永代に又は少くとも可成に長い年月存續すべき筈であつた所の權利をして——何等の補償をも與ふることなしに——五十年有期のものたらしむるのは明かに可成り亂暴な所置である。民法の起草者は何故にかゝる暴擧を敢てしたのであらうか？　當時主として起草の任に當つた學者は其の理由を說明して「其期間永キニ過グルトキハ所有權ト殆ド相擇ブコトナキ強力ナル物權ヲ認ムル結果ト爲リ之ガ爲メニ財產ノ流通改良ヲ妨ゲ且當事者ノ地位

又ハ一般ノ經濟事情等ニ變更ヲ生スルモ既定ノ條件ヲ改ムルコト能ハザル不便アリ」と云ふて居る(富井氏民法原論第二卷二二六頁、梅氏民法要義第二卷二五九頁)。存續期間の長い用益物權を認めるとそれに依つて制限される所有權が有名無實の虚有權になる。其の事を甚しく恐れるのは所有權尊重にのみ力を集中する人々に通有な考へ方である。併し所有權の尊重は――所有者個人の保護と云ふ個人的觀察を別としては――夫れ自身何等獨自の價値を有する事柄ではない。近世の個人的自由主義論者が所有權の尊重を主張するのは、一には之に依つて個人的自由を保障せむとすると同時に、二には以て直接の土地利用者たる所有者をして出來るだけ自由に使用收益を爲さしめむとするのである。從來封建的土地制度の下に於ては土地は一般に封建君主其の他其の臣下の爲めに餘りに重く負擔され制限されて居た。其封建的負擔のすべてから土地を解放することが即ち近世に於ける土地解放運動Affranchissement du solの目的であつて土地をして其の過重なる負擔より免脫せしむるに依つて土地所有者の利益を增進し以て其耕作慾を刺戟することが其效用であつた。此故に土地所有權をして成るべく自由のものたらしめ出來るだけ有名無實のものたらしめないやうにする主張は封建制より移つて個人的自由主義の現代に入るに際して最も意義ある者であつた。けれども、爾來既に年久しくして世人一般に寧ろ所有權の强力に過ぐるを苦しみつゝある今日に及むで尚徒に所有權の有名無實の虚有權たるを恐るゝのは全く無意味である。殊に實際の土地耕作者たる小作人の權利が强きに過ぐるが爲め「財産ノ流通改良ヲ妨ゲ」ると云ふ主張は全く机上の空論であつて、事は寧ろ全く正反對である、小作權の存續期間が長ければ長い程小作人と土地との間に親しみが出來て自然彼等も土地の改良を勉めるに至る。何時所有者に依つて小作地を奪ひ返されるか解らないと云ふことであれば、小作人が土地の改良に努力する譯がない。其事は經濟史家に依つて傳へられて居る德川時代の割地制度の下に於て、田地割替の時期が近くと共に自然百姓が施肥を怠り耕作に出精せざりし事實があつたと云ふのを見ても明かである(內田銀藏氏日本經濟史の研究上卷一七七頁以下殊に一八二頁、一九一頁二一七頁等の記述參照)。此故に土地所有權が强固に確立して仕舞つた今日に於ては小作權を永續且强固のものたらしめてこそ田地の改良を促すことが出來るのである。尙又民法起草者が永小作權の期間永きに過ぐるときは「當事者ノ地位又ハ一般ノ經濟事情等ニ變更ヲ生スルモ既定ノ條件ヲ改ムルコト能ハザル不便アリ」と云つて居る點と雖も、小作權存續中に自動的に小作料を變動せしむべき特別の方法を設

けて置きさへすれば何等差支ない譯であつて、此理由のみに依つて永小作權の期間を短縮せむとするのは全く不當である。何れの點より論ずるも——從來は永代存續することの出來た——永小作權の存續期間をして突如五十年に限定する理由は少しもないのであつて、從來永代存續するものとして其權利の上に安むじて居た永小作人が此の民法施行法の規定を聞き知つて驚き騷いだのは當然である。

當時此の新法に對して最も激烈な反對氣勢を擧げたものは土佐の永小作人であつて、明治三十二年高知縣有志者から政府に提出された陳情書には此間の事情が詳かに記されて居る。彼等は本來永代存續すべき筈であつた所の彼等の權利が一片の法令に依つて何等の補償をも與へらるゝことなしに五十年有期のものたらしめられたことに對して猛烈に反抗したのである。又當時學者にして新法の此の措置に對して激烈な反對批評を加へたものは戸水寛人氏であつた。氏は肥後藩阿蘇郷に行はれた永小作の慣行を例に引いて「細川家の武士は其槍先を以て祿を得永小作人は其鍬先を以て永小作權を得たり」と說明し、然るに其「鎗先」で得た「祿」——土地——のみが土地所有權として重く保護せられ、百姓が「鍬先」に依つて得た「永小作權」が有期の制限物權として保護せらるゝに過ぎないことに對して非難を加へたのである。(「阿蘇の永小作」法理論叢第一〇編參照)、尙此種の新法に對する不平は以上の外にも其の事例少からざるものゝ如く、帝國農會發行本邦永小作慣行餘編「割地制度と永小作」中に小野武夫氏の記す所に依れば、愛知縣海部郡鹽江町七寶村にも右と全く同樣の事實があると傳へられて居る(同書一三五頁以下殊に一六八頁—一六九頁)。

高知縣有志者の陳情書は當時實際政治家を動かして或る程度まで成功する事が出來た。其の結果明治三十三年三月法律第七十一號が制定されて、民法施行法第四十七條の末尾に「民法施行前ニ永久存續スベキモノトシテ設定シタル永小作權ハ民法施行ノ日ヨリ五十年ヲ經過シタル後一年內ニ所有者ニ於テ相當ノ償金ヲ拂ヒテ其消滅ヲ請求スルコトヲ得。若シ所有者ガ此權利ヲ拋棄シ又ハ一年內ニ此權利ヲ行使セザルトキハ爾後一年內ニ永小作人ニ於テ相當ノ代價ヲ拂ヒテ所有權ヲ買取ルコトヲ要スなる一項が附加されることになつた。成程之に依つて永小作人は民法施行後五十年の際「相當ノ償金」を得て其權利を失ふか又は「相當ノ代價」を拂つて所有權を買ひとり得ることゝなつた。彼等の權利が無償のまゝ消滅することではなくなつた。けれども、將來實際に此規定を適用する時が來れば、必ずや「相當ノ償金」乃至「相當ノ代價」如何の問題を中心として幾多の

困難な訴訟を惹起すであらう。又地主が一年間に永小作權消滅の請求を爲さず、而かも永小作人亦爾後一年内に相當の代價を拂つて買取權を行はざるときは、法文上彼の永小作權は何等の補償をも與へられずに消滅することになつて居る。一方地主に對しては永小作權消滅の請求を爲すに付いて何等の强制がないにも拘らず永小作人のみはかくの如くに買取を强制されて居るそれは果して何故であらうか。これは明かに不公平である。將來は必ずや此點に付いて爭議が起るに違ひない。(尙此の民法施行法の規定の不可なることに付いては戸水氏「阿蘇の永小作二四頁以下參照)。

此故に私は民法施行後五十年の未だ來らざるに先立ち、今から別にもつと合理的な法律を設けて置いて、將來地主永小作人の間に困難な爭訟の起らない樣に豫防して置きたいと考へる。

四

今日現存の永小作權は殆どすべて以上の如き舊來の慣行に由來するものである。無論民法施行後民法の規定に從つて契約を更新した例は極めて多い。又地主小作人間の爭議を解決する爲めに永小作權設定の契約をし代へた例もないではない。けれども民法施行以來全然新に永小作權を設定した例は全國に一二の例外を除く外殆ど其事例がないと云はれて居る。

民法の規定に依ると、他人の土地を借りて農業を營まんとする者の採り得る法律的方式に二種類ある。其一は普通小作——賃借小作——であり其二は永小作權である。前者に付いては後の機會に於て詳說する豫定であるが、それは單なる對人的の債權關係を發生せしめるに過ぎない。從つて一度地主が變れば小作人は之に對抗し得べき何等の權利をも持たぬ。新地主に依つて明渡を請求されゝば何時でも之に應ぜねばならぬ。其地位は極めて不安である。無論かゝる場合には小作人は從來の地主に向つて債務不履行を理由とする損害賠償を訴求し得るけれども、現在の如く徒らに費用と時間とを要する裁判制度の下に於ては、かゝる救濟は事實上到底充分な效果を齎すものではない。

加之現在行はれて居る賃借小作は——法文上二十年を超え得ざることになつて居るのみならず——實際上一般に契約期間が極めて短く、其多數は一作節で每年更新してゆく有樣である。此場合地主には更新の義務なきこと勿論なるが故に、小作人は平素から心掛けて地主の意を得て置かないと期限の切れた際契約を更新して貰ふことが出來ない。其結果、小作人は地主に向つて債權を有すると云ふても實は全くの名義だけになつて仕舞ひ、終始地主の鼻息をうかがつて居なければ、近い將來に於け

ろ生活の安全を期することが出來ない有様である。要するに賃借小作人の權利は極めて薄弱なものである。

之に比すれば、永小作權は遙かに强固にして確實なる權利である。それは何人にも對抗し得る物權なるが故に、地主の交代に依つて何等の影響を受くることなきは勿論、永小作人は原則として轉貸及び讓渡の權利を有し、且其存續期間も二十年以上五十年以下になつて居る民法起草者の豫定に依れば、かくの如く强弱二種の小作權を設けて置きさへすれば、當事者は各好む所に從つて其何れかを選擇するであらう、と考へたらしい。けれども、かくの如く著しく效力に差異ある二種の小作權が認められて居る以上、地主が其强固なるものの設定を好まざるは當然である。而して經濟上の優者たる地主が之を好まざる以上小作人が如何に希望しやうとも自己に有利なる永小作權の設定を求め得ないのは極めて明白である。從つて現在實際の有樣を見ても、小作契約の大部分は賃借小作であつて、永小作權たるものは極めて稀れである。加之其僅かな永小作權さへ其起原は多く民法施行前特に維新前に屬し、民法に依つて全然新に設定されたものは殆ど皆無であること上述の通りである。此故に民法中に賃借小作・永小作の二種類を認めて置きさへすれば、當事者は好む所に從つて其何れかを選擇するならむと考へた民法立案者の樂觀的豫期は、全く美事に裏切られたのであつて、法典上永小作制度の存在することは小作權を强固確實のものたらしむるに付いて實際上何等資する所がないのである。

此故に永小作の問題は寧ろ過去にある。今後此の權利が新設される見込は殆ど皆無である。從つて之に關する現行法規を如何に改正すべきかの問題は事實上殆ど何等の價値もないのであつて、吾々の專ら考へねばならぬ問題は、舊來傳はり來つた永小作權を今後尙引續き存續せしむべきや否や、之を廢止すべしとせば如何なる方法に依つて廢止すべきか等すべて過去より傳來したものゝ整理に關聯して起るのである。

五

永小作の問題は主として過去にある。今後起るべき問題も主として過去に關係して起るに違ひない。

其問題の一は古來繼續し來つた一定の小作關係が永小作なりや普通小作なりやの認定問題である。此問題は從來屢々訴訟となつて公衆の前に現はれた。現に裁判所に繫屬して容易に解決しない難事件さへある。何故なれば、古來何と云ふこともなしに永年繼續し來つた小作關係が現行民法に所謂永小作に相當するや否やをきめることは夫れ自身かなりに六かしい事柄である

のみならず、それがいづれに決るかは地主小作人の双方にとつて極めて重要な事柄だからである。

此區別については嘗て明治八年太政官指令第十一號に於ても相當に詳しい說明を與へたことがあるが、具體的の場合について一々其區別を明かにすることは今日尚極めて困難である。併し從來判例に現はれた事例を本にして考へると大體次のやうな事を云ふことが出來ると思ふ。

先づ第一に、或る人が其所有の寄洲池沼其他の荒蕪地を開墾する爲め、之を農民に貸下げ、主として其資力と努力とを以て開墾を爲さしめ、「右農民ハ其報酬トシテ右田畑ニ付キ比較的少額ナル小作料ヲ以テ永久ニ之ヲ小作スル權利ヲ得タ」事に因つて小作關係が開始したやうな場合には、特に反對の事情なき限り之を永小作なりと推定すべきである。此事は現在各地に行はるゝ永小作の大部分がかゝる荒蕪地の開墾に起因してるのに依つても之を推論し得るのであつて、開墾全體が大部分地主の資力に依つて爲されたこと明かなるが如き場合を除く外すべて之を永小作なりと推測していゝと思ふ。第二に又、小作人が從來「地主ニ關係ナク自由ニ小作權ヲ賣買讓渡質入ヲ爲シ」地主が其土地を賣買讓渡するに當つても右小作人の權利を尊重したる事實あるに於ては、之を永小作なりと解すべき有力な論據あるものと謂はねばならぬ。尚第三に「特ニ毎一季小作タルノ契約アルニアラズシテ二十箇年以上繼續小作シタル者ハ乃チ永小作タルコトハ舊幕時代ヨリノ慣例」だと謂はれて居り、又最後に『民法施行前ノ小作證書ニ或ハ「本年受地小作仕候」云々或ハ「本年一箇年受地小作仕候」云々或ハ「本年ヨリ五箇年間受地仕候」云々トアリ尚「翌年越ノ作附ハ一切爲サヾル旨」及ビ「戶主又ハ長男ガ十五日以上他行スルトキハ土地ヲ隨意ニ引揚ゲ得ベキ旨」ノ特約アル場合ハ永小作契約ニアラズシテ一ノ賃貸借契約ナリト認定スルヲ相當トス』との判例がある。要之、此問題は一概に決することの出來ない困難な事柄であつて、今後も尚屢々裁判所を苦しめるに違ひないと思ふ。

六

最後に考へねばならぬ問題は、永小作制度は今後尚長く之を存續せしむるを可とすべきや否やである。

民法は其の「施行前ニ永久存續スベキモノトシテ設定シタル永小作權」は「民法施行ノ日ヨリ五十年ヲ經過シタ」時に之を消滅せしめることにして居る。而かも民法が今後尚新に設定せらるべきことを豫見して設けた永小作權の規定は實際上殆ど其適用を見ないこと上述の通りである。して見れば、民法施行後

五十年を經過すると共に永小作權は殆どすべて存在しなくなるものと考へることが出來る。それは果して喜ぶべきことであらうか。私はそれに答へて「然り」と云ひたいのである。現在の永小作權者は對地主の關係に於て確かに同情すべき地位にあることと上述の如くである。けれども、現に彼等が一般に其權利を如何に利用しつゝあるかを觀察し更に之を小作問題全體に關聯して考察するとき、吾々は寧ろ一日も速に永小作權制度を廢止すべきであると考へる。傳ふる所によると、現在永小作人の多數は自ら其權利を行使して耕作に從事することなく、彼等も亦地主と同じやうに其土地を他人に轉貸して小作せしめて居る。彼等は永小作通常の例として地主に向つて極めて少額な小作料を納めつゝ自己の小作人に對しては一般の普通小作に於けると同樣の高率な小作料を課して居る。而かも地租は地主の負擔する所であつて、永小作人には何等其の負擔がない。而して彼等は對地主の關係に於ては比較的强固な權利に依つて保護されて居るが故に、普通の小作人の如く容易に地租其他の公課を地主から轉嫁される虞もない。一般に中間小作人——「小作世話人」其他色々の名稱を付けられた小作契約の仲介者——位小作問題にとつて厄介なものはない。彼等は地主の土地を小作人に貸付けて小作料の分合ひをとる。從つて高率に貸付けることが出來ればそれだけ彼等の收益が増える。其所で彼等は地主小作人の中間に立つて色々術策を弄し出來るだけ小作料を競り上げやうとする。地主は縱令低率の貸付を希望しても中間小作人が事實上之を妨げるなり又は利鞘を自己に收めて小作人には實際上何等の利益をも與へない。此故に小作問題解決の第一策として必要な事項の一は中間小作人の根絶である。其方法として吾々は小作地の轉貸を原則として禁止したいと考へて居る。又此種の營業的な小作仲介者でなくとも、例へば北海道に於ける御料地小作の中間小作人の如き者でさへ、自然小作料を增大せしめ小作爭議惹起の原因となるものなること、最近世人の耳目をひいた事件に依つても明かである。

かくの如く、中間小作人は出來得る限り之を絶滅せしめねばならぬものである。而して今玆に論じて居る永小作人は多數の場合に於て此の中間小作人たる役目を勤めて居り、事實上自ら何等耕作に從事して居ないのみならず、普通の中間小作人に比すれば其地位相當に强固なるが故に、彼等は地主にも增して遙かに不當な利益を收めることが出來る。此故に永小作權を今後に長く存續せしめることは決して農業問題將來の爲めに望ましいことではない。

殊に法制上普通小作の外に永小作の制度を認めて置くことが

事實上毫も小作權を强固ならしむる效能なきこと上述の如くなる以上、永小作制度は寧ろ單なる過渡的制度として之を取扱ひ對地主關係に於て、公平を失せざる方法に依つて、一日も速かに之を絕滅せしめて然るべきであると信ずる。

獨逸に於ても今日では最早現行民法施行の際吾が永小作權に相當すべき Erbpachtrecht が行はれて居た僅少の諸邦——殊にメクレンブルク諸邦及びリユベツク——に於てのみ引續き其制度が行はれて居るに過ぎぬ（獨民法施行法第六十三條參照）英國に於ても亦第十九世紀を通じて我が永小作權に相當すべき Copyhold を處分するが爲めに屢々法令が制定された (Copyhold Acts of 1841, 1843, 1844, 1852, 1858, 1887今日では此等の法律は統一整理されて Copyhold Act 1894〔54 & Vict. c. 46〕になつて居る）。私は吾國に於ても敢て民法施行後五十年の來るを待たずして速かに永小作權の處分を策すべきだと思ふ。而して其處分方法は上述の民法施行法第四十七條第三項に規定するが如き不完全且永小作人にとつて不利益なものでなく、地主と永小作人とに均等の機會を與へた公平のものでありたいと思ふ。而して此點に於て英の Copyhold Act の規定は大に參考の價値があると信ずる。英の永小作權處分方法は大體に於て永小作人をして小作地を買ひ取らしむるにある。此の點だけは吾が民法施行法第四十七條第三項の規定と稍々類似して居るが、實施の方法及び手續に至るともつと遙かに組織的且公平に出來て居る。其詳細については將來普通小作一般に關し小作人をして小作地を買ひ取らしむるに依つて自作農を創定することが事實上果して可能なりや否やの問題を論ずるに際して說明する豫定である。

併し永小作人をして小作地を買ひ取らせるに當り其の賣買價格を何程たらしむべきかに付いては特に注意を要すべき一點がある。即ち、今日永小作權たるもの〻大多數は本來分割所有權の一部であつたこと上述の通りである。これが明治政府の所有權本位の土地制度の爲めに單なる他物權たらしめらる〻に至つたのが即ち今日の永小作權多數の起原である。此故に今日永小作人をして小作地の所有權を買取らせるに當り其地價の全額を代金として支拂はしむるのは決して正當ではない。何故なれば

此場合地主の權利は初めから完全なものではなく、之と小作人の權利とを合して初めて完全な所有權になるのであつて、地主は今日に至るまで其完全な所有權を取得するが爲未だ小作人に向つて何物をも支拂つて居ないからである。傳ふる所に依ると土佐の舊藩主山内家に於ては、民法施行後の今日と雖も、永小作權の目的たる土地が公用徵收を受けたやうな場合には、因つて受くべき補償金額の七割を永小作人に與へることにして居ると云ふ（「本邦永小作慣行」一二二頁）、又熊本縣に於ける或る永小作契約中には將來已むを得ざる事由の爲め地主が「土地を賣却し永小作權を解く場合に於ては賣却代金の二割即ち十分の二を開墾料として開墾したる反別に限り小作人に交付する事」になつて居るものがあると云ふ（同書六八頁）此等は何れも永小作本來の性質上極めて適宜な措置であつて、永小作人をして小作地を買取らしむる場合に於ても其賣買代價の確定は必ずや此種の割引を施して之を爲さねばならぬ。換言すれば、大體に於て平年作に於ける永小作人の收量と地主の收量との比例に依つて小作地の地價を割引し、之を以て其の賣買價格たらしむべきであつて、決して永小作人をして地價の全額を支拂はしむべきではない。（此項終）

現代哲學思潮

矢崎美盛

哲學の生起と進化とが、外面的歴史の特有形態を取れるものが、卽ち哲學の歴史として表紀される。斯の如き形態にあつては、理念の進化の段階は、偶然的繼起の形式であつて、夫々異別なる原理の實現である樣に思はれやう。けれども此の幾千年の作業、此の莊大なる伽藍建築の棟梁は、唯一の活ける精神であつて、その思惟本性がデイアレクチクの賸搦を果す過程である、とヘーゲルは言ふ。現代の哲學の動搖は「哲學」そのものが、自己の全一態(トタリテート)を確保せんがための、向上である。成熟のために思ひ亂れる若き男性のあへぎである。——玆に現代の哲學の容貌を、統一的組織的に、看取する事は、いま吾々の關心の懸る所であると同時にけれど非常に廣汎なる勞作の要求せらるべきものである。此の意味に於いて、Kultur der Gegenwart. Teil I. Systematische Philosophie (1921) 中に輯錄されてゐる Traugott Konstantin Oesterreich の論文 Die Philosophischen Strömungen der Gegenwart（一九二〇年脫稿）は、私の興味を引いた。勿論、フオルレンダーや ファルケンベルヒやユーベルウエヒの哲學史、——更に西田博士の「現代に於ける理想主義の哲學」桑木博士の「現代哲學十講」其他——現代の諸思潮のオリエンテーションを示して呉れるものは尠くない。（ユーベルウエヒ哲學史の現代の部は、エステルライヒが書いてゐる。）然し乍ら、歴史的關係と言ふ寧ろ煩雜な立場からでなしに、各哲學の保持する理念の内部から、各々の位置の設定を試みたエステルライヒの論文は、專門外の人々にも、より簡明に、現代哲學の風貌を一とまとめに見せて呉れるであらう。但し彼の見方が彼の哲學説上の立場——彼自ら言ふ樣に批判的實在論——に觸れられてゐるのと、各學説の組織的のオリエンテーションに急であつて、學説の深奥に參入する事が尠く、自己の意圖に應ずるが如き撰擇に赴いてゐるとの憾みはある。從つて之を以つて純硏究的の勞作とする事は出來ないけれど、また現代の風貌を大觀するの資けとはならう。私は、玆に以下此の論文を土臺として、前記の諸書並にグロナウ、シユミツト等の編著を參照しつゝ、現代哲學思潮の總括的紹介を試みやう。時間と紙數との制限のもとに、取扱ふ可き範圍は頗る廣い。或は寧ろ、此の論文に關する補說的の、時としては抄譯的の、紹介に終るかも知れない。

第一章　緒論

（一）

茲に現代の哲學と謂ふは、現に吾々の生活しつゝある此の世代にあつて、尚ほ直接に氣息し脈搏ちつゝある總ての哲學を意味する。そして茲には、其の哲學の建設者その人が、現に存生者たるか否かは、問ふ所ではない。唯だ、要は、其の哲學が現代に生きつゝある事、其處に、本來の現實感を具有することである。されば、茲に、截然たる年代的規定を與へる事は、不可能であつて、寧ろ、其の思想世界そのものが、今尚ほ直接に「近代的」なるものとして、感受せらるるか否かゞ、主要なる重點の懸る所である。例へば、ヘルムホルツとニイチエとの死を隔つるものは、僅かに四年の星霜にすぎない。（一八九六――一九〇〇）。然かも、前者の思想世界は、既に全く過去の世界と觀ぜらるるに反して、後者の夫れは、――彼は、實際上一八八八年以來、既に、精神的には死した人であつたにも拘らず――今尚ほ直接に、現代の哲學である。後者は、生きてゐる。けれど、前者の世界を構成する所の要素は、既に現代の論究からは遠のいてゐる。夫れは「歴史的になつたもの」として觀られるであらう。「現代」と「過去」は、一つの流れである。此の間に截然たる年代的境界線、客觀的時間概念を與へる事は難い。

從つて現代の哲學として論ぜられるものも、勿論其の場合の判斷主觀への依屬を免れないであらう。且つ、新カント派の驍將エミール・ラスクを初めとして、幾多の主要なる思想家は、今次の大戰に殉じた生命の脅威は、屢々、哲學的生產の沈滯を招いた。けれども、いまや、時代は生命の眞諦に目醒めんとする。高められたる情熱を懐いて、時代の精神的要求は、炎々として動いて行く。あらゆる方面に於いて、眞理思慕の精神は燃え、世界觀の革新は企てられる。茲に現代の哲學の全野を概觀して、其の特色を擧示せんとする課題は、愈々困難なるものとならなければならない。

此處には、獨逸の、嚴密に言へば、獨逸語による哲學の上に中心を置く。（此の小篇は、もとより歐米哲學の上に限られてゐる）。けれども、勿論、百年の昔、かの獨逸的精神、浪曼的理想主義が全思想世界に光被してゐた當時の樣に、今日獨逸哲學が、世界に獨歩的優越の地歩を占めてゐるのではない。獨逸理想主義の落魄以來、諸民族の哲學的展開は、本質に於て各々獨自の色彩を發揮して、寧ろ相互の接觸なしに並存的に進んで來

た樣に見える。けれども、大戰の勃發に先だつ數年――否前世紀の末期にまで溯つて――文化諸國民間の思想上の相互關係は、著るしく深められ擴げられて、其處に一種の思想上共働が現出した。漸く問題は共通となり、言はゞ國際的の問題聯合が現實となつて來る。――例ば、佛蘭西哲學、特にベルグソンの偉大なる國際的影響の事實がある。其他に於いても、獨佛間の精神的接觸面の廣汎なるは、言ふを須ひないであらう。また一方に、獨逸の思想家のうちで、影響の廣いと言ふ意味で言ふならば、恐くは、ニイチエとオイケンとが擧げられるであらう。(尤も單に廣まつたと言ふ意味では、ヘッケルの述作は、恐らく他に比肩するものがないであらう。けれど夫れ等は嚴密に哲學的の文獻と見做す事は出來ない)。また、ヰンデルバントやコーヘンの思想の力は、遠く露西亞にまでも及んで、其處に多くの新カント學徒を培つてゐる。伊太利、英吉利、其の他歐洲諸國は言ふを俟たない。

尙ほ玆に、哲學史上注目に値する事實は、米大陸が、現代に於いて甫めて、深い哲學的勞作の成遂を致して、其の力を歐洲にまで擴張し得た事實である。嚴密なる意味に於いて、米國の歷史は現代に初まる。由來生活の殆ど總てが、たゞに經濟的關心によつてのみ支配されてゐた米大陸に、特に合衆國に於いては、最近三四十年間の學的文化の向上は著るしく、今日に於いては、「學」に於いて、彼は單に受納者たるに止まらずして、實に既に施與者たるの位置に立つてゐる。米國は、今や、「自己の哲學」を有つてゐる。假令其の哲學は、論理的の洗練に於いて未だしく、眞の學的追究に於いて淺いと言ふ事は否み難いまでも、彼は自己に固有なる思想の背景と、從つて固有なるその成果とを産み出してゐる。吾々は、例へばウイリアム・ジエームスに於て、(不十分なる思想と並んで)、多分に價値ある新思想の提出を、看過する事は出來ない。彼の哲學は、實用主義――いかにも米國的な考へ方――は、獨逸の學界への潜入は比較的尠いとしても、佛伊、殊に英國への影響は、最も顯著なるものと謂はなければならない。

斯くして、現代の哲學は、國際的に展開しつゝある。戰後の世界は、更に此の共同勞作へと慕ひ寄る。そして、哲學展開の過程は、總ての文化民族に於いて、其の速度は同一ではないとしても、其の傾向に於いては、殆ど同一方向を目指すものと謂ひ得るであらう。生命の問題は、全人類の共有である。思想の流れは、政治的國境によつて阻まれはしない。

(二)

偖て上述の意味に於いて、現代の哲學として理解せらる可きものの結構は、謂はゞ多樣なる階層からの組合せである。最近十數年間の哲學展開史の章節毎に、異別なる原理、異別なる解釋が、樣々に現はれて居る。けれど思惟の展開は、保存的騰揚である。凡そ哲學の發達に於いては、一般に、簡單に一の思潮が、他の思潮に全く交替するものではない。寧ろ、新思潮の動きつゝある傍には、此と並んで舊來の思想形式が、尙ほ長い間息づいてゐる。時代の根本的傾向と目さる可きものの並存すらもが時としては現實である。斯る運命は、勿論必ずしも哲學のみの荷ふ所ではない。寧ろ總ての學が、此の種の步みに於いて、向上の一路を辿るものであらう。せいぜい例外と見える數學すらもが、猶ほ一切の學的見解の差別相を排除する事は出來ない。抑も斯る事實の存するは、極言するならば、恒に必ずしも絕對的確實性を以つてするを得ざる人間智性の缺陷に因るとも謂へやう。——けれども、他面より觀れば、また斯る組織的思潮の分派が限りなく無數であるといふ事はない。此の事實を經驗的に考へるならば、夫れは、一面には、無數の問題に對しても、唯いくつかの答へのみが可能であり、また他面には、人性そのものに於いて、或る種の考へ方が、恒に繰り返されると言ふ理由に因ると謂へよう。けれど一層の理解と洞察とを以て是を見るならば、哲學の展開は單なる反復にあらで、分合進化の道程にあることを見出すであらう。哲學的反省は、よりよく生れんがために自己を否定するフェニックスである。自己の完成の爲めの自己の反立が思惟に必然であるが如く、哲學體系の多樣は、保存的騰揚に於いて繰り返されるであらう。然かも、それは單なる反復ではなくて、其處には必ず止揚而して增大がある事を看過してはならない。やがて來る可き組織に向つての分裂である事を忘れてはならない。

斯くて、此の二十年來の哲學の狀勢は、これを一目にして展望するに難い。人々は、時代の特質的面目として、"Anarchie der philosophischen Systeme" と謂ふ。就中、現代哲學の特徵は、包括的なる體系の缺除と言ふ事であると言はれる。リッケルトも言つてゐる樣に、哲學の體系は既に畢つたと言ふ意見が、屢々唱へられる。ニイチエは「余は一切の體系を信じない、體系を欲する者は、正直の念を缺く者だ」と言ふ。藝術的に、宗教的に、將た學的にさへも、反體系的思潮は時代の特色であつた。最近に於いて、此の間に立つて哲學的體系の討究に向つて、比較的廣汎なる企劃を敢てしたものは、エドウアルド・フォン・ハルトマンとヴントとを數へ得るのみであらう。けれども、前者の世界觀の屬する所は寧ろ前世紀中葉の自然主義ー思

想界であつて、彼は既に過去への關係に立つてゐる。彼は寧ろ新しい形而上學の先驅者である。斯くしてヴントのみが現代の體系家であつたとは云へ、けれどもなほ彼は、時代に司配的の影響を與へる事は出來なかつた。力強い足跡を留めたニイチエの思想は、包括的の性質を有つてはゐる。けれども、多くの點に於いて、其處には學たる可きの基礎が足りないし、また眞の體系を創るがためには、餘りに跳躍的である。——斯樣に體系的全體的討究の缺除と言ふ事は、一面に於いては、個別學の異常なる發達に伴つて全體的綜合が困難にされたにも因るであらうが、更に一層此の事情を制約するものは、哲學の全體任務に對して再び體系的討究を肯てして、是れを自らの中に生かすがためには、前代の哲學的の力が足りなかつたのであると考へられる。けれども、漸く新しい若々しい哲學的の要求は、倍舊の活氣において喚起された。今や青年は反つて老年者に働きかけやうとする。嘗ての浪曼的理想主義の大建築の礎石となつた、光輝ある精神偉力の確信は、再び現代に惠まれやうとする。且ては渾沌と見えてゐた臆見の海原に、著るしい秩序は將來せられんとする。コーヘンは寧ろ新しい形而學上の建設をさへも示唆する。リッケルトは、開放體系に於いて、世界の綜合を企圖する。——哲學今日の狀勢は、寧ろし一の力強い統一によつて特性附けられようとしてゐる。夫れも一つ一つの傾向に於いてではなくて、總括的傾向に於いてである。且では、今日支配的の優越を示してゐる最新の眞摯なる思潮に對して、本能的に嫌惡を洩してゐたものさへも、今や彼等の側からして此等の新思潮に同化せんと努むるに到つたのは、特に此の統一的傾向を物語るものである。現代は、あらゆる方面に於いて、寧ろ、目指す可き港を自覺したる苦鬪の航海であると謂ひ得ないであらうか。

次の考察に於いては、現代の哲學中の古い層、舊い型に屬するものから始めて、最近の轉向に及ばう。尠ない餘地に於いて、各學說の內部に深く穿入する事は出來ないし、また極めて主要なる思潮にだけ限る事が必要である。且つ、哲學本來の領土から、多少背後に乃至側面的に考へられるもの、例へば、倫理學、法律哲學、社會哲學、美學等に關しては、茲に割愛せざるを得ない。心理學等に關しても、唯だ直接哲學に關係する限りに於いてのみ尠なき顧慮を拂はるるに過ぎないであらう。

（三）

エステルライヒは、現代の哲學を、先づ比較的に古い層に屬するものと、現代に於いて全く新たなる思潮とに分けてゐる。例へば、新カント派

茲の如きは前者であり、現象學の如きは後者に屬する。最後に、現代哲學位置の鳥瞰的概圖を得んがために、豫め以下の論述のプログラムを示しておかう。大部分に於いてエステルライヒの順序に從ふものである。

認識論（其の一——古い層）

新カント學派

カントに對して心理的解釋をとるもの……………ネルソン等

マールブルヒ派……………………コーヘン、ナトルプ等

バーデン派…………………ヰンデルバント、リッケルト等

實在論的批判主義乃至批判的實在論……リール、キュルペ等

獨逸以外の新批判主義……ルヌヴイエ、グリーン、カント二等

經驗批判主義……………………マツイハ、ツーヘン等

實用主義………………………ファイヒンガー、ジエームス等

歷史科學の認識論…………ディルタイ、リッケルト、ジムメル等

（附心理學の意見…………實驗心理學、記述的心理學一般）

認識論（其の二——新しい層）

合理論的思潮

現象學…………………………………フッサール等

對象論…………………………………マイノング等

基礎學としての哲學
オルドヌングスレーレ
附、組織學……………………………レームケ等

其他（數理哲學）………………ラッセル、クーチュラー等
ドリーシュ

反合理論的思潮・（直觀主義）……………ディルタイ ベルグソン、ジエームス等

形而上學的乃至世界觀的思潮

反形而上學的傾向………………（リール、ディルタイ）

古い形而上學、一元論、汎神論…ヘッケル、パウルゼン、フーイエ、ブラッドレー等

生物學的形而上學（新生活論）……………ラインケ、ドリーシュ等

（附心理學からの形而上學

精神科學からの形而上學…………………アッハ等

新しい有神論…………………………オイケン、トレルチ等

古い層の認識論への形而上學の反動…キュルペ、フォルケルト等

等に於ける、ヰンデルバント、コーヘン

世界觀綜合・文化哲學と內容的の歷史哲學…ヰンデルバント、ニイチエ、ブルクハルト、ラムプレヒト等

其他獨逸以外の形而上學思潮・ベルグソン、ジエームス、ブラッドレー、クローチエ其他

新トーマス主義……………………………ガイゼル等

以下此の順序に從つて、思潮の大要を見て行くのであるが、時として精粗宜しきを得ない場合もあるであらう。もとより以下の論述だけで現代の哲學に通じ得たりとなすが如きは、憑舉も甚だしいものである。茲には、斯る廣汎なる領域に關して、能ふ限り簡短なるスケッチ以上に出づる事はもとより不可能である。

第二章　認識論（其の一）

十九世紀の七十年代には、特に獨逸に於いて、一方に哲學の存在權利に對する懷疑の風潮が助成されてゐたのに對して、他方に哲學自身は己が本來の課題を揭げて、その存立を權利附けやうと欲し、斯くして徐ろに、若い頭腦の間には、あらゆる精神的勞作に缺く可らざるものとしての哲學の特質的價値の意識が、再び力强く覺醒されて來た。吾々が玆に舊い層の思想と呼ぶものは、此の時代に生れて今日に及んでゐる。彼等が固有の課題は、認識理論の研究である。實在の總ての部分が、個別學の研究に依つて分擔し盡されるとしても、尙ほ其處には、學其のものの研究、其の論理的の意義、限界並に態度の研究が殘されてゐる。此の方途こそは、哲學が先づ自己の存在權利を再び確保すべく努力開拓した所の光榮ある領土であつた。そして爾來今日に到る迄、認識論上の研究生産は、猶ほ恒に哲學の大部分を占めてゐる。哲學は愈よ「學の學」たらんとする。けれども、實際上今日、此の認識論的研究の領土が、總ての個別學の根底に直接關與してゐると謂ふのではない。多くの場合に、それは物理學並に數學、根本概念の上に限られてゐる。其他の有機的實在の學に關しては、目的論的觀點の使用が問題とせられる限りに於いてのみ、認識理論の關與が要求されるやうである。

近來著るしく、此の認識論的討究の對象となつて來たものは、歷史學である。また稀れには、化學的概念の認識理論的研究がある。けれど他の自然科學、例へば鑛物學、氣象學、地理學、地質學の如きは、未だ殆ど論ぜられない。心理學。言語學、法律學すらもが同樣である。（唯だ、ヴントの「論理學」は、其の妥當の領域を著しく擴張して、尠くとも上述諸學の或る部分が包攝される事を要求する。）だからして、此の意味に於いて觀るならば、實際上主、要なる諸學の全野を包括する所の、普遍的なる「學の學」即ち認識理論たる可きものに於いては、今日尙ほ缺ける所が多いと言へるかも知れない。その上大概の認識理論家は、彼等自身の學的關心並に其の理解に應じて、最初から、自然科學的にか乃至は精神科學的にかの方向を取つてゐる。そのために、認識一般に關する全的理解に達し難い事情が存するかも知れない。けれども、最近の認識論的研究は、斯る非難を征服せんとする。即ちそれは原理的に個別學一般、乃至世界一般の成立を論ずる限りに於いて、—原理的に對象一般認識作用一般を論ずる限りに於いて—諸學の機能と位置とを、組織的に規定する事が出來なければならない。此處にこそ、學としての哲學の使命が存する筈である。

十九世紀の末葉に對立してゐた二つの認識論上の主潮、新カント主義と經驗批判主義（エムピリオクリチイスムス）とは、今も尙ほ存續する。と同時に、此の兩者からは、現世紀に到つて、更に新しい思潮が生ひ立つて來た。即ち、新カント主義から、新たに生れ出でたものは、批判的實在論であつて、これはなほ勿論カントの餘韻を認めさせはするが、併し舊來の新カント主義の獨斷的傾向を脫却せんと欲してゐる。經驗批判主義は、一面に於いては、批判的實在論に近づいて來たが、また他面には、新たに實用主義的の潮流を產み出した。實用主義は、經驗批判主義の懷にあつて、永い間、表面下に準備されつゝあつたものである。——以下順を逐うて此等の各主潮を瞥見して行かう。

第一項、新カント學派

現代の認識理論的思惟の中で、最も偉大なる思潮は、新カント學派である。現世紀初頭の蓊鬱たる哲學的要求の覺醒を率ゐ、現代哲學の中堅となつた功績は、つとに此の學派の擔に委せらる可き所である。けれどもまた近來其の理論の普遍的妥當の要求は、例へば現象學の主張者の如きに依つて、多分に動搖に置かれてゐる事も事實である。蓋し、新カント學派もまた、自然主義的時代の出產である。從つて此の學派は、極言するならば十分なる思惟の自由を疑はせるほどに、嚴密科學の根本概念と關係づけられてゐる。即ち、彼等は、大體に於いて、嚴密科學、數學物理學から出發する。そして、彼等は、カント其の人が爲た樣に、この物理學の成立如何をば問はず、ただこれを一の事實として受け取る。新カント學派は、カントを以て哲學の完成者と見ないまでも、哲學展開の新方向を規定する者と見て、彼に依つて示唆された所への完成の路を進まうとする。けれども、この新カント學派そのものも、個々の方面に於いては、また更に幾つかの分派となつて現れてゐる。然かも其の諸派は既に本質的の點に於いて、相互に一致する事が出來ない。例ば、既に、數年の論爭にも拘らず、カント自身の見解が何であつたかに就いてさへも、彼等は一致する事が出來なかつた。そして批判主義は如何なる方向に於いて展開すべきであるかに就いては、今や容易に一致し難いものがあるであらう。百年前のあの浪曼的理想主義の思想が、ただ自らカントの哲學たらんとして、然かも尙ほカントを超出せんとする哲學的生產力の偉大さを展開してゐたのに比して、近代の新カント主義は、餘りに狹くカントの述作に執着するものではないであらうか。エステルライヒの謂ふ樣に、今すこし年代を經て後、より大きい時間的距離を置いて眺めるならば、現代の新批判主義運動は、十

八世紀のライプニッツ・ヴォルフ哲學に比す可き、十九世紀末の史的教養と見えないであらうか。より多分の、天才的創造乃至跳躍の力が欲ましくはないであらうか。けれども、他面に於いては、斯る事實は、此の學派の餘りに强き學的良心、餘りに精細なる學問顧慮を證するものであつて、此の方途に於いて克ち得たる彼等の偉業に對して、現代の心は、永遠の桂冠を捧げなければならない。

實在に關して、古い素朴的實在論が考へるが如くに理解する事は出來ないと言ふ確信、從つて、例へば、色彩と音響の世界は、吾々が聞き且つ見るがまゝに、認識主觀から獨立に存在するものではないと云ふ確信は、總ての新カント學派に共通なる所である。けれど、斯樣な見解は、必ずしも新カント學派のみの確信ではない。此の見解が、恒にカントの祖述にのみ俟つと言ひ得ないのは明らかである。寧ろ、ヒューム、ロック、デカルト、ガリレイにまで溯つて、斯の確信の跡を辿る事が出來る。唯だカトンの天才が、異常なる深さを以つて、此の確信を基礎づけた事は明らかである。新カント學派に共通なる第二の見解は、自然は、吾々の感能的知覺の內容そのものではなくて、全く、思惟の產出であると言ふ確信である。即ち、自然は、始めから存在する絕對者ではない。悟性の先天性の基礎の上に於いて可能となる所の經驗對象の全體である。此の見解に關する體系的組織的の論證によつて、カント學派は、決定的の功績を克ち獲た。(特にマールブルヒ派バーデン派參照)。更に、カント學派のすべての思潮は、斯る自然の成立(構成)に際しては、先天的契機が、決定的の役目をつとめると言ふ事を、主張する。然るに、斯る先天性の本質を把握する事に於いては異別なる諸派は、互に遠く乖離する。更に一歩を進めて、先天性の承認を以つて、獨斷的なりと看る者は、やがて本來の新カント學派から離れて行かうとする。(乃ち批判的實在論が生れる)。

(其の一) 心理主義

由來、カントに就いては、心理學的の解釋が存在した。感官による世界形象の規定を說くヘルムホルツ流の舊い考へ方は、現代に於いては殆んど見當らない。けれども、先天性の生得說は今尙片影を留めてゐる。吾々の心に、或る生得の機能が具備されてゐて、世界形象の構成には、必ず此の機能の參與があり、從つて逆に吾々の世界理解から斯る生得的機能を切り離す事は出來ないと云ふ考へ方である。例へば、ジムメルの如きも、より多く純粹論理的の考へ方を保持してゐるとは雖も、尙ほ意識的に此の考へ方に屢々表現を與へてゐる事は、拒むを得ない。

彼は、此の心理學的解釋を、殊に精神科學の認識理論に使用してゐる。けれど此の方面に於て一層顯著なるものは、尚ほフリース流の心理主義に依倚して、カントの純粹心理學的解釋を取る者に、G. Hessenberg　L. Nelson　等がある（フリース學派）。彼等に於ける先天性の承認は、心理學的である。先天性は、心理學的分析、內的省察、一種の內的實驗によつて見出されなければならない所の事實である。構成的先天的命題は、自己省察（內的經驗）によつて意識に齎さるべきであると說かれる。けれども此の場合に意味せられる所は、或る命題に於ける自明的判斷と云ふ事か――若くは、吾人の思惟は對象たる自然の構成に當つては既定の原理に基づくものであると言ふ單なる事實的證明かにすぎない。第一の場合、例へば、因果律の如きが、矛盾律の樣に自明的の命題であると言ふ考へ方は、既にカントによつて排除されてゐる。第二の場合は、ただ一人一人の事實的處置を確定するにすぎないであらう。其處には、先天性本來の面目たる可きその權利問題は確保されてゐない。斯くて、其他の新カント學派は、原理上、先天性の心理的理解（心理主義）を捨てて、論理的解釋（論理主義）を以つてカントに對する唯一正當なる理解であると考へる。

（其の二）マールブルヒ派

此の方向の徹底成的遂は、先づ、マールブルヒ學派の建設者Hermann Cohen（一八四二――一九一八）に於いて見出される。現存の人々ヽ中で、此の考へ方の最も主要なる代表者は、彼の弟子たる Paul Natorp と Ernst Cassirer とである。其他に、此ヽ學派に數へらる可きや若くは夫れに近き者には、Rudolf Stammler, Franz Staudinger, Karl Vorländer, August Stadler, Kurd Lasswitz, 更に Albert Görland, A. Liebert, W. Kinkel, B. Kellermann, A. Buchenau, O. Buek, G. Falter, D. Gawronski, H. Heimsoeth 等がある。マールブルヒ學派は、大體に於いて、心理的の認識作用に執着する事なく、理論的物理學に見える樣な、客觀的の嚴密科學から出發して、純粹論理的に處置しやうとする。

コーヘンは、純粹認識の論理學と、純粹意志の倫理學と、純粹感情の美學とによつて、人間意識乃至文化に關する方法的理想主義の體系を構成する。眞の實在は、純粹思惟の生産に外ならない。從つて、思惟は、其の根原を、何らかの所與に、即ち自己以外の何物かに於いて有つ事は出來な　。哲學は、されば、直觀を以つて始む可きにあらで、純粹思惟、即ち先驗的論理學

を以つて出發すべきである。蓋し其の論理學　思惟は、自己生產的なる學い思惟である。論理學は、根原の論理學であつて、此の根原は、すべての純粹認識の演繹の根元である。而して、思惟の、從つて實在の根本形式は、概念に非ずして、判斷である。判斷は、範疇となつて具現する。これは、純粹認識若くは對象の法則（卽ち實在の諸形式）に應ずるものであつて、此の純粹認識の種類乃至方向から演繹される。斯くて、コーヘンは、次の如く判斷を分類する。

一、思惟法則の判斷、イ根原　ロ同一　ハ、矛盾の各判斷

二、數學の判斷　イ實在　ロ多、ハ全の各判斷

三、數學的自然科學の判斷　イ實體、ロ法則　ハ概念の各判斷

四、方法の判斷　イ可能性、ロ現實性、ハ必然性の各判斷

斯の如き方法的据礎の上に立つて、彼の哲學は、異常の論理的精密さを以つて展開する。以上から看取し得る樣に、彼の哲學に於いては、數學の、若くは數學的自然科學の論理學たるの風說が顯かである。マールブルヒ學派が一般に、嚴密に「學」として理解するものは、根底に於いて、たゞ嚴密自然科學卽ち物理學である。爾餘の諸科學は、カントに於いての樣に、また此の學派に於いても、認識理論の遂究のためには、重要なる考察を要求し得ない。夫れらは、物理學の理想的完成に際しては、寧ろ其の獨立を失ふであらう所の不完全認識である。同時に、物理學の論理的構造は、解剖せられ闡明せらる可きであるけれども、併乍ら、其の對象たる世界形象が如何にして把握せられるかと言ふ樣な問題は、無意味である。存在は思惟に外ならない。是を以つて、感覺經驗の如きは、認識論上、原理的に拒排さる可きである。實際に、感覺的經驗からは、コーヘンに依つて明瞭に、認識の正しい源泉たるの性格は、除外されてゐる。其の必然の歸結として、實在の概念は、改造されなければならない。何物かゞ直接に知覺的に經驗されると云ふことで、何らかの事實に、實在としての性格が與へられるのではなくて、寧ろ思惟的に、（數學的に）、夫れが零以上の或る量を擧示するといふ事に依るのである。然かも、コーヘンは、實在に數ふるに、只に正數のみではなく、また負數、虛數をも之に數へる。斯くて、實在的の量と、數學的の量との別は、一般に止揚される。

勿論ナトルプの立場もまた先驗主義である。けれど、ここでは、論理學（認識批判）は、因果關係に從つて現象の時間的秩序を規定する自然科學の如くではなしに、全く認識と其の條件の統一を目指すものである。論理的數學的法則のみが最高の妥當性を有する。唯だ、認識批判の道程に於いてのみ、卽ち、數、時間、場所、量、物、原因等の範疇的根本規定の下に從屬させる事

によつてのみ「事實」の認識的結合が成立する。極言するならば、斯くてこそ、此の結合の法則性、從つて自然の認識が成立する。此の際、認識は、無限の過程、論理的課題として理解されなければならない。蓋し、事實の規定は、恒に只近似値を與へ得るのみである。斯くて、自然科學の任務は、無規定態を愈々思惟の限界内に包攝してゆく事である。されば、また、對象は、學的認識にとつては、恒に無限の課題として留る。論理學の最後の根底、其の出發點は、コーヘンの所謂「根原」の原理である。同時に、思惟の前進の可能性は、茲に基づいてゐる。論理的思惟の源本作用は、概念的創造である。斯くて、嚴密科學の論理的構成が行はれる。先づ數學に於いて、次に數學的物理學に於いて、各種の論理的純粹規定が與へられる。カッシラーに於いても、また、理論哲學は、數學並に數學的物理學との緊密なる關係に置かれてゐる。

然し乍ら、ナトルプに於いては、彼の一般心理學は、斯る學の論理的根礎を闡明するものである。夫れは、心理學の對象(問題)と方法とを論ずる限りに於いて、心理學の哲學である。卽ちナトルプ(並にカッシラー)にあつては、原理的には、先天性の純粹論理的解釋に固執するにも拘らず、既に其の理論には、心理學的要素の潛入を認めざるを得ない。蓋し、彼が、常に同時に判斷を包有する所の知覺が、思惟規定であると言ふ事を强調するならば、夫れは心理學的契機の受用に外ならない。總ての現實は、思惟內容であり、斯るものとして量質關係の根本範疇に從屬するであらう。勿論、ナトルプに於いても、實在概念は知覺から離されるけれど、それは稍コーヘンに於けるよりは異つた仕方に於いてである。認識意味に於ける事實とは、ナトルプにとつては、完成的に思惟せられたる嚴密なる自然形象の中に、構成要素(ベスタンドタイル)として包有されてゐるであらう所の、或る物」にして甫めて然りである。けれど認識は、永遠の過程である。夫れは無終結である。それ故に、「事實」は認識の目標であるにすぎない。取つて以つて證明し得るが如くに、既に存在する所のものではない。蓋し、自然認識は無終結であり、對象は永久の課題であるからである。けれども承認せらる可き世界形象は、自然因果的、合法則的のものでなければならない。學的處置は、斯る世界形象を構成する所に存立する。卽ち、感覺の材料が、或る仕方で知性的に訂正組織されると言ふ事——斯樣な補充物を除去する事によつて、結局因果的に完結した合法則的の世界形象が成立するといふ事、茲に「學」の處置を見なければならない。其他のものはすべて前程段階にすぎない。知覺が思惟規定であると言ふナトルプの言ひ方は、此の意味に

於いて理解されなければならない。即ち、心理學は、認識の獨立性を有せず、夫れはたゞ前程段階にすぎない。けれど斯樣に論ずる所に、いはゞ、彼は論理的の分析から、尠くとも一と度びは、認識の構成的心理學へと進んだものと言つて宜いであらう。そして其處からこそ、彼の「心理學の哲學」が成立した。カッシラーに於いても、マールブルヒ學派は一段の展開を遂げつゝある。彼もまた、知覺の承認を以つて、實在性——客觀性の最後の準矩とする事は出來ない。たゞ自然科學的論理的關係において妥當なるもののみが客觀的である。意識內に直接與へられるものが夫れではない。それ故に、彼は、その成立の確實さに從つて、客觀性の段階をさへも假定しやうとする。

斯くて、マールブルヒ學派の理解に從へば、世界は純論理的の形成態である。質量、物質、エーテル、力、原子等總ての自然科學的概念は、決して、感官に依つて不十分に知覺される所の、吾々から獨立に自存する所の、實在の思考的再現ではなくて、全く、現象の混雜の中に何らかの秩序を齎すための、——斯くて結局、因果的に完結的の且つ數學的型式に於いて規定され得る樣な世界形象に到達せんがための、構成の手段である。單なる意識內容の知覺的確定は、本來「學」ではない。自然は、純論理的構成態であり、從つて、斯るものとしては、何處までも思惟的分析に堪へ得るものでなければならない。斯くて、素朴的なる知覺をば、一般に、認識理論の考察から排除せんとする傾向は、同時に、感能知覺の背後に自存して、知覺の中に現象する所の物自體と云ふが如き客觀的世界の存立を排斥する。一方には、唯だ感覺的現象の混雜があり、他方には、自然の論理的構成態があるのみである。客觀的なるものは、たゞ、後者の(其の理想的完成にお ての)成分のみである。斯る世界形象の中に、自己に相應する契機が現れてゐると言ふ事に外ならない。

此の認識論的方法が、論理學の上に齎らされて、批判的の論理學をば、積極的の內容を以て滿した事は、(その事は現代の論理學に屢々缺けてゐる事だが)、コーヘン並にナトルプの功績でなければならない。且つ、認識論が存在(實在)の論理的條件を討究する樣に、倫理學が當爲の條件を闡明する。乃ち、純粹思惟の論理學が、數學の基礎の上に立つ樣に、純粹意志の倫理學は、精神科學の數學としての法理哲學の上に立ち、斯くて、倫理學は、法律及び國家哲學の原理論となつて、其の局、此の學派が、獨逸社會主義の哲學的代表者となり得る事は、特に彼等に歷史的の意義を與へるものでなければならない。然し乍ら、此の際、社會主義は、唯物論的幸福主義の水準以上に、遙かに高められて、義務の概念や、人格の概念が、其の中心に立つて

ゐるゐ。此の學派から出でて、殊に社會哲學、法律哲學の方面に向ふものに、ルドルフ・シュタムラーの努力が有る事を看過してはならない。

（其の三）バーデン派（西南獨逸學派）

或る範圍に於いて、マールブルヒ學派と親近なる論理主義的態度を取るものに、バーデン學派即ち所謂西南獨逸學派がある。現代に於ける恐くは最大なる哲學史家、Wilhelm Windelband（一八四八――一九一五）に依つて其の基石を置かれ、現代に於ける歴史哲學の權威 Heinrich Rickert に依つて愈々展開せられつゝある新カント學派である。悼む可き Emil Lask もリッケルトの弟子であつた。Jonas Cohn の歩程も、此の學派と携伴せんとしてゐる。『カントスツヂエン』と並んで哲學雜誌界の權威、『ロゴス』誌は、多分に此の學派の傾向を代表するものであつて、Richard Kroner と Georg Mehlis とが編輯の任に當つてゐる。尙ほ、玆には、F. Kuntze, H. Leser, Bruno Bauch, Edmund König 等も此の學派に近きものとして數へ得るであらう。

ヰンデルバントもまた、カントの批判哲學の徹底から出發する。けれど、彼に於いては、カントを理解する事は、カントを超越することである。斯くて、彼もまた、物自體の考へを排棄する。從つて、認識とは、吾々から獨自に存在する所の實在の捕獲ではない。知識の根柢は、全然思惟の要求に置かれる。けれど、客觀性の解釋に關しては、マールブルヒ學派の理解とは異つてゐる。由來、ヰンデルバントに從へば、哲學とは、普遍妥當的價値の批判的學である。即ち、思惟に於ける眞理、意志行爲に於ける善、情に於ける美の、價値の體系である。而して、眞理のためには、先づ規範意識を假定しなければならない。此の規範意識に立つて、價値の概念に訴へて、思惟の客觀性の準矩が獲られる。正しい思惟とは、規範的なるものであり、思惟の規範に背馳するものは、誤れる思惟である。蓋し、行爲に關して絕對的の當爲の規範が存するが如くに、思惟にとつてもまた斯樣な規範がある。眞理の規範意識を認めずしては、苟くも知識を論ずる事は不可能である。カントが「規則」と呼んだ所の此の絕對の規範に應ずる所の思惟を吾人は正しいと言ひ、これに背馳する所のものを、誤れると呼ぶのである。それ故に、例へば、物自體の如き客觀的實在と一致すると云ふ所に眞理性を認めんとする所謂模寫說の考方は問題にならない。斯樣な、謂はゞ意識の領土を超えた實在を、豫め假定する事は、本末を誤るものである。知識が實在に合致する事に依つて眞理となると言ふ

前に、先づ實在のあるといふ事が眞理でなければならない。斯くて、普遍妥當的知識は、模寫說の說くが如きに非らずして、普遍的なる規範意識によつて經驗內容を構成する事による。存在の前に價値がある。而して、此の規範の組織を明らかにする事が認識論の任務であり、その目的は普遍妥當的の思惟である。されば、彼の認識論は、フイヒテに於いての樣に、知識の根柢に實踐理性的意志的要素を認むる限りに於いて、目的論的結構を示してゐる。偖て、現實の中には、合規範的思惟と反規範的思惟とが入り亂れてゐる。宛かも、善行と然らざるものと、美と美ならざるものとが混じてゐる樣に。此の間に立つて、實證科學は、規範の問題に無關心に、ひたすら個々實在の確證に急ぐに反して、哲學は、まさに、あらゆる領域に於いて先天的規範の探求を志ざし、價値の認識へと赴く。哲學は實に價値論である。斯る純粹價値の形式的學問は、論理學、倫理學、美學となり、其の內容は、歷史的に展開する。

此の思想に追從して、更に一步を進めたものはリツケルトである。彼は、個人的主觀的價値判斷より遙かに高められて、超個人的絕對的價値を論ずる。彼は先驗的意識を說く。即ち、總ての存在は、意識に於ける存在であると言ふ。此處に意識とは、勿論個人的のものでになくて、超個人的普遍的のものである。意識一般である。先驗的問題の關する所は、個人的意識ではなくて、たゞ此の意識一般である。凡そ、個人的意識の彼岸に、個人的意識を超えて、何らか存在のある事は自明である。けれども、意識一般の彼岸の存在とは、排棄せらる可き考へでなくてはならない。意識一般とは、個人的意識の總和ではない。けれどそれは概念であるのみでなく、また現實である。そして此の意識一般に對して意識內容一般があるのである。而して、此の意識內容一般も、判斷意識一般に依つて肯定せられたる內容である。斯くて判斷が、認識の基礎である。即ち、認識とは、價値に即しての是認若くは拒絕である。而して、是認せらる可きものは、超個人的無制約的命令として現れる不許不（當爲）に基く所の要求による。斯くて、倫理的概念たる良心並に義務の概念は、また純粹理論的處置の窮極の根帶となる。斯くて、論理的判斷に於いては、其處に是認せられたるものの超時間的妥當の確信が引き入れられる。——文化科學と自然科學の別、歷史哲學の展開。此等の方面に於ける、リツケルトの勞作は、特に吾々の關心を要求する。後段に於いて、多少なりとも、此の方面を覗ふの機會があらう。——尙ほ、論理態の價値的性格に關しては、ミユンスターベルヒ Münsterberg（一八六三——一九一九）も是を主張した。彼もまた、キンデルバント・リツケルト・メディクス、オイケン等と共に、

新フイヒテ主義と呼ばれ得るであらう。

（其の四）實在論的批判主義乃至批判的實在論

上述新カント主義の二大思潮は、孰れも物自體の考へを棄てて、從つて、眞理てふ概念の全き改造に到達するものであるが、玆に、此等の反實在論的思潮と並んで、同じく新カント主義中に數へらる可きものにして、實在論的傾向を取る人々がある。彼等は、カント自らが屢々然うであつた樣に、物自體の假定を承認し、從つて、尠くとも或る限界內に於いて、客觀物を知性的に把握する事を以つて認識の眞理であると主張する。此の謂はゞ實證主義的理解のもとに、感覺論的に認識理論を說く者に、Ernst Laas（エルンスト・ラース）及び Alois Riehl（アロアス・リール）がある。就中、所謂（學派と云ふ程ではないが）實在論的批判主義若くは批判主義的實在論の主要なる代表者は、リールである。彼に從へば、哲學は、世界觀學說ではなくて、認識の批判でなければならない。此の場合、認識は、感覺なる根本事實から出發する。經驗の限界を超出するが如き形而上學は、非學的である。とは言へ、認識は簡單に吾人の感覺知覺の成果ではない。其處には、感性的知覺と同樣に、また思惟が重要なる認識構成の契機である。素朴的なる感官印象の推敲を通して、そこに始めて本來の知覺が成立するのである。蓋し、知覺は、論理的には、單なる感官印象以上のものを包有するからである。かくて、經驗は、或る先天的の原理——物質恒存の原理とか絕對因果性の原理とかの如き——の規矩に從つて成立する。斯る原理は、先天的であり經驗からは獨立なる性格を有するもので、寧ろ總ての經驗に對して、規制的構成的の意義を有つてゐる。逆に、經驗は、其の統制のもとに從つて、甫めて思考的に構成されるのであるから、決して兩者の間に矛盾の存する事は有り得ない。而して斯る原理は、嚴密科學の論理的分析に依つて明らかにされる。從て、感能的感覺が、認識成立の出發點と爲り得るのは、それが、主觀から獨自に存在する處の客觀的實在の標號であるが故である。リールは、マールブルヒ學派とは全く反對に、自然の思考的構成も、純思惟的のものではなくて、客觀的實在の思考的再現であると考へる。けれども、物自體の質は、是を直接知覺する事は出來ない。時間が客觀的妥當性を有しない限り、心的體驗は、全く現象に限られてゐる。客觀的意義を有するものは、唯だ、吾々の知覺の數學的及び論理的內實のみである。——批判的形而上學を取る Johannes Volkelt（ヨハンネス・フォルケルト）もまた、感官印象が、因果性必然性普遍性法則性等の先天的範疇によつて作用される事を强調してゐる。

リールやフォルケルトが新カント派に數へられるならば、以下に擧ぐるが如き、實在論的の立場を取る一團の思想家も、また此處に列す可きであらう。彼等は、狹義の新カント學派の固執する先天的命題を以つて、大部分、唯だ獨斷的の假定に過ぎずと考へて、此の先天的要素を強く排除し、斯くする事に依つて、眞に獨斷論から離絶すると考へる。其の限りに於いて、明らかに、狹義の新カント學派からは區別される。就中、彼等は、認識に關して、再び知覺の意義を承認し、そして通常の實在概念の代りに（狹義の新カント派の如くに）全く異つた實在概念を定立することを斷念する。然し乍ら、學的實在は、知覺の基礎の上に、悟性に依つて甫めて構成されると考へる點に於いて、彼等は、正當に、新カント主義に合す可きものである。彼等は總括して、批判的實在論と呼ばれ得るであらう。偖て、此の方面の最も廣汎なる成果を、人々は、Oswald Külpe（一八六二——一九一六）に於いて期待してゐた。彼は、實驗的心理學から出發して、學的基礎の上に立つ實在論的形而上學に進む。けれど、彼は、唯だ、他學派の認識論、特にマールブルヒ學派に就いての、精細な鋭い批評を發表しただけで終つて了つた。更に計畫されてゐた廣汎なる制作 Die Realisierung. Ein Beitrag zur Grundlegung der Realwissenschaften（三卷）のうちわづかに第一卷が最近に現れてゐる。批判的實在論を實證的に基礎附けやうとする者に、また Erich Becher が居る。彼の哲學も、眞理といふ視點に立つ所の智識學であるが、彼は寧ろ自然哲學から出でて、生活論に傾いてゐる。彼は、極めて愼重に考へる。けれど結局、多くの問題に於いて、窮極の決定が與へられてゐない。例へば、客觀世界は感官世界と質的類似を有するか否か、實在は全くユークリッドの自然であるか否か、實在は嚴密に法則的であるか否か、等の問題は決局答へられざるがまゝに殘されてゐる。また、一方に、彼は、實體や因果性の理念を固執し、また空間的時間的性質に類比な屬性を、物に賦與しやうと考へてゐる。更に、多少とも批判的實在論の立場に在る者の中から、次の名前が擧げられるであらう。Meinong, Stumpf, Dürr, Messer, Störring, Frischeisen-Köhler, Österreich 等。（此等の人々に就いては後段參照）。此の實在論的の思潮は、認識論上、本來の新カント派以外に、可なり注目す可きものであらう。

（其の五）獨逸以外の新批判主義

カント哲學を祖述せんとする傾向、廣義の新カント主義は、獨逸にのみ限られた思潮ではない。強い哲學的要求の支配する

所には、必ずや此の種の運動が現れてゐる。――佛蘭西に於いては、特に Charles Renouvier（一八一五――一九〇三）が擧げられる。彼はカントの先驗主義とヒュームの現象主義との結合から出發する。彼は、物自體、實體、現實的無限等を拒斥するけれども、また、自由即ち新たなる開始の可能性に、經驗的世界に於いてさへも、一つの場所を與へる。（形而上學の項參照）Jules Lachelier もカントの源を汲んで、觀念論的の形而上學に赴く。更に、E. Boutroux は、實踐的基礎に立つ自由の形而上學を建てる。また偶然性の問題が論ぜられる。けれども、佛國に於いては、特に批判的實在論は、科學者たると同時に認識論者たる二人の代表者を有つてゐる。即ち、物理學者 P. Duhem（一八六一――一九一六）と Henri Poincaré（一八五三――一九一二）とである。彼等もまたカントの研究を通して來たのであつて、科學的自然形象の構成に於ける、思惟要素の意義を強く認めてゐる。けれど、彼等は、同時に、物理學的研究に於いて實際上の經驗を經て來た物理學者として、感官知覺の意義を排除しはしない。物理學的原則に、先天的性格を認容する所の獨逸の新カント學派と異つて、ポアンカレは、斯る見所を棄てて、此の種の原則をば任意なるものと考へる。夫れ等はまた他のものに依つて置き換へられるであらう。學的命題はすべて、コンヴエンシオンであり、慣說であると考へる。併乍ら、「事實」は、決して、思惟によつて初めて創造されるものではない。思惟は唯だ直接の知覺經驗の推敲を意味するに過ぎない。――英國に於いては、E. Caird（一八三五――一九〇八）の外に、Green 一派の批判的理想主義がある。――伊太利に於いては、Cantoni（一八四〇――一九〇六）は、三卷より成るカント哲學の論述を書き、また批判主義的精神に於いて、Rivista filosofica を主宰した。F. Tocco（一八四五――一九一一）は、またコーヘンに就いて書いてゐる。――露西亞に於いては、マールブルヒ學派、更に一層、バーデン學派の影響が見られる。Sergei Jul. Trubetzkoi（一九〇五死）並に Alex. Wwedenskij（一九一八死）の名前を擧げうるであらう。――北他スカンヂナヴィヤ諸國、和蘭、白耳義、西班牙等に於いても、新カント學派の存在を見る事が出來る。

第二項　經驗批判主義

十九世紀の末頃から、現代認識理論の第二の大きい思潮が芽生えて來た。即ち、實證論的なる經驗批判主義の思潮である。經驗をば能ふ限り純粹なるものとし、經驗に纏綿してゐる形而上學的の理念から、經驗を解放しやうとする。斯くて純粹なる經

驗こそ實在そのものである。此の思潮もまた自然主義的時代の出產でなければならない。從つて、其の影響は、本來哲學の內部に於いてよりも、嚴密自然科學の領土に於いて力強く働いてゐた。既に、Richard Avenarius（一八四三——九六）は、銳い考察を以つて、經驗批判主義若くは純粹經驗の哲學を說いた。けれど、彼の所說と多分の類似を佔有するにも拘らず、彼からは獨立に、此の方向に於いて一層の展開を果したものは、墺太利の Ernst Mach（一八三八——一九一六）である。彼はまた物自體を排拒する。けれども、新カント派に反對して、彼は、重點を、全く知覺經驗の側に置く。茲に經驗と言ふ。けれどもそれは、所謂知覺事實の如き、形而上學的理念の抱合によつて濁らされてゐるものではなくて、全く純粹の經驗でなければならない。斯くて、斯る形而上學的附加物を排除し盡した成果として、マッハは、總ての實在は全く感覺から成立する事を洞察する。例へば、物質の如きも、感覺の或る法則的結合に外ならない。感覺的ならざるものの如くに意識に現れる所の總ては、要するに、未だ十分に分析せられざるに過ぎない。學の任務は、此の經驗の根本條件と、相互の從屬關係を明らかにし、此れを方法論的關係に齎らして、學的命題に構成する事に存する。從て、感覺經驗の背後に、實體の存在を假定する事が、全然不要であると同樣に、諸過程の內的連結としての因果性の假定は、不必要なる思考的の附加物にすぎない。斯くの如き、形而上學的色彩を荷ふ因果性の把住は、形而上學的理念から自由な——單に量の從屬關係を云ふに留まる所の——數學的の函數概念によつて置き換へらる可きである。實在は總て感覺から成立するのであるから、此の立場にとつては、物理學と心理學との區別は、最早、對象の區別ではあり得ない。唯だ其の處置の仕方の區別にすぎない。蓋し、所謂物理學的對象と等しく、すべての感情、思考、意志作用等もまた感覺によつて成立するが故に、對象上の區別は存立し得ないのである。從て、此等のものが、一つの或る感覺複合態、いはゞ有機態への、從屬關係に於いて、考察されるならば、そこには心理學が成立する。此れに反して、それ等が斯る從屬關係から全く離されて、單にそれ等相互の關係に於いて考察されるならば、物理學が成立する。次に、かの物理學者 Kirchhoff 等の古い實證主義が、世界の十全なる記述を以つて、學の任務としたのに反して、此の新しい實證主義は、これを生物學的の觀點のもとに考察して、學とは生存競爭に於ける個體保存のための手段であると見る。是には、進化論の決定的影響を認めざるを得ない。即ち、一言に云へば、學は思惟の經濟に基づくものであつて、學の用は、經驗の節用

にある。マッハの哲學上の影響は、殊に墺太利並に獨逸に於いて著しい。即ち、Richard Wahle, A. Stöhr, Heinrich Gomperz Hans Cornelius, H. Kleinpeter 等。――獨逸に於いては、Theodor Ziehen は、經驗主義の最も意味ある代表者である。彼もまた、智識理論の圏内から、能ふ限り形而上學的の要素を排拒せんと努め、マッハと似て、全實在は全く感覺と表象とに分解する事が出來ると信じてゐる。斯くて彼の認識論は、感覺主義である。――廣義の獨逸哲學に於いて、マッハとアヴェナリウスが、類似の思想に到達したときに、米國に於いては、Perry, Holt, Pitkin, Montague, Spaulding, Marvin 等の協力によつて、一九一二年、新實在論の提唱が宣せられた。それは、マッハ一派の經驗批判主義に、殆んど一致するものであるが、またジェームス、ラッセル、G. E. Moore 等の思想にも近づいてゐる。此の新實在論の建設者は、J. E. Woodbridge である。Ev. Br. MacGilvary は、更に一層の展開を遂げた。――伊太利の Enriquez も類似の思想を抱懷してゐる。

第三項　實用主義

現代の新しい實證論的な認識理論からの、一つの全く特殊なる變形は、實用主義である。夫れは、謂はゞダーウイニズムの認識論と云ひ得るであらう。從つて、本來、此の思潮は、既に夙に自然主義時代に於いて現る可きものであつたかも知れない。けれども、前世紀の第二半部に於ける自然主義的ダーウイニズム的思潮の内部には、哲學に對する寧ろ大なる無關心があつた。從つて其處には大なる哲學的の成果は生れない。假令一方に、多くの眞摯なる思想家が、靜に思惟の道程に穿入してゐたとしても、彼等の思想が眞に力を獲るがためには、哲學的要求そのものの大なる覺醒の時代を待たなければならなかつたのである。ダーウイニズムの如く、實用主義もまた謂はゞ國際的の思潮である。勿論、全く實用主義的なる生活背景を有する米合衆國が、優越的の勢力を以つて此の思潮を開拓したとは雖も、既に夙に、此の方面に出づ可き決定的の思考が、獨逸の三人の思想家によつて起草されてゐた。然かも彼等の思想は、相互からは全く獨立に、各々獨自の展開を遂げたものである。即ち先づ擧げらる可きものは、Hans Vaihinger の理論的實踐「Fiction」の體系としての「かの樣に」の哲學である。彼は、眞の認識とは實在の映寫であると言ふ見解を、必ずしも斥けはしない。けれど斯る見解は論理的に是を支持する事は出來ない。寧ろ人間の認識は、一般に、眞の實在には到達しないと考へられる。けれど吾人が眞理と云ふ可きものの驗證は、是を、實踐的

實驗に俟つ可きである。認識は、實踐的の價値を有する事、夫れが總てである。人間は、生命的に、自己保存の目的のために、世界についての表象を作る。夫れが所謂眞實であるか否かは問はない。學的討究に缺く可からざる、原子無限自由物自體絕對等の學的概念は、寧しろ內部的の矛盾背反に滿ちて居る。從つて夫れは嚴正理論的に眞實である事は出來ない。けれども、夫れは「フイクション」である。フイクションとしては、思惟の領域における補助概念として、實踐的に、人間の生命そのものに關して意義を有つ。フイクションは、全く自ら理論的に眞理たるの要求は有たない、けれど、實踐的使用の要求を有し、その限りに於いて價値あり、それ故にこそ正當に支持されなければならない。吾々の表象構成態たる世界は、フイクションの錯綜である。論理的矛盾には充ちてゐやう。けれど寧ろ、眞理とは、斯る誤謬の最も目的に適へるものである。吾々の全生命は、實に、此のフイクションの上に支持せられ展開されるのである。次にニイチエに於いて、吾々は是に親近なる思想を見出す。彼の思想は、あくまで人間的である。餘りに人間的である。誤謬は人生に必然である。學的命題はすべて統制的なるフイクションである。必然なる誤謬そのもので宜しい。彼は、斯る思想こそ、カントの歸結する所でなくてはならないと考へる。最後に、Georg Simmel（ゲオルグ・ジムメル）（一八五八——一九一八）は、是に、陶汰の思想を附加する。生物學的な陶汰の成果こそ眞理である。種族保存のための合目的性、それが眞理性である。——此等の考へ方は、通常の絕對的意味での眞僞の概念に對して、修正乃至改造の意を表明し乍らも、尙ほ之が徹底的改造を遂げてゐない。彼等の弱點と言ひ得るであらう。此等の思想は、嚴密を好む獨逸精神に於いては、直ちに多くの追從者を有つ事は出來なかつた。一九〇〇年以後、類似の思想の流れが、米大陸から歐洲へと動いて來た時に、漸くそれは蘇つて來る。

米國に於いて、プラグマチズム（實用主義）の名は、（一八七八年）Charles Sanders Peirce（チャールス・サンダース・ペーヤス）（一八三九——一九一四）に淵源する。けれどその最廣汎なる展開は、William James（ヰリヤム・ジェームス）（一八四二——一九一〇）に俟たなければならない。實用主義は、時として、人本主義、個人的理想主義、便利主義また多元論の名に呼ばれる。それは、先天性並に純粹論理を排する所の激しい經驗主義である。知性主義に對して、意志論的である。實在を自己の中に見出す所の人間中心主義である。實用主義は、體系であるよりも寧ろ方法である。凡そ人々は、統一的なる意識を、實踐的部分と理論的部分とに分裂してはならない。生命は完きものである。そして眞理とは、生命に價値あると言ふ事であ

る。凡そ、人々は意志に從つて行爲する。人間の行爲なるものは、或る意味に於いては永久の不思議である。けれどもそれは生命の秘密を開く唯一の鍵鑰である。さればこそ、判斷・認識は、實踐的意義において理解されなければならない。判斷の眞理は、その實踐的歸結乃至効果に應じて計られなければならない。役立つ所の行爲を保證し、生命の滿足を確保せしむるものは眞である。從つて、眞理は主觀的であり、眞理は流れる。知識するとは、目的に適ふ樣に體驗を整頓する事である。理論(セオリー)は精神的活動の進展の道具である。例へば、神の概念は可なり眞である。蓋し、神の信仰は、之を有する人の生命に於いて、無神論者が破滅に脅かされるが如き位置に於いても、內的堅實なる把住を與へるからである。斯くて、眞理とは、まさしく善の一種である。知的確信の範圍に於いて、或る理由から善として證明せらるる總ては眞である。——實用主義は、また John(ジョン) Dewey(デユイ) の道具主義(インストルメンタリズム)若くは實驗主義となる。眞理とは、知識のよりよき効用のための道具である。彼の哲學は經驗發展の理論、若くは智識獲得の體系である。彼に從へば、先づ無反省的經驗があり、次に反省的の經驗が來り、斯くして吾人の經驗は發展する。現在の經驗狀態が其處に生起した所の矛盾を最早や解釋し得ないときに、此處に反省が起つて、此の矛盾に滿ちた現在を修正する。此の連續が智識獲得の體系である。彼はシカゴ學派を率ゐる。獨逸に生れオックスフォードに教授たる F. C. S. Schiller(シラー) は、歐洲に於ける實用主義の重鎭である。彼は、認識論的に一層の展開を遂げて、人本主義(ヒューマニズム)を說く。即ち、彼は、先天的處置を排拒して、人間經驗の全野から出發する。眞理は、人間の動機並に必要によつて規定される。人間そのものこそ、總てを計る尺度である。尙ほ彼は、眞理の標準として、社會的の効用性を力說する。此の英米流の實用主義は、また、伊太利(殊に Papini(パピニ))並に佛蘭西に影響する。獨逸に於いては、一九〇八年ハイデルベルヒ、並に一九一一年ボローニアの萬國哲學者會議に於ける論爭に見るが如く、寧ろ多くの反對を受けてゐる。W. Jerusalem(イエルサレム) Günther Jacoby(ヤコビイ) 等が多少此の實用主義に近いものと謂ひ得るであらう。

第四項、歷史科學の認識論

自然科學の認識論的構成に向けられた過重の關心、自然科學の偏重、自然科學に依つて制約せられたる經驗論的懷疑論的傾向、それらに對して、理想主義的の反流が、時と共に、水勢を增す。斯くて、此處認識理論の領域に於いて、現代が產み出したる主要なる事業は、精神科學の認識論の建設である。けれど其處に

は未だ、全精神科學の全土を覆ふ可き其の認識論たらんがためには、尙ほ未耕の領土が殘されてゐる。斯くて夫れは、自らを制限して、歷史科學の認識論と謂ふ。現代の歷史學の認識論に對して、最初の而して廣汎なる成果を產み、最も主要なる動力を借したものは、優れたる心情と透徹する洞察の所有者 Wilhelm(ヰルヘルム) Dilthey(ディルタイ)(一八三三——一九一一)である。現代哲學に於ける彼の光耀がここに存する。彼は、他の諸學者と異つて、最も傑出せる精神科學の研究者として、就中、歷史研究上の最も豐富なる實際上の智識を携へて、廿世紀の轉向期へと現れて來た。彼もまた、据礎としての形而上學に對する嫌惡を以つて時代の思潮に其の頁を齎したと同時に、けれど、自然科學の獨裁を精神科學的歷史學的研究にも移入せんとする精神の自己侮蔑に誘はれる事なしに、彼は、自らの精神歷史學的勞作に於いても、認識論的勞作に於いても、此等の學の固有の本性と獨立とに對する洞察の眼を蔽らされはしなかつた。精神科學は己れ自らの基礎の上に立たなければならない。自然科學が、唯だ感能的知覺と悟性とを以つて事とするに反して、精神科學の認識に當つては、統一的全體としての人間が活らかなければならない。玆に兩科學の最深の區別がある。即ち、精神科學に於いては、普遍妥當的なる實在認識、價値(規範)規定、目的定立が結合されてゐるが、其の基礎には精神生命の統一的全體若くは組織的構成態がなければならない。それ故に、歷史學の主要なる對象は個性體である。勿論、歷史學は、唯だ人間のみを論ずるのではなくて、また、藝術品記錄等の如き材料的物件も其の考察にはいるけれど、然し乍ら、歷史的世界の決定的要素を構成するものは、恒に個性體であつて、それが始めて客觀的なる文化事實を產み出すのである。偖て吾々は、自然をば說明し得るけれども、これを理解する事は出來ない。精神生命をば吾々は理解する。吾々は、精神的歷史的過程をば、吾々の想像(ファンタジー)の中で追感する事に依つて、是れを內的に理解する事が出來るのに反して、自然的過程は、全く吾人の內的理解を許さず、只吾人がこれを全く悟性的に概念し得るに過ぎない。即ち、自然は、吾々には一般に唯だ現象の形式に於いてのみ與へられて、自然そのものの眞實に於いて與へられはしない。然るに心的なるものは、直接吾人自らの裡に通ずる。吾々が、他人の精神生命を理解し把握する所の機能は、精神的想像である。想像とは、悟性的概念的の思惟過程ではなくて、精神の全側面を要求する所の能作である。從つて、一個性體の固有の生命、體驗が愈々豐富であるにつれて、それ丈けまた、他人の精神的存在を追感的に理解し得る彼の能力もまた從つて增大する。歷史家の任務は、素材的

な生の材料なる事實を、悟性的に規定する事ではなくて、此等の材料に對して、追感的綜合的解釋を施す事にある。此の意味に於いて、眞の精神科學歴史學の追求者の仕事は、藝術家の仕事に、極めて親近である。唯だ前者は、後者に異つて、恒に、過去の現實の解釋へと向ふけれども。ディルタイは多くの追從者を有つてゐる。其處には、M. Frischeisen-Köhler、Misch、Nohl、Spranger 等が擧げられるであらう。

新カント派の中では、特に著しく、バーデン學派が歴史學の認識論的構造の問題を取扱ふ。既にヰンデルバントは、嚴に、自然科學と歴史科學とを峻別する。前者の概念構成が一般化的抽象に基づくに反して、後者は、個性化的事實を論ずる。前者は法則的であり、後者は事象的である。彼の思想を繼承して、現代に於ける最も包括的なる歴史哲學を建設しつゝある者は、リッケルトである。彼もまた、自然科學と文化科學（歴史學）とを、相互に乖離せる全く異る二つの型として峻別する。前者は、無限に多樣なる所與を一般化的に抽象して、概念と法則によつてこれを征服せんとするに對して、後者は、全く個性的なるものに立ち、對象の特性を獲捕する。前者は、現實態の等質的連續に着目し、後者は異質的個性的一回的なる者を看取する。前者の處置は一般化であり、後者の處置は個性化である。而して、バーデン學派は、數學的自然科學者としてのカントの偉大さにより多く親しみつゝあるマルブルヒ學派と異つて、重點を歴史學の上に置く。この事は全く彼等の價値の哲學と結びつくからである。凡そ歴史家は、總ての個性を取扱ふわけではなく、其處には選擇が行はれなければならない。此の選擇の標準となるものは、文化價値である。蓋し文化とは、普遍的價値の體系である。文化價値に關與するもののみが、歴史的事實である。斯くして、正當なる哲學が樹立されなければならない。

同じ傾向から出でて、ラスクもまた、歴史の認識論を——殊にフエヒテの歴史哲學を考察する。けれど、等しく新カント主義の地盤から出で乍ら、全く異る方面から、歴史の認識問題を說く者に、ジムメルがある。彼の研究は、主として、歴史家が見出されたる素材から、如何なる仕方で、所謂歴史なる精神的構成體を作るかと言ふ、其の仕方の研究に關するものである。自然の研究者が、批判主義の理解に從つて、感覺的材料を用ゐて、悟性の根本概念（範疇）の力に依つて、自然てふ思考的構成體を形成するが如くに、所謂歴史てふ精神的構成體の建設に際しても、また、先驗的機能が必要である。即ち、史的先天性の共働を要する。歴史的認識の對象は、人格の表象感情意志であらう。即ち精神的過程の內容的考察であらう。けれど、其處には

先天性の假定を必要とする。歴史は、決して、主觀精神から獨立なる客觀的事實の再建ではない。歴史に於いてもまた、主觀に獨立なる實在を認識に依つて再現的に把握する事を論ぜんとする素朴的なる歴史學の概念は、一般に新カント的の認識論の考へ方に置き換へられなければならない。即ち、認識せられたる物は、認識過程を通して而めて成立するのであつて、認識そのものから獨立に自存するのではない。——歴史學に關するこれらの認識論的研究は、本來、歴史共物を論ずるにあらで、「歴史の學」を論ずる限りに於いて、歴史哲學の一分科として、現代哲學上の新傾向に屬するものである。歴史經過そのものの上に向けられた哲學的考察は、現代に於いて未だ主要なる位置を取らない。（尚ほ此の內容的の歴史哲學に關しては、多少、後段に述べる）。——尚ほ、同時に、歴史の認識論を取扱ふものに、佛蘭西には、Lacombe及び、H. Berr等がある。ルウマニアのXénopolも、傑れたる歴史哲學者である。（一般に歴史哲學に關しては、後段第四章第八項參照。）

附、心理學の瞥見

十九世紀の後半部に於ける反形而上學的傾向は、上述の如く、一面に於いては、哲學的勞作を驅つて、批判主義實證主義經驗主義の認識論に赴かしめたと同時に、他面に於いては、廣義の哲學的諸分科の各々への狹い沈潜の傾向を刺戟したと考へられる。その中、本來の哲學に、より多く、關係づけられんと欲したものは、就中、心理學である。即ち、時としては、心理學を以つて、哲學の基礎學たらしめんとする一種の汎心理主義の成立を見る。時としては、心理學者彼は同時に哲學者であり、哲學者彼は同時に心理學者であつた。然し乍ら、之と同時に、本來の哲學の國土における反心理主義的傾向、論理主義的優越は勿論看過さる可くもない。——次に、現代哲學思潮を理解するに資たる限りにおいて極めて簡單に最近の心理學の一般を瞥見しておかう。

現代に於ける心理學の成果は、哲學における認識論の夫れに比す可く廣汎である。然かも、心理學は、認識論よりも早く、自然主義的時代に於いて既に注目せらる可くあつた。けれど斯くあつた所以は、心理學が寧ろ自然科學たらんと準備したと言ふ內部の變化に負ふものである。即ち、方法としては、內省の代りに、夫れと全く異つた所の實驗的方法を取る。實驗心理學としてこそ、近代の心理學は凱歌を擧げる。これが現代心理學の特性であり強味であるが、また此の事が同時に、哲學から心理學を分離せんとする廣汎なる傾向へと導いて行く。大學は、器械裝置に滿ちた實驗室を心理學のために備ふると同時に、心理學の講座は哲學の講座から殿術に區別されやうとする。

フエヒネルは精神物理學と言つた。抑も實驗心理學は、精神物理的問題を經驗的に解釋すべく成立した。生理學との密接なる關係に立つて、感能知覺をば實驗的に試驗せんとした。けれども現在の實驗心理學は、

最早、この精神物理的問題を、左程中心に置かない。寧ろ、實驗に近づけ得べき心的體驗の總體を、學的に取扱はうとする。嘗ては、感覺の問題が主要であつたのに、今日では、實驗心理學は其の勞作を精神生命の全域に擴充する。斯くて、功績ある勞作を出しつゝあるものに、大體に於いて、四つの學派を數へる事が出來る。卽ち、ライプチヒ派（Wundt 一八三二――一九二〇）、ゲッチンゲン派（G. E. Müller）、Külpe派（前にはヴュルツブルグ派と呼ばれたもの）、ベルリン派（Stumpf）。これに倘ほ墺太利の、グラーツ派（Meinong）を加へる。――殆かも物理學に於いて力學が夫である樣に、實驗心理學が全精神科學の基礎學となつて展開するだらうと言ふ希望は滿されてゐない。寧ろ、反對に現在に於いては、次の如き廣汎なる確信が存在する。卽ち、實驗心理學は、心理學の總てではなくて、寧ろ其の一部に過ぎない。心理現象の學的處置に於いて、實驗は、實驗としてそのまゝ、無條件的の決定を與へる事は出來ない。寧ろ、實驗に於いては、觀察者その人の個性が、最後の決定を與ふ可き契機である。且つ、今日既に、吾々は、實驗的研究は行きつまつたと言ふ印象から逃れる事は出來ない。從つて、玆には、實驗心理學の應用方面に向はんとする傾向が著しくなつて來る。（今日特に顯著なるは、敎育心理學である。獨逸に於いて、此の方向の開拓者は、Meumann と W. Stern である。）勿論、實驗心理學が、彼に許されたる領土に於いて、爲し得たる事業の功績を、吾々はすべて承認する。それにも拘らず、猶ほ、次の事情を看過する事は出來ない。卽ち。心理學は自然科學と提携した事その事が、同時に反つて、自然科學に保有せらるる所の自然主義的の誤謬を、多分に心理學そのものに潜入せしむるの結果を生むだと言ふ事は否定するを得ない。斯くて、「心のない心理學」が成立した。彼等は、個性の心を、心的現象の複合若くは諸機能の單なる連鎖から成ると考へる。蓋し、斯くしてのみ、心的なるものと物質的自然との類比が完全になるからである。更に重大なる心理學の偏見と見らる可きものは、思惟過程をば表象に還元した事であつた。此の傾向と提携したものは、一層一般的なる觀念聯合主義であつた（G. E. Müller、Ziehen）。けれども、此等の考へ方が、自然科學を範に取つて以來、獨逸心理學界に、多大の影響を及ぼした事は事實である。一部に於いては、今日でさへもなほ、哲學一般に對する强い嫌惡がある。けれども、ここ十數年以來、心理學は、自然主義的の成心から離昇せんとする一の新らしい反動に目覺めてゐる。此の覺醒の出發點を準備したものは、思惟作用の研究であつた。それは、既に長い間、殊に若い研究者たちの心引かれる勞作の對象であつた。此の思惟の心理學に、主要なる動機と功績とを與へたものは、もとより、實驗的研究ではなくて、寧ろ實驗的研究からは輕視されてゐた所の記述的心理學であつた。此の功績は先づ Brentano の學派に歸せられる。然かも、偉大なる成果を齎したものは、第一に Husserl の論理的研究である。

哲學への顧慮に於いて、此の記述的研究の主要なる理論上の成果は、先づ作用論である。そして次に、特殊なる「自我」の假定への復歸である（Th. Lipps、Külpe、Oesterreich、Geyser フッサール）。心的體驗に於ては、その主觀的方面と、其客觀的方面――作用が意味的に向けられて

ゆく所の内容若くは對象——とを區別す可きであると考へる。此の規定は、又、認識論にとつても著るしい意味がある。蓋し、意識内容はすべて自我の「狀態」の意味での精神的のものであると言ふ古い考へ方が、打破されるからである。更に他方に於いてはまた、哲學的意識の强まると共に、心理學の他の部分——實驗的の處置にも、またブレンタノ、リップス、Groos、H. Maier、フッサール、マイノング等の記述的研究にも這入らない部分に對して、廣汎なる注意が向けられて來た。歷史的精神科學の基礎としての純粹記述的分析的心理學の創設に對するディルタイの要求は、精神科學の全野に亘つてば、未だ着手されてはゐないけれども、其の個々の部分に於いては多くの進捗を遂げてゐる、Marty はまたブレンタノの學徒として、言語心理の方面を開拓する。宗教心理は、獨逸に於いて、特にエステルライヒによつて、個性心理は Stern に依つて着手された。更に最も廣汎なる企劃は、ヴントの民族心理學である。それは、言語神話藝術風俗習慣等の範圍に於ける、發達過程の心理學的研究である。其の他、哲學の諸領土に及ぼした心理學の影響に關しては、部分的に、可なり著しいものがあつた。就中、心理學的分析の異常なる細密さは、例ば Marbe の、認識論に對するが如き、看過すべからざる效果を與へてゐる。けれども、夫と同時に、一方には、心理學を以つて全精神科學の據礎たらしめんとする傾向は、寧ろ欲ましからざる結果を招致した。特に、論理學に關して、所謂心理主義の出現は、論理學そのものゝ損傷でなければならない。此の心理主義は、「心的」と「論理的」とを混同する。例へば、命題間に存する論理的法則（推論の法則の如き）を、誤つて、心理學的の思惟法則と見る、若くは、矛盾則とは、或る表象は關係的に思惟せられ得ないと言ふ事に外ならないと解釋する。十九世紀末に廣汎であつた此の心理主義は、けれど、現在に於いては、最早、不當なる要求に出づる事は出來ない。更に、論理學的の方法論の上に及ぼした心理學の影響も可なり著しい（ヴント）。諸學に於ける思惟方法は、心理學的に分析された。心理學的分析の地盤からの論理學としては、Benno Erdmann を擧げる事が出來る。

獨逸以外に於いて、實驗心理學諸般の發達は特に米國を擧げる。就中、哲學的に興味あるものは、ジェームスの宗教心理學の建設である。佛蘭西の Binet は、特に思惟の心理學に功獻する。病的心理、變態心理の研究は、殊に佛蘭西に於いて成果を收めた（Ribot、Janet、ピネー）。此の方面の研究は、獨逸に於いては、寧ろ缺除してゐたが、最近その研究も漸々盛んになる（Jaspers、Specht、Stoerring エステルライヒ、Kronfeld）。また英米に於いては、Parapsychologie 即ち千里眼、透視等の研究が行はれる（Society for Psychical Research——ジェームス、Myers、Hodgson、Crawford）。佛蘭西、スイス、伊太利も此の研究に關與する（Richet、Flournoy、Morselli、Bottazzi）。英米佛の心理學は、一般に、潛在意識を承認するが、獨逸に於いては、大體、此の方面に赴くものは、Freud の一派があるのみである

第三章　認識論（其の二）

第一項　合理論的思潮

以上に考察したる現代の哲學思潮は、自然科學を批評してカントを祖述せんとする認識論的論理主義も、經驗の意味の徹底より出發する根本的經驗論も、其の固有の展開をば新世紀に於いて見出したとは言へ、其の根帶は古く自然主義の時代に根ざしてゐる。然るに、現世紀に到つては、自然主義的世界觀を捨てて全く新なる根本的世界觀改造の必要、哲學の任務をより高みに置く可き可能性を、科學そのものが告白する。科學が世界の根本の謎を解いたと言ふ自然主義的確信、哲學的思惟にとつて自殺的なる確信は、再び遠く退いて行く。まさしく根本的に新なる世界觀が獲得されなければならない。眞理に對する思慕の情熱と、精神の偉力に對する確信を以つて新たに武裝せられたる哲學は、今や絕對の必要として要求される。生命が、心的要素の自然科學的構造に於いて考察される代りに、生命は、再び其の固有の光華に於いて輝かなければならない。斯くて現代は、全く新なる一面の思潮を産み出してゐる。——斯くて、認識論的論理學的の範圍に於いて、二つの新しい傾向が生れた。フッサール一派の現象學（マイノングの對象論もこめて）と、レームケ一派の基礎學である。兩者は、內的の類似に拘らず、相互に大なる接觸なしに、並存的に發展して來た。そして、今やそれらの思潮は、獨逸の國境をこへて、遙かに迸り流れて行く。

（其の一）現象學並に對象論

そのうち、獨逸（並に墺太利）に於いて最も注目す可きものは、現象學の思潮である。現象學は、精密には、兩世紀の分岐線上に生れたと言ひ得るであらう（一九〇〇——〇一年は、フッサールの論理的研究の現れた時である）そして此の思潮は、もともと、單に論理學圈內の一改造として現れたものであるが、併し乍ら、漸くにして、哲學の全野に於ける革命へと展開して行く。現代の主潮新カント派が、カントの精神に歸らんとするに對して、此の思潮の中には、ライプニッツの精神が息づいてゐる。（十分意識的ではないとしても）。けれど、此の思潮の直接の生起は、これを墺太利の哲學者 Franz Brentano（一八三八——一九一七）に俟つものである。彼はカトリックの僧より出でて、アリストテレースとスコラの哲學（特にトーマス・アクイナス）を通して、論理的に卓拔なる訓練を經て哲學に入り、

更に心理學に新機軸を開いて、依つて以つて、現代に於ける一大思潮の源泉となつた、彼は凡そ現代の意味ある哲學者の中で、カントの獨裁に對して意識的に戰はんとしたる、恐らくは、唯一人者であらう。そして、彼の鋭い批評と、廣汎且つ深徹なる努作の、けれど內氣な暗示の中から、彼の學徒の努力と努作の廣大なる流れとなつて、現代獨墺の全現象學思潮が現れて來た。墺太利に於いては、此の思潮は、A. Meinong の對象論の名に現れる。獨逸に於いては、Edmund Husserl が現象學の建設者となる。(ブレンタノよりフッサールへの思想的過渡に、其努作の、量に於いては尠いが質に於いて偉大なるポーランドの Twardowski のある事を見落してはならない)。マイノングとフッサールの兩者の間には、時として、先後の問題が議せられるけれど、彼等は、確かに相互から獨立である。それにも拘らず、彼等は、ブレンタノに於いて等しく方向づけられてゐるのである。――今日、マイノングに共働する者には、Rudolf Ameseder, Ernst Mally, Wilhem Frankl, Vittorio Benussi, Wilhelmine Liel, Robert Saxinger 等がある。そしてフッサールに追從する者には、Alexander Pfänder, Max Scheler, Moritz Geiger, Adolf Reinach, Paul Linke, Dietrich von Hildebrand, Hermann Ritzel, Hedwig Conrad Martius, Wilhelm Schapp, Emil Utitz 等がある。

ブレンタノの心理學は、精神現象と物體現象とを別つて、精神現象の特徴を、對象の內在と言ふ點に見出した。意識するとは、對象即ち意味を己れ自らの中に含むと言ふ事である。斯くて總ての精神現象は、意識內容即ち內在的對象と、作用との兩方面を具へる。この考へ方を繼承して、トワルドウスキーは表象に於いて、作用と內容と對象との三つを峻別する。玆に於いてか、次に起る可き問題は、此の三者の關係を思惟する事である。此の使命に應ずるものは、フッサールの現象學である。即ち、現象學は、此等の區別の未だ成起せざる以前の立場、即ち純現象學的立場を以つて出發點とする。さればこそ、現象學は、まさしく學的哲學一般への、最初の出發であつて、此れに對しては、總て從來の哲學は、前科段階たるにすぎない。いまより以後、哲學は、數學の嚴密さと可證性とを有つて、原理の上に原理を建てる事に於いて、一步一步と進展すべきである。此の目的への道程を、フッサールは、一の新しい方法に見出したと信ずる。即ち、それは現象學的方法でなければならない。總ての經驗科學が、空間若くは(或は、並に)時間の中に現存する所の事實を以つて事とするに對して、現象學は、事物の純粹論理的超時間的本質を以つて事としなければならない。現象學の

問ふ所は、例へば「色彩とか音響とかは、存在するか否か、何處にあるか」と言ふ問題ではなくて、彼は、まつしぐらに、色彩音響の本質を問はんとする。本質は事實と別けられる。前者に對するは本質學、後者に對するは事實學である。現象學は、また本質學の一つでなければならない。されば、現象學は、全く空間時間的見方を捨てて、例へば色及び音の——從つて總ての事物の——存在本性に沈潜する事に於いて、其の本質の認識に達する。純粹意識の立場に立つて、一種の本質直觀に於いて、其の認識へと迫進する。凡そ吾々の直接經驗は無限の流動であるが、此の流動を或る一の立場から止めて見た時に、種々の世界が出來る。斯くて、學的知識とは、孰れかの立場に立つて、何等かの先天性を以つて、此の無限の流動を止めた所に成立する。けれどそれ故にこそ此等の世界はすべて純粹意識によつて結合されてゐる。斯くて、此等の諸々の立場を、悉く除去して純粹意識の直接なる姿を記述せんとするものが、現象學である。されば、唯だに個々の事物のみでなく、現實態の全體が現象學的考察の對象と爲され得る。斯くて、異別的なる事實的なる經驗的個別學とは別に、斯かる本質直觀の組織として、純粹本質學が成立する。それは現實の各部の本質を規定する。けれど此等の本體上の本質學、本體學(オントロギー)と並んで、また形式的論理學、數學の如き純粹形式的性質の學がある。此等はすべて、非經驗的であり、先驗的であるが、併乍ら、例へば物理學に對する數學の如く、實證諸學に對して其の基礎となるものである。蓋し、現實はすべて、まさしく、此等の先驗的構成法則のもとに立つからである。斯樣に、一般的の意味に於いては、フッサールは、自ら、現象學と言はずに、本質學と言ふ。現象學は本質學の一種、若くは更に其の基礎たる可きものである。總ての學の根柢には、直接なる體驗としての純粹意識の世界がなければならず、斯る純粹意識の世界をば、あらゆる立場から離れて把握せんとする現象學は、實に、學の學でなければならない。換言するならば、心的機能の本質を研究する心理學の本質的據礎を論ずる。本質的の意識内容は、決して空間時間的存在を有つに非ずして、純粹理念的存在である。けれど、然ればとて、夫れは、謂はゞ唯だ意識の内に存在すると言はる可きではない。人は夫れを、意識に歸す事も、また然かせざる事も可能である。夫れ自身は、それ自身の存在に於いて、存在する。スコラ哲學の論理的實在論を、單に概念の謂はゞ感能的存在と說く者の如く粗雜に理解しないならば、玆にフッサールとスコラ哲學との密なる接近を認めると言ひ得るであらう。またフッサールの現象學は、カントとライプニッツ・ヴォルフとの間に橋梁

を架するものとも言ひ得るであらう。更にまた、現象學の考へ方は、カントの先驗的心理學に接近し得るであらう。フッサールは、リッケルトの意識一般の思想を取り入れて、最近に於いては、以前よりも遙かに新カント學派に近づかんとする。現象學の根本思想の影響は、殊に獨逸の若い研究者たちの上に、多樣に、意義あるものとなつてゐる。リップスの如きも、愈々玆から遠ざかる事は出來ない。吾々は言ひ得るであらう、現象學は新カント學派の地位を奪ふと。

フッサールの現象學が、獨逸に於いて、哲學の新生面を開拓しつゝある時に、墺太利に於いては、マイノングが、類似の思想を掲げて、新哲學の建設にといそしむ。彼もまた、ブレンタノより出でて、卽ち其の內在的對象の思想を徹底する事によつて、新哲學の領土を開拓し、これを對象論と呼ぶ。對象論は、世界の實在の規定を論ず可き「實在の學」にあらずして「意味の學」である。對象論は、「客觀」を論ずるに非ずして、「客觀的」を論ずる。客觀は存在するものであるが、客觀的は成立するものである。マイノングの謂ふ所に從へば、學は、恒に必ずしも、實在をのみ論ずるものではない。寧ろ、時としては、實在せざるもの、否、不可能なるものをさへも論ぜんとする。例へば、論理學は、「木質の鐵」の如き不可能なる對象を論じて、此の種の矛盾せる事物の不可能なる所以を說く。實在を豫想せる實在のための成心は、征服されなければならない。思考の中に現れて來るだけの總てのものは、思惟の對象となり得る。例へば球の性質を研究するには、必ずしも球體の存在によるの必要はない。そこに、對象一般の學が成立しなければならない。玆に對象とは、思惟の、一般に可能なるすべての內容を意味する。而して其の處置は、純粹先驗的である。例へば、數學は對象論の一部である。

フッサール並にマイノングの哲學は、先づ第一に、無條件的に絕對確實なる認識を期望する。次に、彼等は、存在の窮極の構造に迫進して、實在の本質、實在の意味を探求する。更に、彼等は、空間時間の彼岸に立つて、永遠の力に統べられたる純粹論理の世界への眼を開いた。彼等の哲學が、非常なる熱心を以つて迎へられた所以である。斯くて、彼等の出發點が一見甚だ平凡なる「論理學」であるにも拘らず、現象學と對象論とは、異常なる興奮と共鳴を喚起し、斯くて新なる世界觀のための努力に、深い痕跡を印せんとする。廣義の哲學の領土に於いて、現象學的方法の應用を見ざる所は、殆んど無いと言ひ得る

であらう。倫理學に於いては、第一にマックス・シエラーがある。彼は、現象學の基礎に立つて價値の顚倒へと前進する。顚倒、それの本質に於いて、キリスト教的カトリック的價値への復歸である。即ち禁欲的の中世的の聖者型が、階級上明らかに最高の存在型式であると考へられる。同時に、玆には、價値が事物の客觀性質と見做される意味に於いて、價値客觀性の理論が復起した事は注目に値する。法理哲學の範圍に於いては、アドルフ・ライナツハが、總ての成立法からは獨立に、絕對的妥當を有す可き法の先天的基礎を發見せんと試みる。モリッツ・ガイゲルは、審美感の現象學を論じ、エミール・ウチッツは、一般藝術學を論じ共に美學の範圍に於いて、フッサールの指示したる道程を進む。パウル・リンケは、現象學的分析を以つて、實驗心理學に功献する。其他、アレキサンダー・プヘンダーは、心理學並に論理學に、ディートリッヒ・フオン・ヒルデブラントは倫理學に、ヘルマン・リッツエルは、概念の現象學に、ヰルヘルム・シヤップは、知覺の現象學に、各々眞摯なる勞作を出しつゝある。――最近、現象學が、最も新しい藝術家の一團に迎へられつゝある事は、吾々の興味を引く。即ち、藝術史上最も近代的なる思潮即ち表現派（Burger）は、其の藝術理論――表現派の藝術家は、物の本質とその形而上學的の起動力へと衝迫すると言ふ理論を、展開せんがために、（甚だ不分明な仕方ではあるが）、此の現象學を利用せんとする。

（其の二）基礎學としての哲學

附　組織學

現代の理想主義内思潮の一派に、Wilhelm Schuppe（一八三六――一九一三）、A. v. Leclair 等に依つて代表せらるる所の、所謂意識一元論若くは內在的哲學なるものがある。理想主義的思潮一般と等しく、內在的哲學もまた、純認識理論的關心に導かれて、形而上學を拒斥する。彼等に從へば、經驗は總て、意識に內在する。從つて經驗一般は、即ち、自己の意識內容の主觀的經驗である。吾々の思惟なしに、物は存在しない。吾々の意識なしに、經驗は存在しない。實在するとは意識されると等しい。對象即ち表象である。此の意識一元論（內在的哲學）は、嘗ては、可なり强力なる主張であつたけれども、今日に於いては、既に漸く學界の承認を失墜せんとしつゝある。然し乍ら、此の內在哲學から出でて、然かも獨自の武歩を進めて、現代哲學の一角に、重きを爲さんとしつゝあるものに、Johannes Rehmke 一派の基礎學の主張がある。されば、基礎學は、其の出發點に於いては、フッサール一派の現象學とは全く異る所

源泉に由るものであるけれども、其の主張には、今日多くの點に於いて、現象學との著しい類似を學示してゐる。其の影響する所も、勿論現象學に比す可くもないが、レームケは、一九一九年十月以來 Johannes Rehmke-Gesellschaft を創設し、「基礎學」(Grundwissenschaft と呼ばるる年四回の定期刊行物を武器として、「認識論並に形而上學的世界詩に反對して、眞の哲學の樹立のために」戰はんとしつゝある。例へば、Drm. Michal(ミハルチエ)tschew はレームケの立場に立つて、リツケルト、フツサール等に對して、(殊に其の存在當爲の二元論並びに「意識一般」に對して)、論爭の鋒を向ける。

レームケもまた、現象論的思潮に類似して、哲學について、直接の意識內容――彼の言葉を用ゐれば、「所與一般」――の最普遍的事相の分析を要求する。哲學は、所與から出發しなければならない。蓋し、所與とは、吾々の意識する若くは意識せられる所の總てである。(彼の所與一般とは根本に於いてマイノングが對象と呼ぶものに等しいであらう)。此の所與に對して、「哲學は、最普遍的規定を明らかにしなければならない。例へば、判斷するとは、普遍的所與によつて具體的所與を規定する事である。即ち、所與はまた、個的なるもの(具體的なるもの)と、普遍的なるもの(概念)とに別れる。そして、具體的なるものは、普遍的なるものから成起(エントシュテーエン)しないとしても、かかる普遍的なるものから成り立つて(ベシュテーヘン)ゐると考へる。此の思想は、實に彼に固有なるものである。彼に從へば、また、實在と非實在との根本の差別は、作用の能力と言ふ事である。斯る能力は、たゞ實在にのみ、而して實在には恒に、存する所のものである、而して實在は、たゞ意識の中にのみ存し、意識の彼岸の存在はないと考へる點に於いて、彼は、內在的哲學の繼承者でなければならない。偖て、若し哲學が、一の特殊學であるならば、その對象は、「特殊なるもの」即ち他の特殊學の對象から「區別せられたるもの」である可きである。併乍ら、哲學の對象は、所與一般の最普遍態でなければならない。夫れ故に、哲學は、基礎學としての哲學でなければならない。所與一般の最普遍態の學を、基礎學と呼ぶ所以は、これ以上の說明を要しないであらう。斯くて、哲學の任務は、所與一般の多樣なる最普遍態を、問題のなき明晰に齎すことである。フツサールの思想が、表現派の藝術論に迎へられた樣に、レームケの思想もまた一派の藝術家によつて採用せられつゝあるを見る。

フツサールの現象學に、多少類似したものに、また Hans(ハンス) Driesch(ドリーシュ) の組織學(Ordnungslehre)がある。夫れは、言葉の

廣い意味での論理學である。哲學の非形而上學的部分の體系である。凡そ、總ての事相の根本、卽ち根本事相は、Ich habe, um mein Wissen wissend, bewusst Etwas. と言ふ根本命題に於いて把握される。玆に、根本事相は三つの要素から成る。卽ち、Ich,der um sein Wissen Wisserde(自己の知識を知識する所の我)と、Habe bewusst(意識の作用)と、Etwas(對象)と。然し乍ら此の三者は獨立ではない。根本命題は三位一體である。而して、我が意識したる所の或物(エトワス)は、組織せられたる或物 Gcordnetes Etwas である。體驗せられたるものは、組織せられたるものである。ここから、此の組織(オルドヌング)の本質を論究するものが組織學である。

(其の三)其　他

以上は、獨逸(若くは獨逸語の範圍)に於ける現代に新たなる合理論的乃至論理主義的思潮であるが、夫れは必ずしも獨逸に限られてゐない。現代の問題は、國際的である。此等の思潮と、たとへ外的の直接關係はないとしても、明らかに内的の類緣を擧示する所の思潮が、特に英國に現れてゐる。例へば、G. H. Moore(ムーア)に依つて、新プラトーン的の實在論が展開された。概念を以て、單なる心的存在と考へず、概念の中に、物の本質そのものを見る。總ての認識は、唯だ、概念の上にのみ向けらるべきである。世界はすべて概念から成立する。存在とは、それ自身既に概念であると考へる。Bertrand Russell(バートランド・ラッセル)の新實在論もまた、一種のプラトーン主義であつて、概念の客觀的理念的性格の承認が力強く表はれてゐる。彼もまた、意識作用と其の内容とを嚴密に區別して、普遍の世界を以つて實在の世界と見る。普遍は、物理的事實にも非ず、また心的存在でもない。それは一般に存在するに非ずして、たゞ存立(ザブジスト)するものである。(彼はまた最近社界哲學の方面に出でて、社界主義的思想の宣傳に努めてゐる)。佛蘭西に於いては、理性主義の代表者は、L. Couturat(ルイ・クーチュラー)(一八六八——一九一四)である。夫れは新しい意味の嚴密科學の哲學である。

此の思想の主要なる代表者たち、フッサール、ラッセル、クーチュラー等は、同時に、數理哲學の領土を開拓するに偉大なる功績を殘した。其他數理哲學の研究者としては、Cantor(カントール),ボアンカレー等の數學そのものから出でて數學哲學の建設に向ふ人たちと、數學理論への緊密する關係に於いて認識論的理論哲學を論ずる新カント派の人々、ことにコーヘン、カッシーラー等を擧げなければならない。(其の他 Gauss, Riemann, Zöllner, Helmholtz, B. Erdmann, Dedekind, Brunschwig, Kronecker

Schmitz-Dumont, Grassmann, Frege, Stolz, Gmeiner, Hilbert, Schröder等）更に、Albert Einstein（アルベルト・アインシュタイン）の相對性理論は、全く新たなる世界觀の改造を要求し、既にカッシーラーは其の認識論的考察を與へてゐる。

第二項　反合理論的思潮、直觀主義

現象學的思潮其他多くの論理主義の代表者たちが、嚴密なる理性的思惟の道程に於いて、哲學に新なる基礎を置き得べき事を期し、斯くて哲學が數學の嚴密さを獲得すべき事を希求してゐる一方に——豐饒なる生命內實を餓え渴くが如く慕ふ一群の哲學者は、此等の哲學を以つて餘りに形式主義に偏倚して內容に於いて空虛なるものと觀じ、概念的思惟のみに恃む事の慊らざるを告白する。此の思潮を、一般に、反理主義（イラチヨナリスムス）若くは直觀主義と呼ぶであらう。蓋し、其の主要の思想は、思惟と並んで、なほ他に學的認識の源泉があると言ふ考へである。既に、思惟と並んで、知覺を以つて眞の認識源泉と考へるならば、斯る認識理論は勿論廣義の直觀主義（若くは直覺主義）に屬するものである。蓋し、生命は直接には經驗即ち知覺に於いて具現すると考へられる。從つて、若しも知覺とは同時に思惟であると考へやうとも、さらばまた、知覺は單なる思惟以上なる事を承認するものでなければならない。併し乍ら、一般には、思惟並に通常の知覺機能以外に、尚ほ他の能作が、認識の構成契機として主張せらるゝ場合に、之を反理主義と呼ぶ可きであらう。

獨逸に於いては、特にヰルヘルム・ディルタイ並に彼を中心とする其の學派の人々が、認識過程には、人間本質の全體、全體としての人間本質が關與する事を力說する。此の本質の全體態を等閑にして、思惟のみを孤立的に抽出する事は、全きものを破壞する所の不當なる組立でなければならない。ロツクやヒユームやカントの組み立てた認識主觀の血管を流れるものは、現實の活ける血液ではない、否それはたゞ、單なる思惟作用としての理性の薄められたる汁液にすぎない。溫き生けるがまゝの血液を欲む此の思想が、歷史哲學の認識を如何に論じたかは、既に（極めて不十分乍ら）吾人の一瞥した所である。更に、ディルタイは、此の根本の確信から出でて、殊に外界の問題に關して、極めて具體的に其の主張の開陳を試みる。外界實在性の確信の基礎は、感覺の原因への思惟的推論ではなくて、人間の意志經驗である。吾々が若し杖を以つて何物かを地上に推しつけるならば、吾々の意志行爲に於いて世界の反抗に逢着するであらう。そして、此の意志への反抗を經驗する事に於いて、吾々は、吾々から獨立な實在の存在を確信するのであつて、吾

々が感覺から其の外的原因へと思惟的に推論する事に依つて然るのではない。それ故に、外界實在性の把握は、此の反抗から其の外的原因への推論の問題ではなくて、外界實在の遙かに直接なる確保である。デイルタイの思想の反理主義は、なほ次の一面に於いて、殊に顯著である。卽ち、抑も現實態（實在）そのものが、反理的非合理的本性であると考へられる。彼にとつては、實在は論理學原理の彼岸に立つてゐる。實在を貫くものは二律背反である。此の二律背反、此の矛盾は、唯だに、然か現れるのみに非ずして、實にこれが現實なのであり、而して夫れは如何なる思惟によつても除去せられ得ない。されば、學的反省に依つて到達し得る所は、剩す所なき行爲の決定論である。それと同時に、行爲の全連鎖は人格に於いて統合される。斯る人格の能作に於ける自發性と生命力、それに表象的の表現（いひあらはし）を與へるならば、それは非定命論的の自由である。されば茲には、決定觀と自由とが併存する。（前項、精神科學の認識論中デイルタイに關する部分參照）

特に直觀哲學の傑れたる代表者を、吾々は佛蘭西の Henri（アンリ） Bergson（ベルグソン） に見出す。彼の哲學は、自然主義の煉獄を經たる現代の浪漫的唯心論である。汎生命論的新唯心論である。彼は、ブウトルウより出でて、自然科學的思惟を超越する形而上學を建設する。其處には、因果的に規定せられたる「現象の自我」と並んで、直接なる直觀によつてのみ把握せらる可き「體驗の自我」がある。彼に從へば、由來對象の認識には二つの方法がある。卽ち、分析的方法と直觀的方法である。前者は、科學の方法であつて、概念的に對象を把握せんと欲する。併し乍ら、概念的思惟の遂に逢着せざる可からざる困難は、既にこれを昔のエレア學派が雄辯に物語つてゐる。概念的思惟は、對象に徹する能はず、恒に相對的たらざるを得ない。たとへ、夫れは、硬凝無生の物質的對象に對しては使用し得るとしても、生命に對しては、否既に運動てふ事實の面前に於いては、全く無力たらざるを得ない。思惟は遂に實行上の應急策たるを出でない。若しも、空間的世界から獲得した範疇を、生命と心とに使用せんと試みるならば、其處に生命と心とは傷けられ穢されるであらう。生命を把握するものは、他の方法、卽ち形而上學の方法たる直觀に俟たなければならない。直觀（直覺）は、超理性的、容知的の能力である。吾々は、直觀に由つて、對象そのもの生命そのものの中奧に參し、斯くて絕對を把握する。生命は流動である。世界は流動的存續である。人は、此の流動しつゝある所のものを、理解せんがためには、これを內的に體驗しなければならない。自らの自我の裡に、人はその流動を直接に體

驗する。されば世界の本質としての流動的存續に導くものは直觀である。概念的因果的なる科學の分析が、空間的並存者の靜的性質を事とするに反して、直觀は、動的生命的成生を對究せんとする。斯くて、直觀は物の本質に迫進するが故に、これこそ形而上學の本來の方法である。彼の形而上學は生命の哲學である、生命とは創造的進化である。實在は生命の創造である。斯樣に故に、ベルグソンもまた、吾人の思惟的概念は遂に實在に到達せざる事を認める。されば、そこに吾々は强くシェーリングを思ひ出すであらう。さればとてベルグソンの思想の獨創性を否定してはならない。(彼の形而上學に就いては、後段參照)ベルグソンの思想は、理論としての明徹を缺くかも知れない。けれど、彼の天才的直觀と、傑れたる文章。彼の思想は今や世界の全土に及んでゐる。(第四章第九項參照)。

米國のジェームスもまた、ベルグソンの影響のもとに、反理主義の道程を歩む。彼は、嘗ては解釋し得なかつた問題――例ば、吾人の個人的意識の上に、是を包攝するが如きより高い意識が、如何にして存在し得るかと言ふが如き――も、此の道程に立つて解釋し得ると信ずる。且つ、ジェームスもまたベルグソンと共に、一般に、吾人の概念は實在に到達し得ざる事、從つて生命の完き姿を把握せんがためには、何よりも、生命そのものの中に自らを潜在せしめなければならないと言ふ事を信ずる。――但だベルグソン流の反理主義は、獨逸に於いてのみは、著るしい影響を獲得してゐない。獨逸の學的精確を求むる心には、斯る謂はゞ神秘的の解釋は、直ちには受用せられ難い事情があるのである。

第四章　形而上學的乃至世界觀的思潮

第一項　反形而上學的傾向

吾々は既に、現代哲學の初期に於ける、反形而上學的思想の廣汎な事を語つた。實に十九世紀の第二半部においては、形而上學に對する嫌惡は、殆ど本能的なるものがあつた。そして總ての哲學者は、多かれ尠かれ、此の思潮の洗禮を拒む事は出來なかつた。現在にあつても猶ほ多くの論理主義者に於いて、形而上學の排斥せられつゝあるのに、吾々は既に幾度びか逢着した。然るに、現象學的思潮が、一方に、哲學の新なる建設を期して漸く思想界に重きを爲さんとした當時以來、他面に、特に獨逸哲學の中には、看過す可らざる轉向の機運が動き初めつゝあつた。即ち、形而上學に對する反感は、漸く退去しつゝあつたのである。

抑も新カント派の大部分が、すべての形而上學を好まざるものである事は、既に吾々の知悉する所である。彼等にとつては、カントは特に形而上學一般の否定者であつた。就中、ひたすらに論理的思惟の透徹を要求するコーヘンや、またリール等に於いては、時としては憎惡にまでも强められたる拒斥のもとに、形而上學は虐げられた樣に見えた。(後段第七項參照)。新批判主義の群星の中にあつて、注目す可き恐らくは唯一の例外は、ヨハンネス・フォルケルト Johannes Volkelt のみであらう。勿論彼もまたカント主義者たらんとする者である。けれども彼はまた同時に、ヘーゲルの偉大に培はれ、ショウペンハウエルとハルトマンと更にヒュームの影響のもとに育つた所の精神である。さればこそ、彼は、理想主義的形而上學的精神と懷疑論的批判主義的精神との結合を意圖して、一の批判的形而上學を以つて、缺く可らざる哲學の課題と考へる。――マツハやツイーヘンの新實證主義的思潮も、(わづかに實用主義の例外を以つて)、今日も尙ほ多くは形而上學を拒斥し、然かも十九世紀末に然りしが如き古い嫌忌の反情を以つて、これに對する其處では、人々は、心的過程の事實性を認めて、これをまた、夫れに對應する精神現象存在の權利根據たらしめんと爲るのにも拘らず、一とたび形而上學に對する時は、斯學の包有する所の理念を以つて單に主觀的なりと爲し、從つて其處には如何なる形而上學的實存の權利も承認し得ないと考へる。リールの如きは、形而上學的世界觀を以つて哲學者の主觀的心情に依倚するものと爲し、形而上學に「非學的」の刻印を與へて、哲學の形而上學たる可らざる事を主張する。――哲學史的研究も、形而上學を包有する過去の大組織を考察するに際しては、其處に內在する理性的契機に依つてこれを理解するよりも、寧ろ、其の組織の建設者その人の「心」全體からして、是を把握せんと努力する。其の際、其の組織そのものの理性的側面は寧ろ背後に沒入して、建設者の心情性向の上に重點が置かれる。此處に、歷史哲學者ディルタイの批評がある。彼に從へば 歷史に現れたる總ての體系は、其の思惟の出發點に從つて、三つの大きい類型に別つ事が出來る。(一)一群の哲學者は、感能知覺に於いて與へられる所の外的世界から出發する。そして斯る人々は、實證論的唯物論的體系に到達する。即ち自然主義の立場である。茲では、心的生命は、物質的現象への比論に從つて考察される。此の立場にとつては、世界は、因果的に結ばれたる一全體であり、そこでは唯だ原因結果の關係のみが支配して居る。これに反して、茲では、總ての價値概念は何ら客觀的意義をも有つてはゐない。次に(二)一群の哲學者は、世界に對する感情關係から出發する。彼等にとつては、世界

は、より高き意味の世界と見える。世界は茲に[illegible]の價値關係を獲得する。これが客觀的觀念主義の立場である。最後に（三）意志の體驗を出發點とする人々は、自然に對する精神の自由と並に其の主權とを確信するに到る。これが「自由の理想主義」の立場である。世界そのものを、人間の意志經驗への比論に從つて考察することは、やがて有神論へと導く。ディルタイは、斯様に哲學の（寧ろ生命の）三類型を區別したけれど、此等の間に窮極の判定裁斷を與へることは、不可能であると彼は考へる。夫れ等の各々は、己れ自らに於いて有力であり、最早他の原理に由つて證明する能はず。從つて同等の權利を具有し、他者に由つて破らるる能はず、相互に並存する。蓋し彼に從へば、實在そのものが既に非合理的性格であり、體驗を普遍的に概念する事は出來ない。各々の根帶は、生命そのものの中に、永續し活動し、斯くて新なる結構を產むのである。哲學の任務は、種々なる體系を、其の成起の相に於いて理解する事に存す可きである。自ら世界觀を與ふる事の代りに、哲學は世界觀の學となる。斯くして、彼は反理主義的懷疑論を代表するものと謂ひ得るであらう。（Eduard Spranger（エヅウアルド・シユプランゲル）は此の思想を更に展開して、生活相の六大基本類型を區別する。理論的、經濟的、社會的、權力的、想像的、宗教的の六大基本性格に應じて、六つの文化目的がある。即ち、學、經濟、社會、國家、藝術、宗教。けれど夫等は抽象に於いては個別的であるが、全體的文化連鎖に統合される）。

第二項　古い形而上學——一元論（モニスムス）、汎神論

斯る機運のもなかに於いても、併し乍ら、吾々は、夙に、Ernst Haeckel（ヘツケル）（一八三四——一九一九）流の所謂モニスムス（一元論）の運動のあつた事を知つてゐる。夫れは寧ろチイレツタントの間にではあつたけれども、極めて廣汎なる運動となつて、大戰開始前に於ける通俗形而上學たるの位置を形作つてゐた。——上述の如き、形而上學に對する原理的の反感にも拘らず、併し乍ら、他面に於いては、人々は何等かの形而上學的要求から全く離脱してある事を得なかつた。即ち、彼等は、自然主義の傾向を繼承して、大概は、實證論的唯物論的見解を奉じ、機械的世界觀を抱懷してゐた。而して、汎神論的解釋を以つて、これを補足して現れたものが、即ち、近代的の一元論である。一元論の特質は、世界統一性の確信である。總てのものは相互に類緣を有し、其の根柢に於いては、結局一つの本質から出でたるものでなければならない。世界は諧和的に整へられたる一全體である。從つて、一元論の世界觀は結局樂天論的であ

る。其の實踐論に於いては、總ての超越性を嫌忌し拒斥して、現世的なる生命情調を肯定するものでなければならない。玆に汎神論は、此の現世生命の肯定、生命悅樂の思想に、携伴する事が出來るのである。勿論此處に一元論（モニスムス）と總稱するものの中にも、非常に異別なる數多の傾向が存してゐる。ヘツケル流のモニスムスは其の普及の比類なき廣汎さにも拘らず、遂にヂイレツタントの哲學たるを脫し得ない。夫れは根本に於いて、獨斷的であり、結局唯物論である。然かも古代希臘の半ば神話的なる自然哲學とどれ丈け嚴密に區別する事が出來るであらう。これに對して、より重要なるいま一つの思潮は、唯心論的一元論である。此の思潮の本來の源流は、確かに之をヴントに求む可きものであらう。そして更に Friedrich Paulsen（フリードリッヒ・パウルゼン）（一八四六——一九〇八）が、其處により廣い道程を開いた。其の理解に從へば、實在は結局心的なるものから成立する。物理的なるものと雖も、要するに心的なるものの顯現にすぎない。けれど此の心的なるものそれ自身は、其の根柢に於いては、純粹意志である（意志一元論）。併し乍ら、玆では、何らかの精心的價は拒斥されて、心的なるものそれ自身は、全く純粹の過程から成立すると考へられる。過程そのものである。而して此の過程は、意識の統一となつて綜合される。斯樣に、世界はすべて唯心論的に理解せらるるが故に、物理世界の體系のある所、其處には其の反面は直ちに心的世界の統一である。物的宇宙に對應して世界精神が立つ。從つて物と心との關係は、並行論の意味に於いて規定される。物的過程のある所、必ず心的現象がこれに對應する。寧ろ、物的過程は、心的過程の顯現にすぎない。されば、其の根本思想に於いて、唯心論的一元論は、また遂に自然主義の產物である。蓋し、其の理論の動因を爲すものは、機械觀である。其の理論の根柢に存するものは、機械論的の原理が、普遍的に妥當するといふ確信であると謂はざるを得ない。けれども、此種の一元論は、一面に於いて、純粹の學たるよりも、寧ろ宗敎的情調を以つて彩らるるに適してゐる。既にパウルゼンは、善と善の勝利の信仰が「學」そのものに於いて、純粹學的に承認されなければならないと考へる。此の意味に於いては、すべての實踐哲學は、また宗敎的でなければならない。斯くて此の一元論は、意識的にヂョルダノ・ブルウノの汎神論に近接したと謂ふ事が出來る。ヘツケルの一元論が、それ自ら、殆ど一の宗敎運動たらんとさへもした事は周知の事實である。佛蘭西に於いては、一元論は、進化論者なる Alfred Fouillée（アルフレッド・フウイエ）（一八三八——一九一二）及び彼の繼子 Jean Marie Guyau（ジャン・マリー・ギョウ）（一八五四——一八八八）に由つて代表される。彼等の一元論は、

理想主義的である。前者は、ヴントに似て、意志論的の唯心論を説く。且つ、理念（イデー）は、單なる空想虚構に非ずして、能作的の契機である――理念は力であると觀て、此の力としての理念の進化論を説く。宇宙は精神的諸力の一全體であり、力の最奧の根蒂は神性であると謂ふ。ギヨウは、情熱の人である。憂鬱にして大膽なる詩人的哲學者である。彼は生命本能を力説し、冒險と戰ひとを悅ぶ。彼は、多くの點において、佛蘭西のニイチエである。――アングロサクソンの世界は、思想に於いても保守的安定を喜ぶ世界である。永い間、一神論的の有神論、乃至二元論的の有神論が大部分において支配してゐた英米の思想は、汎神論的一元論を容るるに速かではなかつた。けれども最近二十年以來、其處でもまた事情は變つた。既に Hutchison（ハッチソン） Stirling（スターリング）（一八二〇――一九〇九） Edward Caird（エドワード・ケヤード）（一八三五――一九〇八）、特に、Thomas Hill Green（トーマス・ヒル・グリーン）（一八三六――一八八二）の絕對的唯心論は、カント並にヘーゲルの精神より出でて、其處に英國思想自ら展開を喚び起した。彼等の思想が、未だ汎神論的ではなかつたとしても、然かも彼等に由つて開かれた道程は、これを容るるの可能性を準備したものでなければならない。英國の Francis Herbert Bradley（フランシス・ハーバート・ブラッドレー） 米國の Josiah Royce（ジョサイア・ロイス）（一九一六死）は此の道程から生れた一元論的理想主義の代表者である。此等の一元論は、近代獨逸の汎神論よりも、寧ろより多くフイヒテ、ヘーゲル流の哲學を思はせるものである。其處には「絕對」と言ふ言葉が固執される。そこに絕對とは、あらゆる個々意識を包括する處の、統一的全包括的意識（若くは經驗）として理解される。尙ほ獨逸系の米人 Paul Carus（パウル・ケーラス）（一九一九死）は、宗教と科學の結合を圖り、實證論的の一元論を取つて、統一的世界觀の普及に努めてゐる。雜誌 The Monist 並に The Open Court は、其の機關紙である。けれど彼の頭腦は徒らに廣くして淺い。

汎神論的一元論は、斯くの如くに、普及せられ、通俗化せられ廣汎なる影響を與へたとは雖も、所詮「碧き」形而上學たらざるを得ない。勿論、今も尙ほ、有力なる主張者を擧げ得ないのではないけれども、學的嚴密さを要求する事の盛なる現代に、最早夫れは決定的の形而上學たるの位置を占める事は出來ない。其の最も有勢なりし時代に於いてさへも、夫れは決して支配的ではなかつたのである。特に獨逸に於いて然りである。例へば、ヴントは、多くの點に於いて汎神論に近づき、其の意志論的唯心論的一元論の建設に於いて、汎神論のために道を開いたとは雖も、然かも、最後の言葉に於いて彼は恒に之を拒む。彼に從へば、世界の根柢は、一般にたゞ要請せられ得るのみであ

つて、其の實相を知識する事は出來ない。寧ろ、それは實踐倫理的理想の上に於いて、想定し得るにすぎない。更に現代の形而上學、オイケンや、リープマン、フォルケルト、キュルペ等の形而上學は、寧ろ此の「古い」形而上學から距れて、夫々新たなる自己の道程を歩むものである。

第三項　新たなる形而上學

思惟は自らの本性を明らかにしなければならない。實在の意味は、知識せらる可きである。生命は、其の本質に於いて把握されなければならない。哲學的要求のある所、其處には所謂形而上學への向求は培はれてゐる。斯くして既に長い間、表面下に準備されてゐたものは、今や大なる力を以つて、新しい形而上學と爲つて現れて來た。然かも其の出產を促進したものは、また生命そのものの覺醒でなければならない。自然科學的機械觀の途に保持す可らざる所以を、既に科學そのものが自ら告白する。上述の古い一元論的世界觀の合言葉、「世界の機械論的性格」は、物理學的研究自らに由つて、其の根拠を危くされた。永い間世界の普遍的法則として尊ばれてゐた機械論的原則は、今や、無機的自然に於いてさへも唯だ制限された範圍に於いてのみ妥當するものと爲される。生命そのものは、尙往より眞實の相に於いて摑まれる事を要求する。然かも徒らに古い昔の浪漫的生命觀への單なる復歸ではなくて、自然主義の鍊獄を經て、一たび自らを燒き盡して、再び新たに生れたる若きフエニツクスに應はしき、新たなる世界觀の根蒂が見出されなければならない。斯くて古い一元論に代つて、新しい二元論が、若くは寧ろ多元論が、思想の主潮に現れて來る。汎神論に代つて再び有神論が支配せんとする。

第四項　新生活論
附　心理學からの形而上學

夫れは生命機械觀に對する一面の反動であつた。從つて其處には、生命をば物理的自然への共論に於いて考察する代りに、生命を生命として如實に把握せんとする根本の要求がある。新形而上學的確信の構成に對する直接の示唆すが、生命若くは有機體を直接對象とする個別學から與へられた事は、最も理解し易き事實である。卽ち、既に長い間、此の機會は、特に生物學の中に培はれて來た。嘗ては、ダーウインの進化論が、自然主義時代の神殿であつた。時代は翕然として其の前にひざまづき、人々は淘汰進化、原理を無上の神法と奉じて、有機態と無機態（寧ろ單なる無機的集合）との區別をば事もなげに無視し了つた。有

機態と雖もまた、非有機的構成態から、決して原理的に區別せらるべきのではないと考へられてゐた。けれども、時は過ぎて行つた。何時までも、生命は已れ自らの侮蔑に甘んじてはゐない。有機態に固有なる法則性の確信が、再び生物學そのもの司配者たるの期が來なければならなかつた。有機態の自律的目的的結構は、機械的偶然性の上に還元される事は出來ない。斯くて、有機態の存在事實その事が、第一に、新たる形而上學的確信への動因を與へるものとなる。そして今や有機的世界を産み出す所の根本契機が要請され假定されなければならない。そして彼等の本性、彼等の能力が、固有の姿において闡明されなければならない。斯くして玆に生れたるものは新生活主義(ネオヴイタリスムス)である。それは有機世界のために特殊の生活力を絶對必然として假定し、既知なるもの即ち內界より出發して、未知なるもの即ち外界の說明へと向ふ。(此の種の生物學的形而上學の高頂に、植物學者 Johannes Reinke(ヨハンネス・ラインケ) と動物學より出でて哲學にはいつた Hans Driesch(ハンス・ドリーシユ) の、新生活主義がある。ラインケは有神論の上に立つ。原初の有機態は、神の直接の創造であつた。けれどこの神即ち創造的睿智の源泉から、有機態の發展を制約すべき目的意識的の睿知的有機的勢力(寧ろその勢力の方向を指導する力)が生れてゐる。それ故に、一度び神によつて創造せられたる有機態の爾後の展開は、最早直接神の干渉なしに、此の有目的的有機的勢力に依つて制約されてゐる。此の勢力は、勿論自ら無機的物質に作用するが、けれどそれは無機的世界を司配する所の機械的勢力の方向をのみ動かすものである。それ故に、有機的勢力の假定は、所謂勢力恒存(エネルギー)の法則との背馳には陷らない。ラインケの思想は、古い考へ方の「生活力」を、一層精確なる概念に齎してはゐるけれども、尚ほ多くの點に於いてチレツタントたるの印象を與へずにはおかない。彼よりも理的に遙かに鋭く、また年代上彼よりも早く、ドリーシユが新生活主義を基礎づけてゐる。彼の思惟は、屢々スコラ的てふ非難を招來した程に、何よりも精緻ならん事を期してゐる。彼は、一の特殊なる生物的自然動力、有機的勢力を假定して、これを獨自能動的なるエンテレヒーと呼ぶ。此の際、其の名前に於いてのみならず、また其の內容に於いても、アリストテレースの理念を想起させる。エンテレヒーは空間中に於いて働くけれども、それ自らは非空間的非物質的性質である。さればとて、またそれ自身心的性質でもない。併乍ら、其の働きは、唯だ人間の目的行動への比論に從つてのみ、理解さる可きである。それ故に、ドリーシユは、またこれを Psychoid と呼ぶ。精神生命そのものは、此のプシコイドの流出に外ならない。有機態の固有

の本質を概念的に闡明する事が、ドリーシュの企劃である。それ故に、彼は何よりも、有機態を一の機械と見做す所の機械說を力強く打破せんとする。有機態は機械よりも遙かにより以上である。蓋し機械は、到底、他の自己と等しき者を生產し能はず、また例へば再生能力の如き有機態固有の性質を有つ事は出來ない。ドリーシュもまた、勢力恒存の法則と背馳する事を避けやうとする。(E. Becher やエステルライヒは最早此れを問題としない。)また彼は、最高世界エンテレヒーの思想にも近寄つて行く。――尙ほ此の他に、より若い生活主義者の一群が、R. H. Francé を中心として集つてゐる。Adolf Wagner は、新ラマルク主義若くば心的生活主義を唱へる。其他 J. v. Uexküll, Wiesner, Hertwig, Becker 等も、新生活主義に傾いてゐる。(尙ほ、既にエドウアルド・フォン・ハルトマンの形而上學も、本質に於いて、新生活主義の學說と類似してゐる)。

心理學に於ける思潮の變移は、また形而上學の現狀に直接の影響を及ぼした(前段心理學の項參照。)例へば、從來、心的現象を能ふ限り物的現象への比論に於いて解釋せんとした傾向の代りに、兩者の本質的差別を洞察し寧ろ玆に重點を置かんとする傾向が現はれて來た。就中、所謂「心のない心理學」を離脫して特殊なる「自我」の假定を認容した事は、形而上學にとつて特に意味ある事でなければならない。更に、精神物理的並行論を放棄した結果は、新なる意味での心物相互作用論へと移行して行つた。此の間に於いて、意志自由の問題が、色々と論ぜられた事も、玆に注目に値する。即ち Max Wentscher, Hermann Schwarz, R. Manno, Karl Joel, エステルライヒ等は、心理學より出でゝ、再び自由を承認した。Narziss Ach は、實驗心理學によつてこれを證明せんとさへも試みた。

第五項　精神科學からの形而上學

新しい形而上學のより廣い流れが、歷史的精神科學の方面から現れて來た。其處では、何らかの形而上學的基礎を假定する事に由つて、現實態の因果關係を遺漏なく闡明し盡す事が主要の問題ではなくして、寧ろある意味關係を、現實態のうちに設定する事が問題なのである。略言すれば、現實の意味を明らかにする事を任務とする。そして此の任務を果すがためには、何らかの形而上學的假定が、必然的に要求されるのである。斯る動機、斯る要求よりの形而上學を建設して、現代に最も廣汎有力なる――遙かに國境をこへて――影響を獲得した一人は、即ち Rudolf Eucken である。彼の形而上學は、全く反一元論的であり、寧ろ二元論的性質である。而して、其の形而上學の確信は、

嚴密に證明に堪えるものとして、最初からあるのではなくて、寧ろ上述の要求より生れたる一の必然的なる假定である。オイケンは、獨逸理想主義殊にフイヒテの哲學の影響のもとにあつて、後者との明らかなる思想的血緣を有つてゐる。由來、「現實には意味がある」と言ふ事は、獨逸理想主義の根底に存する基本的確信である。オイケンもまた彼の形而上學の先頭に、此の證明し得られざる、寧ろ證明を超越する命題を置く。そして彼の形而上學は、如何なる前提のもとに於いて、世界は斯る高い意味を有するかを示さうと欲する。此處から出でて、彼の形而上學は、必然に、精神生活の哲學である。世界には、唯だに、經驗的なる人々の群があるのみではなくて、否更により高い超個人的の精神生活がある。各個人は、此の高貴なる精神生活に參與する、若くは尠くとも參與する事が出來る。若しもかの生物學的考察が屢々假定した樣に、利己幸福的の個人の精神世界のみの存在であるならば、世界は結果無意味であらう。斯るものの上に超えてより高い精神世界の存立は、絕對の要求たらずんば止まない。然し乍ら人々は、無爲にしておのづから、此の高貴なる精神界に參與するものではない。彼は自らの努力に由つて、此の參與を克ち得なければならない。彼がその自然的自己中心觀を、原理的に打破する時にのみ、彼にはそれが許される。唯だ、より深い內的精神轉向（コンヴアーシヨン）のみが、此の歡喜を領つであらう。己れ自らの「行（ぎやう）」によつてのみ、本質への騰揚は果されるであらう。然かも斯る精神生活は、決して單に道德的乃至宗敎的範圍にのみ限られはしない。個體が自らを超えて騰揚せんとする所には、すべて——學的活動にも藝術的活動にも、其の活動が眞實である限り——此の高貴なる精神界への參與が行はれる。オイケンの倦む事なき勞作は、斯くて、人生の精神的生活內容及び其の宗敎的生活根柢を擧示して、時代を外的文化の陶醉的沈淪より呼び醒さうとする。彼は自捨的情熱を以つて、改革者の力を以つて時代に臨む。蓋し、超越世界の確信は、宗敎である。是を以つて、彼の思想は、一元論的汎神論的の形而上學よりも、基督敎に對してより近く立つものである。けれど勿論彼は自然を神格化するものでもなければ、人間を然かするものでもない。寧ろ彼の形而上學には、强く二元的で、そして超越の世界に法悅を獲んとする神秘主義的な響きがある。從つて、彼は、傳統的神學的の成立宗敎たる現代の基督敎と全く一致するものでもない。

宗敎哲學の上で開拓した（エルンスト・トレルチ）Ernst Troellsch の思想も、オイケンの確信に近いものがある。彼は、認識理論においては、新カント派特にバーデン學派の思想から出でて、新形而上學の立

論に到した。(吾々の既に看て來た樣に、獨逸新批判主義思潮の中で、バーデン學派に於いては、形而上學への反對は、他の諸派に於いてよりはいくらか勘いのであつた。尙ほ、第七項參照。)彼もまた、認識、倫理、美の世界に於けると同樣に、宗教の世界にもまた先驗的理性原理のある可き事を認める。もとより經驗的現實の中では、それは、純粹事實的なるもの非合理的なるものと混在するけれども、それが理性的必然的である限り宗教の世界に對しても構成的に作用する。宗教哲學は、此の先驗性を規定すべきである。トレルチは、また、力强く世界の機械的性格を否定する。精神世界は、自然科學的の因果性に從屬すべきではない。內的體驗の上にこそ宗教は立つ。そこには神の經驗的體驗さへもがある。宗教性の核心は此の神秘なる經驗の裡にある。――神は、何らかの仕方で直接の經驗に應ずるか、如何にして然るか等の、宗教上の認識問題を、またエステルライヒが取扱つてゐる。(これは、彼の注目すべき宗教心理學の研究に關係する)。

第六項　新しい有神論

此等の傾向はまた古い汎神論を捨てて、新しい有神論(テイズムス)への移行を指し示すものでなければならない。哲學の種々異別なる諸分野から、有神論的思想が再び現れて來て、徐ろに獨逸形而上學界に重きを爲さんとする。心理學より出でて、既に Oswald(オスワルド) Külpe(キュルペ)(一八六二――一九一五)は、單子論的な有神論的形而上學を建設した。彼の哲學は、二元論的にして同時に有神論的の立場を取る。即ち、物體的實在と精神的實在との本質的差別を認め、更に、世界の目的性といふ論據に立つて、世界精神としての神を證明する。美學研究の泰斗 Johannes(ヨハンネス) Volkelt(フオルケルト) の批判的形而上學も、其の根底に於いて、有神論を抱懷する。其處には明らかに、十九世紀中葉後の所謂有神論學派 (I. H. Fichte(イムマヌエル・フイヒテ), Ulrici(ウルリツイ), F. Harms(ハルムス) 等の) の重鎭にしてロッツエとザイデルとに看過す可らざる影響を遺したる Christian(クリスチアン) Hermann(ヘルマン) Weisse(ワイセ) (一八〇一――六六) の思辨的有神論を思はせるものがある。H.(ヘルマン) Schwarz(シユワルツ) もまた此の思辨的有神論の影響を受けてゐる。更に、カトリツク神學より出でたるブレンタノ、從つて彼の思想を繼ぐ現象學一派が、有神論的思想を擁護する事は、容易に理解し得るであらう。フツサールに於いては、有神論的思考は學的に捨つ可らざる理念である。ブレンタノの心理學を展開しつゝある von Ehrenfels(エーレンフエルス) も有神論を保持する。フツサール一派に屬する M. Scheler(シエーラー) も有神論的假定を認めて新スコラ主義に傾く斯樣に、有神論の問題は、漸く宗教哲學上の主要問題たらんと

しつゝある。形而上學に於ける現代の趨勢は、一面に於いて、かのロッツエの目的論的理想主義を絶頂とする十九世紀中葉の主潮に近似するものであると謂ひ得るであらう。唯だ、現代の有神論は、過去の夫れに比して、より徹底的、より非獨斷的たらんとしてゐる。例へば、特に神と世界との關係、世界は神の創造であるか否か、若くは獨自の本質として神と並立するか否か等の問題が、殊更に考察の對象となる。それは、即ち、神義論の問題と提携する。そしてこれが再び熱心に論ぜられる。例へば、エーレンフエルスは、世界の經驗的性格を根底として、超驗的の二元論に赴く。ドリーシユやエステルライヒも、同じ問題を屢々論じてゐる。

第七項　形而上學の反動

新しい形而上學の波は斯くの如くに廣汎である。其の水源は深く、從つて其の水勢は強い。甞ては嫌惡を以つて、是れに對してゐた人々も、今や此の時代の意味深き流れに洗はれてゆく。「あらゆる形而上學の否定者」カントの眞精神を奉持して認識理論の論理的徹底を事とする新カント學派の上にさへも、反動の波は寄せて行く。吾々は先づヰンデルバントに於いて、形而上學的理念の要求を見出し得たであらう。彼の認識理論は、力強くも、超驗的なる物自體の概念を拒外する。然かも其の宗教哲學に於いては「聖」の本質の謂はゞ超驗的存在の要請にまで高まつてゐる。蓋し聖は、絶對眞絶對善並に絶對美の價値から成る。されば、この絶對規範は、たゞに當爲の形式に於いて存立す可きのみならず、また超驗的世界の中にも、尚ほ一の存在を保つ可きであらう。リツケルトの認むる所の知識以前の世界とは、抑も何を語るものであらうか。更にマールブルヒ學派の態度は、既に述べたるが如くに、形而上學に對しては、一層愼重なるものがあつたにも拘らず、宗教の概念に關する其後の勞作に於けるコーヘンは、以前よりも遙かに多く、形而上學と融和の機會を示してゐる。ナトルプが、總ての認識以前に直接體驗の世界を置くならば、それは（有意識的ではないかも知れないが）形而上學的動機を問題とするものでなければならない。彼に於いては實に認識の世界と體驗の世界との結合が、重大なる問題とならなければならない。其處には非常に強くベルグソンの思想を思はせるものがある。ジムメルも、認識理論に於いてはマールブルヒ學派と遠く懸絶するものではないにも拘らず、其の晩年の展開に於いては、形而上學的理念の豐富なるを否定する事は出來ない。更に實證主義的思潮の内部にも、形而上學的思想に迎合せんとする努力がある。――一方にファイ

センガーは、形而上學的思考の自由を要求する。また Erich は、Adickes は、學的形而上學を以つて不可能であると思惟し、世界觀とは主觀的信仰確信にすぎないと考へるが、けれど斯るものとしての價値をば認めてゐる。

第八項　世界觀の綜合――文化哲學と內容的の歷史哲學

形而上學の確立はやがて世界觀の成立を產む。改造せられつゝある形而上學的確信の展開と關聯して、綜合的世界觀の學的樹立への關心が動く。世界觀の統一はまた現代の主要なる思潮である。世界は、生命は、其の內容に於いて、其の統一態に於いて、把握せらる可きを欲む。哲學は、己れ自らの全的任務を意識しなければならない。哲學を認識理論の形式主義の上にのみ制限する事は、生命內容に憧れる人々の全的關心を要求することは出來ない。生命の內實。內實に充ちあふれたる思惟。其の要求は總ての方面に目醒めて來る。例へば、自然科學の認識論に對しては、新しい內容的の自然哲學が再び建設されやうとする（W. Ostwald. E. Becher）。物質的並に精神的世界をば綜合的の世界形象に統一して、現代の要求に應はしい世界觀を建設す可き試みが爲される（Oesterreich, Wilhelm Koppelmann 等）。けれど就中注目す可きものは、文化哲學である。文化の哲學の對象とする努力は、何處よりも先づヘーゲルに於いて偉大であつた。今や哲學の綜合的全的任務に對する意識の高まると共に、浪曼主義の精神は再び喚び醒された。けれども、新しい浪曼主義は、自然主義實證主義の煉獄を經て、其の徹底から世に生れたる理想主義である。新しい生命の搏動に蘇つた第二部のファウストである。古い浪曼主義は、人間理解の竪琴を取つて、崇高雄大なる小宇宙の歌を奏でんとする抒情詩人であつた。新しい浪曼主義は、意味實現に溢れたる文化の舞臺に、人格價値の客觀性を握まんとする眞摯なる戲曲詩人である。此の精神に於いて、今や文化は再び哲學的考察の對象となり、其の意味は問はれ、其の價値は尋ねられる。吾人の文化に現存する價値は、抑も何であらうか。文化の理想は何處に？　斯くて、先づ、現代の文化哲學は、其の關心の中心に、文化價値の問題を掲げる。

文化價値の闡明は、價値體系の完成に俟つ。斯くて一般的なる價値理論は、いまや哲學にとつてひたすら欲ましきものでなければならない。價値に對する意識は、既に永く、哲學的考察の底を動く潛勢力であつた。斯くて今や、例へば、美學に於いても、倫理學に於いても。實在論的の相對主義は夙に征服せられんとしてゐる。新カント學派は、其の全潮流に於て、此の任

務に對する意識に喚び醒されたものである。ブレンタノは、現代哲學の初頭において、既に、實證論的相對主義的思潮に對して、結實豐かなる戰を開始した。現象學も、同じ方向に動いて行く事は明らかである。牢固たる傳統を維持して、易く搖ぐ可くも見えなかつた英國の功利主義さへも、Moore, Russel 等論理主義の銳鋒の前に、漸く動かんとしてゐる。――就中、Windelband は、價値の學たる事を以つて、哲學の本質とさへも考へやうと欲む。總ての實證科學が事實を對象とするに反して、哲學は規範を與へるものでなければならない。哲學は、事實的價値評價の間に立つて、何が眞に眞であり善であり美であるか――何が眞に其の反對であるか――の決定を與へるものでなければならない。けれど彼の事業は、問題の展開に於いてよりも、課題を與へたる事に於いて偉大であつた。乃ち、Münsterberg 特に Rickert が、價値體系の展開を試みる。リッケルトに於いては、普遍妥當的價値の體系は、文化に於いて求められる。(前段、其項參照)。更に、文化の全體を、夫れに應ずる哲學的意識にまで高めんとする試みは、より若い人々によつて企てられる。即ち、Jonas Cohn は、價値理論並に文化哲學に於いてリッケルトの影響より出で、現代文化の意義を探求し、文化の向上を任とす可き教育の精神を說く。大戰の犧牲者 Emil Hammacher(一八八五――一九一六)は、ヘーゲルの哲學より出でて、文化批判の準據を考究し、現代の文化を批評する。――嚴密なる學的方法に據つてではないが、けれど天才の洞察を以て、前世紀の七八十年代に、既にニイチェが、銳い文化批評の範を示してゐる。そして現代哲學に對しても、尙ほ彼は生ける醱酵素である。彼は、哲學に、全文化の女教師たる可き崇高の任務を課した。そして彼は、論理的基礎の細緻を事とする學究としてよりも、時代を率ゐんとする豫言者否命令者として、時代の醜惡なる缺陷に對する反抗の情熱にもえて、價値の轉換を叫ぶ。新なる價値は、あらゆる歷史的傳統を否定する自由と、同時に至高なる價値生活の類型超人を創造する藝術家(創造者)とによつて、而めて將來される。超人は「大地の意味」である。茲に個人肯定の哲學がある。されば、彼の憎惡の向ふ所は、就中、基督教と社會主義とでなければならない。兩者を支配するものは、個性價値の確信ではない。兩者の世界において、行爲の標準と爲さるるものは、傳統の腐屑を負ひ無價値に近き個人の群集である。基督教は、古代文化の否定者として現れ、漸く傳統的組織に硬化し了りたる、生命偉力の侮辱者である。社會主義は、現代に於ける其の直接の後繼者である。彼等は、精神的生命實在の絕大なる價値を知らない。愛他主義の理想と個性の放棄、

夫れは强者の價値を否定しやうとする。けれど同情は、弱者への下降であり、力の墮落である。」基督教は弱者の宗教、奴隷の慰安である。此れに全く反對に、ニイチエの要求する所は、貴族主義的古典的なる權力者の理想への復歸である。彼は實に善惡の彼岸に立つ。權力意志の人。詩人哲學者ニイチエの思想には、殆ど直接に、以上の思想と並んで、彼をして獨逸古典主義の文化理想の後繼者たらしめる所の思想がある。即ち彼は、「最後の反政治的なる獨逸人」として、政治生活をば全く輕侮して、民族生活に於ける唯一の價値あるものは、實に精神的文化である事を力說する。此の思想は、彼の武步を推し進めて、文化的世界主義へと導く。彼の思想の此の側面は、今日まで不當に看過されてゐる。けれど現代は、此の光華ある思想の故に、一層彼を仰ぎ見るであらう。

文化哲學の高頂に、茲に內容的なる歷史哲學を一瞥しなければならない。即ち、歷史的展開の全的道程を問ふ所のものであるが、斯る任務は個別學的歷史研究の堪へ得る所ではない。愈々細目的研究に分岐し、從つて其視野の益々制限せらるるが如き歷史研究の態度は、尠くとも、文化價値の體系としての歷史の全的過程に答へる事は出來ない。然かも斯る價値の定立のためには、一面に歷史の認識論が要求されなければならない。現代の歷史哲學の大部分が、なほ其の認識理論に留る事は既に吾々の知つてゐる所である、哲學は未だ精神歷史科學の全野に於いて、其の全的任務を完全に滿す事は出來ないと謂ひ得るであらう。偖て歷史の世界には、其處に完全なる綜合を果す可く、あまりに夥多なる材料の豐溢がある。けれども眞に創造的なる精神は、尙ほ斯る豐溢の前にたぢろぎはしない。即ち、歷史的素材の全領域を精神的に支配せんとする最も意味ある試みが、既にJacob Burckhardt に由つて企てられた。彼は、一般に歷史哲學に對して反對するにも拘らず、しかも尙ほ彼の「世界歷史的考察」は、ヘーゲル以來の最も深い歷史哲學である。即ち彼はそこに、歷史的生活の三大力場、國家宗教文化の相互關係に關する普遍的法則の展開を試みてゐる。ディルタイ並に彼の學派と見らるべき人々(Spranger, Nohl, Frischeisen-Köhler等)の、歷史の評價關係と其の意味とに關する勞作もまた、單なる認識理論以上のものを包有する。K. Lamprecht(一八五六——一九一五)は、ランケ一派に反對して、歷史の意味と方法とに關して新なる道程を開拓した。歷史學は、自然科學を範として、各民族の發達に等しく妥當す可き自然法則を發見す可きである。而して其の對象は、政治的生活に非ずして文化生活でなければならない。斯くて、彼は總ての民族の文化發達の普遍的傾

型的形式を擧示すべく試みる。斯る形式は、零細なる文化の斷片からでも、比論的推論に由つて、其の屬してゐる文化形態の闡明を可能ならしむ可きものである。彼は、また比較研究による時代の區分を試みて、象徴主義時代、類型主義時代、折衷主義時代、個性主義時代、主觀主義時代の五期を別つ。最近 Wundt もまた歷史哲學を企劃して、新しい時代の區分を試みてゐる。

尙ほ最近には、Natorp は、歷史哲學の視點に立つて、——先づ東洋、猶太、希臘、羅馬、中世、近世の精神を論じ、次に獨逸民族の本質、その信仰、思想、藝術、法律等々を論じ、斯くして——世界史上に於ける獨逸民族の意義と使命とを語る。Oswald Spengler は、西歐の沒落を象徴的に論じて、ゲーテの有機的自然概念の理念に導かれつゝ、世界歷史の形態學を建設せんと試みる。Otto Braun は、過去と現代とを論じて、現代の意味を釋明せんとする。Driesch 等は、浪漫主義が抱有する所謂「イデー」の概念に再び生命を與へて、超個人的立脚點を確保せんと欲む。——斯くして、吾々は新たなる綜合の時代に息づいてゐる。長い間の論理的努力は、吾々を鍊へた。今や歷史學哲の新時代は夜明けんとする。

第九項　獨逸以外の形而上學的思潮

獨逸に於けるよりも遙かに早く、形而上學への轉向は、佛蘭西に於いて現れた。然かも此の傾向は、ここでは、新カント學派そのものの裡に確保されたのであつた。獨逸の新カント學派が、より多く「形而上學の否定者カント」の精神に導かれて、殆んど例外なく、總ての形而上學的理念を拒斥して、論理の徹底を求めたときに、佛蘭西の形而上學は、カント哲學に多分に抱懷せらるる形而上學的理念を保持する事に由つて促進された。けれどもカントの理論哲學のコペルニクス的事業から、再び素朴的獨斷の世界に逆行する事は出來ない。とは言へ、カントは、理論が棄てた形而上學的の珠寶を、意志要請の救出に委せんとする。現代佛蘭西の形而上學は、一言にして言へば、實に意志の形而上學である。既に、十九世紀に於ける佛蘭西哲學の重鎭 Charles Renouvier（一八一八——一九〇三）は、物自體、實體等の理念を捨てたにも拘らず、特に自由と不滅とを確保する。然かも、カントが唯だ叡知の世界にのみ許した所の自由は、ルヌウヴイエにあつては、倫理性の條件として、再び現象界に確固たる位置を確保する。此の自由の承諾は、必ずしも彼の學派にのみ限られず、恐くは現代佛蘭西形而上學の一般に通ずる所であらう。Jules Lachelier（一八三二——一九一八）も、理想主義的の形而上學への傾向を示し、茲より出でて、自由の

形而上學を大成したるものは、Emil Boutroux（一八四五——一九一八）である、彼は先づ偶然性の概念に、鋭利なる洞察を與へる。偶然性は、決して。人間の意志行爲の上にのみ限られたものではなくて、自然そのものの裡に廣汎なる事實である。偶然とは、他者になり得ると言ふ事である。斯くて、彼は、機械的合法性の上に立つ自然科學的理論が、世界內容の理解に不十分なるを示し、精神的の根本本質を自由に於いて發見する。彼より出でたる Henri Bergsonは、現代佛蘭西形而上學の最高頂に立つて、比肩し難き廣汎なる影響を全世界に及べる。ベルグソンの直觀流動の哲學は、經驗批判主義、唯心論、並に新生活主義等の眞精神の徹底から、更に獨自の展開を遂げたものと見る事が出來る。（認識理論に關する項參照）。彼の教ふる所は、實在に參し得べき「直觀」の肯定と、世界の精　的根基としての生命發動力卽ち「生の躍動」の主張である。神的世界根帶、此の生命跳躍の力は、其れ自らの自由創造的にして豫見す可からざる行爲に於いて、世界殊に有機的展開を進展せしめる。彼にとつては、神と雖も決して完結せるものに非ずして、繼續的成生に於いて理解せらる可きものである。神は自らを造るのである。斯くて此處では、創造的進化の思想は、神そのものの上に迄も擴張される。此の生命發動の力への復歸、從つて世界の內的衝迫への動進、それは特殊なる直觀の作用に於いて可能である。斯くて空間に擴充し就中量的なる物質に對立して、生命躍動そのものに執する本來の心的生命は、純粹なる質若くは純粹なる力である。卽ち純粹持續でなければならない。玆でベルグソンは、心身の關係に關して、舊い並行論を捨てて、全く新なる規定を與へる。心が身體に依屬するどころか、寧ろ純粹記憶は腦髓から全く獨立である。腦髓は表象を貯藏する機關ではなくて、自由創造的なる能作的機能の傳達に應ずるのみである。精神は、腦髓を行爲のための道具として、創造的に、物質の機械的構造に働きかける。斯くして、有機體は、無數の記憶の中から、生物學的に合目的的なるものを選擇する。卽ち、ベルグソンの見方は、生物學的見地から出發する。けれども、彼の此の思想は、生物學的にも將た精神病理學的にも、必ずしも確固たる學的基礎に立つものではなく、其處には、謂はゞ神秘的なる色彩の漂ふにも拘らず、心の純粹なる內面性、より高き自我のために、自由創造の餘地を確保して、人格の哲學を說く所に、仰ぎ視る可き思想の崇高さがある。

實證主義の避難所、アングロサクソンの思想界にも——其處に、認識理論に於いては經驗的實證主義的傾向の思潮にも、また形而上學は、新なる生命に目覺めて來た。獨逸の形而上學

確信と、多くの場合に於いて、問題の深甚なる解答を與へんがための必然的假定として現れてゐるのに、米國のWilliam James（一八四二——一九一〇）は、形而上學の基礎を經驗的に確證せんとする。例へば、オイケンにあつては、其の本質に於いては倚ほ必然要求的の假定であり、そして現實の背後により高き精神生命があると言ふ前提のもとに於いてのみ承認せらるる所のものを、ジエームスは經驗に於いて把握し得ると信ずる。

即ち彼は宗教的經驗の本質を、超驗的實在の意識にあると考へる。高められたる宗教心には、特有なる經驗がある。それは、超世界的なる精神的神的勢力、短的に神そのものの經驗である。此の際、單なる想像ではなくて、超驗的の實在が取扱はれてゐるのであると言ふ事を、ジエームスは疑はない。彼の此の見解は、それ故に、通常の意味での形而上學と言ふよりも、寧ろ彼の認識論上の極端なる經驗主義の徹底である。（彼に關する認識論の項參照）。此の宗教心理學上の確信と呼應して、彼はまた變態心理的現象の意義を認め、其の基礎に立つて、通常の意識を超越せるより高い意識を承認し、斯くて經驗的基礎に立つ形而上學の建設に武歩を進める。此の極端なる經驗主義の徹底は、當然（一元論とは全く反對に）多元論に導く可きものである。そこには、神と並んで、神から獨立なる世界勢力の現存が肯定されなければならない。實際に世界の不完全なる所以が此處に存する。神は、神なるが故に、これと戰つて結局凱歌を奏す可きである。人は、神の戰友として此の戰に參加しなければならない。けれど夫れは、嘗て厭世的なる Eduard von Hartmann が欲した樣に、存在の罪惡の故に、世界を再び無に歸せんがためではなくて、寧ろ宇宙を全く神性化せんがためである。

英國に於ける形而上學的思潮の增大は寧ろ怪しむに足らない。由來、現代英國の哲學は、恒に必ずしも經驗論のみの支配に委ねられてはゐなかつた。殊にオツクスフオードを中心とする講壇の哲學には、T. H. Green, Edw Caird 以來、新ヘーゲル學徒の一團が、思潮の舵を取る。就中、Francis Herbert Bradley の觀念論は、現代英國哲學の重鎭でなければならない。其他此の一團に屬する人々には、John Caird（エドワードの兄弟）、William Wlace, Haldane卿、Bernard Bosanquet, J. M. E MacTaggart, Mackenzie, Joachim, J. B. Baillie 史に Andrew Seth（現在は A. S. Pringle-Pattison と改名）等を數へ得るであらう。此等の主知論的傾向に對する F. C. S. Schiller 一派の實用主義的反動も、また形而上學の建設に向ふものである。G. E. Moore. B. Russell 等は實在論を代表する。

Stout. H. Rashdall等はシラーに類似して觀念論と實用主義の折衷派である。更に James Martineau を中心として起つた有神論學派には、A. C. Fraser, J. Lindsay. R. Flint 等を數へ得るであらう。此等の人々は、すべて、何らかの意味に於いて、形而上學を要求する人々である。

嘗てコムトやスペンサーの影響のもとに、永い間實證主義に支配されてゐた (Lombarde Ardigo) 伊太利の哲學も、今や實證主義の根帶を拔き去らんとしてゐる。此の動搖と建設の先頭に、特に二人の哲學者を見る。其の一人は、Benedetto Croce 彼は伊太利哲學の重鎭として、ヘーゲル哲學の改新と展開とを以つて、伊太利の新哲學を建設せんとする。他は Bernardino Varisco 彼は現代の伊太利に特に注目す可き哲學者であらう。卽ち、實證主義的の思想から出でて、今や漸く、ライプニッツに復歸せんとする獨逸現代の思潮に、密に近接す可き傾向を示してゐる。彼は有神論的唯心論に傾いてゐる。其他 Giov. Gentile もクローチエと共に、ヘーゲルを祖述して、新理想主義に赴く。Enriques は、時的生活の擴張としての宗敎に、「自由」を承認する。倘ほ、獨逸の實證主義の如くに、伊太利の夫れも、一般に形而上學へと赴くものである。——和蘭の Bolland も、ハルトマンより出でてヘーゲル哲學に入り、其處にオランダ新ヘーゲル學派を開拓した。J. D. Bierens de Haan 等が屬する。——ボルシエヴイキ以前の露西亞に於いてもまた實證主義の時代は過ぎ去つてゐた。そして其處には、新プラトーン的神秘主義の時代が夜明けつゝあつた。最近の最も主要なる思想家、Wladimir Ssolovjew (一八五三——一九〇〇) は、全く新プラトーン的神秘主義に立つて、哲學を、啓示及び敎會の信仰に融合せんと努めた。ヘーゲル學徒 B. Tschitscherin (一九〇四死) もまた形而上學の基礎を求めてゐた。

第五章　新トーマス主義

最後に、現代の哲學壇上に、特殊の位置を占むる敎會の哲學新トーマス主義に就いて一言しておかう。由來「敎會の哲學」完成たるのトーマス・アキナスの哲學は、加特力の模範哲學として、中世以來六百余年の傳承を保つてゐた。殊に、一八七九年八月四日、トーマス哲學の採用と普及に關するレオ十三世の布告以來、此の哲學は、加特力敎會の正統哲學たるの承認を得て、伊太利、佛蘭西、獨逸、白耳義、和蘭等に於いては、此の主義の確立と普及のために特別なる機關の成立を見るに至つて、今や全く超國境的の精神運動となつてゐる。加特力敎會の存する所、到る所に、此の新トーマス主義は敎へられ

る。――現代の新トーマス主義の哲學は、大體に於いて、認識理論に於いては實在論的であり、形而上學に於いては有神論的傾向を有する。と同時にまた、新生活主義的の色彩を帶び、そして現代の現象學的思潮の論理主義に親近なる思想を表示してゐる。夫れ故に、現代の新トーマス主義は、勿論スコラ哲學の單なる蹈襲に非ずして、其の哲學的立場の根柢に於いて、まさしく現代のものでなければならない。けれども、他面に於いては、新トーマス主義は何よりも教會の哲學であるが故に、極言すれば宗教の檢束の下に立たなければならない。其の世界觀の本質的面目は、教會の傳統權威を通して與へられ、認識と並んで、啓示もまた、道理への道程として承認されなければならない。斷る傳統的權威の束縛、これが、純粹に科學的立場にある人々からの輕蔑を惹起する所以となる。けれども、若し單に自然科學的確信の上にのみ立脚せざるの故を以つて、一概に新トーマス主義を輕侮するならば、それは餘りに不當である。寧ろ、非常に堅固な、哲學の傳統を有し、從つて善良なる思惟の指導教養を賦へ得る此の學派は、斯る傳統を有するが故にこそ、反つて、多くの陥り易き自然科學の誤謬に對して、自ら護り得るものであると謂ひ得ないであらうか。斯くて今日に於いては、教會の權威が超ゆ可らざる限界を呈示しつつある此の學派そのものゝ中から、眞に獨立的なる多くの重要なる思惟が現れてゐる。例へば、獨逸に於いては、Engelbert Lorenz Fischer は、認識理論及び形而上學の根本問題に穿入する。Alfons Lehmen(一九一〇死)も注目す可き一人であつたらう。殊に Jos. Geyser は、アリストテレスの認識論を討究し、また新スコラ主義と、近代の論理學竝に心理學との結合を企てた。更に中世哲學史の研究に於いて、獨逸新トーマス學派の功績は、特に忘る可らざるものがある。例へば、G. v. Hertling(一九一八死)、Clemens Bäumker, Martin Grabmann 等。今や彼等によつて、中世哲學史は、細論に於いてもまた其の組織に於いても大成されやうとしてゐる。

結　尾

以上、極めて不完全寧ろ皮相的にではあるが、現代哲學の主潮を大體に於いて盡したと思ふ。そして各思潮の、現代の哲學界に於ける位置に就いて語つた。廣き意味での哲學の諸分野、心理學、論理學、社會哲學、法律哲學、美學、宗教哲學等に就いては、最初から此の小篇の圏外に置いた。尚ほ、此處に考察すべくして、しかも餘りに盡さなかつたものに、數理哲學と哲學史的勞作とがある。殊に後者に關しては、現代は實に豐饒な

る努力の成果を有するにも拘らず、制限せられたる紙數と時間との爲めに、茲に割愛せざるを得ない。尙ほ此處に擧げられたる現代哲學者の撰擇に關しても、必ずしも適切なるを保し難い事を感ずる。元來、此の小篇は、現代哲學のオリエンテーションの一般を示す事を以つて、全任務としたものであつて、もとより現代の哲學を說き盡さんとするが如き、妄擧に出でたものではなかつた。

現代の哲學が吾々に與へる全體の印象は、不斷の努力の向上である。若し哲學は低徊逡巡すとの非難を與へるならば、夫れは哲學的思惟の本質、ディアレクティークの眞精神を理解せざるものと謂はなければならない。哲學の展開は、分合進化の路上に於ける、ヘラクリット的の精進である。斯くて現代は、史上最も精銳なる認識理論の聚をといた。新なる形而上學と殊に歷史哲學とは、新たる世界觀の基礎を置いて、生命の本質を闡明せんとする。新なる浪曼的理想主義の大組織時代の黎明は告げられやうとしてゐる。嘗てカントのコペルニクス的事業は、眞に內面的自我の自覺を呼び醒して、十九世紀初頭の浪曼主義の大組織を生むだ。併し乍ら古い浪曼主義は、未だ十分に客觀の根柢に達せず、學的嚴密さの要求に於いて未だしきものがあつた。現代の哲學は、新なる生命の發見の上に、嚴密なる學たらんとするの深奧なる內面的要求に目覺めてゐる。現代の浪曼主義は、自然科學の煉獄の底に徹して、其處から生れたる理想主義である。新なる組織は、眞の人間的叡智の上に立つ確信でなければならない。單なる主觀的抒情詩人に非ずして、客觀的なる戲曲詩人でなければならない。澄洌たる黎明の大自然に、新なる生命の脈搏を感じつゝ、わが親愛なるファウストは第二部の路程に上りつゝある。(一九二二・七・一二――一八)

英國に於けるギルド運動

ジー・デー・エッチ・コール

英國に於けるギルド運動は最近に其新しい發展の段階に入つた。一九二二年四月末、全國ギルド同盟は目下異る産業の分野に働いてゐる全てのギルドと、ギルドの思想に全然同意してゐる勞働組合との全國大會を召集した。「此大會は既存の多數のギルドを結合すると同時に、宣傳、調査及びギルド運動の有利な發展にとつて必要な組織の仕事に對しても備へる目的のために、新しい中央的組織、即ち全國ギルド評議會を作ることに決定した。此評議會は目下活動中である。そして諸ギルドは玆に始めて密接に相聯繫することゝなり、ギルドとして認められむことを望む如何なる團體も遵守せねばならぬ所の、明確な規則や標準を決定すべき地位に立つたのである。

此發展は痛切に必要である。『改造』の讀者が多分承知して居られるように、約十餘年前に英國に起つたギルド社會主義の信條は、『産業上の自治』又は一層多く呼ばれてゐるように、『勞働者の管理』をその基礎として居る。これはその唯一の方面ではないが、運動全體の主たる思想である。一九一五年以來、ギルド社會主義者は全國ギルド同盟として組織された。これはギルドの思想を英國勞働運動の核心に傳へて成功した先驅者達の、小さな、然し有力な團體であつた。歐洲戰爭が續いた間、ギルドの仕事は宣傳の段階以上に出づることが出來なかつた。けれども土地は耕され、勞働組合員の心にはギルドの方針に基く實際的經驗をする準備が出來てゐた。

戰爭の終つた後ですら、實際運動を起すには時が要つた。マンチエスターの建築工が實際に最初のギルドを組織し、社會に奉仕する爲に利潤を得ずに働く申出と共に出現したのは、一九二〇年の冬に至つての事であつた。彼等の申出にとつて好都合な機會は、戰時中建築を控えてゐた爲めに起つた非常な家屋の拂底——政府ですらもこれを認めて、公共

的活動を求めたほどの拂底であつた。マンチエスター建築工の申出は、其後全國の建築業に關する職工によつて反復されたが、それは、その自治的なギルドを通じ、且つ共管理の下に、マンチエスターの市會が要求するだけの家を實費で建てようと云ふのであつた。

此申出に關する陳腐な話の種——即ち保健省や、政府の家屋局、及び或地方當局がギルドに加へた妨害——を今更語ることは私の目的でない。建築請負師の激烈な反對や、政府の猜疑に滿ちた敵意にも拘らず、多くの地方當局は地方ギルドの申出を受容れ、中には——全てゞはないが——保健省すらも澁々ながら遂に是を承認した場合さへあつたことだけを云つておけばよい。建築ギルドは國内の諸地方で仕事に取り掛り久しからずして彼等の結んだ契約の總金額は、優に二百萬ポンド以上に出づるに至つた。

一九二一年に成就された次の一步は、此時までに既に百以上に達してゐた全國のあらゆる地方的團體を、單一の全國建築ギルドに結合することであつた。地方の自治を十分に保存し、仕事の上の細微な指圖については、實際に各々の職業で働いてゐる人々に廣大な權力を委ねることに注意が拂はれた。けれども此運動は全國的に結合を行ふもので、其政策は全英國を通じて同一のものであつた。同時にギルドの能力は、公共的建築事業と等しく、私的建築物にも擴張されることゝなつた。地方政廳の爲に建築中の家屋は、最も痛切な公共的必要を代表して居るので、仕事は先づ其等から着手された。けれども一九二一年には、政府の家屋政策は敗れて、ギルドがあらゆる種類の建築と裝飾とを引受けることが明かに必要となつた。そこで新しい部門が開設せられ、既に國内の建築業傭員の絕對多數を集めてゐるギルドはあらゆる種類の仕事に對して、最も用意の十分なものにならうとした。

此時までに、建築職工の示した例は、一般公衆と共に、勞働組合運動の他の部門の注意をも廣く惹き始めた。全國ギルド同盟はその宣傳事業を熱心に續けた。けれども最良の宣傳が、既に市稅及び國稅負擔者から何萬ポンドの負擔を輕減しつゝあつた。建築ギルドの行ふた實際の仕事の中に見出されたことは勿論である。故に既に久しい間、ギルドの宣傳者に對して同意して居つた多くの職業に於ける勞働者が自分自身のギルドを作つて、自由な自治的條件の下に資本主

義と對抗する生産組織により、利潤の代りに、共産的奉仕を以てよい仕事をする上の刺戟とし推進力として、資本主義を崩壊する仕事に着手したのである。

　そこでギルドが多くの産業の中に現れ始めた。建築ギルドと密接な關係のある造作及び家具ギルドは倫敦及びマンチエスターで仕事を始め、極めて顯著な急速な成功を收めた樣子である。被服工ギルドは倫敦及びグラスゴーに起され、他の何處に於ても目下創立中である。農業ギルドはウエルウインで仕事を始め、牛乳、クリーム其他の乳及び蔬菜の産物の第一流の生産者として名聲を博してゐる。製帽工、製本工、園藝勞働者、板金工、及び商店員までも其仲間に入りギルドの條件の下に働き始めた。他の多くの場合、即ち牛乳の分配、樂器製造、印刷、及び一般機械業に於ては假ギルドが作られて、生産的勞働を引受ける第一歩が踏み出された。

　此處までは先づこれでよい。けれども勿論その多くは必然に小規模である所の此發達全體は、ギルド運動がやつと最初の困難に遭遇して居るにすぎぬことを思出した。生産上の實際課程に關する限りでは、建築其他のギルドのやつた仕事は産業的デモクラシーと、それの最も本質的な點、即ち民主的な指導權に服する能力を示すに十分であつた。けれども勞働者に取つては、いかに決定的なものにせよ、たゞ彼等が産業を管理する力をもつといふことを示すだけでは十分でない。何故ならさういふ示威は現存の産業組織の全基礎を明白に威嚇するからである。反對を受けるのは當然豫期せらるべきことで、ギルド運動の確立した處には、何處でも既に反對が起つたのである。けれども現在の傭主がギルドに對して提出すべきいかなる反對よりも恐ろしいのは、勞働者がギルドの企業を起すに當つて、資本主義によつて支配されてゐる社會で働かねばならず、勢ひ必然に大體に於て資本主義の命ずる條件に服さねばならぬことである。

　既に確立されたギルドの大多數は極めて小規模で立派に遂行され得るような産業や、大仕掛の發展をするにも、極めて少額の固定資本しか要らぬ産業で働いて居る。被服仕立、製本、及び造作は小さな貸工場で、極く僅少の資本の準備があれば足る。建築は大規模の産業であるし建築ギルドは極めて大きな仕事を引受けることも出來たが、然しこれも仕事の大さに比して、必要な固定資本の量は甚だ少いのである。これには比較的費用の多からぬ工場が要するのみで、貸

銀や材料の爲めに必要な金はその仕事に對する支拂を擔保として大部分借用することが出來る。故に他の大規模の產業に比して、ギルドの實驗をするのに特に有利なのである。

然るに若し紡織工、造船工、鐵又は銅鐵工がギルドを起さうとするならば、先づ第一に極めて高價な工場を持たねばならぬ。經濟學上の用語に依れば、それは固定資本を多量に要する。若し鐵道從業員の一團がギルドの思想に變つたとすれば、形勢は一層不利である。何故なら今日ではもはや新しい鐵道は敷設せられず、鐵道を買取ることは殆ど不可能である。故に建築工の採り得た方法は、同じ程度に、大抵の他の大規模の產業も採り得るものではない。農業ギルドは組織的なトラストの基金から合理的な條件で多額の資本を借り受けるやうな機會があつた許りに仕事を始めることが出來たのである。若しギルド運動が直ちに大規模の發展をすべきであるならば、投下資本が非常に多額でなくとも濟む產業の方面に向つて主として擴張せられるべきである。のみならず、是等の有利な方面の發展に必要な比較的少額の金ですら作ることは容易でない。建築ギルドはその現在の規模以上に擴張されることを、唯だ資本の缺乏のみのために妨げられて居る。そして此點は現に働いてゐるどのギルドとても同じことである。園藝勞働者は附屬の種苗場を買取る爲めに數千ポンドを要して居る。家具工は新しい職場と、實驗を行ふ爲めに多少の餘分の財源を必要として居る。勞働者が金の返つて來るのをせめて數ケ月の間でも待つて居られるだけの豫備金がない時には、仕事の範圍は大に局限せられる。協同組合の銀行によつて前貸せられた負債の助けによつて多少の仕事は出來た。けれども協同組合運動が、或方面に於てはその未來の競爭者と看做してゐるギルドの發展を援助する力にも、またその好意にも際限がある。財政難はギルド運動全體を通じて重大である。

然らばギルド主義者は何處に援ひを求めるか。彼等は此困難を切拔ける道を求めることが出來ようか。資本主義の下に於ては此問題は解決が出來ぬと考へ、たとへ小數のギルドがその地位を保ち得るにせよ、資本主義が社會を支配して居る限り、ギルド運動の大擴張は出來ぬと考へる一派がある。彼等は彼等特有の考へ方によつて、ギルドに社會の援助を與へる力のある勞働政府の出現か、又は現存の秩序の急激な破壞とそれに伴ふ、勝ち誇つた勞働者の『一切の權力』

の掌握かを待ち設けて居る。けれども私はそんなに直ぐに絶望する理由は少しもないと思ふ。ギルド組織の一般的な擴張が、社會に於ける政治及び經濟的權力の分配の深刻な變化に伴はれなくては不可能であることは十分に認めねばならぬ。けれどもこれは、さうした變化が來ぬうちは、いかなるギルド的行動を採ることをも全然控えねばならぬといふのは別問題である。

然らば吾々がギルドの發展のために要する資本は何處に求めることが出來よう？ 吾々は先づ第一に小さいことから話して行かう。現存のギルドの中には勞働者自身によりて、勞働者の間から集められた少額の金で經濟を立てゝゐるのがある。一職業の從事者に對して少しづゝの寄附金を課すれば忽ちに少からぬ金額となる。そしてかようにして最初の資本を作ることが、小産業に新しいギルドを起す主要な方法の一つとなつて行くであらうといふことを私は信じてゐる。勞働者から僅かの然し直接の犧牲を要求する寄附金は、單に仕事の運轉を可能にするのみならず、從業員の十二分の興味を惹きつけ、且つ彼等が寄附をしなかつた場合よりも、ギルドが明確に自分らの問題があることを感ぜしめることが出來る。然し此財源は多少大仕掛の發展には全然不足であるし、簡單な産業の外、新たにギルドを起すにも足りない。

第二に、勞働組合が存する。かなり多額の基金がある。現在の英國に於ては失業手當として拂ひ出される多額の金額の爲めに甚しく減損されて居る。けれども組合の中には猶ほ多額の金を左右し得るものがあり、勞働組合の基金は過去に於て急速に回復することが示された。建築ギルドを始め、現存のギルドの下には、勞働組合の財源から有力な援助を得たものがあり、此種の助力は、將來大に寛大に與へられる望みがある。ギルドは勞働組合に直接基礎を置き、結局それによつて管理せられる。ギルドは、組合員にとりては、賃銀奴隷制度よりの逃れ路を代表し、且つ組合の條件に讓歩せねば、ギルドの競爭によつて全滅せしめられる恐れある普通の傭主に對する際の、組合の交渉の力をも増大するものである。故にギルドは勞働組合の上に極めて有力な請求權をもつて居る。そして現在に於けるギルドの宣傳の主たる目的の一つは、組合をしてその全力をギルド運動に注がせることである。けれども此財源でさへも、十分に利用した處で、急場の間に合はせるといふ以上に、幾何も出で得ないことは明白である。

ギルド運動は暫くの間、在來のもの以外の財源を見出す問題を考慮して居つた。普通の資本家の投資者は、公然彼の滅亡を目的とする運動に對して好意を抱くべき筈がないから、是等は、たとへ勞働階級のみでないまでも、主として勞働階級及びその同情者の中に求められねばならぬとは明白である。所で勞働階級は目前の必要を滿たす爲めに、勢ひ其貸銀の大部分を消費する。けれども勞働階級の貯蓄の總額は、甚だ巨額である。そして此貯蓄の最大部分は資本家の手に入つて、彼等によつて搾取の道具に用ゐられる。大きな保險會社は毎週勞働階級から、會社が保險金として拂ひ戻すよりも遙かに巨額な金を徵收する。是等の金額は保險會社をして、その最も密接な聯絡をとつて働いて居る合資銀行ですらも叶はぬほどの、最も强大な投資資本家の集團とならしめたのである。今日勞働者がその搾取者に支拂つて居る此巨額の金を、勞働者自身の支配の下に留め、そして必要な資本の財源を供給することによつてギルド運動の擴張を刺戟する爲に用ゐることは出來まいか。

此思想の中から種々の産業に於ける、あらゆる生産ギルドと密接に結合し、そして恐くはギルドの銀行を通じて彼等の共同の財政家として働く所の、保險ギルドの計畫が發展した。然しその計畫は現在では無くなつてゐる。のみならずこれを行ふには非常な障害がある。現在の保險會社及び團體はその要害頗る堅固で、ギルドの『モグリ商人』を敗るためには如何なる手段をも用ゐるに相異ない。けれども保險業は甚だ見込が多く、且つ一旦起された以上勞働階級の保險の闘する範圍に於ては、確實である。であるから此計畫は必要な準備的仕事が完成せられると同時に試みられる價値がある。準備的仕事としては、主として組織的な勞働運動に對して、保險業をそれ自身の支配の下に置くこと、且つその目的のために創立せらるべき勞働運動内部の團體に誠意ある助力を與へることの必要を信ぜしめねばならぬ。いかなる國に於ても、産業も勞働階級の保險もまだ發達の初期に在る日本のような國に於ても、勞働階級はその保險の支配權を棄てゝはならぬ。即ち勞働者自身の貯蓄の大部分を自分の手に握つて居らなくてはならぬ。

ギルドの保險の、これ以上の利益は、保險の勸誘及び集金の仕事と、他のギルドを表明する仕事とを、結合することによつて、非常な發展を促すことである。—保險の勸誘員又は集金人は各々の生産ギルドの爲の勸誘員たり注文取たるこ

とを兼ねることが出來。かようにしてギルドが主として其爲めに働かうとする所の勞働階級の公衆と、ギルド運動とを絕えず接觸させることが出來る。もしこれが行れたならば、此方法は非常な節約と、急激な發展とを齎らす見込がある。のみならず、賃銀率を平均する上に非常に有益であつた勞働者の團體交渉は、勞働階級の家賃に對する場合にも同じく有利ではあるまいかと云はれてゐる。ギルドの監督の下に於ける團體が勞働階級の家賃の集金人となり、家主との間に團體交渉を行ふて、勞働階級の支出の今一つの重大な部分の支配權をその手に收めぬ道理はあるまい。私は此計畫がモウ十分に發達したものとは主張せぬ。けれどもそれはギルド主義者が經濟上の困難に應じようとする企ての方向を示す一助とはなるのである。

けれども勿論是等は將來に對する希望や計畫にすぎぬ。然るにギルドの發展に對する經濟上の障害は、目前、然かも急を要することとである。家賃や保險をギルドで支配することが出來ぬので、ギルドの發展は、現在の所では、比較的少額の資本を要する產業に限られて居り、それらの中ですらもその仕事の數は漸次に增加するにすぎぬ。けれども若し私が信じて居るように、經濟上の困難だけでは運動の非常な發展を阻止するに足らず、まして運動を殺すに足らぬとすれば、ギルドが殖えぬことについては一言云つておかねばならぬ。徐々の進步はより多く實驗の自由を與へ、且つあらゆる生きた民主的運動の初期には避けることの出來ぬ、間違を犯したり、遣り直したりする機會をも、より多く與へるものである。

然しながら實際上のギルドの成功は、いかに重大なものにもせよ、單にそれを積み重ねるばかりではギルド社會主義及びそれの要求するような根本的變化を來すことは出來ぬ。ギルドの組織はあらゆる產業、政治上及び經濟上のあらゆる社會の組織の根本的變化を包含する。ギルドは國有產業の場合でも、他の場合と同じく必要である。現に郵便勞働者は郵便ギルドの功業をその組合の目的としたことによつて十分に認められて居る。ギルド主義者の目的は單に此處彼處にギルドを創立することにあるのでなく、產業及び社會の全基礎を利潤より奉仕へ變へることに在る。ギルドの問題は先づ第一に產業的及び經濟的ではあるが、それには必然に政治的の問題も伴隨して來る。

然しさうかと云つて、ある一定のギルドの實際の功業が詰らぬものだといふのは非常な間違ひである。とり分け、勞働者は自信―産業と社會の支配權を自己の手中に收めるだけの自分自身の力と能力とに對する信念、―に乏しい。ギルド運動の制限されたる成功ですらも、非常な助けとなるのは恰度此處の所である。『若し建築工又は家具工が民主的な基礎に基いてその産業を運轉し得るとしたならば、吾々にも何で出來ぬことがあらう？』他の職工の團體がかう自問するのは當然である。ギルドの思想、更にギルドの實際は傳染的なものである。それはすぐ傳染する。その成員が自由な自治的奉仕の合理的な條件を樂しんでゐるギルドの實例は、あらゆる宣傳者の遂行し得る、あらゆる宣傳だけの價値をもつてゐる。『もしあの男が自由だとしたなら、何故私は奴隷でゐるのだらう？』といふのは、自由人と奴隷とが同じ社會的階級に屬し、ツイ最近まで同じ狀態に居つた場合に、その理由を明かにせずにはおかぬ論結である。

故に現存のギルドはそれ自身としてよりも、他の産業に從事する勞働者への模範として一層重要である。此點に於ては、その價値は既に十分證明せられた。彼等は勞働組合の上に直接基礎を置き、勞働組合運動全體を徐々にその思想に同化しようとして居る。勿論彼等は失敗するであらう。そしてギルドの勞働者は、資本主義が彼等の途上におき得る障害には、打克つことが容易でないことを十分に覺るであらう。けれども失敗でさへも、それが内部から來たものでない限り、――この方は餘り、機會がない――全然の失敗とはなるまい。實例はなほ與へられ、種子は播かれるであらう。伊太利と同じく英國の勞働運動は、勞働者の産業管理の欲求を以て、遠い未來の、有り得るかも知れぬ幻影として語らるべき單なる理想としてのみならず、積極的に遂行せらるゝために、根氣強い努力と協力的な自信とのみを要する所の直接な、實際問題として看るように教へられねばならぬ。眼前の實際的仕事に對する此自信は、一日にして勞働階級運動に來らすことは出來ぬ。けれどもそれは來りつゝある。そしてギルドの發展はそれを實現せしめる最も有力な要素だつたのである。古い宣傳本位の全國ギルド同盟と密接な關係のある新しい全國ギルド評議會は、此自信を植え込む任務があり、組合運動全體を糾合してギルド運動を支持し、且つその仕事の範圍を擴張する事業に參加させる任務がある。今日、英國の勞働界の一般的狀態は沈滯し切つて居る。けれども私は、ギルド運動の引續いての成長と成功とは一般の沈滯に比して著しい對照を爲すものであると云つてよからうと思ふ。それは人間の手ほどの大さの雲である。それは勞働者が萬人の利益の爲めに社會を管理する事業に眞面目に着手するだけ十分に、自分自身及び自分の仲間を信頼することを學ぶと同時に勞働者にとつて非常な事が起ることを示す預言者である。

The working-class movement, in Great Britain as in Italy, will have been taught to regard the aspiration for worker's control in industry not as a mere ideal to be talked about as a possible vision of the distant future, but as an immediately practical thing, which requires only persistent effort and co-operative self confidence to be positively achieved. This conviction of a practical task before it cannot come to the working-class movement in a day; but it is coming, and the Guild developments have been the most powerful factor in bringing it into existence. The new National Guild Council, which is closely linked up with the older propagandist National Guilds League, has before it the work of driving this conviction home, and of rallying the whole Trade Union movement to the support of the Guilds and to the work of extending their field of operations. The general condition of the Labour world in Great Britain to-day is depressed enough; but I think I may say that the continued growth and success of the Guild movement is in marked contrast to the general depression. It is the cloud as big as a man's hand—the foreteller of great things to come for the workers, as soon as they learn to trust themselves and their fellows well enough to set seriously about the task of controlling Society in the interests of all.

is not enough to prevent considerable extension, and certainly not enough to kill the movement. Gradual progress gives more freedom for experiment, and more chance to make and retrieve the mistakes which are inevitable in the early stages of any living democratic movement.

Clearly, however, Guild Socialism and the fundamental change of system which it postulates, will not be secured by any mere accumulation of practical Guild successes, however considerable these may be. The Guild system involves a fundamental change in the structure of all industry, and in the organisation of Society, political as well as economic. Guilds are just as necessary in industries which are nationally owned as in others, as the Postal Workers, in making the achievement of a Postal Guild the object of their Union, have fully recognised. The aim of the Guildsmen is not merely to establish a Guild here and there, but to change the whole basis of industry and Society from profit to service. The Guild question is primarily industrial and economic; but its implications are also inevitably political.

It is, however, quite a mistake to suggest that, because this is so, the actual achievements of particular Guilds are unimportant. Above all else, the workers lack self-confidence-trust in their own power and ability to take the conduct of industry and Society into their own hands. It is just in this respect that even limited practical successes of the Guild movement help enormously. "If the building workers, or the furniture workers, can run their industry for themselves on a democratic basis, why should not we?" it is natural for other bodies of operatives to ask themselves. The Guild idea, and, still more, the Guild practice, are contagious: they catch on. A practical example of a Guild at work, with its members enjoying reasonable conditions of free and self-governing service, is worth all the propaganda that all the propagandists can achieve. "If that man is free, why am I a slave?" is an argument which cannot but tell when the free man and the slave are both of the same social class, and were but recently in the same condition.

The existing Guilds, therefore, are important less in themselves than as examples to workers in other industries. In this respect, their value has already been amply proved. They are based directly on the Trade Unions; and they aim at assimilating the whole Trade Union movement gradually to their ideas. They may fail, of course; and the Guild workers are fully conscious that the obstacles which Capitalism can place in their way may be too strong to be overcome. But even failure will not be complete failure, unless it comes from within; and of that there is little chance. The example will have been given, and the seed sown.

the various industries, and acting, perhaps through a Guild Bank, as their common financier. There are, indeed, considerable difficulties in the way. The existing Insurance Companies and Societies are very strongly entrenched, and will certainly use every method to defeat any Guild 'interloper.' But the insurance business offers such opportunities, and, once started, is so secure as far as working-class insurances are concerned, that the plan certainly deserves to be tried as soon as the required preliminary work is completed. The preliminary work consists mainly of convincing the organised Labour movement of the necessity for bringing insurance business under its own control, and for giving loyal support to its own organisation to be established for the purpose. In any country, such as Japan, where both industry and working-class insurance business are at an earlier stage of development; the organised workers certainly ought not to let the control of insurance—that is, of a large part of their own savings slip out of their hands.

A further merit of Guild insurance is that, by the combination of insurance canvassing and collecting with the publicity work of the other Guilds, great expansion might be promoted. The insurance agent or collector could be the agent, and collect orders, for each of the producing Guilds, and could thus bring the Guild movement into constant touch with the working-class public for which it desires mainly to work. There is in this method, if it can be established, a prospect of large economies as well as of rapid expansion.

Moreover, it is suggested, would not collective bargaining by the workers, which has proved of such advantage in the levelling-up of wage-rates, prove to be of equal advantage in dealing with the rents of working-class houses? Why should not an organisation under Guild auspices become the one rent-collector of the working-class, driving a collective bargain with the landlords, and thus getting into its hands the control of another substantial item of working-class expenditure? I do not pretend that this plan is yet fully developed; but it helps to indicate the lines along which Guildsmen are thinking in their attempts to meet the financial difficulty.

These, of course, are only hopes and plans for the future, whereas the financial obstacles to Guild development are immediate and pressing. Failing some such success as the Guild control of rent and insurance, Guild development is bound for the present to be restricted to the industries requiring comparatively little capital, and, even in these, to only a gradual increase in the scale of its operations. But there is, after all, something to be said for not growing too fast, if, as I believe, the financial difficulty

only to provide the sum needed to get things going, but also to enlist the fullest interest of the members, and to make them feel, even more than they would without it, that the Guild is very difinitely their concern. It must, however, be recognised that this source is wholly insufficient for any extensive development, and inadequate even to enable a start to be made in any but the simpler industries.

Secondly, there are the considerable funds held by the Trade Unions. In Great Britain at the present time, these funds are very seriously depleted on account of the huge sums paid away in unemployment benefits; but some trades still have very large sums standing to their credit, and Trade Union funds have shown in the past a rapid power of recuperation. Some of the existing Guilds, including the Building Guild, have received substantial help from Trade Union sources, and this form of assistance will have to be far more generously extended in the future. The Guilds are based directly upon, and ultimately controlled by, the Trade Unions. They represent, for the Trade Union members, an avenue of escape from wage-slavery, and they also increase the bargaining power of the Unions in dealing with the ordinary employer, who can be threatened with extinction by Guild competition unless he concedes the Union terms. The Guilds have therefore a very powerful claim upon the Trade Unions; and one of the principal objects of the Guild propaganda at the present time is to get the Unions to throw the whole of their weight behind the Guild movement. But even this source, used to the full, will manifestly go no more than a little way towards meeting the need.

The Guild movement has for some time been considering the problem of finding further sources of revenue. It is clear that these must be sought mainly, if not exclusively, within the working-class and among its sympathisers; for the ordinary capitalist investor is not likely to look with kindness on a movement which openly aims at his extinction. Now, the working class perforce spends the greater part of its wages in meeting immediate wants. But the sum-total of working-class savings is very large indeed; and by far the greater part of this now goes into the hands of capitalists, to be used by them as an instrument of exploitation. The great Insurance Companies collect, week by week, huge sums from the working-class—far more than they ever pay back in the form of benefits. These sums have made the Insurance Companies the most powerful investing capitalist group in the country, not even excepting the great Joint Stock Banks, with which they work in the closest conjunction. Cannot these huge sums, which the workers now pay to their exploiters, be somehow retained under the control of the workers themselves, and used as a means of stimulating the expansion of the Guild movement by providing the necessary capital resources? Out of this idea has developed the plan—it is at present no more—for an Insurance Guild, closely linked up with all the producing Guilds in

impossible undertaking. The methods, therefore, which were open to the building workers are not open, in at all an equal degree, to the workers in most other large-scale industries. The Agricultural Guild was able to begin operations only because the chance came its way of hiring a large amount of capital on reasonable terms from a sympathetic Trust Fund. If the Guild movement is to develop immediately on a large scale, the expansion will have to take place mainly in industries which can be operated without a large supply of invested capital.

Moreover, it is not easy to raise even the comparatively modest sums required for development in these more favourable cases. The Building Guild is prevented only by lack of capital from expanding far beyond its present scale: and the same is true of every Guild now at work. The horticultural workers need a few thousand pounds for the purchase of an additional nursery garden: the furniture workers need fresh workshops and some spare resources for experiment. The range of operations is seriously restricted if there are not reserves enough to enable the workers to wait even for a few months for returns to come in. Something has been done with the aid of credits advanced by the Co-operative Bank; but both the power and the willingness of the Co-operative movement to assist Guild development, which it regards in some spheres as a potential rival, are limited. The money difficulty is serious throughout the Guild movement.

Where, then, Guildsmen are asking, can they look for an issue out of this difficulty? There is a section which is inclined to regard the problem as insoluble under Capitalism, and to say that there can be no great expansion of the Guild movement, even if a few Guilds are able to hold their own, as long as Capitalism remains in power over Society. These, according to their particular ways of thought, look forward either to the coming of a Labour Government with power to give public aid to the Guilds, or to a catastrophic overthrow of the present order, followed by the assumption of "all power" by the victorious workers. But I see no reason for despairing so easily. It must, I think, be fully admitted that no general extension of the Guild system is possible without profound changes in the distribution of both political and economic power in the community; but this is quite a different thing from saying that we must wait for such a change before taking any Guild action all.

What sources, then, are there to which we can look for the capital needed for Guild development? Let us take small things first. Some of the existing Guilds have been financed by small sums collected by and from the workers themselves. A small levy on the members of a trade speedily produces a not inconsiderable sum; and I believe that the raising of initial capital in this fashion will continue to be among the principal methods of getting new Guilds started in the smaller industries. The whip-round for money, demanding from the workers concerned a small but direct sacrifice, serves not

in process of formation elsewhere. An Agricultural Guild began operations at Welwyn, and speedily established its reputation as a first-class producer of milk, cream and other dairy and vegetable produce. Hat and cap makers, book binders, horticultural workers, sheet metal workers, and even commercial clerks entered the lists, and began to render service under Guild conditions. In many other cases—milk distribution, the making of musical instruments, printing, and general engineering, provisional Guild bodies were brought into being, and the preliminary steps were taken towards the undertaking of productive work.

So far, so good. But, of course, all this development, much of it necessarily on a small scale, found the Guild movement only at the beginning of its difficulties. So far as the actual processes of production are concerned, I think the work already done by the Building and other Guild is enough to demonstrate the capacity of the workers for industrial democracy, including that most essential feature of it, the acceptance of democratic leadership. But it is not enough for the workers to demonstrate, however conclusively, that they have the power to conduct industry; for such a demonstration clearly menaces the whole foundation of the existing industrial system. Opposition was to be expected; and it has already been encountered wherever the Guild movement has taken hold. But more potent than any direct opposition which the present employers may offer to the Guilds is the fact that the workers, in starting Guild enterprises, have to work in a Society dominated by Capitalism, and must of necessity conform largely to the conditions which Capitalism dictates.

It will be noticed that the majority of the Guilds which have been established are operating in industries either capable of being carried on successfully on a very small scale, or requiring very little fixed capital even for extensive development. Tailoring, book-binding, and furnishing can all be carried on with success even in small rented workshops, and with a very small capital equipment. Building is indeed a large-scale industry, and the Building Guild has been able to undertake very large operations; but it is an industry in which the amount of fixed capital required is very small in comparison with the magnitude of the work. It requires comparatively little expensive plant; and the money required for wages and materials can mostly be borrowed on the security of the payments due for the work. It is therefore, in comparisons with other large-scale industries, an exceptionally favourable field for Guild experiment.

On the other hand, if a body of cotton operatives or shipbuilders or iron and steel workers desires to start a Guild, it must somehow possess itself first of all of a very expensive plant. In terms of economics, it must have the use of a large amount of fixed capital. If a body of railwaymen is converted to the Guild idea, the position is even more difficult; for new railways are not established nowadays, and to buy a railway is an almost

Manchester City Council might require.

It is not my purpose here to tell again the thrice-told tale of this offer—of the obstacles thrown in the way of the Guild by the Ministry of Health, the Government department responsible for housing, and by some of the local authorities. It is enough to say that despite the vigorous opposition of the master-builders and the suspicious hostility of the Government, many local authorities accepted the offers of the local Guilds, and in some of these cases, though not in all, the reluctant sanction of the Ministry of Health was finally secured. The Building Guilds set to work in many parts of the country, and before long the contracts which they had in hand reached a total value of well over two million pounds.

The next step, accomplished in 1921, was the linking up of the local organisations all over the country, by this time well over a hundred in number, into a single National Building Guild. Care was taken to preserve a sufficiency of regional autonomy, and to leave wide powers to the men actually engaged on each job for the detailed direction of the work; but the movement was co-ordinated on national lines, and its policy was made uniform throughout the whole of Great Britain. At the same time, steps were taken to develop the Guild's capacity for private, as well as public, building work. A start had been made with the houses which were being erected for local governing authorities, because these represented the most urgent popular need. But in 1921 the Government housing policy collapsed, and it became obviously necessary for the Guild to be ready to undertake all kinds of building and decorating work. Accordingly, new departments were established, and the Guild, already by far the largest building employer in the country, set out to make itself also the best equipped for all types of work.

By this time, the example of the building trade workers had attracted widespread attention in other sections of the Trade Union movement, as well as among the general public. The National Guilds League vigorously pursued its propaganda work; but the best propaganda was undoubtedly found in the actual work done by the Building Guild, which was already saving the ratepayers and taxpayers many thousands of pounds. It was therefore not surprising that in many trades the workers, who had long listened sympathetically to the Guild propagandists, conceived the idea of forming Guilds of their own, and setting to work to undermine Capitalism by instituting a rival system of production under free and self-governing conditions, and with communal service, instead of profit, as the driving force and incentive to the doing of good work.

Guilds, therefore, came into being in a number of industries. A Furnishing and Furniture Guild, closely allied to the Building Guild, began work in London and Manchester, and secured a very remarkable and rapid success. Clothiers' and Garment Workers' Guilds were started in London and Glasgow, and are

The Guild Movement in Great Britain.

Its Position and Recent Progress.

By G. D. H. Cole.

The Guild movement in Great Britain has recently entered upon a new stage of its development. At the end of April, 1922, the National Guilds League convened a national conference of all the Guilds now operating in different spheres of industry, and of Trade Unions which have definitely endorsed the Guild idea. This Conference determined to establish a new central organisation, the National Guild Council, for the purpose both of linking up the numerous Guilds already in existence, and of providing for the propaganda, research and organising work necessary for the successful development of the Guild movement. This Council is now at work; and for the first time the Guilds are now closely co-ordinated, and in a position to lay down definite rules and standards to which any body which claims to be recognised as a Guild must conform.

This development was badly needed. As readers of the *Kai-zo* are probably aware, the doctrines of Guild Socialism, which originated in Great Britain rather more than a decade ago, have as their basis the demand for "self-government in industry," or, as it is more often called, "workers' control." This is not their only aspect; but it is the leading idea of the whole movement. From 1915 onwards the Guild Socialists have been organised for propaganda in the National Guilds League, a small but energetic body of pioneers who have successfully carried the Guild idea into the very heart of the British Labour movement. As long as the European War continued, Guild work could not be carried beyond the stage of propaganda. But the soil was made ready, and the minds of Trade Unionists were prepared for practical experiments on Guild lines.

Even when the war was over, it took time to make a practical start, and it was not until the winter of 1920 that the building operatives of Manchester actually organised the first Guild, and came forward with their offer to work without profit in the service of the community. The occasion favourable to their offer was the acute housing shortage caused by the suspension of building during the war,—a shortage which even the Government recognised as calling for public action. The offer of the Manchester builders, subsequently repeated by building trade workers throughout the country, was to undertake, through their self-governing Guild and under its control, to erect at cost price as many houses as the

マルクス傳の一資料

小泉信三

此文章は始めマルクスの『自敍傳』と云ふ標題を附けるつもりでゐたが、それでは明かに誇大に失するので、改めて右の通りにしたのである。明かに誇大には失する。併しまた全くの嘘ではない。左に揭げるところはマルクスが四十二の時（一八六〇年）、其辯護士 Weber に訴訟用の參考資料として、自己の經歷及び性格を說明する爲め、記して與へた覺書の翻譯である。此訴訟は Nationalzeitung の主筆に對して提起せられたもので、事件は端を Carl Vogt のマルクス誹毀に發してゐる。マルクスは Vogt の誹毀に對して、法律上では、此に基づいて失敬な社說を揭げた Nationalzeitung を訴へ、文筆の上では Herr Vogt (1860) を著はして之に制裁を加へたのである。

Vogt 事件の顚末を記すと、此男のマルクス誹毀は、マルクス自身は殆ど與かり知らぬと云つて好いが、マルクス門下の側では幾分之を挑發した嫌がたしかにあつたのである、Vogt は自然科學者唯物論者であつたが、政治運動に携はることを好んでフランクフルト國民議會では左黨領袖の一人であり、五人の Reichsregenten が選ばれたときには、選に當つて其中の一人となり、ギイセン大學教授の位置は、政治運動の爲め已むを得ず棄てゝ、一八五二年來ジユネエヴに住んで居たが、際してリヒラアト其他在倫敦の獨逸亡命客に之を示し、且つ此方針に基づいて、新に起された瑞西の一週刊紙に對して寄稿を求めて來た（一八五九年四月一日）。マルクスが Vogt の行動に不感服であつた事は、そのエンゲルス宛の書簡に依ても窺ふことが出來るけれども、併し公けには彼れに對して何等の攻擊を加へなかつたが、マルクスの友人で、特に親密ではなかつたが革命時代以來彼れと交通してゐたものに Karl Blind と云ふ人物があつて、これがマルクスに Vogt の秘密なるものを告げた。Vogt は獨逸を賣らんとするもので、奈翁三世の補助金を得て運動して居る、或る南獨逸の操觚者に三萬グルデンを賄しようとした、倫敦に於ても賄賂を試みようとした。伊太利戰爭は旣に一

八五八年の夏ジュネエヴでジェロオム・ナポレオン公とFazy並に一味の者との會見に於て討議せられ、將來の伊太利王としては露西亞のコンスタンチン大公が指定せられてゐる云々といふのである。マルクスはこの話を自分もその特別寄稿家となつたDas VolkのBiscamp に聞かせたところが、後者はマルクスに計らずに、之を種にしてVogtに對する嘲弄的な文章を其紙上に掲げ、其一部を彼れに送つた。これ丈けならばまだ好かつたのであるが、更にリイブクネヒトはDas Volkの印刷所に於てVogt攻撃の匿名冊子で、上記の秘密暴露の記事を含むものの校正刷を發見し、且つ植字工某の證言するところに依れば、その原稿はBlindから廻附せられ、且つBlind自筆のものであつたと云ひ、校正も亦Blindの手跡に依て行はれて居つたと云ふのに安心して、兩三日の後其試刷一部を、その通信員をして居たアウガスルグのDie allgemeine Zeitungに送り、且つ附加へて、此冊子の著者は最も信賴すべき人物で、書中の記事には悉く證據があると云ひ送つた。ところがDie allgemeine Zeitungで此冊子を紙上に掲載するとはVogtは該新聞に對して誹毀の訴訟を提起したので、新聞社はリイブクネヒトに約束の擧證を求め、リイブクネヒトは同じくそれをBlindに求めると、後者は之を拒絕し、冊子の內容の如き事實をマルクスに告げた事實は已むを得ず之を承認したが、冊子の著者は自分ではないと云張つてきかなかつた。(Blindの虛言者なる事は後に明かにされた)リイブクネヒトは甚だまづい立場に陷つたのである。不思議にも獨逸の裁判所は、これでも有罪の判決を下さないで、結局Vogtの敗訴には歸したが、之が爲めVogtは不當の攻撃を受け、不當の攻撃を受けたにも拘らず、法律は彼れを保護しなかつたと云ふ事實を世に示す形ちとなつて、其立場は非常に有利になつたのである、

然るにVogtはこれ丈けに滿足することをしないで、「予のDie allgemeine Zeitung告訴事件」と題する印刷物を公にした。これより先きdas VolkにVogt嘲弄の記事が掲げられた場合にも、彼れはBieler Handelskourierに一文を寄せて、マルクスを戴く一派の亡命客は元と「惡黨」Schwefelbandeと稱せられた連中であつた、此連中は獨逸勞働者の間に陰謀を企てゝ居るが、其陰謀は大陸の秘密警察には悉く分つてゐて、必ず勞働者を不幸に陷らしめるものであるから、勞働者は宜しく彼等に對して警戒しなければならぬと云ふ意味の事を書いたが、今其「告訴事件」を公にするに及んで、前日の誹謗を更に詳にして繰返し、殊にマルクスを以てもと革命運動に加擔した事のある人々に對して、其の謂はゞ舊惡を種に金錢を强請する脅嚇取財團の團長

たるものとした。此刊行物は可なりセンセエションを惹起したが、前記の通り Nationalzeitung は、此材料からして造り出した二篇の長文論説を紙上に掲載し、Vogt自身の冊子より此論説の方が先づマルクス一家の目に觸れた（一八六〇年一月末）。勿論マルクス自身も之に對して冷然たることを得なかつたであらうが、殊にマルクス夫人は之が爲めに打撃を受けた。そこで彼れは未だ Vogt の小冊子を見ない前に、Nationalzeitung に法律上の制裁を加へる必要を認め、Fischel の周旋で之を前記の辯護士司法議官（ユスチツラアト） Weber に托したのであつた。不幸にして訴訟は Vogt の Allgemeine Zeitung に對する場合と同じく失敗に終つた。最初に之を提起した市裁判所では、誹毀的文言は Nationalzeitung 自身の用ゐたものではなくて、他人の文言の引用に外ならぬから、事實不充分なりとの理由を以て却下せられ、更に高等法院は脅嚇取財團、貨幣僞造團の首領を以て呼ぶことは、マルクスに對する侮辱にはならぬと云ふ奇怪な意見であつて、何れもマルクスの敗訴に終つたのである。Vogt に對する文筆上の制裁にして、一種の文の傑作と目せらるゝ"Herr Vogt"は猶ほ多くの準備を要したので、十一月に入つて漸く脱稿した。(F. Mehring, Karl Marx, 287－303)

斯ういふ次第でマルクスは Weber に訴訟を依頼して、必要なる様々の材料を供給した。Lelewel, Flocon, Ernest Jones, Da-vid Urquhart, Cycles, Jottrand 等のマルクスに與へた信書も其一部をなすもので、是等の中の或者は後に Herr Vogt 中に轉載せられてゐる。左に掲げるのはマルクスが三月三日の日附で Weber に與へた書簡の「追申」としてある中から、マルクス自身己れの人物を辯護士に説明して居る部分を抜いたのである。此書簡を發見したのは、エンゲルス詳傳の編述に依て知られてゐる Gustav Mayer で、此人は近頃ラッサアル遺稿の出版に從事して居るが、其遺稿の間に Weber の書類が混入して居り、此等書類の中に Nationalzeitung 訴訟事件の關係文書が見出されたのである。(Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung 第十卷第一冊六三－六頁)

マルクスが金に就て潔癖を持つてゐたことは、既に知られてゐるが、此訴訟など事件の性質が性質なので、特に金錢の出入を明かにして置く必要があつたのであらう。彼れが何某から云々の申出があつたけれども辭して受けなかつたと云ひ、講義又は寄稿を行つた事を云ふ場合に、無報酬でしたと云ふ事を特に記して居るところにその特別の配慮を認めることが出來る。

序に記せば、マルクスが金錢に潔癖を持つてゐた丈け、それ丈けエンゲルスの金錢上の負担は重きを加へたと云つて好から

う。マルクス－エンゲルス書簡集の Vogt 事件に關係した部分の前後にも、頻りに「五磅送つた」「五磅止に受取つた」と云ふ文句が現はれて來るのである。

以下マルクスの本文を掲げる。

『小生は小生自身一辯護士(久しく Trier の辯護士會長たり、又其性格の純潔と、法律上の才能とに由て聞こえたる同市の司法議官故 Heinrich Marx)の子なるを以て、誠實なる辯護士に取りて、其訴訟依頼人の性格を明かにすることが、如何に重要なるかを承知致居候……

千八百四十二年(當時廿四才)小生は舊萊因新聞の主筆と相成候。此新聞紙は始め單純檢閲、次で二重檢閲の下に置かれ、遂に高壓的に(千八百四十三年の春)普魯西政府の發刊を停止する處となりしものに有之候。當時小生と事を共にしたる人々の一人は三月革命後、普魯西に於て宰相たりし Camphausen 氏に有之候舊萊因新聞は全然普魯西に於ける檢閲制度の威力を破壞したるものに有之候。【萊因新聞の發行停止後普魯西政府は小生が父の友秘密再閲議官(Geheimer Revisionsrat)Esser を通じて小生に申出 Offerten をなさしめ候。蓋し Esser は小生が今の妻を娶れる Kreuznach の鑛泉場に、小生と共に滯在し居りたるものに有之候、此通告を得たる後小生は普魯西を去りて巴里に赴き候。此一事は內密に申述候事にて、固より公表すべきものには御座なく候】。

巴里にては Friedsich Engels, Georg Herewegh, Heinrich He'ne 及び Arnold Ruge と共に「獨逸佛蘭西年報」Die Deutsch=Französischen Jahrbücher を發行致候(Herwegh 及び Ruge とは後に絕交致候)。千八百四十四年の暮小生は巴里駐剳普魯西公使館の促がすにまかせ Guizot に依つて退去を命ぜられ、此地を去りてブルュッセルに赴き候。小生が巴里滯在中、佛蘭西急進主義者間にありて如何なる地位を占めたりしかは同封(h)なる千八百四十八年三月一日附、にて假政府の名に於て小生の佛蘭西歸來を求め、且つ Guizot の退去命令を取消し居る Flocon の書面に由て最もよく御承知下さるべく候

【內密。千八百四十四年夏、獨逸佛蘭西年報の書肆(Gulius röbel)破産の後學士 Cluessen より Cmaphausen 並に自余の萊因新聞株主の名に於て書狀一通(並に金壹千タアレル)を受取り申候。書狀中には小生の功績を誇張賞揚致居り、其爲め玆に封入致さず候】

ブルュッセルに居住せしは、千八百四十五年の始めより千八百四十八年三月始めまでに有之、此時再び退去を命ぜられ、Flocon の書狀に基づきて佛蘭西に歸來致候、ブルュッセルに

於ては巴里及びブルュッセル急進主義諸新聞に無報酬寄稿をなしたるの外、Friedrich Eng lsと共に "Kritik der kritischen Kritik"（哲學論）（千八百四十五年フランクフルトアムマイン市 Rütten 出版）を著はし、Misère de la Philosophil（經濟論。千八百四十七年ブルュッセル Vogler 及び巴里 Franck 出版）Discours sur le libre échange（ブルュッセル千八百四十七年）及び幾多の小冊子を著はし候。二卷より成る最近獨逸哲學及び社會主義に關する書は出版に至らず、Zur Kritik der politischen Okonomie（千八百五十九年伯林 Duncker出版）の序文を御覽下さるべく候、ブルュッセル滞在期間を通じ、小生はブルュッセル市獨逸人勞働者教育協會 Deutscher Brüsseler Arbeiterbildungsverein に於て、「經濟學」に關する無報酬講義を試み候、此講義を集めたる印刷物は、二月革命の爲め印刷中絶致候、ブルュッセルに於ける（色彩甚だ異なる）急進主義者間にありての小生の位置は、公けの國際協會société internationale の爲めに、小生は獨逸人を代表して委員會に列し、Lelewel（今八十歲の老翁にして自千八百三十年至三十一年波蘭革命の老戰士たり、且つ造詣深き歷史研究者たる）は波蘭人を代表し、Imbert（後に巴里 Tulleriesの知事たりし）は佛蘭人を代表し、而して、ブルュッセルの辯護士にして、先きに憲法議會の議員たり、又白耳義急進黨の領袖たる Jot rand は白耳義人を代表して、何れも同時に會の主宰者たりし一事に依て示され候。Jottrand（今は老人なる）の小生に與へたる二通の書狀（同封k1及びk2並に Lelewel の（書狀同封1）よりして、ブルュッセル滞在中に於ける小生の是等諸氏に對する關係は御承知相成るべく候。Jottrand の書狀（同封k2）は、或公會の席上に於て、同氏と小生と爭論し、小生が國際協會よりの退會屆を同氏に提出したる後に書かれたるものに有之。第二の書狀は小生が Köln に於て新萊因新聞を起こせしとき同氏の寄せたるものに有之候

巴里には再び千八百四十八年三月より五月末まで滞在致候。【内密。Nlocon は小生と Lengels とに對し、新萊因新聞設立の爲め資金の提供を申出で候。吾々のそれを拒絕致候は、吾々は獨逸人として、親密なる佛蘭西政府よりなりとも補助金を受くることを欲せさりしに由るものに有之候】

千八百四十八年五月より千八百四十九年五月末まで Köln に於て新萊因新聞を發行致候。同封(1)によりて小生の萊因エストファアリヤ・ルデモクラシイ三會頭の一人に選ばれたることを御承知下され度く候

【内密。Köln に來着するや、小生は Camphausen の一友人より伯林にて赴き同氏を訪問せんことを勸められ候へども　此暗示を顧みずして措き候】

巴里滞在、千八百四十九年六月より同八月迄。Bonapar Ee 大統領政府の下に退去を命ぜらる。

千八百四十九年末より現在即ち千八百六十年まで倫敦に居住致候。千八百五十年漢堡より Revue der Neuln Rheinischen Zeitungを發行し、"Der 18, Brumaire des Louis Bouaparte"

（紐育千八百五十二年）Diplomatic Revelations of the 18th Century（倫敦千八百五十六年）、Kritik der politischen Oekonomie第一冊千八百五十九年伯林 Duncker 版等を著はし、千八百五十一年以來今日に至るまで New York Tribune の寄書家たり、また獨逸勞働者協會の會員たりし間は（自千八百四十九年至千八百五十年九月）報酬を受けずして幾度か講義を試み候。同封（祕密）によりて小生が如何にして David Urquhart と相會するに至りしかを御承知被下度候。爾來今日に至るまで、小生は此人の發行せる Free Press に寄稿致居候。小生は此人とその對外政策（露西亞及びボナパルチスムに對する反對）上の説を同じうするものにて、內政上に於ては然らず。內政上に於ては（此人に反對なる）憲章黨と一致するものに有之、此派の新聞（殊に Peoples Paper）の爲めには、六年間無報酬にて寄稿し來り候

同封gを御覽下さるべく候

小生の千八百五十三年 New York Tribune 紙上に掲げて、Palmerstone を攻擊せる論説は、英蘭、及び蘇格蘭に於て丗三小冊子として一萬五千乃至二萬部複刻せられ候。

Urquhart 派の倶樂部はもと外交問題にのみ携はるものなるが、此中の一倶樂部の書記が、千八百五十六年シエフイルド倶樂部の依賴によりて小生に寄せしものなる同封nによりて、小生が內政上の意見の相違にも拘らず、Urquhart 一派と如何なる關係に立てりしかを御承知下さるべく候。

同封mの中の書簡は、辯護士（バリストル）にして世に知られたる憲章黨の首領たり、又詩人としても認められたる Ernest 2)nes より來れるものに有之候

同封o、n、mの飜譯は同封p中に有之候。

倫敦に於ける或る獨逸人方面より、小生に對して云ひ觸らされたる風説に關しては同封g Ritter vom edelmütigen Bewusstsein中に轉載せられたる、友人 Steffen（元と普魯西の中尉にして士官學校の教官たり、目下 Boston 在住）の書簡（第十四頁）最も特色あるものに有之候

小生は、十年間絶えず攻擊を受けしにも拘らず、未だ曾て一言も自己の傳記を以て獨逸の公衆を惱ましたることなし。たゞ我が辯護士に對しては今回の如き場合に於ては、之を缺くべからずと考へ候

伊太利戰爭に就ては、猶ほ小生の此に對する見解の、我友Fr. Engels が千八百五十九年伯林 F. Duncker より出せる著名の小冊子 Po und Rhein 中に言明せるところと全然一致するものなることを記し置かざるべからず候。此書の原稿は、その伯林に向て發達せらるゝに先たち、Engels より小生に送附せられしものに有之候。小生等は小生等が千八百四十八年新萊因新聞に於て、有ゆる獨逸の新聞雜誌中最も斷乎として言明主張せるが如く、自由獨立の伊太利を欲すること、匈牙利に對し、波蘭に對すると正に同樣に有之候へども、小生等は Bonaparte が（露西亞と默契して）伊太利の自由若くは何れか他の民族問題を、獨逸を滅ぼす口實となす事を欲せざるものに有之候」

勞農露國の文化政策と其施設

昇曙夢

社會教育

新らしい社會主義的原理の上に生活を改造しようとする國家に取つて社會教育は最も必要な施設の一つでなければならぬ。それには先づ幼少の市民を共産主義社會の生活に適するやうに準備する所のいろんな要件を造る必要がある。そしてこの豫備教育を最幼年期から初めなければならぬ。つまり兒童が最幼年期から社會主義的建設に適應する環境の中に置かれることが必要である。

家庭教育はたとへそれが衞生的及び教育的關係に於て理想的に按排されてあつても之を兒童の共同生活や共同學習と比較する時は極めて狹隘な偏頗なものたるを免かれない。一體各個人の創造力なるものは學友と共に生活し共に學習する間に於て涵養されるのであつて、家庭教育の結果ではない。家庭にのみ育つた兒童はたとへ知識階級の家庭に育つたものにしても、その配慮の中心は何時でも自分自身の事に限られる。かういふ環境に生長した兒童は成人しても社會的本能がおのづから遲鈍である。それで廣汎な社會主義的使命を目指して居る國家に於ては先づ第一に兒童の凡ゆる性能の調和的發達を期すべき社會教育の事を慮らなければならぬ。此の意味に於てソウエート・ロシヤの教育人民委員會(文務省)の幼稚園教育部は學齡未滿卽ち最幼年期兒童の爲に幼稚園教育網の開設を最も緊急な施設として居る。一九一九年度の調査に據ると、幼稚園の數は三千六百二十三に達し帝政時代に比して十倍以上に增加した。而も政府は毎年一千宛の幼稚園を增設する考へである。そして是等の小さな自治團に於ては勞働の原則に從つて連帶の感情と、勞働のうちに共通の利益を見んとする習慣とが養成されて居る。卽ち社會的性質の一定の使命を遂行する習慣、必需品の購買、居間の掃除、臺所、菜園、果樹の勞働——斯ういふことが兒童をして自分のためでなく、社會的需要を滿たすために勞働すべく習慣

づけるのである。

尤も此の社會的教育に對しては凡ての兒童を劃一的に一つの型に嵌める弊害があるといふ攻撃もあるが、然しそれに對して幼稚園教育部では第一歩より兒童の創造的乃至個人的能力の發達及び發輝に向つて最も適當な要件を考へて居る。

現在ロシアの兒童が呼吸して居る社會的要件は統一勞働學校の根本原理とは大分離れて居る。教育人民委員會の一つの使命は凡ての兒童に正しき社會的教育を與へることである。それがなければ學校教育の改革は畢竟不可能であり、文化の發達も期し難いからである。それには先づ第一に國内の兒童生活を監視する爲に、兒童を不健全な環境から救ひ出す爲に、また國民と幼稚園との間に密接な關係を確立する爲に特別の兒童監督が設けられて居る。それから幼稚園には模範的寄宿舍を造りつけ、之に老練なる同勞者よりたる幹部を置くことになつて居る。社會教育の最も重要なる點の一つは兒童寄宿舍の改造である。

兒童收容の機關は次のやうな計畫によつて編成されてゐる。

社會教育を要する各兒童は先づ第一に特別檢視所に入る。其所に兒童は暫らく收容されて精神病專門醫と教育專門家との監視の上に人物及び體質の檢査を受ける。檢査の結果に應じて、兒童は適當なる等級の寄宿舍に移つて、其所に居住することになる。寄宿舍は種々の等級に分れてゐて、次のやうに區別される。

一、都市村落に於ける健全なる兒童のための寄宿舍。
二、病弱なる兒童のための療養所若くば郊外家居。
三、先天的不具者のための寄宿舍。
四、盲啞兒童のための寄宿舍。

是等の寄宿舍は年齡に據らずに家庭の原理によつて設立されて居る。特別檢視所は晝夜共開放されてゐて、兒童は何日何時でも入ることが出來る。

兒童が自己教育の爲に利用すべき教化施設には次のやうなのがある。

一、學齡未滿の兒童のための幼稚園。
二、第一階及第二階勞働學校。
三、大人のための補修學校。
四、小學兒童倶樂部。
五、青年兒童倶樂部。
六、遊戯場。
七、兒童活動寫眞及び兒童演劇。
八、圖書館及び讀書室。
九、藝術學校。

兒童は三歳から幼稚園に入學することになつて居るが、六歳までは入園しても、しなくても自由である。然し六歳か、八歳までは統一勞働學校の附屬となつて居るから義務的に入園しなければならぬ。

兒童自治團と兒童倶樂部

ソウエート・ロシヤの社會生活に於ける一つの面白い現象は「兒童都市」である。兒童都市とは兒童自治團の聯合である。この聯合の頭に立つてゐるのが「デイエツスコエ・セロ」の兒童植民地である。デイエツスコエ・セロとは兒童の村といふ意味で、元ロマノフ家の離宮のあつたペトログラード郊外の「ツアールスコエ、セロ」即ち王の村が之に充てられて、今では其所に數千人の兒童が收容されてゐる。斯くして以前兵卒の警護の下にロマノフの家族が散歩した立派な公園が今では、プロレタリヤアートの兒童の課業場となり休息場となつて居る。それから「第三インターナショナル」の町と言つて、ヤースナヤ・ポリヤナのトルストイ邸の周圍にある幾個かの自治團と、ツーラ縣下に於ける他の兒童自治團もよく知られてゐる。是等は何れも兒童の健康とその自治的精神の涵養から割り出された施設である。兒童自治團に於て兒童はその仲間から「執行委員」、「文化委員」、「經濟委員」、「土地委員」を選んで居る。是等の委員は教育者の指導の下にその要求を討議することになつてゐるが、その決議の際には若い自治團員に對して完全なる自由が與へられる。自治團に招聘された教師、醫師、美術家、音樂者其他の專門家は單に兒童の勞働を指導するだけで、彼等の內面生活や自由意志には少しも干渉しない。家事其他の經濟的方面の仕事にも出來得るだけ兒童自身が當つて居る。彼等の間には嚴重な規律が守られて凡て團體としての義務に服して居る。

或新聞記者は一九一九年、オドエーフスキイ郡の兒童勞働自治團の執行委員會の會議の模樣を次のやうに傳へて居る。

『自治團の代表者即ち七歳から十五歳までの少年少女から成立つて居る會議に於て、大人は唯一人だけ出席して。年少の議長席上より郡內兒童自治團の組織に就いて語つたが、その委員會に議事の順序に就て時々注意するだけである。辯士は各々その議事、決議等凡て大人自治團の組織と少しも違はない……。また或辯士は自治團の事業に就て簡單に報告し更に將來の希望を述べたが、兒童達は辯士の言ふことを注意深く傾聽し、會議は極めて事務的に進行した』と。

兒童自治團ばかりでなく兒童無産文化、兒童文藝研究所、兒童倶樂部等もある。

曾て、コストロムの兒童倶樂部を視察した文相ルナチヤールスキイは次のやうに言つて居る。

『私はコストロム生活の最も魅力ある方面卽ち兒童倶樂部も視察する機會を有つた。それはコストロムに於て特に發達して居る型の兒童倶樂部である。八歲から十六歲までの少年少女を結合した是等の倶樂部はその實質に於て我々が今日までに到達した學校の最高形式である。倶樂部の自治體なるものが、本來何であるかを說明するのは六ケ敷い。それが小共和國への氣紛れであるか、それとも市民の相互敎育の眞面目な事業であるか、或はまた師弟の規律に代ふるに兒童の輿論を以てしたのか、それは分らない。が兎に角若い議長と書記との眞摯な態度には驚嘆の外はない。彼等は深い責任の自覺と驚くべき聰明さとを以て數百人の會員からなる可なり複雜な集會を巧みに統治して居る』と。

全露青年共産聯盟

一九一八年十月二十九日モスクワに初めて青年聯盟の第一回集合があつた。此の會合で是迄別々になつてゐたいろ／＼な青年の團體が統一されて全ロシヤ青年聯盟となつた。加ふるに共産主義といふ一定の黨派的性質を附して、ロシヤ青年共産聯盟といふ組織を受けた。

此の聯盟は大體に於てロシヤ共産黨の指示と監督とに服して居るけれど、自治心發達の名に於て獨立的の團體である。會員は二十歲までは聯盟に於て働く義務を有する。

その目的は左の通りである。

一、勞農青年の間に共産主義を廣く普及すること。

二、ソウエート・ロシヤの積極的建設及び新生活樣式の構成に向つて誘導すること。

三、勞農青年の經濟的、政治的及び法律的利益を擁護すること、

四、共産主義を基礎とする青年聯盟の建設及びその國際的結合に向つて西歐青年と共同の動作を執ること。

是等の目的を達するため青年共産聯盟は次の如きプログラムを設けた。

會合、集會、示威運動、プロレタリヤ詩人の夕、音樂會、演劇講演、討論の開催、新聞、雜誌、小冊子、書籍、宣言書の發行青年聯盟の生活問題及び事業開發のため一般勞兵農會、共産黨職業同盟、購買組合の刊行物に加入すること。その他聯盟は講習會を開き、學校を建て、文學、演劇、音樂、合唱等の研究所それから倶樂部、讀書室、圖書館、競技會、文學會、科學會等

を開催することになつてゐる。そして青年は此の聯盟で一つの堅固な家庭に結合され、智力、品性、規律の修養を積むことが出來る。

聯盟は文化方面に於ける積極的勞働をその重大なる使命の一つに數へて居る。勞農青年に一般的知識を與へるばかりでなく更に進んで政治教育を與へ。國家建設の事業を教へ、また青年の自定力を鼓舞することが必要とされて居る。プロレタリヤ革命は勞農青年の發達及び教育のために廣い道を開いた。けれども教育人民委員會の事業は青年の凡ゆる範圍を全部網羅する譯に行かない。共所までは手が屆かない。例へば工場や田畑で働いて居る青年男女の如きは全く人民委員會の配慮から取り殘されて居る。そこで是等の青年はその聯盟に於て始めて教化に與り知識を修得することが出來るのである。聯盟は特別の注意を田舍の青年に向けて居る。則ち彼等の階級的自覺を啓發すること、新制度のための戰ひに彼等の意志を鍛錬すること、農村經濟を共產主義の原理に改造することとである。都市青年と村落青年との密接なる聯絡も聯盟の主なる事業の一つである。けれども勞働青年に相當の學校や俱樂部や政治教育の機會を與へるだけでは足りない。更に是等の機關を訪ふて、學修し得るやうな要件を拵へてやらなければならぬ。そこで聯盟はプロレタリヤ青年の法律上及び經濟上の利益を保護する目的で中央に於ても地方に於てもいろ〳〵な政治團體や勞働團體の事業に參加し、勞農青年の地位を改善すべき法律や法令の實施に向つて助力して居る。斯くして聯盟はソウエート・ロシヤの政治的、經濟的、文化的生活の全行程に參加しつゝ、勞兵農會（ソウエート）、教育委員會、購買組合、工場委員會、無產階級文化にその代表委員を送る權利を獲得した。

聯盟は特に學生に向つて非常な注意を拂つて居る。之に關する特別規定は左の通りである。

一、共產學生の團體と青年共產聯盟との合同。

二、對學生策及び學校改革問題を講究する爲めに聯盟內に學生より成る學校部を置き、之に聯盟の代表委員も加入すること

三、學校には青年共產聯盟の聯絡部を置き、之に工場聯絡部と同一の權利を附與すること。

婦人解放

勞農政府はその執政の初年に於て婦人の地位を改善することに努力した。そして婦人の法律上の不平等、離婚に對する脅迫私生兒の不承認等凡て婦人の自由を拘束した從來の法律を根柢から撤廢して男子と同樣の權利を附與した。然し是れはまだ地

均らしに過ぎなかつた、建築物そのものではなかつた。

婦人は法律上男子と平等の自由を得たにも拘らず、まだ依然として家庭の奴隷であつた。といふのは煩雜な家政が彼女を縛り、絶えず彼女を臺所や子供室に拘束し、彼女の勞力をくだらない不生産的な仕事に消費させて居るからだ。本當の婦人解放は一家の家政が大きな社會的經濟に改造される時に始めて可能である。そこで勞農政府は啻に男女の平等を規定したばかりでなく、婦人解放の上に必要な諸般の施設を急いだのである。

公衆食堂、托兒所、幼稚園――是等は既に共産主義の萌芽である。是等の施設は實際に婦人を自由にすることが出來る。その結果婦人が社會的主義及び社會的生活に參與することによつて是等の施設は婦人と男子の間に存する差別を無くすることが出來る。たゞ從來は斯ういふ制度があつても徹底的にその意義を考へなかつたのである。

十月革命によつて勞農階級が政權を掌握した時彼等の双肩には偉大なる使命が落ちた。それを獨裁政治が幾世紀かの間人民に窮迫と服從とを强ひつゝ彼等の上に行つた恐るべき害惡を矯正することであつた。その中でも最も不幸な運命に泣いたものは母親であつた。母親とその嬰兒の事に就ては舊ロシヤは少しも慮らなかつた。母親は屢々運命に見放されて飢餓に陷つた子供の心配と窮乏の苦痛とに病み疲れながら、默つて從順に「母性の十字架」を負つた。そこで勞農政府はその執政の第一歩から母性と兒童の保護といふことを大に慮つたのである。

母親は嬰兒を生み、之に生命を與へつゝ、その上に尙ほ他人と同じやうに社會的に必要な勞働に服するといふことは非常な負擔である。新たに生れた子供は未來の勞働者であり、公民であり、從つてその子供は國家に必要であるから國家は當然その子供の事を慮る義務がある。であるから産兒の心配は母親から國家の手に移すやうにしなければならぬ。此の意味に於て勞農政府は産兒を規範的に養育するやうな幾多の施設を試みて居る。

一、育兒相談所。此所へ來て母親は育兒上の相談をするばかりでなく、其所には牛乳や食料の給與所もあるから嬰兒の爲めに新鮮な食料を得ることも出來る。

二、托兒所。母親は仕事に出る時は何時でも此所へ子供を預けることが出來る。

三、育兒院。之は特に孤兒及び捨子の爲に設けられてある。

四、産婦産兒院。之は母親が産前産後の最も苦しい期間を過す場所で、其所で彼女は産をするばかりでなく、産兒の手當や介抱を正則的に學ぶことが出來る。

是等の要件によつて母は始めて産兒の心配から解放せられ、貧苦の幻影から救はれ、新しい力を獲得して男子と平等に自己階級の理想のために戰ふ所の戰士の列に立つことが出來る。

統一勞働學校

敎育人民委員會の敎育方面に於ける主なる配慮は帝政時代から繼承した敎育事業を根柢より改造して、新敎育制度の一般的原則を編成することであつた。

帝政時代には學校はいろ〳〵な種類に分れてゐた。先づ階級的には一般民衆のための下級學校と特權階級及び有産階級のための中等學校とに分れ、次には女學校と男學校、實科學校と古典學校、普通學校と專門學校といふ風に區別されてゐた。が、ソウエート・ロシヤの文務當局(敎育人民委員會)は是等の差別を撤廢して、その代りに統一勞働學校を制定した。

この統一といふことは二樣に解されなければならぬ。第一には之に依つて階級的障壁が破壞され、凡ての學校が一つの階段に立つやうになつた。そして凡てのロシヤ兒童は一般の法則に從つて同じ型、同じ性質の學校に入學して卒業後は更に他の兒童と同じく高級の敎育を総るべき可能を持つやうになつた。次には新制度に據ると十六歳までは一切の專門敎育を避けて男女兩性の一樣なる普通敎育及び一般工藝敎育(生産技術の主なる方面を悉く網羅する)を施すことになつて居る。けれども是れは決して個性敎育の原理と學校内で出來得る丈多種多樣の知識を誘導することに妨げるものではない。本當の專門敎育は十六歳以後に於て、それ迄に習得した普通敎育及び一般工藝敎育を基礎として施こされる。それから特殊の權利を與へる證明書としての成績表は廢止せられ、從來必須科目であつた古典語(希臘羅甸語)は隨意科となつた。實質に於て統一された此の勞働學校は二つの等級に分れる。第一階は修業年限五年で八歳から十二歳までの兒童を收容し從來の小學校に當る。第二階は四年修業で十三歳から十六歳までを收容し從來の中學校に相當する卽ち二階を通じて九學年である。此の九學年は法令に依つて義務敎育と認められて居る。

統一勞働學校は事實に於て通俗的であり萬人向である。この目的を到達するために授業料が廢止されたばかりでなく兒童は學校で溫かい食事を無料で與へられる。貧しい兒童は履物や着物までも給與される。其他一切の學用品が無代で生徒達に支給されることは言ふまでもない。

法律上九學年の義務敎育を布告すると同時に、敎育人民委員會は凡てのソウエート(勞兵會)に向つて學齡兒童の總數を調査

して凡て入學し得る兒童を各學校に配當し、其他の兒童（例へば病身のもの）にはその事由を記した證明書を交附することを命じた。斯くして教育委員會は地方毎に兒童の數を取調べて鋭意學校網の發達に努力してゐる。

統一學校の勞働的性質は如何なる點にあるかといふに、それは純教育的勞働と純生産的勞働とが教育の基礎となつて居るといふ點に含まれて居る。第一階勞働學校に於ては此の勞働は特に學校内に於て、即ち臺所、庭園、仕事場等に於てなされる。勞働は學生が學校共同生活の要求を充たす意味に於て生産的性質を帶びて居ると同時に、この第一階勞働學校に於ては特に家庭的職業的性質を持つて居る。その中でも都市に於ては自然工場の型を取り村落に於ては農家の型を取つて居る。然し夏季に於ては凡ての都會の學校を出來得るだけ田園に移すことが考へられて居る。

第二階勞働學校に於ては生産的及び社會的性質の勞働が特に目立つ。第二階では兒童も早や十三才である。この年からは校外に於ける容易い、然し實際的な勞働に從事することが出來る。製造場や工場の勞働に參加することが出來る。眞面目な農村經濟を手傳ひ或種の産業に加はり又は社會的乃至國家的の或事業に助力することも出來る。つまりこの年輩から幼年勞働や、彼等が生存の爲にする戰ひや、その教育上の發達が大人のそれと密接な交渉を持つことになるのである。

學校は、常に兒童から目を逸らさずに彼等を有害な感化から守護し彼等の勞働を彼等自身の生理的及び智的發達のために向けつゝ、彼等を社會的生産的勞働の本體に指導しなければならぬ。此使命は最も新しくして又最も責任あるものとされてゐるたゞ教育家と技術家との注意深き共同と、經驗と、工場の勞働管理とによつて始めて教育と産業との密接な融合を見ることが出來るのである。

以上は極く大體に於て統一勞働學校の勞働的基礎を觀たのである。この二等級の勞働學校を終つた後は專門教育になる。職業的準備のための專門教育は第三階學校即ち十七才になつて始めて入學する高級學校若くは校外教育に於て許されることになつて居る。

教育人民委員會は今日都市勞働學校と村落勞働學校との間に存する差違を緩和することに非常な努力をして居る。之が爲には都市勞働學校を夏季中兒童植民地（林間學校の如きもの）に移すばかりでなく、第二階の村落勞働學校生徒を冬季中交代に工業及び文化の中心に移すことを必要と認めてゐる。

學者動員(朗讀宣傳)

教育人民委員會は國內に無教育者の多い事實に鑑み、宣傳及び煽動所管の他の官衙と共同して、ソウエート制度の本質について、及び勞農政府の政策施設に就いて廣く國民に理解せしむる目的を以て左の方法を講じて居る。

一、速かに既定の題目に基きて通俗文集を編纂すること。但し是等の文集は廣く民間に播布するに適し、特にソウエート共和國の無教育なる國民に讀み聞かすために適當なるものたるを要す。

二、速かに州及び都市のソウエート機關及び村落の貧農委員會に命じてロシア共產黨の地方團體及び同連絡部の援助の下に次の調査をなすこと。

甲、教育ある住民の調査。其內特に教育有り且つ說明的朗讀に堪能なるものゝ調査。

乙、朗讀者の義務を遂行するために凡ての教育ある公民を動員すること。

丙、斯くして動員されたる十六歲より五十歲に至る男女兩性の公民を幾個かの團體に分ち、地方教員若くは朗讀法に精通せる者をして各團體の指導に當らしめ、更に之を地方共產黨團體の監督の下におくこと。

丁、各團體を都市若くは村落の各區域に配當し、無教育者を集めて、政府の施設を知らしめ、又は政府の法令、訓令及び特に指定せる共產黨新聞の記事其他前揭文集等の系統的朗讀によつて、全住民の政治的發達に資すること。

三、一旦朗讀者として動員されたる公民は、地方政權によつて定められたる規定によつてその義務の遂行を辭することが出來ない。またこの勞に從事する者は、一切無報酬である。

然し勞農政府のこの奇拔な思ひ付きがどの程度まで成功して居るかは餘程疑問である。長い間の世界大戰に引續き、革命や內亂戰で疲弊しきつて居る農村の住民は食ふや食はずの窮境に於て態々一ケ所に集まつて面白くもない政府の法令の朗讀など聞いて居るやうな暢氣な余裕は持たないのである。

宣傳汽車と宣傳汽船

帝政時代のロシア政府は國民を出來得るだけ無智の狀態に支持しようと努めた。勞働者の間に革命的社會主義の思想宣傳を許さなかつたことはいふまでもない。その結果僻遠な地方は暗黑な無智狀態に放置された。で、勞農政府は出來得る丈早く失はれたるものを償はうと努めた。そして知識とその宣傳とを片

田舍の住民に擴げるために一切の方法を講じて居る。

その方法の一としては全國に圖書館網の敷設を企てゝ居るが、それ丈の圖書館が一時に出來上る筈はない。また中央印刷局では宣傳文學を廣く頒布すべき機關を設立しては居るが、各村落か中央印刷局の支部を有するに至るまでには何年を要するか分らない。そこで此の中央印刷局や圖書館の補助として勞農政府の考へ出した獨特な施設が宣傳汽車と宣傳汽船である。是等の汽車汽船は豫め編成された、一定の計畫によつて動くことになつて居る。その使命は中央印刷局や他の施設が未だ手を延ばすことの出來ない樣な僻遠な地方に知識と宣傳書類とを齎すことである。

その組織及び内容は極めて複雜で、その目的もいろいろである。汽車、汽船の頭には政治委員があつて、その傍に一團の同勞者(宣傳員)が居る。彼等は各方面の宣傳に從事するためにそれぐ〵各省から任命されたものである。

汽車、汽船の内部の組織は次の通りである。

一、書籍販賣部——それには各種の黨派爭鬪、地方ソウエート職業同盟、軍隊其他地方團體に對する卸賣と個別購入者のための一部賣とがある。一部賣は一つの車箱に設けられて居る——書店で行はれる。此の書店に於ては書籍を單に販賣するばかりでなく、買手の要求に應じて適當な書籍を紹介して居る。宣傳書類の一部は無代價で配布される。

二、宣傳部——此部では凡ゆる種類の宣傳をする。或地方に着すると直ぐに集會や講演會を開催する。活動寫眞も興行する。それが爲には特別な車箱が充てられて居る。座席は車内に設ける事もあり又は幕を外部へ向けて車外に設けることもある。同じ車箱には蓄音器もあつて所謂ソウエート・レコードを奏する。

三、印刷部——是れは小規模ではあるが二千部ぐらゐの小新聞を發行して居る。この新聞はそれまで新聞紙を見たこともない樣な片田舍の住民達の間に配布される。『レーニン列車』(宣傳汽車は勞農政府幹部の名を冠して居る)には小さな無線電信機さへ架設されて新聞紙のために新奇の材料を提供することが出來る。

汽車汽船が或る地方に逗留して居る間同勞者(宣傳員)は地方ソウエートを訪問したり、彼等の執務振りを視察したり、地方民の要求を聽取したりする。そして歸つてから中央政府に報告して適當な施設を講ずるのである。汽車の外觀は極めて獨特である。車箱の外壁は一面に革命的内容の宣傳畫を以て飾られ、その樣々な色彩が人目を惹く。

汽車は一回の巡回が約二ケ月間で、それが終ると一旦モスク

ウワに歸り、新に準備を整へてまたも發するといふ順序である。政治部の同勞者は一回每に、各省から特に任命されることになつて居るが、その外汽車には一定數の乘組員があつて、彼等はモスクウワ滯在中の外は絕えず勞に服して居る。

ウオルガ・カマ汽船會社の汽船『赤星號』は特にその橫腹に大きな赤い文字で書かれた革命の標語を以て顯はれて居る。汽船の淡綠色の地の上に浮き出した是等の標語は左なきだに色彩を喜ぶロシヤ地方民の注意を惹き、むさぼるやうに讀まれて居る玆にその標語の一二を引用しておく。

『我々が若し自分の子供を地主の奴隷に渡すならば子供は我々を呪ふであらう。』

『工場に於ける懶惰、田畑に於ける無播種は國民に對する犯罪である。』

『ソウエート政府は農民を掠奪するコミツサルを銃殺するが、コルチヤツクは農民を掠奪し殺害する將校を罰しない。』

汽船の甲板には大きな赤い星が輝やき、二つのマストの間には無線電信の長い銅線が延びて居る。一等の食堂は讀書室と會議室とに充てられ、元の水夫の食堂であつた船首の大きな明るい室は新聞『ロスタ』及び『赤い星』の編輯所に充てられてゐる。新聞やポスターを印刷する印刷所は船尾にある。若干の船室は植字室になつて居る。船尾の船艙には書庫がある。船首は展覽會場に充てられ、『田園の電氣化』といふ展覽會が開かれて居る。

汽船には二階造りの大きな赤い傳馬船が强い鎖で繫がれて進行中も互に交通して居る。傳馬船の一階は觀客室で七百人乃至八百人を收容することが出來る、其所では晝間も活動寫眞が催され、集會が開かれる。傳馬船の二階は汽船の事務室になつて居る。

傳馬船の壁は內側も外側も大きな極彩色の繪と無數の標語とが隙間なく書かれて居る。屋根の上には彩色された大きな柄が飾られて居る。で、この汽船が傳馬船と並んで綠の林を背景として美しい繪模樣のやうに河の中を進んで行く光景はまるで怪物のやうである。殊に夜間イルミネーションを施して、甲板の赤い星を輝かし、兩岸を探照燈で照らしながら通過する時は兩岸に雲集して居るロシヤの田舍者を狂喜させずにはおかない。

汽船の活動は一瞬間も絕えない。汽船が碇泊所に着すると直ぐに廣告係はポスター、ビラ、新聞等を携へて驅出す。同時に宣傳員は政治委員を先登に地方執行委員會に行つて其所で地方勞働者の報告を聽取する。之が終ると宣傳員は各々その擔任

の方面に向つて分れる。その間汽船では先づ第一に書庫が活動し出す。稍後れて公衆が集まつた頃を見計らひ活動寫眞が始まる。それと交代に展覽會も開かれる。公衆に戰爭畫や電氣ポスターの傍に群をなして驚歎の眼を睜る。同時に印刷部では新聞の印刷に余念がない。

晝間は宣傳員と地方勞働者との會合が行はれ、町と傳馬船とには同時に集會が開かれる。夜間は夜間で河岸に活動寫眞を催し、展覽會を開き。それが深更にまで及んで朝の三時か四時に終る。

汽船は朝の十時になると、最早次の碇泊所にあつて、以上のプログラムが再び繰返へされる。汽船の乘組員は約百八十名で其内十七名は各省の代表者卽ち宣傳員である。

勞働宮

勞働者の慰安及び教養の機關には所謂勞働宮がある。これは勞働者の宮殿といふ意味で、市内の最上等の建物を徵發してそれに充てゝ居る。そして其中に無料食堂、讀書室、新聞室、喫茶室等を設け、また無料にて、讀み書きを教へる。そればかりでなく勞働者は其宮殿で隨時に演藝會、音樂會などを催ふして樂しんで居る。

勞働宮の中で模範的のものはモスクウワの勞働宮である。玆にその内容を紹介しておく。モスクウワ無産階級の勞働宮にはパトリアラフ泉水の傍のタラソフ氏の有名な一軒家が充てられた。室の數は二十五室あつて、その中に勞働者の教化機關が凡て設備されて居る。卽ち兒童學校、大人學校、職業教育の各部門、物理化學、天文、動植物の研究所を初め職工教育の機關には靴、指物、錠前、鑄物、製本、裁縫等の工場がある。また默讀圖書館、朗讀圖書館、博物館等の設けもある。其他勞働宮にはまだ文學、雄辯術の練習所を初め、合唱、音樂、繪畫、粘土細工、演劇術の練習所もある。特に遊戲には大なる注意が拂はれて居る、

勞働宮には大小二つの室があつて、講演、集會、講話、音樂會、演劇のために充てられて居る。講演は常に政治經濟、社會主義、勞働問題、地理歷史等に就て爲される。

凡ての工場委員會には、專門の煽動員が派遣されて勞働宮の意義を説明して居る。

市街美(記念碑宣傳)

藝術と社會組織とは密接な關係がある。それ故に社會的變革は藝術に多少の影響を及ぼすものである。特に建築術は實生活

と直接の交渉を有つて居るから社會組織の影響を受けることが最も多い。

十月革命後藝術上にも社會生活の變動と同じ程の深刻な變動が認められた。その變動は先づ第一に建築術に於て最も鮮かに現はれた。建築家は他の藝術家よりも先に藝術の新しい使命を感じて新しい形式の上に活動しなければならぬといふことを深く悟つた。建築術は凡ての藝術中最も社會的藝術である。それ故に建築術は純獨裁政治の時代か、でなければ社會主義制度に於て發達すべき藝術であつて、資本制度は建築術の使命と一致しない。

ボリシエウイキイの新制度は舊制度に反して先づ全建設事業の合同を策した。その結果個人的家主は消滅して一切の建築は國家の手に集中された。そして間もなくモスクウワ建設の偉大なる計畫が編み出された。之れに依て觀ても新制度が建築家に如何なる注文を爲し、又建築家が如何に新しい使命を解決せんとするかを觀ることが出來る。

從來都市設計學は幾多の實際的な都市計畫案を編成したけれども未だ曾て何所でも完全に實現されたことがない。それは到る所に於て個人的所有主の頑强なる反對に衝突かつたからである。所がロシヤでは私有財産制度が覆へされたのであるから、科學の指示に基づく都市計畫案が完全に適用出來るのである。

革命は個人的家主と共に資本制度に附物の投機を一切排除した。また新制度は土地私有權を廢して、それによつて建築家が自己の使命に對する態度を根本的に改めた。以前は建築家は家主の搾取的意志に從つたと言へる。が、今では二つの使命が眼目となつて居る。第一は居住者のインテレストで、第二は都市の一般計畫、場所の性質、周圍の狀況と家屋との調和、及び街道とそれに沿ふた建物の樣式との調和である。第一は衛生上の要求から來り、第二は市街美(都市の美觀)の要求から來る。

彫塑は從來ロシヤに於ては余り發達してゐない。その原因として或人はロシヤの氣候が此の市街藝術の發達に適して居ないと言つて居るが、それは氣候の所爲ではなく、寧ろ此の記念碑藝術(建築と彫塑)の發達を助長すべき組織的社會生活が缺如してゐたからである。然るに今日では社會革命の結果モスクワはレーニンの發意によつて過去の偉大なる革命家乃至は社會的活動家の爲に建てた五十基の記念像を以て飾られて居る。最初是等の記念像は石膏又はセメントで製作されたが、他日全國民の批判に訴へた後特に其中の優秀なものは銅像や大理石像に改められることになつて居る。で、是等の記念像の巧拙は將來に待たなければ分らないが、玆に注意すべきことは國家が藝術家に

對する新しい態度である。記念像の注文は彫塑家自身の職業組合によつて全國彫塑家の間に配當されて、一國の藝術家が揃つて此の事業に當つた。斯かる例は世界の藝術史上未だ曾て無いことである。

も一つ、記念像ほど大規模ではないが、然し極めて興味ある施設は所謂「記念碑宣傳」である。それは建物の壁や橋のアーチや公園の中や圓柱の斷片や煉瓦壁の上に持つて行つて、有名な大思想家の文章から拔萃した句を彫りつけた銅板、セメント板鐵板等を飾り付けることなのである。是等の拔萃は新時代の指導的原理を表明したもので、新人生觀の根柢となつて居る。引用句は主としてマルクス、ラサール、トルストイ、ソクラテースあたりから取られて居る。是等の句の含む思想を浮彫にした繪も矢張り一緒に掲げてある。斯うした言葉と繪とを結合しようといふ試みが果して成功するかどうかは實際を見なくては分らないが、兎に角之を思ひ付いたといふ事が重要な點である。たとへ最初の試みが失敗に終つてもその次には成功するかも知れない。言葉と繪との結合は民主的藝術の一型式であるからだ。

斯くして勞農ユートピアンが夢想して居る理想都市の實現即ち都府をして一大博物館たらしめようといふ計畫は萬更夢でも無さそうである。

實生活の美化

都市の美觀と共に實生活の美化といふことが、またプロレタリヤ文化の主なる使命と考へられて居る。曾て教育人民委員會美術部の工藝美術課では實生活の美化といふことを企圖して、廣く全ロシヤの美術家に訴へたことがある。その布告文の一節に曰く、『近き將來の藝術は實生活と密接に融和しなければならぬ。藝術は日常生活に入つて行つて、その一切の方面と一切の細目とを美的に藝術的に改造しなければならぬ。藝術の光は勞働者の勞働して居る所にも休息して居る所にも普く浸潤しなければならぬ。工場、會館より勞農民の住宅に至るまで凡て美術家によつて設計され裝飾されなければならぬ』と。

それと同時に工藝美術課は廣く國内の美術家に向つて、左記種目の圖案、模型又は實物の懸賞募集に應ずることを慫慂して居る。その種目は、一、勞働者住宅の室内裝飾（机、椅子、寢臺戸棚等）。但し之には壁の飾り方や家具の並べ方に就いて說明を附すること。二、村落に於ける圖書館の設計。三、食器（茶碗、コップ、スープ入、皿、鉢等）。四、瀨戸物（壺、水差、花瓶等）。五、男子服、女子服、子供服、仕事服、禮服。六、テーブル掛七、頭巾。八、木造彩色玩具。九、一九二〇年の壁掛暦と据置暦。十、「インターナショナル」樂譜表である。

この懸賞募集の發表に際してまた斯んなことも言はれて居る。「革命は裝飾建築美術の方面に於ける新様式の考案に向つて

勇氣ある若い創造的天才を要求する』と。

工藝美術課の懸賞は單に一例を示したゞけで、之が決して唯一のものではない。既に是迄も物質文化の藝術的發達を目的とする幾多の競爭が發表された。例へば學術委員會は農民の邸宅家具、食器の設計に向つて全國的の懸賞募集を行ひモスクウワ勞兵農會(ソウエート)の教育課は同じ方法で男女の夏服及び冬服の新樣式を發明しようと企てた。その他いろ〲ある。要するに懸賞募集は勞農ロシヤに於て藝術奬勵の主なる方法となつて居る。

無產階級文化機關

勞農政府は無產階級の文化を創造助長するため共和國內に存する無產階級の獨立的文化施設や教化施設の保護に向つて特別の注意を拂つて居る。之が爲に教育人民委員會內にはプロレトクリト(プロレタールスカヤ・クリトウーラの略語にして無產階級文化の意)なる特別の部局が置かれ、各地方にも支部を設けて一九一九年にはその數三十三個に達し、定期刊行の機關雜誌十二種を算へた。

本來無產階級の文化運動は主として政治上の爭議、職業同盟購買組合等に關するものであつたが、最近ロシヤで開かれたプロレトクリトの聯合協議會の決議は更に進んで舊ブルジョア世界の文化から獨立して、科學、藝術、生活等人間精神の全範圍に亘つて新しい無產階級の文化を創造することを目的として居る。けれども同時に舊文化の遺產を全然排斥するものではない同じ協議會の決議中にも、プロレタリアートが科學及び藝術の方面に於て獨立の創造力を發揮せんが爲には、先づ豫め舊ブルジョア世界の文化的遺產を攝取しなければならぬといふことが明かに示されて居る。けれどもプロレタリアートは舊生活の土臺の上に新生活の殿堂を築くべき建設者として、舊文化の一切の遺產に對しては何所までも批評的態度を執らなければならぬといふことが立前になつて居る。

無產階級が科學及び藝術の方面に於て新しい獨自の途を開拓し、全く獨立の事業を爲さんとするに當つて、之を可能ならしむるためプロレトクリトは文學、音樂、演劇、繪畫、合唱其他の研究所を創設した。また勞働階級出身の詩人作家はプロレトクリトの後援によつて其の合同を計り、十月革命後十數種の雜誌及び文集を發表した。一九一九年三月モスクウワに開設された無產階級大學は、プロレトクリトの「科學藝術の社會化」といふ主義方針の下に建てられた勞働大學である。

プロレトクリトはその活動の範圍を單に產業プロレタリアートだけに限り、其他の廣汎なる勞働民衆に對する活動は他の機關に委ねて居る。またその事業の性質も一般敎化的のものでなく、主として創造的のものである。

けれどもプロレタリヤが既に階級としての意義を消失しつゝある以上、プロレタリヤ文化なるものが將來如何程の意義を有するか。又之が果して成立し得るか何うか甚だ疑問である。然しこれに就いてはまた別に論ずるを要す。(完)

失はれんとする一朝鮮建築の爲に

柳　宗　悦

（此一篇を公開すべき時期が私に熟してきた樣に思ふ。將に行はれようとしてゐる東洋古建築の無益な破壞に對して、私は今胸を絞られる想ひを感じてゐる。朝鮮の主府京城に景福宮を訪ねられた事のない方々には、その王宮の正門であるあの壯大な光化門が取り毀される事に就て、恐らく何等の神經をも動かす事がないかもしれぬ。然し私は凡ての讀者が東洋を愛し藝術を愛する心の所有者である事を信じたい。たとへ朝鮮と云ふ事が直接の注意を讀者に促さないとしても、漸次湮滅してゆく東洋の古藝術の爲に此一篇を讀まれる事を希ふのである。之は失はれてならぬ一つの藝術の、失はれんとする運命に對する追惜の文字である。そうして特にその作者である民族が、目前にその破壞を餘義なくされてゐる事に對する私の淋しい感情の披瀝である。

然し尚此題目が活々と讀者に形ある姿を想ひ浮ばす事が出來ないなら、どうか次の樣に想像して頂こう。假りに

…………、…………………、………………、…………

………、…………………………………………………

、……………………………………………………………。

……………。…………………。…………………………

…………（。…、……………。………………………………

……………………………。…………、…………）。…

……………）。

光化門よ、光化門よ、お前の命がもう旦夕に迫らうとしてゐる。お前が嘗て此世にゐたと云ふ記憶が、冷たい忘却の中に葬り去られようとしてゐる。どうしたらいゝのであるか。私は想ひ惑つてゐる。酷い鑿や無情な槌がお前の體を少しづゝ破壞し始める日はもう遠くはないのだ。此事を考へて胸を痛めてゐる人は多いにちがひない。だけれども誰もお前を救ける事は出來ないのだ。不幸にも救け得る人はお前の事を悲しんでゐる人ではないのだ。

まだ世は矛盾の時代だ。門の前に佇んで仰ぎ見る時、誰もその威力ある美を否み得るものはないのだ。…………………………………………。お前を熱知してゐる者は、發言の自由を得たいのだ。然しお前を產んだ民族の間に於ては、不幸を伴はぬ發言はないと云つてもいゝのだ。此事で今そこにゐる凡ての者が、暗い月日を送つてゐる。人々は必ずやお前を愛してゐるのだ、今後年月が經ると共にその愛慕がいや募つてゆくのを私は知つてゐる。然しかゝる愛すらも自由には現はし得ない此世だ。否、かゝる愛を殺せよと强いられてゐるのだ。苦しさが胸に迫つてくる。然しどうする事も出來ないのだ、

誰もが言葉を躊躇してゐる。然し沈默の中にお前を埋めて了ふのは私には餘りに悲慘だ。それ故云ひ得ない人々に代つて、お前の死に際しもう一度お前の存在を此世に意識させる爲に、私は此一篇を書きつらねるのだ。

然しお前のゐる場所から、遠く〱千哩以上も離れてゐる私が、只獨り沈默を破つて聲を擧げたとても、暗い力强い勢ひから、お前を救ひ起すと云ふ事は恐らくは不可能であらう。然しそうだからと云つて、私の是等の言葉を意味のないものだと思つてくれるな。是を書く事それ自身が私には一つの使命だと思へるのだ。誰もお前の運命を今取り戻す事を保證し得るものはない、だがお前に對する尊敬や情愛が此世にもう無いのだと思つてくれるな。お前の美や力や運命を理解してゐる者は少くはないのだ。よし僅かだとしてもお前はそれ等の人の情愛を受けてくれるだらう。少くとも一人お前の死を想つて淚ぐんでゐる者があるのを知つてくれ。

私は此現し世に於て落ちかゝるお前の短い運命を、持ち直させるだけの力を許されてはゐない。だけれども夢の世界に於て私はお前を不滅にさせねばおかない。實際お前を死から救ひ起す自由は私に與へられてゐない。然し此文字の中

にお前を不滅にする自由は私に與へられてゐるのだ。おゝ、私はこゝにお前の名と姿と靈とを決して消える事のない深さで彫刻しよう。丁度お前を産んだ民族が好んであの固い花崗岩に深く鑿をあてゝ、記念すべき永遠の彫刻を刻んだ様に。

光化門よ、お前の存在はまもなく奪はれるのだ。然し奪はれてはならぬ存在の爲に私は之を書いてゐるのだ。そうして私は特に濃い鮮かな墨を以て之れを書く事を怠るまい。地上に於ける視野からお前の姿が見失はれても、私の此文字は少くとも地上の何處かに傳播されるであらう。私は根强くお前を紀念する爲に、此追悼の文を公衆の前に送り出すのだ。光化門よ、愛する友よ、道ならぬ死に迫られてさぞ無念に思ふであらう。おれはお前の嘗めねばならぬ苦しみや寂しさを考へてゐる。おゝ汝が靈よ、行く處がなかつたら、おれの所に來てくれ。おれが死んだら此文字の中に住んでくれ。誰かきつと是を讀んでくれる者があるだらう。そうしてお前の存在がもう一度それ等の讀者の温い意識の中に慕はしく記憶される日が來るであらう。おゝ多くの者はお前に對して沈默を守る事を餘儀なくされてゐるのだ。それ故私がそれ等の人々に代つて、發言の自由を今擇ばうとするのだ。

おゝ、光化門よ、光化門よ、雄大なる哉汝の姿。今から凡そ五十有餘年の昔、汝が王國の力強い攝政大院君が、彼の躊躇を許さぬ意志によつて、王宮を守れよとて、南面する素敵な場所に汝の礎を動くなと固めたのである。此處に朝鮮があるとばかりにもの云ふ諸々の建築が前面の左右に連ねられ、廣大な都大路を直線に、漢城を守る崇禮門と遙かに呼應し、北は白岳に飾られ南は南山に對し、皇門はその威嚴ある位置を泰然と占めてゐるのである。かくて三個からなる闕門を中に穿ち、巨大な堅固な花崗岩を高く築造し、その上によく傳統を守つた廣大な重層の建物を聳えさせた。云ふ迄もなく門は左右に均等の高壁を延ばして、盡きる所に角樓が美しい姿勢を保つてゐる。仰ぎ見る者は誰でもその儼若とした威嚴の美に打たれない者はないであらう。それは一國の最大な王宮を守るに足りる正門の姿勢である。讀者よ、それを李朝末期の作に過ぎぬと云つて卑んではならぬ。又そこに婉麗な優雅な精緻な美を認め得ないと云つて、冷かに見てはならぬ。否、末期に於てすら是程のものを造り得たと云ふ事を感嘆せねばならぬ。單純な端嚴なその姿には實に意志の美が表現せられてゐるではないか。佛教の高麗朝は遠く去つて、今は儒教の李朝である。地の教へに育つものは

地に横はる安泰な鞏固な美を持たねばならぬ。光化門に於て人は李朝の美の權化を目前に仰ぐのである。如何に單純に泰然としてそれが地に横つてゐるであらう。門を過ぎるものは皆その權威に打たれるのである。實に一つの王朝の威嚴を示そうとして建てられた好個の紀念碑である。

人々は嘗てあの門前の廣場に處せまく積み上げられた無數の巨大な材料が火炎に包まれて、景福宮再建の企圖が空しくならうとした事を覺えてゐるであらう。非常な勞苦と莫大な費用とが空しく灰燼に歸して、民が禍ひに志を弱めた時、それ等の出來事を殆ど一顧にだにせず、立ち所にその遂行を迫つた大院君の意志を覺えてゐるであらう。實に今日の光化門はその不撓な精神の大膽な披瀝であつた。

彼は彼の歿後僅かに二十數年餘りで、彼の意志が造り上げた此強固な門が、早くも瓦壞せられようとはゆめ想はなかつたであらう。私も亦藝術的意識ある吾々の同胞によつて此事が白晝なされようとは想ひたくないのである。幸ひに之は私の誤聞であらうか。然し時間はまもなく私に恐るべき光景を示そうとしてゐる。此暗い勢ひを止める力はもう何處にも無いのであらうか。同胞よ、東洋の純粹な建築を敬愛せよ。それ等に比敵し得るものを今の吾々は建て得ないではないか。今日の生活に不用であると云つて惜みなく棄てゝはならぬ。藝術は功利の關係を超えるのである。美があるものは厚く保存せよ。特に純東洋のものを吾々の榮譽の爲に熱愛せよ。あらゆる事情に於てそれ等のものを守護する事は、祖先への追慕であり藝術への理解であると信じ切れよ。あの光化門の如きは近代の作であるとは云つても、東洋中にそう澤山はない建築である。朝鮮に於て五個の優秀な門を撰ぶなら、必ずやその中に入るべき作である。作品の量に乏しく數に少ない朝鮮に於ては特に貴重な建築の一つではないか。況んやあの門が主都の美を飾つてゐるなくてはならぬ一要素であるのを誰も知りぬいてゐるであらう。その主門が奪はれる時、景福宮に何の力が出てこよう。然も景福宮を失う時人は漢城の中心を失うのと同じなのである。あの王宮より、より正確な形式とより偉大な規模とを持つものを朝鮮の何處にも見出す事は出來ぬ。それは李朝建築の代表であり模範であり精神ではないか。

政治は藝術に對して迄無遠慮であつてはならぬ。藝術を浸害するが如き力を愼めよ。進んで藝術を擁護するのが偉大

な政治の爲すべき行ではないか。友邦の爲に、藝術の爲に、歴史の爲に、都市の爲に、就中その民族の爲にあの景福宮を救ひ起せよ。それが吾々の友誼がなすべき正當な行爲ではないだらうか。

特に朝鮮を想はせる諸官衙を左右にひかへ、聳える北漢山を背景として遙か大通を向ふに光化門を仰ぐその光景は、忘れ難いものではないか。自然との配置を深く考察して計劃せられたその建築には二重の美しさがある。自然は建築を守り、建築は自然を飾つてゐるではないか。人は猥りにその間にある有機的關係を破つてはならぬ。然るに何事であらう、今や天然と人工とのよき調和が理解なき者の爲に破れようとしてゐる。夢に過ぎないならば幸ひである。だけれどもそれが恐るべき現實であるのを如何にしよう。

試みに十餘年の昔を想へよ、偉大な光景に心を引かれて門に近づく時、人は思はずもその莊嚴な美に再び心を奪はれるのである。かくて中門を入り錦川橋を渡れば、前には壯大な勤政殿が聳え、背後には康寧殿や慶會樓の瓦が波うつ如く重つてゐる。禁苑奧深く入れば或は綠に或は赤に身を飾つた幾十箇の建物、或ものは蓮花を下に浮べ或ものは松の梢を高くかざして各々が美しき場所をと撰んでゐる。東には建春門、西には迎秋門、北には神武門、そうして南面の正門をこそ人は名づけて光化門と題したのである。

然し此整然とした組織ある光景は、もう二度と此世では見得ないのである。李朝の代表的建築である康寧殿と交泰殿とは既に他に移轉せられ變形せられ、今は只溫突の煙出しのみが小山に添ふて淋しく佇んでゐる。主要にして最大な建築である勤政殿を、門を通して仰ぎ見る日はもう二度と歸つてこないのである。そのすぐ前にそれ等東洋の建築と何等の關はりもあらぬ尨大な洋風の建築、即ち來るべき總督府の建物がその竣成を今や急いでゐる。あゝ嘗ては自然の背景を考察し、建物と建物との配置を熟慮し、凡てに均等の美を含ましめ、純東洋の藝術を保留しようとした努力は、今や全然破壞せられ放棄せられ、無視せられ、之に代るのに何等の創造的美を含まぬ洋風の建築が突如として此神聖な地を犯したのである。之が爲に光化門に續く興禮門は既にあとかたもあらぬ。あの美しい錦川橋と、流れを下に睥睨してゐ

たあの驚くべき石彫の怪物とは、今や無殘にも取り拂はれて只叢の中に散らばつてゐるばかりである。あの偉大な慶會樓は今後も殘るであらうが、それは遊宴の用に給し得るからに過ぎぬ。かくして殘る光化門がその位置に立つべき意義は酷くも奪はれてきたのである。嘗て門はなくてはならぬ位置に建設せられた。然し今は住む者が異つた爲に在つてはならぬものとして考へられる。誰かよくあの洋風の建築が光化門の存在を無視して設計せられたのである事を否定する事が出來るであらう。

現代の東洋、特に走馬燈の樣に凡てが激變してゆく現代の朝鮮に於て、あの光化門こそは貴重な遺作品ではないか。その破壞は無益であるのみならず、吾々の無知の匿し得ぬ證據とさへなるであらう。然も尙現はれようとしてゐる事實は一層奇怪ではないか。あの門が取り去られて、その代り何が建てられるであらう。吾々は偉大なものを無益な勞力によつて破壞し、矮小な門をそれに代へしめる日を待ちつゝあるのである。人は狂つてゐるのであらうか。如何なる技術が光化門より、より莊嚴なより巨大なより美しい門を代つて建て得るであらう。二つの門を心に想ひ並べよ。何れが優れてゐるかを撰擇するのに一瞬の時間も必要とならないであらう。然し乍ら今はあり得べからざる事が恐れなくして行はれようとしてゐるのだ。

人々から決して消えぬ一つの記憶が、消えよと强いられてゐる日が刻々に近づいてゐるのだ。然し更に尙消えない記憶が之によつていや强まると氣附かないのであらうか。どうしてあの光化門を破壞する樣な考へに迄吾々を導かなければならないのであるか。おゝ、どうしてそれを取り除く事を餘儀なくする樣なはめに自らを陷れたのであるか。吾々には此處置を辯護すべき辯護らしい辯護があり得るだらうか。かゝる事は吾々の爲していゝ友誼であらうか、又は之が建築に對する正しい理解であらうか、吾々はその破壞を是認すべき積極的理由をどこに見出したらいゝのであるか。おゝ、吾々は答へ能はぬ答へを望んではならぬ。然し世は答へる事を必要とすらせずして、行はんとする所を行ふのである。時間は躊躇する事なく光化門の死期を吾々に近づけてゐる。

門は再興せられてから未だ五十餘年の星霜を經たばかりである。それがどうして造られ、誰が造り、如何にして完成

せられたかは、今尚新しい追憶ではないか。それ等の事を親しく目撃してゐる人々の目前で、もう一つ誰が之を毀すかの記憶を追加するのは、餘りに無謀な餘りに無情な行爲ではないだらうか。

私は嘗て是等の事を氣附いてゐる者が、破壞を避けて移轉を試みようとしてゐる事を側聞した。あゝ。然し此慈悲らしい處置によつて、如何なる運命を門が受けるであらう。幸ひに死は之によつて免れるとしても、門が持つ存在の意義は半ば殺されて了ふのである。光化門は景福宮の門であつて何處の門でもあらぬ。あの位置とあの背景と、あの左右の壁とを除いて、門にどれだけの生命があるであらう。形體は殘つても、それは抽象せられた生命なき形骸ではないか。特に自然と建築との調和を慮つた古人の注意を無視して、それが如何なる意義を保つであらう。もう彼を死から救ふ事は出來ないであらうか、彼の存在の價値を是認し保護しようとする人はないであらうか。彼はまだ若いのだ。肉體は完全に健康であり、精神は依然として鞏固ではないか、時ならぬ死を彼に迫る罪は、誰が負うべきものであらう。

おゝ光化門よ、如何にお前は寂しく思ふであらう。お前の友達の多くはお前よりも先に殺されて了つた。都の西方を飾つてゐた敦義（西大）昭義（西小）の兩門はもう市民の目には入らないのである。先年私は惠化門（東小）を訪ねたが保護する者がない爲に、その可憐な姿はもう風雨に堪えない樣に見えた。お前の尊ぶべき兄弟である崇禮門（南大）は城壁から孤立され、緣のない柵によつて僅かに守られてゐる。愛してくれる主人のないお前達は如何にその短い運命を淋しく想ふであらう。死なずにすむ筈のお前達が死なねばならぬ此世を、如何に不自然に私は感じるであらう。

あゝ門前に安置せられた二個の大なる石獅よ、よくお前達は永い間王宮の正門を守つてくれた。寒い時も暑い時も少しもその姿を亂さずに、近づく者の心に權威を以て臨んだ。そうして門に應はしい威嚴と確實とを以て宮殿にいや强い美を添えてくれた。お前達は今も默々として前面を睨んでゐるが、お前達の主人の身の上に降りかゝつてゐる運命を氣づいてゐるか。知らないだらうがもうそれは臨終の床に橫つてゐるのだ。おゝ、お前達すらも動かじと思ふその場所から動かされる日が近いのを知つてゐるか。お前達はどこに取り去られてゆくだらう。私もそれを知らないのだ。否、取

り去る人すらもどこに持つてゆくかを其日まで知らないだらう。許してくれ、おれは罪ある者の凡てに代つてあやまりたい。おれはその證にもと思つて今筆を取つてゐるのだ。

或は眞夏の暑い時に、又は空が吹きくる雪に泣いてゐる時、又夕ぐれ半月の鎌が青白く樓上にかゝつてゐる時、幾度か私は樣々な想ひにかられて門を仰ぎ見た事であらう。今もその巨大な姿があり〱と目前に浮んでゐる。それが此地上から奪はれる日が近いとどうして想ひ得よう。然しそれは苦しい現實の出來事なのだ。誰もそれを取り毀す方がいゝと云つてはゐない筈だ。然るに如何なる事情がかゝる破綻に迄お前を導いたのであらう。

私は耶蘇が十字架につけられた時云つた言葉を想ひ起してゐる。人々は「何をなしてゐるかを知らないのだ」。若し何を爲してゐるかを知つてゐたら、爲す可からざる事を爲す、その愚かな罪に陷らずにすんだであらう。

光化門よ、長命なるべきお前の運命が短命に終らうとしてゐる。お前は苦しくさぞ淋しいであらう。私はお前がまだ健全である間もう一度海を渡つてお前に逢ひに行こう。お前も私を待つてゐてくれ。然しその前に私は時間を見出して此一篇を書いておきたい。お前を産んだお前の親しい民族は今言葉を愼むことを命ぜられてゐるのだ。それ故にそれ等の人々に代つて、お前を愛し惜むでゐる者が此世にあると云ふ事を、生前のお前に知らせたいのだ。そうしたいばかりに私は是等の言葉を記して公衆の前に送り出すのだ。之によつてお前の存在がもう一度意識深く人々に反省せられるならどんなに私は喜ぶだらう。そうして私が記す文字によつてその意識を永續さす事が出來るならばお前もそれを喜んでくれるだらう。その事が又私の悅びでなくして何であらう。

（一九二二、七・四・東京にて）

新しき村電氣事業寄附募集

電力を借りることによつて、仕事と生活との能率は非常に高められます。新しき村はそれを成就しようとして金の必要を感じてゐます。村に對する同情と理解とからその仕事に合力して下さるなら、それは村に取つて一つの大きな喜びだと信じます。

有島武郎

一、寄附は一口三十圓とします。
一、寄附は一人で幾口でもかまいません。
一、寄附金は(振替東京壹九八八五番。三島章道宛)か、又は爲替か現金で三島章道宛にお送り下さい。受取のハガキを差上げます。
一、寄附はいづれ何かの雜誌でまとめて發表いたします。

新しき村電氣事業後援會
東京市外千駄ケ谷町七六二
責任者　三島章道

發起人及び贊成員（イロハ順）

犬養健　細川護立　園池公致　園池公功
長與善郎　東松友光　柳宗悦　松村務
小泉鐵　近藤經一　有馬頼寧　有島武郎
有島生馬　里見弴　木下利玄　三宅重也
三島彌吉　三島章道　志賀直哉

赤い旗の下に

―追放旅行記―

ワシリイ・エロシエンコ

自由を探して居る亞米利加の勞働者の團體

其れは一九二一年六月四日の午後でした。其れは私の日本に於ける滯在の最後の日であつた。此の日が私の生涯の最後の日になるやうに祈つたけれども、其んな祈りを聽いて具れる可き神樣は居なかつた樣でした。

日本を追放の命令を受けた私、大勢の警官に取り圍まれて鳳山丸といふ浦鹽行きの汽船に載せられた私に、最後の別れを告げに來て具れた人は朝日新聞の記者と敦賀警察に露西亞語の通譯をして居る商業學校の先生との二人であつた。二人とも私に同情して、二人とも離れないで私の傍に居た。そして私が何か云ふと、二人は心配相に「氣を付けなさい。いかんです。警官が聞いて居る。」と注意して具れる。それで私も默り込んだ。だが、私が默り込んで居ても、二人には、私の限り無い悲しみ、言葉で言ひ盡せない寂しさがわかつて具れたであらう。

私は東京の友達の誰かが來て具れる事と思つてゐた。然し誰も來ませんでした。友達は會ひに來る事が出來なかつた。朝日新聞の記者と露西亞語の先生とは私を三等室に連れて行つて色々荷物や、坐席やの事で何くれとなく世話をやいて具れた。三等室はムツとして息をする空氣もない樣に思はれた。私等は又警官に睨まれて甲板へ上つた。

いくら待つても東京からは誰も別れに來ませんでした。

見送り人の降りる銅鑼が鳴つた。朝日新聞の記者と敦賀の先生とは私に最後の固い握手をした、其の二人の握手には東京の懷しい友達の暖味が感ぜられました。二人は汽船を下りた。三度目の汽笛が激しく鳴つた。

三千噸の鳳山丸は何物にも恐れ無い樣に、自由の海に向つて愉快に急ぎ出した。

しかし、私には廣い自由な人生の海へ乗り出して行く元氣が

なかつた。私は船の手摺により掛つてぼんやりとまだ東京の友達を待つてゐた。幾ら待つても船が動き出しても、誰も來ませんでした。あの人達は來られなかつたのでせう。そして誰もかも別れに行く必要なんかないと思つたのでせう。それでも私は泣きませんでした。

ずつと前には遠い異國だと思つてゐた、しかし今では露西亞よりも親しくなつたその日本を追はれる今日、兄弟よりも愛して居た友達に會へずに、永久に別れて仕舞はなければならない。

私は泣かなかつたが、唯聲が變に涸れて、咽喉が全く乾きました。輕い眩暈がして一寸嘔吐を感じました。私を浦鹽まで送つて吳れる一人の警官に助けられて私は三等室に降りた。頭も心も空つぽになつた樣な氣がした。

私の魂だけが段々遠のいて行く日本に取り殘された樣に思はれた。

まだ午後の五時にはならないが私は苦しいので床に入つた。そして意識を失つたのか、自然に眠つたのかよくわからないが、昏睡狀態に落ちやうとした時、これで何時までも目が覺めないやうにと祈つたことをはつきりと覺えて居る。

一等か二等の船客には前に過激派から逃げて日本に隠れてゐた人達が多かつた。今、浦鹽ではボルシエビキの政府が倒れたのだから彼等は大欣びで歸る處です。しかし三等には其れと全く反對で、勞農露西亞を憧憬して亞米利加から歸る二十人餘りの勞働者の團體があつた。(日本人の三等と全く別になつてゐる。)

日本では勞農露西亞と云へば地獄に近い恐ろしい處だとか、又は地獄よりも酷い處だと思つて居るのが普通ですが、亞米利加に居る露西亞人の勞働者の仲間では勞農露西亞は地球の上に再び恢復された樂園だと信じて居るのがあたり前になつて居るのです。

其の爲に總てを捨てゝ亞米利加から露西亞へ歸つた勞働者の群れは何萬となくあります。鳳山丸の勞働者の團體も其の一組であつた。其の組の中には五人の子供と一人の孫とを連れて居るお爺さんとお婆さんとが居りました。子供は勿論、事、勞働者の中にも露西亞語を大分忘れたらしく良く話せる人は一人も居なかつた。

彼等は皆、何時か露西亞に生れて帝政の壓迫の下に自由を愛する事を習ひました。其の時分はニコライ皇帝政府の壓迫が餘り酷いので、彼等百姓は皆海を越へて遠い不思議な亞米利加へ自由を探しに出掛けました。その不思議な亞米利加で彼等はやつと自由を見付けたけれど、其の値段が仲々高かつた。亞米利

加の自由の相場は人の心と、人の活に定まつてゐました。自分の心、自分の魂を支拂つた者は、生きた機械に化けて自分の樣な機械や電氣機械を動かしたり、機械に動かされたりして自由なビジネス、メンの生活を送る事が出來ます。だが、自分の精神を亞米利加のビジネス、メンの自由の爲に支拂ふ事を承知しない連中は、——人間の生きた機械の材料から僕等が不思議がつて眞似の出來ない亞米利加の文明が出來た。其の物質文明の機械なる事を嫌やがつて怒る連中は——アナキストやI・W・Wの會員になつたりするより仕樣がなかつた。

其の連中は文明といふ機械の運轉を邪魔しやうと思つて其の車輪に棒をつゝ込んだり、そのスプリングへ石を投げたりして、世界を憎くんで、世界から憎まれて變てこな生活を送つて居ます。鳳山丸に乘つた勞働者の中では二三度監獄へ入つた人もあつて、五六年も懲役を喰つた人も居ました。

彼等は皆、無政府黨か、I・W・Wの會員だつた。それでも其の仲間には追放命令を貰つた者は一人も居なかつた。彼等は私が警官に取り圍まれて汽船に載せられたのを見て吃驚しました。

「何て云ふ人だらう。何事をやつた男だらう。」と考へて見ずには居られなかつた。——私は變な夢から目が覺めた。私の傍には澤山人だかりがして、何か私の事を噺し合つて居る樣でした。

「日本で無政府黨の結社をこしらへたんだらう。」「勞働者の同盟罷工を煽動したんだらう。」「いや、ボルシエビキの內亂を計畫したからだ。」と云ふ話が私の耳に入つた。私は一寸起き上つて床の上に坐つた。皆はそれを待つてゐた樣でした。そして口を揃へて、

「君は一體日本で何て云ふど偉い事をしたんですか。何で日本から追つ拂らはれるんですか。」と聞くので、私は「私が偉い事をやつたから追放されたんぢやなくて、私を追放した人が詰らない事をしたのだとわかつて吳れねば困るよ。」と云ふ事を幾度も幾度も、何遍も何遍も繰り返へしましたが、勞働者達はそれをどうしても信用して吳れなかつた。「お前は謙遜して居る。」と云つて、彼等は猶、私をど偉い者の樣にする。仕方がないから私は顏を赤くし乍ら、日本に居た頃の自分の生活を話した。日本の社會主義者の中に親しい友達がある事や、社會主義者の演說會や、研究會に出た事や、雜誌でお伽噺を書かして貰つた事や、それから、演壇に出て露西亞の自由の歌をうつたことや、二三度演說もした事や、そして遂に其等の事で追放された事を話した。其れを聞いて勞働者は皆私に心から同情して、以前か

ら持つて居つた日本に對する反感が百倍になつた。

食事の時に彼等は船の會社の惡口を云つたり、皿を投げ出したり、船の上級船員が通る路へスープを零したりして船のボーイを散々困らせて居た。時々ボーイは我慢が出來なくなつて、上級の役員を呼んで、

「此の過激派の奴等は、僕の手に負へません。」

と泣き聲で訴へる樣な事が何度もありました。勞働者は皆絕對無條件の自由の主張者なので、彼等の眼には日本人が壓迫の權化の樣に見えた。

彼等は絕對の自由を主張して自由の夢ばかり見て居た。そして其の夢が事實と合はない時には彼等は酒を飲んで自由の歌をうたひ乍ら、灰色の現實を頬ひて桃色の夢に近づけやうとした。しかし、寢ても覺めても憧れて居る其の自由といふ物が、如何う云ふ物か、彼等自身にも良くわからなかつた。彼等の云ふ自由は總て夢に見るのに丁度よい物で、何の形も無い、何の定義も出來ないものであつた。唯、××××××××「×」×××。××××××××××。×××××××××、彼等の自由は考へられないものであつた。

三等には勞働者達の外に、香港から歸る三四人の大學の教育を受けた露西亞人がゐた。

彼等はケレンスキー政府の樣な政府が好きな人で、勞働者と盛んに議論をした。勞働者達は大學連中の理屈に敵はない時、私の傍へ來てどうか自由の歌を歌つてお呉れと私に賴んだ。私は自由の歌よりも葬式の歌をうたひたい氣持ちがして居たけれど勞働者が餘りせがむからギタを執つて其の爲めに歌をうたひました。其れを聞いて居るうちに彼等は新しい元氣を得て、前に大學出の連中の理屈に答へる事が出來なかつたのが、今度は其の答が自然に湧いて出て來るので彼等はワイ〱騷いで酒を飲み乍ら何時迄も何時までも果てしない議論をつゞけて居りました。

赤い旗が見えない

敦賀から浦鹽まで二晝夜しかかゝらないけれども其の短い間にでも勞働者の友達になるのに充分だつた。

カトコフのお爺さんやお婆さんは私を息子の樣に可愛がつた。

チヂンスキーと云ふ若い勞働者の親分は私を兄弟分の樣に取り扱つて呉れました。

他の勞働者達は私がきまりが惡くなる程、私を尊敬してくれました。

六日の朝八時頃私は、「浦鹽が見える！」といふ聲を聞いた。

皆甲板に上つて、浦鹽の方を見ながら、色々亢奮して話して居ました。或者は殘りをし相に口から泡をたてゝ、或者は心配相に頭を垂れて。――

勞働者達は皆揃つて後甲板の一隅を占領して露西亞の悲しみや、怒りの基になつて居る謎の浦鹽市街を眺めて居た。

私も彼等と共に甲板に出たけれども、私の身體も心も東の方――日本の方――へ向つて居た。――皆默り込んで居ました。しかし此の沈默はどんな言葉よりも、はつきりと彼等の不安の狀態を現はして居た。チヂンスキーは私の手を執つた。其の手は氷の樣に冷たかつた。

「どうしたの、寒い?」と聞くと、

「うん、寒くはないんだが、赤い旗――あの懷しい赤い旗が見えない。――」

其の聲が切れた。私の手の上に熱い涙が落ちた。その涙が灼熱の樣に私の手を燒いた。

「アツ!」と私は輕く叫んだ。「どうしたのエロさん」と皆心配相に私を見た。「いや、なんでもないんです。」と私は東の方へ顏を向けた。暫くたつて私はチヂンスキーに云ふた。「××××××××××××。」

チヂンスキー親分は亢奮して、

「樹てますとも――日本――いや全世界の壓迫が下らうが!」

といつて手を握りしめた。其の手は矢張り氷の樣に冷めたかつた。

其の眼からは又熱い涙が僕の手の上に落ちた。傍にたつてゐた無政府主義者のマイク(彼は帝政時代の大富豪の息子です。)は歌をうたひ出した。

「強い手で、壓迫を振りはなして、
地球の上に
×××× ××××
×××,」

其れは露西亞の×××の一節であつた。

「危いぢやないか!刑事が居ますよ」と私はいつた。

「なあに、日本の警官が全部揃つてこゝに居ても無政府主義者は恐れませんよ。ボルシエギキーとは違ふからね。」

マイクは心細くなつてゐるレーニン政府黨の勞働者達を野次る樣にいつた。

皆淋し相に笑つた。皆すつかり元氣が無くなつて仕舞つてゐた。

「友達よ。恥しいとは思はないんですか。こんな事では本當の苦しみに會つた時にはどうなるんでせよう。」と私が云ふと、カ

トコフのお婆さんが、
「だつて、お前だつて靑くなつてるぢやないか眼に涙が一ぱい、唇がふるえてゐる癖に……」
「其れは赤い旗が見えないからぢやない。」
私の答を聞いてチヂンスキーは叱る様な調子で、
「ぢや、君はまだあの憎む可き日本を懷かしく思つてゐるのか――」。
私は只笑つて答へなかつた。「憎む可き日本が遠くなれば、遠くなる程なつかしくなつて來て仕方がない」事を此の勞働者に云ひたくなかつた。――
二等の甲板では露西亞の軍人達が喜こんで居た。
「浦鹽が前の通りだ。赤い雜巾の代りに、懷しい我が露西亞の三色旗が見える。あゝ嬉しい――」
一人の中尉が演說を初めた。
「諸君！其れは露西亞復活の第一歩ではないか、本當の自由の初まりではないか、自由萬歲！」と叫んだ。若い軍人が聲を揃へて「自由萬歲！」を叫んだ。
私等は默つて居た。
中尉は續けて、
「皆さん、向ふを御覧なさい、あれは私等の愛する父セミヨノフ、アタマンもゐらつしやる船だ。其の船で露西亞の三色旗と日本の旗とが十字架をなして、全世界を支配する様に思はれます。
私は日本の兄弟と手を執つて、何處までも一緒に進む事をいのります。」
彼は帽子をとつて十字を切つた。若い軍人達も同じく十字を切つた。中尉は亢奮して續けた。
「愛する日本の兄弟と手をとつて、何處までも、莫斯科までも、ペトログラード迄も進む事を祈ります。そして桑港までも、紐育までも。――」
亞米利加歸りの勞働者達は頭を垂れて默つて居ました。チヂンスキーは私の肩に顏をあて丶、「君、――何とか云つて呉れないか。僕等勞働者の爲に、總てを捨て丶亞米利加から歸つて來た其の勞働者を慰めるために、――僕等は餘り淋しい。」
今迄泣きたいのを我慢して居た若い勞働者の親分は子供の様に泣きかけた。私も何んだか氣が立つて來た。
「君――赤い旗が見えないから泣いて居るのか、赤い旗をたてる爲めには布切れは幾らもあるに、×××××××××××××。××××××××××××××××××、――が赤い旗の遊戲なんかもう止した方がい丶。其んな事に日

本の社會主義者に任かした方がいゝよ。「セミョーフ將軍の旗と旗とが十字架をなして全世界を支配して居る樣だ。」とあの士官が云つた。古、猶太人が新しい教を持つて來た基督をかけた樣に、其の十字架にセミョノフ將軍達が全世界に新しい教を持つて來る露西亞を掛け樣と思つて居る。だが新興露西亞は侮辱され、十字架にかゝり地獄まで陷ちた基督ではない。其んな事はもう昔の事、露西亞は地獄から勢を以て復活して天に昇る基督だ。其れを見る事が出來ないのはパリサイの人等だけだ。そして全世界を支配すると思はれるセミョノフ將軍の旗は新露西亞の敵の墓場の上に、全世界に恐ろしい戒めとしてたつに違ひない、樹つ樣に祈らなくともいゝ。努力さへしたら。——

「努力するとも。安心しなさい。」と彼は私を慰める樣に云つた。宛かも私が新露西亞の未來を一度でも疑ひ、心配した事があるかの樣な調子で。——

檢疫のボートが鳳山丸の舷側についた。皆新しい浦鹽政府の役人で其の中には肩章をつけた者もあつた。

「旅行劵を一等室へ持て來るやう——。」とボーイが大聲で叫んだ。皆どや／＼と上甲板に上つた。私も一等室へ行つた。途中でチヂンスキーは私の手を握り乍ら「若しあの奴等が君に何かやる樣なら、僕等は其を勞農政府に訴へて君の仇を討つてやるよ。」といつた。

「大丈夫、そんな心配はしなくてもいゝ。」

といひ乍ら私は一等室へ入つた。

誰かが私を安樂椅子に腰を掛けさせた。其の椅子は旅行劵を調べる役人の傍にあつた。

役人は初め一等と二等の客の旅行劵を檢べた。其れから三等に移らうとすると日本の役人が出て何か露西亞語で私の事を露西亞の役人に話した。彼は私を見乍ら極く低い聲で言つたものだから私には何を云つて居るのか分らなかつた。露西亞の役人が吃驚して、

「……エロセンコー……は、そうですか。……宜しい。……よく注意しましよう……私の手から離しません。……安心なさい……。」

と答へたのが、切れ切れに私の耳に聞へた。役人は其れから私の名を呼んだ。

「貴方は日本からどういふ理由で追放されたのですか。」

「其れは日本の警官に聞いた方がいゝでしよう。」と私は答へた

「貴方は社會主義者だつて？まさかボルシエビキの方ではないでしよう。」

「私はボルシエビキを研究中です。」

「私は今、日本の役人から色々の事を聞いたけれど、貴方は心配しない方がいゝ。安心し給へ。私達の政府は誰れをもいぢめやうとは思つて居ない。而して無論、何處かの樣に盲人を困らせるもんぢやありません。貴方が勞農本國へ行きたいなれば何時でも行つていゝ、浦鹽に居たいなれば、何時迄も居てもいゝのですよ。」と役人は親切に切り上げて、ペスト免疫税も旅行劵の代もとらずに私を許した。下甲板に下りると其處にエスペラント會から私を迎へに來た人がありました。日本の警官が私の荷物を船から下して色々の世話をして與れた。其れから私に向つて優しく云つた。

「此れで私の役目が濟んだんです。貴方はもう自由の身になりました。最後に握手しましよう。」彼は強く私の手を握つた。

二つの警官の手をもつて私は懐しい日本に最後の握手をした。

日本は警官の手をもつて外人の友達の手を握るのが、今の習慣ではあるまいかと淋しく思つた。

三色の汽車

浦鹽が三色旗の街になつた。其の旗の下に勞農露西亞に反對する貴族、宗教家、資本家、知識階級(インテレゲンチュア)、勞農露西亞に憎まれ、勞農露西亞を憎むすべての者は集まつた。彼等はバイカルから逃れ來たセミヨノフの軍隊やウラル山脈から日本海まで血で西伯利を染めたカッペリー軍を以て最後の戰の仕度を初めた。

セミヨノフの軍隊も、カッペリー軍も、もう退却す可き土地が無い。此の街で、彼等は生きるか、死ぬか、決戰しなければ他に道は無い。さうして生きる事も死ぬ事も共に結局は「黒い鳥」(反過激派の首領)の爲である。

實に三色旗は屋根の上にも、家の窓にも見えて居た。人の帽子も胸も三色に飾られて居た。そして浦鹽の普通人の眼にも、談話にも、すべての運動にも其の三つの色が確つきりと現はれて居ました。浦鹽の人は白側(反勞農政府)にしろ赤側(勞農系)にしろ自分の色を隱すには三色が丁度具合好かつた。浦鹽人は「白」にも「赤」にもうまく入れないけれども、どちらへでも入る事も出來る。其れだから彼等は白軍がやつて來ても驚かず、赤軍が浦鹽を占領しても恐れない。

白軍が失敗して倒れても浦鹽人は愉快に浮かれてダンスする。赤軍が倒れても彼等は色々な酒に醉つて戀の歌をうたふ。この浦鹽人は近頃東洋の新しいデカタン的産物で他の所では仲々見られない名物である。

浦鹽のエスペランチストは私を喜こんで迎へて與れた。彼等

の仲間では私を知らない人は一人もありませんでした。

そして私がエスペランチストであるのに、日本から追放されたと云ふ事を聞いて大變に腹を立てた。そして日本政府の横暴をエスペラントを以て全世界に知らせると云つて居ました。會長は私に自分の宅で露西亞がよくなる迄泊まる樣にとすゝめて與れました。而して私の歐露行きを止めようとして、私を威嚇かす爲に毎日「浦鹽日報」（日本經營の露字新聞）等の記事を讀んで聞かせて與れました。其の記事に據れば「ハバロフスクは燒かれて、チタは陷ち相になつた。白軍は諸々に勝利を得て、赤軍は敗北して居る。レーニンが暗殺され、トロツキーは亞米利加の女優に連れられて露西亞を逃げ出した。セミヨノフ將軍は莫斯科へ行く支度を初めた。」と云ふ樣な調子で、此ういふ記事を書く事を東洋に於ける日本の新聞記者は自身の神聖な使命であり、愛國的行爲だとでも考へて居る樣でした。實際を云ふと此んな記事を信ずる馬鹿より、暫く馬鹿の方が却つて多かつた樣でした。私は出來るだけ早く此の三色の變てこな街を去つた方がいゝと考へたので、着いた其日から歐露へ行く支度を初めた。其の支度は大袈裟で可笑しかつた。私の荷物は殆んど純必要品に化つた。パン、罐詰、砂糖、茶、鮭、燐寸、石鹸、糸、針等がトランクに一杯入つて居ました。私は恐ろしい野蠻國へでも入る樣な氣がしました。

エスペラントの會長の家にトサといふ女學生が居りました。彼女の故鄕の家が、私が通過しなければならない、日本軍と赤軍との境界線になる烏蘇里河の近所にありました。私は暫くの間に彼女と友達になつたので、彼女も是非、私と一緒に烏蘇里まで行くと云つて支度を初めました。お父さんは浦鹽の醫者で、彼女の繼母は矢張り産婆をしてゐました。二人とも少しも反對しなかつたので六月の十一日、正午零時の汽車で私と彼女とは浦鹽を出發ちました。

汽車の中は大變に面白かつた。

カツペリー軍の二三人の兵士、セミヨノフ軍の二人の少尉、白色の說教の上手な有名な牧師、其他は大抵、三色な浦鹽の紳士連であつた。初めの間は皆オヅ〱して三色の話許りして居ましたけれども、時間がたつに連れて皆お互に知り合ひになつて、一人一人慣れて來た。

セミヨーフ軍の士官は私が日本から來た許りだと聞いたので、是非共日本人のセミヨノフ將軍に對する意見を聞きたいものだと云つた。自分が聞きたいよりも、寧ろ其の意見を浦鹽の紳士連に聞かせてやりたいやうな樣子であつた。彼等は無論、何年も日本に居た私をセミヨノフ將軍の崇拜者だと思つたので

しよう。私は軍人にお世辭を云ふ事が嫌ひな人間だから、其の時も少しも遠慮する氣になれなかつた。

「大抵の日本人は、セミヨノフ、アタマンは日本に利用されてゐる馬鹿正直だと思つて居る。日本に居る露西亞人も外國から金や軍器を貰つて露西亞を平和にしやうとして居るアタマンを裏切り者だと云つて怒つて居ますよ。」とあけすけに云ふと少尉はブル〳〵と震へて、

「氣を付けろ！」

と叫んだ。二人とも大變に怒つた。だが、女學生のトサさんとカツペリー軍の兵隊が仲に入つて漸く彼等をなだめ付けた。浦鹽の紳士達は笑つた。有名な牧師は小聲で「惡しきものの謀略(はかりごと)にあゆまず、罪人の途にたゝず……」と呟いて居た。

私は是れ迄、セミヨノフの軍隊もカツペリー軍の連中も觀察する折がなかつたが、浦鹽に居た兵隊の事を考へるとカツペリー軍はチエツク、スロバツクと一緒に居て、何だか文明人の樣な印象を與へられた。其れに反して日本人や支那の軍隊と共に働いてゐたセミヨノフの連中は野蠻臭い樣だつた。

私は充分に觀察はしなかつたが兵隊の聲を聞いただけで其れがカツペリー軍か、セミヨノフ軍か聞き分ける事が出來た。

暫くたつと元氣を静める爲に酒を二三杯あふつた少尉は又私に向つて話を初めた。

「君、——東洋の過激派に反對するとすれば、軍器や金を日本からでなければ誰から貰へるといふのだ。露西亞を裏切つて日本から貰ふんぢやない、俺達は露西亞を救ふ爲にやつて居るんだ。俺達が日本に利用されたと惡口云へば云へるけれど、此方は日本を利用する積りで居るのだ。

日本を利用してセミヨノフ、アタマンが我が露西亞を本當の自由や本當の幸福に導かうとして居る。其れが分らない樣な奴等は露西亞の敵だ。——オイ君は過激派かい。」

トサは默つてゐなさいと云ふ樣に私の手を强く握つた。

「エホバは我が牧者なり、われ乏しきことあらじ。エホバは我をみどりの野にふさせ、いこひの水ぎはにともなひたまふ。」

と牧師はブツ〳〵祈り初めた。三色の紳士達はにやりと笑つた。すると少尉が急に調子が變つて來て、くだけた聲で、

「君、——一杯やり給へ。露西亞の成功の爲に——。」とコツプを突き出した。

「いゝえ、僕飲みたくない。」

「どうして？はゝあ共產黨か？大丈夫、飲み給へ、誰も見て居やしないよ。」（註—共產黨員は法律で禁酒になつて居るのです。）

と私の肩を打ち乍ら笑つた。其れから牧師に向つて、
「牧師さん一杯いかがです」とやると牧師は共産黨と思はれたら大變と考へたのか三四杯程も飲んだ。カツペリー軍の兵隊も共産黨でない證據を擧げた。牧師は酒を飲むと口が自由になつて來た。彼はニコリスクに說教にまねかれたのであつた。そして彼が私にあてつけて皆に說教を初めた。其れはどうやらニコリスクでやる說教の下稽古らしかつた。
「君達は共産主義を天から降つた理想だと思つて居る。レーニンは君達には新らしい豫言者の樣に見えるのだらう。其れは無理もない話だ。私等もケレンスキー政府が倒れて第二革命が起つた時、ペトログラードや莫斯科は煙や雲におほはれたサイナイ（猶太人が神より新らしい法律を受けた地。）の莊嚴な山の樣に思はれた。
レーニンが全るで稻妻か雷を以て猶太の國民に新しい法律を告げた神の樣に思はれた。しかし、其のサイナイの山は段々ゴルゴタ（耶蘇の死刑場。）に變り、新しい法律を告げるレーニンは神を呪ふサタンに變つた。ゴルゴタの上に罪のない基督を十字架に掛けました。……」牧師の聲は切れた。露西亞のゴルゴタを考へて彼は泣き出し相になつた。
私の隣りに坐つた浦鹽の三色紳士が、
「牧師さん。——レーニンが十字架に掛けたと云ふ露西亞の基督といふのは一體誰れの事ですかな。」と聞くと、牧師は、
「ゴルゴタの基督といふのは露西亞の敎會です。そして今レーニン、サタンから罪なき基督を救ふ爲めに兵を擧げたセミヨノフ、アタマンや愛する日本の兄弟を皆祝福しなければなりませんぞ。」
私が何か云はうとすると、私の傍に居た、帽子の上に三色旗を飾つた浦鹽人が亢奮して、「何！——外人の手で、君は、露西亞の基督を救はうと思つてゐるのか。罪なき基督は自身が救主で外人の救主を要する筈がないよ。
君達の云ふ露西亞敎會はこの世の大泥棒だ。かたりだ。其れを十字架にかけんで、一體どんな惡人を十字架にかけやうと云ふんだ。」
牧師は其の權幕に呑まれて、何か云はうとしたが、どうしても可哀相に吃つて、とう／＼何も云ふ事が出來なかつた。
私は吃驚して其の浦鹽人の云ふ事を聞いて居た。三色の浦鹽のインテレゲンチュア、紳士達は、
「こりや、大分面白く成つて來たぞ。」
と笑つた。私の隣りの浦鹽人は續けて、
「——君達がインテレゲンチュア、紳士達と手を組んで外人に

露西亞を救ふ事を頼んだのだ。君等こそパリサイだ。君達には柔しいアベルの弟を殺そうとする恐ろしいカインの劍が天使ガブルエルの手に持つオリーブの枝に見えるんだらう。ユダ、イスカリオテの基督を裏切る接吻は君等には兄弟の挨拶に思れる。

君達こそ可哀相な盲目だ。聾だ。目で見ても目えず、耳で聞いても聞えない。

「オイ、パリサイの連中！

君等は晝も夜も『あゝ自由の神よ。願くばなんぢの慈みにより、我を憐み、なんぢの憐憫のおほきによりてわがもろ〳〵の愆を消したまへ。我は只汝に罪を犯し、みまへにあしき事を行へり。』と祈つた方がいゝよ。」

汽車がにぶい音を立てゝ止まつた。隣りの浦鹽人は話しを切つて荷物を執つて出て行こうとした。出口で彼は私に向ひ、

「盲人の御方、君の幸福を祈りますよ。」といつた。私は、「どなたですか。」と聞くと、

「私はこのトコポコの者です。」と言ひ捨てゝ汽車を降りた。外には彼の信者らしい人が何十人も待つて居た。彼もトコポコの[illegible]教師だと誰かが云つた。

三色の紳士達は「あゝ面白かつた。」と愉快相に笑つた。

烏蘇里河の境にて

浦鹽の汽車はエフゲニエフカ迄しか行かない。其れはニコリスクから四つ五つ目の停車場で、カツペリ軍は其れを自分等の境界として守つて居た。エフゲニエフカから先、烏蘇里河迄は白赤兩軍の中立地帶になつて居て、其れを日本軍が守つて居た。

此の日本軍の守備區域が物騷で、パルチザンや馬賊の巣窟になつて居た。

こゝから馬賊やパルチザンは赤軍を攻めたり、白軍と戰つたり、農民を泥棒したり、日本軍を困らしたりして勝手な生活をして居た。其れで日本軍は馬賊やパルチザンを防ぐために居るのか、又は何の爲にゐるのか、浦鹽政府にも分らなかつた。もつとも、人手が少ない事は事實であるが。——

エフゲニエフカ停車場からは普通の列車は走らないでプロニウイツクといふ日本の産物が走つて居る。（プロニウイツクは汽車の中に防彈用の砂利の袋を積み重ねて乘客は其の影にかくれて旅行するもの。）

私達の箱には私とトサと他に二人の中學生が乘つて居た。私達は戸を開けて袋の上に坐つて、「馬賊が來たら面白いになあ。」と云ひ乍ら夏の陽にあたつて居た。

しかし馬賊もハルチザンも私達の列車を攻めに來て呉れなかつた。

五六時間の旅行の後、私達は「あゝ詰らなかつた。」と言ひ乍ら烏蘇里停車場に下りた。

烏蘇里驛は中立地帶の最後の停車場であつた。其れから先は赤軍の領分が展開される。

此の誰にも良く知られて居る普通の私等の世界と、あの赤い旗や、血色の雲や、黑い煙に蔽はれた新世界との、境となつた烏蘇里河は忙がし相に流れてゐた。半分破壞された一本の橋が此の二つの世界を接いで居た。

丁度、私等が行つた時は、此の橋を全部、爆破する用意が整つて居て、橋の赤軍守備兵は爆發の合圖を待つ許りでした。

日本と赤軍との外交官は妥協點を見出す事に失敗したので戰爭より外仕方がなくなつて居た、農民の間にはセミヨノフの軍隊が烏蘇里に向つて進行中だと云ふ噂さが盛んであつた。私は無論戰爭が初まる前に此處を出發しなかつたけれど赤露の方から普通乘客を載せる列車がもう全く來なくなつた。只浦鹽から引き上げた赤軍の役員や其の他に政府に關係した者の爲めに二三の車が來た事があつた。

普通の客はどうする事も出來ないので停車場でゴロ／＼し乍ら共產政府を呪咀ふ許りでした。

時々共產政府のコミサール(役員)を捕まへて汽車を賴んだけれど彼は未だ十八位の子供の癖に仲々威張つて誰の云ふ事も聞かなかつた。

日本人も、其うした人達を憐んで赤軍に汽車を送る樣に賴んだけれど其れも駄目でした。共產黨員でなければ、又は政府に關係のある人でなければ汽車に乘る事は誰も出來なかつた。皆全く困り弱つて仕舞つた。

其れでも不思議に、彼等には其れぢや共產黨にならうと云ふ者は一人も居なかつた。私は其れを面白い現象だと思つた。

私は自分の運命が定まる迄トサさんの家に厄介になる事になつた。

トサさんのお母さんも私達がついた翌日に歸つて來た。此の家で私は何年振りかで初めて田舍の露西亞の社會に接觸する事が出來た。家の傍には小さい庭や野菜畑もあつた。

朝早く起きて私達も水を汲んで、花や野菜物にかけたり、熱くなれば烏蘇里河に入つてワイ／＼騷いで遊んだり、遊び疲れると果物の木の影に隱れて本を讀んだり、日暮には又畑に出て草をとつたり、水をかけたり、晩にはサモワルの傍に集まつて議論したり、歌をうたつたりして本當に面白い呑氣な生活をし

て居りました。

私達の友達は、田舍の二人の先生、牧師、其の神學校の學生等、二三人の知識階級の人達であつた。

彼等は皆、農民と少しも違はないで、農民と同じく働いて生活して居ました。

此の近所の農民は皆、何十年前に露西亞から此地へ移民して來て困難な自然との爭鬪を繼續してやつと近頃樂な生活をする樣になつた。私達の話の種は無論、呪はれた共產政府であつた。私は以前にも農民が共產黨を憎んで居るといふ事を何度も聞いた事があつた。しかし其の憎しみの理由が私には良く理解らなかつた。

何百萬圓の財產や社會的地位を失つた資本家が共產黨を憎んで居る事は分り切つた話だ。しかし失ふ樣な地位もなく、大した財產も持つて居ない、却つて共產主義によつて生活の安定を得る位の農民が共產黨に對する憎しみは其の無知に基くのであると考へる他に何の理由をも見出す事が出來なかつた。

ところが、烏蘇里の農民とつきあつてから私は、自分の尊い汗や血を流して自分の手で儲けた金は何十圓の小金にしても、其れを失ふと云ふ事は、相場をやつて獲た財產や、多數の勞働者を搾取して造つた何百萬の財產を失ふよりも却つて辛いものだと云ふ事がはつきりと分つた

「富める者の天國に入るは駱駝の針の穴をくぐるよりも難しい。」と基督耶蘇の言葉を考へて見れば一寸の財產に噛り付いてゐる農民が神の國へ入る事は金持よりもどれ程難しいだらうか。

露西亞の政府でも、日本の政府にしろ、自分達の財產を何處までも自分達の財產として取り扱ふ事を許して呉れる、保護して呉れる、政府だけに此等農民達は從ふ事であらう。

時々私は彼等と夜の一時、二時までも議論した事がある。そして議論する中に私は、農民の心の中にも財產の神聖なる權利に對して深い疑ひがある事を發見した。——

彼等は皆私に同情して、烏蘇里の境を渡つて赤い國へ行かぬ樣に奬めた。

田舍の生活が餘り呑氣で、餘り愉快でしたから私は此の夏を田舍に過ごす事も大變面白いと思つた。

トサは烏蘇里から五六里離れた林の中に蜜蜂の養場を持つてゐた。

其處へ皆行つて暫く暮そうと思つて居ました。其れから矢張り四五里許り離れてシマコフと云ふ有名な修道院があつた。

其處へも行つて二三ケ月過ごしても差仕へないと牧師が云つ

た。

どうしたら良からうと迷つて居る内に浦塩から鳳山丸で一緒になつた勞働者の團體がやつて來ました。

浦塩でメルクローフ政府の下手糞な政治を經驗した勞働者達は氣違ひになつた樣に勞農露西亞に行きたがりました。

彼等は稅關吏に色々な物を沒收された上、變てこなチタから來たと云ふシ、ライフと云ふ共産政府の役人に散々だまされたので、彼等は大急ぎで露西亞本國に向つて行こうと決心して居ました。

彼等を止める方法はない樣に見えた。

彼等は私の顔を見て上陸してから初めての笑ひを笑つた。

そしてどうしても私を自分達の仲間に入れて、どこまでも一緒に連れて行く事を約束しました。

これで此の夏を呑氣に暮さうといふ私の計畫は一度に壞されてしまつた。

烏蘇里の友達に止められたのに係らず。私は烏蘇里河を渡る決心をしました。

靑二才め、生意氣な共産黨の役人が、どうしても汽車を出す事は出來んと頑張るので、彼等は馬車を四五臺借りて、其れにゴタゴタと荷物を乘せて、イマンと云ふ町まで馬車について步いて行きました。

ただ私とカトコフ爺さんの一家族だけは赤軍中尉の計ひで、軍隊專用の食糧列車に乘せられて、イマンまで行く事になりました。

六月の廿二日の夜。烏蘇里の友達に最後の「左樣なら」を云つて私は翌日の朝イマンに無事についた、

勞働者の團體は其の日の夕方六時頃大分疲れてやつて來ました。

私達は疲れた事は疲れたが、赤露に近づく事が嬉しかつた。本國には勞働者達を幸福が待ち受けて居る樣に思へた。——

だが私達の此の旅が、不幸な失敗に了ろうとは誰一人として考へる事が出來なかつた。此れから先は又一つの物語りになります。悲しい事に私は入國を阻まれ、勞働者達は氣違ひの樣に飛んで入つたのに係らず、暗い北地の金鑛に追ひやられたのが、私達の旅行の最後でした。

（支那に於て書く。）

片山氏に叱られ記

（退露日記の一節）

汗出ぬ助

一九二一年十二月七日、伯林にて。

△ペトログラードを西に船出して、獨乙のステチーンに上陸してからもう一ケ月になつた、伯林の勝手も少しは分つて來て、毎日のやうに電車の車掌と乗りちがいの喧嘩をしなくともよいやうになつた、今夜、例によつてホーヘンツオルレイン廣場の近くにある若い大使館員の下宿に御馳走と稱してよびつけられ、自分の入露前後の事情につき、引きつゞき、クドクドしく取調べをうける、ところで奴さん、今夜はブランデーをのんで醉拂つて居り、時々脱線する、元來煙草きらい酒きらいの自分はつくゞゝブランに醉ふて脱線するやうな外交官に、高い給料を拂ふべく血汗を流してゐるプロレタリアの納税者のために泣きたくなつた、勿論、奴さんの方では醉ふたふりして、私に脱線させ何かオシヤベりをさせるつもりであつたのかも知れぬが、昔から「醉はして聞きたい事がある」例はあつても「醉ふたふりして醉はぬ方から、聞きたい事を聞いた」例はないやうだ、果然奴さんの方で脱線した、即ちロシアで片山さんに會はなかつたかと云ふのだ、サア片山さんの風評は耳にして居たが、モスコウでも見うけなかつたと答へると、サモ得意氣になつて、長椅子の上に半分起き上り、

「居ない筈さ、片山さんは伯林に來て居るよ」と、如何にも、社會主義の大將でも、旅行劵の用事には大使館を煩はさねばならぬ、即ち奴の云ひ方では「菊の御紋章がついて居ればこそ、他國人は指一本さへる事は出來ぬ」その恩典にあずかりに來たと、云はぬ計りにブルジョアの走狗らしい鼻をうごめかした。

△一體日本民衆あつての日本大使館で、その日本民衆の××的一人のために大使館が旅劵の手續をとるのは、あたり前すぎる事なのだ、ソレをとやかくと、御恩めかしてモツタイ振つて居る官僚の横面を、眼のさめる迄、はりつけてやりたく思つたが待て、自分は片山さんに少し御たのみしたい用件があるのだ、

事によればアメリカ迄行つて先生に會ひたい位に思つて居たのだから、此地に來て居らるゝを幸、是非拜顔したい、どこに、滯在して居らるゝかと、尋ねようかと思つたが、コレも待て、ロシアから一ケ月前に出て來たばかしの自分が、片山さんに會ひたがつて居る、その事だけでも大使館員の耳に入れてよいかどうか分らない、で一向、そんな事には興味がないと云つた顏で話頭を他にそらし、やがて、酔拂ひの下宿をとび出し、大急ぎで又々車掌と喧嘩し乍ら地下電車（ウンテルグラウンドバーン）で大使館にかけつけた……

△夜の十時をすぎて居たけれどコニング、プラッツに向ふた大使館（ボルチャフ）の大扉は、相圖のフックを押すとすぐにあいた、應接室へかけこんで、在留人名簿をとりあげ、Kの部をひらくと、あつた、あつた、

片山潜、原籍、東京市、神田區、三崎町一ノ三、通信業、現住所、グロスベルン通り（Grossbeeren ストラッセ）、九番、大正十年十一月廿六日伯林着、滯在予定二週間位

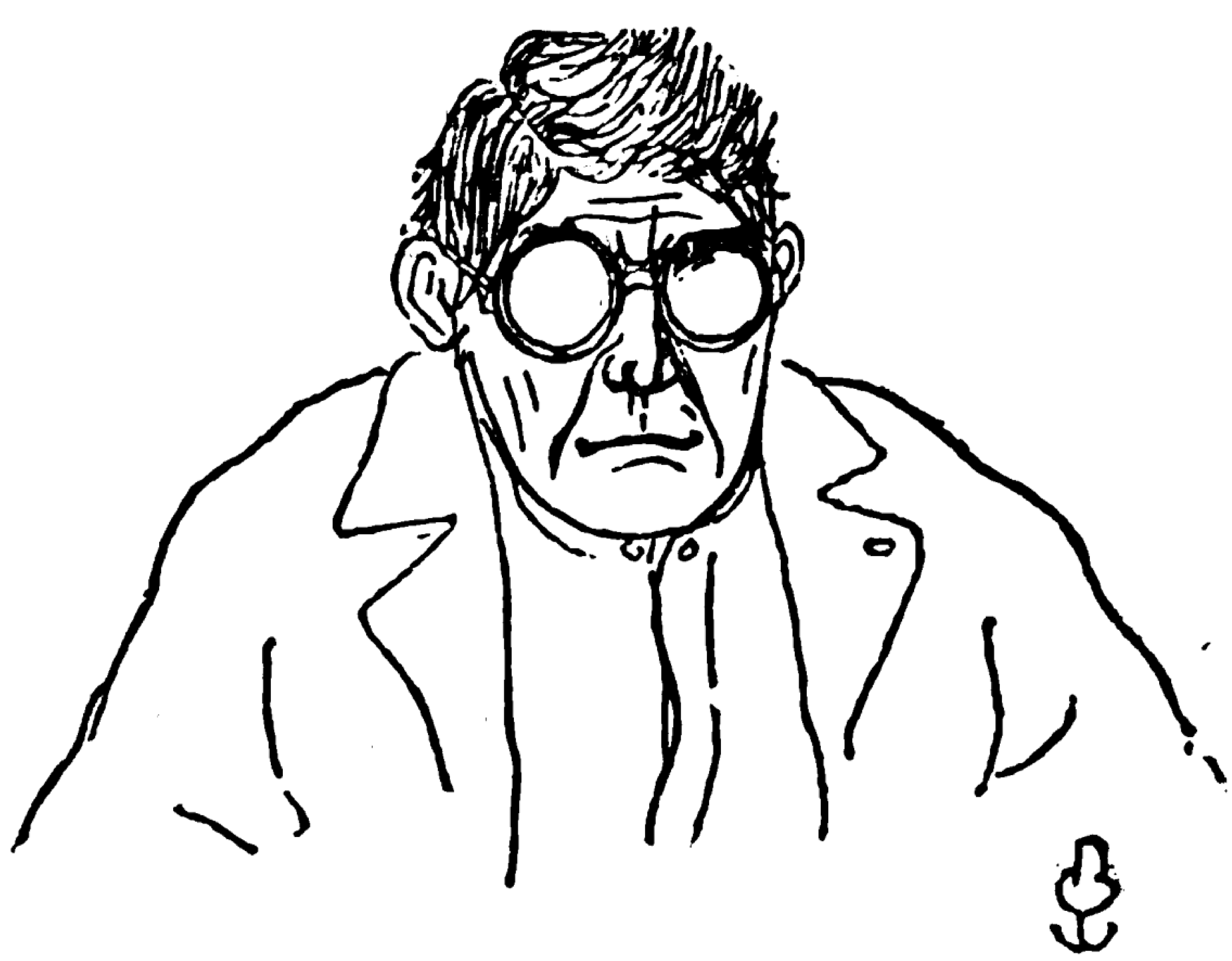
太い萬年筆でかきつけた上に、元來が丸い小形の字なので、ストラッセ、のT.R.なんかは312のやうにも見へる、文字を以て共人を推すに、頑固で規定面な老人らしい、由來自分は規定面な人から、叱られた事はあつても、愛顧されたためしがない、明日の會見の首尾が、危まれるが、エ、まゝよ、自分の利益話で行くのでなし、當つて碎けりや、それまでだと腹をきめて宿にかへつてねた。

十二月八日、同じく伯林にて

△夜六時頃、ムスクルン（Möckern）高架停留場の側、運河に沿ふ角家、九番館の四階迄上ると、ヘルマンと云ふ金名符が打つてある、呼鈴を押すと獨乙人の下女が現れ、用件を述べると、今度は廿歳位の小柄な女性が出て來て、ミスター、カタヤマは今入浴中だからしばらく妾の部屋でまつて居て下さい――歯切れのよい英語で――と導かれて、せまい廊下をつき當つた部屋に入る、トランクが二三個つみかさねてあり、如何にもアメリカから來た旅人の假住居らしい、妾達は近々にモスコウへ立たうと思つてゐる、モスコウはどんな鹽梅ですかとの、早速の御質問に、ありのまゝの返事をする、目下モスコウは至極安全で、物資は何でもある、私共ホテルは勿論、食事、入浴、散髪、洗濯、みんな無料であつた、――云ひ乍ら、その女性をよく見ると、ブロンド色の髪を二つに分けて、八の字になつた白い額の下に眼鏡が光つてゐる、清洒たる洋裝で、身體のこなしはアメリカ婦人の快活さに生々してゐるが、どことなしに或は日本人の血か、又は有色人種の血が交つて居るやうに思はれた、――失禮ですが片山さんの御嬢さんですか、イエ、妾はセクレタリーです、あ

なたモスコウにいらしたのなら、ロシア語がよく御出來でしやう、云つて御覧なさい、そこで『私はまだ駄目です、モスコウに殘つた大庭さんは、ソリヤ、上手ですよ、少々グラマチカルすぎますがネ』これだけをロシヤ語でしやべつた時、となりの部屋に、太い男の聲がした、そこへ通ると、天井から下つた電燈の下に、頑丈な老人が卓子を前にワイシヤツの上に上衣をかけたまゝで、こしかけて居た。

△多年の惡戰奮鬪が刻みつけた深い額の皺は、尙、反挨憤起の色を、湯上りの汗にたゝへ、ワイシヤツの隙間からは心もち黑い肌が光つて居た、あの皮の下には沸々として革命の熱血が湧き躍つて居るのだと思つたとき、大圓形の黑緣眼鏡の底から、ギロリと二つの双物の光がさした、つめたい銳い――嘗つてある×××××××××、社會主義の論評家として知られ（×××××スツポラかした）文士が、アメリカで此人に會ひ、ロシア入りのドキユメントをたのんだ時、「あんたには、



怒氣を含める片山氏（伯林にて）

上げられぬ」と、冷かにはねつけられたと聞いて居た自分は、今正しく自分にも、その冷刃の感じと、或はそれ以上の何かの敵意をさへ以て遇せらるゝやうに直覺した、が、とにかく名刺代りに自分のロシア旅行のパスポートを差出すと、肥つた右手が、それをうけとり、眉毛の先端をピリ〳〵心持ちうごかし乍ら二つの電光が、紙の上を走つて居たが、室內の空氣はいよ〳〵重くるしく、云ひたい事も何だか胸の底によどんでしまつて容易に出て來ない心地がする、やがて引しまつた重々しいその口唇から、さも不平らしく「ナンの用事できたのか」と、虎の呻きのやうなものがきしり出した。

「大庭さんの事をおたのみに參つたのです、大庭さんは御承知のやうに、日本社會主義同盟の執行委員の一人であり現に共發會演說會の時（實の所、何か恐ろしくてこゝらで一度、息が切れた）神田の靑年會で司會者をやつた人です、そう云ふ大庭さんに對して、サウェードではあまり信認を置てくれません」

「今日のロシアへ自分で自分のドキュメントをもたずに入る奴があるものか」

一喝、先づをちて自分の咽喉は半分つまつた。

「それは無かつたのです、大庭さんは單に「よみうり」の記者として……」

「日本の新聞記者は今日迄ロシアへ入つては、ロシアの悪口ばかり書き立てた、だれが日本の記者なんか、信用するものか……ロシアのありもせぬ惡體を書く新聞ばかりだ」

△全く猛烈に憤慨してゐる、頭の頂天から湯氣が立つて居る、これじや、とりつく島もない、自分はもうグウの音も出なくなつて、卓上にあつた「東洋經濟雜誌」の表紙を、ひねくつて居るその大い指に、眼をそらして居るばかり、恐ろしい沈默の二三分がすぎに、

「然し大庭さんに限つて、そんな事はありません、日本の連中のだれでもが、保證するでしやう、あの人の今日迄の傾向……」

「分つて居る、わたしも日本人だ、日本のために働いとるのだ、君もそうだらう、日本人同志、互に出來るだけの事をしやう、大庭君の事は君が云ふ迄もない、よくのみこんで居る……：そこで……君は何をしに來た？」

「私は只大庭さんのことを御願に來たゞけです、その事のために、旅費が來たらアメリカ迄も御訪ねしやうと思つて居た位です、外に別に何もありません」

用件がすんで哨々して、自分は頭を上げて、ようやく、老將の眼を正視した、ところが、實に意外と云つたやうな色が、いよ／＼自分を凝視して居るので、自分は其峻烈さに打たれて、又眼を伏せねばならんかつた、實はその時もう逃げてかへらうかと思つたのだ。とてもこんな底の知れぬ恐ろしい老將にはかなはない、ロシア旅行の前後一切ならず、死に面して立つた自分も、こう云ふ恐ろしい人格者の威壓の前に立つては覺悟も何もあつたものでない、いつしか胴ぶるいが初まつた、こちらは夏服であつた上に、湯上りの大將の方は、あついかして、一方の窓をあけ放つて十二月の伯林の夜氣に怒氣發散させて居るからでもあつたが、恥知らずの汗出（カンデ）ぬ助（スケ）も、その中冷汗をかき出した、さりとて此まゝ逃出すには吼へ猛つて居る雄獅子のやうな其姿に、どことなくチャーミングな所があつて、恐れ戰き乍らも別れるのが殘り惜しい心地がした、全く大火山の爆烈に腰をぬかし、尻もちをつき乍ら尚その男らしさ、凄まじさにウットリ、見とれて居たやうでもある。

△あとで考へて見ると、老將軍は自分が何か無心に來たか、さ

ぐりに來た位に思つて居たらしい、然るに自分の用件は全くそれだけの事だつたので、先づ意外に思つた、然しこれだけで何他の一つの疑雲が、老將の胸から先づ晴れなかつたのだ、

「然し君は何のためにロシアへ行つた……ム……視察!?……つまり何かうまい事がおちて居ないか、さぐりに行つたのだナ」

皮肉とも侮蔑にからんだやうな老人の頰が、ズーツト自分の方へ毒氣を吹きつゝ近よつて來た、自分の誠意がこれ迄ズーツト誤解されて來た、此所迄來てまだそれだ、そうしてそれを辯明すべき何ものもない、口惜しさのドン底にをちて、痩皮胸がきまつた、戰き乍らも自發的に反噬した。

「何と御推測なさらうとも、それはあなたの御勝手です」この激しい言氣を、燃として輝くラジウムのやうな老將の眉間になげつけた、すると、意外にも、手答へのあつたのを喜ぶやうな、一のすうい笑の影が苦味り切つた老將の頰に上つた、が、それも只、柄の間で、すぐ又、元の重い〳〵澁味にかへつてしまつた、



卓上の紙をひねり廻して物を云はぬ（伯林にて）

「ロシアのありもせぬ惡い事ばかり云ふてあるくつもりだらう、……君は大使館へ行つて何をしやべつて居るか、今夜もあの若い大使館に行つて、見ろと云はれて、わしの所へやつて來たのだらう」

老戰士が始めから自分に對してもつて居た不興の誤解をとくのは安い事であつた、只ありのまゝを云へばよかつた、それはあのブランデーの奴さんが、例によつて官僚萬能的口吻で、大使館の力によつて、自分が獨乙の國境からロシアへ追ひかへされやうとして居るのを助けあげ汗出ぬ助は、有難がつて三拜九拜して居たと老將軍に、告げ口した、つまり「あなたの仲間らしい〳〵人が大使館に降伏して、ブルジョア政府に感泣して居る」とばかりに云つたらしい、けれどそれは、皆ウソだ本當の所はステチー

ンへ上陸後古いさむいバラックに二週間、なげ込まれて居た間、伯林の大使館の方では打ちやりにして置いたのを、元帝大教授某氏「我等に關係ある某氏等が奔走して、嚴重に談判して、くれたから、伯林へ入る事が出來たので、其他の人々も、其消息はよく知て居る、其後は日々、例のブランデーに引廻されて、ロシアの事情をくど／＼しく質問されるので實は困つて居る、然し今夜は大使館の名簿を見て、自分から此所へ來たのだと辯明した。

「そうか、大使館の名簿に、わしの名を書いて置いた、ナルホド、あれを見て來たのか」

暴風はよう／＼その猛威を納めるやうに見えた、ズット調子もくだけて、尖つた老將の言葉が柔くなつて來た、かつてペトログラードのホテル、インテルナショナルで、ジノヴエフに似た若いコンミニストが、自分にインターナショナル第十七卷を見せ、そこに乘つて居る、片山氏の「日本の勞働運動てふ一文を指して、實に良い頭だ、良い頭だと、幾度もほめ立てた(一九二一年、十一月一日夜の日記の一節)自分は今、其を思ひ當つた、全く老將軍の明敏な頭腦は、自分の言の眞僞をスグ判斷して、よく誤解を一掃した、室内の空氣は、氷のとけた春の水のやうに緩かになつた、自分の胴ぶるいもいしつか、止んで居た、然し本當の平和の温容に接する迄には、今一度可成り烈しい言ひ張り合ひの坂をこへねばならなかつた、それは老將軍が、日本の連中をだれか知つて居るか問ふたに對し自分は偶然の事から、××さんと一所に行動した事があると云つたらば、××さんは單なるサンジカリストにすぎぬと、さも、他所の畑の人のやうな口吻だつたので、イヤ、そんな事でない最近はこう／＼、現に自分も一所に其場に居たと可なりそれを執拗に力說した、蓋し如何に老將軍でも、久しく日本をはなれて居て、最近の傾向運動は知るまいと思つたからであつた、それに對して、

「今こゝで君とソンな事を云ひ爭つたつて仕方がない、自分は××君とは數十年來の舊友だ」と云ひ切るので、

「私はとにかく××さんは、日本のトロツキーだと信じて居ります」と云ひ張らねばならんかつた、

老將軍の方はもうスツカリ調子をゆるめて、ヤンチヤの孫とでも相對するやうになつて居るのに、自分はまだ先からの恐ろしさが止み切らないで、反噬的の大聲を上げて居た、あとで考へて見ると全く可笑しかつたらうと思ふ、蓋し荒畑さんの話なんかで、トボケて見せたのは老將軍が自分をためすタクチクであつたのだ、それから始めからあまり自分がビク／＼して居るので、老將軍はその意地なさにむしろ不滿であつたのだ、で二度三度、死勇を皷して反噬する毎に、老將軍はかへつて喜こんで來

た、しまいに、あまり自分が大聲をなげつけるものだから、今度はソロ〳〵笑出した、一つは、こんな男なら、あんなに叱りつけるじやなかつたのにと云つたやうな氣の毒さもあつたらしい。

「御互に、日本のためだ。それから大にやるさ丸い頬ぺたが笑を含むと、全く可愛ゆい、ニコ〳〵のエビスさんだ大きな圓い眼鏡のエビス三郎だ。

△「レーニンから來い〳〵との事で、今度やつて來たのだが何しろ、アメリカの方はワシより他に人がないものだから、全く忙しくて手がぬけなかつたのだ、マア、それをようようの事でこうしてやつて來た、出るのにも中々骨だつたネ幸、西班牙政府の奴が、何か間違へをして、ワシに旅券を出したものだから、サア一旦ソレを握つた以上は、もうこちらのものだ、大喧嘩をして通つて來た、ハ、、、、、



上機嫌となつて客を送り出すところ　片山氏（伯林にて）

何しろ、日本人は、毛も眼も黒くて假裝する事が出來ないのでネ、不便さ……アメリカの運動は非常に進歩して居るよ、君〇〇でやる事ならば何でも出來る、そうだらう、〇〇ほど、自由なものはない、××は其新運動法を知らんで行つてしまつたから、アンな事になつたのさ、△△でも、我々は□□□より一寸だけ、賢こければそれでよいのさ、たくさん賢くなる必要はない、まア今に見て居たまへ、アメリカはやるよ……英佛の消息か、ワシは英國は知らん、佛國は一寸素通りしたゞけだが、もう死んでしまつて居る。」

「僕が日本に居た時、僕の演說は、勞働者にはもてたけれど學生や、學者連には不評判だつた、ナニ、君、いくら何と云つても勞働者だよ、勞働者が共鳴して來なけりや、君ひとりで何も出來ますまいがナ……日本の新聞へ投書する……フフン

實名か、實名がしたけりや、ブルジョアへ行け、こちらに用はない、君、金看板の人にならうとするナ、金看板になつてしまへば何も出來やしない……金看板でない無名の人が眞劍の仕事を……ナ分つたらう……

「さうだ、こゝから一番早く日本へ歸らうと思へば、英國からカナダラインでかへるのだネ（丸い顏を少しなゝめに天井を見上げて、かぞへるやうにして）廿五日位で、かへれるだらう。ロシアさへ見たら、もう、他の國なんか見る必要はない、……日本へかへつたら、日本の新聞や、雜誌を送つてくれるやうに云つてくれたまへ、××のものなんか○種も來て居るのに、日本のものはかうして自分で金を拂つてとりよせねば手に入らぬ、（右の手に「經濟雜誌」をとり上げて、パラ／＼とひろげ乍ら）御互に日本のためだ、しつかりやる……どうだ、君、旅費があるか、こまつて居るなら、あまり余計はないが、あげるが……來る、そうかそれじや、そう、」

△一寸も別れたくはなかつた、けれど、先刻から、例のセクレタリーが二度も入つて來たりした、忙しい老將軍をこれ以上妨げるわけに行かなかつた、自分は立つた、

「じや、しつかり、ム、日本のためだ……

その日本のための強い太い一語――今思ひ出しても涙ぐましくなる、實際、老將軍は其時、聲をうるまして居た、自分もすぐ、胸一パイになつた、故國からたゝき出されて異郷の空に放浪の其人が、依然として、日本のため、本當に日本のため――怨んでも居ねば、悲しんでも居ない、只々一文字に眞に日本のために、やつてやり拔こうとして居る、何物も彼の志を如何ともなし得ない、巡査も棍棒も、投獄も、罵詈中傷も、海外追放も、食うや飲まずの放浪も、此鐵心熱腸の大丈夫にとりては、屁でもない蚊とも思はぬ、只々まつしぐらに、日本のため此日本の地上に、理想の天國を實現せんがために、爆然として、今夜。一個の大慧星が伯林の空をかすめて、東にとんで行く其雄々しき此姿を見よ!!

「どうぞおきげんよろしく、モスコウは伯林より二倍さむいと思ひます、どうぞ大庭さんにもよろしく」

「日本のみんなによろしく」

椅子から立つて歩き出した所を見ると、小柄乍らもガツシリした體格である、握手は甚力つよく換された、ドアーのフックを取つて、グツトあけたあたりは、若い者の元氣である、白髮で齒がぬけてヨボ／＼だナンは全くウソだ、

「さよなら」「失禮致します」

ふりかへると、銅像のやうな姿が、半身に廊下の電燈をあびて立つて居た、自分は急に精氣を一斗ばかりものみこんだ人間のやうに踊り乍ら梯子を下りて行つた。

（完）

大文字のともる夜

近松秋江

木曾の明月

ある年の夏もゝう終に近づいた八月の二十四日か五日の頃東京を後にして關西の方に旅立つたことがあつた。朝九時頃牛込驛から汽車に乘つて中央本線を往つた。東京には歸つてくるには來るが、いつ歸るとも豫期するところがないので、これが暫らく東京の見收めであると思へば、いくらか後髮をひかれる思ひもしたが、實のところその頃大分東京の街の散歩にも飽ひてゐたのであつた。年中東京にゐるのもあまりに氣がきかなさ過ぎる。それに牛込の矢來でもう去年の九月からたつた一人で家を持つて自炊生活をしてゐた。それにも飽いたのである。

汽車が新宿驛を發してだん／＼東京の西郊に出離れると近頃常に市中にばかりゐた眼には淸々しい綠の武藏野を渡つてくる風が涼しく窓に流れて、新鮮な田畑の色や雜木林につゞく松杉の木立などに眼が覺めるやうであつた。多摩川の鐵橋を渡つて八王寺をも過ぎ汽車が小佛だの笹子などのトンネルを通過する頃は日の暑い盛りで煤煙と蒸熱さとに堪えかねたが、甲府驛で生溫るいプラットフオームの水を手拭に浸して襟のまわりに黑くなつた煤と汗を拭ひ取り、紫の露の雫の葡萄を二た籠ほど買つてそれをすゝりつゝ追々車窓の眺に入つてくる甲斐が嶺の奇趣妙景に覺えず眼を奪はれてゐると獨り旅の寂しい旅情も雲の如く消えてゆくのであつた。

富士見の高原を駛つてゐるあたり、左窓にあたり、天に支えたやうになつて魁偉な姿をして聳えてゐるのは甲斐の駒ケ岳、地藏岳の諸峯と見えた。やうやく西に傾いた太陽を山の彼方に受けてゐるので、汽車から見える方は眞黑で、絶えず頂點から肩のあたりを搖曳してゐる水蒸氣様の薄い雲霧が金色の光線に映えて丁度金粉を撒いたやうに渦卷いてゐる。まるで黑い巨牛の背の如き感じのする山は暮色の彼方に深沈としてゐる。

眼を轉じて此方の右窓の方を眺めると、それはまるで變つた

外景である。八ケ岳は碧く晴れ渡つた大空に鮮かなる全姿が高く綏く浮きでゝゐる。駒ケ岳地藏岳の峻嶮近づくべからざる感じのするに反し八ケ岳は婦人の如く明媚親しみ易い感じを與へてゐる。私は日野春、富士見の驛々でフオームに降り下つて高原の風に吹かれた。

鹽尻で名古屋行きの列車に乘換へると、これはまたひどく佗しい二等車で、電燈がなくつて極めて舊式の石油ランプが薄暗く點つてゐるばかりであつた。(尤も今から十一年前のことだから)乘客も自分のほかには一人しかなかつたが、それは二つ三つの驛を乘つてすぐ降りてしまつた。夜に入るとゝもに晝間の苦熱は次第に薄らいで來たが、列車が信濃川の源流である犀川と木曾川の源を成してゐる鳥居峠の分水嶺に分け入つてゆくとゝもに山中の冷氣もまた窓を襲ふて來た。折柄七月十五夜の滿月が木曾駒ケ岳の峻嶮の眞上のところに懸つて、水のごとき清光は隈なく山と谷を照らしてゐる。月の光の明るいとゝもに物の蔭は一層小暗くて木曾川の水の音のみは高く聽かれるが川は何處にあるやら定かには分らない。車窓から高く眼を上げて眺めると夜の更けるにつれて月の色はます〳〵冴へ、しとゞ露を含んだ天も山も谷も凡ての物が蒼茫と夢の如く白んでゐる。宮の越驛のプラツトフオムを見ると附近の名所を掲示した立札に木曾義仲の菩提寺德音寺がこゝから二丁と記してあるのが蒼白く照らす月の光に讀まれるのも何となく懷古の感が深い。その晩は豫定のとほり次の驛の木曾福島に下車して一泊した。晝の如き月影は夜中雨戸を閉さぬ障子にさしかけてゐた。木曾川もそこまで來るともう大分大河の上流といふ凡水でない感じがしてゐる。

翌日は正午から立つた爲に木曾の溪を出離れて名古屋に着くまでまるで釜の中に居るやうに暑熱に苦められたが、名古屋の暑さは又格別ひどかつた。私は眩暈を覺えるばかりであつたがそれでも夕景から名古屋を立つてゆくと、見渡すかぎり一面の青田から吹いて來る風は涼しく車窓に吹き流れた。そして行く手の關ケ原から伊吹山の方にあたつてたゞならぬ黑雲をつけてゐると思つてゐると、忽ち大粒の雨滴がばら〳〵と窓ガラスを斜に濡れてきた。伊吹山の頂邊に懸つてゐた黑雲は見るみる間に尾濃の平野を掩ふて暗くなり、强風は千頃の稻田に青い波を揚げてゐる。窓を打つ雨滴の音は次第に繁くなつたと思つてゐるうちに急雨は沛然として青田に水煙を立てゝ降つてきた。汽車の屋根から瀧の如き雨垂れが窓枠を傳ふて流れた。

やがて昨日から即いたり離れたりして來た木曾川の長江を渡つて岐阜、大垣を過ぎてゆく頃には驟雨は晴れて冷々とした風

が肌を吹いた。今日正午木曾神島を立つてからの汽車の中の苦熱が洗ひ流されてしまつた。雨後の伊吹山は黒く藍に染めたやうにくつきりと見へてきた。肩のあたりには、尚ほ未練らしい灰白色の霧が揺曳してゐる。自分は窓から首をさし覗けて認か涼風に吹かれながら其等の野や山を見入つてゐた。そのうちに漸く暮色がかゝつて來た。

近江の平野を走つてゐる頃には右窓にあたつて、遠く湖東の亂山の頂邊を離れた十六日の月が蒼茫として水煙りに煙つた青田のうへにまるで水の底にでもゐるかと思ふやうな青白い光を隈なく漲らしてゐる。自然はどうしてかうまで美しいであらうと思ふと、私のやうな神を信ぜぬ者にも天地の奇工といふやうなことを今更讃美せずにはゐられなかつた。自分は思はず月の色に浮かれて、獨り車窓に肱を凭せて何か知ら獨吟してゐた。その夜は大津の町に泊つてみた。

寢苦しい一夜を大津の見知らぬ旅籠屋に明かして翌日は赫々日の照る下を三井寺などを見物して廻つた。辨慶の力餅を賣つてゐる寺の境内の見晴し茶屋に腰を掛けて遠くの琵琶湖を見渡したり、比叡の峯を眺めたりしてゐると、そこへぞろ〳〵上がつて來る子供を伴れた一連れの女逹があつた、一人は五十餘の老婦人で一人は三十になるかならぬくらゐの女房であつた。若い方は丸髷に結つて、紺無地の白い地肌が見え透くやうな透綾の單衣を着てゐる。茶屋の店に腰を掛けて何か口を利いてゐるその滑らかな京言葉を聽き、白い肌の色、容姿のいゝ風俗を見ると、私ははじめて身は遠くの關東から京都に近づいて來てゐるのだと思つた。そこで今日比叡山に上るつもりであつたのだが、それを中止してこれから直ぐ京都に入らうと決心した。

其晩方大津を立ち京都驛に下車して烏丸通を電車に乘つて行くと、廣く透いてゐる電車の窓から冷いやうな涼しい風が吹流れて、とても東京の夜では味はれないやうな初秋めいた感じがするのであつた。やがて加茂川の畔に出て四條の大橋の上に立つと、涼しい川瀬の音が先づ耳に快い響きを通つてそこからも涼氣は湧き上がつて來るのであつた。川の上下を見渡すと、河原にはすらりと軒を並べて家毎に涼床が架かつてゐて、明媚な無數の灯が幽暗い夜を彩どつてゐるのであつた。やがて私は輕い空腹を覺えたので橋の袂のとある洋食屋に入つて、川の上に架け出した食堂の椅子に凭れて二三の淡い食べ物を取り、冷いビールの泡を口にしてゐると、暗の中の川瀬の水は兩岸の燈火を映して金銀の玉を碎いて流れ落ちてゆく。涼しい夜風は絶えず川の方から湧いて來た。一昨日の朝東京を立つてから此處まで遠く來た途中の苦熱の記憶が夢のやうに薄れてゆくのであつ

た。そして東京ではとても味ふことの出來ぬ水邊の淸興が私の心を新なものにしてしまつた。

男體の暮色

ある年の八月の半ば、日光の中禪寺湖からまだ三里の山奧にある湯元に行つたことがあつた。

私はその夏七月の初中禪寺湖に來て十分湖邊の夏を樂むだ。ボートといふものを、もう何年か漕いでみなかつたが、そこにゐる間に少しづゝ試みてゐるうちに段々に熟練して、初は湖に臨んだ旅館から一丁も遠くへ出ぬところを漕いでゐたが後には大膽になり湖水に親しみが生して、あの物凄い深碧を湛えた水の上を隨分遠くの沖まで獨り漕ぎ出すこともあつた。宿の三階から向うの左方の岸にあたる歌ケ濱の觀音にその年勤めてゐた日光輪王寺の僧侶と知合になつて、そのお坊さんと二人で始終ボートで乘り廻はつてゐた。ある時などボートで日光から足尾の方に越す對岸の方までいつたり、中宮祠畔から二里もある菖蒲ケ濱の方までも往つた。湖水は宿の三階から見渡したのではさまで美くしはないが、一たび舟に乘つて水の上に川離れると風景は一段づゝ次第に壯美の觀を增すのである。激灔たる連波に身を委せつゝ漂蕩として搖られ〳〵ゐると宛として繪畫の中にあるやうである。男體山をはじめ四周の翠巒が影を涵し、碧く晴れた大空には眞白の閑雲がふはふはと峯から湧き出でゝはいつとなく天心に消え去る。私は此方の岸から一番近い處にある向うの出鼻のフランス大使館の別莊の下の綠蔭に先づボートを漕ぎ寄せてそこから涼しい木蔭の汀をオールを弄びながら歌ケ濱から更に英國大使館のある岬の方まで往く。そこら邊まで往くと男體山を仰ぎ視る距離が適度である。中天に聳え立つ頂から長い美しい傾斜の一線が澱みもなく湖水の岸までずつと逹いてゐる。暑い夏日を浴びて水蒸氣が光を反射してゐる加減で綠の山の肌が淡紺色に白くなつて見える。私はオールを舟の緣に載せて波のまゝに身をまかせながら仰向にボートの中に寢そべつて波光に浴してゐた。遠く湖頭の方を見ると突兀とした前白根の頂が眼にいる。湯元は丁度その麓の處にあるのだ前白根は上州との國境に立つてゐる。その山の奇怪な形が妙に注意を惹くのである。

湯元に行くには菖蒲ケ濱から湖岸に別れて途は戰場ケ原の茫々たる草原に出て來る。そこから仰ぐと圓錐形を成した男體山の逆つた側がすぐ眼の上に聳えてゐる。荒凉とした夏草の生ひ茂つた平野の果てに眞靑な峰が四周を取卷いてゐる。前白根は湯元の左方に聳えてゐるのが次第に近く見えて來た。すると今

往く道の正面に方つて深い夏木立の中に白く帆を張つたやうなものが眼に入る。それが湯瀧である。道は原の中ほどに來て右と左と二つに岐れてゐる。右の方にゆくと日光の裏山にある金山に通ふ道である。左方を取ると湯元に行く。今はどうであるか、十年も前のことであつたが、茫々として雜木や夏草の生ひ茂つた中に荒れた道がつゞいてゐて、西洋人などによく出會ふ。だん／＼湯元に近くなるに從ひ西洋人の男女が子供を伴れたりして其處らを散歩してゐるのを見る。彼等は海外萬里の異域に來て、しかも日本人自身さへ餘り多く入つて往かない深い山中に來て、そして自然の壯觀の中に強い深い呼吸をして人生と自然を樂んでゐる。私は箱根や日光にゐて、西洋人がいかにも快濶生活を享樂してゐるのを見ると感心してしまふ。

道は次第に夏木立の茂つた中に入つてゆくと暫く阪道によつて丁度湯の瀧の側面に登つてゆく。道の左側から懸崖を覗くと數十間の瀧が急傾斜を成して落下してゐる。それはすぐ上の湯の湖から流れ落ちるのである。道は左側をその湖水の岸に沿ふて半圓を描きながら涼しい靜かな老杉の樹蔭に入つてゆく。一條の道路は銀座街よりも平坦である。

中禪寺湖の湖尻から遠く望まれた前白根の突兀たる山嘴は湯の湖の向岸に聳えてゐる。私は、そこらあたりの風景を好む。深碧を湛へた湖水の岸には無數の樹木が暗い月影を溶して太古の如き靜寂が湖を閉ざしてゐる。やがて老杉巨檜の木下暗を向うへ立拔けるとどこからとなく硫黄臭い溫泉の香がして、湖水の縁から濛々と湯氣が上騰してゐる。尙ほ少し行くと湖水の盡きた、低い山際に數十の人家が立つてゐる。そこが湯元である。此處には日本人よりも西洋人の方が多いくらゐである。それでも箱根や日光の町あたりと違つて、宿料などさう高くない。日本人の客も華族や富豪などが稀には來るが多くは近縣の在郷人である。

私はここに八月の半ばから九月の初まで二十日ばかりも滯在してゐた。東京が九十度を越す炎暑の時分でも夕方には綿の入つた褞袍ぐらゐを引掛けてゐなければ薄寒いほどである。朝に夕に深い雲霧がふはり／＼と軒端に這ひ絡はつて、座敷のランプの光を朧ろにする。座敷からすぐ眼の前に立つてゐる前白根の突兀を眺めてゐると、眞靑に夏草の生い茂つた山の草木が一本々々數へられるほど大氣が澄んでゐる。空の色もまた飽くまで透明で、見てゐれば見てゐるほど何處まで遠いか知れない紺靑の天空に前白根の峯の向うから純白な閑雲があとからあとから湧いて出る。私は座敷の障子際に仰臥してその靑山と白雲を無心に眺めてゐるのである。ふと氣がつくと、山の裾にもう何

の木か一本大分紅葉してゐるのが眼に入る。五千尺の山の上ではは秋が近づいてゐるのだと思ふ。

その湯の湖が落ちて湯瀧となる處の山の鼻に出ると戰場ヶ原の廣い草原が遠く見渡される。左方にあたつて男體山の巨姿が眉の上に聳えてゐる。聲を出して何か物でもいひさうに思はれる。夕方になると西洋人の妻君達が多勢子供を伴れてその芝生の上に蹲んだり脚を投げ出したりして暮靄に包まれてゆく山の姿を眺めてゐる。夕陽を浴びた男體山は山頂の岩の形まで明かに見えてゐるが、やがて日が西方の山に影を沈めると、男體山の肌は初は黄色に夕榮へてゐるが、やがて淡紫に染まつて、それから次第〳〵に暗くたそがれてゆく。西洋人の女達はそれが黒くなつてしまふまで見てゐる。私も見てゐる。そして日本人の女には、とてもさういふ無邪氣な好奇心で自然の美觀に見惚れるやうな人間は少いであらうと思ふと、いよ〳〵彼等の生活の内容が豐かであるかを思はしめる。

ある晩夕飯を濟まして、湖水の岸に繋いであつた舟を漕いで水の上に乘り出すと、湖面から滴るやうに涼氣が肌を襲ふて來た。舟の中から頭を回らして奧白根の方を見上げると、五日ばかりの夕月が突兀とした山の端に懸つて、無數の星くづが靜に瞬きしてゐる。涼風は絶えず水の面から湧いて來た。

九月の初湯元を降りて來た時の戰場ヶ原の霧雲の美觀を忘れることが出來ぬ。九月の三日四日の頃といへば東京でもそろそろ〳〵初秋の風が吹く頃である。まして五千尺の高原の爽涼の氣はいふまでもない。私はその時、後から湯元に私を訪ねて來て一緒に滯在してゐた洋畫家のオー氏夫妻と同伴であつた。湯元の宿の主人は質樸であつたが湯の湖の落ち口——湯瀧の上のところまで私達を舟で見送つてくれた。それから阪道を降りて廣い戰場ヶ原の眞中のあたりまで戻つてくると、原の前面左方に聳えてゐる男體山も、もう後方になつた前白根につゞく山岳も悉く峰の腰のあたりまで濛々たる灰白色の雲霧が盛に蔽ひ被さつて、それが急な速力で横に這ひ廣がつてゆくのもあれば吹き上げるやうに高く天を指して上騰してゆくのもある。前白根の頂は男體山よりはもう幾分距離も遠くなつてゐるのと、夕陽の關係で山の肌は暗く藍色に染まり、名状なし難い陰欝な感じがしてゐる。

男體山はと見ると、これは午後四時頃の太陽が西の方の雲霧の中にあるのでその光線を受けて前白根よりは鮮かに淡紫色の山の姿がすぐ眉の上に落ちかゝつて來さうに仰ぎ見られる。太陽の方を見ると丁度火事の夜明るい黄橙色の焔の腹に無數の火の子が渦卷いてゐるのを見るやうに濛々たる雲霧の渦を卷いて

奔騰する彼方に太陽は輪廓だけはつきりと見えてゐる。

男體山は仰ぎ見れば見るほど魔界の巨人の如く靜寂として暗紫色を呈して聳り立つてゐるのが威壓するやうで何處か懐しいやうにも思へる。七八合目の肩のあたりに灰白色の雲霧が絶えず動いてゐるがそれは大きくもならず小さくもならない。

洋畫家のオー君は欣喜雀躍しながら早速肩に掛けた繪具箱を取りおろして道傍の草原の上に開きながら、刻々に變化する自然の壯景を遺憾なくスケッチして取らうとするのであつた。

何といふ自然の壯美であらうと、私はたゞ凝乎と其等の四周の大觀に見入つてゐるばかりであつた。

やがてオー氏は二三枚小い板にスケッチしてしまうと山々の姿を殘り惜しさうに振返へり／＼又涼しい道を急いだ。戰場ケ原が盡きて道は暫く森林の中を往つてゐると、山毛欅や杉の林の中から、今度は今の先き原の中で見たよりは又ちがつた形の男體の巨姿がぬうつと覗いて來た。丁度何處までも人間を追ふて來てゐるやうに思はれる。圓かに肥へた山の一角が手を伸せば屆きさうに眼近に見える。

やがて林を出抜けて龍頭の瀧から菖蒲濱まで來ると、そこの渚に今朝早く湯元から此方へ荷物を運んで來た人夫にいはして置いた船が待つてゐた。私達三人は荷物と一緒にその船に乘込んだ。菖蒲濱から中宮祠まで水上二里近くある。可なり大きな和船で二人の船頭が櫓を押してゆく。船頭は

「えつち、おつち！」

と掛け聲をして力一杯櫓を押してゐるが、のんどりとした暗碧の水は重さうである。それでも試みに船べりからそつと水に手の先を入れてみると、急瀬の如く瀬切る、この時夕陽は對岸の峰に沈みかけてあたりは朱を流したやうに夕榮えて、灰色の暮雲の奥に大きな紅玉の如く輝いてゐる。男體山の形は暫く又先刻よりは違つた姿を表はして見えてゐたが、それも段々暗へ暮色に包まれた。

そして二十日ばかりもゐなかつた中禪寺湖の畔に戻つて來てみると、雨の多い山の上にも似ず、その年は東京も近來稀なる酷暑で七月の中ばから八月の半ばにかけて一ケ月ばかり降雨がなかつたので、さしもの中禪寺湖も水が減じ、華厳瀧さへ落下する水勢がいくらか少くなつたくらゐであつたが、湯元にゐる間八月の後半に入つて二度ばかり二日續きの豪雨があつたので湖水の水も眼に見えて又多くなつたが、それとゝもに著るく私の眼についたのは男體山の山の色であつた。日光は山が深いから氣象も荒い。從つて秋が訪れるのも早い。此間中二度の豪雨と暴風とのために山の木の葉がすつかり傷んで、先頃中は遠く

湖上から仰ぐと青葭に霞んでゐた山がすつかり黄褐色に變色してしまつた。そしてあれほど、七月の初から四十日ばかりといふもの毎日のやうに水の上に出て遊んでゐた私が、氣候はまたなか〳〵暑いにもかゝはらず、どういふものか少しも湖上に乘り出す氣分が失せてしまつた。山の色の變つたと同じやうに水の色も思ひなしかに寂れて來たやうである。遠くの對岸の足尾の方に越すといふ峠の方も同じやうに眞夏の頃の青かつた山の色がすつかり茶褐色にうら枯れてしまつて見える。

その頃は私はひどく暑氣を厭ふたもので、私はよく云つた。自分は轉地によつて夏といふ四季の中の一季を一年の中から除いてしまふのだと。それくらゐであつたから、それから尚ほ一月くらゐも中禪寺にゐて、到頭湖邊を辭して下りて來たのは、大平には早い木にはぼつ〳〵紅くなつたのが眼につく頃であつた。中禪寺を下つてその夜は神橋の畔の某旅館に宿り、湖水で知合になつた輪王寺の僧侶がその時もう下山して東照宮の山内にゐたのを、夕飯を濟ましてからぶらぶら歩きながら訪問すると、氣の輕い交際好きのそのお坊さんは私を西町の方のとある一寸した料理屋に案内して、私が、長く留守にした東京の食べ物殊に鮨のすしを食ひたがつてゐることを話してゐたので、「日光にもなか〳〵東京に負けぬのがあります。一つ御案內しませう、」といつて、すしを御馳走してくれた。

高い山の上ではもう東京で十一月の中ごろくらゐの寒さで少し陽氣ちがひの加減で變であつたが、三千尺山下の日光の町では十月の二日の今が丁度東京で十月の中ころの氣候で清涼の氣候は何ともいへず快適であつた。肌がすうと輕くなつたやうで頭の中が清く爽かになり、何を考へても想つてもそれが精しく續けて思考することが出來る。そして酒など少しは飲んでみたいやうな快い食欲を覺えしめるのであつた。お坊さんと話しながら神橋の畔から大谷川に沿ふ道を日光の西町の方に上つていつた。

折しも丁度田母澤の向うの高い峰の頂邊には中秋十五夜の明月が一山に遍く照り輝いて、深い川霧の白く立罩めた大谷の渓流は水聲高く兩岸の山に反響しながら月光を玉と碎きつゝ流れ落ちてゆく。霜露を含んだ冷涼の夜氣がしと〳〵と衣を濕す。

私は頭を上げて今日下りて來た、七月初から三ケ月に渡つて淹留してゐた中禪寺湖はあそこぞと高い峯の重疊した方を見上げると、大きな圓錐形をした男體山の一角が白い月光を浴びて模糊として白く煙つてゐる。盛夏三ケ月はまるで夢のやうに思ひ返へされる。

東山の大文字

比叡山と高野山とで各々夏三月を過したのも今は懐しい思ひ出となつて夢の如く殘つてゐる。

比叡は高野山の上よりも日用品などに不便であるが。その代りに京都や大津に下りて來るのが高野山から大阪や和歌山あたりまで降りて來るほど不便でない。高野山では七月の、これも五六日の頃から山上の寺院にゐたが、最初の中は精進料理を與味を以つて我慢してゐたが、もの丶五六日も立つと、もうとても貧弱な食物では耐忍しきれなくなつた。それで不味いまづい罐詰などで我慢の蟲を耐えてゐた。山上にはいかゞはしい飲食店などもあるが、そんな鄙びた食べ物屋のものよりもまだしも寺の精進料理の方が心持がよいと思つてずつと續けて辛抱してゐたが七月八月と過ぎ、山の上には早くも初秋の涼風が吹いて段々食欲が回復して來るにしたがひ倍々精進料理の貧弱に耐え兼ねると丶もに暑さも段々凌ぎよくなつたので都會の豐富な魚肉のことが日として思ひ浮ばぬことはなかつた。寺院に來てゐる他の人達と語る時には、いつも、

「今に下山したら、橋本からすぐ大阪に出て行つて、何よりも先きに精肉すき燒を食べるんだ。とても淡白な魚肉くらゐでは、此の渇を醫すことは出來ない。」

といつてゐた。大阪に出ていつて食べる甘い〳〵牛肉鍋のことを想像すると口に水が溜るやうであつた。

しかし九月に入つてから涼しく食欲が昂進してゐるのに、いつもその空虚を充たす物がないので終には到頭我慢しきれなくなつて、山上の飲食店から毎晩鳥鍋を取寄せて食つてゐた。それで大阪の精肉すき燒に對する煩渇の度もいくらか調攝することが出來て、九月の二十日頃いよ〳〵高野を下る時にはもう必ずしも牛肉でなくつても堪へられるといふ氣持になつた。そして順路を大阪へ出ずに和歌山の方へ廻はつて出た。和歌の浦の海景を眺めながら清鮮な海魚の肉で三ヶ月の空乏を醫すことにしたのであつた。

比叡山にゐる間は時々京都の方に下りて來た。京都に來ると魚肉よりも何よりもやつぱり脂肪分の多い洋食の方に氣が向いた。でなければ鰻を食べる氣になる。けれども涼しい處から暑い京都に下りていつて十分口腹の欲を充たし又、急坂を攀ぢて山に戻つて來る苦痛を思へば、なるべく辛抱して涼しくなる迄山の上に靜としてゐた方がいゝとも思ふ。それで山の上は寂しくて何だか佗氣なくてならぬので、所在なさに月の好い晩などそこから又七八丁の頂上の紫明嶽まで上つてゆくことなどある。そこまで登るとさすが寒いほど涼しい風が絶えず習々と吹いて

ゐる。眼の下に京都の市街が地圖を展べたやうに俯瞰される。電燈の光によつて大きな町筋が、あれは何處と明かに指さゝれる。電車の走つてゐるのも見える。一番灯の數が多くつて明るいのは加茂川べりの四條橋から三條橋にいたる間で、木屋町から先斗町の凉床の灯が燃えるやうにぽうつと暗を照してゐる。それを見てゐると山上の僧院の貧しい生活が實にわびしく堪えられない。下りて彼樣な火焰の中に入つていつたつて詰らぬ、たゞ苦しいばかりなのであるが、やつぱりその明るい灯を見てゐると引寄せられるやうにあそこへ行つてみたくなる。

叡山の僧房には八月の十日頃には五六十人以上も避暑に來てゐる者があつたが、土用が明けて一週間ばかりすると一日二日雨天が續いた山の上ではもう今年の夏もこれで終かと思ふやうに涼しくなつた。山の上に飽きた連中は大抵下りて往つてしまつた。それは盂蘭盆の日であつた。京都あたりでは新暦の八月十五日が盆である。

私もゝう京都へは一と月ほど前に下りたきり往かぬので、又一寸行つてみたくなつた。それに盂蘭盆の夜は東山に大文字の灯が點るので、それを見たいと思つた。阪本に下り汽船で大津に戻りそこから京津電車で三條大橋に入つてくる。その年叡山に上がつたのはまだ六月の二十日梅雨の最中であつた。電車から山科あたりの在所を眺めるとあの頃やうやく植付けたばかりの稻田が、もう成育して、むら〳〵草蒸息れのする中にも、何となく淸々しい稻の葉の香が涼しい風につれて電車の中まで匂ふてくるのであつた。赫々とする日は白く照り付けてゐるやうでも、どこか野の果てまでも遠く空氣が透き通つて見えるやうに思はれる。京都に入つて來るとまだなか〳〵の暑さである。

その翌日十六日の晩に大文字が點るのを見ようとて四條大通りに出ると、そこらは何處も多勢の人だかりである。私は橋の袂のあるレストランの屋上に上がつていつて灯の點るのを待つてゐた。その晩陰暦でも丁度十五夜くらゐと思はれ滿月に近い月が東山の眞うへのところに照りわたつてゐた。京の男や女が屋上には足を踏み込む處もないばかりにぎつしり詰つて、もう先きから如意嶽の方を見つめて今か〳〵と待ち焦れてゐるのである。

すると、東山とは反對の西山の方に方つて眞暗の中空に先づ大きな鳥居の形でぱつと火がともつた。あれ〳〵と見てゐる中に今度は北山の方にも灯がともりかけた。それは看る〳〵うちに舟の形に燃えひろがつていつた。

「大文字はえらい遲いなあ」などゝ京の言葉が聞えてゐると、そちらに方つて暗の中に一點明るい火が燃え出した。

「あッ點つた!」

といふ聲々と同時に、二點三點火は燃えていつた。そして瞬くうちに、それが大の字を劃いた。一としきり火は强い火焰を卷き上げて燃え盛つてゐたが、そのうち段々火勢が弱くなり、やがてひとつ〳〵白い餘焰を殘して消えてしまつた。

「もう濟んだ。」と殘り惜しさうな聲が聞えた。その灯が最後の一點になるまでいつまでも見詰めてゐる者もあつた。すつかり消えてしまふとあとは又もとの闇黑に返つて何ともいへない哀愁が、東山の中空に殘つた餘焰の明りとゝもに長く消え殘つてゐた。

大文字のともるのを京の夏の夜の樂みのおはりとして、それから後はまだ暑いあついといつても、高い山に近い處とて、其の、毎年新聞紙に連載される七八兩月の全國の大都市の溫度表にあらはれた寒暖計では、京都はいつも全國最高の溫度となつてゐるが、その代り朝夕冷氣になるのはどこよりも早い。それは私が八月のおはり木曾路を通つて京都に入つた晩にいつたとほりで、四條通りをずつと見渡したところは、とても銀座あたりの夜の濁つてゐるのとは比べものにならぬ。まだ夏の宵ながら清く澄みきつた電燈の灯は京の女の眼のやうにはつきりとしてゐる。京都は眞夏の盛りが暑さが劇しい代りに秋の夜の見舞ふのも早いのである。

私はその時二晩祇園町裏の寓居で明かして、もう暫くのつもりで又叡山に戻つて來た。大津の紺屋が關から又汽船に乘つて阪本の濱まで來ると、湖水にももう何となく秋の色が漾ふて、いつに似ずやゝ風が强くて波が立つてゐるが、その爲めか遠く湖東の方を見渡すと、墨繪の如き三上山をはじめ伊勢境に連らなる山山が今までにない近く見える。左方の叡山の方を仰ぐとちろ〳〵白い炎のやうなものが動いてゐるが、それでも高い處の樹までが一本々々數へられるくらゐに大氣が透明になつて來たのが分る。かうして今年の夏もやがておはりに近づいて來たのである。

です。たくさんの世で行はれてゐる書物のなかには或は誤りて說さ

相對性理論の諸斷面

第壹輯

豫約募集

特殊相對性理論から一般相對性理論への一大飛躍は蓋し最も困難苦慮を極めたものです。その種々の考察から理論の完成に到るまでの

或はその眞髓に觸れないものもないではありません。私は現時の諸大家の書いたものゝなかから、適當なる言葉を抽き出して之を隨處に綴り、一の相對性理論に對するいろ〳〵な解き方を對照させて、その諸斷面を讀者のまへに擴げて見やうと思ひます。之れ等が最も信據すべきものであるばかりでなく、又之を詳細に味ふときは、それぞれの諸家の面目特質をもその言葉に聞くことが出來る點に於て興味多いことでありませう。（編著者記す）

發行所

東京芝區愛宕下町
振替東京八四〇二番

改造社

出版だより（其一）

◎福田德三博士は頃日「社會運動と勞銀制度」を公刊されました、暑いさかりでこんな大著述の賣行は如何と思ゐましたが流石に世界的權威ある著書のことゝて飛ぶが如く賣れます。

◎そして博士は此著書を基礎として今夏京城と上海で講演されます、何にせよ、我國で人氣の焦點である博士の講演であるから極めて多大の聽講者を見ることゝでありませう。

◎そして「社會運動と勞銀制度」の內容は

（一）社會運動の理論的根據＝社會觀念の發達――人類生活共同化の行程――經濟生活と人格生活――共同生活による人格の解放と制限――人格鬪爭としての社會運動

（二）勞働爭議の意義及種類＝階級鬪爭としての勞働爭議――勞働保護の三要點――綜合給付と特定給付――他人決定勞働と雇傭契約――財產爭議と勞働爭議――生產要具の價と勞働運動――賃銀爭議と待遇爭議――權限爭議の種類――經營參加爭議――企業參加と現業參加――工場管理と工場委員制度――爭義當事者の獨立性――優秀勞働餘剩と其占領――勞銀の不確定列と懸引列――列の幅と平和解決の機會――仲裁調停の機關――所謂勞資協調の誤謬――現在爭議と將來爭議―勞働爭議の厚生化

（三）勞働制度＝本邦勞銀形態の分布――勞銀制度の意義――勞銀系統と勞銀形態――報酬か分配か――相對的餘剩價値の絞取――能率の增進――科學的經營法の功過――雇傭契約の特質――勞銀の保護――割合の爭――勞銀率と支拂形態――係爭對象の限局――勞銀形態と勞働協約團體交涉權――時間給――出來高給――タスク給――累進給――團體タスク給――團體出來高給――團體累進給――利潤分配制度――出來高利益分配制度――コールの分類――シリングの分類――ベルンハルドの分類――單純時間給と單純出來高給――自由費用と勞働費用――奬勵加給付出來高給――奬勵加給付時間給――ハルゼー式――其の折衷諸氏――ローアン式

（四）本邦勞銀形態調査＝紡織染色加工場――機械器具工場――化學工場――飲食物工場――雜工場――電氣、瓦斯工場――交通運輸建築諸業――鑛山及炭坑等三百四工場報告摘要

（五）附圖＝時間給圖――出來高給圖――直線制賃銀形態圖の生產時間と勞賃費圖――加給付出來高給圖――同時間給圖――出來高利益分配制度四圖――ローワン式所得圖――對數縱橫線による賃銀形態圖――ハルゼー式ローワン式に關する諸圖等

であります、四六版で總べて約六百頁に垂んとする大冊で定價は參圓九拾錢送料は貳拾壹錢であります。

◎本著の勞銀形態調査に就ては全國百六十四の工場、會社、鑛山、商店並びに百七十六通の綿密な直接調査報告を經たものであれば、決して机上の空論でなく、學理と實際と相俟つた我國唯一の權威ある著述だ。

◎それから福田氏の「社會政策と階級鬪爭」の廉價版も馬鹿に好評で本月遂に二十版を出すの盛況を呈しました。

改造社出版目錄

◇賀川豊彦著（前篇）

長篇小説 **死線を越えて**

定價參圓
送料十九錢
四六版上製
（貳百七拾五版）

幾多の暗示と光明とを現代の人々に呼びかけた本書の價値は、本書を中心として囂々たることを以て明瞭だ。人類愛に燃え立ち、又は今後の世相と我身の將來を念ふ幾多の人々よ、一讀して本書使命を諒解せよ。

◇賀川豊彦著（死線中巻）

長篇小説 **太陽を射るもの**

定價貳圓八拾錢
送料十九錢
四六版上製
（百八拾版）

前編は我國に前例なき賣行を示した。本書も前編に劣らず出版後四ヶ月に百八十版の賣行きを齎らしたのは、百萬讀者の心と心とがピタリと本書と合致したからではあるまいか、敢て天下の青年士女に本書を薦む。

◇中澤臨川著

小説 **嵐の前**

定價貳圓
送料十五錢
四六版上製
（拾四版）

情熱の思想家として文壇の一人者たりしニイチエの失戀を題材として描かれた涙ににじむ思想小説だ。著者は我が論壇の麒麟兒として情熱に生れ情熱に斃れたる理想的生活の持主として青年の憧憬を一身に集めた人である。

◇中西伊之助著

長篇小説 **赭土に芽ぐむもの**

定價參圓
送料十九錢
四六版上製
（九版）

「こんなにも虐げられた人々もあるものか」と涙ぐませる。朝鮮と云へば我國だ、朝鮮人と云へば我々の同胞だ、その氷山、そのいぢらしい人情、その死刑囚の苦しみ、どの句章にも生々しい血の流れてゐるこの深刻な小説を見よ。

改造社出版目録

◇尾崎士郎著
長篇小説 **逃避行**

定價貳圓參拾錢
送料十九錢（四六版上製 七版）

若き日の輝きに充つる一大雄篇を提供する若き社會運動家が、社會主義運動の裏面を赤裸々に告白し、自分は飄然として逃避するに至つた悲しき社會記録だ。全篇火の如き熱烈さにみち〳〵してゐる感激多き小説。

◇尾崎士郎著
長篇小説 **懐疑者の群**（逃避行第二部）

定價壹圓六拾錢
送料十七錢（四六版上製 四版）

若き社會主義者のその内面生活の素破抜きであり、その首領連の裏面史であり、そして若き日の惱み多き戀の秘録である。本書を一讀せずして彼等社會主義者の内面生活を窺ふとは出來ない、本書は「逃避行」の續篇。

◇志賀直哉著
直哉傑作撰集 **壽々**

定價貳圓八拾錢
送料十九錢（四六版上製 四版）

秋の澄み渡つた朝空の如き透明な筆の持主である作者は何と云つても小説の大巨匠であり、最高權威である、日本の藝術を語るものは先づ氏のしみじみした作品を味ふべきである。そこに藝術の殿堂はある。

◇野上彌生子著
彌生子傑作撰集 **小説六つ**

定價貳圓七拾錢
送料十九錢（四六版上製 四版）

綺羅星と並ぶ創作壇に赤輪唯だ一花、それは野上彌生子である、女流作家も多い、しかし野上氏に比すれば總ての作家は果して比較になるだらうか、氏の半生涯に於ける小説から特に六つを抽出して江湖に發表する。

改造社出版目録

◇阿部次郎著

北郊雜記

定價壹圓九拾錢
送料十五錢
菊半截版上製
（十版）

著者が折にふれ、感興に應じて執筆した水晶の如き透徹した評論と隨筆だ、氏が論壇に於て第一人者なるが如くその文章のスッキリして滋味津々たることも斯界唯一の寶石だ。

◇理學博士 石原純著

アインスタインと相對性理論（增補版）

定價貳圓廿錢
送料十七錢
四六版上製
（廿九版）

ニュートン引力を否定して、全科學界を革命せる**アインスタイン**の相對性理論は既に絶對となつた、今までの物理學の公理、定義は根本から轉覆された、本書を一讀せずして教育したら其生徒は殘らず時代後れとなります。

◇中澤臨川著

電子說から見た世界

定價壹圓八拾錢
送料十五錢
四六版上製
（六版）

一代の文豪として雷名を轟かした臨川氏は實に東大出の工學士だ、本書は我國に於て類例のない理學的文藝品であり、藝術的滋味に富める科學的世界觀の大傑作、本著は「新社會の基礎」の改訂版である。

◇文學博士 鹿子木員信・饒平名智太郎共著

ガンヂと眞理の把持

定價貳圓參拾錢
送料十九錢
四六版上製
（八版）

東洋が現代に有する最大の哲人として印度革命の大立物として共産露西亞のレーニンと並び稱せらるるガンヂ氏の哲學の體系たる「眞理の把持」と最近印度に横流する理想主義的革命の本體を明にす、著者は印度研究の權威たる鹿子木博士及饒平名氏である。

美しき姉を求めて

富永カンデンスキー

(二) アンガラ河畔にて

其頃北滿洲に配置されて居た日本守備軍は歐場左根師團長の指揮下に在つて、馬賊を討伐し、沿海州から南下しやうとする不逞鮮人と戰ひ、或はパルチザンの鐵道襲擊に對して酬ゆる等、隨分手强い威壓を加へて居た。

だから西伯利に流遇して居る〇〇獨立軍や日本兵に手痛くやられたパルチザン共は、左根の名を聞くだけでも、日本人がトロツキーレーニンの名を一種の脅威を以て迎へる以上に倘ある不快と嫌忌の感を懷いて居た。

ところへある日、左根と云ふ一日本人が新聞記者だと稱してマンチユリアの國境をこへドン〳〵極東共和國の主府チタを差して入つて來たので、彼等は何となく、トロツキーが下ノ關に上陸して廣島あたり迄、やつて來た位に訝怪な思をした、殊にハルピンよりの諜報によれば、其人のハルピン通過に當つて、日本の將校連は盛大なる別宴を開き、ハルピン一の美妓をその席に侍らしたと迄分つたので、元來疑ひ深い〇〇人等は歐場師團長身自ら〇〇獨立軍の本據がどこにあるか探るため、事によつたらば面縛假裝してやつて來たのでないか、或は左根つゞきの弟か親戚の休職軍人がやつて來たのでないか位に邪推をめぐらす者さへあつた。

然しすぐにその新來の左根氏は決して北滿洲守備隊の司令官共人でもなければ又其弟でもない、全く軍隊には無關係な、否寧ろ軍閥の横暴を常に攻擊して居る××新聞の主筆峨根先生、ロシア名をネブスキーさんと云つて、日本では人にも知られた自由思想家であり、社會團體の文藝委員長、即ち左翼筆陣の旗頭として、人氣もの〻御爺さんだと追々に分つて來もしたが、一旦其第一印象をハルピン一件でスツカリ惡く與へてしまつたモノだから、全然白紙で先生を迎へるワケには行かなかつた。

そんな事とは夢さらに知らぬ呑氣なる先生は長路を汽車栗毛に搖うつて、悠々として浦塩政擊の餘波をくゞり、チタ市に到

着後は旅なれた人だから早くにロスケの婆さんの家に下宿を求めて腰を下し、ホツと白髮頭の汗をふいた、ところが、名のある人だけに到着早々チタに商賣に來て居る日本商人共が又ドヤドヤと遊びに來る、先生々々、どうでしやう政變で天候甚險惡なやうですが、等と測候所と間違へて來る奴もあれば、かねてチタ政府からあれは臭いぞと睨んで居たオンダのやうな日本人も人並に顔を出した、又チタ政府から毛虫のやうに嫌はれて居る例の驛の一隅に列車生活の晝提灯連もブラブラやつて來る、至極大腹でノンキな先生の事だから、向うから招待する三度目はその提灯の列車へ自分も白い飯を食ひに行つて、久しぶりで御茶漬の味をたのしむ、そんな事もやるかと思へば又革命ロシアの見物はどうもチタだけでは物足りぬから、モスコウへ旅行がしたくなつた、よろしく手續をたのむとチタの外務省に申込に來たりする、一體コレはどちらの人なのか、これぢや白か赤か一寸日本人以外の者にはどう取扱つてよいか、見當がつかぬ、チタ政府でもマゴついた。

〇

由來某國に住むオツチョコチョイ民族ほどだまされ易く、又かつがれ易いものは無い、一寸出鱈目新聞が何か間違へて「タチアナ姫來る」と云へば、スグ一も二もなくその牛の骨とも馬の骨とも分らぬ淫賣をとりまいて「ツアールの娘だ、ワーツワーツ」と夢中になる、ハルビンあたりの寢ボケ通信員が「バキシールの代表者日本に向ふ」と一本打つと、又其正體も分らぬヤマ勘を「亞細亞聯盟の實現だワーツワーツ」、世界的活動名優だワーツワーツとかつぐ、時にはカンデンスキーは混血兒だらうと、すぐだまされる、がその國以外の世界中はモツト落付いて居て、堂々たる正直正銘の大使特使でも信認狀(クレデンシャル)を携へ、國書奉呈式があつて始めて天一坊でないと認められるのが、この詐僞のみ横行するブルジョア社會のルールなのであるから、日本の社會團體の文藝委員長たりし嵯峨根先生本人ならば、ブルジョア國から來た以上は疊二帖敷位のその團體のマンデートを持つて居るべき筈であるとチタ政府は考へた、然るに先生には只小さい名刺に日露兩文で××新聞記者と印刷してあつたゞけなので、其小形の體格から短い御みあしを八の字にふみ開いての歩き振りから見て、どうも歐場左根司令官でもなければ又古手の軍人共でもないらしいと見當はつくにしてもまだそれだけでは嵯峨根先生自身がどうか、そこが容易にはワーツとならない國民だけに中々そうかとスグに信じかねたのであつた、ところが丁度その頃チタの特別警察(チエイカ)委員がバイカル湖畔で一人の若い日本の羊飼を捕へた、どうしてこんな所に彷徨ひ込んだのか?

オイ等羊飼やプロレタリアには×××へチマもあるものか、別に地圖の上のやうな赤いラインがあるわけじやなし、木柵一つ立てめぐらしてあるんぢやなし、水草即オレと羊の世界だと云ふ、何をして居たんだ？ナニ何もして居ない、今一寸惑星のやうな眼のジプシーの小娘をかき抱いてバラライカをかなでて居たまでの事さと云ふ、段々取調べる中に、此日本人の羊飼、勘傳助(カンデンスキー)はかつて神田の靑年會館で、日本社會團體の發會大演說會の時、中止、解散、ウワーツ、日本×××××ワーツ萬歲の大騷ぎの時、司會者の嵯根先生が白髮頭を振り立てゝ咆吼したのを見聞した事があると口走つたので、然らばと其勘傳(カンデン)助(スキー)を早速チタに引つ張つて來て、一方又丁度其時、浦潮政變のためチタへ返つて來た日本語の巧みなボリワノフをそれとなく立ち合はせて、嵯根先生と、羊飼のデン助とを引合せて見たところが、二人の話振りで確に正直正銘の嵯根先生だと云ふ首實驗だけは及第した、勿論、先生の方では此羊飼を知らぬけれど、デン助の方では、其時、靑年會館の演壇一パイの大きさに見へたあの近眼鏡に相違ないと云ふ、然しそう云ふ此首の證人、デン助と云ふ日本人自身も、どうも、どこの牛の骨とも馬の骨とも分らぬシロモノで、滿洲くんだりからズル／＼と羊を西伯利に追ふて來た、もしその儘打ちやつて置けば、其ジプシーの娘と戀を語り乍らそのまゝに、バイカル湖よりアンガラ河に浮名を流し、イルクーツク市に入つて、しまいにはモスコウ迄も、さすろうて行つたやも知れぬ、どうも物騷千萬な男なので、チタ政府でも薄氣味惡がり、今後如何樣の事を仕出すか見當のつく迄、嵯根先生と一束にして、慾ふかのロスケの婆さんの下宿へほりこんで置いた。

○

生れは長州萩の產とかであれど、もう久しく大江戶に住んで、スツカリ勇み肌のザツクバランになり切つても居れば、世界を家として南北五萬哩も浴衣がけで旅し廻つた嵯根先生に取つてはハルビンで晝提灯と一所に酒を喰つたのがそれがどうなんだ、位に思つてゐる、アレは實際同市の舊知の商人共が先生の久方振りの大陸行を迎へて、ホンの一夕簡單に呑もう、花も一流どころ只一枝で我慢して迄チビつて居る所へ、ドヤ／＼ガチヤ／＼と、花見に長腰差の法度も辨へぬ一介武辨の晝提灯がブラ／＼で割りこんで來た迄の事なのだ。そんな事位をそんなに小むづかしく眼角を立てゝ云へば、遠くは先生の元祖、鎌倉武者の景親が石橋山での花々しい戰ひも、また近くは先生の酒豪の兄貴さんが日露戰爭での見事な戰死も、みんないけないと云ふ大變なことになつてしまふ、まして其席上で、晝提灯が酒

のために例によつて例の如く前後を忘れてその一枝の名花にしなだれ掛つた時、同じ大江戸渡りの其李花は凛(りん)乎として
「あちきや、御前さんのやうな、しみつたれたミリタリズムは大きらいよ、あちきのやうなプロレタリアは、旦那のやうなソシアリストでなくちや、ネー、旦那」
と云つたとかで、嵯根先生は大々恐悦のあまり、自分で自分の白髪頭をポーンとたゝいたそうだ、何故この有意義のシーンをその××人の××は、チタ政府へ諜報してくれなかつたと、嵯根先生がもしそれと知つたらキツト口惜しがつて云ふにちがいない、又先生だつて日本人だもの、チタへ行つてパン食ばかりに慣れる迄は、たまに白い米飯も食ひたい、特務機關の列車には味噌もあれば正宗もある、南京豆も淺草海苔もある、何も不自由たらしく重油なんか買つて食つて居やしないし、ミリタリズムと一つ釜の白飯を食つたからとて先生の腹の底の赤さに變りがあろう筈もないんだし、又一寸位食ひ荒しに行つたつてどうせプロレタリアの××××つて取り立つ××××ばけなんだもの位に、手輕く考へて居た、こう云ふワケで全く呑氣に嵯根先生はチタに入つてから丸一ケ月、ロスケの婆さんの家に下宿住居をし乍ら、チタ政府から一向モスコウ行の許可のないのに退屈してゐた、それで今日もデン助をつれて、チタ郊外にある十二ケ月黨(カザリスト)の巨魁ウオコンローフの墓へ參詣に行つた。

露帝アレキサンドル一世旗下の猛將勇士として、ナポレオン一世を佛の本國から、エルバ島に迄追ひまくり、丁度、沿海州で左根將軍等が樹てたやうな偉勳赫々たる勢で、ウオコンローフ等の愛國者はロシア本國へ凱旋して來たのであつたが、何ぞ計らん。此等の猛將勇士、精忠無比の愛國者連が、今日でならば過激思想として唾棄されるところの、當時のフランス革命の主義精神に、スツカリかぶれて歸つて來た、彼等の新氣運の世界を見て來た眼にはロシア本國が官僚と貴族院政治の下にうごめいて居る暗黑世界に見へた、そこで勇敢なる彼等がどうして、この桎梏(しつこく)の下からロシアを救ひ出そうとしたか、其運動の眞相は正雪忠彌の計畫が今以てよく分らず、洗心洞、ポガチエフの胸中がハツキリしないやうに不明な點が多いが、とにかく諜事は未然に破れ巨魁ウオコンローフ等は反逆罪に問はれて、東部西伯利に流された、これぞロシア革命史上有名な十二月黨の變である。何しろ當時露帝近親の武官として精忠無二の人々と、全ロシアをあげて信じ切つて居た連中が、謀逆を企てたと云ふのだから、ロシアの上下は確に振駭驚愕した、或る者はウオコンローフ等が惡魔に憑れたのだとも云うたし、又ある者は、ロシアの當時の狀況として、眞の愛國者たるものは、正に

そうあるべきだと、彼等のために萬斛の血涙をたれた、此後者の中に、有名な詩聖プーシキンのあつたのは、誰れも皆知つて居る話、さて東部西伯利はチタの流刑地にさすろうて來たウオコンローフは、有爲の生涯を荒野の苦役にさらしそこで死んでしまつて、今では苔むした小さい石碑一つが殘つて居るのみである、嵯根先生は白亞の教會堂の壁を射るあかるい夏の光の下に立つて、このロシアの十四の柩に相當する××志士の英魂を、誠心をもて吊ひつゝとりもあへず、

「朝風に旗飜るなり×××
　チタはひじりの奥城どころ」

と手向けした、

○

嵯根先生とデン助がチタ郊外の散歩に、一日遊びくたびれて宿にかへると、チタの外務省から急に電話が掛つて、「今夜の列車で出發させるから、スグ仕度して外務省へ行い」と來た、待ち望んで居た出發！、それは云ふ迄もなくモスコーだと先生は早合點した、デン助はバイカル湖畔に歸つてツイガン(漂泊民)の娘と戀を語り得ると勇み立つた、先生は大きな皮のカバンと、大きなズツク製の衣裝入れバツクと下宿の婆さんのスキを見て羽根枕一つをチヨロマカしてかつぎ出し、デン助は羊飼の唯一の資本である水牛の角笛を腰にぶら下げ、チタのバザールであさつて來た古物のカメラを大切そうに小脇にかゝへて馬車にのつた、外務省につくと二人は奥の一室に招ぜられ、今一人、おまへ達の仲間が來るから、一寸まつて居れとつげられた、二人は眼を見合はせて、誰だらう又内務省あたりのスパイ、牛平の御バケかなと頸をかたげてゐた、

しばらくすると入口の戸があいて、ロスケ服を着た子供上りの一人の日本人が、禿頭のポリワノフにつれられてビツコを引き／＼入つて來た、云ふ迄もなく、これは前回のカンゼヱンキスー(貫善助)である、一寸豫め詳しく云ふて置くのを忘れたが、嵯根先生は有名なる近眼で、しばらくは右六度左が五度の其近視眼鏡の中から、入つて來たカンをしかめづらをして見つめて居たが、やがて、それが京都の「花の家」以來知り合ひの子供だと氣がついたので、イヨー、と云ふ調子でピヨコンと立ち上り、デン助の鼻の先で、二人は握手を交へた。

流石近眼の嵯根先生もカンのビツコを先づ見咎めずには居られなかつた。

「どうした、その足は？」

「一寸やられたのです」

「又強チンかね」

カンは椅子の上によりかゝり乍ら、

「先生　相變らず元氣なのはよいけれど……御口の惡いのにはこまりますネ然しまア御眼にかゝれて、幸でした、ハルピンあたりでは、先生はモウとつくにモスコウへ行かれたとの評判でしたが」

「ナーニ、それは私がいかにもロシアと仲よしの、云はゞレーニンからでも呼ばれて來たかのやうな宣傳さ、日本へ歸つてから私をそれで罪に陷そうとする軍閥の小刀細工さ、ところが實際は、チタへ來てからもう一ケ月も遊んで居る此始末サ、毎日ヒマでネ、このデン助君と散歩、……そうだ、君に紹介しやう、……これが勘傳助君で、こちらが貫善(ゼエン)リ君だ、」

若い二人は日本流に頭を下げた、讀者諸君(タワリシチ)よ、左根將軍と、嵯根先生とを混同してはいけないやうに、この羊飼のデン助と、混血兒(あいのこ)のカンとをゴつちゃにしないやうに願ひます。若い羊飼のデン助には、カンの小供くさいロスケ姿がスグ氣に入つてしまつた。

「君：貫善(ゼエン)助君ですか、私とよく似た名前ですネ、イヤ、君の「花の家」に於ける赫々たる偉勳はすでに、先生から聞いてゐますよ、ナーニ、君一寸もそんなに赤くなる事はないさ、イヤどうせ西伯利へ來る位だから多少赤い人かも知れないが……小生の聞く所では君の辨天樣には寧ろ敬慕すべき意氣あり・資本主義への反抗あり、自由主義への執着　ある、これを今日の日本のブルジョア新聞の無節操にして、「妾しや水草風ふくまゝに」流れを追ふて、朝(あした)には無政府主義を謳歌し、夕邊には新理想主義を迎へ、忽ちガンヂをかつぐよと見れば、アインシュタインを抱いてねむる、勞働階級にも色氣を見せるよと思へば忽ち金客(ブルジョア)に諂る、其片々として無定見なる事宛として十二階下のチョイト・チョイト姫以上なのに比べると……ナニ新聞紙の罪でない、讀者がオッチョコチョイだからつて、……そんな事を云つて巨魁の嵯根先生なんかゞ愈々浮足の讀者を浮草たらしめてはいけませんよ、イヤ僕はそれでそう云うオッチョコチョイの日本がイヤになつて、此茫洋大漠只一眸に夕日の赤い、全く赤色に徹底したアジア大陸に鞍代へして來たのだ、とにかく今日のブルジョア新聞が社會の木鐸だなんて、馬の糞がきいてあきれらアネ……時にボリワノフさん、でなかつた、タワリシチ、ボリワノフ、外務省の便所(ウボルヌイ)を一寸借(ポザイナエ)して下さい」

デン助のうしろ姿を馬の糞よりもカンの方が一番アキレて見送つて居た、まだ若いやうでもあるし、それにしても頭の天ペンがゲジ／＼に嘗められたやうに光つて居るし、腰には二千年來のデカイ角笛をブラ下げて居るかと思へば、手には廿世紀の

小さいカメラをもつて居るカンのヤンチヤンもこの男の前では月夜の螢光だ、世も追々季(すゑ)になると見へて色々のオバケ共の現れるにしても、コリヤ又正體の知れぬ奴であるワイと、

「ナニ、あれは滿洲から燕のやうに渡つて來た羊飼だ」

嵯峨根先生がカンに敎へた。

「大分ヒドイ脫線專門家だ、確にどうかして居るに相違ない、毎夜、戸外で犬のやうに腹這ふてねむる、土の上に裸で腹を押しつけて居ると大地の女神の呼吸と交合して全くたまらなく快いと云ふのだ、注意せんといかんぜ、うつかりあんな奴のソバによると、犬のやうに嚙みつくかも知れんし羊や、犬の病氣の「赤」がうつるかもしれんからナ、アハ……」

○

有名な嵯峨根先生が自分自身の身體をさげて來て、そして自分自身だと證明に努力し、やつと一ケ月がかりで、招び込まれたこのチタ外務省内の一室へ、若いカンはチタ驛に下車して早々三四時間目にどうして入つて來たかについて一寸述べねばならぬ。

カンは例の若い夜間巡視のコンミサールがチタについたらば、どうかして與れると安心して居たところが、カン一人に關つて居られぬ忙しいコンミサールは、着車早々人ごみ中へ姿を沒してしまつて、カンとカンの貧弱な荷物(バガーシ)は、レール面から五六階段高いチタ驛のアカシアの影に、列んだベンチの上へ、そこに強い日の光をさけていこうて居るロスケの勞働者や、長靴の赤兵やに交つてボンヤリと佇立する有樣であつた、誰か又特別警察(チエイカ)の委員でもやつて來て自分を捕へ、戀しい姉の所へでも連れてくれないかと、しばらく待つて居たが、乘つて來た列車が又一倍の大勢をのせて西方、バイカル湖目がけて走せ去つたあとは、アカシアの青葉を渡るそよ風のせゝら笑ひが殘つて居るのみだつた、カンは一生一代の馬鹿智慧をしぼり出して、驛の建物中に「停車場(ワグザル)司令(コメンダント)」と小さい紙切を無雜作に張りつけた一室にかけ込んで、身の振り方をたのんだ、此所でもまだ若い——日本で云つたら、ヤツト早稻田を出たか、うすヒゲが生へたか位の——元氣そうな司令(コメンダント)が、忙しくカチ〳〵と鳴る受信機を前に働いて居たが、カンの姉の手紙を見るとスグ、

「外務省へ」と敎へてくれた。

ピツコであり、小さい乍らも二つ荷物を持つてるカンは、驛の前から馬車を雇ふた、財布の底に殘つた最後の壹圓札をかけて、これから後の「糧は姉に依る」と覺悟をきめた、驛前の廣場は陽炎にもへ、そのひろい爪先上りの一番奥に、小さい木造のプラツトホームが光つて居た、それは後にデン助が、モスコ

ウのクレムリン城壁下の廣場で、トロツキーの軍隊への演説を聞いた時、トロツキーの大きな兵隊靴の下にふんまへられてゐたプラットホームと同じ形のものであつた、かろい砂塵の上るひろい通りには赤旗を飜した大きな洋館がならび、ある家の前には、如何にも桃色緩衝國らしく「メンセヴエヰ黨本部」だの「中立無所屬新聞（ビスベルチナヤガゼッタ）」等の看板も見へた、辻々には支那人の小さい雜貨店、アイスクリーム賣りの小さいタンクをのせた車がとまつて居る外には、燒きつけるやうな大陸の赫威に壓せられて、丁度町中は午睡時の靜けさであつた、馬車は行手に青々した松丘のの見へる、ひろい街を上り氣味に進んだ、チタはこうしたなだらかな大きな傾斜地の上にひろがり、南方インゴタ河に臨む西伯利での健康地、ブルジョア式に云へば、別莊地であつた、やがて右手の大きな洋館の前で、カンは荷物と共に馬車と分れた、受付のゲートル穿きの勞農役人がカンの來意をうけて又出て來る迄、カンは二階への梯子の下で、昔ブルジョアの贅を極めた名殘の椅子にかけて汗をぬぐいつゝまつて居た、

しばらくすると、二ツ三ツの男女の顏が、横手の扉から、ソツとカンを垣間見て居たがそのいずれもに、夥しい驚愕と、あるものには早く狼狽の色さへもが浮んで居た。

「ロシア人じやない、全く日本の小供だ」

「一寸もおまへに似ては居ない」

そうした、さゝやきの起つて居る事を、カンは一寸も氣がつかなかつた、只このあつさにもめげずに、忙しく室から室へ、上階から下階へ、そのいずれもが少しもモツタイ振らぬプロレタリア國の役人共、昨日迄工場に居たのだが、今日選まれてやつて來た、今朝迄、芋畑の手入れに、兩方の掌は豆だらけなのだが、とでも云ひたげな素朴な、そして仕事への熱心に輝く眼の人々のみであつた、分けても女事務員の單純なスタイルは、如何に夏だ、室内だと云つたとて一度虚飾をつけた階級の人々には、とてもそれでは我慢出來そうもない簡易さ自由さであつた。かつてハルビンで、まだ服裝からさへも解放されて居ないブルジョアの玩弄品的のロシア女性をばかり見て來たカンには一種の驚異と、加ふるに、それでなくちや、眞劍の仕事、生命がけの××はやり切れるものでなかろうと云ふ敬服の念をさへ起さしめ、かつて某國の援助の下に此地に蟠居して居たセミヨノフを追拂つて、まだ一年なるならずに、この秩序と安定を回復するにも、こうした女性の奮闘にまつ所が多かつたろうと肯首されるのであつた。スルト丁度そこへ其代表的スタイルをした一人のまぶしい位美しい女性が通りかゝつた。

○

彼女は素足に可愛ゆい尻高の女靴をはいて輕快此上もない足どりで、ユタリ〳〵とカンの前を行きすぎてとなりの部屋に入つて行つた。かろい短い薄紅色の上衣は、その白いヴイナスのスタチウのやうな感じのする二本の腕を肩の所より、いくらも蔽ふて居なかつた、同じ色のスカートの下から白大根のやうな長い脛のふくらぎが大胆に現れ代る〳〵、仇つぽくわなゝいて居た。それは白玉が、錦襴の袋からぬけ出して、大空の下に天來の美しさを輝かしたやうであつた。カンはチラと見たゞけで、その女神のやうな美貌の氣高さに電撃されて、左の乳房のあたりがトキン〳〵痛かつた、うぶいカンは只一目で二度と眼をあげて、その白玉の光輝を見入る事も出來ぬ程の惱みを感じた、然し彼女は尙あと二回、しばらくの間を置いては又ユタリ〳〵とカンの前を行きすぎた、一番最後の時には、カンも少し落付いて來て、何んだか恐ろしいものでも見るかのやうに、ソツト、彼女の後姿をぬすみ見した、何となくカンは、彼女が長く切れた凄い位美しい眼をカンの方にジツと流し乍ら行きすぎるやうに思つた、この時もしカンが「姉さん（シエストラ）」と叫んで、その白い玉の膚に武者振りつくか、美しい裸の腕に噛じりついたらば忽ち萬事は解決し、この「ロシア旅行奇談」も、これ限りで長々しく讀者諸君を患はす事なしに終つたであらうが、幸か不幸か、野次馬のくせに女の事にはまだ全く內氣で、はにかみ屋のカンは、この姉をまだ見た事もなかつたのであるし馬鹿のカンは今以て姉は五年前の寫眞の通り、美しい頭髮を二つに分けて乳房のあたり迄たらし、白い草花をもつて居るとのみ信じて居る、――うつかり且つボンヤリ見惚れて、とう〳〵この大切のチャンスを逸し、姉か弟かの第一試驗に見事落弟してしまつたのであつた。

それからしばらくして後カンは先のゲートルの大男に招かれて、二階の一室につれこまれた、その窓からは後庭の青い松の綠がしみ〳〵と目にしゆみ入り、熊蟬の聲が、カンに京都相國寺時代の松林を思ひ出させるのであつた、室の正面のテーブルには一人のスル〳〵の禿頭のロスケがカンをまつて居た、

「英語を話しますか、それともロシア語でか」

カンのピツコが椅子につくと流調な英語が、禿頭の赤い口唇からすべり出した、

「英語で願ひます」

「だれか知つて居る人が、このロシアに居ますか？」

「私の姉のマリアが、このチタに居る筈です」

「イエ其他に」

「日本の峠根ネブスキー先生が、もう、モスコウへ行つたかと

も思ひますが」

「箱根先生をキット知つて居るか、先生の職業は何か」

「キット知つて居ます、もう二年も前から、そして先生は××新聞の主筆です」

「おまへは、どうしてロシア人なのか、どこにロシア人だと云ふ證據があるか、此手紙の他にマリアの弟だと云ふ證據があるか」

カンはもう久しい間、こうして質問といくら説明しても諒解の得られないのになやまされて來た、此頃はもう此問題にふれるのも飽きたやうな心地になつて居たが、とにかく詳しく自分の經歴をくりかへしのべるより他に何もなかつた。

「しかしそれで自分でもロシア人だと信じて居るのか、レベデブ將軍の兒であると……」

この一句は、カンにとゞめを刺したと同樣であつた、正直なところカンが自分がレベデブの兒でありロシア人だと云ふ自信もなかつた、然し此際カンはその財布の容である上から云つても、どうしてもロシア人だ、マリアの弟だと云ひ張つて、日本人流にその因縁關係にすがるべく余儀なくされてゐた、温情がらみの日本にそだつた彼としては堂々としてすべて人間はプロレタリアだろうが誰であろうが、生きて働いて食ふ權利を主張してよいとは氣がつかなかつたスルト、その禿頭のロシア人は一寸隣室に向つて何か相圖をした、

先の美しい白玉の女神が室内をあかるくし乍ら悠然と入つて來た、

○

カンは此時始めてこれが姉のマリアかも知れないと思つた、けれどもそうフト思つたゞけで、姉である、間違ないと云ふ自信もない、從つて又そう信じるかと突込まれたらば、馬鹿正直のカンは又ダヂ〳〵とせねばならない恐れがあつた、のみならず先刻の雷撃が、よう〳〵納まりかけて居たのに、又、カンの胸の中は大波でも湧きかへるやうに怪しく騷ぎ始め、熱のやうなものが頬へ上つて來るのを感じた、それに彼女は今は冷然として正面から、カンを見下して居るので、カンの咽喉にいよ〳〵何か重いものがつまつて、どうとも出來んかつた、

彼女は頗る落付いて居た、然しそのチークのやうな頬の下には、これも又ある種の狼狽の色と惱みの影が、あわたゞしく往來してゐるのを、それ以上巧みにかくす事は如何なるアクトレスでも出來なかろうと思はれた。

「今度は日本語でやりましやう」

禿頭のロシア人の鮮かな日本語の聲が笑ふて居た、それが日

本語の名手で名高いボリワノフだと、知らなかつたカンはいよ〳〵驚ろいて、泡を喰つてゐた、

「おまへは、マリアのこの御まへに送つた手紙と金とをどこで受取つたのか」

「東京の學校で」

「ソリヤ僞だ、マリアは手紙を京都の中學へ送つて居る」

「京都の中學校から、東京の獸醫學校へ回送して來たのです」

禿頭のロシア人はロシア語で、何かその女神に説明して居た、

「何故、獸醫學校なんかに、代つたのか」

「モスコウの母さんから金が來なくなつてから、自分で働かなけりや食へなかつたし、今日の日本の變テコな教育ぶりでは、中學位出たつて、何も役に立たぬ、何か仕事が手になけりや、實際社會に立つて獨立しては行けないので」

若い彼女はこれを禿頭からロシア語できいた時、同情のうるみをその眼に見せて、あまたゝびうなづいた、まア何と云ふ氣の毒な教育制度の下に囚はれてゐたのかと云つたで。

「數年前、モスコウから送つた寫眞で、姉を知つてゐる筈でないか、あの寫眞をどうした」

これにはカンは困つた、

「もう無くしてしまつて今は手元にない」

「御まへが、ハルビン迄來てコゼニコフの列車へ現れたと知つた姉は別に手紙を、おまへ宛に送つた筈だが、あれはどうした」

「そんなものは受取つて居ません」

「手紙のみならず旅費をも」

「それも知らぬ、コゼニの列車へは一度しか行かぬので」不審の雲が又三人の頭を支配して、折角晴れかけて居た空氣が重々しくなつて來た。

「御まへは、どうしてそんなに醜いピツコなのか、五年前のカンゼエンスキーは跛でなかつたと分つて居る」

「二ケ月前ハルピンの公園で、アバレてこわしました」

「御まへはどうして、そうもロシア語を知らぬのか、それでどうしてロシアの新教育をうける事が出來るか」

この質問にはカンはもう半分泣きたくなつたが正直にこう答へた。

「私は少さい時に母さんに分れた切り、日本語の外、どの外國語も入らぬ生活をして來た、その私がどうしてロシア語を知つて居ましやうか、又ロシアの學校がどんなか分らないけれど、日本じやとてもプロレタリアでは上級の學校に進み得ないの

で、實はやつて來た迄の事なのです」

若い彼女の顏には、もう明らかに失望の色が浮んだ、そして今迄カンがまぶしく感じて居たその美しい眸が、だん／＼狼狽と困却の色を濃くして、あたりを見廻し始めた、たま／＼其視線が、カンのそれと打つかると、双方で何とも云へぬ氣まずいやうな思をするのであつた。「わたしはおまへに全く同情して居る、いとしい位に思つて居る、けれど、けれど、妾の弟だとハツキリしないやうじや、少くともカン自身だと判明せねばどうする事も出來ぬでないか、まア困つたことだ」とその美しい眉毛が云ふて居るかのやうに見へた。

しばらくすると、カンにはそれを殆んど信じる事も出來ぬやうな言葉が禿頭のポリワノフの口からをちて來た、

「おまへの求める姉はこのチタには居ない、イルクーツクへ行け、あそこに居るかもしれぬ……否、たしかにあそこへ行つたら會へるでしやう」

カンはもうスツカリ自分が黒雲に包まれたやうな心地になつた、この美しい女性がどうしても姉のやうにも思はれる、それであるのに姉はチタに居ないと云ふのは、自分が信じられない證據である、途中でこうした事を恐れて來たのに、今正しく此恐れに面して立たねばならんかつた、何を以て彼等を信じさせよう、この黒い頭髮、黒い眼、黄色の皮膚、數へる位より知らぬロシア語、天一坊のやうに盜んで來たのだろうと疑はれる此手紙すべて彼等の疑をます種のみで、信じさせる何ものもがない、カンはこれ位ヒカーンした事はなかつた。

然しカンは馬鹿であつた、イルクーツクには又、本當の姉が白い草花をさげて待つて居るかも分らぬとも思つた、ぢやそこへ行こう、行くより外はないやうだ、

「イルクーツクへ行きませう、然し私にはもう一厘もない」

「イヤ、それはよろしい、汽車代や食費の心配はいらない、金錢萬能の國でないから、用事のあるものは皆無代で旅が出來ます」

この返事で、カンはヤツと安心して落付いた、ヤレ／＼どうやら餓死だけは助かつた、もうベースボールの御雇ひチヤンピヨンも、新聞配達もしなくともよかりそうだ、矢張りカンの如き素カンピンのプロレタリアにはプロレタリア國に限る、金錢がなくとも、立派な一個の人間として、人間らしい生活が保證されるのだから、全くありがテエもんだ、これでどうやら黄金よりも尙つまらぬ芥塵から出世して、人間なみの地位をとりかへし、今度は反對に黄金を芥塵なみに蹴をとす理想界へ入つたと思ふと、思はず、快哉を叫ばずには居られなかつた、然し又

一方、白玉のやうに輝くその女神とこれで分れるのかと思ふと、後髪のかきむしられるほどにもつらかつた、只女神の方でも何となく別れを惜しむかのやうに見へたのを慰めとして、よう〳〵の事でピツコを引き〳〵その禿頭のロスケ、ポリワノフと共に二階を下り、嵯根先生と傳助を見た奥の一室に入つて來たのであつた。

○

嵯根先生はモスコー迄、カンはイルクーツク迄、デン助はバイカル湖畔迄、三人思ひ〳〵の旅心を懷いて、その日の暮方に、チタ驛から指定された列車に乘り込んだ、不思議でも因緣でも何でもない、それは浦鹽から亡命のアントノフやポリワノフ等をチタにのせて來たその褐色の二等車であつた、中央に喫煙者席と不喫煙者席を分ける扉があつたのを、一ケ月前アントノフ自身があついからとてとりはずして、一隅にある小さい煖爐の前に立てかけたのが、そのまゝであつた、上下二段にすべて二十のフク〳〵した寢臺があり、その間の兩側に十箇の小窓があり、片側の窓の下には、小さいヒジつきか書見棚のやうなものがとりつけられて居たけれど、何分大兵のロスケ本位なので、小柄の嵯根先生なんかには、むしろ腰をかけるに適してゐた、その夜は驛の都合で發車せず、明日二番のイルクーツク行に連結されると定まつたので、三人はおそく迄話し合ひながら、その夜は列車中でねた、先生とカンは毛布をもつて居たけれど、デン助には何もなかつた、ヒジ掛臺の上に立てた蠟燭もつきチタ驛の操車のさわがしい音もスツカリ靜まつて、二人が寢入つた頃、デン助はムク〳〵と起き上つて車室を出で、暗のレールの上に下り立つて、夏の夜の大空の星影を仰いでゐた、曠野に彷徨う羊飼の彼にはそれがもう第二の天性になつてゐた、今度の汽車の旅にしても先生とカンとには、それぞれに目的があつた、けれどさすらひの身のデン助には何もなかつた、到る處が彼の青山であり人生であつた、何のために他の二人と一束にして引つ張り廻されるのか分らなくとも、彼は平氣で喜んでアバレて居た、いつも脫線的な彼の判斷にも時々は正鵠を穿つ直覺が働いた、今度でも呑氣な先生自身は知らぬけれど、先生の上から疑雲のまだ一掃されて居るのではないと判じてゐた、次にカンはあまり多く語らない子供で「私の尋ねて來たロシア人がイルクーツクへ行つたそうだから」とのみで、詳しく打ち明けないけれど、其うぶい頰の下に自身が信じられぬための不安と、尙何か煩悶もあるやうだとデン助は看破した、荒野の端でいつも羊飼がするやうに今夜も亦彼は大空の星をかぞへて居たが、今夜の旅はコリや並大抵の事でなさそうだと直覺し

た、然しソレが彼には戀人に面晤する程も嬉しかつた、嶮しいつも缺乏、困苦、危難、寒飢、そうしたものゝ姿がチラと目の前に現はれるや、直ちに猛烈に敵の中堅へ飛込むと、缺乏だと見へた苦し顔が反つて満足の優しい母さんであり、困苦は知慧の泉を湧かせ、危険は勇氣を沸騰させてくれるし、寒飢は心身を鋼鐵に鍛へ上げて呉れる親友なのを度々經驗した彼に取りては、どうも平易、安逸、飽滿い、彼のスキな蛇いちごのやうに當坐だけは甘くても、あとでは寧ろ大なる恐怖になつた、今夜も彼はチタ驛 南の崖際のインゴタ川への傾斜の青草の上で、戀人のやわこい膚の上に、のしかゝるかのように喜んで腹這ふた、野人の彼には部屋や列車の中は天井がをちて來そうで息苦しかつた、今美しい 青天井 の下で、心行くばかりに西伯利大陸の夜の冷氣を呼吸し、レールを枕にすると、宣傳ポスターをベタ／＼と張りつけた白色の肉類運搬車が枕屏風になつてくれた、彼は今夜もそれを嵯根先生に口走つて笑はれてしまつたのだが、彼は一切の苦痛困難は他の多くの天惠と同様に、或はそう云ふ一見忌はしいベールを冠つて來たゞけ一層に、歡喜して歡迎すべき大寵だと考へると云うた、特に今我等の眼前に現れた、しかもブルジュイ日本は其名を唱へるだけでも忌んでゐる×××××、人間向上の最も××××××プロレタリアは

云ふ迄もなく、ブルジュイ自身もそれがために重い黄金の桎梏か救済される大[illegible]た、××××××××××の上に慘死の屍を、笑顔を以てさらしたいと××て居る。又此問題の今や解決されたロシアを僅かばかしではあるが見聞した彼としては、此勝利、此解決に次で來るべきものはユートピアンの消極的だ樂々の平和境でなくて、すべての人間が苦惱悪戦を一層平氣でやつてのける迄に向上された積極的の心的平和境であり、此×××のレベルの上に尚人間が一倍偉大となり剛毅となるための××××××××××××××××、それが本當の極樂境の入口だと彼が共熱したゲジ／＼頭をふり立てる時には、何人もあまりに彼の大馬鹿なのにあきれて、顔をそむけて取合はなかつた、

○

あくる朝、嵯根先生は列車より起き出でゝインゴタ川の方へ、洗面に行つた、スルト驛の崖下の凹みに一人の男が落ちこんで大の字になつてねむつて居た、近よつて見ると、それがデン助だつたので驚ろき乍らユスリ起して、共に汀へ下りて行つた、水面には朝靄が立ちこめて大きな饅頭のやうな對岸の丘の上には、一基の白い紀念碑が立つて居るのが、仰がれた、かへりには持つて行つた大きな茶碗に、一パイ水をたゝへて、ピッ

コのカンにもつて來つた、列車の踏段の下迄降つて、上から音羽の瀧のやうに落してくれる其茶碗の水を手にうけて、先づかろくロにくゝみ、浸れた手と序々に吐き出すその水で顏を洗ひ、二番目の音羽の瀧で頭頸をなでると云ふ水の不自由な大陸旅行中の洗面術を、カンは此時習得した。

やがて發車時間になるとドヤ／＼ロスケの忙しげな男女が乘り込んで來たので、その間にはそまつた日本人三名は自白押をし乍ら坐つて居た、若い肥つた田舍女の間に挾まつたカンはモジ／＼して居た、プラットホームの上には、どうして知つたのか、いつ來たのか分らなかつたが、日本の特務機關の連中三四人が、中には何だかをピカ／＼ブラ／＼させて笑ひ乍ら、動き出す事を見送つて居た、オンダも半平も居たかも知れんが、中なる三人はテンデ知らなかつた、そうした事はロシアに入る三人には不利此上もない迷惑なのだが、××には何かしら非常に、有利な事であると見へて、彼等は隨分長くそこに立つて居た、これは後にカンがイルクーツクで姉から聞かされて始めて知つたことであつた、

一驛ごとに乘客の數が減じてだん／＼、三人はくつろぎ得るやうになつた、昨夜寢なれぬブク／＼した床の上で甘眠の出來なかつたカンは、ウト／＼として、見るともなしに窓の外を見入つて居た、其實窓の外には、こまつた事にはチタの女神の顏と姿のみが見へた、勿論窓の外ばかりでなく、壁にも天井にも見上げるベッドの裏にも、うつかりすると三人のためについて來たプセニツツと云ふロスケのコンミサールの顏にも、その中に下車するだらうと思っても、一向に降りない二人の大きな勞農兵の面上にも。しまいには、その日は汽車の旅に行きくれて、せまくても天井が落ちる恐れがあつても我慢して列車の中で寢るのを餘儀なくされたデン助が夜中、ベッドの上から二度驚ろいてころび落ちた、それはとなりに寢て居たカンが「姉さん(シエストラ)、マリアの姉さん(シエストラ)」と生れて始めて、唐人の寢言を大聲 ロ走つたからであつたのが一度、二度目のは南京虫が嚙んだからであつたと云ふ珍事を引き起した。

南京虫さわぎの頃には夜はほの／＼と西伯利大陸のひろいうねりの上に明け渡り。心地よい朝のすゞ風が窓から流れこんで來た、大陸の夏のこの曙の二時間は又、何とも云へぬ爽快の感の湧き起る時である、デン助が顏をしかめ乍ら「矢張り現代のブルジョアー文化の生んだ一つの惡魔だ」と、其南京虫を呪ふ聲で、皆が醒めた「人間があの美しい一枚板の燦爛と輝く星をちりばめた青天井に滿足しないで、下らぬ木造や石造の人造天井の下に寢る迄に墮落したから、こんな南京虫なんかが生れる

のだ、プロレタリアは無蓋貨車で旅する元氣がなくてはウソだ、彼の勇敢なるコンテツテナの幹事長ラデツクの旅行振りを見よ、彼は車の下にもぐり、心棒につかまつて、いつもパスポートなしに、モスコウから伯林に宣傳旅行をする、カンなんか、入りもせぬロシア行のパスポート一枚のために二ケ月もハルビンでグズ〳〵してゐた、そんな奴だから日中は初戀みたいにボンヤリクヨ〳〵し、夜は唐人の寢言を發して、オレをベツドから降ちさせたのだ」とつゞけさまに一線した、尙、デン助の滿洲仕込の南京虫哲學に依ると、南京虫は人間の寢入り鼻を襲ふて滿腹した上、深夜はジツと休む、そして消化が了り赤黑い粉狀のものを排出すると又候夜明け頃、いじきたない人間が再びふかい寢むりにをちて居る時をめがけて第二回の襲擊を加へるそれは丁度資本家が生產者と消費者双方から掠奪するやうだ、デン助が今曉やられたのは其第二回目で、宵の第一回目は多分、先生かカンかを試みて、その血液のまずいのに閉口して、二回目は元氣のよいデン助に向つたのだと云ふのだ、然し、デン助以外に此車室内で南京虫にやられたものは一人もない、然らばひる間、チロク驛迄、そこに坐つて居た赤いルパーシカのロスケが、殊にデン助のために一匹だけ進呈して行つたのだろうとの事に多數決できまつた。

○

其名もゆかしいウタ河の、ゆるく曲汀を描いて青いセレンガの流れにめぐり會ふ畔に、ウエルフネウジンスク市は、車の窓から赤松の林をそへた繪の中の町のやうに見渡された、そこをすぎたあたりからサウエートの紙幣でないと、小さい驛の物賣場でも何も求め得られなくなつた、勿論。一行のためにもちこんだパンに卵の黃ぬき、バター等が三度三度プセニツツの手から皆に等分に渡されたけれど、チタで贅澤して居た嵯根先生はそのプロレタリア向の食事では滿足が出來ないのであつた、その日も西にうすれ行く頃、遙の天地茫洋のあたりに、廣重の筆致を思はせる羞しいバイカル湖が、見へ始めた、そこに深い思ひ出をのこして居る羊飼のデン助は全くたまらなさそうにアタフタ監督のプセニツツのベツドへかけて行つて嵯根先生の首驗證明役も、もうすんだろうから、こゝいらでオレを自由に放してくれてもよいじやないか、と申込んだ、プセニツツは、イルクーツク迄同行の指圖をうけてゐるから、あそこ迄一寸來てくれろ、そうしたらばあとはモスコウなりどこへでも勝手にと云ふた、

傳助が席にかへると嵯根先生は「やつたぞ」「やつたぞ」と云ひながら、老聲をはりあげて下の短歌を二人にきかせた、

「思ふ人と船出して見ん、靜の海に
　世のうきくさ〴〵よそ事にして」（○公）

カンも何かやると云つて考へて居た、あまり長く考へて居るので、嵯根先生はそれをまちくたぶれて、ベツトの上に寢入つてしまつた、よう〳〵出來上つたダラ〳〵と長いカンのはこうだ、

「バイカルの譜」

夕照に輝く赤き空と水を限りして、
湖岸の山々は舊時代の遺骸の如くに、
青ずみ渡り、力もなげに横はるなり、
みどり眼にしゆむ白樺の林の間がくれ、
老漁夫の素朴、太やかなる釣竿光る、
高き湖岸の斷岩絶壁の頂に、
夕雲かゝれば、燕は低く飛び迷ふ、」
魔神の鐵爪をもて掻き裂きたるか、
その生々しき岩根の傷口は、
あらず、當年革命の先驅者等が、
重き流刑の鐵鎖につながれて、
强いられたる辛き鐵道工事の日に、
轍をうけつゝ危險の上をたどり、」
『聞け××××××
汝等の運命又遠からず斯くあるべし』と、
獅子の雄叫びに振ひ上げたる鐵鎚の一撃、
硬き岩角はもろくも壞けて、
薄氷ぞ張りたるバイカルの水の面に
悲鳴を上げて沈み行にし昔を思ふ、」
あゝその日、正しくその時の如く、
鷲の王冠はくだけて沒落し去りし今日、
××は高く湖畔の驛頭に翻るめり、
崕下の汀をぬうて進みに進む
吾等インテルナチヨナルの列車よ、
似たらずやその轟々の響は
×××Xの英雄を吊ひ歌ふに、（カン）

デン助はこれを見て、まるで熱情詩人兒玉花外の眞似だ、サツパリマズくてなつちや居ない、オレのはこうだと、前から作つてあつたのをポケツトから出して見せた、題は「纎の西伯利」と云ふのだ、「赤き星をさして……」の締がついて居た。

○

絲の大きなスロープの上に、
粉搗き小屋の羽根車が廻る、



（赤き星を指して歌へ）

黒いデカイ四本腕が、
交る〳〵上になり、下になり、
まわる、めぐる、
レボリユーする、
上のものは下へ、
下のものは上へ、
レボリユーするよ、
心地よくレボリユーする」。
はてしもない西伯利　草原に。
さまよひあるく俺は羊飼、
自由の男だ、
躍る戀の血潮のまゝに
漂泊ひの女、おまへはツイガン
自由の娘だ、」
オーツ、痛エ、痛エ、おまへ、
俺の頰ぺたをかんじや、
だつて可愛ゆくて可愛くて
たまらないゝだもの、
おまへの男の匂の强い肉を
一寸がじらせておくれ、」
牡羊の肉ならいくらでもやるよ
それで我慢してくんろ、
俺の頰ペタなんか噛らないでさ、
西伯利の荒野にさまよふ
白鼠のやうなこのジプシーの小娘
わたしの姉のワーニヤは
村の地主の息子
カーシヤンと惚れこんだが、
二人　身分のつり合はぬため、
そはれぬ悲しさを互に抱いて、
あの粉搗小屋の丘で心中した、
氣まぐれなジプシーの女にも
つよい戀の執着がある、」
身分だつて、ウフツ、
地位かい、ウフフ、
財産！　ウフフツ
笑はさないでおくれ、
そりやまだツアールが居た
古い昔の夢物語だ、
今はすべての地上のものは

すべての人の××になつた」
×××××洗禮をうけた俺だ、
オブロモフのやうなグズじやないよ
炎ゆる血潮の××を仰ぐ俺は
ルージンのやうなヘマはやらぬ、
自由と××と戀愛の敵を、
虎のやうにかみ伏せてやる
旋風のやうにたゝきつけてくれる、」
實にも自由と××と戀愛は
俺だちのいのちだが、
金がいのちのアイスの居る世界
子供だましのテンプラのおもちやの
ピカ〳〵ブラブラブラ下つて居る國が、
まだこの大地の上にあるさうな、
さうした社會の若い人達は
一體生きて居るのか死んどるんか、
花も咲かない中に萎びて居るのでせうよ、
ワハ…………　アハ…………
おかしいじやないか、全く、
笑つてやりませう、
ワハ…………　アハ…………
ヤーイ、ざま見ろイ」（デンスキー）

カンはこの傳助の歌を日本へ送ると云つた、そうして狀袋を出して「大日本帝國……」と書き出したが、急にゴシ〳〵と消して、「日本、東京、京橋區、三十間堀やわた新聞社氣付、木名瀬典獄第二世様、地獄極樂の御存知より」

ペセニッツは郵税は入らぬと云うた、デン助がミソヤワ驛柱に掛つて居た黄色のポストボックスに投げこみに行つた。

○

こゝいらでどうしても、舊い頭のウンゲル將軍の舊い戰争話をせねばならぬ破目になつた、

何故かと云へば丁度此時このミソワヤ驛の國境——極東共和國と勞農露國との——附近を見がけて、外蒙古方面からウンゲル將軍が全力を振つて攻め寄せて居たからである、妙に他國のサーベルに力を入れたがるそこいらの金モール連や——こつちの祚天兄貴が一寸でも向ふの油服に同情するとヒドク燒込むくせに——ハルビンあたりの大ブルや小走狗共は大に將軍に期待し、前から、幾度も幾度もミソワヤはもはやウンゲルの手にをちた、チタ共和國は麻痺したと新聞に出したが、困つたことには其新聞を丁度その日、その時、列車中のプセニッツがもつて居

つて、ワザ〳〵ねてゐる嵯根先生をゆすぶり起し、この通り我等は今、現にかくも安然に旅行し、此國境の通過にはパスポート一つ見せる面倒もない迄に易々たるものであるのに、こゝがもうウンゲルの手に截切られたなんかと、こんな出鱈目が書いてある、要するに白色紙は白紙だ、ウソの外に何も書いてない、日本の白紙か赤紙か、どちらか知らぬがとにかく白髪の大主筆さん、これをよく見て下さいと差出したのであつた。それでハルピンあたりの白色紙は皆白紙だと云ふことが易々と裏書された。

勿論、當時は賣買城あたりでは激戰の眞最中で、赤軍の本據たる此驛にはチタの勞農兵の外に、勞農ロシア本國よりの派遣兵が、尖つた兜形の軍帽に、例の赤い五角星の大紋をつけた――山中鹿之助みたいな頭――をつく〳〵並べて、ウヨ〳〵して居るのを、始めて見たし、其銃や劍やが輝き、大きな裝甲車や、これも赤星をつけたエロープランが、次のバイカル驛のプラットに置かれてあつたのも見た。又此「ロシア旅行奇談」も一番しまへになると、カン自身が武裝して蒙古の戰線に立ち現れ、ウンゲルを包圍して降伏さす丘の上で重傷をうけ、美しい看護服姿の姉の膝にもたれて瞑目する――どうもさうしないと、この奇談の看板のおろしどころがない――のだから、要するにウンゲルも中々やつた、只無駄を大にやつただけの事だと、今でもまだウンゲル等に未練を殘して居る人々に云つて置かう、

さて話は少し脫線したが、列車は何の事もなしに、チタを出て三日目、早やイルクーツク驛のプラットホームに走りこんだ、それは丁度西伯利のこげるやうな夏のをひる下りの二時頃であつた。

○

嵯根先生はそこからモスコウへ直行する列車にスグ乘り換へたいものだ、何處で旅行許可證と無料乘車券を貰ひますかと、プセニツツに尋ね乍ら半分腰を上げて居た。

スルト、プセニツツは落付き拂つて、カンとデン助には市中で二人のために適當なサウエートの旅館を見付けるから、しばらくこの儘列車中におとなしくして待つて居てくれ、又モスコウに行く嵯根先生にせよ、ミソワヤの國境をパスして最早勞農ロシアに深く進入して來た以上は、玆迄こうして辿りつけた極東共和國の手を離れてしまつたのだから、この勞農ロシアの東玄關番のイルクーツクの革命委員會で今後の手續を運んで貰ふ迄、多少の日子は待たねばならぬと云ふて、あとに二人の赤兵を殘したまゝ列車を立ち去つて、イルクーツクの市中へ入つ

てしまつた、

蝗根先生は氣の毒にも、又かと云つた調子で上げかけた御臀ををろすと共に多少落膽氣味であつた、さひらひの野人デン助に取つては、列車生活だろうが市中だろが、水火の中でもかまわなかつた、平氣で早速、驛の板圍（ザボー）をくゞつて前に洋々と流れてゐるアンガラ河で水あびを始めた、カンも又同様であつた、カンはどう考へ沈んでも矢張り、チタの外務省で見た美しい女神が自分の姉に相違ない、然し姉が自分の異母姉としてはあまりに氣高く美しすぎて、又昔の寫眞よりもあまりに大きくシツカリして居た、馬鹿のカンは今以て姉が長い頭髪を惜し氣もなく耳のあたりでそろへて切つて御祭の稚のやうに白い額の最中で八文字に割つたのだか分らない——のでスツカリ面喰つてしまつて、大切の試験に落第し、あつたら流星光底に長姉を逸してしまつたが、どうせあの女神が姉に相違ないのだから、このイルクーツクで又あらためて今に出迎ひに來るであろう、もう今度こそは大丈夫、自信がある。出會つたらばあのロスケの小供が其母さんに抱きつくやうに又感情をかくさない勇敢なロスケの女性が相手の男に突撃するやうに、イキナリに姉のあのフツクリした乳房に噛みついて決して離すものかとカンはもうスツカリきめこんでしまつて、其後はひたすら、その美しい姉の乳房の匂と味をこがれて居るだけであつたので、今もう落付いて驛の板圍の破れ目に尻をのせて、崕の下のアンガラの流れを見て居た、崕の草の上に、たしかにまだ南京虫の住んで居る衣物をぬいだデン助が、バイカル湖の藻屑をのせた、恐ろしうつめたい流れの中で、チャプ〳〵腕白をし乍らカンにもはいれ一緒に泳ぎくらをしやう、カンの痛い右足なんかはかう云ふ氷のやうな水に入れるとかへつて早くよくなる等と吼えて居た、向ふ河岸の人影が五寸位にも見えるこの廣い大江をへだてゝ、東部西伯利一の大都會イルクーツク市はパノラマよりも尚美しく、對岸の上にひろがつて居た、白堊の大建物、博物館、縣廳、治金（スメルチリー）局等は軒をつらね、右手のコンモリした深緑の公園は、水面長く幽翠の影をのべ、左方の黒い大きな軍用浮橋（ポントンノンモスト）からは、その上を走せ交ふ人馬、荷車のとゞろきが、河水に反響して聞えた、丁度流れの中程に切々の長い綠の浮洲があつて、其上に白黒栗毛の裸馬が放たれ、自由に運動して居た、かうした動物迄が其自然味を多分に味ひ得る西伯利の大氣中には、資本主義の桎梏（しつこく）から、のがれた本當に原始時の人間味がみちあふれて居た、カンはしばらくウツトリとして、この横山大觀式の超パノラマを見惚れて居たが、フト、浮州の右端、幽鬱たる公園の前あたりに、肉色の裸人形のやうなものが二ツ三ツ生れ

出したのを發見した、それは先刻、縣廳の前にもやひしてゐた、一艘のボートを、若い女連三人でこぎ出して、川の中の浮洲に上り、一絲をもまとはない丸裸になつて、水あびを始めたのであつた、何しろ向岸の人間が五寸位なんだから、中洲の上のその肉色人形はやつと二尺位のもので、自然の名匠が巧をこらしたふかい金鑿のあとは、只漠洋濛乎として、如何に兩眼をこらすとも、只漫然と其曲線美に打たれる他は、これを補促するに由なくて、あたら双眼鏡のないのを嘆ぜしめる許りであつた、カンがそれを見て單に人形がうごいて居るぞと思つただけであると問題はなかつたのであるが、肉色人形共が、解放された新ロシア婦人の心からの喜びを代表するやうな聲で、キヤツキヤツとさわぎ出したものだが、となりの浮洲にアバレて居た馬共も、何が起つたのかと、其長い鼻をそちらにむけるし、こちら岸にジヤブ〳〵やつて居たデン助迄が、それに注意をむけたすべての事物をプロレタリア化せねば止まぬデン助奴は、これを寫眞にとつて日本のプロレタリアに送り、且つは日本の女性の覺醒運動に資するのだと云ひ出して、裸のまゝで岨を驅上り驛の構内に入り、數多いレールの上を兎のやうにとんで、寫眞機をとり出して來た、寫眞機のみならず、裸のデン助のうしろからは、嵯根先生がデン助にたゝき起された、ヒルネの老眼をまたゝき乍らついて來た「ウム、ウム、どこに、どこに裸體美人？　ウム、ウム」先生は近眼鏡を二三度ハンカチでふいて見直したけれど、デン助の寫眞が、あまり遠いために失敗した以上にこれを認識し得なかつた。

　これ位でデン助が寫眞いじりを止したらば、まだそれでもよかつたのであるが、丁度、いつでもさうである如く、其日も又其時間に、向岸の冶金局の前岸から、アンガラ下りの黒い壯麗な客船が、汽笛を鳴らして出帆し、軍用浮橋では、五分ばかし、往來をとめて、橋の一部分をひらくのであつた、その鋼鐵作りの浮船と浮船の間を、その汽船が、白浪を切り、黒烟をのこして行く姿が面白いと云つて、デン助がカメラをむけた、勿論、それも距離が遠くて十分の成績を、デン助の腕では得られない事は明らかであつたが、それがため計らずも、十二分の惡影響を三人の頭の上に冠らす事になつた、卽ち、ツアールの時代から八ケ間敷かつた軍橋にカメラをむけたのであるから、……又その時カンも止せばよかつたのだが、ピントが合ふたら、今度は僕ににぎらせろと、手を出した……これでカンは姉から叱られたりした……二人共、軍法會議に廻されても文句のない、大罪人になつてしまつた、勿論、裸體人形の見物に嵯根先生さへも起きて來た位だから、其時多少の人立ちが、その驛

の艇の上、板圍のあたりにあつた事は云ふ迄もない、さうして又現に、その人立の中のあるものは嘆息して、トテモ、ヤンチヤンぞろいの日本人だ、あんな者をイルクーツク市中へ入れたならば、どんなにアバレて、間違を仕出かすか分らない、とさゝやいても居た、けれど、二人共そろひもそろうた、貫と勘の云ふ事をきかん、若い馬車馬であつたので、一向さうした事に氣がつかなかつたゝめに、遂には老人の嵯峨根先生さへも、まきぞへとして黒パンと水との御仕置にあはせる種を、この到着の日からうしてまいたのであつた、其時、丁度、川向の勞働學校に徴發された大きな教會の鐘樓からつき出したインターナショナルの歌調を耳にした二人は「オヽ、プロレタリアの戰鬪ラッパが鳴つてゐる」とよろこんで、これに調子を合せて列車中で附添の二人の赤兵からならつたやうに、くりかへしくりかへし歌うて居た、浮洲の上ではまだ裸人形が鬼ゴツコをやつて騷いで居た。

新刊紹介

△新國家論（アントン メンガー著 河村又介譯）斯界に權威ある原本を眞面目に翻譯したもの（定價金二圓二十錢、東京牛込區横寺町四十三聚英閣發行）

△廿一世紀への道（武藤貞一著）白色文明に次ぐ文明即ち二十一世紀への道は、世界の弱民族の給合によつて生れると説く（定價金一圓五十錢、聚英閣發行）

△ザ・リアル・ジャパニース・クエッション（河上清著）著者は歐米評論家（紐育アクミラン發行）

△朴一つ落つ 二重國籍者の詩集（野口米次郎著）狂想以下最近の詩と散文を集めたもの（定價金二圓五十錢、芝公園九號地玄文社發行）

△勞働問題根本解決策（永井米藏著）資本家的立場よりの提唱（定價金二圓、神田區錦町一ノ十二自彊館發行）

お化を見た話

＝自敍傳の一節＝

大杉榮

一

僕が九つか十の時、或日猫を殺して、夜中にふいと起ちあがつて、ニヤアと猫の泣くやうな聲を出して母を驚かした事は、前に話した。又、十一か十二の時、隣りの家に毎晩お化が出て、それが一と晩僕の家にも出たそうだと云ふ事も、前に話した。が、こんどは僕自身が、しかも最近になつて、お化を見た話だ。現にまだ生きてはゐるが、しかし確かに怨靈であるだらう女の姿を、眞夜中に、半年も續けて見た話だ。

種子を割つて了へば何んでもない事であるだらうが、それはほかでもない、神近の怨靈だ。葉山の日蔭の茶屋の一番奥の二階で、夜の三時頃、眠つてゐる僕の咽喉を刺して、今にも其の室を出て行かうとする彼女が、僕に呼びとめられて、ちよつと立ちとまつて振り返つて見た、其の瞬間の彼女の姿だ。其の姿が、其後ほゞ半年もの間、伊藤と一緒に寢てゐる僕の足もとの壁に、ちやうど其の時刻にはつきりと現はれて來るのだ。毎晩ではない、が時々、夜ふと目がさめる。すると、其の目は同時にもう前の壁の方に針づけにされてゐて、そこには彼女の其の姿が立つてゐるのだ。一と晩の間にこんなにもやつれたかと思はれる、其の死人のやうに蒼ざめた顏色の上に、ふだんでも際だつて見える顏の筋が、殊更にひどく際だつて見えた。そして、びつくりしたやうに見ひらいた其の目には、恐怖と、哀乞ふ心とが、一ぱいに充ちてゐた。

『許して下さい。』

彼女は振り返つて、僕が半分からだを起して泣き出しさうに叫びながら逃げ出した。

『待て。』

と、其の前に僕は彼女を呼んだのだ。そして立ちあがつて彼女を押へようとしたのだ。

が、そんな前後の事は一切斷ち切られて、たゞ彼女が振り返つて見た其の瞬間の彼女の姿だけが現はれて來るのだ。

僕は、それが夢か現なのかよく分らない事が、よくあつた。が、確かにそれが夢でないと思はれた事も、幾度もあつた。そして、其のいづれの場合にも、僕が自分に氣のついた時には、おびえたやうに慄えあがつて、一緒に寢てゐる伊藤にしつかりとしがみついてゐるのだつた。が、それも又ほんの一時の事で、僕は又更に本當の自分に歸つて、手を伸して枕もとの時計を見た。時計はいつもきまつて三時だつた。

『又出たの？』

『うん。』

と、伊藤はそれを知つてゐる事もあつた。が、ぶる／＼慄えたからだにしがみつかれながら、何んにも知らずに眠つてゐる事もあつた。そして、よしそれを知つてゐても、僕のおびえが彼女にまでも移る事は決してなかつた。彼女はいつも、

『ほんとにあなたは馬鹿ね。』

と、笑つて、大きなからだの僕の頭を子供のやうに撫でゝゐた。

實際僕は、此のお化の時ばかりではない、何にか恐い夢を見ると、きつと同じやうにおびえるのだつた。そして其の慄えが、どうかすると、目をさましてからもまだ暫くの間續く事があつた。

『ほんとにあなたは馬鹿ね。』

と、そんな時にもよく、僕は彼女に笑はれた。僕はきつと心は非常に臆病者なのだ。それとも、僕の心の中には、無知な野蠻人の恐怖が、まだ多分に殘つてゐるのだ。

が、そんなにして、話を野蠻人のところまで引きもどす必要はない。僕は今こゝで、僕が女の怨靈を見るに至つた僕の心理の、科學的說明を試みようとしてゐるのではないのだから。しかし、單に此の怨靈を見たと云ふ事實の話をするだけにしても、話は大ぶ其の以前に遡らなければならない。少なくとも、どうして其の女が僕を刺すに至つたかの、彼女と僕との關係の過去に遡らなければならない。

（僕は今、先きに數回本誌に連載した自叙傳の續きとして、其のあとを數回飛ばして此の一節を書きつゝあるのであるが、其の飛ばした數回殊に此の一節の前回に就いては、何にをどう書かうかと云ふ腹案がまだちつとも出來てゐないのだ。たゞ、暫く怠けてゐたあとの筆ならしに、直ぐ書けさうに思はれた此の題目を選んで書き出して見ただけの事なのだ。從つて、こゝま

で書いて來て、さて何處まで遡つて話したらよからうかとなると、まるで見當がつかない。仕方がない、已むを得ずんばそもやそもの始めからでも書かうか と云ふ事にまあきめたのだがそれにしても話の順序として大ぶ困る事が多いやうだ。が、とにかくまあ書いて行かう。)

二

其の餘程以前から、僕は日蔭の其の室を僕の仕事部屋にしてゐた。文債がたまると、と云ふよりも寧ろそれをいゝ口實にして、よく一週間か二週間そこへ出かけて行つては遊んでゐた。實は、今はもう其の名も忘れて了つたが、よく僕の面倒を見てくれた女中も一人ゐたのだ。

其の女中は、もう一年程前に、嫁に行つてゐなかつた。が、お寺か田舍の舊家の座敷のやうな、廣い十疊に、幅一間程の古風な大きな障子の立つてゐる、山の直ぐ下の其の室一つだけでも、まだ僕を引きつけるには十分だつた。

長い間いろいろと苦心してゐた雜誌の保證金が、漸く手にはいつた。其の金がどうして手にはいり、又それまでそれを得るためにどんなに苦しんだかに就いては、又あとで話する機會があらうと思ふが、とにかく當時の僕には、新しい小さな雜誌を一つ創めると云ふ事が、殆んど唯一の當面の問題だつた。二ケ年間續いて來た『近代思想』を自ら廢刊して、新たに月刊『平民新聞』を起し、それが殆んど半ケ年間發賣禁止を重ねて、更に又もとの『近代思想』に歸り、そしてそれが又發賣禁止の連續を喰つて倒れてから、僕等はもう半年あまり僕等の運動の機關を持たなかつた。當時では、此の機關がないと云ふ事は、同時に又殆んど運動がないと云ふのと同じ事だつたのだ。僕は僕の戀愛問題が此の事に少なからざる責任のある事を感じてゐた。

しかし、いよ／＼雜誌を始めるのには、もう少し金がいる。それに、其の前に、古い文債も一とまづ始末して置かなければならない。となつて、單行本の飜譯を一つと雜誌の原稿を二つ抱えて、一ケ月ばかりの計畫でいつもの通り葉山へ出かける事になつた。

一時は隨分此の雜誌の創刊に熱中してゐた神近も、其頃では、もう大ぶ其の熱がさめてゐた。僕が彼女にばかりではなく、猶伊藤にもいろいろと雜誌の相談をしかけて、伊藤が其の保證金の奔走をしたりするようになつてからは、彼女は寧ろ僕等の計畫に對して多少の反感をすら持つてゐるやうだつた。そして、自分は別に宮島（資夫）の細君の麗子君と一緒に、何にかやらうかなどゝも云つてゐた。しかし、それも麗子君にはあまりよ

く賛成されず、又窃かに頼みにしてゐた青山菊榮君（今の山川夫人）からは態よく拒られて、彼女は半ばそれを斷念すると共に、其の口惜しさのあまりを僕等の計畫の上に反感として向けもしたやうだ。そして其の上に彼女は、僕等の計畫の上に、又僕や伊藤の上に、どうしてそんな金が出來るものかと云ふ侮蔑や冷笑も持つてゐた。

實際僕等は隨分困つてゐた。そして僕や伊藤が困りきつてゐる時には、いつも神近が助けに來てくれてゐた。そんな場合の十圓か二十圓の金すらも工夫の出來ない僕や伊藤に、數百圓と云ふまとまつた金の出來る筈のない事を思ふのも、彼女としては當然の事であつた。そして、今から思へばかうも邪推されるのであるが、彼女はそれを知りぬいてゐて、郷里まで金策に行くと云ふ伊藤に二度までも旅費をかしたのであつた。

僕は神近に、雜誌の保證金が、それがどうして出來たかと云ふ事は云はずに、たゞ出來たと云ふだけの事を話した。そして當分葉山へ行くと云ふ事を話した。

『葉山へは一人で?』

保證金の方の事は彼女には大して興味がないやうだつた。が、彼女には、此の『一人で』かどうかゞ餘程氣になるらしかつた。

『勿論一人だ。皆んなから逃げて、たつた一人になつて仕事をするんだ。』

彼女は此の『たつた一人に』と云ふ事に切りに贊成した。そして、ゆつくりと、うんと仕事をして來るようにと切りに勸めた。

當時僕は、女房の保子を四谷の家に一人置いて、最初は番町の或る下宿屋の二階に、そしてそこを下宿料の不拂で逐ひ出されてからは、本郷町菊坂の菊富士ホテルと云ふやはり下宿屋に、伊藤と二人でゐた。二人にも、二人一緒にゐる事は、決して本意ではなかつたのだ。二人とも、同じやうに家を棄てて出て、一人つきりになる事を渇望してゐた。だが僕は、女房とまだ縁が切れずにゐる上に、神近や伊藤との關係があつた。伊藤は、家と共に其の亭主とも縁は切れてゐるが、新たに僕との關係があつた。そして、かうした厄介な關係の上からのみでも、二人は一緒にゐるうるさい生活に堪へられなかつたのだ。

伊藤は最初から其のつもりで、家を出ると直ぐ、赤坊を抱えて下總の御宿へ行つた。そこは、嘗つて彼女の友人の平塚らいてうが行つてゐて、彼女には話しなじみのところだつたのだ。彼女は當分そこで、ほんとうの一人きりになつて、勉強する覺悟だつた。

僕は伊藤の此の覺悟さへ續いたら、即ちいろんな事情がそれ

を續ける事を許しさへしたら、僕等の三角關係と云ふか四角關係と云ふか、とにかくあの復雜な關係がもつと永續して、そしてあんなみじめな醜い結果には終らなかつたらうと、今でもまだ思つてゐる。が、其の覺悟を毀したのは何によりも先づ經濟問題だつた。そして、どんな事がどこへどう祟つて行くか分らない一例證として、ちよいと其の話をして見よう。

伊藤は其の以前と同じやうにやはり原稿生活をして行くつもりだつた。そして第一に先づ、其の家出の事を書いて、それを當時彼女が續きものを書いてゐた大阪毎日に賣る豫定だつた。彼女はそれを大毎の菊池幽芳氏に交渉した。幽芳氏は彼女の其ものに可なり大きな期待を持つて、激勵と同時に承諾の返事を寄越した。それで、伊藤は落ちついて、御宿の或る宿屋に腰を据える事になつた。

ところが、其の原稿が、幽芳氏の非常な稱讚の辭がついて、送り返されて來たのだ。其時、ちやうど僕は御宿へ遊びに行つてゐた。と云ふよりも、彼女や僕が持つて行つた僅かの金も費ひ果たして、彼女は宿料の支拂を迫られる僕は歸る旅費もなしと云ふやうな始末になつて、二人でもう三日も四日も大毎からの送金を待つてゐたのだつた。二人は、それが駄目と分ると、あちこち、金をかしてくれさうな ところへ 手紙や電報 を出した。が、それはまるで返事がなかつたり、來てもいゝ返事は一つもなかつた。

其の間に僕は、神近も其の生徒の一人だつた、フランス語の講義の日を缺かした。そして宮島が、其の子供の誕生日の祝ひとして、其の三人の先輩の宮田修氏と生田長江氏と僕とを招いた、其の御馳走をも缺かした。此の御馳走には神近も連なる筈だつた。神近や宮島には、僕等二人が御宿でどんなに困つてゐるかは分らなかつた。神近はそれをいろんな意味で怨んだ。

そして、殊に酒でも飲めば、非常に人と同感し易い宮島は、僕が其の招待を缺いた事によつて其の人一倍強い自尊心を傷つけられた上に、益々神近に同情した。僕は神近への宮島の同情がこれによつて始まつたなぞとは決して云はない。しかし、神近と宮島とが、同じ一つの事に就いて、僕等二人に對する怨みと云ふか憎しみと云ふかを合致させたのは、ほぼ此の邊からぢやなからうかと思ふ。

そして、もう百方策盡きてゐるところへ、神近から金を送らうかと云つて來た。

『あなたが困るのは私が困るも同じ事だ。野枝さんが困つて、其のためにあなたが困れば、私も又やはり其のために困るのだ。だから、誰れのため彼れのためと云ふ事は一切云はずに、

お送りしませう』

神近がかう云つて來る腹の中には、僕に早く歸つて欲しいと云ふ一念がある事は明らかなのであるが、しかし彼女にはかう云つた寛大な姉さんらしい氣持が多分にあつた事も同じやうに明らかだつた。そして僕は今はもう此の寛大にたよるほかに道はなかつた。

神近からは何んでも二十圓ばかり送つて來た。そして僕は、宿屋の方の多少の拂ひをして、僕一人急いで東京に歸つた。神近から少しでもまとまつた金をかりたのはこれが始めてなのだ。

伊藤はとう／＼困りぬいて、子供を近村のものに預けて、僕の下宿にころがりこんで來た。そして二人は、もう四五ケ月の間、益々困窮しつゝ、一緒に悶悶悶悶してゐた。が、いよ／＼こんどの僕の葉山行きを期として、二人の別居を實行する事にきめたのだつた。

神近は僕等の此の別居の計畫を非常に喜んだ。しかし彼女にはまだ、其の葉山では、僕と伊藤とが一緒にゐるのではあるまいかと疑はれたのだ。

『いつ立つ？二三日中！それぢや、たつた一つ、かう云ふ事を約束してくれない？あなたが出かける時、私を誘ふ事。そして一日、葉山で一緒に遊ぶ事。』

漸く疑ひの晴れた彼女の願ひは何でもない事だつた。が、其頃の僕の氣持では、彼女が事ごとにひつこく追求したり要求したりする事が、大ぶうるさくなつてゐた。そして、こんな何でもない願ひでも 其のあとに、『ね、あなた、いゝでせう、いゝでせう』と云ふ、其の『いゝでせう、いゝでせう』がうるさくて堪らなかつた。が、それを拒絶すれば事が益々うるさくなるのだし 仕方がないから、たゞ『うん、うん』とばかりいゝ加減な返事をして置いた。

三

『私、平塚さんのところまで行きたいわ。』

いよ／＼出かける日の前日になつて、ふいと伊藤が云ひだした。らいてふは、其頃、奥村君と一緒に茅ケ崎にゐた。

伊藤は其の家を出る時既に有らゆる友人から棄てられる覺悟でゐた。しかし、長年の友情を自分から棄てる事も出來なかつたものと見えて、其の家を出た日に野上彌生君を訪ひ、そしてらいてふにはハガキを出した。が、其後此の二人の友人が惡罵に等しい批評を彼女の行爲の上に加へてゐるのを見て、彼女も全く其の友情を棄てゝゐたやうだつた。けれども又、長い間の親しい友人に背くと云ふ事はさびしい。彼女はよく彼女等との古い友情をなつかしんでゐた。

『よからう。それぢや茅ケ崎まで一緒に行つて、葉山に一晩泊つて歸るか。』

僕は彼女の心の中を推しはかつて云つた。しかし、らいてふの家では、僕等はひる飯を御馳走になつて二三時間話してゐたが、お互に腹の中で思つてゐる問題にはちつとも觸れずに終つた。

『いゝわ、もう全く他人だわ。私もう、友達にだつて理解して貰はうなど〻思はないから。』

彼女は其の家を出て松原にさしかゝると、僕の手をしつかりと握りながら云つた。彼女は其の友人に求めてゐたものを遂に見出す事が出來なかつたのだ。

葉山に泊つた翌朝は、もう秋も大ぶ進んでゐるのに ぽか〳〵と暖かい、小春日和となつたやうないゝ日だつた。

『けふ一日遊んで行かない？』

僕は朝飯が濟むと彼女に云つた。

『えゝ、だけど、お仕事の邪魔になるでせう。』

もう歸る仕度までして ゐた彼女は ちよつと 意外らしく云つた。

『なあに、こんないゝ天氣ぢや、とても仕事なぞ出來ないね。それより、大崩れの方へでも遊びに行つて見ようよ。』

『ほんとにさうなさいましな。折角ゐらつしたんですもの。こんなに直ぐお歸りぢやつまりませんわ。』

年増の女中のおげんさんまでも そばから 切りと 彼女に勸めた。

大崩れまで、自動車で行つて、そこから秋谷邊まで、半里程の海岸通をぶら〳〵と歩いた。其邊は遠く海中にまで岩が突き出て、其の向うには鎌倉から片瀬までの海岸や江の島などを控へてゐて、葉山から三崎へ行く街道の中でも一番景色のいゝところだつた。それに、もう遲すぎるセルでもちよつと汗ばむ程の、氣持のいゝぽかぽかする暖かさだつた。僕等二人は 實際、溶けるやうな氣持になつて、其の間をぶら〳〵と行つた。

正午には一旦宿に歸つて、こんどはおげんさんを誘つて、直ぐ前の大きな池のやうな靜かな海の中で舟遊びをした。そして、いゝ加減疲れて 歸つて湯にはいつて、夕飯を待つてゐた。

そこへおげんさんが周章てゝはいつて來て、女のお客様だと知らせた。そして僕が立つて行かうとすると、おげんさんの後にはもう、神近がさびしさうな微笑をたゝえて立つてゐた。

伊藤はまだ肌脱いだまゝ鏡台の前に座つて、髮を結ひなほすかどうかしてゐた。神近の鋭い目が先づ其の方をさした。

『二三日中つて仰つたものだから、私毎日待つてゐたんだけれど、ちよつともいらしやらないものだから、けふホテルまで行

つて見たの。すると、お留守で、こちらだと云ふんでせう。で、私、其の足で直ぐこちらへ來たの。野枝さんが御一緒だとはちつとも思はなかつたものですから……』

神近は愚痴のやうにしかし又云ひわけのやうに云つた。

『寄らうと思つたんだけれど、ちよつと都合がわるかつたものだから……』

と僕も苦しい辯解をするほかはなかつた。

あしたは歸るんだからと云ふので、伊藤と僕とは、いろいろ甘さうな好きな御馳走を注文してあつた。僕はおげんさんにそれをもう一人前ふやすやうに云つた。それから食事の出るまでの三十分間が程は、殆んど三人とも無言の行でゐた。僕には何んとなくいよいよもうお終ひだなと云ふ豫感がした。

其年の春、二度目の『近代思想』を止すと同時に、僕は一種の自暴自棄に陷つてゐた。先きに僕は知識階級の間に宣傳する事の殆んど無駄な事を悟つて、哲學や科學や文學の假面の下に自由思想を論じた最初の『近代思想』は、要するに知識的手淫に過ぎないものと斷じた。そして二年間もいつくしんで來て漸く世間から認められだしたそれを止して、僕等の本來に歸るんだと云つて、別に勞働者相手の『平民新聞』を創めた。それが前にも云つたやうに、半年間發賣禁止を續けて遂に倒れ、更に半年間の準備によつて再び起された『近代思想』も同じ運命の下に倒されて了つた。僕等はもうちよつと手の出しようがなかつた。それでも、若し僕等同志の結束でも堅いのであつたら、又何んとか方法もあつたのだつたらう。が、ごく少數しかゐない同志の間にもこれがうまく行かなかつた。同志の間にはまだ運動に對する本當の熱がなかつたのだ。

『僕等はまるで啞雛と腕押をしてゐるだな』

當時殆んど一人のやうになつてゐた荒畑寒村と僕とが、よく慨き合つた言葉だつた。

かくして、もう何にもかも失つたやうな僕が、其時に戀を見出したのだ。戀と同時に、其の熱情に燃えた同志を見出したのだ。そして僕は此の新しい熱情を得ようとして、殆んど一切を棄てゝ此の戀の中に突入して行つた。

其の戀の對照が此の神近と伊藤とだつたのだ。が、其の戀ももう墮落した。僕等三人の間には、友人又は同志としての關係よりも、異性又は同性としての關係の方が勝つて來た。そして其の關係がへたな習俗的なものになりかかつてゐた。

例のおげんさんによつて夕飯が運ばれた。そして此のおげんさんの寂しい顏が、皆んなの氣まづい引きたゝない顏の中にまじつた。好きなそして甘さうな料理ばかり注文したのだが、僕

も伊藤もあまり進まなかつた。神近もちよつと箸をつけただけで止した。

伊藤は箸を置くと直ぐ、室の隅つこへ行つて何んかしてゐたがいきなり立ち上つて來て

『私歸りますわ。』

と、二人の前に挨拶をした。

『うん、さうか。』

と、僕はそれを止める事が出來なかつた。神近もたゞ一言、

『さう。』

と云つたきりだつた。

そして伊藤はたつた一人で、おげんさんに送られて出て行つた。

二人きりになると、神近は又、前よりももつと、愚痴らしくそして又云ひわけらしく、來た時に云つた言葉を繰返した。僕も不機嫌にやはり前に云つた言葉をたゞ繰返した。そして僕は引返して來たおげんさんに直ぐ寝床を敷くようにと命じた。

朝秋谷で汗をかいたり風に吹かれたりしたせいか、そして其上に湯にはいつたせいか、少し風氣味で熱を感じたのだ。肺をわずらつてゐた僕には、感冒は殆んど年ぢうのつき物であり、そして又大禁物だつた、が、ちよつとでも風をひくと、僕は直ぐ寝床に就くのを習慣としてゐた。

が、其時には、それよりも寧ろ、神近と相對して座つてゐて、何にか話ししなければならないのが、何によりも苦痛だつた。彼女が此の室にはいつて來て、伊藤の湯上り姿に鋭い一瞥を加へて以來、僕は彼女の顏を見るのもいやになつてゐたのだ。

彼女も疲れたからと云つて直ぐ寝床にはいつた。僕は少し眠つたやうだつた。

夜十時頃になつて、もうとうに東京へ歸つたらうと思つてゐた伊藤から、電話がかゝつて來た。ホテルの室の鍵を忘れたから、逗子の停車場までそれを持つて來てくれと云ふのだ。僕は着物の上にどてらを着て一人で、十幾町かある停車場まで行つた。彼女は一人ぽつねんと待合室に立つてゐた。

『一旦汽車に乘つたんですけれど、鍵の事を思ひだして、鎌倉から引返して來ましたの。だけどもう今日は上りはないわ。』

彼女はさう云つて、一人でどこかの宿屋に泊つて明日歸るからと云ひだした。

僕は彼女を強いて、もう一度日蔭に歸らした。一そ、三人でめい〳〵の氣まづい思ひを打明け合つて、それでどうにでもなるやうになれと思つたのだ。が、かうして彼女が歸ると、室の空氣は前よりももつといけなかつた。そして三人とも、又殆ん

どロをきかずに、床をならべて寢た。

神近も伊藤も殆んど眠らなかつたやうだ。が、僕は風をひいた上に夜ふけてそとでをしたので、熱が大ぶ高くなつて、うつら〳〵と眠つた。そして時々目をさましては彼女等の方を見た。神近は直ぐ僕のそばに、伊藤は其の向うにゐた。伊藤は顔まで布團をかぶつて、向ふを向いてじつとして寢てゐた。僕がふと目をあけた時、僕は神近が恐ろしい顔をして、それを睨んでゐるのをちらと見た。

『若しや……』

と或る疑念が僕の心の中に湧いた。僕は眠らずに窃つと彼女等を窺つてゐなければならないときめた。が、いつの間にか熱は僕を深い眠りの中に誘つて了つた。

四

目をさました時にはもう可なり日が高かつた。神近も伊藤も無事でまだ寢てゐた。僕はほつとした。

朝飯を濟すと伊藤は直ぐ出て行つた。勿論東京へ歸つたのだ。が、神近はそれを疑つてゐるやうだつた。もと〳〵僕と一緒にずうとゐるつもりで來たので、今は自分が來たからちよつと近所のどこかで避けて、又自身が歸れば直ぐこゝへ來るのだらう、と云ふやうな口ぶりだつた。彼女は割合に人が好くて、こく人を信じ易いかはりには、疑ひ出すと隨分邪推深かつた。僕はもう彼女の邪推と鬪ふには、あまりに彼女に疲れてゐた。さうでなくても、きのふ彼女が『侵入』して來て以來の僕の氣持は、到底靜かに彼女と話する事を許さなかつた。しかし又、彼女をすつぽぬかして伊藤と一緒にこゝへ來てゐると云ふ弱點は、彼女に對してあまり強く出る事も許さなかつた。で、彼女のそんな疑ひに對しては、たゞ一言『馬鹿な』と輕く受け流して、相手にせずにゐた。

そして晝飯が濟むと直ぐ、僕は苦りきつた顔をして、机に向つて原稿紙をとり出した。彼女は仕方なしにおげんさんの案内で海岸へ遊びに行つた。

其時はちようど寺内内閣が出來た時で、僕は『新小説』の編輯者から、寺内内閣の標榜する謂はゆる善政に就いての批評を書く事を頼まれてゐた。憲政會は三菱黨だ。政友會は三井黨だ。從つて此の二大政黨には、今日の意味での善政、即ち社會政策を行ふ事は到底出來ない。彼等は資本家黨なのだ。官僚派は資本家の援助がなければ何事も出來ない事はよく知つてゐる。しかし彼れには此の資本家の上に立つ政治家だと云ふ、ともかくもの自尊がある。そして猶、此の資本家の横暴と對抗するには勞働者の援助をかりなければならない。そこで其の政治は、啓

政、即ち社會政策をとるほかはない。僕はさつとそんな風に考へてゐた。そして、猶それを歴史の事實の上から論ずるつもりで、桂が其の晩年熱心な社會政策論者であつた事や、又ドイツのビスマルクの例を詳しく書いて見ようと思つてゐた。

僕はたれだかの『ビスマルクと國家社會主義』を其參考に持つて來てゐた。で、先づざつと其の本を讀んで見ようと思つた。が、かうして落ちついて机の前に座ると、急に又風の熱で頭の重い事が思ひだされて來た。熱でばかりではない、いろ〳〵な雜念で重いのだ。

僕は神近とはもうどうしてもお終いだと思つた。彼女と出來て半年あまりの間に、此のもうお終ひだと言ふ言葉が、彼女の口から三四度も出た。が、こんどは、それを始めて僕の方から云ひ出さうと思つた。

最初は、彼女との關係後二ケ月ばかりして、更に伊藤との關係が出來かゝつた時、彼女から隨分手厳しくそれを申渡された。

『けふはきつとあなた、どこかでいゝ事があつたのね。顔ぢうがほんとうに喜びで光つてゐるわ。野枝さんとでも會つて？』

或晩遲く彼女を訪ねた時、顔を見ると直ぐ彼女は云つた。僕はそれまではそんなに嬉しさうにしてゐたとも思はなかつたが、さう云はれて始めて、彼女の言葉通りに顔ぢうが喜びで光つてゐるやうな氣がした。そして實際又、彼女の云つた通り、今伊藤と會つて來たばかりだつたのだ。しかも、いつも亭主が一緒なのが、其日は始めて二人きりで會つて、始めて二人で手を握り會つて歩いて、始めて甘いキスに醉ふて來たのだつた。僕は正直に其の通りを彼女に話した。

『さう、それやよかつたわね、私も一緒になつてお喜びしてあげるわ。』

彼女はもう餘程以前から僕等二人がよく好き合つてゐる事を知つてゐた。そして、たゞ好き合つてゐるばかりで、それ以上にちつとも進まない事を寧ろ不思議がつてゐた。で、自分が僕等の姉さんでゞもあるかのやうにして、ほんとうに喜んでくれたやうだつた。

彼女には、此の姉さんと云ふやうな氣持が、隨分にあつた。そして此の氣持の上から、僕や伊藤の我がまゝをいつも許してくれ、又自分からも進んでいろ〳〵な我がまゝをさせてゐた。彼女はもう三十だつた。そして伊藤は彼女よりも七八つ下だつた。

僕が彼女と始めて手を握つた時にも、彼女は伊藤に對する僕の愛を許してゐた。まだどうにもなつてゐない、今からもどう

なるか見こみはちつともない。しかし僕は非常に伊藤を愛してゐる、今かうして相抱き合つてゐる彼女よりも以上に愛してゐる、僕は此の事實を僞る事は出來ないと云つた。彼女はそれを承認した。しかも、ちつともいやな顏は見せないで、笑ひながら承認した。

『たとへば、僕にはいろんな男の友人がゐる。そして其の甲の友人に對するのと乙の友人に對するのと、其の人物の評價は違ふ。又尊敬や親愛の度も違ふ。しかし、それが僕の友人たるに於ては同一だ。そして皆んなは、各々自分に與へられた尊敬と親愛との度で滿足してゐなければならない。俺れは乙よりも尊敬されないから、あいつの友人になるのはいやだ、などゝ云ふ馬鹿な甲はゐない。』

と云ふのが僕の友人觀兼戀愛觀だつた。僕は友人と戀人との間に大した區別を設けたくなかつた。

が、理屈はまあどうでもいゝとして、とにかく彼女は、僕の心の中での彼女と伊藤との優劣を認めたのだ。と同時に又、其の尊敬や親愛の對象となるもの、質の違つてゐる事をも認めたのだ。そして彼女は、此の優越を蔽ふために、年齡の上からの自分の優越を考へ出したのだ。しかし反對に又、彼女よりも年の多い保子に對しては、彼女は自分の知力の優越を考へてゐた。そしてやはり此の優越感の上から、保子に對してまでも姉さんぶつた心の態度を持つてゐた。此の姉さんぶると云ふ態度には、彼女の性格の一種の仁俠もあるのであるが、しかし彼女が其の競争者に對してどうしても持ちたい優越感がそれを非常に助けてゐたのだ。

實際彼女は此の優越と云ふ事をよく口にしてゐた。そして彼女が有らゆる點に於て優越を感じてゐた保子に對しては、たゞ憐憫があるばかりで、殆んど何んの嫉妬もなかつた。それからもう一人、これは今ちよつとその人の名を云へないが、やはり女文士でかりにFといふのがあつた。其のFと僕とのごく淡い關係に就いても、彼女はやはり自分の優越感から何んの嫉妬をも感じてゐなかつた。寧ろ一種の興味をもつてすら見てゐた。

其晩は僕は麻布の彼女の家に泊つた。そして翌日、保子のゐる逗子の家に歸つた。すると多分其の翌日の朝だ、僕は彼女から本當に三行半と云つてもいゝ短い絶緣狀を受取つた。それは『若し本當に私を思つてゐてくれるのなら、今後もうお互に顏を會せないようにしてくれ。では、永遠にさよなら。』と云ふやうな意味の、あまりに突然のものだつた。僕は直ぐ東京へ出た。そして彼女を其の家に訪ふた。が、彼女は僕の顏を見るや、泣いてたゞ『歸れ、歸れ』と叫ぶのみで、話しのしようもなかつ

た。そして僕は何にかを抛うりつけられて、其の家を逐ひ出された。

僕は直ぐ宮島の家へ行つた。宮島の細君は彼女にとつての殆んど唯一の同性の友達だつた。

『ゆうべはひどい目に合つたよ。神近君が醉つぱらつて氣違ひのやうにあばれ出してね。そして君の事を「だました！　だました！」と云つて罵るんだ。漸くそれを落ちつけさして、家まで連れて行つて、寢かしつけて來たがね。實際弱つちやつたよ。』

宮島は、僕が彼女の話しをすると、本當に弱つたやうな顏をして話した。

そこへ、暫くして、彼女がやつて來た。顏色も態度も、さつきとはまるで別人のやうに、落ちついてゐた。

『私、あなたを殺す事に決心しましたから。』

彼女は僕の前に立つて勝利者のやうな態度で云つた。

『うん、それもよからう。が、殺すんなら、今までのお馴染甲斐に、せめては一息きで死ぬやうに殺してくれ。』

僕は其の『殺す』と云ふ言葉を聞くと同時に、急に彼女に對する敵意の湧いて來るのを感じたのであつたが、戲談半分にそれは受け流した。

『其時になつて卑怯なまねをしないやうにね。』

『え丶、え丶、一息きにさへ殺していたゞければね。』

二人はそんな言葉を云ひかはしながら、しかしもう、お互の顏には隱しきれない微笑みがもれてゐた。

彼女は又もとの姉さんに歸つたのだが、僕と伊藤とは此の姉さんにあまりに甘えすぎたやうだ。あまりに無遠慮すぎたやうだ。それをあまりに利用しすぎたとまでは思はないが。そして其のたびに彼女はヒステリイを起しはじめた。

ヒステリイとまでは行かんでも、其後彼女は、其の生來の執拗さが益々ひつつこくなつた。いろんな要求が益々激しくなつた。そして、それが滿足されなければされない程、それだけ又益々ひつつこくなり、益々うるさくなるのであつた。が、こゝに自狀して置かなければならないのは、僕はだん／＼此の執拗さにいや氣がさして行つたのであるが、しかし又、其の執拗さが僕にとつての一つの强い魅力でもあつた事だ。

彼女は折々其の執拗さを遠慮した。が、それはいつも、更に數倍の執拗さをもつて來る前ぶれのやうなものだつた。そして其の執拗さが滿足されないと、彼女はきまつて其のヒステリイを起した。そして其のたびに、彼女の口から、例の『殺す』と云ふ言葉が出た。其の言葉を聞くと、僕は猝然として、其の席を起つて出た。

かくして僕は彼女から三度ばかり絶交を申渡された。が、其の翌日には、彼女はきつと謝まつて歸つて來るのだつた。そして其の最後に謝まつて來た時には、僕は彼女に、もう一週間熟考して見るがいゝと云つて、一旦それを斥けた。彼女は其の一週間が待てないで、其の翌日又謝まつて來た。

『しかし、こんどはもう、斷然其の絶交をこつちから申渡すんだ。』

僕は原稿紙を前に置いたまゝ、それにはたゞ『善政とは何ぞや』と云ふ題を書いただけで、獨り言のやうに云つた。

『こんど若し、君が殺すと云つたり、又そんな態度を見せた場合には、即刻僕は本當に君と絶交する。』

最後の仲直りの時に僕は彼女にさう云つたのだ。そして今、ゆうべ僕は、彼女の顏の中に確かに殺意を見たのだ。

五

彼女は散歩から歸つて來た。僕は机に片肱をもたせかけて、熱でぽつぽとほてる頭を押へてゐた。彼女は僕が一行も書けないでゐる原稿紙の上を冷かにあざ笑ふやうにして見てゐた。

夕飯を食ふと、僕は又直ぐに寢床をしかして、横になつた。彼女はしばらく無言で座つてゐたが、やはり又そばの寢床に寢た。僕はもう出來るだけ何んにも考へないやうにして、たゞ靜かに眠る事だけを考へてゐた。が、長年の病氣の經驗から、熱のある時に興奮をさける、習慣のやうになつてゐる此の方法も成功しなかつた。ふと僕はゆうべの彼女の恐ろしい顏を思ひ出した。

『ゆうべは無事だつた。が、いよ〳〵今晩は僕の番だ。』

僕はさう思ひながら、彼女がどんな兇器を持つて來てゐるだらうかと想像して見た。彼女はよく一と思ひに心臟を刺すと云つてゐた。刺すとなれば短刀だらう。が、彼女はそれをどこに持つてゐるのだらう。彼女はごく小さな手提げを持つてゐた。しかし、あんな小さな手提げの巾では、七八寸ものでも隱せまい。すると彼女はそれを懷ろの中にでも持つてゐるのかな。とにかく、刃物なら、何んの恐れる事もない。彼女がそれを振りあげた時に直ぐもぎ取つて了へばいゝのだ。だが、若しピストルだと、ちよつと困る。どうせ、ろくに打ちようも知らないのだらうが、それにしてもあんまり間が近すぎる。最初の一發さへはづせば、もう何んの事もないのだが、其の一發がどうかすれば急所に當るかも知れない。しかし、それも滅多にはない事だらう。一發どこか打たして置いて、直ぐ飛びかゝつて行けばいゝのだ。女の一人や二人、何にを持つて來たつて、何んの恐れる事があるものか。直ぐとつちめて、ほうり出して了へばい

ゝのだ。

『ね、何にか話しない？』

一二時間もしてからだらう。彼女は僕の方に向き直つて、泣きさうにして話しかけた。彼女には此の默つてゐると云ふ事が何によりもつらいのだ。寂しくて堪らないのだ。どなり合つてでも、何にか話してゐたいのだ。そして今は、もう堪らなくなつて、何にもかも一切忘れたやうになつて、數日前の彼女と僕とに歸つて話したかつたのだ。

『してもいゝ。が、愚痴はごめんだ。』

『愚痴なんか云ひやしないわ、だけど……』

『其のだけどが僕はいやなんだ。』

『さう、それぢやそれも止すわ。』

『それよりも、此の一二日以來のお互の氣持でも話さうぢやないか。僕はもう、こんな醜い、こんないやな事は飽き飽きだ。ね、お互にもう、いゝ加減打ちきり時だぜ。』

『えゝ、私ももう幾度もさう思つてゐるの。だけど……』

『又だけどだね。其のだけどでいつも駄目になるんだ。こんどこそはもうそれを止しにしようぢやないか。』

『だけど、もつと話したいわ。』

『話はいくらでもするがいゝさ。しかし、もう、お互にこんないやな思ひばかり續けてゐたつて、仕方がないからね。本當にもう止しにしようよ。』

『えゝ……』

彼女はまだ何にか話したさうに見えた。が、其の話のさきを一々僕に折られて了ふので、こんどは默つて何にか考へてゐるやうだつた。彼女がかうして折れて來ると、僕は彼女の持つてゐる殺意にまで話を進める事が出來なくなつた。そして僕はたゞ彼女の此の上折れて來ようとするのを防がうとだけ考へた。

が、彼女はそれつきり默つて了つた。僕も默つて了つた。そして僕は、これだけの事でも云つたので多少胸がすいたものと見えて、何にも考へないで靜かに眠つたやうにしてゐる事に、こんどは成功した。

『ね、ね。』

それから又一二時間しての事だらう。彼女は僕を呼び起すやうに呼んだ。

『ね、本當にもう駄目？』

『駄目と云つたら駄目だ。』

『さう、私今何にを考へてゐるのか、あなた分る？』

『そんな事は分らんね。』

『さう、私今ね、あなたが金のない時の事と、ある時の事とを考へてゐるの。』

『と云ふと、どう云ふ意味だい？』

『野枝さんが綺麗な着物を着てゐたわね。』

『さうか、さう云ふ意味か。金の事なら、君にかりた分はあした全部お返しします。』

僕は彼女に金の事を云ひだされてすつかり憤慨して了つた。

『いゝえ、私そんな意味で……』

彼女は何にか云ひわけらしい事を云つてゐた。

『いや、金の話まで出れば、僕はもう君と一言もかはす必要はない。』

僕は斷じてもう彼女の云ひわけを斥けた。そして彼女がまだ二言三言何にか云つてゐるのも受けつけずに默つて了つた。

いつでもあの位氣持よく、しかも多くは彼女から進んで、出してゐた金の事を、今になつて彼女が云ひださうとは、全く僕には意外だつた。そして此の場合、金が出來たから彼女を棄てるのだ、と云ふやうな意味の事を云はれるのも、全く意外だつた。そしてそれが意外な程、僕は實に心外に堪えなかつた。

金の出道は彼女には話してなかつた。それも彼女には不平の一つらしかつた。が、其頃にはもう、僕は彼女に同志としてのそれだけの信用がなかつたのだ。僕は其の金を時の×××××××君から貰つて來たのだ。

其の少し前に、伊藤が其の遠緣の頭山滿翁のところへ金策に行つた事があつた。翁は今金がないからと云つて杉山茂丸君のところへ紹介狀を書いた。伊藤は直ぐ茂丸君を訪ねた。茂丸君は僕に會ひたいと云ひだした。で、僕は築地の其の台華社へ行つた。彼れは僕に『白柳秀湖だの、山口孤劍だのゝやうに、軟化をするようにと勸めた。國家社會主義位のところになれと勸めたさうすれば、金もいるだけ出してやる、と云ふのだ。僕は直ぐ其の家を辭した。

茂丸君は無條件では僕に一文も金をくれなかつた。が、其の話の間に時々出た『××が』『××が』と云ふ言葉が、僕に或る一案を暗示してくれた。或晩僕は×××××に電話して、××がゐるかゐないかを聞き合はした。××はゐた。が、今晩は地方長官共を招待して御馳走をしてゐるので、何にか用があるなら明日にしてくれとの事だつた。

『なあに、ゐさへすればいゝのだ。』

僕はさう思ひながら直ぐ永田町へ出かけた。

『御覽の通り、今晩はこんな宴會中ですから……』

多分菊池とか云ふ秘書×らしい男が僕の名刺を持つて挨拶に

出て來た。

『いや、それは知つて來てゐるんです。とにかく××に其の名刺を取次いで、ほんのちよつとの時間でいゝから會ひたい、と云つて貰へばいゝんです。』

秘書×は引つこんで行つた。そして直ぐに又出て來て、『どうぞ、こちらへ』と案内した。

宴會は下のやうだつたが、僕は二階のとつつきのごく小さな室へ案内された。テエブルが一つに椅子が三つばかり置いてあるだけで、飾りと云ふ程の飾りもない室だつた。

直ぐに給仕がお茶を持つて來た。が、其の給仕はお茶をテエブルの上に置くと、ドアの右手と正面とにある三つばかりの窓を、一々開けては鎧戸をおろして又閉めて行つた。變な事をするなと思つてゐると、こんどは左手の壁の中にあるドアを開けて、さつきの秘書×がはいつて來た。

『今直ぐ××がお出でゝすから。』

彼れはさう云つて、出はいり口のドアを一旦開けて見て又閉めて、それにピチンと鍵をおろした。

『ははあ、何にか間違ひでもあつた時に、僕が逃げられない用心をしてゐるんだな。』

僕は笑ひたいのをこらへて、默つて彼の處作を見てゐた。彼れはさつき給仕が閉めた窓のところへ行つて、一々それに窓掛けをおろして、そして丁寧にお辭儀をして又隣りの室との間のドアの向うに消えた。

『すると、××はあのドアからはいつて來るんだな。』

僕はさう思つて、其のドアの方に向つて、煙草をくゆらして待つてゐた。

が、待つてゐると云ふ程もなく、直ぐ××がはいつて來た。新聞の寫眞でよく見てゐた、鼻眼鏡とポワンテュの鬚との、まぎれもない彼れだ。

『よくお出でゞした。いや、お名前はよく存じてゐます。私の方からも是非一度お目にかゝりたいと思つてゐたのでした。けふはこんな場合で甚だ失禮ですが、しかし今ちようど食事もすんで、ちよつとの間なら席をはづしても居れます。私があなたに會つて、一番さきに聞きたいと思つてゐた事は、どうしてあなたが今のやうな思想を持つようになつたかです。どうです、ざつくばらんに一つ、其の話をしてくれませんか。』

少々赤く酔を出してゐる××は、馬鹿にお世辭がよかつた。

『え、其の話もしませう。が、今日は僕の方で別に話を持つて來てゐるのです。そして其の方が僕には急なのだから、今日は先づ其の話だけにしませう。』

『さうですか。すると其のお話と云ふのは？』
『實は金が少々欲しいんです。で、それを、若し戴ければ戴きたいと思つて來たのです。』
『あゝ金の事ですか。そんな事ならどうにでもなりますよ。それよりも一つ、さつきのお話を聞かうぢやありませんか。』
『いや、僕の方は今日は此の金の方が重大問題なんです。どうでせう。僕今非常に生活に困つてゐるんです、少々の無心を聞いて貰へるでせうか。』
『あなたは實にいゝ頭を持つてそしていゝ腕を持つてゐると云ふ話ですがね。どうしてそんなに困るんです。』
『××が僕等の職業を邪魔するからです。』
『が、特に私のところへ無心に來た譯は？』
『××が僕等を困らせるんだから、××へ無心に來るのは當然だと思つたのです。そしてあなたならそんな話は分らうと思つて來たんです。』
『さうですか、分りました。で、いくら欲しいんです。』
『今急のところは三四百圓あればいゝんです。』
『ようごわす 差しあげませう。が、これはお互の事なんだが、ごく内々にして戴きたいですな。同志の方にもですな。』
『承知しました』

金の出道と云ふのは要するにかうなのだ。そして僕は三百圓懐にして家に歸つた

其の金は、しばらく金をちつとも持つて行つてゐない保子のところへ五十圓行き、猶もうぼろ／＼になつた寢衣一枚でゐる伊藤に三十圓ばかりでお召の着物と羽織との古い質を受けださせて、まだ二百圓は殘つてゐた。それにもう五十圓足せば、市外に發行所を置くとすれば、月刊雜誌の保證金には間に合ふのだ。

『が、もう雜誌なぞはどうでもいゝ。あしたは其の金を伊藤に持つて來て貰つて、こいつに投げつけてやるんだ』

僕は一人でさう決心した。

又 彼女が伊藤の着物の事を云ひだしたのから思ひだすと、ふだん人の着物なぞにちつとも注意しない彼女が、さう云へば伊藤の風ていをじろ／＼と見てゐた。彼女はもう大ぶ垢ぢみたメリンスの袷（それとも單衣だつたか）に木綿の羽織を着てゐた。

『さう／＼、彼女はいつか僕にいくらかの金をつくるために、其の着物を質に入れてゐたのだつけ。せめてはあれだけでも出して置いてやるのだつた。』

と僕も氣がついた。が、今になつてそんな氣がついたところで仕方がない。

『とにかくあしたは、あいつに金を投げつけてやるんだ。』

六

少しうと〳〵としてゐると、誰れかゞ僕の布團にさはるやうな氣がした。

『何にをするんだ?』

僕はからだを半分僕の××の中に入ようとしてゐる彼女を見てどなつた。

『×、××××××××。』

彼女は、其晩始めて口をきゝだした時と同じやうに、泣きさうにして云つた。

『いけません、僕はもうあなたとは他人です。』

『でも、私悪かつたのだから、あやまるわ、ね、許して下さいね。ね、いゝでせう。』

『いけません。僕はさう云ふのが大きらいなんです。さつきはあんなに云ひ合つて置いて、其の話がつきもしない間に、其のざまは何んて云ふ事です。』

僕は彼女の訴へるやうな、しかし又情熱に燃えるやうな目を手で斥けるやうにしてさえ切つた。彼女のからだからは其の情熱から出る一種の臭ひが發散してゐた。

あゝ彼女の肉の力よ。僕は彼女との最初の夜から、彼女の中にそれを最も恐れ且つ同時にそれに最も引かれてゐたのだ。そして彼女は、其のヒステリカルな憤怒の後に、其の肉の力を最も發揮するのだつた。

しかし今晩はもう、僕は彼女の此の力の中に巻きこまれなかつた。僕は彼女の此の力を感ずると同時に、猶更に奮然としてそれに抵抗して起つた。今晩の彼女の態度は、始めから其のふだんの執拗さや強請の少しもない、寧ろ實にしほらしい音なしい態度だつた。が、此のしほらしさが、彼女の手と云つてもいゝ位に、かうした場合にはきつと出て來るのだつた。が、僕は最初からそれを峻拒してゐた。

彼女は決然として自分の寢床に歸つた。そしてぢつとしたまゝ寢てゐるやうだつた。

僕はいよ〳〵だなと思つた。こんどこそは本當にやるのだらうと思つた。僕は仰向きになつたまゝ兩腕を胸の上に並べて置いて、いつでも彼女が動いたら直ぐ起ちあがる準備をして、目をつぶつたまゝ息をこらしてゐた。一時間ばかりの間に彼女は二三度ちよつとからだを動かした。其のたびに僕は拳をかためた。

が、やがて彼女は起き出して來た。そして僕の枕もとの火鉢のそばに座りこんだ。

僕はこれは具合が悪いなと思つた。横からなら、どうにでもして防げるのだが、頭の方からではどうしても防ぎようがないと思つた。しかし、今更、こつちも起きるのも強ばらだと思つた。ピストルで頭をやられてはちよつと困ると思つたが、しかし刃物なら何とか防ぎやうがあると思つた。ピストルはさう急に彼女の手にはいるまい。だから、兇器はきつと刃物だらうと思つた。

『しかし、どんな事があつても、こんどは決して眠つてはならない。眠れば、僕はもうお終ひなのだ』

僕はさう決心して、やはり前のやうに目をつぶつたまゝ兩腕を胸の上に並べて、息をすまして、頭の向うでの呼吸を計つてゐた。其時、どこかで時計が三時を打つのを聞いた。僕はやはり息をすまして向ふの動靜を計つてゐた。

ふと僕は、咽喉のあたりに、熱い玉のやうなものを感じた。

『やられたな。』

と思つて僕は目をさました。いつの間にか、自分で自分の催眠術にかゝつて、眠つて了つてゐたのだ。

『熱いところを見ると、ピストルだな。』

と續いて僕は思つた。そして前の方を見ると、彼女は障子をあけて、室のそとへ出て行かうとしてゐた。

『待て！』

と僕は叫んだ。

彼女はふり返つた

（これで僕は最初に話したお化のところまで戻つた譯だ。其のお化の因縁話をすました譯だ。が、事件はまだ續く。僕はそれもすつかり話して了はなければ、僕の責めは濟まないだらう。で、もつと話しを續けて行かう。）

彼女はふり返つた。

僕は其の前夜彼女が寢てゐる伊藤をにらみつけた、其の恐ろしい殺氣立つた顏を彼女に見ると思ひのほか、彼女がゆふべ僕に泣きついて來た時の其の顏よりももつと憐れな顏を見た。

『許して下さい。』

彼女がふり向くと同時に發した此の言葉が僕には意外だつた。

しかし、もうこうなつた以上、僕は彼女を許す事が出來なかつた。少なくとも其の瞬間の僕は、何んと云ふ理屈はなしに、たゞ彼女を捕まへてそこへ叩きつけなければ已まなかつた。

僕は起きあがつた。そして逃げようとする彼女を追ふて縁がはまで出た。彼女はそこの梯子を走り下りた。僕も續いて走り下りた。そして中途で僕は彼女の背中の上へ飛び降りるつもり

で飛んだ。が、彼女の方がほんの一瞬間だけ早かつた。彼女は下の縁がはを右の方へ驅けて、七八間向うの玄關のところから更に二階の梯子段を登つた。僕は梯子段を飛び下りた時から、急に足の裏の痛みと呼吸のひどく困難になつて來たのを感じながら、猶彼女を追つかけて行つた。

其の二階は、僕の居室の方の二階とは棟が違つてゐて、大きな二つの室の奥の方が、其夜は宿の親戚の女共の寢室になつてゐた。彼女は其の手前の室の中にはいつて、紫檀の茶ぶ台の向うに立ちどまつた。

『許して下さい。』

彼女は恐怖で慄えながら又叫んだ。

が、僕は其の茶ぶ台の上を踏み越えて彼女を捕まへようとした。彼女は又走り出した。其の奥に寢てゐた女共は目をさまして、互にかぢりついて、僕等の方を見つめながら慄えてゐた。

僕は呼吸困難で咽喉がひい／＼鳴るのを覺えながら、猶彼女を追つかけて行つた。彼女はさつきの梯子段を降りて、廊下をもとの方へ走つて、もとの二階へは昇らずに、そこから左の方へ便所の前に折れた。そして其の折れた拍子に彼女は倒れた。僕も彼女の上に重なつて倒れた。

僕はそれから幾分たつたか知らない。ふと氣がついて見ると、血みどろになつて一人でそこに倒れてゐた。呼吸はもう困難どころではなく殆んど窮迫してゐた。

『これはいけない。』

と僕は思ひながら、漸く壁につかまつて起ちあがつて、玄關の方へよろめいて行つた。玄關のそばには女中部屋があつた。僕は女中を起して醫者を呼びにやらうと思つたのだ。が、其の女中部屋の前で僕は又倒れて了つた。そして倒れると同時に、其の板の間が血でどろ／＼してゐるのを感じた。

女中は呼んでも返事がなかつた。皆んな二階の親戚の客におどかされて、一緒に奥の方へ逃げこんでゐたのだ。暫くして、其の親戚の一人の年増の女がおづ／＼とそばへ來た。

『あのね、直ぐ醫者を呼んで下さい。それから東京の伊藤のところへ直ぐ來るように電話をかけて下さい。それからもう一つ神近の姿が見えないんだが、どうかすると自殺でもするかも知

れないから、だれか男衆に海岸の方を見さして下さい。』

僕はこれだけの事を相變らず咽喉をひい〳〵鳴らしながら、漸くの事で云つた。そして僕は煙草を貰つて、其の咽喉の苦しさをごまかしてゐた。傷はピストルではなく、刄物だと云ふ事も其の時に漸く分つた。

やがて、どや〳〵と警官共がはいつて來た。そして其の一人は直ぐと僕に何にか問ひ尋ねようとした。

『馬鹿！ そんな事よりも先づ醫者を呼べ。醫者が來ない間は貴様等には一言も云はない。』

僕は其の男をどなりつけながら、頭の上の柱時計を見た。三時と三十分だつた。

『すると、眠つてから直ぐなのだ。』

と僕は自分に云つた。

それから十分か二十分かして、僕は自働車で、そこからいくらもない逗子の千葉病院に運ばれた。そして直ぐ手術台の上に横はつた。

『長さ……センチメエトル、深さ……センチメエトル。氣管に達す……。』

院長が何にか傷の中に入れながら、助手や警官等の前で口述するのを聞きながら、僕は

『けふの晩まで位の命かな』

と、ちよつと思つたまゝ、其儘深い眠りに陥つて了つた。

ダダイズムと表現派と印象派

ダダの話

辻潤

ダダのことはダダで話すのが一番いいが、必ずダダで話さなければならないと云ふこともない。

日本で、ダダイストだと云ふ名のりを揚げたのは僕が一番最初だが、その前に「俺はダダ派の詩人」だと云つて僕に自己を紹介した若い詩人に高橋新吉と云ふ男がゐる。

だが、この雑誌の編輯人は恐らくダダのジエネラル　アイデイヤを一般にわかりやすく説明してほしいにちがひない。

そこで、千九百〇〇年に、獨逸の都巴里のモンマルトルに「マンハツタン」と云ふカフエがあつて、そこで、一群の無頼漢がより集まつて最初の宣言をしたのが――と云ふやうなことを書かなければならないことになる。

二三年前か一昨年あたりの外國の雑誌を見ると、ダダの紹介がチョイ〳〵出てゐたさうだがアイニク僕は見も讀みもしなかつた。いづれ日本で異國の狀態を知るには異國の新聞雑誌又は書籍によるより便利な方もない。

「ダダはある一つの藝術にのみ限られてゐない――」

ダダは新らしい人生觀だ、――少なくとも、飛行器が空を飛ぶと云ふ意味で新らしい、だが、ダダの精神は恐らく、人間創生の始めから、希臘、羅馬、――その他、いつの世の時代にも存在してゐたにちがひない。唯だ、かれ等は自から「ダダ」だと云はなかつたばかりである。

「ダダは――凡ゆる既成の觀念を追ひ散らすことばだ！」――

とトリスラム・シヤンデイは彼の「唯一書」ロオレンス・スタアンと云ふ本の中に書いてゐるが、——それは永い間、何人にも氣付かれずに拉典區の墓の中に埋もれてゐた。それを、彼の何代目かの曾孫、トリストラム・ツアラアが秘かに盜み出してわが吻額に彼の肖像をピカピカに描かせた。

「…私は一個の宣言を書く。そして、私は何も求めない。だが私はある事を云ふ。そして私は主義として宣言には反對だ。それから主義にも反對だ。——僕はこの宣言を、人は新しく一呼吸して互に全然相反してゐる二ツの動作を同時にやることが出來るものだと云ふことを示めす爲めに書く。私は動作に反對だ。矛盾を止めるためではない。肯定のためでも、贊成のためでも、反對のためでもない。それから說明は御免蒙むる。何故と云ふに私は意義(サンス)がきらひだから。

ダダはなにごとをも意味しない。——」

諸君はダダイストではない、人達の眞面目な紹介を知りたければ、本年の四月だか三月だかの「太陽」に出た片山孤村氏の「駄々主義の研究」と、早稻田文學七月號の森口氏の紹介を讀まれるがいい、——その他、川路氏も、二三度色々なところで紹介してゐると思つた。

白紙に赤インキをふりかけて「聖母マリアの肖像」だと稱し、モナリザの複製にカイゼル髯を生やしたのを展覽して、强ひて奇矯を衒らふのもダダイストである。アルハベットを「J」をぬかして四五行に列らべてそれが「自殺」と云ふ詩だと云ひ、勝手な騷音を新語して、etsan etsam-oha-ia」といツたりするのもダダである。

DADA とはどこの言葉か?——しかし、その穿鑿などは無用である「凡ゆる既成觀念を追ひ散らすことば」で澤山だが、佛蘭西語の「ヘイ〳〵どう〳〵」だと云つても差支ひはない。ダダは卽ち英語の Hobby-Horse' にあたる。字引を引けば 'Cheval, dans le langage des enfants. C'est sondada, C'est son idée favorite' で江戸語の「拾八番」になる。

僕は「浮浪漫語」(定價、金一圓四拾錢、下出書店出版)の中の冒頭から、二番目の 'Tada-Dada, の中に、'' ……My dear grand Launence Sterne (who is the Greatest Dadaist ever born in the world, born only too early, and lived and died miserably for the sake of his great *Dada*) と書いて置いた。なぜなら、僕の見るところによると、ダダの開山はリヒヤルト・ヒユルゼンベツクでも、トリスタン・ツアーラでもマルセル・ヤンコーでもなく、彼、十八世紀英國に生れたロオレンス・スタアンだからである。ツアーラは恐らく、「トリ

スト・ラム・シャンデイ」から、自からをトリスタンと名づけたに相違ない。

試みに諸君、スタアンの「唯一書」,Triat ran Shandy, を開いて見給へ。

彼は先づ第一篇の第四章に、「自分は自分自身を彼の規則の内に閉ぢこめて物を書かないばかりか、今迄、存在した何人の規則にも従つて物を書かないであらう。」と宣言してゐる。此處に、彼と云ふのはかの有名な羅馬の詩人 Horace を指してゐるのである。更に第七章の終りの方にはどんなことが書いてあるか?――Did.us（ダダウスでもいい）と云ふ男は兎に角、物事をみんな自分流儀に従つて粉微塵にブチコワして、それを新らしい鑄型に入れて、拵らへあげずにはゐられない癖がある。それで、どんな立派な道具でも、彼の手にかかつてはやりきれない、そればかりでなく彼は、又この流儀で、澤山に近所の道樂なおばさん達の能力を一新して、彼の挿入物 wham-wham を啣はへさせた。「ウワム・ワム」は說明の限りではない。更に、彼は續けて曰く、「僕は白狀するが、決して僕は凡ゆる意味で、このデイデイウスを羨望してはゐない。――だが、every man to his own taste だ。ところでかの偉人、クナストロキウス博士は、暇さへあれば、驢馬の尻尾をくしけずり、」たとへ、彼のポケットに毛抜きを持つてゐたとは雖も、彼の歯で、死んだ毛を拔いてやることを彼の最上の喜びとしたではないか? 否、諸君、凡ゆる時代の最賢者は――勿論、かのソロモンも御多分に洩れず――みんな彼れ等の Hob'y-Horses（ダダ）を持つたではないか?――かれ等の走る馬――かれ等の貨幣とかれ等の貝殼帽子（コツクルシエル）、かれ等の喇叭、かれ等の胡弓、かれ等のバレツトを持つてゐたではないか?――どうだ、諸君、みんな人間が自分の好きなおん馬に乗つて、靜かに平和に暮らすなら、そして、王様の大道を乗つて歩くなら、後も先もないぢやないか?

それから第八章の冒頭には羅馬の諺―― De gustibus non est disputa'um を引いて、卽ち、ホビイ・ホオス（ダダ）には議論はない。自分は根柢からその敵である場合にも、決してこれをやりはしない。なぜなら、自分は、月の盈虚や、蝨が一寸刺した拍子に、胡弓引きになつたり、畫かきになつたりするからだ。

これだけでも、もう、でなくつても、「トリストラム・シャンデイ」をダダの聖書にして差支へはない。

まだ、ダダ藝術の見本として、擧げればいくらでも無數にある。第七篇の十一章などはたつた三行しかない。なにが書いてあるかと思へば、「旅行とはまあなんと云ふ冒険だらう！ それ

は唯だ人間を熱つくする。だが。それを癒やす法がある、それは諸君が次の章から拾ひ出し給へ。」たつたこれだけしきゃ書いてないのだ。

「我々は永久に理解されない仕事を要求する」とツァーラが云つてゐるではないか？

大戰中、瑞西のコスモポリスなるチューリッヒは歐洲各國の亡命者やら、危險思想家、無政府主義者等の巣窟になつた。表現主義の出生地も、たしか又そのチューリッヒである筈だ。その當時、同市に、フウゴオ・バルと云ふ男とその情婦エンミイ・ヘンニングスと云ふ女とが小さな酒場カバレエ・ヴォルテエルで「ヴリエテ・ミニアツール」を開いてゐた。その變な寄席で、文士や、音樂家や、畫家が自作の作品の朗讀やら、演奏やら、展覽會をやつた。そこへ、例のルーマニヤ生れのトリスタン・ツーラや、佛蘭西人のハンス・アルプ、獨逸人のヒュルセンベックなど云ふ連中が集つて、盛んに勝手な熱を吹いてゐた。そして、かれ等の名前は、實は本名だか、假名だかよくわからないのだ。なぜと云ふと、ヒュルセンベック彼自身の告白によれば、彼は「所謂、愛國の目的のために人間を北佛蘭西の塹壕に驅り集めて、榴彈の喰物にする刑吏の追捕を辛らくも免かれた人間」でアルプはどうかと云ふに、戰爭の勃發當時、巴里で盛んに愛國運動に參加したのだけれど、軍人や、政治家の、淺薄、殘忍、陋劣なのに愛想をつかして、瑞西に逃げて來た男なのである。

先づかうした連中が「ダダ」の最初の同人なので、時に一九一六年であつた。「ダダ」はその時、寄席の歌ひ手ル・ロア夫人に綽名を付けるためにバルとヒュゼンベックが、字引をひツくりかへしてゐる間に偶然發見したのだと云ふ説もあるが、どちらでも、諸君の好きなやうに解釋して置けばよい、こんなことの病氣を頭痛に惱む天職は大學のプロフェッソルとか、博士とか云ふ人達に任かせて置けばよい。

ダダと未來派と表現派とは相互に交錯してゐるが、未來派や表現派にはなにかしら、固苦しい宣言の文句があつて、ダダのやうに到底自由ではあり得ない。ダダは氣が向けばマリネッチと一緒に、戰線に立つて、カトリックの聖殿を燒き拂らふかも知れないが、又、表現派の舞臺裝置の手傳をもするのである。アルプは巴里で立體派の首領ピカソやブラックと交際して、自然主義脱却の切望を感じてゐた。

「ダダはピストルをポケットに忍ばせて文學をやる人間。ダダは毎日その生命を放棄することが出來るから、生命を愛する。ダダイストにとつては死は一大事である。彼は、今日、いつ何

時、材木が自分の頭の上に倒れかからぬとも限らないと云ふことを考へながら毎日を覺悟する。彼はナイーヴである。大都會の喧騒を愛し、クック旅行か仲介人の大得意であり、ピッタリ閉めた窓掛の蔭で墮胎した赤子を吸取紙で乾かし、粉末にしてモルトカフエを賣り出さうとする墮胎産婆の悪計に通じてゐる。

「誰れでもダダ主義者になれる。ダダは或る一ツの藝術にのみ限られてはゐない。一方の手でキラソウを注ぎ、片ツ方の手で自分の黴菌を握るマンハッタン酒場の給仕人はダダ主義者である。――」

思想を生活(行爲)に轉換する時にのみ、その人は思想の所有者である。

ダダはスチルネルの意味で、立派な現實愛好者である。スチルネルの哲學を藝術に轉換すると、そのままダダ藝術が出來あがる。同時性と騒音とリアリズムの三昧一體から、ダダの精神が蒸發する。「彼は酒と女と誇大廣告とを愛する現實主義の人で、ダダの文化は主として肉體文化である。彼は本能的に獨逸人の空論文化を粉砕することを自己の使命として感じてゐる。

カントもヘーゲルもリッケルトもダダの眼から見れば、腐れトーガンか南瓜の類だ。

たとへば自分が昨日おふくろの横面を張り飛ばしたことと、今しがた往來で交尾してゐる犬を見た時の快感と、三年前に川崎の路次のゴミ箱から、腐つて蛆の湧いてゐる西瓜を嚙つてゐる乞食の顔の醜悪とを同時に意識して、それをそのまま「同時的」に表現したところで、ダダのプリンシプルとしては少しも邪魔にはならないのである。

島田淸次郎の胴體に、豊彦の首をスゲて、天香の衣をきせて、武者小路の下駄を穿かせて、銀座の眞中へ、これは「親鸞上人」の銅像だと云つて、正札をブラ下げて展覧するのはダダ主義者である。

異人の紹介ばかりするのがホンヤク業者のダダではないから、わが若きダダイスト高橋新吉の詩を少しばかり紹介して見やう、辻潤がそれを改作したところも多少あるが、それは「思想や、感情をも共産にする」僕等ダダ派では一向差支ひはないのだ。これは、彼の代表作ではないが、最近の作で、今、手元にあるから、ここに引照すると云ふに過ぎない。題は

高橋新吉

按摩を僕に御嫁さんに世話しやうとした

彼はダダイストであつた
あんまを　ぽ　くに
よめさんに
せ　はしようとしたかれは
老子であつた。
觀自在白痴菩薩
釋迦牟尼如來●
アパロウキテシュバラア・・・

病人は氷嚢を嚙み切るのであつた。
ガーゼを吸はうと、脣をすぼめかす
竹井は根の無い男であつた。
氷のカケラを茶碗に入れて、流しから持つて來て、脣の上に置くと、眞ぐ手を放すので氷のカケラは頰を辷つて、首のネッコへ落るのであつた。
病人はヘラ〱手を動かして、それを上の空で探がすようにする。竹井はそれを拾つて又脣の上へ置く。肩の上へコロガリ落ちる。
昇汞水は二三日は大丈夫ですから、手をお洗ひになる時、捨てないようにして下さい。
付添の看護婦が竹井に云つたのであつた。
病院に行つて若い看護婦が澤山ゐますから腹をヘラして來なさい。病人の細君が出掛けに竹井に云つた。
竹井は廿二であつた。
馬鹿な女　女は皆な馬鹿、みな馬鹿の大明神――
亭主の臨終に　見舞に來た亭主の友人に、亭主の死後、自分と結婚してくれと云はない女は稀れだと竹井は思つた。
竹井は細君の月經のついたねまきを二十日間きてゐた。尻アテが一體に赤くなつてゐたのである。
それを井野と云ふ油畫描きに與れてやると云つて洗濯したのを見ると奇麗になつてゐた。
病人の家に泊つて　病人のやつてゐた仕事を手傳ふやうになつてから　竹井は毎朝××を見るやうになつた。
それはあのネマキの赤色の刺戟によるのではないかと思はれた。
病人には子供がなかつた、細君の弟の子を養女にしてゐた。
「お母さんだぁ――赤くなつてゐるわよ」
敷布にねころがつて女の子は云つた
「なにを云つてるの　蚊を潰したんですよ」

細君にあわてて云つた。

それからまだあつた。

竹井に買つてくれた格子縞のユカタを鋏みでたツて了つてから　細君は「さあしまつた」と云つた。

襟の一部分が赤くなつてゐるのであつた

「戻すことも出來やしないし　まつたく困つちまふわ」細君はタン〳〵それを嗅いでみてゐた。

病人もそこへ仕事から歸へつて來てゐた。熱傷だと云ふことになつた。

「妾洗つてみるわ」

臺所の水道で洗ふと落ちて了つたのである。

竹井は鶴見のDの家へ細君と一緒に出掛けた。それはあんまの一件であつた。Dはゐなかつた。細君はDの家は始めてなので、竹井は細君の家へ來るまで鶴見にゐたのである。

Dと病人とは子供の時分からの友達であつた。

あんまを僕に嫁さんに世話しようとした彼はダダイストであつた。

Dが書いた事にして竹井はDの家へ　こんな葉書を歸へつてから出した。

「Dさんが見えましてね。時々あんまにかゝられたんですよ

それが可笑しんですよ

あんまが済んでから階下へ降りてから　恰度井野さんも來られて　三人で散々からかつたんです。

風呂敷包み一つでもかまはないから僕の所へお嫁さんに來てくれないかと云つたりされたんです。今日わたしがあんまを呼んだ所が貰つて下されば妾嫁つても好いつて云ふんですよ。

二階の硝子戸の屋根の上に桐の葉が青くつて涼しいなんかつて云つて　Dさんがニタ〳〵笑はれるので　あんまさんは誰れでも他人が馬鹿に見えて困るんださうですが、始めはDさんを自分の倍も年上に思つたと云ふんです！」

細君は饒舌つた　Dのお母さんは

「Dはあんな性分ですから　Dの好きにしたつて　わたしはなにも云はない事にしてゐるんですが、眼は開いてゐるんですか？」と云つた。

「開いてゐますとも、器量もそんなにわるくはないし　好く肥つた女です」細君は云つた。

Tada-Dada of Alangri Groriban

竹井はDに遇ひたかつたのである。

細君とは行きも戻りも電車の中で離れてかけた。

ダダは結局、プロレタリアから生れて來たアリストクラチックな藝術家なのである。ヒュルゼンベックがラウル・ハウスマンと共にダダ主義革命本部を伯林に創設して、どんな宣言を發表したかと云へば、その要旨とするところは、徹底共産主義及び私有財産制度の廢止を實施すること、インテリゲンチヤを國費で養ふこと、工業を器械化して勞働者に修養の閑暇を得させること、——等で、最後にはダダ的兩性本部を設立して、ダダに基いて一切の性的關係を整理することである。

ダダを信奉する者は何人でも藝術家になれる。小兒でも老婆でも、それとして、各自が立派な藝術家になり得るのだ。かれ等の持つそのままの材料を使用しさへすればよいのだ。

最後に、もう一ツ、最近讀んだ「一九二五年の休戰期に書かれた一人の貧乏なダダの手記」と云ふ小說の中にあるダダの定義を譯して置く。

「——僕はダダイズムがわれわれの崇高なロマンチシズムの最後の必然なる極限であることを提唱する。ロマンチシズムとは、結局なにか？　それは叡智によつて教唆された約束とは全然相反した、全純な感覺への到來である。理性の法則を侮蔑した肉感的神秘主義だ。その感覺はどうして體驗出來るか？　叫喚によつて。そし、その法悦は？　超絕的沈默によつて。多量の沈默と若干の叫喚——それが僕等の作物である。かくの如くして超人的な、孤寂な赤裸な言葉の解放によつて存在のセセコマシイ殼を爆發させて飛びあがるのである」

これはPierre Mille と云ふ佛蘭西のダダが書いてゐる本である。

諸君がダダになるか、ならないかは諸君の隨意である。だが、諸君がダダになる日には恐らく、諸君の生活意識と思想と感情とエトセトラとの破滅の日であることを覺悟しなければならないだらう。Plns rien! Plusrien!（一九三九年、八月——）

表現主義の精神

村田良策

歐洲最近の藝術思潮に就て第一に表現主義の藝術を擧げるのは多少の非難と早計に過ぎるとの譏を免かれない。第一にこの藝術運動の源流は殆んど歐洲各民族の中に求め得るに拘はらず、本質的にこの名に價する藝術はゲルマン民族的であり、從つてその發展は主として獨逸に於ける藝術運動と限られてゐる。第二に、表現主義的なる藝術が未だ明確な樣式的發展を遂げず、從つて多くの原則的理論の上に整理せられつゝあるに拘はらず、包括的に說明するに困難であり、且つ事實上多くの形式上の分派を區別し得らるるが爲めに、何れを主とすべきかは遽に斷ずることは出來ぬからである

然しながら、それに共通すると考へらるる運動發生の精神及その形式的影響は殆んど全歐に亘つて藝術界を風靡するの勢を示し、ほゞ運動の求心的方向に向ひつゝあることは認めねばならぬと思ふ。特に戰後獨逸を中心とする表現主義的精神は、民族的國家的相違あるに拘はらず、全歐民族の世界觀の中核を貫くものと見做され得るであらう。

勿論この場合表現主義なる字義上の當不當に關しては異論あるは止むを得ない。のみならず、藝術上表現なる語は誤解を誘ひ易い蓋し當初にあつて偶然に用ひられた各種が、主義として發達した後に其內容を正當に擔ひ得ないとは往々ある事である

さて、表現主義の場合に於ては、佛のアンリマチスが屢々自家の創作態度についてこの語を用ひ、佛の畫家エルヴエーが自己の繪に對して冠らせたことに起因するとせられるが、彼等が意識的に主觀的側面强調の意味を持つてゐたとしても、今吾々が云ふところのそれは、第一段に、印象主義に對立する反動の意味に於ける表現主義であり、第二段に、それ自ら形式的發展乃至樣式完成を目標とする表現主義である。

表現の意味を廣義にそしてルーズに解すれば凡ての藝術は表現の藝術と云ふも妨げないであらう。又作家個人の創造主觀の强調を意味するならば過去の個人的作家のみならず、主義として十九世紀初頭の浪曼主義があり、近代に新浪曼主義の藝術がその名に價する。而して、印象主義に對する反動又は改造の意味に於ける表現主義は、ヘルマン、バール共他の人々が數へる如く伊太利に發した未來派佛蘭西を中心とする立體派の如きそれであつて、ロシヤのカンヂンスキー一派と共に吾々が表現派の源流と見做す所のものである。要するに歐洲過去の藝術を說明するキー・ノートたる主觀强調と客觀現實尊重の二つの藝術家對自然の關係の起伏は新らしい內容と姿とを以て今世紀の始め既に繪畫の方面に現はれたが、對源流乃至母胎と見做さるるものは前記の外にセザンヌ、ゴーガン、マチス等南歐ラテン民族

に生れた藝術であつた。獨逸の青年畫家が多く之等の下に集まつたことは表現派の一の修練であつた。之れらの人々がゲルマン民族固有の特色即ち中世紀以來その血脉に傳はり來たつた浪曼的な神秘的な冥想的た傳統的精神と、戰と革命とによつて促された理想主義的精神の自覺が現在のドイツ表現派の精神及その藝術的特色を作つたのである。

即ち第一に間接には、ルネツサンス以來歐洲藝術を支配し來つた自然接近の藝術的態度の拒否であり、從つて藝術的寫實形式の打破開放であつた。第二に直接的には、十九世紀の機械觀的物質文明及び主智主義を呪咀と同時に自然主義印象主義の客觀形式からの開放轉向であつた。

即ち、最初に彼等が取つた經路は、改新、若くは改造にあつたことは云ふまでもない。實際上彼等が參與した前述の藝術運動の影響の下にあつた間は、客觀より主觀への轉向若しくは客觀的形式の改造的努力の時代であつたのである。

ドイツに於ける新藝術の醱酵地はドレスデン及び南獨ミュンヒエンであつた。ドレスデンは夙にドイツ青年畫家が集まつたのが、一九〇六年「ブリュツケ」の名の下に團結し翌年展覽會を開いた。ペヒスタイン、ヘツケル、エルンスト、ルドウイヒ、ヒキルヒネル、シュミツト・ロトルツフ、及びエミイル・ノルデアミエ、オツト・ミュラー等であつた。この後ベルリンに新セセツションの團結を見たが、それらの多くは色の强烈な表出と激情的な殆んど粗野に近い形式を取つた。しかし深い欝積した情緒と神秘的な精神、力への意志を示す點でミュンヒエンに集まつた人々の傾向と異なつてゐた。カンヂンスキーを中心する一派は「新藝術家同盟」（一九〇九）を結び、所謂「ブラウエライター」の一團は多くの外國人の集まりで國際的畫家同盟の觀がある。ロシアからはペヒテイエフ、ヤウレンスキー、マリアンヌ・ウエレフキン。フランス人では、ピカソ、ブラーク、ドラン、ジリュウ、ル・フオコンニエ。獨逸人ではエルブスレー、カーノルト、フランツ・マルク、パウル・クレー、等で多くは全く客觀的形象の遮斷を示す。線、色、曲線を以てする抽象的絕對形式の中に主觀の表出を試みた。

以上の他にマイドナア、又はオーストリヤのオスカア、ココシュカ、ロシヤ人マクス・ハガルも忘れることは出來ないが、ここに注目す可きは、以上の二市に起つた藝術的傾向が表現派の二大分派を形造つたことであつて、同じく感覺的に捕捉せらるる外界自然の物象の再現を目的とせず作家精神的體驗の直接な表出を志すに拘はらず、ミュンヒエンのそれは、自己の精神狀態を色及線の層の中に直觀的を通してのみ精神的興奮の

狀態に誘はしめる手法を取つた。之れに對して、ドレスデン系統のものは、現象の世界を形式的改造又は制限することによつて對象の本質を、精神を、その動力を表現する。即ち對象の單なる外形的意味ではなくして、表現されるものはあらゆる物（ディング）を通じて形而上的に存在する「本質的絕對」神（ゲッテルリッヒエ）的なるものである。自然の形式との類似は存在するが敢て問題としない。作品は主自身として客體としてあらゆるものに止まるが、表現さるる所のものは作家の精神的體驗であつて、同時に作品は精神的興味に誘ふ門戶であり物象を貫く本質的姿である。この表現內容をなすところのものの解釋は全く新らしい、否、プラトン以來流れ來つたイデーであり、フイヒテに於て發展した我の解釋に接近してゐると考へられる。

この二つの傾向の何れを以て本來の樣式的完成に行く表現主義であるかを斷ずるのは恐らく早計に失するが、近來表現主義の死滅を說くものは、その非難の直接の對象を多く形式的に抽象的傾向を追ふところの所謂直接に印象主義の後に反動として起つた未來派もしくは立體派の傾向のそれとする樣に思ふ。而して表現主義精神は死滅し、その藝術は消ゆる運命にあるであらうか。

二

表現主義理論がその直接の對蹠者とする印象主義は、外部的假象から出發して外界自然印象を再現して自然の映像を創出するが故に印象主義者は自然模倣者である。之に對して、表現主義は外的假象を無視し、作家內奥の精神、靈魂から發する感情の表出であり全體驗の表現であると云ふ。然しながらこの解釋は明暸であるが同時に藝術の實際的創造の場合あらゆる意味に於て非難を受く可き芽を含んでゐる。即ち自然模倣を以て印象主義を蔽ふ考は、ゾラの「作家の氣質を通して見られたる自然の一角と云ふ定義の自然の一角にアクセントを置くところから誤られ來つた解釋であつて、自然の印象はそのまゝに再現の不可能なることは云ふまでもなく、而して作家の氣質を主眼とすると解すれば、表現主義が客觀的物質を遮斷すると稱しつゝ事實的に何等かの形式的類似を以て主觀に通ずる門戶、たよりとせしめるものと比較して外形的には正反を示すとは云ひ難い。なほ又印象主義は視覺による印象より出發するとすれば、表現派のあるものは、多くの過去現在の印象の集積から出發すると解するか、或は表象の表現であると解釋せられ得ないこともないであらう、要するにそれが全く正反すると云ふ意味は主觀客觀に對する關係に於て、その哲學的解釋及び一般に世界の二つのタイプの相違の正反であらう。即ち客觀の側に於て繪畫的表出を深

めるか主觀の側に於て主觀を徹底せしめるかの態度上の反對を考へられる。而して主觀的感情の表出の場合外形を絶つて抽象的形式化の中に表現せらるる主觀は單に色又は線及その集積の刺戟によつて單獨に起される生理的興奮又は沈靜の効果がわづかに精神の狀態の限られた範圍もしくは斷片が傳達せられ得るのみに陥り易い。即ち未來派の傾向を持つ抽象的表現主義を以て單たる印象主義に既に存する主觀的側面の極端な發展を遂げたものにすぎないとする所以である。蓋し伊太利の未來派が負ふ可き繪畫的使命は實に當初からあらゆる傳統的な拘束からの離脱及び破壊にあつたのである。若し現代の藝術を以て戰後の歐洲の世界觀乃至社會的狀態を示すものとすれば、未來派は戰前の歐洲文明が陥入る可き大戰後の轉回を豫言したところの藝術と云ふことが出來るであらう。

　而して、音樂的効果を目的とする繪畫にあつても視覺的印象のマッスを時間的系列の中に表現しやうとする無理がその表現の範圍を狹小にすることは疑を入れない。即ち以上の如き者は新印象派の手法の當然な發展として極端な形式破壊を伴ふたものであると見ることを得ると思ふ。之れに反して立體派的藝術は當初から客觀形式の本質的改造であつて主觀に對する客觀の側面を客觀の側に於て徹底せしめんとする精神的な哲學的な脳と神經によつて作られたものである。即ち現實の像をその本源の形式要素に引き戻し再構成するのみならず、觀照の問題を解決して哲學的概念にまで進めるに至つた。即ち空間の概念を思考の根本範疇として繪畫によつて征服しやうとする。空間的物の形成ではなくして、空間そのものの形成である。ピカソの用ひたその方法は「對象をその對象の形式的顯現の根柢に横はる原結晶的要素を彼の獨自の仕方に獨立に働く幻想（イリュウジョン）の中に構成するそれは隠密に働く組織の助けによつて對象と神秘的に基礎づけることである」即ちそこに生ずるものは空間そのものの神秘的な固定化であつて動的な複雜に流動する生命の姿の表現は觀はれない。これを前の未來派の傾向と對比するときより多くより徹底的な印象派的傾向からの解放むしろ理論的實際的な反逆であつた。しか　形式的に考へればこれらのものも印象派殊に後期印象派と同様に自然接近による實質的形式若しくは古典的藝術形式からの解放の藝術であるが、それが多くの影響と要素を表現派に與へた事實は疑ふことが出來ないが、本體から云へば表現派が様式的に全く獨自な形式を取る可き可能はむしろこの他の方面に求む可きであらうと思ふ。即ち北方民族に榮えた藝術即ち憂愁と神秘と深く藏された暗い情熱、藝術であつて、繪畫に於ける表現派に直接するホドラー、ゴーホ、ムンクは本質

的な表現派の父であると云つてもいい。それ等の人々の現實否定虚無爭鬪の精神は受く表現派的精神發現の動力となつたと思ふ。現實自然をあたたかき「母なる地」として親しむことの出來ない精神が不安と苦痛との後に廻避的に神秘にかくれるその間には不斷の自然と精神との爭鬪がなければならぬ。これらの精神の藝術が、自然を母とし、すべての歸る可きあたたかい胸として、その惠の中に生活する民族の藝術と本質的に趣を異にす可きは當然であつて、ギリシヤ、ルネツサンス、佛蘭西古典藝術を流れる精神はむしろ安易な路であつたに相違ない。常に歸る可き自然を持つたことは現實を解釋する餘裕を與へたのである。これに對してわづかに童話的又は神秘的世界にかくれて自然を遠くから觀ひ樂しむのと如何に大きな相違があらうか。即ち一は智的な寫眞的な而して平明安易な特色を常に持つことが出來たに對して、他は情意的な浪漫的な而して暗い爭鬪的な情熱的な道を歩んだのである。即ちラテン民族の中に古典主義自然主義が起つたのに對して北方民族ゲルマン民族の中に浪漫主義、神秘主義が榮えた理由もここにあると思はれる。

この北方の民族を代表するものがゲルマン民族であり古來固有の文化的發展をして來たことを思ふとき、ドイツ表現派が初期南方藝術の影響の下に修練を積みつゝあつた時代はまだ全くそれ自らの藝術的地歩を進んだとは云へない。即ち彼等はムンク、ゴーホ、ストリンドベルヒ、ドストエフスキー等の藝術により多くの親しみと信仰とを感じたことは當然すぎることであつて、この民族的自覺がにはかに戰亂と革命とに刺戟されて遠く祖先の藝術、即ちゴシツク藝術と中世の物語、エル・グレコ、グリューネワルトの藝術、又ははるかにエヂプトを始め東方諸國の藝術に眼を注いだことは後期表現主義の精神に多くの本質的要素を加へたことは疑を容れないことと思ふ。

シツエフラーの說く所によれば、藝術の發生及その發展の經路は自然に對する作家の二つの對立する世界觀を以て說明し得る。ギリシヤ的とゴシツク的と、ギリシヤ的精神は靜寂と幸福の形式を創造し、ゴシツク的精神は不安と苦惱の形式を創造する而してゴシツク精神は單に北方民族に特有ではなく常に何れの時代にも個人にもこの對立は現はれる。ゴシツク的形式の本質は固定化に向ふ法則と規範とにあるのではなくして直接的な表現の力である。然るにギリシヤ的形式は法則と規律の中に本質があり傳統的固定化、鑄型化に陷るのを普通とする。ゴシツク的精神は構成的であり爭鬪的であり表現的であるが故に、自己形式破壞分裂を常に伴ひ、寧ろそこに本質があるが故に、常に新らしい形式の價値要求を示す、不斷の精神の努力、絕對性の希

常に新鮮な意力のシンボルとしての形式を創り出すと云ふのである。彼のこの考は勿論表現主義がその直接な發展であると見彼の所謂ゴシック的精神の汪溢であるとするのである。

ウオリンゲルも人間の本源的美的體驗に二つの相反する態度のあることを提出し一を感情移入の衝動とし、他を抽象衝動とした。即ち創作活動の根本的動力として前者はギリシャ的であり後者はゴシック的であると考へ、後者の中に表現主義をも考へたことは明である。彼は原始民族の藝術を說くに中つて、自然の非組織的な不安なる狀態の中にわづかに自然の一角を抽象し數學的意味に於ける法則性の中に捕へることによつて精神の慰安と美を見出し感情の表出を示すと說いてゐるのは、有力な原始民族の自然に對する悅樂的親和的態度である可きであつたと云ふ論說によつて。支へ難い誤解に本づくとは云へ、不安な感情その表現を抽象的形式の中に放出して美を創造すると云ふ考は表現主義の一面の眞理を說明し得るものであらう。

然しながら、表現主義の外形的特徵は、前述の如く抽象的形式から進んで或は甚だしく歪められた形の中に自然から全く離れた單純を越えて原始的な表出にあるとは云ふものの表現主義の眞の本質はむしろその中に表現せらるる作家の世界觀宇宙的感情の複雜した體驗である。作品はそれ自身として完全な客體たることを要しない一種の無關心な「物」として主觀の表現過程に於ける一の無價値な地位を取るにいたつた。作家の精神的體驗が出發點であり中核である。

我々は作家自身の心の中に入つて始めてその藝術を理解せねばならない。かくの如き觀照に對してはもう過去の美學は何等の說明乃至規範性を持つことが出來ないことは云ふまでもないであらう。

故に、事實として彼等の作品が感情の興奮の爲めに當然形式上の知的構成を爲さぬ自然形式反離の形に於て示さるるが故に表現主義的であると云ふとは、何等かの自然的形式を思ひ起さしめる手がかりを作品の内に見出し得るが故に表現主義的でないと云ふことと同じく、一面の眞理を持ち得ても、眞の表現派藝術鑑とは云へない。直ちに作家の個性的主觀に一致すること、彼と共に絕對への追求を目標とし「萬能の精神のみが眞の人間を作る」と云ふ眞理に味到して始めて新らしい鑑賞の路が開けるのである。この點からグラウトフの云ふ樣に、主觀的感情意志を主とする藝術的形式打破乃至抽象化の方向を取ることが近代繪畫發展の經路であると云ふことに對して信を置くとしても、本來の表現主義がそれとして一の價値ある樣式構成に向ふ方向は形式の點からのみ觀る時にはさほどの重要さを持たぬ

いであらう。況んやその抽象化の方向が繪畫の音樂化的傾向に進められる可能性は心理學的證明を俟つまでもなく誤れる道である現在の表現派が事實的に自然的形式を全く遮斷する、しないを問題とせずして、一に精神の純化と、理想の追求を努力する傾向、即ち「形而上的、超絶的なるものの啓示 として象徴の藝術に努力しつゝあることは正に當然なる様式發展と云はねばならぬと思ふ。この方向に於てのみ彼等が目的は達せられ、完全な感情の傳達、主觀の深化擴張の範圍があり得ると同時に、時代に獨立に發達した様式完成が得らるゝと思ふ。

以上の主觀の意味、及びその能動的な宗教的感情には、社會國家に關する表現派の主張は一層強く文學的方面に強く表現せられてゐるがここにその暇を持たぬ。唯フェルヂナンド・リオンの言葉を引いて置く。

『彼等は寫實主義の如くブルジョア的でもなく、自然主義の如く社會主義的勞働者でもない。況んや皮相な唯美主義者では勿論ない。且つ表現主義者は個人的な幸福と權利を目的とするものでもない。唯彼等は集團(マッセ)を知るのみである。「我(オスイッヒ)」から生れ出たところの國家主義者であると同時に亦共産主義者でもある』(了)

——八月八日——

印象主義の概念について

渡邊吉治

繪畫上に於いて同じく印象派と云つても、その概念の意味のとり方に依つて、それは様々なる事實を限定することになる、いま次に少しく印象なる概念を論理的に分析し、以て近代作畫上の印象主義の事實が如何なる意味の印象概念の下に成立してゐるかを跡にしてみようとおもふ。もとよりこゝに印象なる概念を分析するといつてもそれは、あくまで論理的分析であつて心理的分析でないことはいふまでもない。心理的分析はこゝには問題とならない、

抑も印象とは少くともある客觀がある主觀の上に及ぼすある効果に他ならぬ。卽ちこれは客觀的方面からみれば積極的、能働的効果であり、これを主觀的方面からみれば、消極的、受働的効果である。

こゝに主觀、客觀の問題が生じて來る。凡そ主觀、客觀の對立は三樣の意味に於いて考へることができる。

第一は生理的主觀とこれに對立する客觀である。卽ち我々が自己の身體を主觀と見てそれ以外ものを客觀とする場合である。第二は心理的主觀とこれに對立する客觀である。卽ち我々が自己の心理を主觀と見てそれ以外のものを客觀とする場合である。第三は論理的主觀とこれに對立する客觀である。卽ち我々が或は生理的主觀　見或は心理的主觀と觀ずる底のその最後のものを主觀と見てそれ以外のものを客觀とする場合である。されば第一、第二の場合に於ける主觀は內容的事實として存在するものであり、第三の場合に於ける主觀は形式的要求として考へらるゝものである。我々は主觀の各概念を或はこれらの複合せしものとして考へらるゝ場合があるとしても、その窮極の各方向を考へて分類するならばこの三樣の主觀の定立以外に考ふることはできず、從つてまたこれより他に主觀、客觀の對立を考ふることはできぬのである。

扨然らばいまこゝに問題とする印象主義の主觀はそのいづれの意味の主觀であるか。先づこれを第一の生理的主觀とするか、それは我々の生理上に及ぼすそれ以外のもの卽ちそれ以外の自然の効果を印象と稱する場合である。いまこれを繪畫上に於いてその意味を考へるならば、それは自然が視感覺に及ぼす効果に他ならぬのであるから、もしこの意味の印象を主義とする流派があるならば、それは全く受働的機械的の態度であつて、近代の所謂新印象主義の繪畫がこれに屬するものである。それが調色板の上に色彩の統一を企てずに畫布の上に、自然のまゝの色彩を並列し、觀者をして新なる統一をせしめるといふ彼等の主張に至つて最もその面目を明にしてゐるである。

次に第二の心理的主觀とするか、それは我々の心理上に及ぼす自然の効果を印象と稱する場合であるから、これを繪畫上に於いてその意味を考ふるならば、それは自然が感情に及ぼす効果を印象として、これを主張する近代の印象主義の繪畫であると考へることができる。卽ちそれは同じく受働的であるが、その主觀が單に生理的、感覺的に止らず、それらが複合して成すところの感情にまで至つてゐる故に、これは前者に比して有機的であるといふことができる、けれどもそれは結局受働的態度に終局するに止る。

更に第三の論理的主觀とするか、それは我々の要求によつて自然を規定してゆく場合であるから、客觀が主觀の內容を成するといふ意味に於いては、なほそれを印象と稱することができるかもしれぬが、その內容を成す客觀がすでに主觀に　へられたものでなく、主觀によつて規定されたるもの、生產されたるもの要求されたるものといふ意味に於いては前二者の意味に於ける印象とはその類を異にし、寧ろこれに對立するものである。いまこれを繪畫上に於いてその意味を求めるとすれば、作家の要求に從つて自然を構成してゆくところの所謂後期印象主義の繪畫であらう。セザンヌが實在といふのもこの要求せられたる自然に他ならぬ。

故に第一、第二、の印象主義に對してこの第三の印象主義は相對立するものであつてむしろそれは表現主義とも稱せらるべきものである。

かく觀じ來れば、近代の所謂印象主義なる概念は第二の心理的主觀を基調としてゐる點に於いて一歩更らに機械化すれば新印象主義に隨し、一步更に有機化すれば後期印象主義に轉ずる過程にあるものとみることができる。美術史的に觀て印象主義の後に新印象主義が現れ、轉じて後期印象主義が現れたといふこともまた自然の徑程であらう。

附記—印象主義については誰も知らぬものはないほど知れきつてゐることですから事更めて書くこともなく、先は右まで私一個の見地からその概念分析を大雜把にやつてみたまでなのです。

監獄部屋批判

監獄部屋の文化

山川均

（一）

『監獄部屋』の問題が、新聞紙上を賑はした。監獄部屋のことはこれまで幾度びも、新聞や雜誌に書かれたことがある。ところが不思議にも、今日まで大した問題となつたことがない。世間の人は、餘りに現代文化の皮相とかけはなれた監獄部屋の話を聞いても、殆んどあり得可からざること、殆んど信じ得可からざること――若し左樣な事實があつたとしても、それは自分の生活してゐる社會と交渉のない、星の世界か月の世界にまでもある事くらいに感じてゐたらしい。そして世間の人々が、餘りの事といふ感じを利用して、警察や政府の役人などは、憶面もなく、そんな事實は無いなど丶云つてゐた。

この世間の無關心のうちに、毎年何百人乃至は何千人かの同胞は、監獄部屋に送られてゐた。そして或者は健康と體力の最後の殘りまで搾取され、僅かに生き殘つてゐる者も、人間らしい感情最後の面影までも破壊されてゐる。或者は病氣の爲に斃れ、或者は撲殺された。そして僅かに少數の者が、絶望的の冒險を試みて辛うじて逃がれて歸つて來た。私は現に其一人から、其の冒險談を聞いたことがある。彼は最後に悲壯な聲で斯う云つた。若し北海道の鐵道沿線を發掘したら、死骸を詰めたセメントの容器が、幾つ轉ろがつて出るか分らない！

先頃、私の雜誌の讀者から貰つた手紙の一節に、斯う書いてあつた。

『六月中旬の或日、東海道の或る驛でお辨當を買つたら、ナプキン代りに添へてある紙に『汽車の教訓』と題して、こんなあやに畏い名吟が載つてゐました。

『日本最初の鐵道を、しかせ給ひし人や誰、鐵道省か諸會社か、土ほる工夫か否、否、否、

こは天皇のみわざにて、線路の直き道ふみて、機關の熱心世に盡し、烟高くも名をあぐる、汽車の教訓知らざるや、されば乘る人乘らる人、共にみめぐみ感謝して、明治神宮ふしおがめ』

特急列車の柔かいシートの上から、明治神宮を伏し拜む時、是等の敬虔な人々は、鐵道の枕木××××××××××××××××××××××××××××××××××××.

（二）

『監獄部屋』は北海道特有の制度のように思はれてゐたが、決してそうでないことは、今度の信越水力電氣會社の工事に於ける朝鮮人虐殺事件を見ても分る。また總ての鑛山には、監獄部屋ではないが監獄部屋と殆んど選ぶところのない制度が行はれて居る。私の今一人の友人は、九州の或る炭礦に賣り飛ばされたことがある。彼れが二度目に賣られた時には、辛うじて武裝した監視人の目を盜んで、進行中の列車の窓から飛び降りて逃がれて來た。

多くの人々――現代文化の生活を樂んでゐる多くの人々は、監獄部屋の話を聞いて驚くに相違ない。けれども製糸工場や紡績工場の寄宿舍が、少くとも其の原則に於て果して、どれほど監獄部屋と異るであらうか。彼等も亦た事實に於て監禁せられて居る。彼等も亦た、、、、、稱する武裝した監視人によつて監視せられて居る。彼等も亦た健康と幸福と青春の血に最後の一滴まで搾取せられ、美しい情緒の最後に名殘りまで破壞せられて居る。そしてセメントの空樽に入れて埋めるだけの手數と費用も掛らぬように、僅かの旅費を當てがつて――乃至は當てがはないで――療養と稱して郷里に送り還されて居る。試みに紡績工場のある附近の停車場に行つて見よ、搾取し盡された殘骸を無形のセメントの空樽に詰め込んで歸里に送り還される同僚を送る數人の女工が、三等待合室の片隅で泣いてゐるのを見ることは屢々である。

監獄部屋と寄宿舍制度が畢竟程度の相異であるように、寄宿舍制度と『自由な』工場勞働者との間の差異も、決して性質の差異　原則の差異ではなくて、程度の差異である。監獄部屋でなぶり殺しにすることは、ブルジョア文化の謳歌者にも、野蠻な行動である。鑛山の事務所や人事係の詰所に備へ附けてある樫の木の角棒で坑夫を撲り殺すことは、ブルジョア文化の謳歌者には、之に較らべると稍々文明、、、、、、、、、。寄宿舍で二ケ年間に妙齢の小女なし崩しに殺すことは　大に文明、、

、、、あゝ。更に飢餓賃銀で勞働者の體力を十年乃至十五ケ年間に消耗し、其の負擔の全額を勞働者に負はしめる制度に至つては、監獄部屋で撲殺された本人が、自辯でセメント樽を買つて來て、自分で穴を掘つて自分を土にかけるに均しい自働的な——從つて最も文明×××××ある——

ブルジョア文化謳歌者の目にも、寄宿舍制度　比して監獄部屋の撲殺が一層野蠻的に見へるのは、進歩した資本主義の生產は、最早や原則として、斯ような奴隷勞働を必要條件としなくないたからである。そして無形の監獄部屋に繋がれてゐる賃銀勞働者の生活が、彼等の目に公平な雇傭形態に見へるのは、資本主義の利潤は現に主として、斯ような賃銀制度によつて搾取せられて居るからである。資本主義の最新の必要に應ずること、之を名づけて文化的の生活と云ふ。若しブルジア文化の根底を洞見する、獨立の思考力を備へた人があるならば、現代文化の一切の上部構造は、、、、、——乃至は、、、、、、よつて代表せられる原則の上に立つて居ることを、觀取するに相違ない。現代 生活は擴大された、、、、、、ある。吾々の傍には、、、した監視人が立つて居る——

（三）

最近、監獄部屋の問題は、多少世間の注意を引いて居る。若し之が、此の制度を緩和する多少の刺戟ともなれば固より幸ひである。けれども信濃川事件について警保局長の談話なるものを讀むと、『將來監獄部屋取締については、內鮮を問はず人道上の重大事であるので、徹底的の取締をしてゐるが……』云々とある。政府の『徹底的の取締』の下に、監獄部屋のその怪事は今日に至るまで、殆んど公然の事實として存し、其の行動は多くの場合、政府によつて公認せられて居るかの如き觀を呈してゐた。現に炭坑に於ける警察權と警察の取締りなるものが、どんなものであるかは、女工寄宿舍の請負巡査が、どんなものであるかほどに周知の事實である。既に『徹底的の取締』をしてゐる政府の自發的の取締りに、これ以上の期待をしたならば、恐らく失望に終るだらう。

月並の勞働運動は、今日迄のところでは、尙ほ此種の問題に多くの力を割くことが出來なかつた。然しながら組合運動の實力が充實して來るにつれ、監獄部屋問題の如きも、必ずや近き將來に組合運動の重大問題となるに相違ない。鮮人勞働者の問題も其通りであつて、信濃川虐殺事件は別としても、現に鮮人勞働者が特殊の待遇を受けて居ることは事實である。彼等は同一の勞働に對して、決して同一に報酬を得て居らぬ。之は日本の勞働階級に取つて經濟上の脅威であるばかりでなく、勞働

階級の階級的意識の許されぬことである。日本の勞働組合運動『共同戰線』の成立する時は、決して遠くないだらう。

（八月十三日）

が朝鮮の同胞の爲に權利の要求をし、日本の資產階級と朝鮮の資產階級との間に、資本の、、、、、、、、、、とに對する

監獄部屋の眞相

東京市勞働紹介所　曾山義彦

近時監獄部屋の問題が高調されて來たことは我國勞働界特に自由勞働者界のため、寔に喜ぶべき現象である。

彼等幾萬の同胞が早曉三時頃から、初宵の七八時頃に至るまで、たゞでさへ暮せない昨今九十五六度の暑苦しい炎天下に晒されて　牛馬の如く酷視虐遇されてゐる奴隷的狀態を考へさせられる時に、私はこの問題を徒らに「流行化」せしめず、此機會に於て、よりつよく其の悲慘な内面生活を忠實に報道すると共に識者の眞摯な批判に訴へて、これが改善の機運を促進して欲しいと思ふものである。

一體監獄部屋といふ名は單純な勞働者の頭から自然に創出された言葉で

一、鐵鎖に拘束されつゝ勞役に服する囚徒と二、これが脫走を監視する四隅の見張所の狀態に擬へて名付けられたのであるが、其正視するに忍びない悲慘な日常生活は正にこれ人生の活地獄であり一大人權蹂躙である。曾て京都に豚小屋事件なるものがあつた。當時の新聞雜誌は筆をそろへて其非人道を糺斷し盡した。然るに二十數年來同じ我が同胞が名も恐はしい監獄部屋に白晝奴隷に等しい人身賣買により、意志なき勞働を強制せられてそこに飽くなき人權蹂躙の行爲が繰り返されてゐるに拘らず、識者があまりに冷淡であり過ぎたために彼等が乘じて益々常習的になり世人の感覺を鈍らしつゝあることは事實である。

今日の監獄部屋の本場は何と云つても北海道である。就中宗谷線、十勝線、斜里線、昭明線など北海道に於ける鐵道建設工事を始めとし東北の羽越南線工事猪苗代鬼怒川の水力電氣工事、其他恐らく未開地に建設せらるゝ水電、鐵道工事など凡てこの活地獄を演出してゐるのであるが之等に要する勞力がまた擧げて東京及大阪を中心として毎年五月乃至八月中大都市から移送せらるゝのであるから都人士、殊に都會生活の敗殘者は周到の注意と自戒力が必要であらうと思ふ。

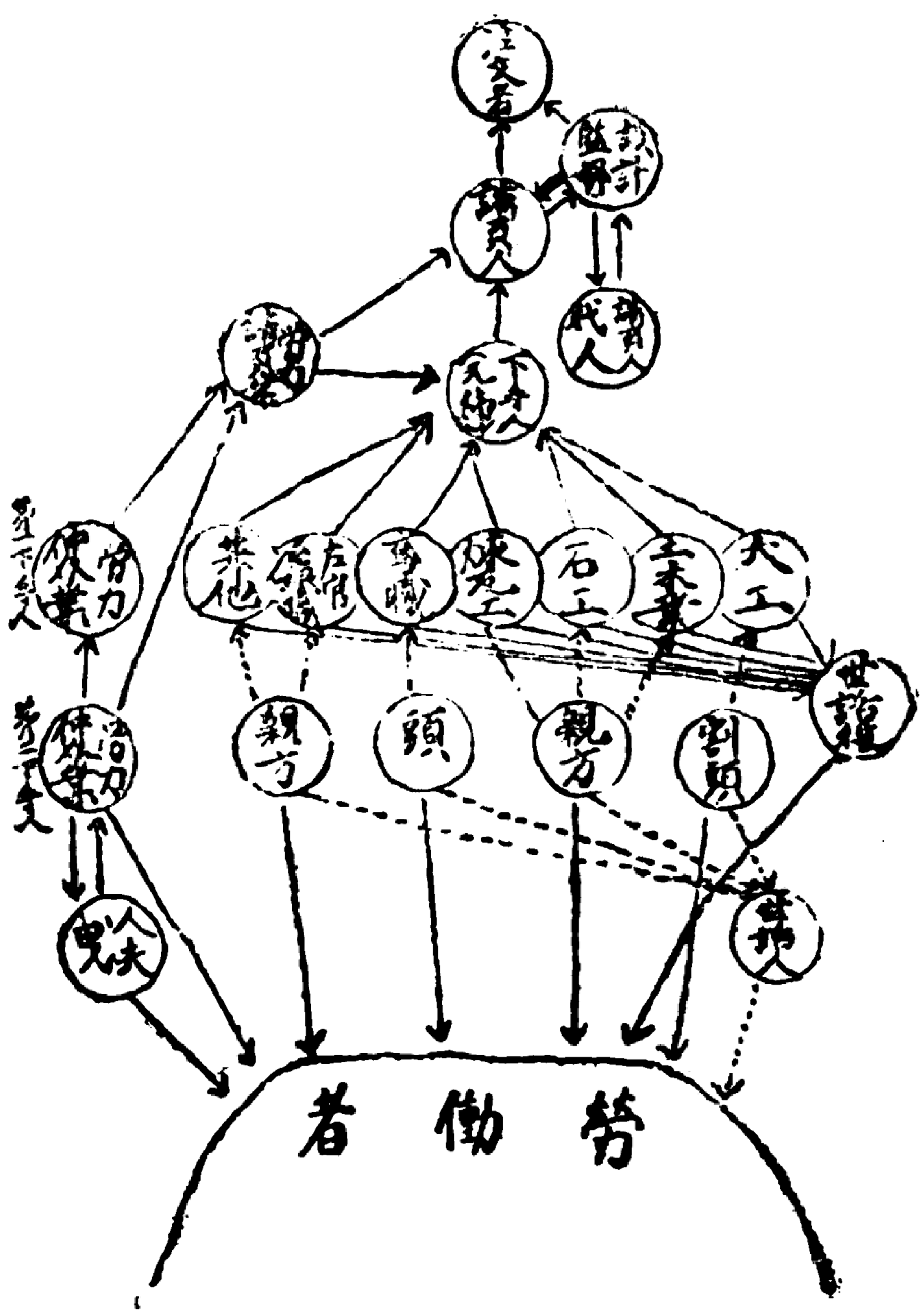
併し冬中は何れも供給者が雪國だけに工事も自然中止の狀態になるので募集も中絶することになるから、御心配は無用である。

私は今其の勞力の移送狀態を系統圖で示して見たい。であるが玆では東京方面に就て詳細に述べる他は大同小異であるから省略することにする。

圖に示すが如く東京市内に於ける勞力の需給は多くの場合各職業別に親方若しくは世話役の手を經て供給され時に熟練工の如き勞力仲介業の手を煩すこと稀であるが、監獄部屋行きの人夫に限つて全然勞力請負業の手に委してそれが二段三段と仲介業者の手を經て各工事現場に供給せらるゝことになつてゐる。随つて其間多少請負單價（一人に付）の差違は免れないのである。讀者諸君は市内特に淺草下谷方面で

北海道行
山形鐵道行　人夫募集　何々組
旅費支度金一切貸します

といふ立看板を御覧になるであらう。之等は主として三流（段）所ろの仲介業者に屬し東京方面で請負人と稱する部類は、淺草



田島町八四の遠藤榮吉芝崎町一〇、竹内直太郎・神吉町四一沼部興三五郎（利根水力專門）田島町一〇一山口八太郎下谷區車坂九三坂田組萬年町一ノ一八平野アキ事山崎啓三入谷町二八一城下善吉などで就中遠藤組坂田組山崎組が請負人の鑑札を有し他は何れも裏を潜つて營業してゐるものである。

之等各供給業者の住居は概して二階建で階上に應募者を收容し階下には屈强な帳場と云つて受付け係りが其逃走を警戒してゐる。其他三人乃至七八人の人夫曳きを置いてあるが、彼等は毎日淺草上野芝の公園など浮浪者の出入繁き場所に鵜の眼鷹の眼で餌を漁つてゐる。

若し前夜野宿でもした樣な浮浪人があれば寄り添つていろんな世間話にまぎらして、其急所を捕へ。飯屋なり或は酒場に誘き込んで下味酒の一杯も御馳走して置いて扨て愈々本音を吹き出し巧言以て是が非でも陷れる、例へば當人が洋服職工だとすれば。

「俺は山形縣で床やをやつてゐるが、近頃時勢が進んで猫も杓子も洋服でなければ通らない世の中となつて、鐵道員や役場員學校の先生といふ風に洋服の需要は滅切り增えたので、今君が山形へいつて洋服やでも開業するものならば、俺等でさへ月百圓以上の收入があるんだから、君位の技術を持つてゐれば月二三百圓の收入は確實だ俺も洋服職人を一人頼まれてゐるんだが君行かないか、なまじ東京で食ふや喰はずにゐるよりも、二三ケ月田舍へ辛抱してきたら、今度東京に來ても資本は充分だし……君迷ふことはない行かうぢやないか」

とサモ金のなる木が塵界の中に植付けてでもあるやうに吹聽する。釣られるものも、話半分に見積つてもといふ虛榮と相自分目下の境遇から話が纏ることになると、人夫曳きに案内されて愈賣買が始まるのであるが此場で人夫曳は請負金額の半額を受取ることになつてゐる賣買値段も距離の遠近に從ひ多少の差違がある（例えば東京から北海道へ行くのと、大阪から護送されるものと違ふやうに。）が現今の相場

重なる供給地	請負人請負金額	第一下手人請負金額	第二下手人請負金額	人夫曳請負金額
北海道北部	一六〇円	九五圓	大阪 六五圓	三五圓
同 南部	一四〇	九〇圓	大阪 六五圓	三五圓
樺太	一八〇	一〇〇圓	大阪 七〇圓	三五圓
羽越 北 南線 中	六〇	三五圓		一五圓

猪苗代水力	三五	二五圓	八圓
鬼怒川水力	二五	一五圓	五圓
信越水力	三五	二五圓	八圓
利根水力	三五	二五圓	八圓
伊那電鐵	三五	二五圓	八圓

に依つて賣買される譯であるが、誘惑された御當人はソンナこと〻は知らないから、喜んで二階に案內されたが最後出入を嚴禁し仲間が定數に達したら、所定供給地の土木工場へ移送されることになる。

愈出發前になると所轄警察所に出頭し點檢を受け契約書と對照して乘車させるのであるが、玆に見逃すべからざる事實は、契約書に記名したものだけ（特に勞働意思の存否に付き臨檢するのであるから意志の確實なもの〻み）の點檢を了へ、不合格底のものは沿線通過驛まで先發せしめ途中から乘車させることである。だから上野出發の際は二十人を數へたのが、到着驛には二倍三倍の人員が下車するといふ常習的滑稽な現象である。それで乘車間際の混雜を見込んで誘拐した人夫曳きが停車場（プラットホーム）に監視し、發車の信號と同時に人夫曳請負金額の殘額を授受することに依つて其責任は免れるのである。乘車中はボギー車の前後出入口に二名宛中に一名合計五名の護送員が見張りをして脫走飛降りなどを警戒し到着驛に着車すると、現場から。迎へに來た屈强な荒男と共に現場まで護送し引渡しが濟めば契約の請負金額を授受して歸京する仕組で引き渡された募集人は早速仕事に引出されることになるのであるが、最初から勞働契約で來たものは不思議はないが、事務員とか學校の先生洋服や帳付けなどとかたられた浮浪人は話の相違から親方に强談するが。

「ソンナ事はお前を伴れて來た人に云へ」玆は仕事する所だからサツサと仕事にか〻れば可いのだ」と劍もホロロの强壓に移送者の來るまでと意志なき勞働を强制されて泣寢入りに了るのであるが、何しろ朝の三時には叩き起され初宵まで監視付きで勞働するのであるから移送者に逢へる機會もなく六ケ月間殆んど無報酬で働くことになるのである。中には矢も楯も堪らず命がけで斷崖から飛び下り又急流に飛び込んで生死不明になつたといふ例は少くない。

そこで仕方なく〱賣買された人夫は供給人自身が作製拇印した契約證

自分義失職し求職に百方奔走セルモ保證人ナキ爲メ就職口ニ困リ申候場合土工夫トシテ勞働ニ從事スルハ自分ニ最モ適セルモノト信ジ貴殿ニ仲介並ニ保證ヲ相願別紙契約書及添書

ノ各條項ヲ承諾ノ上申込候然ル上ハ契約締結後ハ貴殿ニ對シ
些ノ御迷惑相掛ケザル事ヲ誓ヒ申候

十一年五月三日　池川藤智

遠藤久四郎殿

契約添書

金九圓七十錢

右金員ハ拙者被雇候爲メ相掛リ候ハ正ニ相認メ申候付テハ別紙期間勤務滿了致候時ハ貴殿ニ於テ負擔セラレ若シ期間中ニ解雇相願候節ハ拙者ニ於テ即時辨償仕可候爲后日一札添書致置候

十一年五月五日　池川藤智

殿

內　汽車賃	參圓六〇〇
紹介手數料立替金	貳六〇〇
滊車食料二日間	貳〇〇〇
途中辨當料	五〇〇
醫師診斷書	壹〇〇〇
合計九圓七〇錢	

池川藤智殿

診斷書

池川藤智

明治三十四年八月十四日生

右ノ者身體强壯ニシテ勞働ニ堪エ得ルモノト診斷候也

大正十一年五月五日

東京市本所區中鄉元町二十四番地

醫師　內藤永弘

契約證

自分儀今般貴殿請負ニ係ル福島縣長瀞水電工事ニ土工トシテ雇傭被下候ニ付キ左記ノ事項契約仕候

一、勞働ノ種類及場所ハ貴殿ノ指定ニ從ヒ可申候

一、賃金ハ一日金壹圓廿錢ヨリ金貳圓マデ但シ時間ノ長短自己ノ勞働程度ニヨリテ其賃金ヲ增減スルコトアルベシ

一、賄料ハ一日金六拾錢ヨリ金七拾錢トス但物價ノ變動ニ依リ右範圍ニテ定メラルコト

一、期間ハ百八十日間ト定メ萬一事故有之期限中途ニシテ御解雇相願場合ハ被雇地ヨリ現場到着マデニ要セシ實費ハ一時ニ返金可致ハ勿論其解雇ヨリ生ズル損害トモ無論拙者ニ於テ辨償可仕候

一、契約期間ヲ誠實ニ稼働シタル時ハ賞與トシテ金壹圓以上

五圓以下ヲ給與被下候事

右契約締結致候上ハ被雇地帶在中ヲ始メ現場乘り込途中ニ依ラズ貴殿ノ指揮ニ服從シ且ツ現場到着ノ上ハ何事ニ依ラズ貴殿若クハ各現場代理人ノ御指圖ニ從ヒ誠實ニ相働キ決シテ自儘ノ行爲等致間敷候依テ爲後日本證差入候也

大正十一年五月四日

山梨縣西八代郡山保村字爲田二五七六

本人　池川藤智　拇印

明治三十四年八月十四日生

取扱所　勞友會本部

殿

に從い滿六ケ月間自由を拘束されることになるといふのは契約賃金壹圓貳拾錢以上の規定は但書によつて壹圓内外の支拂形式に變更され隨て一日分の收入は

一、賄料　七十錢

一、夜具代　五錢

一、供給請負金參拾五圓ノ内濟金二十錢

合計九拾五錢

で殘額一日五錢大の男が一日炎天に晒されて一ケ月たつた壹圓五拾錢の收入とは情ない。

それに奇怪な事は支拂が日拂でなく、毎月十五日締切り翌月十五日迄會計と稱して一ケ月分を預金して支拂はれる約束であるが、僅か一圓五十錢の高貴な汗の所得が全然支拂はれてゐないことである。

或地方では俗に山札と稱する

四寸　二寸五分

仕事高	壹百個
右記載數量ニ對シ工賃金壹圓也支拂可申候也　……組	

三寸　一寸八分

仕事高	拾個
右記載數量ニ對シ工賃金拾錢也支拂可申候也　……組	

三寸五分　二寸二分

仕事高	五拾個
右記載數量ニ對シ工賃金五拾錢也支拂可申候也　……組	

金券を發行して氣脈相通じた指定商人から日用品に限り購買させてゐるが、これは滿期の勞働者或は工事地沿線の農業勞働者　出人夫と呼ぶ）に代用されてゐる外契約中の人夫は殆んど金券の面さへ拜むことが出來ずに解傭されるものが多い。

斯くの如く何れの部屋でも、勞働者に現金を有せることを嚴禁し、契約滿期後は僅かに金券を發行して其場を償つてゐる。加之滿期後に於て解傭を願ひ出で、支拂ひを請求しても、言を左右に托して、現金と交換しない。已むを得ず、喰ふや喰はず

で、命から〳〵逃げ出すことになるのであるそれにこの場合見張りで誰何突返されることも珍らしくない。

各部屋では煙草、酒、足袋、草鞋などの日用品を諸色(シヨシヤ)と言つて勞働者に販賣してゐるが煙草の外は市價より二三割方高く賣つてゐるやうである。結局り、保管稅や運賃などを見積つたものでこれは姐御の收入になるものらしい。

以上の契約書を讀んでも勞働者が何處からもグーの音一つ出ない樣に虐使を恣にされてゐることは移送の事實に見ても明かであるが、一步踏み入つて其日常生活に立つたならば、誰か戰慄しないものがあらう。

以下少しく述べて見よう。何れの監獄べやでも五人乃至七人に一人の世話役が監視して使役し期間中は全然休暇を與へられない。如何なる病人重患と雖も他 見せしめの爲めといふので晴雨に拘らず、午前三時──四時には勞役に引出若し手を休め或はサボり氣味に見えると遠慮なく威嚇す蹴る打つ三拍子で責め立てる。午前九時(ヨツ飯)正午(晝飯)及午後三時(ハツ飯)の三回一個一合位 鹽をつけた握り飯を食べさせる外全然、日中休憩時間といふものがない。(親方に云はせると、副食物をつけると水 呑むからチブスや赤痢に罹り易いからこれが衛生的ですと嘯いてゐる)そして夕宵足許の黃昏る丶時刻に終役を宣して堀立て小屋(俗に部屋といふ)に引揚げ內部より鍵を下ろして夕食をとらせることになる。茲で一寸部屋の構造を說明しておかう

食事も契約中のものには下飯臺と稱して作業衣のまゝ立食させ其他の者(多く世話役)は上飯臺と稱して入浴後疊の上に普通チヤブ臺を据えて食べるのであるが、下飯臺には無味乾燥の月並〻の

一、朝食　飯、　汁(若女又ハ切干)　漬　物(俗に玉子燒と稱し黃い澤庵)

一、午食　鹽付握飯

一、夕食(下)飯　鹽引(二寸四分一)　又ハ生味噌、豆味噌一種　澤庵

鹽引、煮〆、　澤庵

(上)飯　酒一合

又ハ生味噌、豆味噌、

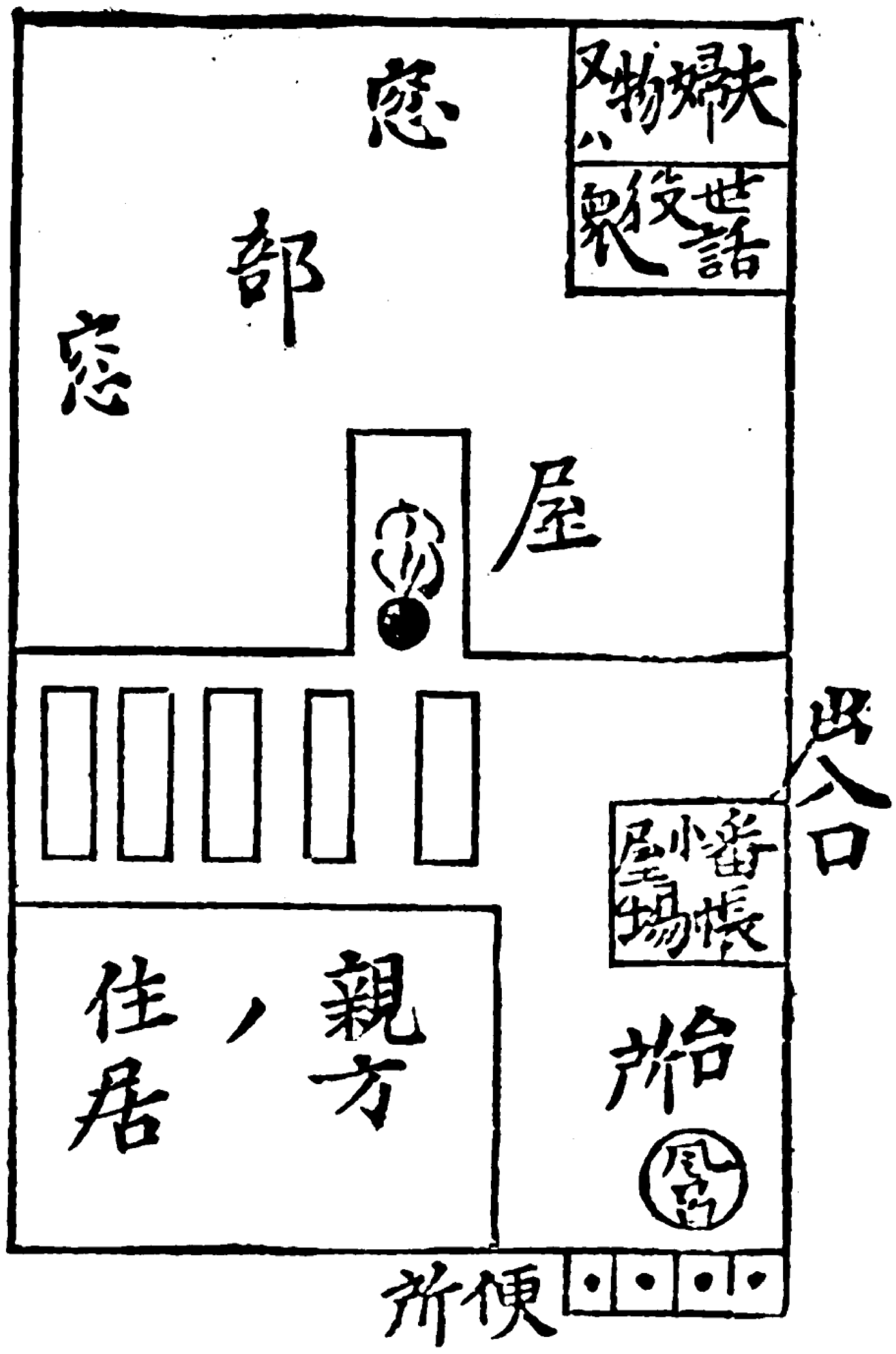
で上飯臺の食事は一日の勞苦を寛ぐるには充分な待遇であつて、酒や諸色は隨意に請求が出來ることになつてゐる。

勞働作業中以外と雖も募集人夫は世話役の命は絕對服從で、若し反抗でもすると生血の滲むほど打擲されるのは勿論である

茲で一寸部屋の構造を說明しておかう

部屋は丸太の掘立て小屋で、工業の進捗に從つて浮草の樣に

轉々する仕組みになつて何れも入口に九尺四方の帳場と稱する見張り所があつて夜番の寢所に當てられてゐる。出入口は總建坪六十坪乃至八十坪であるのに僅かに三尺の切戸口が一つあるのみで、他は二ケ所三尺四方の格子窓から採光するのであるから稍薄暗く室内は至つて不衞生的である、其構造は概して一樣で略圖を以て示せば



の如く夜間（終役後）は内部より錠を下ろして外出を禁じてゐる。是に於て面白いことは、日は忘れたが東京日々新聞紙上に監獄部屋の大親分橋本組の理事長をしてゐる西方某の談として「是等勞働者の中には遊蕩者や無賴漢がかなり多く之の手合が土地附近の婦女を害し又家畜や耕作物を荒した事も多く、山形縣あたりでは土工のため蒙る夥しき害に鑑み地方警察署の達示で監獄部屋を設け夜間の外出を禁止した」と闊々しく語つてゐる。荒男が婦女を辱し耕作物云々に至つては拘禁の一口實に過ぎないものを土地官憲が之を指示して監獄部屋を設けさしたに至つては、余りに非肉すぎるではないか」已に夜間の拘禁は公然の事實として掩ふ事は出來なくなつた。けれども作業中一朝逃走を企てたものがあると該世話役に他の人夫を見張小屋に幽閉し外より錠を下ろし防止しておいて親方に注進すると、

「物[illegible]進め」

とばかり旅費五圓乃至十圓を與へて追跡せしめる。そこで取捕へられたら此世の眞の活地獄……眞裸（マッパダカ）にして飯臺の上に寢かせ四肢を細引にてしばりつけ、監視用の世話役の樫の燻し杖で、半死半生に打ち撲り自由を失つた頃奥から姐御（主婦）が出て狂言的に仲裁役を勤める、病人は縛を解かれて直ぐ勞役場に引づり出すその慘たらさ加減を見せ付けられてどうして涙含まないで居られようか。北海道あたりで常に生傷が絶えないのも無理はないことである。玆に最も悲哀なものは病人の始末である。普通の病人は休暇も與へられないが、尤も進行の脚氣患

者、チブス患者で起居不自由なるものにならうと、俗に下部屋と稱する病室へ投げ込まれる。或地方では醫療の設備がないではないが、大やう、診療はおろか、尾籠な話しだが屎尿を床の上に洩らしたと云つては、半死の病人を猫と間違へて顔をなすり付け折監するなど死ねよがしの虐待を發揮する。迚も正視はすることは出來ない。而して死亡者があれば（毎日一人——二人は死ぬが）セメント空樽に詰め込んで所定の墓地に半病人の同僚に始末させる實に見る眼を掩はしめる事である。

斯うした悲劇が大正の照代にあるべき筈がないと思はれるかも知れないが、事實であるから遺憾である。

內地に於ける監獄部屋では手荒いこととこそ爲ないが、まづ五十歩百歩と見て差支へない。

已に斯ういふ悲慘な事實が展開されてゐる以上、吾々は對岸の火災視してはならない。此機に於てこれが撲滅にむかつて、識者の正統な改善策を希望して止まないものである

最後私は個人として之が改善の小見を述べさして貰ひたい。これが解決と云つて、姑息的でなく根本より大手術を施さねば、小康を得た病人に等しく何の效果のないことは勿論であるが、昨今頻々として新聞紙上に報道せらるる都會青年の誘拐事件に尠からず教訓を得たが、まづ第一に現行請負制度の改善は急務である。

近代資本主義の余弊である競爭入札は、雄辯に此事を物語つてゐる。といふのは、各諸官省の工事豫算と、請負金額との差違が、余りに高すぎるため、行き懸り上請負人は、無責任な施工をする。隨て多少此場合苦痛を感ずるものは第二第三の下手人（實際施工者）であるから。豫算も或程度まで縮少せしめる必要もあらうが。請負人の責任感を强くさせる爲めに、豫算の一割とか五分以内に於ける最低入札者に請負はしむる法規を制定することなども必要であらう。そして請負いは工事及材料のみにとゞめ、勞力は全然直營とすることと現行請負人の指定、認可を今少しく吟味して其資格を制限し品位を高くすることである。

その他末葉な現行法規を時代に適合する様改廢することゝし第二に民營の紹介業者を全廢し國立又は公立の勞働紹介所に於て需給の調節を司り勞力を供給紹介せしめ、若くは對的雇傭契約により直接雇傭するとにしたら効果は充分あらうと思ふ。

大體この二項に含まれてゐると思ふが、無智單純な自由勞働者の自覺も資本者側の反省も素より必要には違ゐないが、こうしたとに實際携はつてゐる吾々でさへも前途遼遠の感を强くしつゝあるものであるから、差當り、自由勞働者に望む前に、人間としての待遇を怠らないといふ資本者の一大覺醒を促して止まないものである。

監獄部屋の話

宮島資夫

監獄部屋の事を書けと云はれても、私自身はまだあの、悲惨とか息苦しいとか云ふ字では追つきさうもない、死と云ふものゝたゞ一歩手前にその日々をあへぎあへぎ送つてゐるやうな生活を、實際に暮して見た事はないのだから、監獄部屋の眞相を誤りなく具體的に書くことは出來ないのだ。然し私の過去の流浪の生活の途上に於て、幾度か職を失い、飢に襲はれて、燒けほてつた砂埃の立つ町を跣足で眞黒になつた下駄がぬら〱して脱げさうになる奴を、拇指を蛸にして町から町へとあてもなく職業を探して歩いてゐた頃には、薄汚い　の角や、ボロ家の羽目板に『北海道行人夫募集、日給食費外八十五錢、周旋口』などゝ下手な字で半紙に書いて貼りつけたのを眺める度に、どれほど引きつけられたか知れない事である。

實際その頃の勞働者の賃金と云へば、石炭擔ぎをしても慣れない中は四十錢か五十錢、人夫になれば三十五錢がきまりであつた。部屋住の土方の出面と云のが、一日十五錢か二十錢である。それが、食料以外に八十五錢くれると云へば、誰でも一寸行きたくなるのは當然だ。それぱかりではない私なぞは、東京にゐて爲す事々に失敗ばかりを重ねてゐる。この砂埃のひどいせゝこましい町で、薄汚い姿をして歩いてゐれば、見る眼聞く耳には出來さうもない事の刺激ばかり多く、知人に逢へば輕蔑されて、たゞ自分で自分の心をすり減らすばかりであつた。そんな時にはまだ見ないが、北海道の雄大な自然の中で、默々として働いてゐたら、どんなにか自分の心が安まるのだらうと思ふのだつた。同じ北海道にあるトラピストの話は聞いてゐたが、酒も煙草ものめないやうな不自由な世界には私は行かうとも思はなかつた。それほどの不自由な苦しい思ひを堪え忍んで行く人々は、此の人生にまだ本當に絶望し切つた人人は私には思はれない。彼等は矢張り自分の生に、又た未來の世界に何かの光を認めてゐればこそ、あんな難行苦行も出來るのだらうが、希望も光明も失ひ果てゝしまつた者は、それだけの苦痛を忍ぶだ

けの張合すらなくなつてしまつてゐるのだ。たゞ自分のこの身を、焼き切るやうな日にも曝せ、荒浪に揉れて岩の角にでもたゝきつけろ、氷の上にでも寢そべつて燒けるやうな思ひを抱いたまゝ凍え死んでゝもしたが好い、とそんな風な考へが、幾度か私を誘惑したのであつた。

　十八九の時に激しい失戀をやつゝけて、外國船へ乘るつもりで横濱へ出かけて行つて、眼が惡いためにはねられて　ハトバ人足の試驗に落第して、三日も飯を食はないで、空腹を抱えてふらふら歩いて歸つて來た時だつた。眞夏の日は頭の上で燃えるやうにかん〳〵照りつけてゐるし、街道筋の燒け砂は歩くたびに煙のやうに輕く立つては足の汗にべと〳〵とこびりついた。

　私は疲れ切つて鶴見の畷の松の木蔭で草の上に寢そべつてゐた。やがて私のそばに、田舍者らしい二人の青年が腰を下した。その時、最初に東京の方から歩いて來て、私達の仲間に入つたのは、今考へればどこかの請負師から出されてゐる人引と云ふ奴に違いなかつた。その男は私にマッチを貸してくれと云つて、煙草に火をつけて、それから何か喋舌り出さうとする時に、また東京の方から、いやに泥臭くにやけた男が二人やつて來た。そしてその二人もまた私達の仲間に入つて型の如くマッチの火を借りて草原に腰を下したのである。その二人と云ふのは話をしてゐる中に、旅廻りの改良劍舞だと云ふ事が解つた。土方と改良劍舞と、田舍出の青年と、靑く痩せこけた私が鶴見の稲田を背景として松の木蔭に圓くなつて座つた所を考へると、何の事はない喜劇の黎明のやうな有様である。

　やがて改良劍舞と土方とは交互に私達を自分の仲間に引き込まうとして、色々と喋舌り始めた。私は今その話を長々と書き立てゝゐる余裕はないが、改良劍舞はかう云つた。『それでも君、田舍を廻つて興業して歩いてゐるとね、村の娘や後家さんが惚れるんで、思ひもかけない拾ひものをする事があるんだ。僕達の仲間で、田舍の財産家に婿に入つて立派になつてゐる奴さへあるよ。それでなくつたつて、何しろ女は取り放題だ。ぶらぶら田舍を歩きながら、行く先々で女に持てるんだからね、こんな面白い商賣はないよ』とつまり女がいくらでも出來ると云ふ事を、繰り返し繰り返し私達に聞かせては、どうかして自分の仲間に引き込まうと勸めてゐた。すると土方は、

『俺の方の商賣は、一度盃を貰つちまへば、あとはもう、何處の土地を歩いたつて、寢る事と喰ふ事にや困りやしねえ、さうしてお前いつどんな甘え仕事にぶつかつて、立派な請負師になれるんだか解りやしねえ、俺はそれから横濱へ一寸寄つて、それから甲州へ行かうと思つてゐるんだが、どうだい誰か俺と一

緒に行かねえか、なに途中なんか俺と行きや困る事ありやしねえ』と、盃を貰つて親分を持てば一宿一飯はついて歩く事と、すぐにも大きな請負師になれるような事を云つて私達をそゝのかした。けれども土方の仲間に入つて、盃を貰えるまでにだつて、どれほどつまらない苦勞をしなければならない事か、一人前の土方になれた所で、請負師などゝ云ふものにならうと思ふのは、砂原で眞珠を探すより骨の折れる偶然の事だと云ふ事は、私がその後土方の生活を親しくして見て覺えのある事だ。けれども兎に角その時の私は、彼等の話を身に泌みて聞いてゐるには、自分の心が余り痛みすぎてゐた。土方にでも改良劍舞にでも、自分がなりたければ自分でなるだけだと思つてゐたので、默つて煙草ばかりぷかく吹かして、やがて少し汗が引くと、

『左樣なら』と云つて立ち上つた。彼等も『どら行かう』と云つて出掛けたが、田舍出の二人の青年は、

『俺も横濱の方さ行くのだから』と云つて、彼等と一緒に、向て燒けた砂道をぽくくと歩いて行つた。改良劍舞になつたか、甲州區の監獄部屋にでも引きずり込まれたか知らと、私はその時の事を思ひ出す度に考へる。

その後も職を失ひ、餓に襲れる度毎に、北海道行人夫の廣告に幾度か心を引かれ、思ひ切つて、北海道から千島邊、遠く樺太でも露西亞でも、あの何となく眞暗な感じのする世界を流浪して歩きたいと思つた事は度々あつたが、いつの間にか急場の事に追はれ、飯を喰ふのに忙しくつて、北海道へも遂に行かずにしまつたが、あの廣告が、監獄部屋へ連れて行く爲にはられたものであることや、監獄部屋の生活が、どんなに無慘なものであるかと云ふ事は、私が土方部屋へ落ち込んでから、秋田と云ふ仲間の男に聞いた話であつた。そしてその時の私はもう何事に對しても興味を失ひ切るまでに絶望し切つてゐた當時ではあつたが、その話を聞いた瞬間には、ひよろくになつてゐた自分が監獄部屋に行かなかつた事を、どれだけ自分が祝福したか知らなかつた。けれどもその度にはまた、果しもなく續く希望も光もない生活の退屈に堪えかねて、一層その監獄部屋へでも進んで出かけて、心から勇んで生きて行く氣になれるか、或ひはその苦痛にまけて打ちのめされて死んでしまふか、二つに一つの道を取りたいと心に思つて萃してゐたが、ひよつとした事から監獄部屋に行くよりも、より苦しい境地にどしんと落ちて、私は漸く、自分で自分を生かさうと云ふ氣になるようになつたのであつた。

こんな譯で私はまだ行つた事はないが、北海道行人夫募集の

貼札が、監獄部屋行の甘い餌だと云ふ事を知らない以前から、またそれを知つてからも、監獄部屋については、心の中でかなり縁深く暮して來た。その後大正四年頃、大杉君や吉川守邦君荒畑君なぞと共に『勞働者』と云ふ今で云へば小さなリーフレツトを出した時に、私は監獄部屋に行つた人の話を聞いて掲せた事がある。そしてその雜誌を市中に撒いて歩いた所が、ある區にゐた郵便局の集配人が、私の所にやつて來て、自分の故郷は千葉縣だが、毎年春になると土方風の男がやつて來て、北海道へ行けばえらい金儲があると云つて、大勢若い者を引つ張つて行く。さうして向うへ行つてからは、かなり苦しい目に會ふと云ふ話だが、その眞相はよく解らなかつた。所がこの雜誌を見て、こんな酷い目に會ふと云ふ事をはじめて知つたので、急いで故郷の若い者に知らせてやりたいから、もう二三十部くれと云つて、そのリーフレツトを澤山持つて行つた事があつた。監獄部屋の事は、その頃からも北海道ばかりでなく、鬼怒川の水電工事や、ずつと以前の水戸聯隊工事などでも隨分無惨な話を色々と聞いたり調べたりしてゐたが、警察ではそんな事を一向取締らうともしないばかりか、浮浪人撲滅の一策位としか見てゐないらしい。外國で一人の男が死んでも正義の戰を起したり、ニコライエフスクで虐殺されたのか知つてゐて見殺をしたのかすると、翌々日の新聞には、サガレンを占領しなければ同胞の安定が保てないと云ふ傍から、サガレンの富源を喋々する程に恥知らずの政府である。勞働者の二百人や三百人が年々監獄部屋で虐殺された所で、知らん顔をして濟す位は平氣でやれる事だらう。

私が聞いたその人の話と云ふのは、

大正二年の夏頃にその男も職に離れて苦んでゐる時に、眼についたのが矢張例の貼札だ。下谷の方にゐる小松組とか何とかで、日給は八十錢、食費は別と云ふ甘い口に乘せられて遂行く氣になつてしまつた。その時の同勢は四十五人あつたと云ふ事だ。請負師の手許までこの人間を一人連れて行くと、その頃でも費用萬端で三四十圓は貰えたさうである。途中の汽車賃や宿泊料を引いても、人引と口入屋の手には十五圓や二十圓は殘るように出來てゐたさうだ、彼等が凡ゆる危險を冒して內地で活躍するのも、こんな甘い事があるからである。

さて假にこの男の名をUとしておくが、Uは出立の日までの二三日は、下谷の小松組の二階で暮してゐた。その時聞いた話は何も彼も甘い事づくめで、雪のぼつ〲降り初める頃までは仕事が出來るから、それまで働けば、歸りには小商內の資本位は間違ひなく出來る位に彼自身もすつかり信じてゐたので

つた。實際その頃の八十錢と云へば今の二圓五十錢位には當るだらう。向うで飯を喰はせてくれて、それだけの金を毎日貰つて、寂しい處で暮してゐたら、金が殘らなければならない筈である。Uはすつかり喜んで上野から四十五人の仲間と共に汽車に乘つてしまつたのだ。處が東京を離れるに從つて、監督の男の待遇はだん／＼嚴重に峻しくなつて來る。Uもそろ／＼不審を心に抱き始めてゐたが、青森から連絡船に乘つた時、同じ船に乘つてゐた婆さんがUの一行を見て、『あゝまた監獄部屋へ皆が死にゝ行くのか、いやな事だ』とつぶやいたのを誰か小耳にはさんで、青くなつて一同に話をしたのであつた。それからは船の中であつちこつちに寄合つて逃げ出す相談をした處が、東京で疊屋の職人をしてゐたと云ふ男が『よしそれなら室蘭へ着いたら俺が警察へ馳け込んで皆を助けてやる』と引受けたので、一同はその男に一切を任せてしまつた。室蘭の宿屋へ泊つた晩に疊屋は、夜中にそつと宿を拔け出したが、小松組と宿屋とはちやんと連絡がついてゐるので、宿屋の者がそれを目附けると、警察まで行かない中に、自轉車で追附かれて、皆の前へ引張つて來て息もつけなくなるまで袋叩きにされてしまつた。そしてその翌日からは疊屋は一行と別にされてしまつたので、その後の生死も判らなくなつてしまつた。

翌日は室蘭から足別まで引張つて行かれた。さうして向ふへ着くと東京からの旅費合計十八圓と云ふものをいやおうもなく借金證文にされてしまつた。今なら五十圓位となるだらう。Uが行つた工事場は足別から下福良まで、空知川に沿つた短距離連絡の工事であつた。同じような仲間は五六百人位はゐたが、皆なUと同じように欺されて來た連中である。元請の下部屋と云ふのが十位あつて、各部屋に五十人位づゝゐる。その人夫五人に一人位づゝ、腰に短銃をさげ手に六尺棒を持つた棒頭がついてゐて仕事の監督をするのだ。朝の四時から晩の六時までを焼つけるような炎天の下でシヤベルや鶴嘴を持つて働かされる。一寸でも怠ければ六尺棒が頭へ飛んで來るのだが、あえぎ／＼働いて苦痛を堪えなくなつて、擲られるのも覺悟で腰を下すこともあつたさうだ。夜になつて歸ると、荒格子の小舍に入れられて、表てから錠を下されてしまふ。何一つ自由と云ふものはない境涯だ。食事と云へば三度三度、南京米に麥を交ぜた飯に鹽辛い味噌汁か生味噌より外には何も與えられない。それで一日の食費が向ふ扶持所が三十錢取られるのだ。それに日給は八十錢と云つたのも嘘の皮で四十五錢乃至五十錢である。働くには必要な草鞋が一足十錢も取られるのだから、金の殘る余裕などありようはなく、自分の身を縛るような借金が後から／＼殖

えるばかりだ。最初行つた四十五人の同勢の中でも、脚氣や營養不良で死んで行く者がぼつ／＼出て來る。東京では可なり暴れた人間でも、もう全く萎れて別人のようになつてしまうのだつた。Uの一行の中にゐた柔道二段を誇つてゐた男も、二月と經ない中に脚氣で死んでしまつた。こんな風だから死を決して脫走する者は續々と出る。然し向ふの準備も整つてゐる『そら逃げたつ』と云ふ聲が出ると、棒頭共は馬に乘つて要所要所を固めてしまふので、逃げ得る道は深い山へ向つた方ばかりである。もし捉まつて部屋へ歸れば梁へ逆吊しにして大の男が五六人して、代る／＼に棒で叩き擲るか、簀卷にして水桶の中へ漬けられる。身體の強い者で昏倒するのだし、弱い者はそれ切りに參つてしまふのだ。滿足に逃げうせても一方は空知川の急流であり、一方は果しもなく續いた山だ。山路に深く迷い込んだ人間が餓え斃れた死骸のある所へ行くと、あとから行つたものも、一時に氣拔がすると見えて、同じ場所に、幾多の死骸が、並んでゐると云ふ事である。Uはその夏の夕仕事場から歸つて來る時、自分の隣りにゐた男ががつくりと倒れたので、馳け寄つて介抱しようとすると、『余計な事をするな』と棒頭に擲られて止むなくそのまゝ部屋に歸つて來たが、その翌日から斃れた男の姿は見えなかつた。こんな風にして夏から秋へかけて、死の苦を重ねた末、雪の降り初める冬になると、着物一枚持たない人達は、その部屋から情なく追い出されてしまふのだ。Uはその年の秋、故鄉に賴んで旅費を送つて貰つて辛ふじて東京まで歸つたが彼等の運命の大部分は、工事場で死ぬか脫走し捕まつて斃れるか、冬になつて凍死するかである。かうして北海道ばかりでも年々幾百幾千と云ふ人は、無慘に亡びて行くのである。然も政府は、こんな事は平然として默殺して幾年か以前から年々續けられてゐるのである。恐らくサンガー夫人以上の人足調節策とでも心得てゐるのだらう。全く不思議な事である。

監獄部屋の感想

澤田正夫

一

今日の經濟組織の下に在つて、その諸企業が多く、企業營利を目的とする私人的生產、私人的分配である以上、夫等生產及分配が、これを爲す私人一箇の獨立した營利の打算に依つて行はれるのは當然で然も仕方のない事である。であるから、經濟組織に資本主義的色彩が濃厚となればなる程、搾取のために準備せられてある一群の人々の悲慘な狀態は益々增大して行く。そんな事がよしやその企業者たる一私人の耳に入つても、そんな事に心を傾けて居たら營利主義の競爭の激甚な世の中に於て直ぐに外の人達に追ひ越されて了ふから問題にもしないのである。

さうした極度の勞働從つて過度の搾取のために勞働者は、絕えず疲弊し困憊し、かてゝ加へて、何時又、企業家自身の失敗から、或は企業家自身の他の利得の途を得た事によつてからか、失業の憂目を見なければならぬと云ふ不安の中に、夫等多くの原因から次第にその人達が或は疾病に冒され、或は無氣力な、反撥力のない人となり、低能となつて、同じ階級の人々の足下に蹂躙せられてゆく、

然も無產者であるが故に永久にその境遇から脫する事を得ず、固い鐵鎖に引づられ、引張られて酷使され、個々器械の掃除のため製綿機の下に入つた女工が髮を器械に卷き込まれて慘死したり、或はベルトに引込まれて腕を切斷されたり、今日多くの悲慘な事實を新聞紙は報知してくれる。

資本主義の生產行程の主導的動機や決定的目標が勞働力の出來得る限り大きな搾取である限り、被搾取者等がかゝる境遇に在るのも、それは仕方ない事かも知れぬ。

二

監獄部屋或は地獄部屋と云ふのは丁度この縮圖のやうなもので、その形態も內容も單純で原始的である丈、殘忍の程度も分りがいゝと思ふ。

既に資本主義生産が數量生産であり且結果本位の方便主義であると等しく、この監獄部屋の制度は、その最も簡單な例である。

約定期日までに、或はその期日以前に出來る丈少ない人を出來る丈使つて、そして、所定の結果を得たいと云ふのであるから、熱狂的な致富衝動に燃え立つてゐる當路の人々の頭には、夫の勞働要具（彼等は全然たる勞働要具である）が約定期間さへもてばそれでいゝのである。幸ひにして約定期間になつてもその要具が磨滅する事なければ再び新しい方面に使用出來るし摩滅し盡したものは、もうそれなりと考へてゐる。

全く吸血鬼と云はうか、かのマルクスが（以下譯文は高畠氏に依る「その吸血鬼式な渴望に於て、單に勞働日の道德的極限をばかりでなく、また其純物理的な極限をも踏み越えるのである。それは身體の成長、發達及健全なる維持の爲めの時間を橫領する。其れは自由な空氣及日光の消費に必要なる時間を奪ひ取る。食事時間を値切りとりそれを生產行程その者に併合して了ふ。と同時に「生命力の蒐集、恢復及更新に必要な熟睡をば「絕對に精の盡きた一の有機物の復活と必要欠く可からざる丈の時間數の無感覺狀態に縮約して了」ふ許りでなく果ては「その尋常の道德的及肉體的な發達上並ひに活動上の諸條件を奪はれる人間勞働力の萎縮を產出し、且勞働力そのものゝ尚早的な竭盡及壞死を產出」すると云つて十八世紀後半の英國の勞働狀態を觀察した言は、丁度この監獄部屋の狀態にあてはまるものである。

然らば何故にかゝる制度が、法律上に於ては平等の人格を認められ、人は他人から徒らに傷害を受ける事より保護せられ、國際的には勞働は商品に非ずと承認せられて居る今日、かゝる奇怪な事が行はれて居るかと云へば、前にも云つた通り、今日の經濟組織が資本主義的のものであり、總ての企業が私人の手に委ねられて居るからである。且資本主義の惡弊は驅つて人を物質過重の功利主義に墮し、金を所有する事が啻に經濟上のみならず法制上にも政治上にも支配力を有する事が出來るからである。

三

北海道の漁業はその漁獲物の性質上多く季節的のものであるから、その季節には非常な繁忙を觀るけれども、それが終れば定住漁業者を除く外は多くは季節的に失業する譯である。殊にそれは漁物の繁華な後志・天鹽の海岸から石狩の邊りに多く、そのの季節に監獄部屋をつくらうと云ふ請負師等の眼も光る譯である。請負師や腹心どもの巧妙なる手段で買ひ取られたら最後、

もう健康な身體で、金を蓄へて又季節に漁場へ歸らうと云ふのは無理な事で、彼等は我慢に我慢して、親方に認められ、同じ部屋の棒頭になるに非んば、多くは、もう何する事も出來ぬ病身者になるか勞働無能力者となつて了ふ。

とにかく誘拐された人々は一日一圓三十錢で多くの場合三ケ月間位の雇傭契約が結ばれる。(鐵道工事とか外の仕事の監獄部屋だと、その契約期間がもつと長いかもしれぬが、私の行つた丁國などは九月にはもう霜を見る位であるから仕事の性質から云つても期間は極く短かい)斷つて置くが私はこの土工募集に東京から誘拐されたのではない、東京の人が北海道へ行つて仕事を探して居る中にこの手にかゝつた人もあつたけれど、それは極く少數で、大部分は漁夫だつた。私は外の牧場で出面取りと云ふ日傭ひになつてゐてあとでそこへ行つたので期間も短かつた。

仕事の種類は雜草の刈込みだつた。その牧場の雜草十幾萬貫かを約定の三ケ月間に刈るのでその爲めに、三つ四つの監獄部屋が設けられてあつた。

雜草と云つても、生やさしいものではなかつた。殆ど原始林に近い森林の、六七尺もある雜草を凄い鎌でザーツ〳〵と刈つては〳〵一把にして行くのである。

私の行つた時はもう大分刈り込みも過ぎた頃だつたが、小屋の中には七十人許りの、漁場から買取られた物凄い男達が、眼許り光らして寢込ろがつて天を見てゐた。あの眞黒な、張り切れる樣な肉付でゐながら、眼はトロリとして、見るからに元氣はない。小屋へ入るなり恐ろしくて堪らなかつた。

朝四時に「野郎!」と云ふ物凄い聲がした。私はその前から眠られぬ夜を考へてゐたが、七十人許りの者は獸類のやうにノソノソと起き出した。薄い〳〵蒲團をはね除けて、皆は上眼で棒頭の方を見乍ら、物も云はず食卓についた。そこには三尺もあらう直徑の大鍋には、名許りの味噌汁と僅かのみが浮いて居たその他は、アイヌの女(これが飯場の女である)が持つて來た僅かの香の物だつた。

十分もしたかと思ふと又怒鳴り聲が聞えた。皆は棒頭から鎌と砥石を貰つて小屋の外にドツカと腰を下ろして砥ぎ初めた。

仕事の現場は小屋から約一里ある森林だつた。アイヌの女から玉蜀黍のうでたのを幾本か宛貰つて、默つて一列、一列となつて牛の樣に歩るき出す。その一列は十人位で、それに一人の棒頭が附く譯である。

現場へ着くと、褌一つの男達は、凄い程默つて、ザクザクと刈り込みを初めた。少しでも怠けたり、腰を伸ばしたりすれば

棒頭の棒が宙に鳴る！
　陽も通らぬ様な森林の中で、棒頭に撲られ、強迫され乍ら、晝休みの一時間を除いて、働き通しに八時頃まで働く。八時と云へば星の輝く時もあつた。又一里以上の道を默つて、痛い足を引づり乍ら默つて一團となつて歸つて行く。もう飯も何も要らない。小屋へ歸れば誰もかれも、上張り一枚の板の間にゴロりとなる。
　こんな酷使と虐待に甘んじて何故逃げないんだらう？　私は疲れ切つた身體を然も隠れる様に小さくなつて寢込ろび乍ら考へた。
　併し矢張り逃げられない。第一に同志を見出す事が出來ない。お互ひは仕事してる時も、小屋にゐる時も棒頭の眼の光つてるところでは話が出來ない。しかも毎日仕事に出る時の一團の組成員は必ず毎々變更される。
　幸ひ「逃げやうか」「ヨシ」と眼と心で合圖して相談が纏つても、彼等には、ソレ逃げたと云つて見張りの棒頭が大勢馬で追ひかけるであらうその時の用意をしなければならぬ。發見せられて殺されるか或は返り討にするか、考へる丈でも恐ろしい事だ。
　私はその監獄部屋を放り出されて〇町へ來る途中幾度か、あそこの部屋の奴が逃げて二人殺されたとか、一人まんまと逃げたさうだとか、冒險小説のやうな事を聞かされた事を覺えて居る。
　ぢや金を拂つて出たらいゝぢやないか？
　その金のありやう筈はない。一日一圓三十錢、その中四十錢は何の理窟なしに親方と棒頭に棒引されて了ふ、殘る九十錢の中から食料四十五錢を引けば、殘るは四十五錢だ。しかも仕事に出るには足袋が要る。三日に一つは穿き破れるとしてそれを買ふ丈にも不足してゐるのに、彼等は漁場から誘拐されて、其所へ來る迄に、或は饗應を受け、或は汽車に乘つけられて積り積つた多額の借金がある！　それを返却するには、石だらけの荒い雜草林を足袋なしで働かねばならぬ。腹が痛んでも藥にのめぬ。衰れ行く身體を何もせずに居なければならぬ。その苦しさ、辛らさが堪え得るものであらうか？　知りつゝも前借を多くして了ふ所以である。

四

　實に、エンゲルスの言葉を藉りて云へば（譯文は高畠氏に依る）彼等の殘忍な生活、悲惨な勞苦は「シシフアスの勞働にも似てゐる。勞働の荷は、シ、フアスの轉ばし上ぐる岩石の如く絶えず疲勞し切つた勞働者のところへ落ちて來る」！　然も堪

え切れないで、多くは、病身となつて突き放され、怪我をして追ひ出されやがては廢殘者となつて行く。

社會組織の欠陥が生み出した人々を、やれ無智なるが故に、貧乏なるが故に、低能なるが故にと一言で葬つて了つてこの悲慘な事實を、同じ土を踏んだ兄弟達が看過して置く事が出來やうか。

北海道の鐵道請負工事をやつて巨萬の致富をした××組が徹頭徹尾、監獄部屋をやつたと云ふ事も、北海道の人の噂に上る事だし、二三日前の新聞に、都下の某大藥舗が、「弊舗は嘗て地獄部屋に關係した事はない」と云ふ廣告を紙面の大半を割いてゐるのを見ても、その監獄部屋が單に請負師の仕事である許りでなく、もつと大規模に大企業家がやつてゐる事も承認出來やう。

監獄部屋問題批判

荒畑寒村

×

謂ゆる監獄部屋の問題に就ては、僕も新聞や雜誌の記事で散見するのみで、特に深く知つて居る譯でも、別に研究した譯でもない。然し、そう云ふ殆んど上つ面の事しか解らぬやうな新聞雜誌の記事に依て見るも、監獄部屋と云ふものが如何に殘虐非道を極めて居るか、如何に横暴壓制を極めて居るかが知られるのである。二十世紀文明の今日に在つて、猶且つ斯の如き制度が存在し、斯の如き事實が公行されて居ると云ふことは、殆んど信ずるに苦しむ程である。勞働者、就中、主として失業者が公然帝都に於て大仕掛に賣はれ、更に一と纒め若干で賣り渡され、そして詐欺と暴力とに依て再び浮ぶ瀬のない苦役劇勞のドン底に突き落される。

或は北海道の奥地に、或は東北の山中に、鑛山の坑内に、水電の谷底に、無限地獄の如き苦界慘境に呻吟しながら、訴ふる

に處なくして血潮を絞つて居る同胞がいくらあるだらうか。警察も彼等の身命を保護しない。法律も彼等の權利を保證しない政府も彼等の自由を擁護しない。新聞も雜誌も只だ一回の記事、若くは讀み物としての以上には、また彼等に如何なる注意顧慮をも拂はんとはしない。

斯の如き重大な社會問題が、今日まで全く等閑に附せられて居たのは、固より個人のみを責めるべき事柄ではない。鐵道が敷設され、水力電氣が起り、石炭や銅鐵の採掘輸送が便になれば、その利益を受くる者は社會全體である。然もその文明の發達、社會的福祉の擴張の裏面に、斯の如き悲慘にして高價なる犧牲が拂はれて居ながら、猶且つ何人も之れが救濟と防遏とに努力しなかつたと云ふのは、社會的罪惡に非ずして何であるか。社會全體の責任に非ずして何であるか。

勿論、これが直接當面の責任者は、或はその鑛業會社であり、或はその水力電氣會社であり、或は鐵道省であり、或はその監督官廳である。彼等は自己の直接に利益を得て居る事業內に、若くはその直接の責任ある官廳內に、斯の如き不法と不正とが行はれて居るのに對して、知らぬ存ぜぬでは濟まされない。吾人は彼等が此の奴隷賣買業者とグルであり、その裏面の保護者であり、その表面の默認者であり、その血塗れ金の分配者であるとの非難彈劾に對して、斷じて彼等の辯解を許さない。

然しながら、彼等を非難し彈劾するのみで、吾々の責任が除れた譯ではない。監獄部屋の事實、此の恐る可き制度、此の野蠻なる組織的奴隷賣買が、社會の耳目に觸れて以來幾年ぞ。然も今日まで、斯の如き殘虐非道なる罪惡の公行するが儘に委ねて、また一言、痛烈なる義憤の聲を擧げなかつたのは、畢竟社會の責任である。救濟し、矯治し、阻止し、防遏すべき責任者をしてその責任を盡さしめず、幾萬哀々たる同胞をして、無告の慘境に疾苦せしめたる責任は、君等と僕等との負ふべきものである。吾人は此の問題が、單に本誌一回の讀み物たるに止まらずして、之に依て何等か具體的の矯治方法が講ぜられ、組織的に此の民惡の防止手段が講ぜられん事を望む。そして之は亦此の問題を取り上げたる本誌が、その公刊機關として社會に負ふべき當然の義務であると信ずる。

×

斯く云へばとて、僕は固よりこれだけで、此の問題が根本的に解決されるものとは信じない。監獄部屋の存在も、勞力を商品として取扱ひ、人間を生産原料の一部として取扱ひ、その剩余價値の掠奪搾取を基本根柢として居る、資本主義社會制度の一現象に外ならぬのである。從つて、斯の如き社會制度が根本

的に改革せられざる限り、此の種の問題は解決される筈がない。只だ監獄部屋はその最も代表的なものであり、その最惡なる典型であり、その極端なる一例として、即刻の阻止防遏を要すると云ふに止まるのである。

たとへば、今日、監獄部屋の記事を讀む者は、必ずや産業革命の黎明期に於ける英國の幼年徒弟制度、謂ゆる近世英國の奴隷制なるものを想起するに違ひない。

近代的工場が初めて建てられた時、家內工業制度の下の貧しい家族生活に馴れて居た兩親は、その子供を工場に送る事を以て殆んど不名譽と心得て居た。『女工』と云ふ名稱は若い女に對する最大の侮辱と考へられ、一たび工場に働らいた女はもう他に勤める事が出來なかつた位である。實に當時の勞働者がその妻や子女を工場に働らかせるに至つたのは、彼等の賃銀が謂ゆる飢餓水準（スターヴェーション・レベル）まで削減さるゝに至つて、初めて行はれた所であつた。然し工場主は勞力が必要である、就中、安い勞力が必要である。そこで彼等は、英蘭各地の救貧區內に在る貧民子弟をば、新しい仕事を見習はせる徒弟にすると云ふ口實で、組織的に貧民の監視人と共謀して徒弟を募つた。

工場主が選拔した子供達は、荷車又は運河の小舟で各々その行先地に送られ、そして其處へ著いたが最後、もう其の瞬間から奴隷にされて了つたのである。時には正規の運送者が、子供達を工場地に輸送して工場主に引渡すこと、アメリカの奴隷市場に行はれた所と毫も異なる所がなかつた。まだ教區內の白痴少年を片づける爲に、官憲は正氣の少年二十人每に白痴一人を送ると云ふ方法も取つた。彼等が最後の運命は曾て發かれざる秘密であつたが、然し是等の哀れな犧牲の待遇は非人道の極であつた。その勞働時間は一日十六時間に及び、疲勞困憊に依て僅かに制限さるゝに過ぎず、名は徒弟と云ふも實は資本家の貪婪と殘忍との犧牲に供せらるゝ奴隷に外ならなかつた。

『工場運動史』の著者サムエル・キッドは記して曰く、

『惡臭の中に、酷熱の室內に、無數の車輪の絕え間なき騷音の間に、無慈悲な監視人の強い手や足に打擲され、そして飽くことを知らざる利己心の鋭い智慧に依て發明されたる、刑罰の器具によれる肉體の苦痛を蒙むつて、不自然なる活動を強ひらるゝ小さな手足は、止む時もなき動作を續けて居る。』

彼等は賃銀を貰はなかつた。彼等の食物は豚に與ふるものと同じ物であつた。彼等は一組が起きた跡へすぐ寢るので、その汚ない寢床は曾て冷えた事がなかつた。彼等の中には苦痛に堪へられないで、逃亡を企てる者もあつたので、その傾向があると睨まれた者は足頸に鐵の環をはめられ、尻に達する鐵鎖を結

びつけられ、その儘で仕事もすれば寢もさせられた。病死した者、自殺した者は、世人が其の數を知ることを恐れて、夜陰ひそかに荒れ果てた野原の片隅に埋められた。

×

斯かる慘酷と悲慘とのカタログは、身自ら徒弟の一人であつたロバアト・ブリンコオの『自傳』に詳らかであると云ふし、十九世紀初葉の官報の如きも、その乾燥無味なる官文書的な文章にも拘はらず、凄慘面を蔽はしめる事實を列擧して居ると云ふ。サウシイがメイに與へて工場勞働を語れる手柬（一八三三年三月一日附）には、『奴隷賣買と雖もこれに比すれば寧ろ恩惠である』と記して居ると云ふが、いまサウシイを地下に呼び起して二十世紀の今日に於ける吾が監獄部屋を見せしめば、將た何とか云ふであらう。

要するに、十九世紀初葉の工場主も、二十世紀の今日に於ける監獄部屋の親方も、英國でも日本でも、彼等に共通せる所は即ち人間を全く物品として觀る事である。勞力を全く生産原料として取扱ふ事である。利益を搾り出す爲には、同じ血の通つて居る人間をしめ木にかけて、油滓のやうに絞り出すに在る。これが資本主義制度の眞髓なのである。これが資本家の心理なのである。剩余價値説の祖述者がたとへ何人であらうとも、將た又、さういふ學説が未だ全然存在しなからうとも、實際又は想像上の飢餓に怯え、失業に苦しんで居る勞働者を誘拐して、詐欺と暴力とを以て極端まで酷使虐待し、その生命の精髓から出來るだけの利益を搾取[illegible]奪する事實だけは、百年前の英國にも存在したし、今日の日本にも存在して居る。然るに社會は一言の抗議をも試みない。

×

社會が抗議しない。然し抗議だけでは無効である。抗議や非難が單に新聞記事に止まり、雜誌の論説に止まつて居る限り、惡人共に取つては痛くも痒くもない事なのである。彼等に取つて唯一最大の痛ごとは、紙に印刷された非難、言葉だけの抗議ではなくして、實際に、直接に、彼等の金財布に損の往くことでなければならない。

一八〇四年、シェリグンが英國の下院に徒弟數を制限すべき法律案を提出した時、自分の工場に少年徒弟をウザ／＼使傭して居たサア・ロバアト・ピールは、産業的自由を楯に取つて之に反對し、そして下院は全然ピールに同意であつた。彼等にはそれが有利であるから、少年徒弟制度を固守したのである。今日、日本の惡黨どももポット出の田舍者や、失業して居る勞働者を安く買ひ込んで、彼等に對してのみ無警察、無法律なる特權を利

用し、短銃と棍棒とを以て酷使することが、最も有利な商賣だからこそ、斯の如き罪惡を公行して憚からないのである。

こう云ふ連中に向つて、唯だ口の上や、紙の上だけで、非人道だの不正義だのと云つた所で始まる譯のものではない。斯の如き社會的罪惡の存在を、根本的に解決する方法に至つては暫らく擱く。少くとも之れが即刻の阻止防遏に關しては、吾々は何とかして、彼等が斯かる罪惡を公行する能はざるやうな手段を講ずる必要がある。

勿論、監獄部屋が現在の社會制度に必要なる一現象である限り、その根本的解決は社會組織の根本的改革を外にして期し得らるゝ所ではないが、然し監獄部屋が今日の社會制度の最惡、極端なる、代表的實例である以上、吾々はやはり當面即刻の問題として之れが阻止防遏の必要を感ぜざるを得ない。

然らば之れが阻止防遏の方法如何、と反問されると、何等具體的な考案がある譯ではない。然し、學者、辯護士、記者、代議士、社會運動者等が調査委員會を作つて、實地踏査に赴むくことも一法であらうと思ふ。勞働團體の聯合調査委員會を組織して、之れが實状の調査に當ることも一法であらうと思ふ。そして其の結果を新聞雜誌の上に發表し、飽まで當局の責任を問ひ此の犯罪に關係ある者を糺彈して、政府をして彼等に嚴重なる法律上の制裁を加へしめると共に、更にこれを議會の問題として細密なる法律を規定することも、亦復た一法であらうと思ふ。

十九世紀初葉の英國勞働階級の疾苦、抑壓を、多少なりとも緩和輕減するを得たのは、シャフツベリイ卿、フヰールデン、オーストラア、サドラア、及びロバアト・オウェン等の熱心なる運動によれる所であつた。彼のアーノルド・トインビイをして『工場法に制定されなかつたならば英國は果して如何であつたらうかと思ふと、予は戰慄を禁じ得ない』と云はしめた工場法は、實に彼等の不撓不屈なる努力の賜ものと云はなければならない。

而して今日、日本は果してシャフツベリイや、フヰールデンやオーストラアや、サドラアや、オウェンを要しないだらうか。彼等の運動、彼等の誠實、彼等の熱心、彼等の勇氣を要しないだらうか。

×

僕は特に日本の勞働團體、勞働運動者に向つて云ひたい。諸君は常に、社會主義者を目して徒らに理論にのみ拘泥して、實際問題に迂遠であると非難する。誠にそうに違ひないので、此の批評は確かに吾々に取つて三十棒たるを失はない。けれ共、

僕に云はせれば、此の點では勞働運動者も社會主義者と五十歩百歩である。

僕等は失業問題其他當面刻下の社會問題に關し、しば〱勞働團體の華麗なる宣言や決議を耳にした。然しながら、その之れが實際的解決に當つて、果して如何なる具體的方法が講ぜられたか。宣言や決議文に高遠の理想を說くことは容易であるが然し實際問題の具體的解決は困難でもあるし、卑僞でもある。然しその卑僞と困難とを避けて居たら到底何事も成し得られる筈はないのである。

僕は曾て日本の勞働團體の會議に於て、直接間接に勞働者と賃銀の競爭を試みつゝある、監獄の囚人勞働に對して抗議の行はれたことを知らない。勞働者の健康と生命とに最も甚大なる關係影響を有する、工場法の不備に對して抗議の行はれたとを知らない。勞働者の最も深い注意を拂はなければならぬ第一回國際勞働會議の決議事項が、樞密院に於て否認されんとしつゝある形勢に對して、抗議の行はれたことを知らない。

から云ふ勞働者の利害と密接の關係ある諸問題は勿論、監獄部屋の如き間接に交涉を有する問題に就ても、勞働團體は今些しく積極的な態度に出づべき筈ではないか。たとへば資本家(有ゆる意味の)が勞働者を使傭するには、必ず直接の交涉によるものとして、其間に仲介者を存せしめざる法律が制定されゝば監獄部屋の惡弊の一は確かに除去せらるゝ筈である。そしてそれと共に、鑛山における飯場制度の如き問題も、また直ちに解決せらるゝではないか。監獄部屋の存在は、決して勞働運動と沒交涉の沙汰とは云へないのである。

然り、斷じて沒交涉の沙汰ではない。監獄部屋の存在は啻に不正、非道、慘虐、反人道的なるのみならず、斯の如き制度の永續は、一部の勞働者の境遇改善を妨害し、延ひては勞働組合條件の施行力を薄弱ならしめるものである。況んや、斯の如き惡制度の下に呻吟疾苦し、訴ふるに、處なくして日夜懊惱しつゝある可憐無告の同胞は、之れ勞働階級中の最下層に在る者なるをや。僕はこの問題の爲に各勞働團體が協力一致、以て政府當局を強制して阻止防遏の手段を講ぜんことを望まざるを得ない。

×

昨日か今朝かの某新聞紙上、仁丹本舗森下博氏の、監獄部屋に關する辯明廣告が出て居た。要するに、森下氏は某々の新聞紙に傳へらるゝが如き、九州地方の鑛山とは何の關係もない。過去に於ても現在に於ても、鑛山の權は所持したこともないし所持しても居ない。從つて、監獄部屋とは何の關係もないとも云ふのである。

森下氏が果して監獄部屋と關係があるか、無いか、僕は固より知らない。然し仁丹の袋は、監獄部屋でない實際の監獄の囚人が貼つて居る。人間の口に這入る仁丹の袋が、監獄の囚人に依つて貼られて居ることだけは確實である。森下氏はこれでも否認せらるゝであらうか。(八月十二日)

時評

何を緊縮する

——物價引下げの根本要件——

福田徳三

(一)

頽廢、放慢の極を盡した政友會内閣の後を承けた現内閣が緊縮を標榜して起つたのは、殆んど當然過ぎる位のことであつて、我々は之を歡迎するに吝なるものではない。政府は一方に於て國費の節約を斷行すると共に他方、民間に向つても所謂消費の節約の宣傳を大々的に行はんとしつゝありと云ふ。是れ丈け聞けば結構千萬なことである。我々は双手を擧げて贊成する。又政府が向後施設せんと欲すと報ぜらるゝ所にも、歡迎す可きものが尠からずあることは、十分に之を認める。乍併、今日迄に事實に顯はれた所を見ると、政府が緊縮の容體として選び出したものには、見當違ひのものが尠からずある。大抵は所謂弱い者いぢめになつて居る。第一に官吏の暑中休暇の廢止、土曜午後の執務なぞとは、實に馬鹿げ切つた與案である。第二に陸軍で午砲を廢する、軍樂隊を廢する、又た今突然として、滿洲に於ける鐵道守備隊を撤廢すると云ふ、何れも驚き入つた事柄である。私は過日滿洲を旅行したとき、所々で此事に關して意見を徴せられたに對して答へて云つた『政府の緊縮は宣傳本位である、眞に節約す可きものを節約し、廢止す可きものを廢止する

にあらずして、直ちに人目を衝動するに適した様なものを廢止して、政府 コンナに節約をやつて居るのでと宣傳しようとしつゝあるように見へる。殊に陸軍には、誰かエライ智慧者があると見へて、軍縮を本當に行はずして、大に行つたように見せようとして、萬民が直ちに氣いつくように、市中の午砲を罷める、軍樂隊を廢する、コレハ廢止したとて、其節約額は僅の淚位のものであるが、然し廢止したによつて影響を蒙る範圍は、甚だ廣い、即ちプロパカンダの目的に最も適して居る。滿洲鐵道守備隊の撤廢も恐らく同一精神から來るものであらう。若しも陸軍が眞に駐滿軍隊費に大節約を行はんとならば、所謂現役兵(駐屯師團)の整理をやる可きである。其餘地は必ずあることと思ふ。併し此整理は直ちに人の注意を惹かない、ソコデ其れはやらないで、誰人も痛切に利害を感ずる鐵道守備隊を撤廢すると揚言して、其揚言丈けで已に可なり人心を動搖させた。即ち其れ丈けでプロパガンダは半其目的を達したのである』と。私は、窃かに此斷言の誤らざることを信ずるものである。官吏暑休の廢止と云ひ、鐵道守備隊の撤廢と云ひ、云はゞ政府自身は、一向苦しみをしないで、人をいぢめ付けて、それで緊縮節約を大にやつて居るかの如くに見せる。プロパガンダの効能は多大であらう。此んな虫の善い緊縮なら、恐らく政友會でもやつたであらう。彼等は、現内閣に智慧者のあるのを、今頃羨んで居るかも知れない。

更らに虫の善くして、而して不埒千萬なるは、所謂國民消費節約の宣傳是れである。政府者曰く、『我邦の物價が下落す可くしてせざるは、上流社會は不景氣に惱まされて、當然に緊縮するに至つたに拘はず、中流以下、就中勞働階級の懐が未だ中々溫かで、從つて購買力消費力に富んで、日用品は勿論奢侈品に對しても國民需要額がまだ甚だ大であるからである、此の需要を緊縮せしめ、此購買力を減ぜしむるにあらざる限り、物價の低落は、之を望んで得可からず、故に政府は、商業會議所等と協力して、主として下流階級に向つて、消費の節約を大々的に宣傳せんと欲するのである』と。此言は、聞く耳を疑はざるを得ざる程の愚論暴論であるが、苟かにも責任の地位にあり、宣傳の司令官たる某々氏の口から、私が再三親しく承はつた所

である。商業會議所の一味の連中――六割も七割もの配當をして平然たる會社の重役、國民生活の安定を名として、ボロ機械、ボロ工場を賣付けようとする政商若くは、其れと同種類同程度の人々の尠からざる部分を占めて居る所の――が、一義もなく、政府の御意を奉戴して、下流壓迫の節約宣傳に全力を傾倒すると云ふのは、誠に當然の事であると共に、其露骨さ、其皮肉さ、加減は實に目眩はしい程である。昔し本多佐渡守は家康に献言して『百姓は死なぬ程度に抑へ付けて置け』と云つたとか云ふことであるが、（日本經濟叢書本佐錄を見よ）今日の政府は『人民は死なぬ程度に緊縮させろ』と云ふことを、政治の根本義として居るのではないかと疑はざるを得ない。緊縮は結構な事である。節約は大いに必要なことである。然し其れは、緊縮す可きものを緊縮し、節約す可きものを節約してこそ結構なので、然す可からざるものを抑へ付けることは、却て大害を醸すの基なるを忘れてはならぬ。

（二）

此くは云ふもの丶、政府が今爲さんと欲しつゝありと傳へられるものゝ内に、幾多眞正に適切なものも含まれて居ることは、決して否定す可からざる所である。中央市場の設置による物資配給の疏通、不當取引の取締鐵道運賃の引下げ、專賣價格の引下げ等は、實に今日一日も早く急施せねばならぬ事柄である。乍去、此等の施設を有効、有力ならしめるには、茲に根本的に最も緊縮を要する事に向つて一大斧鉞を加へるのでなければならぬ。此一事を閑却して置いて、他の千百の施設を爲すとも、其の効果――殊に物價引下げの上に於ける――は、甚だ微細なものであらう。中央市場の設置は、必ずしも物價引下げのみを唯一の目的とするものではない、日用物資の配給を圓滿ならしめること、價格を公正、安固ならしめること、今迄の問屋、小賣制度に基く百般の弊害を除去すること、斤量の正確を得ること、品質を吟味すること、公衆衞生に多大の貢献を爲すこと、暴利的賣惜み、買占めを防止すること、其他幾多の改良は、中央市場の經營、運用宜しきを得れば之を實現することが出來るのである。不當取引の取締は、主として、其の道德的効果の爲めに必要なのである。如何に其取締が有効であつ

ても、其れによつて、直ちに物價引下げの實現を見る可しと期するものは誤りである。無論間接には、暴利の要素を除去することによつて、物價の低落、安定を助くるに有効なるには相違ないが、其れは直接の作用ではない。直接の作用は、暴利を目的とすることは不法なり、不德なりてふ事を、一般商業者並に生產者に自覺せしむること是れである。此の道德的作用は、他方に中央市場並に公設市場の發達あれば、相倚り相輔けて、我々の日常生活をより多く秩序的のものとし、より多く合理的のものとするに、至大の効果あることは、疑を容れない。乍併、私が云ふ所の根本斧鉞の下されることなくしては、其効果は殆んど全く相殺せられることとなる外はない。何となれば、今迄此の根本に向て斧鉞の下されて居なかつたことが、今日の頹廢、放慢な經濟狀態を產み出し、暴利的不正、不法行爲が異常な生長を遂げた原因であるからである。此の根本原因を取り去ることを怠つて置いて、他の施設のみに熱中するのは、病根を醫さずして唯だ應急の膏藥張に安ずるものである。而して然る限りは、眞に緊縮せらる可きものは、却つて緊縮せられず、否、益々增長して行つて、終には二進も三進も行かなくなる外にない。商業會議所一味の連中が、中流下流國民に向つて、緊縮を限りに消費の節約を宣傳しつゝある間に、同じ仲間若くは同穴の貉をば、せつせと放慢なる暴利的行爲の手を擴げて行く限りは、緊縮、節約は迚も望みない、況んや物價の引下げをや、更らに況んや國民生活の安定をや。

(三)

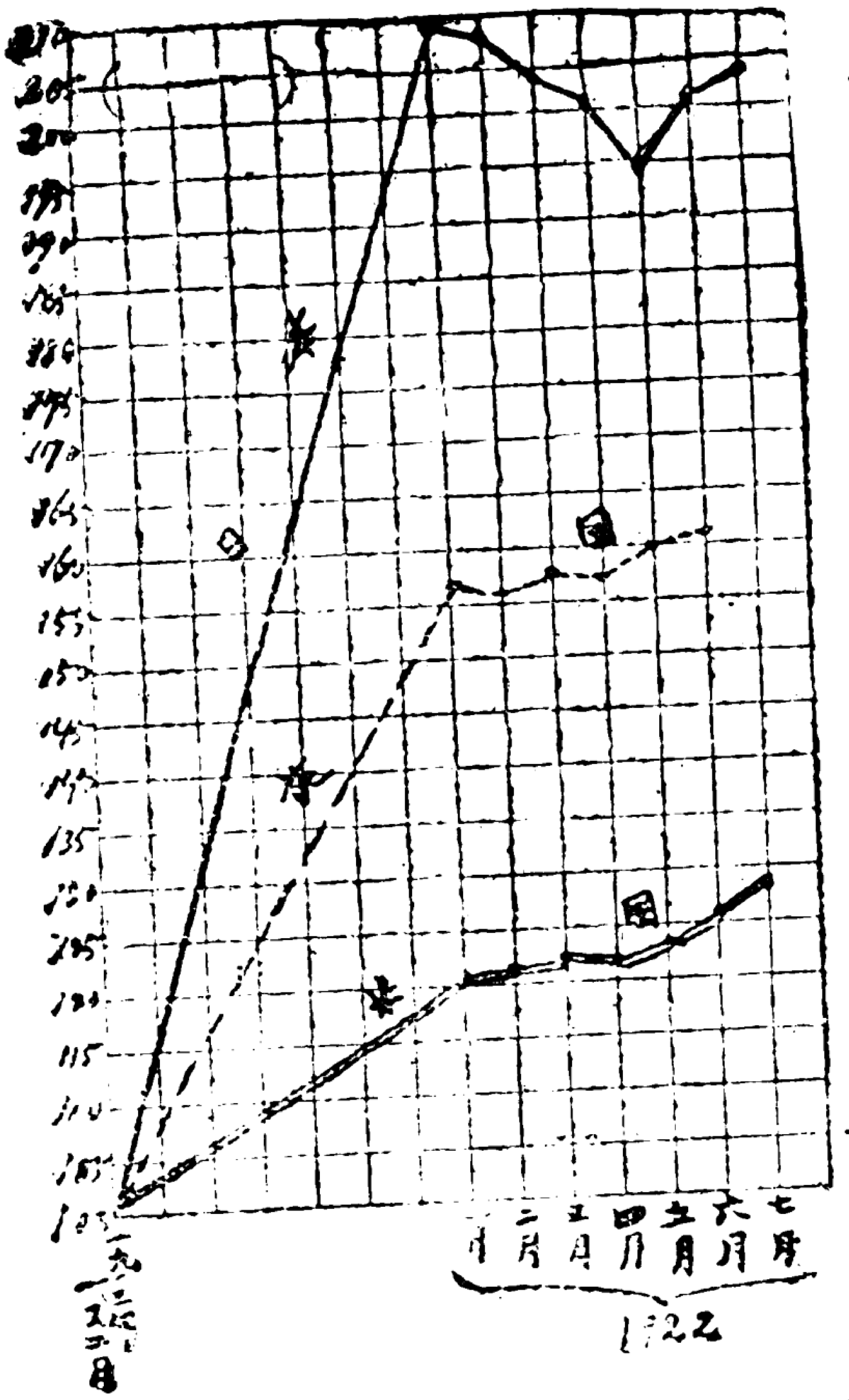
私が玆に根本に向つて斧鉞が下されなければならぬとは何であるか。答へて曰く、兌換券の莫大な發行、之れによつて助長せらるゝ無謀不謹愼な貸出政策　更らに此貸出政策によつて助長せらるゝ獨占的營利事業の增長此れである。

我邦の物價が外國の其れに比して、依然として高き騰貴率を示して居ることは須知の事實である。今最近の數字をあげて見よう。

戰前(一九一三年)に對する本年の
日、英、米物價指數

一九一三年	日本	英國	米國

一月	一〇〇・〇〇（月末）	一〇〇・〇〇（月末）	一〇〇・〇〇（月初）
二月			
一九二二年 一月	二〇七・七	一五六・八	一二〇・二
二月	二〇六・〇	一五五・九	一二〇・七
三月	二〇三・〇	一五七・三	一二二・六
四月	二〇〇・五	一五六・八	一二一・九
五月	一九四・三	一六〇・〇	一二三・七
六月	二〇〇・四	一六〇・七	一二五・八
七月	二〇二・三	—	一二八・〇



右を圖示すれば上圖の如くである。

即ち、米國では、戰前に比し、本年六月は總平均に於て、僅かに二割五分八厘英國に於ては六割七厘の騰貴を示して居るに過ぎないのに、我邦は、二倍強となつて居るので、更らに七月に入つては、其上に一分九厘の騰貴を現はして居るのである。英米以外の國殊に獨佛墺等は、何れも不換紙幣を流通して居るから、直ちに其儘に比較することは、當を得て居らぬが、此時この紙幣金貨爲替率で換算すれば、眞相を得るに近い。其數字は左の通りである。

毎月平均の各國の對外爲替相場に基いて米國の弗金貨に換算した各國の物價指數

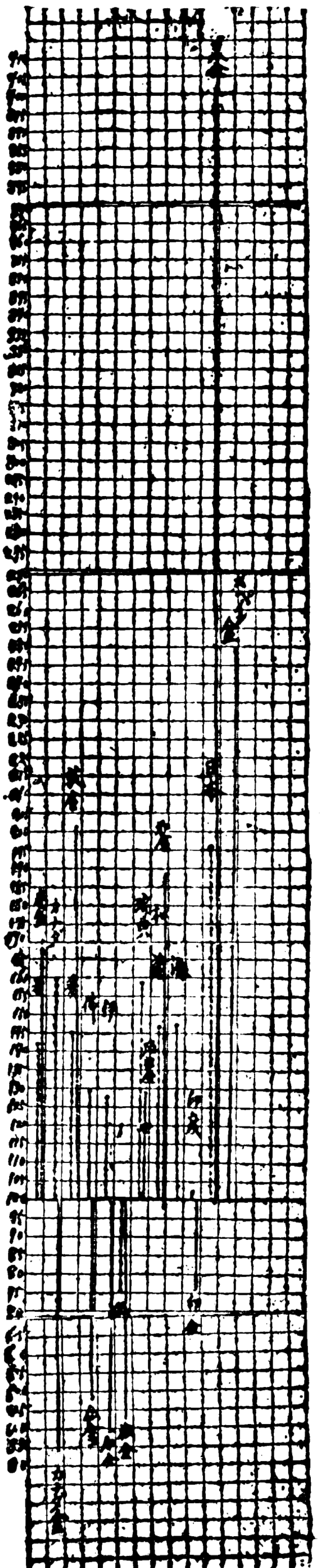
（一九一三年を一〇〇とす）

一九二二年	一月	二月	三月	四月
米國	一四二	一四六	一四七	一四九
カナダ	一五九・三	一六二・七	一六〇・七	一六二・二
英國	一四五・〇	一四七・八	一四六・五	一四八・七

佛國	一二九・四	一三八・四	一四三・二	一五〇・一
伊國	一二七・四	一四二・九	一四一・一	一四六・五
ドイツ	七五・六	七九・八	七三・一	八八・四
スウェデン	一五八・三	一六一・九	一六〇・〇	一六〇・三
オランダ	一四六・九	一五一・五	一五二・五	一五〇・〇
オーストラリア	一四七・〇	一四七・〇	一四六・〇	一四八・〇
印度	一〇一・七	一〇三・五	一〇四・〇	一〇四・〇
日本	一九五・九	一九三・八	一九〇・九	一八七・一

卽ち右十一ヶ國中、我日本は、一九一三年の物價に對する騰貴率は最高であつて、其最低なるドイツに比べるとまさに二倍強であり、米國よりは四割近く高く、日本に一番近いスウェデンやカナダに對しても二割强高いのである。

次ぎに右の金貨弗相場に換算した物價指數と、各國の金保有高の世界全體の金在高に對する割合とを比較して見ると左の通りである（一九一三年を一〇〇とし之れに對する本年一月の各指數）



戰前に比して金の保有高を增した其割合の筆頭も我日本であれば、物價騰貴の割合の筆頭も亦我日本である。日本に續くは、西班牙、英國、和蘭、米國、瑞典が金の保有高を增し反對に、カナダ、佛國、伊國、ドイツ、印度は減じて居る。物價騰貴の割に於ては、日本に亞いでは、カナダ、瑞典、濠洲、和蘭、英國、米國、佛國、伊國と云ふ順で、印度は殆んど戰前と差がなく、ドイツに於ては著しく下落して居るのである。

（四）

右兩者の關係は、圖表の示す如く區々であるから、一概に結論を下すことは出來ないが、英、米、和蘭は何れも日本と同じく、金保有割合の增加は物價騰貴率よりも高く、獨り瑞典丈けは其反對であることを見る、他方に、カナダは金保有高は激減して居つて物價は可成騰貴して居り、佛伊兩國は金保有高の減じた割合と物價騰貴の割合と共にカナダよりは低く、ドイツに至つては金の保有高激減して而して物價も亦た著しく低落して居るのである。墺に就ての物價指數は分らないが、思ふにドイツと同じ、否モット其度合が甚しいであらうと推察せられる。日本と同一趨勢を示す西班牙、和蘭、米國（英は姑く別として）で就て見れば、金保有高の增加が、物價騰貴と若干の因果的關係を有することは、之を疑ふの餘地なく、而して我日本は、此部類中飛離れて極端の一例を示して居るものである。されば、日本の異常なる物價騰貴の原因の一として、金保有高の激增——四倍强——が有力なるものであることは之を否定することは出來ないのである。

此事實を非常に重く視、而も唯其れ丈けしか見ないときは、

此頃我邦識者間に可なり勢力を得つゝある所の金の輸出解禁は、物價騰貴防止若くは物價引下げの方法として最根本的なものであるとの說は、如何にも尤千萬のように考へられるのである。ソコデ、論者は云ふ、物價調節——引下げの意に於て——の爲めに根本的に斧鉞を下さなければならぬことは、此の輸出の禁止を解くこと是れである。此一事を斷行せずしては、百の施設も必竟徒歩に歸すると。私は、此論の一半を極めて正當なりと認めると共に、他の一半を以て甚しい速斷であり早計であると信ずるものである。

私が認めて正しとする所は、我邦の保金高の激增が、流通通貨の激增を招致し、從つて貨幣の購買力——普通之れを貨幣の價値と呼んで居る——が著しく下落したことの反面が、即ち異常なる物價騰貴の最大最重の原因であるとすることそれである。此點に就ては、私は既に大戰中から度々論じたことである——太陽に掲載し後に黎明錄に收めた『何を調節するか』其他を見られたし——如く、私は論者と全く見る所を一にするものである。然らば、私の速斷なり早計なりと云ふ所は何であるか。

曰く保金高を今直ちに減少する政策を取れと云ふ主張是れである。此く云ふと、或は難ずる者があらう、汝の言は矛盾して居る、既に保金高の激増を以て、物價騰貴の最大原因なりとする汝は、物價引下げの根本要件として其の減少を來す可き政策を支持す可き筈である、是れ論理の當然である、然るに減少政策の速行に反對するは矛盾も亦甚しいではないかと。此非難は確かに中つて居る、但し其れには一のプロヴァイゾがある、曰く『我邦現行の兌換制度に少しも手を觸れない限りは』と云ふことが是れである。我兌換制度の現状を此儘にして少しも改めない限りは、今日に於て物價の引下げを招致せんとするには、金の保有高減少の作用を有す可き金輸出解禁を斷行する一事を措いて、外に方法なきは、私の全然肯定する所である。此點に於て、私は世上の金輸出解禁論者と全く同一の立場に立つものである。

（五）

我現行の兌換制度は、ドイツ帝國銀行の制度を模倣した所謂屈伸法なるものに依るもので、一億二千萬圓の保證準備と所謂制限外發行とを除いては、悉く正貨準備することを要求するものである、其れと同時に正貨準備を含んで居ることを特に注意して置く必要がある――其内に所謂在外正貨なるものさへあれば、如何なる巨額の兌換券を發行するとも、其は全く日本銀行の自由に任せられて居る。日本國民經濟の兌換券需要額如何の如きは、些も之を顧慮することを要せぬと云ふのが、現在の兌換制度の根本主義なのである。私が今、金輸解禁論者と見る所を異にするのは、蓋し此點に存するのである。論者は解禁しさへすれば其れで宜しいと云ふ。私は其を速斷、早計なりと認めるのである。私は根本的に大斧鉞が下されなければならないと云ふは、金輸出の解禁其事でなく、以上の如き國民經濟の需要如何を全く度外に置く所の現在の我兌換制度其物であると主張するのである。（我邦貨幣經濟學の最先覺たる山崎博士は、其著『貨幣銀行問題一斑』に於て、嘗て現行の我邦の屈伸發行法を以て良制なりと説いたことを取消されて、此法は決して萬全なるもでないと云ふことを改めて主張せられた。博士以外の經濟學者は、田尻博士を筆頭に殆んど皆山崎博士の舊説と同じ

說を終始唱へて居られる。私は山崎博士と同時に現制の決して世上學者の說くが如き理想的のものでないことを再三公言した(經濟學研究其他を見よ)。博士も私も共に戰前の狀態に就て既に左樣に考へて居たのである。況んや金の流入に關する日本の狀態の根本的に一變した今に於てをや。私は此の變化に對して山崎博士が、更らに其說を力強く主張せられるに相違ないと信ずるものであるが、不幸にしてまだ此點に關する博士の最近の立場を承る機會がない。兎に角、私は更らに更らに前說を力強く主張する外ないのである。)

今日既に通貨——主として兌換券——流通額が國民經濟の需要に超過する多大なることは、解禁論者も私も共に認める所である。唯だ解禁論者は、解禁しさへすれば、此の不調和は、自然に、當然に除去せられると考へるのである、私は、此一事を斷々乎として否定するものである。

先づ左表を一瞥せられたい。

大正十一年七月三十一日現在

日銀兌換券發行高		1,224,363,000
正貨準備		1,220,762,000
發行餘力		116,399,000
正貨保有高	政府	616,000,000
	日銀	1,239,000,000
	合計	1,855,000,000
	內地	1,218,000,000
	外國	637,000,000
	合計	1,855,000,000

日本銀行は、本年七月三十一日に於て十二億二千萬圓を正貨準備とし十二億二千四百萬圓の兌換券を發行して居る。而して發行餘力なるものが一億一千六百萬圓餘ありとせられて居る。これは保證準備の一億二千萬圓を勘定するからで1,220,762,000(正貨準備)+1200,000,000(保證準備)=1,340,762,000(合計)−1,224,363,000(發行高)=116,399,000(發行餘力)あり、する勘定によるものである。トコロが、實際我邦に現存する正貨額は、と云へば 1,218,000,000 しかない。此額の政府と日銀との所有別は例によつて明示せられて居ないから、實際の眞相

は分らないが、假りに一歩を讓つて內在金の全部が日銀所有にかゝるものと假定すれば——十の八九共れが事實であらう——

正貨準備	1,220,762,000
內地在金	1,218,000,000
	2,762,000

二百七十六萬二千圓は、日銀の庫中は勿論我邦何れの所にも現存せざる所謂在外正貨なるものに屬するのである——それが在外正貨引當ての最低額で、實際は共れよりは多いかも知れぬ、反對に共れより少いことは決してあり能はぬのである——此額は、帳簿の上で數字を書き直しさへすれは、何時でも增し得る、從つて共れ丈けは、何時でも、又た兌換券を增發し得るのである。共最高限は、右の數字によれば、去七月三十一日に於ては、六億三千七百萬圓であつた。故に日銀にして爲さんと欲すれば、同日に於て、十二億二千四百萬圓に非ずして

1,855,000,000
120,000,000
1,975,000,000

十九億七千五百萬圓の兌券換を發行し得、更らに之れに加へて所謂制限外發行を大藏省が許す丈けは爲し得るのである。(此外に、我邦の領內土には朝鮮銀行、臺灣銀行等の所謂、特殊銀行が兌換券を發行して居る、共額大正十年十二月に於て鮮銀一億三千六百萬圓、臺銀四千萬圓であつた。又債券を發行する北銀、勸銀、興銀等もある)。ダカラ、假令金の輸出解禁をしても、共海外に持ち出される高を、在外正貨の繰入れで辻褄を合はさないとも限らない。然る間は、解禁は決して、直ちに兌換券流通高を減ずる作用を持つと保證するわけには行かないのである。而して解禁の爲めに、例へば七月三十一日に於ける在外正貨總額の六億三千七百萬圓を一時に海外に持ち出されるようなことは、事實不可能なことである。又假りに共れが可能なりとすれば、共れこそ由々しい一大事であつて、今の解禁論者は共時になつて、恐らく、政府なり日銀なりを囂々として攻擊非難することであらう。內地保有高の半額以上にも及ぶ在外正貨なるものがあつて。共れが何時でも電報一打、帳簿上の振替で、我が兌換券の、正貨準備とせられ得る狀態の下に於ては、輸出

解禁論を今日の樣な形で主張することは事の實際を知らざるも甚しいものである。昨日(十一、八、十六)の時事新報を見ると、畏友小野塚喜平次博士は『成る可く速かに成る可く一般的に解禁せよ、解禁より來る可き利益は其不利益よりも大なりと信ず』と言つて居られるが、博士は果して、大の在外正貨てふ大抜穴のありて、解禁は決して、自然の狀態を恢復することにならぬを御承知ありて、其の所謂解禁の利益――私を以て見れば、キメリカルな――は、其の不利益――私を以て見れば、今直ちに解禁するときは確かに現實的に大なる――より大なりと信ぜらるゝものであらうか。私は平生愼重冷靜を以て聞ゆる同博士に質さゞるを得ないものである――武藤山治氏のように、綿花買入れの便に多大のインニーレストを有せらるゝ人士の解禁論は、私の學問的考察から全く度外に置かねばならぬことは、讀者諒とせらるゝことゝ信ずる――

我邦の通貨總額は、戰前に比して激增はして居るが、其割合は、諸外國と比較すると必ずしも驚く可きものではない。即ち左の通り、

英	十五倍	佛	六倍半	獨	三十三倍
伊	十倍	日	三倍半	和	三倍强
加	二倍	米	一倍七分		

之に反し紙幣兌換劵の總額に對する金銀在高の割合は日本の增加は驚く可きものである。即ち左の通り

紙幣流通高又金銀在高

	金銀在高 一九一三年	金銀在高 一九二一年	紙幣流通高 一九一三年	紙幣流通高 一九二一年	準備割合 一九一三年	準備割合 一九二一年
英國（千磅）	三四・九八三	一五九・八六七	二九・六〇八	四五三・四四〇	四二一・八	三六・九
佛國（千法）	四・一五七・五〇〇	三・八四六・二七七	五・七一三・六〇〇	三七・四三三・〇八七	七二・八	一〇・三
獨國（千馬）	一・四四六・八〇三	一・一〇三・二七八	二・五九三・四四五	八四・〇二七・六九五	五五・八	一・三
伊國（千リラ）	一・六〇八・三八二	一・一九一・九九五	二・七八一・五八〇	二〇・四八六・九二三	五七・八	五・八
カナダ（千弗）	一四二・五二七	一五三・六八	一二七・一一七	四四八・七二二	一一二・七	三四・五
和蘭（千フロリン）	一六〇・五〇六	六一八・二九九	三一二・六九九	九九一・九九九	五二・三	六二・三
日本（千圓）	一四七・〇九四・一六四	一・三三五・三二一・九・六七五	七五七・八七八・九五二	一・九一四・九・五・一四〇	一九	一六四・三

即ち、我日本に於ては、既に已に國民經濟の需要を超ゆる大なる兌換劵額は、更らに增發の餘地極めて大なるものであつ

て、タトへ保金高が解禁によつて減ずるとも他諸國の割合に否、戰前の最高割合なる英國の其れ丈けまで下るとしても、未だ多大の餘地を剩して居るのである。此れは在外正貨を勘定に入れない計算で、猶且つ然るのである。其れに在外正貨の作用が加はるときは、我兌換券增發の危險は、金輸出解禁を以てしては、迚も防ぎ切れないこと、明々白々たるのである。

（六）

抑も現行の日本の兌換制度なるものは、我邦が世界の貧國であり、殊に金を入手すること甚困難な地位にあつて、到底、兌換券の全部の準備に充てる丈けの金を收得すること能はざりし過去の國狀を基礎として、作られたものである。是れ一億二千萬圓の保證準備を許し、更らに一定の條件の下制限外發行なるものをすら許すと云ふ制度の生じた所以であつて、其豫め慮つた條々は、何れも皆保金高の不足を不變的狀態と前提したものである。今日の如く金の充實し、否、國民經濟の需要を超過する夥しき額に達するなどと云ふことは、夢にも考へることの出來ない狀態に應じて設けられたものである。然るに、今日は實に我兌換制度の依つて立つ根柢が全然反對の狀態を呈する至つたのである。今日に於ては、保金の不足を常態と見て打建てた制度の全く國情に適せざるは勿論のこと、却つて反對に金のダブツキより來る缺陷、弊害に對する防止法を新たに設けねばならぬ急要に迫まられて居るのである。世界經濟に於ける日本の地位の此根本的變革を今度慮外に置いて、唯目前の事實のみに着眼して解禁々々と急ぐのは、實に思はざるの甚しいものである。否、私を以て見れば、甚だ多くの危險が其内に包藏せられて居るのである。

今此の兌換制度の根本的變革に論及するに先ちて、私は金輸出解禁の決して輕くに處斷せらる可きものでない事實を指摘して警告せねばならぬのである。今日は實に世界經濟の恢復（レパラション）と改造の時期である、而して又其爲めにも獨墺を初め露國の經濟的開國と救濟とが世界連合の力によつて爲さねばならぬ時である、其れには色々な施設が必要であるが、當面の問題は、各國に於ける貨幣購買力の恢復と安定とを實現することが第一の急務である。此の爲めに——而して又た戰爭の爲

めに破壊せられた諸國の經濟恢復の爲めに——最も必要なことは、戰爭の爲めに起つた世界に於ける金分布の根本的變動より來る弊害を匡正することと之れである。乞ふ左表を見よ。

世界金保有高百分比率表(世界全體を一〇〇とす)

		一九一三年	一九二二年
聯合國	(英、佛、伊、白、希、)	三五•四	二二•〇
中立國	(西、和、瑞西、瑞典、丁抹、諾威、葡)	七•五	一三•〇
中歐同盟	(獨、墺、ユーゴースラヴキア、チリッホ、スラヴキア、フインランド、ブルカリア、波蘭ルーマニア)	一七•〇	三•七
歐洲合計		六〇•〇	三八•八
其他	(米、日、アルジエンチン、カナダ、印度、濠洲)	四〇•〇	六一•二

戰前には歐洲が世界在金の六割、其他諸國が四割を保有して居たのに、今日は其れが全く反對になつて、歐洲は三割八分八厘、其他が六割一分二厘を保有して居るのであるこれを重な國別にして見ると、左の通りである。

	一九一三	一九二二
聯合諸國		
英	五•〇	九•八
佛	二〇•〇	八•八
伊	八•五	二•七
中立諸國		
西班牙	二•七	六•二
和蘭	一•八	三•一
瑞西	一•〇	一•二
瑞典	〇•八	〇•九
中歐同盟		
獨逸	八•二	三•〇
墺太利	七•四	一九二〇年 〇•六
其他諸國		
米國	二〇•四	四〇•三
日本	一•九	七•八
カナダ	四•二	二•〇
印度	二•二	一•五
濠洲	〇•六	一•五

佛國は戰前は世界の金の二割を持つてゐたが、今は僅かに八分八厘しか持たず、伊太利は八分五厘から二分七厘に落ち、獨乙は八分二厘から三分に落ち、墺は七分四厘からに六厘に落ちた。之に反して西班牙二分七厘から六分二厘に昇り和蘭は一分八厘から三分一厘に昇つた。米國に至つては二割から四割に昇り、カナダは四分二厘から二分に落ちたが、此間にあつて我日本は實に一分九厘から七分八厘に上つたのである。此く世界に於ける金の所在分布が根本的に位置を代へたことは、今日の世界經濟變調の結果でもあり又た其の原因でもある。之を何とかするに非れば、紊亂した各國の幣制を立直すことは、迚も期し得られないのである。國際經濟會議が眞面目に其任務を盡さうとするならば、必ず此問題に指を染めなければならぬ。而して私は、早晩其時が來ると思ふ。然る時には、第一に米國、第二に西班牙和蘭及び我日本は、世界救濟の爲めに其持てる金を奉仕的に提供す可き道德的義務を有する。殊に獨露救濟の爲め、又た英國立直しの爲めに、此れが必要とせらるゝことは、現下の大問題たる戰時貸付金の棒引き若くは輕減と關連して必ず起り來らねばならぬ問題である。而して此救濟の爲めに奉仕することは、其奉仕國殊に我日本をして世界經濟裏に大いに重きを成さしむる所以であつて、其れは必竟廻り廻つては國々の、殊に我日本の永遠の利益を進むる所以である。言換れば、我國の保有する十何億（七月三十一日には所謂在外正貨を入れて十八億五千五百萬、在内高は十二億三千九百萬圓）の金は決して仇や愚に取扱つてはならぬものである。近い將來に於て、世界が其秩序的生活に立戻るに際して、重大なる任務を盡す可き、又盡し得べき極めて大切なものである。單に物價調節の爲めと云ふ——其も間違つて居る所の——要求の爲めに、前後をも顧みず放散せしむ可きものでは、斷じて無いのである。今の解禁論——解禁と云ふ文字の極めて誘惑的であり、耳に快きにも拘らず——なるものに私の極力反對するのは、更らにより有効に、より有益に世界の救濟と恢復との爲めに、其れから積極的に使用せらる可き機會あるを確信するからである。決して好んで異を樹てんと欲するが爲めではない。

今俄かに金の輸出を解禁するよりも、更らにより緊急に爲されねばならぬことは、我現行兌換制度の根本的變革之れである。即ち正貨さへあれば、日本銀行は、其欲する儘に、國民經濟の眞正なる需要に顧慮を用ゐず兌換券を發行し得ると云ふ現在の制度の徹底的打破是れである。此制度あるが爲めに、而して更らに其缺陷を增大す可き在外正貨引當發行を認むる爲に、日本銀行は、我經濟界の眞正なる需要に應じて、其兌換券を發行するのでなく、主として日本銀行に融通を求むる借金人の需要——之をフイクチーヴ、デマンドと名けてもよし、否、モツト適切に云へば、投機的需要、思惑的需要と稱す可きである——を目安として、兌換券を發行する、之れが爲めに、眞正の事業の爲めならざる冒險的、思惑的借手は、得意に其魔の手を延す、更らに朝鮮銀行や臺灣銀行に至つては、此の日銀兌換券を準備とし、更らに其の外にも若干の保證準備を許されて、ドシ〳〵兌換券を發行し、而も此等の銀行は、債券銀行にして普通貸付銀行を兼ぬると云ふ不都合千萬なる現制の下に於ては、預金高より來る制限てふコントロールを被ることなく、散漫、放縱に貸付けをする、鮮銀が今、回收不能の貸付金無慮六千萬圓を有して青息吐息であると云ふのは、此の根本的に誤れる制度の賜である。臺銀の必迫も亦然り。日銀が此兩銀行と同一の運命に陷らないのは、其特權的地位の爲めである。此特權によつて、日銀は鮮銀、臺銀等にあつては、銀行其ものが被むる苦痛を、甘く國民一般に轉嫁し得て居るので、鮮銀、臺銀にあてては、主として迷惑するものは、其株主であるが、日銀に在つては、株主は此も迷惑せず、國民全體をして迷惑せしめて居るのであると云つても、必ずしも過言ではあるまい。日銀の兌換券伸縮が多くの場合其貸付け額の伸縮と離る可からざる關係を有して居ることは、玆に絮說する迄もない處である。即ち現在の制度は、兌換券發行額と國民經濟の眞正なる需要との有機的連絡を絕つたものである。輸出解禁をした丈けでは、決して此く絕たれたに連絡は結び付けるものではない。否此制度の殿として存する限りは、金の輸出と兌換券の縮少とが必ずしも必然的に自然的相互作用を持つこととすら六ケ敷のである。解禁さへすれば、金の輸出は當然必然に兌換券額の減縮を伴ふと思ふの

は、極めて皮相の見解である。斷じて斥けられねばならぬ謬斷である。添田博士曰く『自然の法則に從ふを以て最善事の策なりとす』(時事新報八月十六日號)と誠に然り、貨幣の問題は自然の法則に從ふが最善である。乍併、今單に金の輸出解禁をした丈けで、其れで自然の法則に從ふものなりとは、餘りと云へば我兌換制度の實情を輕視せられたる論で、財政の泰斗たる添田先生に此言あることは、實に全く不可解の事である。(添田博士の立場の變位、幣制上に於ける我國情の根本的變化を適切に例示するものはない。今無條件的解禁論、自然一任の保金減少論を力説せらる——博士は、僅か數年前に於ては、日本は如何なる價を拂つても、保金額を增大せざる可からずとの方針で、如何はしい某金山に數百萬圓の極めて大膽なる貸付を敢行し、甚だ不自然的なる保護を加へ、其結果、興銀は殆んど其全部回收不能——即ち貸倒れ——に苦んだ。時の興銀總裁添田博士と同一人であり、此の巨萬の大浪費を可とせられた博士は、今國民節約プロパガンダの大先達たる博士其人であるからである。誠に、時勢の變化ほどイロユツシユなものはないのである)日本銀行は現在の制度と現在の我國情の下に於ては、日本の銀行でなく、日本の投機的借金人の銀行であると稱せられても、殆んど之を辯することは出來ないと思ふ。具體的の例としては、例へば横濱の茂木某救濟の如き、中央銀行としては、實に分を外れるにも程のあつた所業を敢てしたものである。大坂の石井事件、鮮銀の貸倒れ行惱み、臺銀の整理難、否其他多くの類似の事件は、其有力なる原因を、思惑的貸付本位の我兌換銀行制度其ものに有する。而して其は單に所謂財界を毒害するに止まらず、國民全體をあげて物價騰貴の爲めに苦しめつゝあるのである。然るに下層いぢめの暑休廢止や消費節約などと云ふ、火を以て火を救ふ底の事をやり乍ら此の禍根を絶つことに就て些も思を旋らさないのは、實に驚き入つた次第と云はねばならぬ。

獨り以上に止まらない、此の不健全なる我幣制はやがて、生産業者、販賣業者の殆んど全體を驅つて、機會だにあらば、獨占的特典を獲得し、暴利を收得しようとせしめる。此理を有力に言證するものは、物價指數の種別的解剖それである。

均しく物價騰貴と云ふが、其騰貴の割合には樣々ある。即ち左表を見よ。

明治三十三年十月の日銀指數に對する
大正十一年六月の同上指數
（總平均二倍六分一厘）

一、四倍以上になつたもの
鰹節（四四八）石材、疊表、日本紙
生漆（五二八）薪（三八七）

二、三倍以上になつたもの
鹽、米（三二四）、砂糖、製茶（二九六）
味噌　日本酒（二九六）麻、木材（二九一）煉瓦、瓦、皮革、石炭、炭

三、二倍半以上になつたもの
小豆、魚肥、西洋莨（二四六）生絲（二四九）絹裏地、綿糸、金巾（二四三）繰綿、洋紙、木蠟、マッチ（二四三）
石油

四、二倍以上になつたもの
大麥（二一三）裸麥、小麥、大豆、小麥粉、油〆糟、醬油
鷄卵、絹手巾、眞綿、白木綿、フランネル、モスリン、藍
セメント（一九三）板硝子

五、一倍半以上になつたもの
肥料糟、油、刻莨、羽二重（一七三）甲斐絹、毛繻子、洋鐵、洋釘、

六、其以下のもの
銅

騰貴率の最も高いものは生漆の五倍二分八厘を筆頭として鰹節、石材、疊表、日本紙、薪等である。之に次ぐものは米、砂糖製茶、味噌、日本酒、麻、木材、煉瓦、皮革、石炭、炭等である。即ち我々の日常必需品に屬するものが多く、而も大部分は日本人の生活に特有なもの、外國品の競爭なきものである。其反對に騰貴率の最も少いものは、一倍一分八厘の銅を筆頭として、肥料糟、羽二重、甲斐絹、毛繻子、洋鐵、洋釘、板硝子、セメント、藍、モスリン、フランネル、白木綿等の外國へ輸出し又は輸入するものと大麥、裸麥、小麥、小麥粉、大豆等である

此解剖は我々に何を語るかと云へば、我日本に於ける物價騰貴は、世界經濟の影響を受くること最も少い品種に最も高く、其の影響を被むるものに最も低く、殊に日本人の生活に特殊な生活必需品に於て騰貴の割合が高いと云ふことを語るのである。此等の品種の生産者なり販賣者なりは、外國品の競爭を受けない地位にあるから、あらゆる機會を捉へて賣惜み、買占め、其他の獨占的作用を利用して價格を牽制しつゝあるのである。此事實は、今日の情勢に於て不自然極る制度となつた我兌換制度に依る兌換券の增額を最も多く利用しつゝあるものと云ふ可きである。

茲に於て私が何を緊縮するかとの發問に對する答は自ら與へられる。曰く第一に緊縮す可きは兌換券の發行額である、第二に放慢なる銀行貸付である、第三に、生産業者、販賣業者獨占可能の範圍である。兌換券の緊縮を實現するには在外正貨引當て發行と云ふことを即日廢止し、更に兌換券發行の最高總額を(無論杓子定規的なる可からず)適當の機關と規定とによりて、伸縮的に規定する制度とすることを要する。鮮銀、臺銀の兌換券發行は之を日銀に統一す可きは勿論である。是れが出來れば第二の緊縮は大部分は必然的に相伴つて行はれる。第三の緊縮は、私が社會事業調査會に於て發議した不當聯合、協定、申合賣惜、買占めの徹底的取締によつて行ふ可きである。此の三種の緊縮を斷々乎として實行するに非る限り、現内閣の物價引下げ政策は、徒勞に歸するものと云はなければならぬ。即ち私は此三項の實行を以て世界經濟に於ける我邦の地位の變動に順應する一切の物價引下げ政策の根本要件なりと確信するものである。

附言　八月九日滿洲より歸り同十八日渡支する迄の八日間、近親に凶事と吉事とあり、旅裝を改むる暇さへなし。改造記者の徴稿は此時に方つては、實に殺人的であつた。然し偶々時事新報が金輸出解禁問題に就て意見を廣く世上に徴せらるゝに會し、私は一短文を差出して置いたが、餘り短文で微意の透徹せざる恐があることに氣付いたを機會として、此一文を匆々の間に認めて改造記者の命に應ずることゝした。推敲の遑なき爲め數字等を十分に檢討し得なかつた。必ず誤算、誤解もあらう。讀者の叱正せらるゝあらば幸甚である。

(一九二一、八、一七發程前日朝脱稿)

歐洲の經濟社會は何時に爲つて復興するか

堀江歸一

戰後經濟沈衰の原因

歐洲の經濟社會は四年十一個月に亙る歐洲戰爭の爲めに、通貨に、金融に、外國爲替に、諸產業に總て其根柢とする所を破壞され、今や疲弊困憊の極に達したのである。何時に爲つたならば、此頽廢した狀態が挽回されて、歐洲の一角に景氣恢復の曙光を迎へ得るであらうか。此事は歐洲諸國の熱心に希望する所であり、又世界を擧げて注視して居る所であるに拘はらず、今日に至るまで、遂に何等の徵候すら之を認めるを得ない。斯くて歐洲諸國の經濟社會は不振に加ふるに、不振を以つてして涂る所を知らないのである。

何故に歐洲諸國の經濟社會が窮乏のドン底に陷つたかと云へば、其最大の原因は戰爭當時軍事費の財源に充てる爲めに、國民の所得を收用し、而して之を濫費した一方に、財源の一部分を公債の發行に仰ぎ、公債元利金の形に於て、戰後の今日に負擔を及ぼしつゝあるの一事に外ならない。諸國は固より軍事費に對する財源の一部分を增稅の收入に求めたに相違ない。而して其程度に就ては、自ら各國の間に高低の著しいものがあるとしても、尙ほ之を全體から見て、各國共に財源の大部分を公債に得たことの事實を否定するを得ない。若しも各國の爲す所が之に反して、財源の多くを增稅の收入に仰いだとしたならば、如何なる結果を生じたであらうか。戰爭の國民に加へる苦痛は戰爭當時金錢上の負擔に依つて、更に重く爲ることを免かれなかつたであらう、或は其爲めに國民の間に生じた好戰的感情を冷却するに至つたかも知れない。然も斯く金錢上の負擔の加へられる爲めに、一方に國民に勤儉的質素を盛ならしめ、他の一方に於ては、戰後に戰時の負擔を引延すことなきを得た道理である。然も諸國は戰時に國民の好戰的感情の薄弱になることを恐れ、公債に財源を漁る、大額面の公債に依つて、資本家の間に應募を得ることが困難に爲れば、出來るだけ小額面の公債を發行

し、又其拂込を前後何回にも分割して、下層社會の間に求めるような手段を取つた結果、公債は平和時代に於て想像されて居つたよりも、遙に大なる數量の發行を見ることゝなつた。

若しも斯る公債の發行高が當時に於ける國民所得中の貯蓄高を限度とし、敢て其範圍以外に出づることがなかつたとしたならば公債發行に伴ふ影響は單に生產上に供され可き資本の一部分を蠶食するだけに止まるのみである。國民貯蓄を奬勵する爲めに、公債に相當の高い利子を付することが必要と爲り、自ら金利歩合の騰貴する勢を助長するかも知れないが、影響の及ぶ所は單に是れだけであつて、他に何物のあるを知らない。然るに諸國に依つて發行された公債の數量は國民貯蓄の範圍內に止まる所ではなく、寧ろ貯蓄額に比較して、幾倍の多きに上つたのである。さうすると玆に一ツの疑問が起きる、各國は如何にして國民貯蓄に幾倍する程多額の公債を發行し、之に對する應募を得ることが出來たのであるが、抑も亦應募者は如何なる方面に資金を得て、斯る應募を爲すを得たのであるかと云ふことがそれである。然しながら是れは國家財政の運用に於ける幻術となす可きものであつて、詰り各國とも公債の募集を容易にする爲めに、通貨制度を撹亂することを辭さなかつたのである。即ち英國に於ては新に政府紙幣が發行されて、其一部分が諸銀行に融通され、諸銀行をして其取引先の內で公債に應募する者に對して、自由寛大なる條件の下に資金を貸付ける餘裕を有するに至らしめ、他の一部分は政府紙幣勘定其ものに於て、直接に公債を引受ける用に供された。更に佛蘭西に就て云へば、政府は佛蘭西銀行をして兌換義務の免除された銀行劵を增發させ、政府自ら直接に其一部分を借入れたり、銀行をして大藏省證劵を引受けさせたり、或は公債應募者に融通させた次第である。而して獨逸に至つては、此邊の手段は一層露骨であつて帝國銀行自ら銀行劵の增發に依つて、公債應募者に金融の便を與へ、斯く發行された銀行劵に對しては、普通の場合に賦課される制限外發行税を免除して、增發に便利を與へたばかりでなく、開戰と同時に全國に多くの貸付金庫なるものを特設し、同金庫に於て有價證劵商品の類を擔保に取つて、貸付金庫證劵と云ふ通貨類似のものを請求者に貸出すことゝしたので、帝國銀行の發行する銀行劵の外に、一種特別の通貨が世間に供給されることゝ爲つた。

公債山積通貨濫發

然らば交戰諸國に於て、戰時彼の如き巨額なる公債の發行されたのは、要するに通貨制度破壞の結果であると斷言して憚らない。即ち明治維新の當時我國に於て、又南北戰爭時代の北米

合衆國に於て不換紙幣と公債と相並んで增發された如く、今日の歐洲諸國に於ても亦不換紙幣の濫發と公債の山積とを見ることゝ爲つたのである。斯る狀態にして繼續したならば、其國の經濟財政を傷けることの幾何であるか、殆ど測り知るを得ない即ち通貨價値の低落は物價の騰貴を惹起し、富の分配の不公正を招くばかりでなく、或る階級の生活に甚だしき壓迫を加へる通貨價値の變動は諸外國に對する爲替相場の動揺を惹起し、各種の對外取引を不確實ならしめる。更に公債の山積は利拂高を加重せしめることに依つて、諸國の歲計に於ける收支の不均衡を來し財政の基礎を危殆ならしめるに止まらず、公債市價の低落其恢復の遼遠は金融取引の圓滑を害するのである。誠に通貨價値の低落と公債の山積とは歐洲經濟社會の惱みであつて、其經濟復興の機運の開かれることに對して、大なる妨碍と爲るのは、私の喋々を要しない所であらう。

斯の如く歐洲諸國に於ては、戰時財政の運用に關聯して、公債が增加し、其利拂をするだけでも、相當の經費を支辨しなければならず、斯くて諸國は戰爭終熄の當時何れも收入不足經費增加の狀態に陷り、其間に均衡を得る爲めに、新に公債を發行したり、政府自ら紙幣を發行したり、又中央銀行をして銀行券を增發せしめることを必要とした。英國は今日略ぼ此の狀態を脫し、財政を處理する常道に復して居るが、佛伊兩國の如きに至つては、到底其然るを得ないし、獨逸の如きに至つては今や印刷機械を利用して、(不換銀行券を增刷增發するの意)辛うじて財政を支持しつゝある次第である。即ち公債と通貨とが互に相牽聯して、歐洲諸國の財政を苦しめて居ることの一班は明瞭であつて、現に千九百二十二年度の豫算に據れば、英國に於ては經費の十一億九千五百四十二萬磅に對して、公債元利金の負擔は其約三分の一の三億四千九百五十九萬磅であり、佛蘭西に於ては、經費の二百三十一億七千九百萬法に對して、公債元利金の負擔は其二分の一を超ゆる百二十三億八千八百萬法に當るのである。如何なる國と雖も經費の三分の一、二分の一なりを公債の元利金支拂に投じる、隨つて自然他の方面に投ぜられ可き經費は不足勝ちに爲るとすれば、其れであつて尙ほ國民に負擔の重さを歎ぜしめざれば已まない。今や歐洲諸國は租稅の負擔も相當に重く爲つて居るが、通貨價値の低落と云ふ形で、更に特殊の負擔が國民に加へられつゝあるのである。即ち通貨價値の低落することは、既得の財産を所有する者、既定の債權を約定せる者に總て意料す可らざる損害を及ぼすものであつて通貨價値の低落は斯る地位に居る人々に覆面された租稅を賦課するものであると認める說の行はれる所以である。

此說の當否は兎に角として、歐洲諸國は如何なる方法を訴へて、斯る經濟財政上の苦境から脫出し得るであらうか。其方法として今日まで幾多の計畫が講ぜられた。第一獨逸に對する賠償金の賦課、第二ブラッセル、ゼノア、海牙諸會議に於ける列國經濟の協同、第三華聖頓會議に依る海軍協定、第四對米債務の棄却等は實に其重なるものであつて、今や本論執筆の際には英佛伊日諸國の代表者に依つて、倫敦會議が開催され、ゼノア、海牙兩會議に次いで、獨逸賠償金問題に關する關係諸國の意嚮に一致點を見出すことに汲々たる有樣である。

獨逸償金問題

戰捷國が戰敗國に償金を賦課し、之を收用することに依つて、戰爭の爲めに蒙つた傷痍を治癒し、更に經濟の振興に資せしめようとするのは、一個の政策であつて、先例の見る可きものは多々ある。即ち獨逸賠償金の問題に就ては、戰爭終熄の前から、國際間に種々の議論が行はれたが、ヴェルサイユ講和條約に於ては、結局聯合諸國民の生命並に財産に生じた損害に對して、獨逸をして賠償の義務を負はしめることの規定が認められた。右の賠償金は所謂間接戰費の賠償を目的としたものであつて、國家が軍事費として直接に支出した金額は此種の賠償金とは何等の關係を持たない唯、戰爭の爲めに國民の人命又は財産に蒙つた損害が其れ〲賠償金に依つて償はれ、國民の財力が幾何なりとも從前に比較して、豐富に爲つたならば、以つて國家の公債發行を容易ならしめるであらうし、又國家の賦課する租稅の收入を增加せしめるに至るであらう。斯の如くして次第に國家全體に利益を及ぼすに至ると云ふことが國家に於て間接軍事費に對して、賠償金を要求する理由に充てられるのである。然らば聯合諸國は斯る意味合の賠償金を領收することに依つて、果して經濟復興の目的を達し得るであらうが、此點に大なる疑の存するものがある。元來聯合諸國の間接軍事費は幾何の高に上るかと云へば、實に千五百十六億一千三百萬弗であつて、之を獨逸貨幣に換算すると、六千六十四億億四千八百萬馬克に爲る。之に對して聯合諸國は幾何の賠償金を領收するであらうか、償金の金額に就ては、聯合諸國と獨逸との間に於て、隨分甚だしき、掛引が行はれ互に彼の虛に乘じて、一文でも多くの償金を取らうとか、又は一文でも安く償金を値切らうとかするような人間の最も淺ましい根性を暴露したが、結局の處、千三百二十馬克と云ふ點に於て双方の同意を見るに至つたのである。然らば右の償金は聯合諸國の戰時に蒙つた損害即ち間接戰費の五分の一にしか當らない、聯合諸國民は戰後相當の歲月の經過した

今日に於て、五分の一の賠償を得た所で、何として之に滿足するを得るであらうか。然も此五分の一の賠償金であつても、無事に回收するを得たならば、以つて經濟振興の一助として、依賴するに値するであらうが、今日の狀勢を以てすれば、獨逸將來の支拂能力に大なる疑惑が伴ひ、支拂不能の日の來るやも測り難い以上は、聯合諸國が獨逸賠償金を通じて、戰後の經濟を復興せしめようとした計畫は全然水泡に歸したものと云はざるを得ない。

玆に於てか聯合諸國の經濟復興策は一轉して、諸國の間に或る協力を實現し、以つて復興の目的を達することに向つた。元來今回の戰爭に於て聯合諸國は經濟的手段に依賴して、一日も早く獨逸を倒壞しようとする考へから、經濟上の關係に於て聯合し、協力することを必要とした。斯くて、戰爭の酣なる千九百十六年に於て巴里に聯合諸國の經濟會議を開催し、將來の方針に就て、種々の決議を試みた。當時の決議は專ら獨逸に威嚇を加へることを目的としたものであつたが、其れにしても同時に聯合諸國の步調を一にするに資する所のあつたことは、論を俟たない。斯くて聯合諸國の聯合的態度は次第に發展して、或は諸國中央銀行間に於ける正貨準備の融通と爲り、或は軍需品の共同的購入が行はれ、或は國際間に於ける資金の貸借が餘程圓滑に成立さるやうに爲り、一國が他國に就て購入した物資に對しては、前者の公債を後者の市場に發行し、其應募金を以つて、代金に振替へたり、種々の點に於て、聯合諸國間を通じて、國際的經濟協力の實が示されたのである。戰時に於て斯る關係の生じた以上は、其れが戰後に繼續するのは、當然であつて、而して戰後經濟復興の手段として、最初に現はれたものは、實に千九百二十年に於けるブラッセル國際財政會議であつたのである。

ブラッセル財政會議

ブラッセル國際財政會議に於ては、世界多數の國から代表者が派遣され、通貨、外國爲替並に財政の三方面に關係ある問題に對して、種々の決議を公にした。其要點を申せば、（一）通貨に就ては、速に其下落した價値を引上げて、金貨本位制度を復興せしめることを要する、（二）爲替相場に就ては通貨價値の恢復と共に、國際貸借の關係を調節して、以つて爲替の安定を期することを急務とする、（三）國家財政に就ては、收支の適合を正しくし、公債に依賴して、收支適合の關係一時的に彌縫するが如き弊なからしめ、殊に此目的を達するには、軍事費に向つて、大なる斧鉞を加へなければならぬとする諸項に外ならない。

ブラッセル國際財政會議が財政上の見地に立脚して、軍備縮小、軍事費削減の必要を切言したことが、後に開會された華盛頓會議に幾何の刺戟を加へたかは、私の何とも判斷を下すに難しとする所である。然し兩者の間に斷つ可からざる或る脈絡があり、前者に依つて、軍事費に對する熱烈なる攻撃の行はれたことが、少なくとも後者に於ける決議の成立を容易ならしめるに與つて力ありとしたならば、此點に於てブラッセル會議の功業は閑却す可からざるものと爲るであらう。

然しながら通貨並に外國爲替に關するブラッセル財政會議の決議は全然空論を以て、見る可きものである。通貨の價値を高くする、即ち歐洲諸國の市場に横溢する不換紙幣を整理して、金貨に引直して、其確實を謀ると云ふことは、共に歐洲の經濟社會を復興させる見地から考へて、必要の手段であることに相違ない、何人も之に對して、異議を挾まないであらうが、四年十一個月に亘る歐洲戰爭の後を承けて、諸國の通貨制度に於ける混亂の甚だしきに至つた今日に於て、上記の如き仕事を成就しようとすることは、非常の難事業であつて、之に當るには財力に充分の餘裕ある國から援助を受ける見込みがなければならぬ。然もブラッセル國際財政會議に代表者を簡派した國は何れも斯る援助を他國に仰がなければならぬ地位に居るものばかりであつて、之を與へる餘力を有する國は一として是れあるを得なかつた。此一事がブラッセル會議に於て、歐洲經濟恢復の根本原則ばかり立派に定まりながら、之を實行する上に於て、一歩をも進むを得なかつた所以であると解される。

對米債務棒引き問題

然らば今日の國際經濟の狀況に於て、通貨や爲替の復興に就て、他國に援助を與へるだけの財力上の餘裕を持つて居る國は何處に在るかと云へば、世界の廣きを通じて、北米合衆國以外に之を求めるを得ない。斯くて歐洲諸國の眼は期せずして一個の合衆國に集注し、同國の援助に依つて、經濟復興の目的を達しようとすることに急なるに至つた。如何なる援助を合衆國に求めるのが適當であるか、合衆國をして歐洲諸國の爲めに公債に應募させ、其資金を諸國の合衆國から輸入する物資の代金に振替へると云ふことも、頗る價値ある政策ではあるが、歐洲諸國の北米合衆國に向つて希望する所は對米債務棒引きの形で、實際に現はれ來り、諸國は合衆國を一員とする會議に於て、此問題を解決し、世界經濟振興の機運を此一事に開かしめやうとしたのである。

固より世界經濟の狀況が今日の混亂を脫したならば、合衆國

の經濟も亦其物資輸出國たる關係に於て、有利なる影響を蒙ることは、論を俟たない所であらう。然も此利益を得る爲めに、歐洲諸國に有する債權の全部を棒引きにするが如きは、果して利害孰れに在りとす可きであらうか。今日合衆國の歐洲に有する債權は英國に對する四十五億七千三百萬弗、佛國に對する三十六億三千四百萬弗、伊國に對する十八億九百萬弗、白國に對する四億九百萬弗を始めとして、百十億弗の多きに上つて居る從來は合衆國は此貸付金に對して、利子を徴收せず、未收利子は其儘元金に組込んで來たのであるが、今後は當初の契約に從つて、利子を徴收することが出來る。歐洲戰爭前合衆國の色々の形に於て、歐洲諸國に負ふ債務は六十億弗と數へられ、其大部分は戰時經濟に於ける有利なる狀況に乘じて、之を償還するを得た其上に、百十億弗の債權を取得したことは、合衆國の經濟から云へば、非常なる强味であり、而して此强味は如何にして生じたかと云へば、戰時國民の努力に依つて、應募された合衆國自由公債の收入が振替へられた結果であり、又國民の生產に係る物資が輸出され、其代金が未收の儘、對手國に貸付けられた結果であつて、決して天から降つたものでもなければ、地から湧いたものでもない。歐洲諸國が合衆國の戰時に獲得した債權を以つて、恰も一個の成金的利得であるが如くに考へて、容易に之を棄却せしめよう、棄却しても、別に大した苦痛もあるまいと信ずるのが既に合衆國の反感を惹起す所以と爲るばかりでなく、合衆國が債權棄却から生ずる損失の的確であることに對して、債務免除に關聯して、歐洲の經濟が振興され、斯くて合衆國の物資に對する需要が增加して、爲めに生ずる利益に至つては、極めて不定の趣を免がれない。さうすれば合衆國が歐洲の經濟復興に關する會議などに參加して、對米債務棄却、對歐債權帳消しの問題に就て、渦中に投ずるが如き、先づ以つて之を回避するのが得策であり、又歐洲の一部に於て主張される如く、合衆國をして獨逸の賠償金債券を以つて、歐洲諸國の對歐債務を決濟する用に充てることを承認せしめると云ふ案に對しても、獨逸財政の根本問題の不定なる今日に於ては、比較的確實なる債權を喪失して、不確實極まる債權を收得するものである點に於て、非難の生ずることを免かれない。

ゼノア會議と獨露問題

斯くて歐洲經濟復興の會議に合衆國を是非とも參加せしめようとする歐洲の計畫に對しては、合衆國は出來るだけ逃避の手段を講じ、遂に大統領をして對米債務棄却の問題の議せられる會議には代表者を派遣しないことを聲明させ、事實ゼノア會議

には關係を結ばなかつたのである。ゼノア會議が先觸れの大であつたに拘はらず、實際には何等の成果を齎さなかつたに就ては或は露獨兩國が單獨條約を締結して、聯合諸國を威嚇する手段に出たとか、或は露西亞が債務承認の條件として、聯合諸國に賠償金の支拂を要求する態度を示したとか云ふような事實も擧げられるが、更に同會議失敗の根本原因とも云ふ可きものは、始めに企劃された對米債務決濟の問題が何としても解決不能の狀に陷つたことに外ならない。諸國が如何に戰後經濟的混亂の甚だしきに面接して居るが爲めとは云いながら、頼む可からざる所を頼んで、經濟復興の手段を得ようとしたことは、錯覺の甚だしきものとせざるを得ない。

國際經濟の復興を促進しようと云ふ見地から考へたならば、對米債務の棒引きと云ふが如き行ら可からざる事に執着するよりも、如何にして獨逸の經濟を發展せしめるか、又如何にして閉鎖された露國富源の開發に歩を進めるかと云ふ問題を解決することが急務中の急務である。獨逸に賦課された償金は聯合諸國の方から見れば、間接戰費の五分の一に相當する金額に過ぎないが、獨逸の方から云へば、實に負擔に堪へない過重の金額であつて、如何に其獨逸を苦しめつゝあるかは、馬克の價値の近時に於ける暴落を以つて、之を知るを得るであらう。佛蘭西の如きは獨逸國内の情勢如何に拘はらず、何處までも償金支拂の義務を强要し、獨逸の經濟的に亡國と爲る勢を誘致しても、意に介しない、或は之を以つて、我意を得たりとするものであるかも知れないが、斯の如くにして償金を支拂う獨逸にも、之を收受する聯合諸國にも何の利益があるであらうか。戰前に於ける獨逸の經濟的優勢は幾多の國に對して、競爭を及ぼし、其産業の存立を脅かしたこともあつたが、一方から考へるに、此獨逸の競爭のあつた爲めに、他の諸國は獨逸から價格の低廉であつて、品質の優良なる物資の供給を受けることが出來たばかりでなく、又之に刺戟されて、内國事業の經營上に工風改良を施すに至つたのである。獨逸國民の如き化學工業を始め特殊の事業に卓越した長所を有する者に對しては、何處までも其長所を發揮させ、世界を擧げて、其利益に浴せしめることが有益であり、又世界經濟を復興する一助とも爲るであらう。私が從來から獨逸に對して賦課する償金は獨逸の支拂い得る能力を以つて、限度とすること、此支拂を容易ならしむる爲めに、聯合諸國は獨逸に向つて原料品の供給を自由にしなければならぬことを論じて居る所以である。聯合諸國が遲蒔きながら此道理を解し、海牙會議に次いで、今や倫敦會議に於て、償金問題を議するに至つたのは、全然之を不問に付した從前の態度に比して

勝る所あるとしても、頭其佛蘭西の如きものを一員に加へて、能く圓滿なる協定を將來に見るを得るであらうか、其れとも結局獨逸の破産を招致して、經濟復興を妨げることゝ爲りはしないであらうか、私の心許なく感ずる所である。

更に同様の見地から吾人の主張する所は露國の經濟的秩序を復舊する一事である。露國が世界有數の農業國であり、其産出する農産物を外國に輸出し、一方に諸外國から工藝品の輸入を受けて、經濟を營み來つたことは著明の事實であつて、現に千九百十三年の外貿易表に徴すると、輸出貿易十四億二千八十五萬ルーブル內、食料品は、八億七百二十萬ルーブルであり、原料品並に半製品は五億五千二十二萬ルーブルである一方に、輸入貿易十二億二千四十七萬ルーブルの內製造品は四億五千三百四十五萬ルーブルの多きを占めて居る。然るに歐洲戰爭後露國の經濟狀態は急變し、千九百二十一年の統計に據ると、輸出は二千萬金ルーブル即ち戰前の七十分の一に減少し、輸入は二億四千八百萬金ルーブル、即ち戰前の五分一に減少した。更に此間露國の生産業が如何に荒癈したか、運輸機關が如何に破壞されたか、又露國輸出の頓挫に依つて、從來同國から供給を仰ぎつつあつた諸外國が如何に物資に缺乏を感ずるに至つたかは、吾人の現實に見るを得る事實である。然も斯の如く露國が經濟的に對鎖され、輸入の困難と共に、輸出の不可能を以てしたならば、啻に露國に取つて不利益であるばかりでなく、露國に戰前工藝品を賣却する關係に居り、戰後に之を復舊しようとする諸國や、露國に債權を有する英米佛の諸國亦不利益の影響を蒙り益々歐洲の經濟的に恢復する機運を妨害いするに至るであらう

英國に於ける經濟恢復の兆

斯の如く種々の方面から攻究して行くと、歐洲諸國なり、又は出來得べくんば歐米諸國なりの協力に依賴して、國際經濟の復興を期圖することは、最も希望す可き所であるが、容易に實現されると思はれない、之を實現せしめるに就ては、今日以上に強い程度に於て、諸國民の間に犧牲的精神の發達し、公共的觀念の釀成されることを必要とするであらうし、又此種の觀念なり、精神なりが發揮されたならば、對獨賠償金問題も、對露通商問題も今日の如き停頓を生ずることなく、餘程順調に解決されるであらう。歐洲諸國が他を助けるのは、即ち自ら助ける所以であることを知らなければ、是等の問題は到底解決の緒に就かないのである。然るに今日歐洲諸國は斯る考にまで徹底するに至らない。歐洲諸國間に於ける協力の極めて困難であることは、幾多の會議に於て證明されたが、諸國は此點に於て斷念

すると共に、一方に一國の獨力を以つて、多少なりとも經濟の復興を謀らうと念じて、已まない。而して斯る一國獨自の恢復計畫に於て、成效したものとして、吾人は英國を擧げるに躊躇しない。戰爭の繼續中から、戰後兩三年の間、英國の經濟社會に於て、最も大なる惱みとする所は實に輸入超過の劇增した一事であつて、戰前經濟上の關係の常調に居る際に、一億二三千萬磅に過ぎなかつた入超額は開戰以來非常の勢を以つて增加して、三億磅臺と爲り、四億磅臺を破り、結局千九百十八年に於ては、七億八千三百七十八萬磅の多きに上つた。此程度の輸入超過であつては英國は對外債權の收入を以つて、之を決濟するを得ない、其決濟を全うするには、多年外國に放下した資本を蠶食するの外に道を得ない。然も對外放資の元金を失ふことは英國の經濟的生活に取つては、致命的打擊を加へられる所以であつて、此點に就て、英國官民が憂慮を禁ずるを得なかつたのも、敢て異とするに足らない。然るに輸入超過も千九百十八年を最高記錄として、爾後次第に減少し、千九百二十一年に於ては三億七千五百萬磅と爲り、本年に至つては、二億磅臺に減少する勢の歷然たるものがある。此程度の輸入超過であれば、優に對外債權の收入に依つて、決濟される譯であつて、隨つて國民經濟の立て方に於て、大なる餘裕を得、國民をして安んずる所あるを得せしめた次第である。

然しながら英國が經濟社會に斯る恢復の機運を導いたのは、必ずしも一朝夕の事でなくして、多年に亙る努力の結果である。即ち英國に於ては戰後行政各部に根本的整理を加へて、經費に大なる節約を加へ、斯くて諸物價を低落させ、賃銀を引下げさせる端緒を得るに至つたことが貿易に有利なる狀勢を展開する所以と爲つたのであつて、戰後諸般の關係の混亂しつゝある際に於て、行政を整理したり、經費を節約したりしたことは、當局者の大なる覺悟に基いたものとしなければならぬ。而して斯く財政の整理されたことの結果として、公債を發行する必要が減少し、從來の如く政府紙幣を增發して、公債を引受けさせる必要の少なく爲つた爲めに、此事は自ら通貨の收縮を招いで、物價を下落するに至らしめた。即ち經費の削減、公債發行の不用、通貨收縮は自ら物價の低落を招き、物價の低落は更に經費の削減を容易ならしめるように、循環的作用に依つて、英國に於ける經濟復興の行はれつゝあることは爭ふ可からざる事實である。

右は一國の獨力を以つて、經濟の復興を期圖する場合に、如何なる原則に據り、又如何なる順路を經て、之を成就す可きものであるかの一斑を示したのである。而して事實を云へば、彼

興の道程たる、決して坦々、砥の如きものに非ずして、幾多の荊棘あり、又幾多の難關あることを認めなければならぬ。佛蘭西や、伊太利の諸國に爲ると、同じ聯合國でありながら、英國の如く未だ獨自の力に依つて、復興の處置を講ずるに至らない佛蘭西が今日に至つて、尙ほ聯合諸國多數の意嚮に反しながら獨逸賠償金の問題に就て、態度の戀々として、未練を極めるのは必ずしも獨逸膺めの考のみに依るものと見られない、同時に自國の經濟を復興するに容易なる手段を得ようとする考に基く所もあるのである、此點から論じれば佛蘭西に對して、多少同情を表する餘地を見出される譯であるが、本來獨逸賠償金義務の無理非道のものであつて、輕減の理由ある以上は、佛蘭西が之に依頼して、安を偸まうとするよりは寧ろ經濟上の常道に訴へて、恢復の道を求めることを以つて、正しいとしなければならず、又目的を達する早道であろとされよう。

私は何時に爲つて、歐洲の經濟社會が復興するか、正確なる時期を明にするを得ないことを遺憾とする。然も上述した議論に依つて、復興の時期の餘程遲延するに至ることだけは、斷言して差支ないと思ふ。

物價問題解決の難易

堀江歸一

物價調節難からず

物價問題を解決し從來不自然の程度に騰貴した諸物價を適當の程度に調節することは、我國に於て非常の難問題と目されて居るやうであるが、私を以つて之を見れば、此問題の如きは、施すに道を以てするからには、極めて解決の易々たるものと認められる。

「物價は幾等經つても少しも下落しない、隨つて此位調節に困難なものはない」と云ふとは、從來一部の人士に依つて、唱へられる所であつて、斯くて彼等は物價調節に絕望するようである。

然しながら我國に於て物價の調節が斯く困難に見へるのは、要するに歴代の政府が調節に就て、何等の努力を敢てしなかつた結果に外ならぬ。即ち原高橋の兩內閣は政友會年來の信條に依つて殊更に物價を高貴なる程度に置くことを以つて、經濟社會に好景氣を維持する所以であるとし、百方物價を騰貴させ、人爲的好景氣を煽揚することを能事としたのである。大正九年春の恐慌以來斯る政策の誤まれることに就て、多少悔ゆる所あつたようであつたが、政策を急變して、從來勢力を收め得た社會階級に之を失うことを掛念した爲か、依然として物價騰貴の勢を維持する方針に出で、、渝る所を見なかつた。固より一國物價の趨勢は政府の方針のみに依つて、左右されるものでないとしても、政府が物價を低落させまい、寧ろ之を騰貴させようとする考を以つて、萬般の施政を試みつゝある以上は、其事が軈て實際の状況を支配するに至ることは、論を俟たないのである

物價調節の諸策

原內閣が高橋內閣と爲り、高橋內閣が倒れて、加藤內閣に爲つたとした所で、世人をして其間に何等替り榮へのした感を懐かしめるに至らないが、唯一ッ私が以前の兩內閣に比較して、加藤內閣に聊か勝れる所ありはしないかと考へたのは、加藤內閣が物價の調節を敢行しようと云ふことを天下に宣明した一事である。以前の兩內閣の如きは、物價調節の如きは、全然之を念頭に置かなかつたのに對して、加藤內閣が調節の必要ありとしたのは、確に民意を容れたものと認められよう。政黨內閣に依つて、斥けられた民意が超然內閣に依つて、拾いあげられると云ふが如き、誠に時代錯誤の話であつて、私の不可思議に感じる所であるが、此事は先づ姑く措き、一體加藤內閣は如何にして其一月世間に聲明した物價調節を實行する考であらうか私は今日我國に於て物價調節の目的を達するには、政府に於て、左の諸策を實行することを以て、急務があると認める。

第一　經費を節約すること。

今日の經濟財政組織に於ては、一國の廣きを通じて、最も多額多量の消費を爲すものは、政府であつて、現に我國の如き、不景氣の今日でありながら、尙ほ政府が年に十四五億圓の經費を費消して憚らない。即ち政府は此程度の消費をすることに依つて、勤勞と物資とを需要し、其需要の盛なる結果或は物價を騰貴せしめ、或は勤勞の報酬を上進せしめて、已まないのである。隨つて今日物價問題を解決するには、先づ消費を節約する意味に於て、政府自ら經費を削減することが必要である。英米兩國に於て近頃物價が著しく下落し來り、之を戰前に比較して

英國に於ては一時三倍近くに騰貴したものが五割六七分の騰貴に過ぎないことゝ爲り、合衆國に於て二割二三分の騰貴に止まるが一方に兩國に於て經費の削減されたことも亦驚く可き程度に居るのであつて、其一斑は左の如くである。

	英吉利	合衆國
一九一八年	二、五七九、三〇一千磅	八、九六六、五三二千弗
一九一九	一、六六五、七七二	一五、八三七、五六六
一九二〇	一、一九五、四二八	六、七〇四、四一四
一九二一	一、一四六、一二三	五、七九九、七五八
一九二二	九一〇、〇六九	四、九一九、七三〇

隨分思い切つた經費の削減であつて、此程度の削減であればこそ、其物價の趨勢に有利なる影響を及ぼしたことも想像するに餘りあるであらう。

第二金の輸出禁止を解除すること、

我國從來の物價騰貴が通貨並に信用膨脹に胚胎することは、蔽ふ可からざる事實であつて、物資に對する通貨並に信用の關係を正しくし、以つて物價調節の効果を擧げようとする以上は、金の輸出禁止を解除し、之を通貨收縮の一助たらしめる必要がある。金輸出の禁止は貿易上輸出を奬勵して、輸入を抑制する目的を持つて居るのであつて、紐育宛爲替相場が四十九弗八四六の平價に對して、四十七弗八分の七と云ふが如き、低い點に維持されて居ることの如き、金輸出禁止の結果に外ならない、隨つて今金輸出解禁が行はれたならば、右の爲替相場は平價に近い所まで上進し、輸入業者に便利を與へることは、論を俟たない。一部論者の恐れる所は斯の如くして輸入の增進を促す一事に外ならないようであるが、從來の如き輸入抑壓の政策が我國の爲めに謀つて果して可なるものであつたらうか。輸入の抑制と云ふことに對しては、我國多數の人士は直に贊成を表はすようであるが、我國の如き現に其輸入品の內には棉花、皮革、羊毛を始め幾多の原料品がある。然らば是等の輸入を不利にし、困難にすることは斯る原料品に依つて、製造された既製品の價格を高からしめ、其輸出に困難を加へる所以と爲らざるを得ない單に金輸出禁止に依つて、輸入を抑制し得るとして、滿足する者の如きは、遂に度すべからざる痴者とす可きであらう

第三小賣相場に或る干渉を加へること。

我國に於て卸賣相場と小賣相場との間に大なる鞘開があり、然も前者が下落しても、其下落は必ずしも後者に及ばないが、前者が騰貴すれば、之に倍從する勢を以つて、後者に騰貴を來すと云ふような不合理の事實を生ずるのは、一に小賣業者が市場に跋扈してい消費者たる得意先を壓迫する結果に外ならない

然らば何故に斯の如く小賣業者が跋扈するかと云へば、其れは産業組合法の下に、同業者同志の間に一の地域を範圍として、組合を作り、一方に新に競爭者の起ることを防ぐと共に、他の一方に組合の間に賣價を協定し、獨占に近い狀態を現出するからである。今や同業組合の實際に爲す所は其目的とする本來の所業を逸した非難を免かれない。物價問題殊に小賣相場の方面に於ける問題を解決するには、先づ同業組合の跋扈を掣肘するのが急務であつて、其れには産業組合法第六十一條の規定に據り、斯く暴利獲得の目的を以つて、卸賣相場に比較して、法外に高い小賣相場を維持する小賣業者を以つて、公共の利益を害する虞れあるものとし、彼等の組合に解散を命じて、自由競爭の行はれる餘地を開くことを以つて、必要とする。卸賣業者や生産者が團結の力を利用して、物價を不法に左右しつゝある場合には國家の彼等に爲す所も亦小賣業者に臨むと同樣でなければならぬ。

第四、市場制度並に消費組合の改善

市場制度を改善して、生産者と消費者とを接觸させ、商業上に於ける無用の手數を排除し、消費組合を改造して、生産的のものとすることも、亦物價調節策として必要である。

以上諸策の內には、豫算に依つて、經費の認められない限り直に實行するに困難なるものもあるが、一方に其或るものに至つては、當局者の決心に依つて、今日直に實行することを難しとしない。第二の金輸出禁止解除の如き、第三の小賣業者に對する干渉の如き即ち其類である。又小賣業者は暴利獲得を禁ずる趣意を以て、彼等の組合を掣肘する以上は、政府自ら鐵道に專賣業に獨占的利益を貪る所業も亦之を愼しまなければならぬ道理であつて、斯くて自然に鐵道運賃引下、專賣價格低減の行はれること〻爲るであらう。而して是等二者の如きも亦政府の一令を以て、能く之を行い得るのである。

加藤內閣は無智か無誠意か

然るに加藤內閣の物價政策は今日果して如何なる狀態に居るのであるか。物價を調節すると云ふことだけは之を聲明したが、有效なる政策に至つては、一として其行はれたものを見ないと共に、目前に行い得るものも、之を行つて居らない。或は近頃世間に行はれる節儉の宣傳とか、儉約デーの實行とか云ふようなものが加藤內閣の指金に出たものであつて、之に依つて物價調節を行うとする趣向でゞもあれば、是れこそ世間を愚にするの甚だしきものである。或は閣員の間に申合せをして、互に儉約をしようとか、食事の際に

の皿數を減じようとか、閣員を招待する宴席に於ては、成る可く料理を質素にして與れとか云ふような方法で、大に世間に節儉の風習を盛にし、自然消費を節することに依つて、物價を低落させようと云ふ計畫もあると云ふことである。私は之を耳にして、大正の今日、恰も德川時代に行はれたと同樣の御儉約令に接するの感なきを得ない。如何にも修身齊家は躬行實踐を重しとしなければならぬ。閣員が自ら儉約をすることを必要とし他人に勸める前に、自ら之を行うとするのは、必ずしも不可なりとしない。然し今日の國務大臣が斯る所業を敢てしたからと云つて、何程の感化を國民に及ぼすであらうか。明治初年西鄉南洲とか、大久保甲東とか云ふような一流の人物が政局に當つて居つた場合であつても、其れ等の人々の風格が如何なる處まで他人を支配したかと云へば、彼等の門に出入する少數の輩に過ぎなかつたであらう。今日は一般に民智が進歩し、一方に國務大臣の人物標準は餘程低落した次第であつて見れば、大臣自ら節儉の範を示した所で、其れが國民の生活を支配し、物價問題を解決するに足りると考へるが如き、自惚れの甚だしきものとせざるを得ない。斯る些事に拘泥して、重大なる政策を閑却するようであつては、加藤內閣の前途も思い遣られるではないか。

經費天引は如何

經費の二割天引きとか、二割五分天引きとか云ふことが始め市來大藏大臣に依つて、主張されたようであつた。國務膨張、經費增嵩の甚だしきに至つた今日に於ては、此位の果斷にでも出でなければ、財政の規模を縮小するを得ないであらう。私は此見地に於て天引說に贊成したのであつて、既に天引を行う以上は、一切の新事業費も棒引きにし、公債財源の事業費も削減し、餘程極端と思はれる程度まで、消極主義を斷行しなければならない。消極主義も此位の處まで徹底したならば、以て物價低落の大勢を招致するに足りるであらう。現に英米兩國の經費の如き三割引にも、四割引にも當つて居る。然し我國で今消極主義を行うことは、原橋高兩內閣の施政を根本から覆すものであつて、果して加藤內閣に依つて行はれるかどうか、疑問に屬すると共に、政友會なるものが朝野孰れに居るを問はず、物價調節の妨碍を爲して居ることは吾人の心憎く感ずる所である。

物價問題の如き、解決するに正しき道を以つてしたならば、何でもない事であるのに、從來の政府は之を解決しようとしなかつた。斯くて日本は世界第一の物價騰貴國と爲り、又世界第一の金利騰貴國と爲り、貿易は次第に逆勢を加へ、產業は不振を加へ、經濟社會の如何なる方面を見ても、吾人に不安の念を重ねしめざれば已まないのである。偶々物價調節の必要を認める內閣が出ても、無智の致す所か、其れとも誠意の足らない爲めか、殊更に容易なる方法は之を回避して、益々問題を岐路に彷徨せしめる。斯の如くして物價問題が何時まで經過しても、解決されず、最後の行詰る所まで行つたならば、果して如何なる結果を生ずるであらうか、私の寒心に堪へざる次第である。

「女性改造」の發行

本社にて計畫中なりし婦人雜誌「女性改造」は九月中旬を以て發行す、責任と、自負とを以つて我々が努力せし同誌が、社會に何等の貢獻をなす能はずとせば、我々は舌を喰ひ切りて江湖に屍を呈すべきのみ。

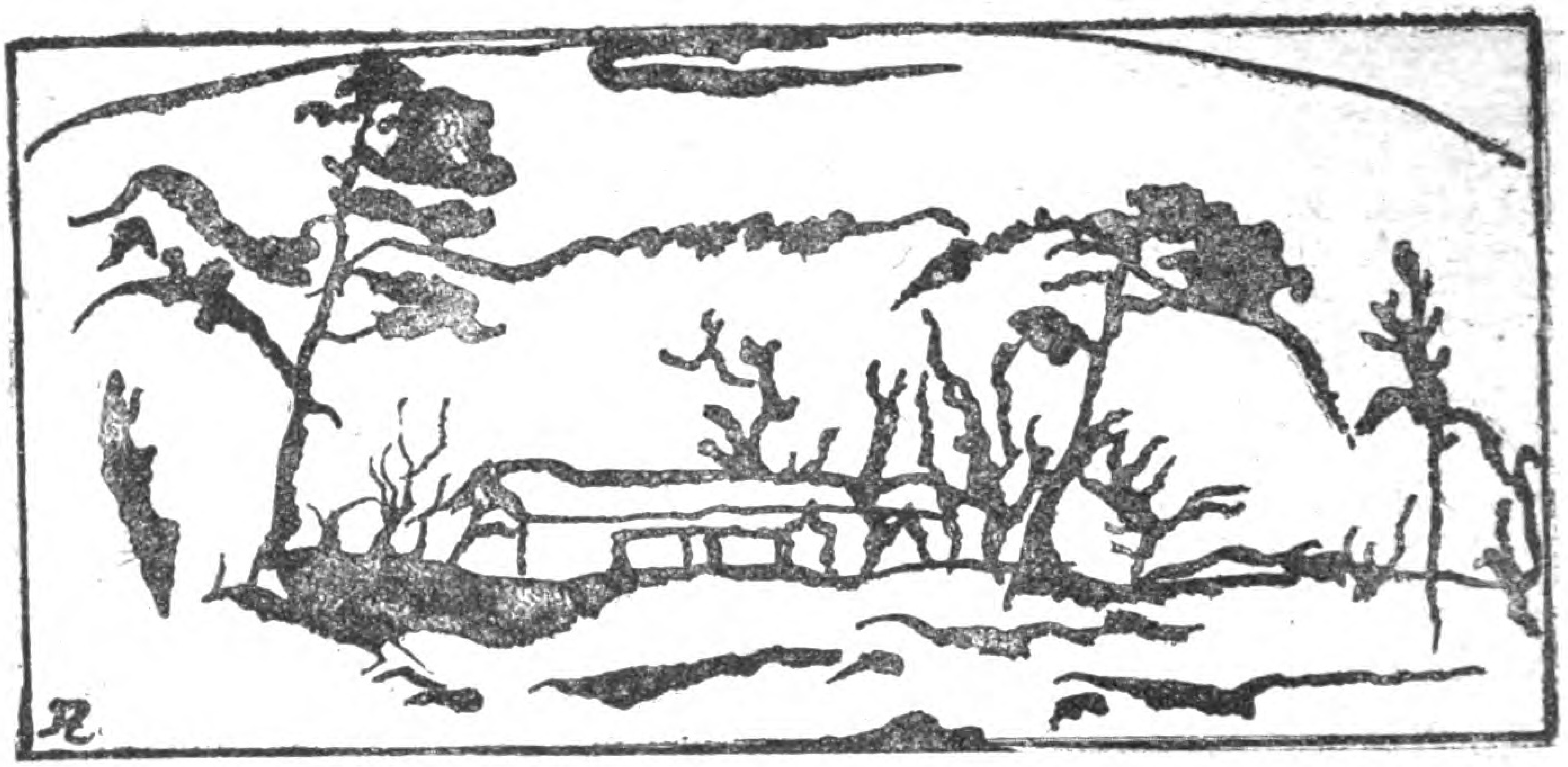
改造社

アインスタイン教授

本社の招聘にて來朝するアインスタイン教授及令夫人助手一行は十月八日マルセイユ發十一月十六日神戸着の旨本社へ通告ありたり、追而日本にての豫定は十月號乃至十一月號にて詳細に發表すべし。

改造社

九月増大號創作



不逞鮮人

中西伊之助

一

朝が早かつたせいか、狹い固いセクションに腰をかけて、うつら〳〵と居眠りをしてゐた碓井榮策は、自分の乘つてゐる汽車が停つたのにふと氣がつくと、すぐ窓の外を覗ひてみた。しかしあたりはステーションらしくもない野ツ原のまん中である。彼は汽車に故障でも起つたのでないかと思つて、やや不安になつた。いつかこの線では、不意に暴徒が進行中の汽車を襲つて、存分に掠奪をやつたと云ふことを聞いてゐたので、もしやまたそんなことに出くわしたのではないかと、彼は突嗟に感じたのだ。

『さあ、ここで降りるのですよ』

榮策の伴れて來た朝鮮人の通譯が起ちあがつて彼にかう云ふ。

『おや、ここで降りるのかい……？』

と、榮策は意外な容子をして、

『君、これがS驛かね？』

とまた訊いた。

『えゝ』

通譯は別に怪しみもしないで軽い返辭をするとさつさと扉口の方へ出て行く。それで榮策も急いで麥わら帽子を棚から取るなり、その後について行つた。

一緒に降りる人々は、五六人の朝鮮人ばかりであつたが、先になつた者は、客車の階段(ステップ)から二三尺も下にある地べたへ、ぽい〳〵と蝗が跳ぶやうに飛び降りた。通譯も榮策も、大きい石塊で一ぱいになつてゐる上に跳ぶと、靴の裏に石を咬んで辷つて倒れさうになつた。

『大變なステーションだね』

と榮策は呆れてあたりを見廻した。客車はたつた二輛ばかりしか連絡してゐないのに、後部の方から降りる人は、杉板かなにかで造つてあるプラツトホームに足が屆かなかつた。そこからだいぶ隔つた野中に、ちよつと睹ると共同便所としか思はれない驛の建物らしいものがあつて、汽車から降りた人は、その間の廣い明き地に、細く踏み固められた小徑をのそ〳〵と歩いて行つた。こんなところになんの必要があつてステーションなどを拵へたのかさへ怪しまれるくらゐだ。しかし汽車の發着毎に、かうして人々が乘降するのだから、まんざら無用でもないやうに思れる。今乘つて來た汽車が曠い野の空氣を顫はせて、發車の汽笛を鳴らすと、勢よく白いスチームを左右交互に噴き出して、生物は俺ばかりだと云はぬばかりに、大きい響を立てて出て行つた。驛長らしいのが、それでも帽子だけはここも同じ赤いモールの卷いたものを冠つてスタフに着いた長い釣の端を握つて振り廻しながら、散歩でもしてゐるやうな容子で歸つて行くのが見える。榮策は、向ふへ長く延びて、ぎらりと眞白く光つてゐるレエルの上を、どん〳〵と走つて行く汽車を眺めると妙に名殘惜しい氣がされた。もう少しでその姿が、小高い丘の彼方に消えてしまふのだと思ふと、彼は、遊びに耽つてゐた子供が、ふと自分が夕闇の中に佇つてゐることに氣づいた時と同じやうな心細さを感じた。榮策が今度の旅行の目的を友人達に話した際に、それは餘り無謀だと云つて、しきりに止められた言葉が、今更のやうに思ひ出される。彼は今朝宿を發つた時の心持と、今の心持に、もうだいぶ隔りのあることに氣がついた。そして今の心持が、ほんたうの彼の地の心持であることもよく解る。彼が危險を冒して、この國の西北部を根據地としてゐる所謂不逞鮮人の巣窟に這入つ

て、彼等と心から語つてみたいと云ふヒロイツクな企ても、もうその一歩の現實に打つかつて、彼の心持の地が少しづゝ透いて見えたのである。しかしそんなことには一向無關心な通譯は、自分のサービスのためにさつさとそこの小徑を先になつて歩いて行つた。プラットホームと、驛の建物が、何の必要があつてこんなに隔つてゐるのだらうと榮策は思つた。そんなことまでが妙に彼の心へ絡まるのを感じる。それでも改札口には、鮮人らしい驛員が立つてゐた。見たところ五六人で一ぱいになりさうな待合室へ、二人は改札係に切符を渡して這入つたが、榮策はそこに這入るなり、殆んど本能的に、驛員室を覗いてみた。それは日本人でもゐはしないかと思つたのである。プラットホームにゐた驛長がたつた一人突つ立つて、大判のなにかの表らしい紙に、鉛筆で書き入れをしてゐる。その驛長はたしかに日本人であらうと思つたので、榮策は窓際に寄つて行つた。

『あの、ちよつと伺ひますが……？』

彼はまづから努めて明晳な日本語で、自分が日本人であると云ふことを相手に識らせようとした。

『これからKまでは、どのくらゐの道のりでせうか？』

とまた訊いた。しかし彼は、今更らそんなことを問ふ必要はなかつたのだ。發つ前に詳しい地理を調べて、S驛からE面K洞までは、四里半であることは、もうちやんと識つてゐた。けれど彼は、この驛長と話すのが或は日本人と言葉を交はす最後ではないかなどと、センチメンタルな感じもされたからだ。驛長はふと書き物の手をやめて、顏をあげると、榮策の姿を眺めた。まだ三十にも滿たないだらうと思はれる靑年で、鼻の下に短かく剪り込んだ髭のある上品な顏の男であつた。

『あなたは、今頃からKまでお出でになるのです？』

と少し驚いたやうな容子で、榮策を凝つと見て、機械的に上の大時計にちらりと視線を投げた。

『えゝ……』

榮策は唯だから答えたが、なにかぐつと壓えつけられるやうな氣がした。その人がここに長く住んでゐ

て自分の知らない大きい暗いものに、始終當面してゐるのではないかと思はれたのだ。相手は榮策の姿をつく〴〵と眺めながら、

『Kへは、これからまだ四五里もありますよ。今頃からそんなところへ何用で行かれるのですか？』

と、いかにも榮策の無鐵砲な行爲をたしなめるやうな口調である。そしてその言葉の細かい纎維にまで、理智が透き徹つてゐるやうにも思はれた。

『…………』

すると榮策はなぜかものが咽喉に詰つたやうで、急に返辭が出なかつた。彼は無意識に背後を振り返つて、そこに佇つてゐる通譯をそつと瞥た。通譯は榮策の無駄な會話に痺れを切らしてゐるやうに、くわへてゐた卷煙草をコンクリートの上へ投げ捨てると、それを靴の踵で踩み躙りながら、

『早く行きませう』

と云つた。しかしなんだか底力のない聲のやうにも榮策には思はれた。

『うん、行かう』

榮策もそれとあまり變らぬ感じのされる返辭をした。あたりは、五月初めの强い光を受けて、隅々まで輝いてゐるがかうした二人の容子は、それにはふさはしくない線の弱さが見えた。

『どうもお邪魔しました。とにかく四五里なら、これから急いで行けば、午後の三時頃までには着くでせう……』

榮策は相手にさう訊くのか、それとも自分でさう決めてゐるのか、頗るあいまいなことを云つて、驛長に輕く頭を下げた。そして急に自分の怯懦な心を鞭韃するやうな意氣組みで、通譯を促しながらそこを出て行かうとした。と、驛長はすぐ榮策の背後から聲をかけて、

『もし〳〵、なんならあなた方は、今日はここでお泊りなつて、明朝早くお出かけになつてはどうです？、急な用向でもなければその方が安全ですよ』

と云ふ。榮策はその聲を聽くと、泌んみりとした温かいものが、自分の胸に溶け込んで來るのを感じた。いかにも自分の同民族の血をもつた人の聲であるやうになつかしく受け入れられる。彼は不思議に心を惹かされた。

『はあ、ありがたう………』

二足三足歩き出したのを、またふと立ちとまつて、かう云つたが、ちよつと考へて、

『まあ、行けるだけ行つてみます。――途中でだめでしたら、その時はどうかお願ひします………』

と、思ひ切つたやうに歩き出した。

『さうですか、ではさうなさい。しかしまあよく氣をつけてゐらつしやい。――通譯と二人ですね……？』

驛長は、凝つと眼を据えて、鮮人服を着てゐる通譯の姿を眺めた。その考へ深かさうな驛長の視線を受けた通譯は素知らぬ顔をして向ふを向いてゐた。それは互ひに故意ではなかつたに違ひはないが、榮策は驛長と通譯の間に一種の緊張味を帶びてゐるやうな容子を見ると、妙になにかの暗示があるものの如く思はれてならなかつた。そしてふと今までの驛長と話し合つたことが、みんな自分ばかりの必要であつたのだと思ふと、彼は更めて通譯の姿を熟視したいやうな氣になつた。しかしそんなことは、どんなに榮策の理性が曇つてゐても、考へられることはできない。最初通譯は、榮策の今度の旅行を危險に思つて、一緒に來ることを斷つたのである。それを榮策があまり熱心に勸めるので、漸く承諾したのだ。通譯はこれから行かうとする地方に生れた人で、今度の旅行には最も適任者であつた。たとへその地方に生れて、その人々と同じ環境に養はれてゐるにしたところが、この場合、さう云ふ人に少しでも不安を感ずることは、甚しい矛盾であると榮策は思つた。

『えゝ、この人が、あの邊の地理を非常によく識つてゐてくれますから、大丈夫です。』

と彼は今までの妄想を一掃してしまふように、そしてまた通譯に對して、十分の信頼を拂つてゐるやうにかう答へた。

『それでは行つて參ります』

彼れはかう云つて頭を下げるなり、さつさと驛の構内を出た。しかしやつぱり彼れの心は靜かなものではなかつた。

二

大陸的な、水分のない空が、遙々とつづいて、透明な、秋に見るやうな空氣は、遠くの地平線の果てまでも眼を屆かせるが、雄大な山の起伏もなければ、陰影の深い森や、林も見えない。がらんとした空虛な感じをさへ與へる。夏らしい草の色は野を彩つてゐても、人間の呼吸にやわらげられたやうなところは少しもない。すべての自然がなまのままで晒らけ出されてゐる。赭土の地肌が傷ついて剝げ爛れた犬の軀のやうに、ところどころに露はれてゐるが、そこだけが、なにかを耕作してゐるのではないかと思はれるばかりだ。珍らしい一筋の細い路があつて、白々した石ころが路上に跳び出してゐる。今汽車を下りた二三人の鮮人が、晒し金巾かなにかの汚れた包を背負つて歩いて行く。榮策達もその路を辿つてゐた。

弓形に晴れた空には、鱗雲がだんだらになつて浮んでゐたが、地平線近くは、黝ずんだライラック色になつた蝸牛のやうな形ちになつてゐる。ちやうど巨人のゲンコツにも見える。なにかを呪咀する大きい眼玉にも見える。それが妙に榮策の心を惹く。背後を振り返つてみると、曠野のまん中にぽつねんと突立つてゐる色褪めた未決衣を纏つた囚人のやうに、あの親切な驛長のゐる驛の屋舍が、この淋しい二人の探險者を見送つてゐる。――しかし榮策の心には、今までの神經過敏らしい不安はいつか拭ひ去られてゐた。どつしりとした、どうにでもなれと云ふやうな、極めて捨て身な、彼の平常に潜んでゐるつら魂がしつかりと彼の全身を摑んでゐた。

『三時頃までには行けるだらう……？』

かう一言通譯に云つたきり、榮策は默り込んで歩いた。俯向き勝ちに、――彼がいつもするやうな――靴の踵に力を入れて、たとへ夏であらうが、兩手はきつと兩の衣兜に突込んで、それを固く握り緊めて、憂欝らしく眉をひそめて歩いた。彼は元來がさうした憂欝な男である。たとへ人の前では、常には快活らしい口を利いたり、振舞つたりしてゐて

も、内心はいつも重い鎖のついた牢獄にゐるやうな暗い悩みに沈んでゐた。彼は聲高く笑つてゐても、ふとそれが、自分の憐れな啜り泣きではないかとさへ思はれるやうなことが常である。事實にも、彼は女が泣き出したのかと思はれるやうな、妙な笑ひ聲を立てる男である。彼が人の前で快活らしくして見せるのは、それは彼の世渡りの方便に強いられてゐたのに過ぎないので、さうしなければ、彼は飯を食つて行かれなかつたのである。それほど物質的には、たよりどころのない男であつた。弱い昆虫類などには、自分の身を守るために、いろ〲の武器をもつてゐるが、その武器の中にもかなりいかゞはしいのがある。それと同じやうに、彼にも他人の前に快活らしく裝ふ武器を備へてゐた。で、もし積極的に彼が外界から、虐げられたり、迫害を受けたりした場合、彼にはもうそれ以外に妨ぐ武器を持たなかつた。そんな時、彼は苦しまぎれに、捻ぢあげられた米搗ばつたかなにかのやうに、その小さい口から赤黒い呪咀の毒汁を吐いた——今度の旅行も、その毒汁の吐き場を探がしに行くやうなものである。——

榮策は、これから訪ねようとする人の面影を描きながら、もうかなり疲れたと云ふ風で歩いた。彼はあまりその人については知らなかつたが、彼はその人に紹介してくれたある朝鮮の青年から一通りのことを聞いてゐた。青年は、その人の娘の婿になる筈であつたが、數年前に、この國で、ある民衆運動が起つて遂に大きい騒擾の渦を捲き起した時、まだほんの女學校の生徒であつたその人の娘は、若い女ながらにその恐ろしい渦中に入つて死んでしまつた。娘を喪つた父親は、すぐ京城の生活を引拂つて田舎へ籠つたのだと云ふことであつた。その人は、今では排日鮮人團の首魁であると目されてゐる。これから榮策の行かうとするその地方は、幾つものさうした團體があつて常に不穩の情報を傳へては、人心を戰慄せしめてゐる。

同じやうな路がいつまでもつゞいてゐて、どこを眺めても平凡である。ぼしや〲と小松の生えた石ころだらけの丘を幾度も越える。その度びに、榮策はあたりを見渡した。人影はどこにもない。さすがに彼は不安な氣がする。自分達ばかりが、平地からは丁度いい目標になるところを歩いてゐるのだ。自分の白服や、通譯の仕立下しの純白の周衣（つるまき）が、露骨に輝く、遠くのもの蔭から覘ひ撃ちをするのには最も適當であるなどと思はれた。いつだつたか、ある府廳の役人が

救濟金を携へて田舍を旅行してゐると、一揆の下に脆くやられて金を奪はれた話を聽いたが、その地方は、たしかにこの邊だなどとも、榮策は考へたりした。珍らしく起伏の大きい山の背が見えた。近づいて行くと、一角が崩れて、そこが谷合ひのやうになつて、その谷合ひが路になつてゐる。榮策はそこに狹まつた路を歩いて行つた。彼は雪崩れかかつてゐる地層の裂け目をふと眺めると、今にもまた高いところから、ずる／＼と辷り落ちて來さうに思はれる。あの上にある大きい地層が、どつかりと崩れかかると榮策等は一たまりもなく埋められてしまふ。彼は急ぎ足になりながら手を差し伸して、そこにある土砂を一すくいしてみた。きら／＼した花崗石のまざつた、白けた代赭色の土砂であるが、まるきり粘質がない。あの高い山の一角を一突きすると、どか／＼と總崩れとなりさうである。榮策はそんな感がされた。

そしてその感じは、彼の朝鮮の民族にもつてゐる感じと殆んど變らない。たれかその中の一人が、たつた一言でも自分達の壓制者に向つて、反抗の叫びをあげると、全民衆は聲を合せて熱狂する――それは恰も朝鮮の地質にそつくりであるなあと、榮策は一握りの土砂に觸れながら思つた。土人には珍らしく二人ほど行き會つたが、榮策の背廣姿をぢろ／＼と眺める。その生々しい視線を受けると、彼はあまり好い氣持はしなかつた。行き過ぎてから、向ふは幾度も振り返つてみては、互になにか囁いてゐるのが、榮策にはどうも氣になつた。彼も顧み勝ちに歩いた。

『この山から向ふが、不逞鮮人團の根據地になつてゐるのですよ』

と通譯は、今の土人達で思ひ出したやうに云つて、

『いつかは、この山を堺にして、警察隊と不逞鮮人と戰かつたのですよ』

とまたつけ加へた。榮策はそれを聽くと、軀が急に引き緊つて來る。

『愈々こゝからが危險地帶だね』

かう榮策は云つたがもうそこで山峽は盡きて、その向ふに、眞白く光つた河が横つてゐるのが見えた。

『ほう、隨分大きい河があるね』

と少し驚いて通譯の顏を眺めた。

『ええ、あの河を渡れば、もう三分の一です。』

通譯はかう云つたが、ふと今來たばかりの山峽を振り返つて、

『あの山の腹に、その時鐵砲で殺された鮮人がだいぶ埋めてあるのですよ』

と說明して聽かせる。榮策はさう云つた通譯の顏を凝つと見入つた。自分達の同胞が、他の民族と戰つて死んだのである。たとへその名分はいかにあらうとも、さうして死んでしまつて、ここの土の下に骨を埋められてゐるのだ。この鮮人の通譯は、どんな感慨を懷きながら、そんなことを相手に話してゐるのだらうかと榮策は思つた。彼はふと、西鄕隆盛の死んだと云ふ城山を思ひ出した。とにかく人間が自分より强大なものに反抗して死んでしまふのは、壯烈なことだなどと思ふ。汗がたら〳〵と流れて出る。二人はかなり疲れてしまつた。

『あの河を渡れば、もう樂だ』

通譯は汗を拭き〳〵自ら慰めるやうに獨語を云つてゐる。

河の界隈は、灌漑が行き屆いてゐるのか、草などが非常によく繁つてゐた。青々と伸びた蘆の影に、だだつ廣い、ちよつと見ると舳も艫もない長方形の箱のやうな小舟が、一艘浮んでゐる。あたりを見渡しても船頭らしいものも見えない榮策には見たこともない、翼の眞黑い、胸毛の黃色な、鳩ほどもある鳥が、舷にうづくまつて、可愛い首を振つて、二人の姿を眺めてゐたが、飛ぼうともしなかつた。

『おーうーいー』

通譯が大きい聲をあげて、船頭を呼ぶと、鳥は驚いて向ふ岸へ飛んで行つた。そしてその聲に應じて、

『おーうーいー』

と、どこかで直ぐ聽えたが、それは谺であつた。

『おーうーいー』

また通譯が呼んだ、やつぱり揶揄ふやうに谺がするばかりである。榮策は疲れた脚を踏みこたへて、河面をぼんやり

と眺めてゐた。大陸性の緩やかな流れが、ところ〴〵どんよりと澱んで、黄濁色の渦がぬら〴〵と蠢めいてゐる。たいして廣い河でもないが、水底にはなにか魔性のものでも棲んでゐるのではないかと思はせる凄味がある。もうだいぶ西に傾いた陽を受けて、蛇の鱗のやうに光つてゐた。そんな水面を眺めてゐると、榮策は今そこで出會つた土人の眼を聯想した。その土人の眼とこの河とが、この地方一對の氣分をそつくり作り出してゐるやうな感じがされる。通譯が幾度呼んでも船頭は答えなかつた。こんなところで、あまり大きい聲を出すのが、榮策には氣が措けてならなかつた。

『船でなければ渡れないのかしら……どこかに橋でもないのかね？』

と榮策は通譯にこんなことを訊いてみた。

『朝鮮には橋が少いのですよ。こんな田舍には、とても橋なんかありません』

から通譯は答えると、また大きい聲をあげたが、谺の外には應じるものはない。榮策はもう苛々し出したけれど、通譯は平氣なもので、今度はあたりの草叢の中へのそ〴〵と這入つて行つた。身の丈ほども伸びた草の蔭を、腰を屈めて横からすかして見たり、持つてゐるステツキで横なぐりにしたりしてゐる。小鳥の巣でも探がしてゐるやうだ。

『その邊に寢てゐるだらうね？』

榮策はせき〴〵して訊くと、

『えゝ、どこかに寢てゐるのですよ』

と、通譯は騒ぎもせずにまだごそ〴〵と歩いてゐる。

『困つたな、──こんなところでから暇を取つちや』

今度は不平らしく榮策は呟いた。

『この前に來た時は、澤山一緒になつて、すぐ渡つたのですよ──あの時は、内地人も隨分ゐた』

と通譯は獨語のやうに云つたがその言葉が榮策の心を薄暗くさせた。船頭はまだ見つからない。さすがの通譯も少しやけになつて怒鳴つてみたが、依然として利目がありさうにも思はれぬ。困り切つて、二人はぼんやりと佇つてゐた。

しかしその眼だけは、始終あたりに注意をくばつてゐる。

『あゝーなんだい、あんなところに寝てゐやがる』

と、通譯は勢ひづいて、それでもぷり〳〵とおこりながら、大股で歩いて行つた。榮策もその方へ視線をやると、河岸の楊柳がこんもりと枝を張つてゐる蔭に、行き倒れのやうな姿で、軀を大の字なりにして仰向けになつた船頭らしい男がゐた。も少し軀を動かすと、河岸から辷り落ちさうになつてゐる。汚れてはゐるが、白い上衣や袴は、楊柳の重なり合つた葉を透して明るい陽を受けると、まるでオリーブ色の人間がころがつてゐるやうだ。

『のん氣なもんだね』

と榮策は呆れて呟いた。通譯はそばへ行くと、靴の尖で、しきりにその男の脚を蹴つてゐる。しかし船頭はなか〳〵起きさうにもない。しまいには、通譯は、突慳貪に怒鳴り出しては、しきりに靴で蹴つた。それでも伸ばした兩脚は動かなかつた。たうとう、腕を握つて引つ張り起したので、船頭はむくりと體を擡げて、きよとんと通譯の姿を眺めた。そして二三度顔を撫でて、大きな欠伸をしたが、腰をあげようともしない。まだ綠蔭の甘い夢を辿つてゐるやうである。通譯は睨み下ろしてなにか云つてゐる。いかにも齒痒さうだ。通譯の言葉が漸く判つたのか、船頭はのつそりと起ちあがつて、そして寝呆けてゐるのか、不意に起されたのが不平なのか、不性不性に此方へ歩いて來る。頑丈らしく銅色に灼けた大きい男で、汚れ切つた生木綿の手拭を、結髪の上に捲きつけてゐる。榮策の佇つてゐる前へ來た船頭は、はじめて彼を發見したやうに、ぢろりと眺めたが、凝つと佇ち止まつた。そして今までの寝呆けた顔から、急に鋭い險しさの閃めく表情を示した。榮策はなにかしら衝動的にどきんと胸へ來た。船頭は唇を二三度もぐ〳〵慄はせると、直ぐ踵を復して、前と同じやうな歩みぶりで、もとの楊柳の蔭にのそ〳〵と行つてしまつた。榮策の心には、暗い影が射した。

『君、船頭はどうしたのだ?』

と彼は通譯に訊てみたが、しかし明白すぎるほどその理由は彼に解つてゐる。彼のその言葉と、肚の中がそぐわなかつた。通譯はそれに答へないで、船頭の後ろ姿を眺めながら、しきりに呼び復へさうとして叫んだ。しかし船頭は一向

そんなことには平氣で、もとの楊柳の樹へ腰を下ろすと、またやらかい草の上にごろりと横になつてしまつた。通譯は漸く引つ張り起して來たのに、またもと通りに納まり込まれたので、もう今までのやうに怒鳴る勇氣はすつかり拔けた容子であつたが、しかし、さうもしてゐられないと思つたのか、またばた〳〵と船頭の寢てゐるところへ近寄つて行つた。

『しようがないなあ……』

と通譯は幾度も繰り返して呟いた。

『君、その船頭は僕が内地人だから渡さないと云ふのだらうね……？』

と榮策はそれでもなにか他に理由があつてくれればいゝがと、僅かな望みをかけて訊いてみた。けれどそんな期待は見事に裏切られてしまつた。通譯は肯づいて苦笑した。榮策は自分の想像が的確なものになつて來たと思ふと、むら〳〵と本能的な反感がこみあげて來た。人間がある場合にはきつと露骨にさらけ出してしまふ沒理性的な我執が、彼の動きの取れない感情となつてむくれあがつて來た。ていのいゝ彼の人道感は、かうした突嗟の場合に少しも彼の我執を緩和してくれない。彼の肚の底のどこかに潛んでゐたわがままな感情が、不平たら〳〵な眼をしてぐつとその船頭を睨みつけさせた。暴力の外には動きさうにもない船頭のふんぞり返つた姿を、榮策は凝つと見てゐると、彼の強い反感が不思議にもいつか一種の痛快味に變つて來た。それはその船頭の姿がそつくり自分の心の象になつて表はれてゐるやうに思はれてならなかつたからだ。彼はふと今までの自分の心持を考へた。そしてそれはなんと云ふ愚蒙だ！と思つた。その愚蒙が――永い間優越感を懷いた人間の心に巢くつてゐるその愚蒙が、多くの人間を虐げる手段を講じさせるのだと、彼は思つた。彼はこの楊柳の蔭のプロテスタントを、もう咎める氣にはなれなかつた。彼はその人を祝福するやうな氣になつた。

榮策は河面を凝つと眺めた。そこに光を投げつけてゐる陽脚が、氣のせいか、急に早くなつて行くやうに感ぜられる葦の中の水鳥が、夕餌を漁つてゐるのか、強く羽搏きをして啼いた。河端の楊柳や、葦の繁みには、もうどこかに仄暗い闇さへ絡みついてゐるやうに思はれる。榮策はそつと通譯の方に視線をやつたが、通譯はまだ根氣よくなにか云つてゐる。と、榮策は急にまた焦々して來た。すると彼はもう今までのやうなのん氣なことが考へられなくなつた。そして

その船頭とは全く敵味方のやうな氣がされた。ただそれは、お互ひの持つてゐる力でこの場の互の便利を決するより外はないやうに思はれた。

『君、もうそんな談判はやめたまへ(？)』

榮策は叫ぶやうに云つた。

『僕は、こんな河ぐらゐ泳いで渡るよ』

水練に自信のある彼は、また強い語氣でつけ加へた。

『え！…………？』

と通譯は榮策の言葉を疑ふやうに訊く。

『泳ぐんだよ』

榮策はさう云ひながら、もう帽子を脱いで草原の上に投げつけた。

『え？、泳ぐのですか……？』

『泳ぐさ。なんでもないよ、——こんな河なんか……！』

榮策は上衣や洋袴をずん／＼脱いで、猿又一つになつてしまふと、それをぐる／＼とバンドで緊めて、通譯の前へ持つて行つた。

『これを君持つて行つてくれたまへ』

と、彼はやや昂奮しながら云つた。裸體になつてしまふと、今までの鬱屈がすつかり冷めてしまつて、彼は暑さや疲勞までも忘れてしまつた。二三度自分の頑丈な肩のあたりや、廣い胸の張り切つた筋肉を、兩の掌で擦つてみた。むく／＼とした若い肉の快よい觸感が、彼に強い自恃を暗示するやうである。彼は啞鈴體操をするやうに、幾度も兩腕を振り動かして、それから兩脚を強く踏み緊めた。すると彼は自分が今日ここへ來るまでに、亡靈のやうに弱々しい不安の影を描いてゐたことが、忌々しくてたまらなくなつて來た。そこの楊柳の影からでも、向ふの山陰からでも、強い兇暴な敵

が跳り出して來たら、さぞ愉快だらうなどと思つた。さうした榮策の容子を眺めた通譯は、愕いて眼を瞪つてゐる。船頭さへ呆れたと云ふ風をして此方を見てゐた。榮策は勝ち誇つたやうに、

『いゝかい。早く來たまへ――君は朝鮮の人だから、渡してくれるだらう……』

と、彼はもう極めて放たれた痛快さを感じながら、渡船場の足溜りの大きい石の上に仁王立になつて、耳の腔を唾液で潤すと、黄濁色の渦を卷いて流れてゐる水衝を測つて、自分の渡つて行く見當をつけてゐた。

『もし／＼』

と通譯が突然大聲に呼んだ。榮策は息を肚一ぱいにふくらませて、今にも水面を覗つて躍り入らうとしてゐたが、彼はその聲にふと振り返つて、

『なんだ？』

と叫んだ。

「あのね、船頭が渡すと云つてゐますよ――この河は非常に深くつて危いから、泳いで渡つては死ぬと云つてゐるんです……』

『死ぬ？、こんな河ぐらゐ渡つて死ぬ奴があるもんかい。いゝよ、暑いから恰度いゝんだ！』

その言葉の終りは、もう水煙の中に消えてゐた。と、彼は吻つと息の窒るやうに慄えあがつた。ひやりとした冷さが、頭腦のしんまで咬みつくのを覺えた、足が妙にぬらりとしたやわらかいものに觸れると、ぞつと暗い氣味惡さが感ぜられた。腐泥の匂ひが鼻を衝いて、古沼にでものめり込んだやうな氣がされる。さうした感じをすべて征服して行くやうな氣になつて、彼は拔き手を切つて流れに逆らひながら泳いだ。足に觸れたものは、水死女の黒髪のやうに伸びてゐる藻であつた。藻は岸近い淺瀬に生えてゐるものだから、彼はその邊で立つてみると、づぶ／＼と全身が沈んだので無氣味な河だと思つた。瀬に出る。たいして流されもしない。また藻の中を潜つて、漸く向ふ岸へついた。かなり疲れて、急いで土堤に這ひあがると、すぐ草の上へべたりと倒れた。軀が氷のやうになつてゐる。

榮策は胸の動悸を押へながら、凝つと橫つてゐた。長らくかうした泳ぎをしないので、意外に苦しい。向ふ岸を見ると、通譯が彼の着物をかゝへて船に乘つてゐる。船頭がゆらり〳〵と櫓を漕いでやつて來るのん氣らしい姿を見ると、彼はまた癪に觸つて、自分の軀の苦しさから起る感情ばかりが昂つた。これがもう四五年前だつたら、あの船を奪つてでも渡るのだとさへ思ふ。――彼の『愚蒙』ばかりが胸に跳梁してゐる。――

船が岸に近づいて來ると、通譯も船頭も、榮策の顏を眺めてにや〳〵してゐる。しかたがないので、榮策もほゝ笑んでみせた。

二人は間もなく步き出したが、

『船頭は、歸りがけにはきつと乘せると云つてゐましたよ』

と通譯は云ふ。さう聽くと、榮策は船頭の心持がなんだか氣に入らなかつた。しかし、歸りにもまた泳いで渡らなければならないと思ふと、それもいゝと思つた。

三

蒼黝い夏の夕闇は、とある村落のあたりに慌しく渦卷いてゐる。地平線を浸してゐる太陽が、舞臺の照明燈を見るやうに、ごちや〳〵と細かい家のかたまつた村の一角に光を投げると、恰かも一面を橙紅色に染め出した立體三角形が地上に浮いてゐるやうだ。珍らしく、その三角形の頂點と思はれるあたりから、耶蘇教會の鐘が鳴る。頂點がきら〳〵と煌めく。その村落はこれから訪ふとする人が住んでゐるのだと通譯は云つた。榮策は疲れてゐる足が急に輕くなつて漸く緊張を覺えて來る。近づいて行くに從つて、正三角形が不等邊三角形になつた。頂角とその周圍が地上にくつ着いたやうな幾つもの圓になつてしまつた。そしてそれがいつしか黑く塗りつぶされて絶つた頃には、二人は村落の中にゐた。

荒土作りの低い草葺家が、幾十戸となく秋雨あがりの蕈茸のやうに、ただわけもなくぬく〳〵と建てられてある。そのまん中どころに、村には不似合に大きい耶蘇の教會堂が、ゴシックの尖塔を聳やかせてゐた。天草一揆の背景畫にでも

なりさうである。

あたりのの内を覗くと、暗い土窖かなにかのやうに見える中に、小さい桃色の人間と、大きい白色の人間とが取りまぜつて蠢めいてゐる。のこ〳〵と桃色が轉び出して來たり、白色が這ひ出して來たりする。夕闇に浮いた白色の姿は日本の神話の中に描かれる英雄らしくも印象づけられる。轉び出した桃色は、司馬溫公の甕破りの繪にある童子を思はせる。他の家を覗いてみる。菜種油かなにかの、光の鈍い灯火が、ほんのりと燃えてゐる。座つてゐる人の、結髮のみだれ方、空氣の流通の惡いせひか蒼ざめた面長の顏、白裝束、土の牢に囚はれたと云ふ皇子の物語りをもつてゐる鎌倉時代が眼の前に泛んで來る。日はとつぷりと暮れた。灰色にすがれた草葺の軒が地を背めて、仄白く乾いた大地と色合が溶け合つてしまふ。蚊燻しかなにかの白い煙が、そこここの家の狹い戶口から這ひ出て、灯火の洩れて來るあたりに人聲がする。と、このあたりは、まだ穴居の民が棲んでゐるのではないかとも疑はれる。――現實から幻想へ、歷史から歷史以前へ、榮策は夢を辿つてゐるやうに、そこの軒下を步いてゐた。

ともするとそうした幻想に囚はれ勝ちな榮策の姿を、戶外へ出て凝つと眺めながら佇んでゐる人がある。通りすがりに怪訝らしい眼つきをする人がある。子供が驅けて來て、首をかしげてふり仰ぐ。そしてその度に、榮策の幻想は破れて、薄ら冷たい心になる。その人達の一人々々が、奇異な服裝をした榮策に、白々と光る刄の閃めきを見せてゐるやうな不安に囚はれがちだ。狹い路を向ふから步いて來る人に出會ふと、榮策はそつと軀を躱すようにする。その中の一人がなにかを叫べはどつとあたりの家々から、手に手に得物をもつた村の者が、たつた一人の榮策を中にして、十重、二十重に圓陣を作るだらうなどと思はれる。そしてこの地方で、これまで幾度か行はれたあの恐ろしい虐殺が行れるのだと思はれる。――彼は、早く訪ねて行く家に着きたいと心に願つた。――意外に早くその人の家は判つた。その家の構から想像しても、この地方ではかなりな家柄であらうと思はれる。通譯は門の横に寢てゐた大きい東洋種の老犬に嗅がれながら、中へ入つて行つた。後に殘つてその返事を待つてゐる榮策は、間もなくあたりから集つて來た大小の犬に遠卷にされて、獰猛な呻り聲を立てて吠えつかれた。中の勇敢な奴は、今にもこの異邦人の向ふ脛に跳びかかりさう

に見える。榮策は心の内でははら〳〵しながら、犬共には眼をいからせて睨みつけた。あたりの石を拾つて投げつけてやらうかと思つたが、その犬の主人を怒らせては困ると斷念したので、彼はただ汗を垂らして唇を咬み緊めて、眼を剝きながら大に威勢を示したが、慓悍をもつて誇る西部の鮮人を主人に持つた犬共は、決してこの神經質の弱々しい、文明人の近眼の光ぐらいには屈しなかつた。彼等は頭を突きあげ牙を剝いて怒號しながら肉薄する。榮策は兩脚が宙宇に浮きあがるやうに思つて、通譯の出て來るのを苛々として待つてゐた。けれども通譯はなか〳〵出て來ない。彼は犬共に對する警戒の眼を慌しく外らして、幾度も門内を覗たが、通譯の姿は急に現はれさうにもない。そんなことに時が經つと、彼はまた新らしい疑惑がむら〳〵と湧いて來た。それはこの地方の出身である通譯とその主人とが、果してどんなことを、今頃まで話し合つてゐるのだらうと云ふことであつた。友人の洪と、通譯と、主人と、——それはどちらから見ても、今までには連絡したなんの企てもない人達ばかりには違ひないが、彼等が眼と眼を合した時、心と心とが結びついた時、そこへ一人の日本人である榮策が點ぜられたとすれば、彼等の民族意識の底から、どんなものがたくらまれるかもしれないなどと思ふと、榮策はこんな門前にぼんやり佇つてゐる自分の淺墓さが憐れまれるやうな氣もした。彼の足許には益々彼に強襲しようとする犬共のゐることも、この大きい疑惑の影のためにはもうなんでもない。そして彼は、事々にさうした不安を感じながら、なぜ自分はこんなところへ態々やつて來たのだらうなどとも考へてみた。そこへひよつくりと通譯の姿が現はれて、榮策を手招きする。彼は彈ぢかれたやうに驅け寄つた。

『どうだつた？』

と重大なことでも尋ねるやうに訊く。

『どうかお這入り下さいと云つてゐます』と通譯も嬉しさうな表情をしてゐる。榮策はその顏を見ると、今までの暗い影がすつぱりと消えた。

『さうかい。そりやありがたい。こんなに遲くなつてから、氣の毒だね。——しかしどんな人だらう？』

榮策は、いろ〳〵な朝鮮人のタイプの顏を想像しながら云つた。

『なあに、いゝ人らしいですよ』

と通譯は答へたが、

『まあ、會つてよく話してみなければ、わかりませんがね』

　とまたつけ加へる。そしてまだどこかに警戒深かさうな容子をした。

『洪君の紹介狀を見せてくれたかね？』

　通譯について行きながら、榮策は判り切つたことに念を押した。

『えゝ見せました』

『どう云つてゐた？』

その返辭はもう聽くことはできなかつた。この國の中流階級らしい建の手なりになつた廊下に、部屋が三つ四つ並んでゐる。中には墨繪を描いた褐色の素簾などのかかつた、涼しさうな部屋もあつた。と、その素簾が内からさら〳〵と捲きあげられる。足の埃を拂ふと、通譯は恭しくその部屋へ上つて行く。榮策もつづいて上つた。床を土で作られた溫突造りのその部屋へ這入ると、ひいやりと底冷たい空氣に觸れる。強い煙草の匂ひがぷんと鼻を搏つ。燈盞にはほんのりと部屋の中の調度を暈かしたやうに灯がついて、煙筒の金物ばかりが美しく光る。主人は半面に灯を受けて、そこに凝つと胡座をかいてゐた。榮策は、自分でも咎められるほど丁寧に頭を叩げて、注意深い言葉使ひをして挨拶をした。それを通譯がこれも周到に取次ぐ。主人は言葉少くなにそれを應接してゐる。五十恰好の人で、朝鮮人にはよくある鬚の薄い下品ではないが頰骨の高い、色艶の失せた面長の顏である。榮策は凝つとなにかを、その顏から讀み出すやうな心組みで眼を仰げた。すると相手も、殆んど同じやうな表情で、彼の顏を見入つた。はたとその視線が合ふと、彼は負けまいとして焦慮り氣味になりながら、恰かも名刀の刄尖に輝くやうな鋭い光を、相手の背の長い眼の瞳に感じた。危く敗れようとする瞬間に相手もそつと視線を轉じたので、彼は吻つとして俯向いた。何物かを緊つかりと握つてゐる。——強い自己を死守して動かない意志の力があの眼の中に眩しい程閃めいてゐる。そしてその閃めきが鬱屈した爆發性

を帶んでゐる。優柔不斷な、自屈退嬰な、そこらあたりにザラに轉がつてゐる一般の朝鮮人ではないと榮策は思つた。主人は彼が慇懃に挨拶をしても、妙に索然とした態度をしてゐる。胡座をかくのはこの國の人の常であるが、團扇を片手に握つて、やや反身になつて、榮策が兩手を突いて頭を叩げても、ただ首だけ屈げたきりである。榮策の禮を盡した言葉にも、ほんの受け答へをしたに過ぎない。と、榮策は一種の不快を感じた。高い自分の衿持を冒瀆されたやうな屈辱を感じた。それは決して彼自身の民族の優越感よりの幻滅ではない。彼の今の心持は、もうさうした迷信に囚はれるには、あまりに多く朝鮮民族を識つてゐる。彼の正直な心は、到底もうそんな迷信を懷くほどの勇氣はない。彼の不快も屈辱も、それは人と人との間に、どんな場合にも懷かれる普通の人間的感情に過ぎなかつた。主人は、殆んど衝動的な機敏さをもつて彼の視線を避けながら、射貫くやうに彼の姿を瞥る。彼はまたその注視を受けると、反射的に素早く彼の官能に感じた。そして彼はそれに何等かの不安を覺えて、おのづと相手を心で凝視する。彼はそこに座つてゐる主人の額や手に觸れてみたら、きつと氷の如く冷たいのではないかと考へた。そして荒鐵のなまこに觸れたやうな感じがするだらうと思つた。――彼はかうした人間同志の生活の殺伐さが呪はしくなつた。

太古めいて靜かな夜である。ただ近くの家から、砧を打つ音が冴えて來る。そのいかにも寂しい、山寺の尼僧が木魚を叩くやうな音を聽くと、榮策は遠い胡地に囚はれてゐるのではないかと思はれた。あたりに漂つたかうした人々の生活の底に澱んだ匂が、尚更らに彼の官能をさうした方へ誘つて行く。そして彼のこの家へ來るまでに懷いてゐた溫かい情緒が、いつか幻のやうにかき消えてしまつた。榮策は、今からすぐにも引返したいやうな子供らしい氣にもなつた。

『あなた、今晩はゆつくりなさい……』

ふと、主人は靜かな林の中で人聲でも聽いたやうに日本語でかう云つた。流暢ではないが、この容子では通譯が要りさうにもない。榮策はそれを聽くと、ちよつと意外な氣がされた。かねてからこの人は京城にゐたことも聞いてゐたので、日本語を使ふぐらゐは左程に驚かなかつたが、その言葉の響きは、どこかに柔らかく彼の胸を搏つものがあつた。年配らしい人が、若い者の勞を劬る時にもつてゐる悠揚な溫味と云つたものの外に、まだなにか人間的な感動を彼は受

けたやうにも感じられた。すると、彼の重くるしく閉ち冷やされた胸にも、僅かに仄かな温かみが射し入つた。

『は、ありがたうございます……』

榮策はかう返辭をして頭を卽げたが、その時、彼は急に感傷的な心持になつた。——幼い頃、遊び友達となにかを云ひ爭つて、飽くまで自分の正しいことを信じてゐるのに、相手は兇暴な勢ひでそれを壓倒しようとする。口惜しさを堪へて、自分の弱い力を恃みながら更らに相手と劇しく爭つて行かうとする際に、傍らから突如として自分の正しい味方になつてくれた人が現はれた刹那の云ひ難い歡びと悲しみ——微かではあるが、丁度それに似た感じが、今彼の胸にせぐりあげて來た。

『どうも突然伺ひまして、非常に御迷惑をかけます』

とまたすぐ彼はつけ加へた。そしてなるべく主人の心持を、さうした會話から此方へ惹きつけたいと思つた。

『いや、といたしまして……』

と主人は、押へつけるやうな口調で云つた。朝鮮人が日本語を使ふ時に、まだ發音に慣れない人は、濁音が淸音になつたり、または半濁音になる。それから母音を略してしまふことが稀にある。榮策はその次に續ける話題を探がしてゐると、

『洪は、いまとしてゐます？』

と、主人は訊いた。彼はすつかり紹介者のことを忘れてゐた。たいていの場合、初對面の人に話かけるのは、まづ双方を紹介した人のうわさから始めるのが例であるのに、彼はそんなことさへも取り忘れてゐる。それに氣がつくと、俺は少しうろたへてゐるのだなと心で思つた。

『あゝ、さうでした……』

と、榮策は濟まないことをしたと云ふ風に語氣を強めて前置きしながら、

『洪君から、あなたへよろしく申上げてくれと云つてゐました。——その中ぜひお訪ねするけれど、あなたも一度京城

へ來てくれと云ふことでした。』

榮策は濃かやかな情緒をその僅かな言葉の中に織り込むやうにかう云つて、ふとまた氣がつくと、

『それから、暑い時ですから、どうかお體を大切にして下さいと、くれ〴〵も云つてゐました。』

とつけたしたが、しかしそれだけは彼の裁量であつた。娘さへ生きてゐたら、その主人の愛婿となるべきであつた青年が、舅へ對する心持を、榮策に代つて陳べたのである。彼はその言葉を切ると、そつと主人の顏を偸た。と、主人も彼の顏を妙に懷しげに眺めて、凝つと肯づいて見せたが、すぐ感じ深かさうな眼をやはらかに外らして、瞠つたままの瞳で、うつとりと、虛空を見詰めてゐる。榮策はその容子に氣がつくと、彼も主人に釣り込まれさうになつて、俯向き勝ちにものを思つた。——彼が京城の街などを歩いてゐると、純白の筒袍（ちよくり）に、黑の裳（ちま）をつけて、流行の耳かくしの髮などに結つた女學生が、洋傘を翳して楚々として歩いて行く姿を見受ける。新興民族の中から、輝かしい前途を指さして進む婦人の先驅者らしい矜持が、その美しい瞳に溢れてゐる。榮策は、今まざ〴〵とさうした若い女の幻影を心に描いた。するとまた中折帽子を冠つて、水色かなにかの周衣を丈長く羽織つた、秀才らしい青年と、さうした少女が香ぐはしい乳白の花をつけたアカシアの並木を、甘い戀に醉ひながら語り合つて行くありさまなどが心に描かれる。とまたすぐダアクチエンチされて現はれて來たものは、波頭のやうに沸き立つてゐる白衣の群衆の中で、鮮血に塗れて倒れてゐる少女の痛ましい姿であつた……

『私、洪には長く會ひませんが、どしてゐます。やつぱりぶら〳〵してゐますか？』

『はあ……？』

と榮策は主人の言葉に幻覺を破られて、相手の顏を見仰げた。

『あれも、若いので、心が決まらないから、困ります』

主人はまたかう歎息するやうに云つたが、

『私とは、議論が違ひましてね。——あれはいつも空想ばかり描いて、飛び廻つてゐるのです……』

とつけ加へた。主人の云ふ議論とは、意見と云ふ意味であらう。主人との意見の相違は、榮策もよく識つてゐた。主人は飽くまでも朝鮮の傳統を重じてゐる人である。そこに根ざした民族的自由を熱烈に希求してゐる。それらに反して、洪熙桂は新しい時代思想の洗禮を受けた青年であつた。彼はもつと新しい感激をもつてゐる。彼は飽くまでも宗教を否定して、現實的唯物主義を奉ずる。そして彼は一切の朝鮮の傳統を排して、世界主義に若い情熱を傾けて行つた。宗教は專制の下に、民衆を籠絡しようとする狡猾なメスメリズムであり、傳統は、民衆を虐げた彼等の歴史的仇敵であると信じてゐる。彼は傳統を排斥するよりも、呪咀する。彼に取つては、新しい國家の獨立は、新しい征服者の創設に他ならない。殊に傳統の憧憬から生ずる獨立の如きは、唾棄してい〻と信じてゐる。故に彼は所謂獨立運動者ではなくて、人類の全的自由と自主を望んでやまない、社會革命家であつた。——俺達は、日本の權力者に反抗する前にまづこの歴史的に朝鮮の民衆を虐げた古い傳統と戰はねばならない。朝鮮のブルジョアジイとまだもつと朝鮮民族の中に根強く蔓つてゐる古い貴族主義とに反抗しなければならない。そしてまた全島に漲り澱んで、朝鮮民族の魂を蝕んでゐる宗教的感傷主義を絶滅しなくてはならないと云ふのが、若い洪熙桂の主張であつた。

『つい先日も手紙をよこしましてね。ロシアへ行きたいから、金を送れと云ふのです——まあロシアもい〻が、あまり空想ばかりではためたと云つてやりました。』

『え〻、そのことは洪君からも聽いてゐました。あの人もなか〳〵活動家ですから……』

榮策は、そこで自分の意見も述べようかと思つたが、それはやめることにした。

そんな話をしてゐる中に、朝鮮の家庭には珍らしい支那茶やビスケツトのやうなものが出される。卷煙草が眞鍮皿に盛つて出される。不思議にどれを見廻しても日本品はなかつた。通譯は晝の疲れが出たのと、それから主人が日本語の話せるために用がなくなつたので、ぐたりと捉首れて居眠りをしてゐる。榮策は主人が少し打ち解けた話し振りを睹ると、漸く自分の言葉にも熱が帶びて來るのを感じて來た。話は、やはり友人の洪熙桂のことばかりであつた。

『あれもね、早く家内でも持たせたら、もつと考へが變つて來るのですね?』

主人は話の中にこんなことを云つた。榮策はそれを聽くと、またぼんやりと幻の中からその主人の娘の血に滲んだ顔が現はれて、すぐまた消えた。きち〳〵と主人の眼が閃めくのを覺える。その度に榮策は妙に冷やりとした。彼はかうして主人の心に近づきかけては、またずつと遠ざかつてしまつたやうな心持が幾度もされてならない。丁度夢の中で、しきりに驅け出さうとして、どう藻搔いても足の動かないもどかしさによく似てゐた。

「さうですねえ……」

と榮策は答へてみたが、なにか心がはづまなかつた。そして彼と主人の話は途切れ勝ちになつた。

四

榮策は煙草の灰を大きい眞鍮製の灰皿に叩き落しながら、しみ〴〵と寂しい心に囚はれてゐた。

『碓井さんは、洪をとして識つてゐます……？』

から主人は斷ち切つたやうな言葉で彼で訊いた。

『はあ……？』

と、榮策は空想からさめたと云ふ風で顏を傾げる。

『碓井さんは、洪といつから友達ですか？』

とまた主人は訊き直した。それは、かうした場合、もつと早く、當然に訊かれなければならぬ質問であつた。しかし主人は、いつも相手の虚を見て、突如として緊要な質問を浴せる癖がある。相手がさうした質問をかけられることを豫感してゐるやうな時には、わざと他の話を持つて來た。だからかうした事柄さへも、主人は今まで訊かなかつたのであるらしく榮策には感じられた。

『僕と、洪君とですか……？』

と榮策は、今更そんなことを訊かれるのは意外だと云ふ容子をした。

『えゝ』

主人は底力のある聲で答へた。
『えゝ、それは……』
と彼はやゝ吶り氣味で、
『學校で、洪君と一緒だつたのです』
と漸く答へた。
『そてすか……』
から云つて、主人は鷹揚に肯づいたが、またなにか考へてゐて、
『それては△△大學てすか』
と訊いた。
『さうです……』
榮策は尙ほ妙に探ぐられるやうな氣になつたが、
『けれど私は途中でやめました』
と、そればかりではもの足りなかつたのでかうつけ加へた。
『はあ……そてすか』
と、主人は、もうそんなことは一向考へてゐないもののやうにうわの空でこんな返辭をして、また鼻つとなにか他のことを思ひ泛べてゐるやうに見えた。しかし主人はしばらくしてまた、
『それては齡も一緒てすか？』
と訊く。
『いえ、私の方が確か二つ上でせう……』
榮策は、自分の話したいと思ふ話の中心を外れて、そのまはりばかりを步いてゐるやうな氣になりながら、またかう

答へた。

『はあ……そですか』

主人はまた同じやうな受け答へをして、倘ほなにかの幻覺を追ふてゐる容子であつたが、今度は、榮策の顏を凝つと眺めながら、

『碓井さんは、奥さんありますか……？』

と訊いた。

『はあ……？』

榮策はふとそれを聽き直したが、すぐその言葉が鋭い光線の映象のやうになつて自分の頭腦に殘ると、彼はただ反射的に、

『はあ……』

と答えた。そして自分と洪との間柄を聽いてゐるのだとばかり思つて居た榮策は、主人が自分に話しかけた意圖をふと豫感すると、彼は自分の心が磁石を感じたやうに、次の主人の言葉を待ち設けた。

『あなた、洪から、私の娘のことを聞きましたか？』

榮策の豫感に違はず、主人は果して娘のことを云ひ出した。

『はあ、聞いてゐます……』

と、彼はやや誇張した表情でしかもその中に彼自身の義憤と云つたやうな語氣も含ませて、すぐかう肯づいて見せたが、ふとまた自分が日本人であることに氣がつくと、その言葉を、相手がかなり白々しく考へはしないかと云ふ不安が胸に射し込んだ。

『そですか……』

主人は、冷靜な態度で、その語調に一段の重くるしさを持たせて、ただかう云つた。と、彼も急に持前の暗鬱な心に

なつた。

『あのう…………』

と榮策は、今度はその暗欝な心の下から押しあげて來るやうな聲を出してやや臆し勝ちに、

『あなたのお孃さんは、私の妻と丁度同い齡でした。』

と、彼は洪との話の中に識つたことをここで話した。それがこの場合、主人にどんな感銘を與えるかどうかは解らないが、その娘に對する彼の日頃のさうした因緣から起る懷しみを吐露してみたのであつた。

『はあ、そてすか……………』

主人はまたこんな同じ返辭を繰り返した。そして榮策のその言葉からはたいした感動も受けないやうな態度を裝ひながら、半面を仄かな灯に照らされた顔を心持ち俯向けて、しばらくどこかを強く凝視するやうな容子をしてゐたが、急につと腕を伸ばすと、いきなり自分のそばにあつた長煙管を掴みあげて、吻つと溜息をした。その瞬間の動作は、なに故とも識らずそばにゐる榮策の胸を強く搏つた。彼ははつとして、今の自分の云つたことが悪かつたのではないかとも思はれた。

『娘はね、二十て死にました………』

と、主人は喪神者の獨語のやうな風で云つたが、その聲は顫ひを帶んで甲走つてゐたので、榮策は思はず主人の顔を瞥た。唇近くに持つて行つた煙管の吸口も唇もぶる〳〵と癇性らしく慄えてゐる。

『たから今年は二十三です………』

とまたから云つたが、突然、

『はゝは、はゝは……………』

とまるで文字通り死兒の齡を數へたことを自ら嘲るやうに哄笑ひをした。榮策はその刹那的にフイルムのやうに變つて行く主人の表情と言語を、驚きながら眺めてゐた。

『は、は、は、は、…………』

煙管を握つて、火も點けずに吸口を唇のそばに近づけてゐた主人は、再びからまた哄笑つたが、それはもうすつかり座談的な悠揚さのある笑ひ聲であつた。そして煙管に火の點いてゐないことを知ると、灰皿の中のマッチを取りあげて、唇と床の上にその長い煙管の兩端を凭せながら、兩手でシュッと火をすつた。

『碓井さんの奥さんは、女學校を卒業しましたか？』

主人は、二三度、ぱつ、ぱつ、ぱつと白い煙を吐くと、またから訊いた。しかしその動作や言語は、すつかり元の冷靜さに復つてゐるのを、榮策は感じた。

『はあ？　私の家内ですか？　いゝえ女學校などは卒業してはゐません。——貧乏人の娘ですから』

と彼は答えた。

『そてすか、それは結構てす——女は女學校なんかに入れてはいけませんね…………？』

『さうですか、さうでもないでせう。行ける人は行つた方がいゝと思ひますよ』

『いゝえ、いけません。女は學問してはいけません』

『はあ　…？　どうしていけないのですか？』

『いゝえ、いけません。それはまあ日本人などは知りませんが、朝鮮てはいけません』

『さうですか。しかし、ほんたうの學問ならば、だれがしてもいゝでせう？』

『いゝえ、ほんたうでもいけません。』

『さうですか、それはどう云ふわけです？』

『それはまあ、私もはじめは學問はいゝと思つたのです。それて娘も女子高等普通學校へやつたのてす。』

『はあ…………』

『それはやぱりいけません……女は昔の朝鮮の女がいいてす』

『…………』

『私の娘は、昔の朝鮮の女なら、それは死ななかつたのです。』

『……』

『日本人は、文明は非常にいゝと云ひますね？』

『えゝ、普通にはさう云ひます』

『私が京城にゐた頃、日本人の要路に招待されて行つた時には、いつもあれを云ひました。』

『成程、さうでせうね』

『それから、私が日本を視察した時も、どこでもさう云ひました』

『えゝ、それはさう云つたでせう』

『碓井さんは、やはりまあ、さう思ひますか？』

『私ですか？ 私はさうは思ひません』

『はあ、そですか、それでは、と思ひます？』

『私は、文明は今のやうなものなら、恐ろしいものだと思ひます。』

『はあ、そですか、……？』

『人間が、自分で亡びて行く道具を作つてゐるのが、今の文明だと思ひます』

『はあ、そですか……しかし、日本人は、文明は幸福だと云ひますよ』

『えゝ、それは、今の恐ろしい文明の中に生きてゐて、自分が非常に幸福だと感じてゐる人はさう云ひます』

『はあ、そですか、それではまあ、碓井さんも、そ感じてゐますか？』

『いゝえ、私は今の文明を決して幸福だとは感じてゐません。たとへ他人からどんなに幸福だと宣傳されても 自分が幸福だと信じられないからです。幸福とは、つまり自分の感じですから、文明であらうが、野蠻であらうが、他人がど

ろ云はうが、自分が幸福だと感じた時が、ほんたうの幸福です』
『はあ、あなたは、ほんとに、さう思ひますか、』
『えゝ、固くさう思ひます。』
『そですか、私もそ思ひます。私は娘が死んだ時、ほんとにそ思ひました。』
『………………』
『碓井さん』
『はあ』
『私、あなたに、見て貰ふものがあります。』
『はあ』
『あなた、見てくれますか?』
『えゝ、拝見します。どんなものでも……』
『そですか。私あれたれにも見せないのですが、あなたはちよつと見て下さい』

主人はかう云ふと、すぐ起ちあがつて、部屋から出て行つた。榮策はその姿を眺めると、もうしつくりと主人と自分の心が觸れ合つてゐるのを感じた。そして自然に活々とした精神が自分の軀の中に環り返つて來るのを覺える。かなり長く喋つてゐるが、晝の疲勞や、それから空腹などは全く忘れたやうになつてゐた、そして主人の今の態度を思ふと、彼は險阻な嶺や谷を幾度も渉つて、たうとう大きい黄金脈に打突かつたやうな悦びを感じないわけにはゆかなかつた。
それにしても、彼は主人が見せようと云ふものが、なんであらうかと、劇しい興味を唆つた。

五

しばらくすると、主人は美しい彩りのある小机ほどの筐を持つて來た。そしてその筐を、極めて緊張した顏で榮策の前へ置くと、彼は劇しい好奇の眼を瞠らずにはゐられなかつた。しかしまた妙に淡い不安を唆つた。それは主人の今の

話から推して、なにかまた彼の鋭い自責の念を刺激するやうなものでないかとも思はれたからである。

『碓井さんは、まだこんなものを見たことないですね？、——それは私、東京の九段で見ました』

顔が蒼白に沈んだ、極めて緊張味の漲つてゐる表情をして、その筐にかかつた太い眞田紐を解きながら、主人はこんな謎のやうなことを云つた。そしてやや色の褪めた、緋牡丹に鳳凰の極彩色の繪のある蓋に兩手をかけると、榮策は片唾を嚥んで、今そこから現はれて來るものに、全身の興味を集注して凝視した。ふと、その筐の蓋にかけてゐる皺嗄れた兩手がぶる〳〵と慄えてゐるのに榮策は氣がつくと、彼はそつと主人の顔を窃み見して、またそつと視線を前に落した。奇蹟に科學のメスを擬するやうに、蓋が取られた。榮策の焦燥した心をちよつと弄んで、上皮にはまだ黄色い唐紙が丁寧に掩はれてある。主人は至つて落ついて、靜かにその掩ひを取ると、中味は意外にも汚なくよごれた女ものらしい筒袍であつた。榮策はそれを見ると、張り切つた心が少しく綏んだが、すぐその着物が死んだ主人の娘のものだと云ふことに氣がついた刹那、彼はいつか自分が病院の屍室を覗いた時と同じやうな氣味惡さに囚はれた。それは、その娘に對する日頃の懐しみを惨じめに裏切つた瞬間の心持ちでもあつた。そして次の瞬間に、彼の心持が、反動的になにものかに移つて行かうとしてゐると、主人はたとへば母が嬰兒のふくよかな裸體に觸れるやうな注意深かさと、いつくしみをもつて靜かにその上衣を取りあげた。そして自分の幻の世界に、美しい娘の姿を追ふやうな表情で、うつとりとその古くて見すぼらしい着物に眼を注いだ。しかしふと自分の前に榮策のゐることに氣がつくと、主人は夢のやうに彼の方へ視線を轉じた。

『碓井さん……』

と、まだ幻の中に生きてゐる人としか思はれない聲で、主人は榮策を呼びかける。

『はあ？…………』

　と榮策も主人の幻影の世界に住んでゐるやうな心持になつてから答へる。

『これ碓井さん、娘の着物です……』

『…………』

榮策は十分に、豫期してゐたその主人の言葉を聽いたに過ぎないのだが、彼はその時劇しい力で、ぐいと鋭い現實に突き飛ばされたやうな感じがした。底苦しい、嚴肅な沈默が、二人の間を權威あるものの如くに支配した。一分、二分、三分……と。

尊いものを禮拜してるやうな心持になつて、そしてまたいつの間にか一種の陶醉を感じてゐた榮策は、ふと主人のなにか云つたのに氣づいて頭をあげた。

『碓井さん……あの、これをよく見て下さい……』

と、主人は、膝を乘り出して、その筒袍を兩手で捧げるやうにしながら、彼の眼の前に持つて來た。間を置いてちよい〳〵と居眠りから覺めては、もの足らなさうにしてゐた通譯は、その主人の手にあるのを眺めると、怪訝な顏をしてそれを覗き込んだりした。

『これ――これは碓井さん、血です…………娘の血です。』

きりつとした、鋼鐵ピンのやうな聲だ。

『えつ！』

と榮策は反射的に驚いて、着物の上に瞠つた眼を据えながら、小さく叫んだ。

『このよこれてゐるのは、みんな娘の血です』

その鋼鐵ピンが、ずきりと榮策の肺を突き刺した。彼は眉根に痙攣を起したやうになつて、夢の中、あの河へざぶりと飛び込んだ時と同じやうな戰慄を感じた。ふと、自分に死靈が憑いたのではないかと思つた。

『…………』

しかし彼は體を固くして、手を握り堅めながら、默つてその血痕だと云ふのを凝視した、主人が東京の九段で見たと先刻云つたのを彼は思ひ出した。…………

ある海戰で戰死したのだと云ふ某軍人の軍帽を、彼は九段の記念館で見たことがある。もうすつかりと年數が經つて古そぼくれてはゐたが、牡丹の大輪に似た血痕が、その帽子の上に一ぱいの斑點になつてゐる。濕氣のために、その斑點は灰色の黴になつてゐた。彼は、少年時代に、はじめてその帽子を眺めた時やつぱり少年らしい義憤と敵愾心を唆つたものである。——ここにある娘の着物は、古いと云つても、まだ三年ばかりしかならない。それに、血痕と思はれるものは、彼が今までなにかの模樣ではないかと思つてゐたくらゐに、純白の地が少しく鼠色になつた短い筒袍の頸元から、ずつと袖にかけて、べつとり泌み惨んでゐた。生血がそこへかかつたと云ふのではなくて、むしろ筒袍が血汐の中に浸つてゐたのだと想像する方が確かである。その血の色はもうすつかり風化して、淡い黄味のまざつた赭錆色を帶んでゐるやうであるが、仄暗い燈盞の影では、唯どろどろとした泥墨で塗りつぶしたやうに見える。——過去の、それは全く自分達の實生活とかけ離れた——歷史的事實として見ても、彼の幼い心に義憤と敵愾心を昂ぶらせたあの軍帽——たとへそれが彼の周圍のために全く誤られた觀念によつて教化された情操から生ずる義憤であり、敵愾心であつたにしても——しかしそれとこれとはなんと云ふ彼の感受性の違ひ方であらう!。今の彼の體驗から滲み出た、意識や感情は、この醒いどろどろの血の痕を見て、あの幼時の懷古的な昂奮を喚るには、あまりに生々しすぎる。あまりに現實すぎる。あまりに焦々しすぎる。——それはすべて、あまりに刺激が強烈に眼眩ぐるしすぎる。彼はびいどろの如く眞紅に灼け爛れた坩堝の中へずつぽりと首を突込んだやうに思つた。——そして彼の屈して伸びることのできない焦燥な情念が、むら〳〵と胸苦しく渦を捲いて來た。そしてその眞暗闇な谷底から、惱しい幻想が、炎の渦のやうになつて描かれはじめた。……………

純白の羽根と漆黑の長い尾をもつた、あげはの蝶のやうな美しい女が、大きい群衆の渦の中にきり〳〵と舞つて、ぱつと紅の血に染つて倒れてしまつた。冬の夜に冴えた月光のやうに輝く刄を振り翳した灰褐色の人間が、つむじ風の如くその上をくる〳〵と廻ると、顏一ぱいな剝いた大きい眼と、横笛をくわへたやうに見える裂けた口でげら〳〵と小氣味よかりさうに嘲笑ひをして、また呻りを立てながらどこかへ飛び散らうとする。その間にも、海嘯のやうに襲ひ來り、飛沫のやうに亂れ散る白衣の群衆がある。怒號と狂喚と悲鳴とが惱しい交響樂となつて、ある大きい氣分を作る——

『碓井さん……』

『……はあ？』

榮策はびくりとして、主人の顏を見た。主人は、榮策が左程に感動を受けてゐないものの如くに見えると、やや焦慮り氣味に、なにかを詰問するやうな口調になつて、

『あなた、ここごらんなさい！』

と、相手の刺激を一層强く煽らうとする容子で。

『さあ、この袖のところ……』と、主人はすぐに左の腕に、その筒袍をそつと抱きかかへるやうにして、――それは丁度自分の娘の死骸でもあるかのやうに擁きかかへて、右の手で筒袍の左袖を支へながら、つと榮策の眼の前へ突き出した。

『はあ……？』

と、彼は威嚇されたやうに、その袖をおど／＼と眺める。

『そら、ここが破れてゐます。これが最初に洋劒で腕を切られた時につけられたのです』

さう云つた主人の聲を聽くと、榮策はその筒袍の袖を見るよりも先きに、眼眩しいものでも仰ぐ容子で、ちらと主人の顏を一瞥した。その瞬間、彼は峻烈な藥液をぷんと嗅ひだ時のやうに、彼の頭腦がふら／＼とするのを覺えた。そしてすぐ眼を外らしたが、彼の眼の底には、例の名刀の刄尖のやうな光が殘つた。外らした視線を、彼は主人の突き出してゐる袖に落すと、そこには袖の糸目を副ふて、一寸ぐらゐと思はれる程少し斜に裂けた穴があつた。彼はそれを見ると、もうなんにも口が利けなかつた。ただわく／＼と自分の軀が熱病を患つてゐるやうな心持で熱くなつてゐるのみで舌が妙に硬ばつてゐた。人間の感情を、表現する言語のなんと云ふ貧弱なことよ！

『まだあります。――今の傷は、最初です』

主人は更らにかう云つた。榮策はそれ耳へ這入ると、まだ俺は虐られるのだなと思つた。しかし主人は、そんなこ

とは一切かまはない容子で、左の腕にかかへてゐた筒袍を、くるりと飜して、背筋の方を上に向けると、右手でその裾をすくゐあげながら、

『……またごらんなさい。この背中にあります。これが、二度目ですよ』

と、榮策を刺激の鞭を揮つて追窮するやうに、右手を丁度筒袍の右脇腹と思はれるあたりに差し込むと、そこにもやつぱり前とはやや大きく二寸あまりの破れ目があつた。そして主人の差し込んだ指の腹が、下から透ひて見えた。指尖がぶる／＼と慄えてゐるのが榮策に判つた。その頃は春であつたのか、白絹紬らしい輕さうな布が二重になつて、織糸もなよ／＼とほつれてゐる。そしてそのあたりはすつかり染めあげられたやうに、どす黑く血汐が泌み滲んでゐた。凝つとそれを見詰めてゐた榮策は、なにかの妖怪談の中に出て來る女が、じいつと自分を睨みつけてゐるやうな錯覺が感ぜられた。ひい／＼と、銳い女の咽び叫ぶ聲が、どこからともなく聽えて來る。その着物の裂目から、むら／＼と凄い妖氣が立ち騰つてゐるやうな氣がされる。…………

『碓井さん、これが娘の致命傷でした』

主人はかう云つて、まだ凝つとその着物を兩手で支へながら、榮策の眼の前に見せてゐる。その主人の娘の最後を決定した報告が、はつきりと彼の意識に這入つて、それから眼の前の着物を尙ほ自分は眺めてゐなければならないのだと彼が思つた時、彼はその主人から、遂に自分も最後の斷罪を受けたやうに思つた。ただ默つて動かない榮策の姿を見ると、主人はそつとその上衣を筐の中に收めた。そしてその下にある黑い袋にちよつと手を觸れてなにか云はうとしたが、い少し考へて急にその言葉を呑むと、手早く筐の整理をしはじめた。

『これを、私、時々出して見てゐます……』

と、主人は筐の紐を結びながら云つた。

『さうでせうね………』

榮策は、その時はじめて口を利いて、も一度凝つと主人の手の下にある筐を見直した。太い溜息が出た。

『最初私の娘は××××××××××××一緒に集まつたのです。あれは×××した。……』主人はその娘の遺骸でも容れてある様に感じられる筐を前に置いて、から語り出した。少しく昂奮が醒めたと見えて言葉の中に打ち寛いだ容子があつた。

『みんなで三四×××××××××ですが、娘も一緒に集まつたのです。×××××××××××。』

（以下五十二行缺）

榮策は默つて肯いた。主人の聲はいつか今までの昂奮からさめてもう重くるしい冷靜さを見せてゐた。そして主人の語つてゐる事柄の內容と、その表情は全く背中合せになつてゐるやうに感じられる。どうしてそんな事柄をそんなに昂奮もしないで語られるのであらうと思はれた。榮策は、その娘の着物を見せた時の主人と、それからその筐を片づけて、今の話をしてゐる主人の態度が、別人のやうな印象を與へるのを感じた。それは、場合によれば、慘めな我兒の死ざまを眺めてさへ顏の筋一つ動かない、東洋的な特殊の强い意志を持つ人であるかのやうにも見られた。その固い冷たい意志が、いつもこの人の平常を支配してゐるのだ。そしてそこに明晳な理智が輝いてゐるのだ。その理智がいかに錯綜した事柄でも整理する。いかに混濁した存在でも、直ちに分析する。そしてその理智の力が、やがて彼の社會と人生へ根深く反抗の鋤を差し込んで行くやうな結果になるのであらう。しかし、その固い意志も、冷たい理智も、主人に取つては、たとへば棉火藥を包み込んだ巨彈の鐵皮である。その鐵皮が分厚ければ分厚いだけ、爆發の力も幾何級數的に强烈の度合ひを增すことになる。あの血汐のついた着物を擁きかかへた主人と、急にまたけろりとそれを忘れてしまつたやうに、しかも奇跡に似た娘の死を語つてゐる主人を睹ると、榮策はどうしてもさう云ふ感じを受けないではゐられなかつた。

あの古血に汚れたべら／＼してゐる娘の着物が、その棉火藥ではないかとも思はれる。

六

『夕飯が遲くなりましたね。話を長くしてゐて、腹が減りました、は、は、は、は』

主人ははじめて、常態的な笑ひ聲を出した。

『前から判つてゐるのだと、もつと早くするのでした』

とまたつけ加へた。

『いや、突然あがりまして、非常に御迷惑です』

榮策は最初の挨拶を繰り返した。

『日本人は、すききが好やき・すね、しかし夏は暑いからいけません――朝鮮の田舍は御馳走がありませんからためです』

主人はかう云つて、そこへ下男が運んで來た飯臺を眺めた。眞鍮の磨き立てた大きい鉢や皿の中には、鹽魚の燒いたのや、肉類の油であげたのや、それから沈菜（つけもの）の上に唐がらしの紅い色の出てゐるのもあつた、高麗燒の徳利からは高い酒の香りがした。主人は下男になにかしきりに指圖をしてゐる。榮策はそんな容子を睹てゐると、涙ぐましいやうな嬉しさ〻感じた。心の髓に、銳利な鑿で深く鏤刻された怨恨を全く忘れたやうに、かうしてもてなしてくれる主人の心持は、榮策達のためにはありがたいことであつた。主人や自分達の心から心には、どこかに、なにかの互ひに根深かく通つた管があつて、そこには、久遠に、忍びやかに、細々と、一つの泉から湧き出した流れがあるのではないかとも思はれた。

『あなたがこんなところへ來て下さるのは、ほんとに珍らしいので、今夜は親戚の者も招んで一緒に酒を呑むことにしました』

主人はこんなことを云つた。飯臺が人數より多いと思つてゐたのがそれで判つた。榮策はさう云つてゐる主人の顏をふと瞥ると、もうどこにもなんの翳しもないやうに思はれる。ただ柔らかなほゝ笑みが一ぱいに漲つて、珍客を迎へた悦びさへ漂つてゐる。一しきり居眠りをしてゐた通譯も、あたりの氣配に目をさますと、一二度顏を撫でて、自分の前に並んだ澤山の飯臺を睹て驚いてゐる容子である。

『さあ、一ぱいおあがりなさい。——今日は疲れたでせう。ここへ來る路は惡いですからね』

主人は上機嫌で盃を取りあげて、榮策に酌をした。

『この酒は上等でないです。あなたうまくないでせう……？』

『いゝえ、どうしまして、非常に結構です。』

榮策はかう答えながら、溢れようとする盃を唇にあてた刹那、今まで感じてゐた嬉しさが、香り高い實感となつて胸に迫つて來た。彼はその盃をぐつと乾してしまふと、下腹部まで、その强烈な液體がえぐつて行つた。彼が盃を置くなり、主人はすぐまた注いでくれる。

『さあ、通譯さんも澤山呑んで下さい』

と主人は通譯の方にも掘つた德利の口を向けながら、

『それはまあ、私が京城にゐた頃は、いろ／＼の酒を取り寄せて呑みましたが、田舍へ歸つてからは、このまづいので辛棒してゐます。しかし澤山ありますから、うんと呑んで下さい』

からまた云つて、自分でもうまさうにしきりに飮んでゐる。

『京城では、なか／＼御活動だつてさうですね？』

榮策はたてつづけに二三盃やつた後にかう云つた。

『やあ——それはまあいろ／＼やつてみました』

主人は榮策の言葉を聽くと、ほゝ笑みを見せて、やや得意らしい口調で云つたが、その次に、なにか云ひ出さうとしたが、ふとやめて、口を噤んだ。そして泛びあがつてゐた笑顏皺もすつかり伸びてゐるのに榮策は氣がついた。すると彼はしまつたと思つた。折角積あげたものを、一氣に突き崩してしまつたやうに感じて、彼は心持ち悄氣氣味になつた。

彼はかうした平凡な、たれにでも殆んど千遍一律に用ひる言葉をさへ、省察したり吟味したりして使はなければならない人々は、不幸であると思つた。しかし、この現實はやはりどうすることもできないのだと思ふと、彼はその言葉をどう

して回復しようかと思つて、惱み心地になつてゐた。としばらく默つてゐた主人は、握り拳で人の頭でも毆ぐりつけるやうな聲で、

『京城はつまらないところです。あすこは、獐の棲むところです』

と突然云つた。

『え？　獐の棲むところですか……？』

榮策は鸚鵡返しにかう云つたが、すぐあの頸や脚のひよろ〳〵と長い、鹿に似て弱々しい、そのくせよく繁殖して野畑を荒して廻る、朝鮮特産の獐を思ひ出すと、主人の辛辣な皮肉が急におかしくなつた。彼は早速、

『虎はだん〳〵、山の奥へ這入りますね』

と云つてみた。

『は、は、は、は、――虎も剝製になつてはためてす、は、は、は、は、』

主人は、意外に快心らしく笑つた。虎は朝鮮の人達が神位さへ與へてゐる動物である。

『さあ、とか澤山あかつて下さい、もう親戚の者も來ます』

とまた主人は云つて、銚子を取りあげた。その間にも、通譯は二人の話など一向無關心で、獨酌をしながらやつてゐる。

『私は京城にゐた頃、日本人とは澤山つき合ひましたが、まだあなたのやうな人ははじめてです――日本人も若い人はなか〳〵偉いですね』

主人は立膝をして、左の手を床に突いて、始終右手で用を便じてゐる。今も盃を口のあたりに持つて行きながら、榮策の姿を眺めて感じ深かさうに云ふ。疲勞と空腹に困憊した神經が、アルコールの强烈な刺激を受けて來ると、榮策は急に昂奮して來た。すると今まで凝つと潜在してゐた今夜の精神感動が、一時に燃えあがるのを覺えた。彼は日頃の鬱屈からさめたやうに大きく首を振ると、

『なあに僕等はだめです。日本の靑年は腰拔ばかりです。僕は朝鮮の靑年は勇敢だと思ひます。男も女も。——殊にあなたのお孃さんの如きはどうです！。實に僕等は慚愧に堪えないですよ。……』

と、彼は一氣に喋つた。

『いや、靑年ばかりぢやない。第一老人が實に强い、僕はあの事件の豫審調書を見て驚きましたよ、みんな六十前後の人達ばかりだ。日本人なんか、もう中老になると、安火にあたつて居眠りをしてゐますよ。なにが僕等が偉いもんか、あツは、は、は、は、は……』

彼のその奇異な笑ひ聲は、自嘲と、冷恥と、否定の狂ほしい交響樂であつた。そしてその泣き笑ひのやうなものをやめると、彼はやや聲を落して、

『しかし、日本の靑年の中には、腰拔けなりに、あなた達を理解してゐるものもあります。——腰拔けが理解したつて間尺に合ひませんけれど。あツは、は、は、は』

とまた笑つた。

『さうですか、日本も變つて來ましたね……』

と主人は今まで沈默勝ちであつた榮策が、急に目ざまし時計が鳴り出したやうに叫びをあげたので、聊か呆氣に取られてはゐたが、やつぱりいつもの冷靜さを保ちながら答えた。

『今晩は私驚きました。この通譯さんからあなたの話を聽いて、洪の手紙を受取つた時には、意外てした』

主人はまたかう云つて、盃を手から放すと、長煙管を取りあげた。長いらをのすがつた煙管の吸口をくわへるためにぐつと顎を引いて頰をふくらませると、すぐ子供が乳房に縋るやうにぱく〱とやつてゐる主人を眺めると、榮策はなんとも云へぬ素朴な氣分がされた。こんな老人が、人生の極めて多岐な背景の中に、ある人達からは、悪魔の跳梁するが如く見られて居るのだとは、どうしても感じられなかつた。彼はふとこの素朴が剛毅を生むのだと思つた。自我に剛毅なことが、それなりに素朴であるとも思つた。そして彼は素朴は尊いことだとも思つた。人間にもし進歩があるとし

たら、この素朴ばかりがそれを促すのだとも思つた。革命家はすべて素朴であると思つた。
そこへ下男が來てなにか云ふと、主人は煙管をくわへながら肯いた。そして榮策の顏を見るとにつこりして、
『親戚の者が來ました』
と云つた。誘ひ合せたのか二三人も伴れ立つて這入つて來た。いづれも小さつぱりとした態をしてゐる。榮策の姿を睹ると、この人かと云はぬばかりに、眼を瞠つても珍らし氣である。主人はすぐ下男に云ひつけて、燈盞を掻き立させたり、新しく鋪子を運ばせたりした。そしてどことなく誇らしい容子を見せて、親戚の者を一々榮策に紹介すると、その人達は機嫌よく挨拶をした。中には、名刺などを呉れるのがあつた。見ると、
『大韓國元修義副尉從八品△△△』などと毛筆の素晴しい立派な文字で書いてある。その名刺の老人は、軀の大きい鼻の高い、眞白な顎髭のある、いかにも昔の武官らしい。主人は、昔の武官や文官の階級の說明などをした。まだも一人自分の身内に武官がゐたけれど、今は行衛不明だと云つて聽かせた。洪の父は、書堂と云つて、私塾を開いて門生を養つてゐたのださうである。そんなことを、主人は懷古的に語つてしまふと、ふと氣がついたやうに、
『今晩は、碓井さんが一ばん老人てす』
と云つた。榮策はその言葉の意味が解らないので、
『はあ……?』
と云つたきり怪訝な顏をした。
すると主人は、彼の顏を柔らかく眺めながら、
『朝鮮ではね、老人が上座に座るのてす。今晩は、あなたが上座てす』
と說明する。彼は今までそれに氣がつかなかつた。榮策はこの部屋の上座らしいところに座つてゐたことは意識してゐたが、しかし來客が上座にゐるのは、たいして不思議ではないやうに考へてゐたのであつた。
『さうですか、どうも恐縮ですねえ……』

と榮策はもうだいぶ醉つた顏に微笑を泛べる。
『あなたは、若くても、偉らいてすからね……』
また主人はほゝ笑みながらから云つて、
『さあ、としとし飮んで下さい』
と銚子を取りあげる。
『いや、もう澤山です、もう十分に戴きました……』
　彼は二三度手を振つた。そして熱い息をしたが、しかし今晩に限つて腦のしんは、しつかりとしてゐるのを自分でも感じた。
　主人は親戚の者に、なにか熱心に語つては、自分でしきりに感動してゐるらしい容子である。通譯はもうとろりとしてゐたが、それでも妙に耳を傾けた。主人は朝鮮語の特長である語尾を長く引いて、それを少し釣りあげ氣味にして、またずつと低く押へつけるやうな調子の言葉を、耳障りになるほど繰り返して、なにかしきりに感慨を洩らしてゐるらしい。それが、一語を終ると、榮策の横顏を見たり、指で虛空を叩くやうな工合にして、それを、すぐ榮策の方へ向けたりした。榮策は、主人が、自分について、なにかを云つてゐるのだと思つた。そしてそれは、自分のために、決して惡い宣傳ではないやうに直感される。聽いてゐる人々は、いかにもその通りだと云ふ風で、榮策に視線を投げたり、頤鬚をしごひて肯づいて見せたりしてゐたが、言葉の途切れ〳〵に、
『さうぢや(クルチ)、その通りぢや(チヨンマリ)』
と云ふ返辭だけが、榮策には解つた。

七

　間もなく、榮策は通譯と二人で、寢室に定められた別な部屋に通された。もうだいぶ更けてゐた。廊下へ出ると、初夏の夜の空氣が冷やりと感ずる——大陸の氣分である。燭臺を持つた下男が、先きに立つて、二人を案內した　榮策は

廊下を歩いてゐると、妙に復古的な情調を映つた。その部屋も、内裡は天井から床まで、卵黄色の唐紙で貼りつめてあつた。寢床がきちんと二人分取つてある。それも朝鮮風の夜具であるのが、異境らしい心持を與える。枕許には、例の大きい眞鍮製の灰落しや、飴色の地に墨と朱で花鳥を描いた團扇までが用意してあつた。まだ夜はそんなに暑いと云ふ氣候でもないのにと思ふと、榮策は主人の心づかいが思はれた。主人も二人を見送つて來て、

『温突は床が固いですから、日本の人が寢ると、軀が痛いですから、下に蒲團を澤山敷きました。あまり澤山で暑いですか？は、はは、は、』

と笑つた。榮策はそんな言葉を聽いてゐると、自分が軍隊にゐた頃、機動演習に出て、村落に舍營でもした際に、泊り合せた民家の人達が、心から親切にしてくれたことなどが思ひ出される。

『これはどうも恐れ入ります。なに、どんなところでも結構です。私なんどは、兵隊に行つて、いつも草の中で寢たものですよ』

と彼は今考へてゐたことを素直に云つた。

『便所は戸外です——日本のやうに家の中にあると便利てすね、朝鮮の便所は冬は寒いてすよ』

主人は部屋の、入口の高くなつた閾に腰をかけて、團扇で煽りながら云ふ。朝鮮に住んでゐる日本人は、どんな場合でも、會話の中に故國を指して云ふ時は、決して日本と呼ばないで内地と云ふ。またたいていの日本化した鮮人も同様である。しかしこの主人は、言葉の中に決して内地と云はない。きつと日本と云つた。日本人と云つた。榮策はその言葉を聽くと、決して不滿でも、不快でもなかつたが、しかしなにか不安なものがあつた。

『なんでも御用がありましたら、このボーイに云ひつけて下さい』

主人はまだそこにゐる下男を眺めながら云つた。そのボーイと云ふ言葉が、この人のなにかしら新らしいものを理解してゐるやうな感じもされた。主人は二人が着物を脱いでしまつたのを睹ると、急に腰をあげて、

『それではおやすみなさい』

と云ひ捨てて行つてしまつた。通譯もかなりに醉つてゐた。榮策も快よく醉が廻つて、酒が少し頭腦に來たが、それさへ苦にならなかつた。敷布團の重なり合つた柔らかい上へ、全身を伸び〳〵と展げると、軀一ぱいの大きい欠伸が出て、どうやら今までまだこわばつてゐた軀のしんもとろりと溶けてしふまやうに思つた。夕陽が地平線の彼方へ靜々と落ちて行くやうな氣持になつて、彼は甘い睡を催して來た。が、ふと彼はここが果して自分が今朝想像してやつて來た所謂不逞鮮人の首魁の家であらうかと思つてみた。なんだかうそのやうである。或は、友人の洪翳桂が、いゝ加減なことを云つて、自分を一ぱい喰はせたのでないかとも思はれる。しかし、宵のあの主人の容子を考へると、やつぱりそれに違ひないやうにも感じられる。たとへ、自分が主人の愛婿に定めた男からの紹介狀をもつて來たにしても、これではあまり今までの想像と現實に懸隔があり過ぎる。こんなところで、あんな人達が、どうして血腥い凄慘な迫害を日本人に加へたのかさへ、解し難い謎である。彼はふと、子供の頃、長い竹竿を持ち出して、屋根裏などに見つけて置いた蜂の巣を突つ突きに行つて、ひどく螫されて泣いたことなどを思ひ出した。花へ蜜を吸ひに來てゐる蜂に手を出して、首筋に飛びつかれて、眼の廻るほどやつつけられたことなどを思ひ出した。そんなことを考へてゐる間に、彼はいつか眠りに落ちてしまつた。

榮策は、ふと眼がさめた。氣持よくとろ〳〵としてゐたのに、ふと眼をさましたので、まだ軀がけだるい陶醉にかかつてゐる。そしてなぜ眼がさめたのだらうと思つた。眼瞼を開くのさへ、たいぎであつた。それで、ほんの眼瞼の隙からぼんやりと彼の夢でもあるやうに點つてゐる燈盞の灯影を、うつとり眺めてゐた。全身の骨の節々が、拔けるほどかつたるい。彼はもとの眠りに引込まれようとして、それでもまだ低迷した意識の持主であつた。しかしそれもいつの間にか朦朧として、睡界への最後の一線あたりまで辿りつくと、彼は本能的にまた後戻りをして來た。眼瞼を光の弱い星のやうに瞬かして、凄いほど沈まり返つたあたりの氣配にぢゐつと心で凝視してゐると、今の彼の本能に、とんと微かに突き當つた夏の羽虫ほどなものがある。彼の意識が少し甦つた。羽虫が、今度はとんぼほどに感じられた。空氣の顫動が、やや彼の意識を惹き出して來ると、とんぼは一足跳びに、かなり大きい生き物になつた。そしてその生き物が、彼

のまわりに息づいてゐることに氣がついた。と、彼の頭髮が針のやうにしやつちよこばつて全身がぞつと總毛立つのを覺えた。軀のどこかに潜んでゐた不安が、素早く彼の胸を掠めた。彼はあわてて、當てもなく眼を瞠つた。と次の瞬間に彼の寢てゐる足もとのあたりで、今の生き物がことことと動いた。彼の軀が、衝動的にぐつと縮んだ。そして來るべきものがたうとう來たのだと思つた刹那、彼の軀が、巨人の腕で、ぐいと捻ぢつけられたやうな息窒りを感じた。しかし彼はまだそれがどんなものであるかが判らなかつたが、とてもそれを確める勇氣は出なかつた。窖の奥に追ひつめられた動物が、闇の中から眼を輝かして呻つてゐるやうに、彼は自分がもうどうすることもできない窮地に陷つてゐるのだと意識した。そこで、なにかが恐ろしい勢で爆發すると、自分の軀が苦もなく粉碎されてしまいさうな焦燥が、彼をわくわくと燃えあがらせた。すると、彼の寢てゐる右手の壁へ、まる　壁一ぱいに見えるほど大きい影法師が、ぼつと映つた。彼は思はずあつと叫びをあげさうになつたが、驚いて踏み堪えた。影法師はすうつと消えた。全神經の一本一本に、ぐさりと鋭いピンを差し貫かれたやうな氣がした　彼は息を殺して石像の如くなつたが、焦燥に灼き立てられた自分を護らうとする本能的な衝動が、ともすれば護謨毬のやうに跳ねあがらうとした。――丁度電氣の陽(プラス)と陰(マイナス)が相搏つてスパークをするやうに、彼の自己を救はうとする衝動的手段の積極と消極が相搏つて、彼の軀が宙字にぶら下つてゐるやうに感じた。今にも飛び起きて敵と組込まうとする衝動に息窒らせたり、それとは全く反對な極めて理智的な明るさの底から、靜かに！靜かに！と叫んでゐるやうにも感じられた。そしてそれが互に上になり、下になつて、彼は全身に濡汝るやうな汗をかいた　闖入者は、きつとこの附近の一帶に住んでゐる排日鮮人に違ひないと考へた。今日ここへ來た日本人のあるのを嗅ぎつけて、深夜家人の寢沈まるのを見計らつて、私かに忍んで來たのであらうと思はれる。彼は家人が早く氣附いてくれれば、そして主人が自分を説明してくれれば、なんでもないのだなどと、弱々しい、卑怯な心も泛んで來る。……

　闖入者のゐるあたりは、二人の着物の脱いであるところであつた。どう云ふものか闖入者はそこから少しも動かない。そしてそこで凝つと蹲んでゐる容子であつた。栞策はそれに氣がつくと、吻つとした。どこかにまだ自分の生きて行け

る隙があるのだと云ふやうな氣がされた。つまり闖入者は、彼等の衣類や持物はかりを窃みに來た、有觸れた夜盜であると感づいたのである。日本人が泊り合せたのを覗つて這入つたのには相違ないが、しかし憎惡のための虐殺者でないだけは察することができた。しかしこの朝鮮の夜盜は、家人が眼をさましたと氣づいた時には、きつと立向つて恐ろしい虐殺をやるのが例だ。三方は厚い壁で、ただ一方の小さい扉のついた出口しかない土窖のやうな溫突は、忍び込むのも、やつぱり扉口から這入るよりしかたがないのだ。もし家人が眼をさましたにしても、逃げ出すのはその出口より外にない。家人と闖入者は、どうしてもはつたと出合ふことになる だから從來の窃盜はたいてい兇器を携へて這入る。そして家人が氣づいた場合には、常に理由のない慘劇が行はれる。榮策はそれを識つてゐた。そして闖入者がその夜盜であることに氣がつくと、彼は急に希望ある心持になつた。彼の心は、靜かに！靜かに！と消極の理智が勝を制して行つた。しかし今這入つて來た窃盜が衣類をしきりに探つてゐる衣ずれの音は、榮策のためには猛獸の寢息のやうに聽えて來る。彼は安堵はしてゐても、體が瘧の慄ひかけのやうな氣味惡い惡寒を感ずる。それに、そばに寢てゐる通譯が、頓狂な聲でも出しはしないかと、それがまた新しい懸念になつてたまらない。しかし通譯は氣樂さうに高鼾をかいてゐる。コトンと萬年筆かなにかが固い溫突の床の上に落ちた 榮策はつとして、顏が急に火照るのを覺えた。けれどもそれなりでなにごともない。そしてまだしきりに衣類をいぢつてゐるやうである。彼は凝つとその相手の容子を伺つてゐると、少し疑念が起つて來た。相手がもし彼の想像するやうな窃盜だつたら、もういゝ加減に飛び出して行きさうなものであるのに、奇妙にいつまでも愚圖〳〵してゐる。發覺を虞れるために、衣類を窃み出さないほど思慮があるとは思はれない。さう考へると、彼の疑念はます〳〵深くなつて行つて、いつかもとの不安に復つて來さうになる。――彼は相手がなんだかさつぱり解らなくなつた。そして自分自身さへも、かう怪奇な迷宮にでもゐるやうた錯覺を感じて來る。と、慌しく、再び影法師が壁に躍つた。彼は相手がなにかの新しい動作を起したと思つた刹那、また前と同じやうた衝動に胸を搏つた。しかしその影法師が向ふへすつと消え去つたことに氣がつくと、彼ははじめて全身をどすんと大地に落ちつけたやうな安堵の溜息が出た。そしてまたはじめて闖入者の後姿を、少しく頭を擡げて憚る瞬間、彼は驚いて自分の眼

を疑つた。意外にもそれは背の主人の後姿であつたからである。榮策は苦しさうに小さく呻つて寢返りをしてみた。なんだか夢でも見てゐるのではないかと思つたのだ。しかしそれは夢でもなんでもなかつた。確かに現實の主人の後ろ姿であつた。彼はそれとはつきり意識すると、急に頭腦がぐら〳〵とした。彼の頭腦の隅から隅まで、太い金棒で滅茶々々に引つ掻き廻されたやうに感じた。彼の今寢てゐる處が、パツと怪しい妖氣があつて、あたりは、いつの間にかうら淋しい薄尾花の蔭に、ばら〳〵になつた髑髏がもの凄くころがつてゐる荒野のやうな氣がされた。そして背のうちに極度の激情を示した主人の姿が、その仄白い薄の中から突立ちあがつて、長い背が槍の穗尖のやうに閃めいて、はつたと彼を睨みつけた。――憎惡と復讐に燃えさかつてゐるその眼！　なにが人類愛だ？！　なにが世界同胞だ？！　これを見ろ！　これを見ろ！　主人は血によごれ綻びた娘の着物を、その慄える手で掴みながら、彼の面前に振り翳し振り翳し、傷ついた猛虎のやうに狂ひ叫んだ。いつか主人のその眼が血に滲んでゐると、銳い閃光が紅を潮して、彼の總身に肉薄する。――人の肉體を思ふままに虐みつくした大刀を擬せられたやうなもの凄さである。しかしまた夏の眞晝に咲きほこる眞紅な罌粟の花のやうな美しさである。――榮策の腦天から、その眼が、むごたらしく幻滅の鐵鎚を打ち下ろした。彼は思はず彈きあげられたやうに跳び起きた。今主人がこの部屋へ來たのは、榮策達が武器を提携してゐるかをどうか調べに來たのである。敵の陣形を偵察して置てその虚に乘じて、一擧に二人を屠らうとする戰畧である。――最愛の娘の血を吸つた仇敵の片われを！　榮策は洪に陷られたのだと思つた。洪は自分達を手引して、身の復讐心を滿足せしむべく犧牲の祭壇に供したのだと思つた。安價な世界主義者は、まんまと彼等の術中に陷つてしまつたのだ。――出來合ひの感激がなんになる！　今にも、主人が一發の狼火をあげると、もうこの二人は雨のやうな鐵火の洗禮を受けるのだ。榮策は身をもつて免れるより外はないと思つた。彼は出發する時に、友人が護身のためだけでも拳銃を用意して行けと、自分のを出してくれたのさへ笑つて斥けた迂愚を口惜んだ。彼は、その友人がほんたうな人間を知つてゐたのだとはじめて思つた。彼は感激の遊戲が却つてかうした人間同志の悲慘を生むことに戰慄しないわけにはゆかなかつた。この曠野のまん中に白骨を晒らす、影の薄い世界主義者の死！

今まで高鼾をかいてゐたと思つた通譯が、榮策の容子を睹て矢庭に立ちあがつた。通譯の眼がぴかりと大きく光つた。通譯が自分と同一の感じを懷いてゐるのだと榮策が思つた時、彼は眞暗な絕望の叫びをあげたかつた。彼は全身に電流をかけられて、天井から重い針金かなにかで釣りあげられてゐるやうである。二人は襯衣のままで器械仕かけの人形のやうに、扉口へぴつたりと寄り添つてしまつた。そして凝つと息を喘ませながら扉外の容子を伺つた。何時、胸の潰れるやうな物音がして、兇暴な虐殺者がそこへ押し寄せて來ないとも限らぬと思つたのである。遠くで咬みつくやうに犬が吠えてゐる。眼の眩みさうな迫害の豫感が、犇々と彼等を囚へた。通譯の慄える手が、そこの扉にかからうとした。榮策は、夕方にそれとなく見て置いたこの家の構造などを、素早く心に描いてみた。通譯は今にも飛び出さうとしてゐる。

『ま、待ちたまへ、戸外は…………？』

榮策はそこまで云つたが、あとは胸が苦しくて、ちよつと途切れた。

『…………大丈夫かね？』

とすぐまた訊くやうに云つて、兎のやうな敏感さをもつて戸外の容子を伺つた。通譯はさう云ふ榮策の聲に驚きあがりながら、眞蒼になつて顏を此方に向けた。その喪神したやうな顏を見ると、榮策は通譯が氣の毒だと思つた。どうしてもこれは逃げ出して、この人を殺してはならないと云ふ氣もする　榮策は思ひ切つて、爆發物にでも近づくやうな危險を感じながら、ギイとその重い扉を少し內へ引いた。通譯は跳び退いた。榮策はそつと戸外を覗いてみると、凝つとした銀色の月夜が、なにかを暗示するやうに沈まり返つてゐる。しかし人影らしいものは少しも見えない。榮策は却つてその靜寂を氣味惡く思つた。どこかに伏兵でもあつて、自分等が姿を見せるなり、一擊の下にやつつけてしまふのでないかとさへ感じられる。しかしまたぐず〳〵してゐて、時機が遲れたら大變だと氣がつくと、彼は通譯に合圖をするなりそつと軀を縮めながら閫をまたいだ。その閫は床からだいぶ高くなつてゐるので、廊下へ出る機みに、どんと足を突くと廊下の板目がギクと鳴る。その音を聽くと、彼は冷やりとした。今にもぶんと鐵砲玉が飛んで來て、自分の胸板を

射貫かれるやうな豫感が總身に迫つた。通譯もつゞいて出る。榮策は跣足のまゝで廊下から飛び降りるなり、夜間演習の斥候にでも出たやうに、薄明るい月光を透かして、あたりに氣を配つた。しばらく凝つと眼を瞠つてゐても動的な物などはどこにも見えなければ感づかれもしなかつた。しかし彼と通譯は、互ひに步哨線で敵狀を偵察するかのやうに、尙ほ緊張し切つてゐる。森とした靜けさが、人の寢息さへ聽き取られさうである。しかしその靜さが、暴風雨の來る前の、底冷たいもの凄さとなつて彼等を脅かした。と、榮策は砂漠で見る巨人が突如として前面に現はれたほどの驚きを感じて思はず戰慄した。――遠くの方から兇徒を嘯集する人の叫びが、狼のやうな犬の吠える聲に混つて、もの凄い唸りを立てて來たのであつた。榮策はその聲を聽くと、ここへ來る時に通つて來たあの夏草が茫々と生えた曠い草原に、途中であつたやうな眼の凄い荒くれた鮮人等が、ここの主人の采配に應じて、月光を浴びながら互に喚びかわして雪崩の如く集つて來るのが心に描かれた。そして日頃の鬱憤をこの夜に遂げるのだとばかりに、血に渇いた咽喉を鳴らしてゐる。――その瞬間の光景が、まるで地獄の繪草紙でも見るやうに、彼の眼前に肉太い曲線をもつて、ぐる〳〵と描き出された。二圍、三圍、四圍と、丘から丘に、手配よく嗾し合せたやうに叫び交はされる。榮策は地底から突きあげられた如く、その家の土塀の裾に飛び寄つた。土塀は荒土で積みあげられた低いものであつたから、乘り越えるのは左程に困難ではない。彼は今にもそこへ跳びつかうとして、尙ほ耳を凝つと澄ました。あまりあわてて戶外へ出れば、却つて先方の目標になる――彼は軍隊にゐて、さうした訓練ができてゐた。――彼はふとそれに氣がついたのだ。通譯は榮策の影のやうになつて寄り添つて來る。彼は二人が小鼠の如くそつとこの家を拔け出す場所を突嗟に見附け出さうとして焦慮つた。しかし盜賊の多い朝鮮の田舍のかうした家の周圍は、殆んど城廓の如く土塀が立て廻してある。二人がひそかに拔け出すやうな適當なところは少しも見あたらない。彼はもう土塀を乘り越すより外にないと思つた。彼は今の叫び聲によつてそれと反對の方角から逃げ出す工夫を案じ出した。それでも一度能く叫び聲の方向を確めるために耳を澄ましたが、不思議なことには、それがもうふツつり聽えなくなつた。犬の鳴き聲さへやんで、夜は再びもとの靜寂に返つてゐた。彼は今にも鯨聲があるだらうと豫期してゐたのに、それとは全く反對に、死滅したやうな世界になつてゐる。榮策等を家人

と間違えたのか、どこからか犬が出て來て、尾を振りながら彼等の足に纏いついた。その容子が、いかにも平穏らしい。俺の主人は、どこにも出ないで、俺を抛つて置いて静かに眠つてゐるのだと云はぬばかりに、人なつかしく縋つて來る

榮策は急にぼんやりとした。彼ははじめから夢でも見てゐたのでないかと思はれる。なにかに憑まれたやうな感じがした。榮策の行動通りにしてゐれば間違ひがないと考へてゐる如くに見える通譯も、やつぱりぼんやりと佇つてゐる。

『君、今の聲はなんだらう…………?』

榮策は戸外へ飛び出してからはじめて口を利いた。

『え…………?』

通譯は虚脱者のやうな顔をして榮策を眺めた。

『今の、おう――、おう――と云つたのはなんだらう…………?』

『え…………?』

通譯はまだ同じやうな返辭をした。

すると、また思ひ出したやうに、

『おう！　おう！』

と二聲ばかり聞えた。

『そら、あの聲だ！』

榮策は追つ立たられるやうな氣持でかう云つた。

『あゝあれですか…………?』

『あれさ、――なんだらう?』

『あれは梟が啼いてゐるのですよ』

『えゝ?　梟…………?』

榮策はさう聴くと、ずどんと、高い處からでも墜落したやうにがつかりした。――彼はあまりに自分の狼狽した心に愛

想がつきたのだ。そしてもうそこの地べたにどつかりと打ち倒れたいやうな疲勞と空虛とを感じた。長い間、都會の喧騷したまん中で暮してゐても、梟を人の叫び聲と聽き違へるのは、あまりに慘じめな生の執着である。彼がいかに英雄がらうと、彼の正直な生の本能が、決してそんな傲慢を容して置きはしない！それはなんと云ふ淺間しい悲喜劇だらう？――萬事はわかつた。彼が寢床から慌しく起きあがつて、それからここまでのすべての行動は、それはこの一場の悲喜劇だつたのだ 彼のどうすることもできない强烈な生の執着から躍り出した、それは一場の夢幻劇に過ぎなかつたのだ。夜は皮肉にも靜かに更けて行く。――その靜かな夜の奥に、につと冷たいほゝ笑みを泛べてゐるかのやうにも。

『門を開けて出ませうか……？』

通譯がふとそんなことを、不安らしい聲で囁いた。

『えゝ？』

今度は考え込んでゐた榮策の方が答える。

『門はすぐ開きますから、早く出ませう……？』

通譯がまたかう云ふ。

『…………』

榮策は返辭に困つた。

『いつまでもこんなところにゐたら危險ですよ』

はき〳〵と通譯はものを云ひ出すやうになつた。

『門の外へ出て、散歩でもしようか…………？』

榮策は仄青白い空を仰いで、自分を嘲けるやうにかう云つた。鮮人を理解してゐる新人らしい、世界主義を奉ずる先驅者らしい面構へをしてゐる自分の顏に、彼は唾でも吐きかけてやりたいと思つた。夜の大氣が、冷やりと薄い夏襯衣から透感する。もう曉近くになる氣配だ。

『散歩ですか……？』

通譯は呆れて訊き直した。

『さうさ、散歩でもして頭腦を冷やすんだね……』

榮策は自分に云ひ聽かせるやうなつもりで又かう云つた。しかし、心配してゐる通譯が、彼は氣の毒でならないので、

『君、なんでもないのだよ』

と靜かな聲で囁いた。そして彼自身もその自分の聲を、なんとも云へない安堵の悅びに溢れて聽いた。

『…………』

通譯は返辭をしなかつた。そしてまだなか／＼不安が去らない容子で、あたりの物音を聽き出すやうに、凝つと耳を澄ませてゐる。

『さあ、もう這入つて寢よう、風邪をひくぜ、――ぐず／＼してゐると、夜が明ける』

かう云つた榮策は、くしやみを一つした。

『僕はこゝにゐますよ』

通譯は、なにか決心してゐるもののやうに云つて、固くなつて佇つてゐる。榮策は、通譯がまた部屋に忍んで來た者が主人であることには氣付かないのであらうと思つた。それを知つたらば、或は安心して部屋に這入るかも知れないと思つたので、

『君、今部屋へ來た者はね――』

とこれまで云つた時、ギイとすぐ眼の前の部屋の扉が內裡から開いた。そして眩しさうな光がさつと廊下から二人の佇つてゐる足許のあたりに流れる。意外に面喰つた榮策は悔つとして立竦んだ、通譯はあわててばた／＼と暗がりに身を躱した。

『……便所、わかりませんか、……？』

その聲は、確かに主人であつた。深い印象を殘してゐる宵の主人の親切な言葉が、同じ響きをもつて榮策の胸に溫かく滲み躍つた。そしてその言葉のどこに、榮策の想像したやうな血腥さがあらう？　彼はさう氣がつくと、自分の心が

悲しくなつた。——彼はその時そしてその時、主人が自分の部屋へ來て、持ち物を些細に檢べて行つた意志がはつきりとわかつた。彼は通譯に眼くばせすると、すご〳〵ともとの部屋へ歸つて行つた。

六

　あたりが仄白くなつて來るのを待ち焦れて、榮策は急いで起きあがつた。通譯もつゞいて起きると、すぐ榮策のそばへ寄つて來て、

『なんにもなくなつてゐませんね？』

と云つた。彼は苦笑して手を振つた。用意して來た齒揚子をくわへて、彼はもう開いてある門の外へ出た。爽やかに乾き切つた大陸性の夏は、氷島からでも吹いて來たかと思はれる冷たい露氣が、まだ明け切らぬ群青色の空から滴るやうに彼の頰を搏つ。彼の生命が、今殼を破つて出た生物の如き悅びに溢れて勇躍した。その門の分厚の甍に、長い楊柳の枝が垂れ下つて、チイ、チイと、小雀がしきりに騷いでゐる。楊柳の枝がさわ〳〵と揺めくと、仄白い柳絮は夢のやうにあたりに散りかかる。緣がわへ出してくれた大きい金盥で二人が顏を洗つてゐるそばへ下男がやつて來た。恭しく頭を下げて挨拶をすると、もう朝飯ができてゐるから主人の部屋へ來て呉れと云つた。

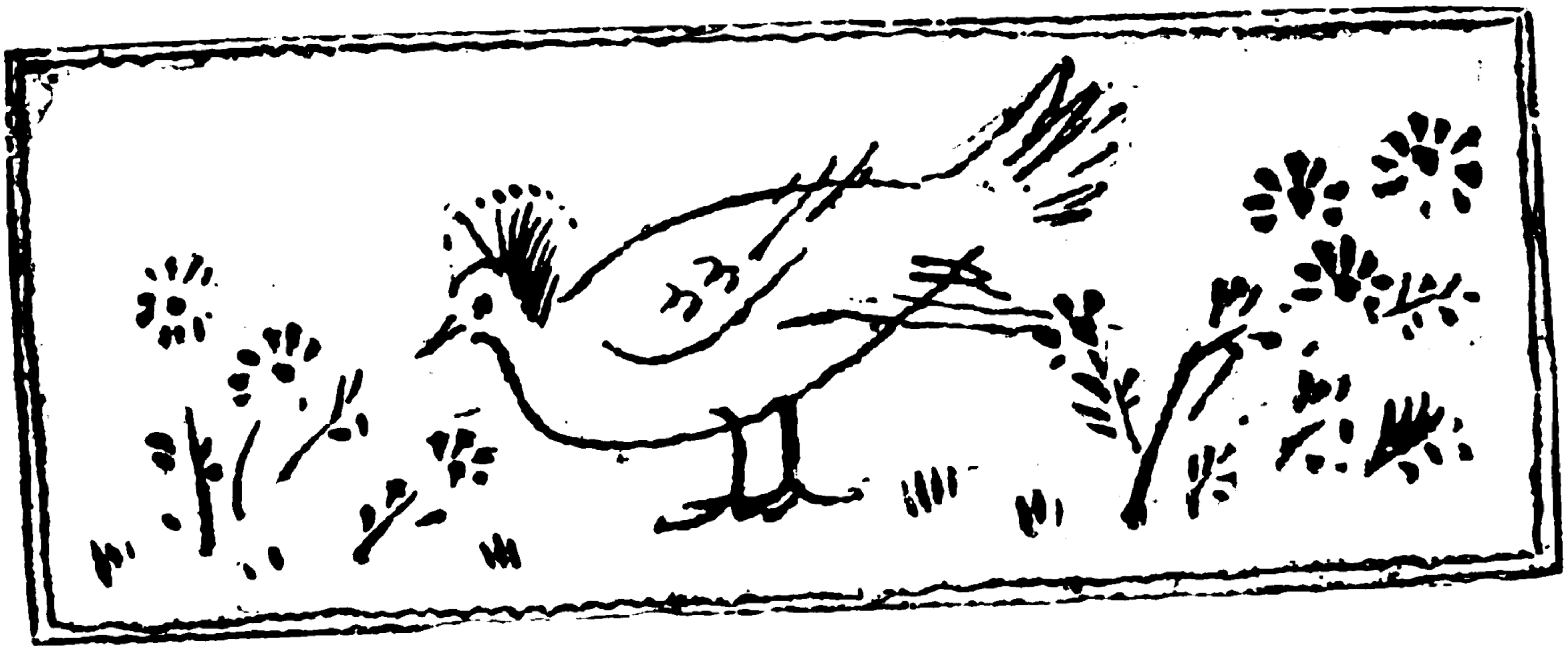
　すつかり開け放たれた主人の部屋は、水々しく明るかつた。大きく流れ込んで來る風に、アカシヤの花の匂が、閾をまたいだ榮策の顏にほんのりと媚び寄る。黒紗の幅巾冠を戴いて、薄茶色の涼しさうな甁服を纏つた主人は、三人の食膳を調えた前に、にこやかな微笑を漂へて待つてゐた。食膳に供へた眞鍮製の食器が、朝の影にきら〳〵と光つてゐる。今日の二人の晝の辨當らしいものが、新聞紙に包んで、そのそばに置いてあつた。

『やあ、昨晩は非常に失禮いたしました』

主人は二人の姿を眺めるとすぐから云つて、晴々しい眼を輝かせて挨拶をした。

『どうも。昨晩はとんだ御世話になりました……』

『と、榮策は心から感謝の禮を陳べて、丁寧に主人の前で頭を下げた。と、彼は急に眼瞼が熱くなつて來て、溢れるやうな感激が胸を息塞らせた。——すべては、自分達民族の負ふべき罪だ。



歪められたボテ蔓

武林無想庵

ヘトヘトに疲れきつて、人間の搾り糟となつて、私はグッタリ鵠沼へ歸つた。さうして寢た。一トたまりもなく寢た。丸太ン棒のやうに寢た。恐らく丸太ン棒ほどの値打さへ無くなつてゐた軀を抛り出して、十五六時間ブッ通しに寢た。漸く目のさめかけた時、口の中が非常に苦く感じた。と、私の意識は先づその苦さから甦りはじめたものだ。同時に、例の友禪縮緬の眞紅な色をした搔卷の袖が、嘲けるやうに、サツと迸ばしつて、逸早く私の網膜中へとび込んで來たものだ。

『ヘン、やッぱり寢心地はいゝだらうがね？いくらプロレタリアがつたつて駄目だよ。川だちは川サ。大和民族の運命には穩しく順應するものサ。君なンぞは、まア、どうせ、もと〳〵、かうやつて友禪縮緬と心中するやうに、人格が淺薄に出來上つてゐるんだからね……』と、搔卷が云つてるやうに思はれた。私は骨の髓まで苦くなつた。

『四十年もやす〳〵と飽食暖衣の生活ばかり續けて來た人間が、さうして俺のやうに極めて意志の脆弱な人間が、さう〳〵手輕に、一朝一夕に、生へ拔きのブ

ロレタリアと全く同じ生活へ、奇蹟のやうに急轉直下のメタモルフォズが行へるだらうか？』と、私は黯然と考へた。

『さう……あの强烈な意志と感情の持主だつたトルストイでさへ、百姓と同じく鋤鍬などを手にして、勇ましく田圃の間へは立つたものゝどうしても巴里製の肌着と香水とは、無意識に、本能的に、自分の身邊から離せなかつたさうだからナ……フン、無抵抗主義か……原始基督教とさうしてハチきれるほど旺盛な生活慾だ……矛盾だ。大矛盾だ。さうしてその大矛盾の結果がどうだ？　瀕死狀態のトルストイを假借するところなく叩き出して、殘忍に追窮して、どうでもかうでもアスタポヴォで野たれ死させて了はなければ承知が出來なかつたぢやないか？……『野たれ死か……野たれ死は男兒の本懷なり』……十年來、よくそんな文句をば、臆面もなく言つたり書いたりしたものだ……アーキンチヤニヤ……一路居士……放浪……自分の矛盾が自分自身で分らぬのだ。見ろ！　このザマはどうだ？　奧さん……鵠沼……ブルジョアの宿屋……舊式なデカダン生活……こんなナマぬるい世界ばかりグルグル廻りながら革命？　叛逆？　どの口でホザくのだ？……』

私はハネ起きた。

お鹿さんに訊くと、下の山極道子女史は、一昨日とか、東京へ歸つて了つたさうだ。

―先生、誰も引懸る者もないので、爰には一切りをつけたわけか……併し、それにしては少々氣が早すぎる。

―あなたが、歸りになるまで待てなかつたんでせうよ。

―不實なものだね……して見ると、我輩には惚れてゐなかつたのか知らん？

―いゝ了見だよ。と、お鹿さんはさも氣味がよさゝうに笑つた。

が、私は併し、何となく腹の底で、どうやら物足らないやうな、一寸ばかり淋しい心持もした。

鎌倉からは何のたよりもなかつた……

鉛のやうな雲が、終日頭の上を壓しつけてゐて、そのくせ一向降り出さうともせず、わるく鬱陶しい、重苦しい、イライラする、いやな天氣だつた。

私は机の前で坐り暮らした。眼を閉つたまゝ、齒をくひしばつたまゝ、時間を忘れ、空間を忘れたまゝ、ただ喉頭に引懸つた白刄をば、呑込む事も出來ず、吐出す事も出來ぬと云つたやうな、所謂黑暗坑の鬼窟裡に陷つたまゝ玉のやうな、冷汗ばかりタラタラと流しながら、絕體絕命に坐り暮らした。

夕方近くなつて、東京からFが、これも舊雜誌同人の一人だつたFが、フラリとやつて來た。

——やア。と、Fは相變らず、口髭だけは頗るエレガントな、羊のやうに眼の優しい、いかにも長閑な顏へ持つて行つて、とても屈托などは無さゝうな微笑を湛へながら、ノンビリその長身を現はした。

Fはそれでも長州人だ、文士だ、カトリツク信者だ。さうして十年一日の如く、平然として無名と戰ひ貧乏と格鬪しつゞけて來た男だ。有難くも神樣から授けられた、或は押付られた、背負はされた、四五人の子供の父親でもあるのだが、その唯一の定收入であるところの、月々カトリツクの宣傳雜誌から支給される、鼻糞ほどの涙金だけでは、勿論、たゞ扶養といふ一點からばかり見た、父親としての義務も、責任も到底滿足には果しきれさうな筈もなかつた。さうしてFは藝術家だ。ひどく商賣氣のない藝術家だ。たゞの一篇でもいゝから、どうかして快心の作物をば世の中へのこして行く爲には、どんな苦痛でも迫害でもあくまで耐へ忍ぶ覺悟でゐる藝術家だ。が、かういふ男に對しては、いふまでもなく世間はいつも殘酷だ。たま〳〵暫くFの、時流とはかけ離れた、あまりに上品すぎる小說など、かのアタフタした、ワクワクした徒らにせゝこましい世間の雜誌社や出版屋では、買ふ買はぬはさて置いて、テンデ相手にさへしてくれぬほどのセチがらさだ。

——漸く出來た……と云ひながら、Fは風呂敷の中から百枚ほどの原稿を出した。

問題の小說か……隨分かゝつたものだね。

——ザツと一年だ……併し、どうも創作は、どうしても一氣にやらんといかん……
——そんな事はあるまいが……要するに引合はないね、いくら高く賣れて見たところで。さうかゝつちやア、、、
——まあ、そんなものサ。と、Fは苦笑したが——ともかく一應目を通して置いてくれたまへ。御苦勞だらうけれど……と、いかにも氣の毒さうな調子で云つた。
——おやすい御用だ。で、採用するかどうか、ためしに××社の方へ送りつけて見よう、採否は無論わからないが……と、私は快く答へた。
——さうしてくれりやア。何よりだ。と。Fはやツと重荷を卸したやうな顏をした。
私は心苦しかつた。その面に溢れた正直な信頼の念に對して、とてもそれに酬い得るだけの資格も力量もない、あまりに薄弱な自分自身の世間的地位が省みられて……
夕飯の時刻が來た。久しぶりで二人はお互ひに隔意のない杯をあげた。
Fも酒が好きだ。私と同じやうに忽ち、醉つて了ふ。私と同じやうに醉へばいくらでも飲みたがる。さうして私と同じやうに、きまつてダラシなさの方途がなくなるのが常だ。
——Yが云つてゐたツけ……繼もいゝが、人の妻君はいかんツて……と、Fはソロソロがすべりはじめた。
——亭主の側（ガハ）から云やア、そりやいかんにきまつてるサ。これがYの妻君だつたら、なほいかんだらうよ。と、私の鼻息も次第に荒くなり出した。
——アハハハ……併し、この先きどうなるつもりだらうツて、しきりに心配もしてゐたよ。
——どうもかうもあるもんか……女を中心にして行動すりやア、死より外に途はありやしない。
——死ぬのはいかん……
——誰が死ぬもんか、ハハハ……僕は決して女なンぞを中心にして行動しやしないからね……死を目標として總するぐらゐ馬鹿げた事はない。

――勿論だ。生きる爲だ。生きる爲の戀だ……戀は人生の全部だ。さうして絕對だ。絕對は死ぢやない。斷じてない。

――絕對なンて僕には無用だが、又戀は僕の生活の全部だとは考へないが、戀の爲に死ぬ氣のないだけは確實だよ。

――さう、君は神を認めない人だから、或はさうかも知れんが、僕は併し戀は絕對の生活だと思ふ。

――君の思ふのは君の勝手サ。たゞ僕のは根本が破壞からはじまつた戀なんだ。

――破壞？　こりや分らん……戀が破壞？　分らんね、どうしても。

――破壞サ。社會組織の破壞サ。

――社會組織の破壞？そりやたまたま君の場合のやうに人の妻君だつた時にかぎる。

――併しね、若しあの女が金持の妻君でなかつたら、僕はきつと戀なんかしなかつたらうよ。

――そんな事は單に君の口先だけの理屈にすぎん。戀は理屈ぢやない。理屈なざア超越してる、だから絕對だ。

――理屈を超越し得るものが存在すると思ふのも、それがやツぱり一つの理屈サ。論理の手の屆かぬ理屈を捉まへてやれ絕對だ、神だと云ふけれど。さういふものこそ、僕にとつては、單なる空理空想にすぎない。だから、君の立場からすると、僕は或は戀をしてるのぢやない事になるかも知れない。

――ハヽヽ。例の又詭辯だ。詭辯はいかん。詭辯は自ら欺く事だ。

――君から見りやア、僕のいふ事は、すべて詭辯サ。僕には神が信ぜられないからね。

――いや君は神を信じてゐる、君は決して神が信じられないやうな人間ぢやない。それは今迄の君の行動が證明してゐる君の行動は常に君の論理を裏切つてゐる。口で云ふほど君は決してシニツクぢやない。

――御厚意は有難いが、僕は神なんざ信じないよ。

――さういふ君の口こそ信じられないが……まア、いゝサ……議論なざア下らん……大いに飲まう……痛快だ……君の今度の行動は痛快だ。假面をかぶつた社會道德なざア、ドシドシ脚下に蹂躙するんだ……痛快だ……

大いに飮まう……

——ハハハ。さう痛快がらなくたツていゝ。やつてる當人はあんまり痛快ぢやない。

——そんな事があるものか。痛快にきまツてるさ。

——痛快は見物人の事サ。當事者は大煩悶だ。

——煩悶なざア、下らん。煩悶なざア、脚下に蹂躙して了ふんだ……ドシドシ蹂躙して了ふんだ……飮まう、大いに飮まう……

Fは見る〳〵『らくだ』の屑屋さんになつた。さうして瞬くうちに、神も、カトリツクも、戀も、絕對も、ドシドシ脚下に蹂躙して了つた。私も醉つた。

——どうだ？　これから藤澤へ出かけようか？

——痛快だ！　どこへでも行かう。美人のところへ行かう……美人でなくちやいかん……美人にかぎる……アハヽ！コリヤ、痛快だ！

玄關でお鹿さんにとめられても聽かず、ポツポツ雨の降り出したぐらゐ何とも思はず。二人は宿のドテラを着たまゝ、まるで天下でも取つたやうな氣になつて飛び出した。

なぜだ？　なぜかうなのだ？人生は眞面目だ。人生は嚴肅だ。それ位の事は二人には充分に分かつてゐる筈だ。酒をのまずに一人きりでゐる時は、二人とも齒をくひしばつて、弱い自己ばかり責めさいなんで、息をもつけぬやうな每日を送つてゐる人間達ぢやないか？　なぜなのだ？　なぜ酒なんぞのむのだ？　のまずにはゐられなくなるのだ？　なぜ飮むとかうなるのだ？　かうダラシがなくなつて了ふのだ？……なぜも何もあるものか？　自殺が出來ないからだ！ たゞ自殺が出來ないからだ！……Fは神の爲に、私は執念の爲に……

——××××××××！　と、私は松原の中で絕叫した。

——×××××××××！　と、Ｆも負けずに怒鳴つた。

——×××！

——×××！

さうして二人は雨の中で、暗の中で、一齊にドツと笑つた。思ひきり聲を張上げて、

——ワアツ！　と叫んだ。

よれ〳〵のメレンスを着た、營養不良の顏をした、乾枯びきつた雛妓が一人、滅多無性に太鼓を叩き立てた。しまりの惡い、皮のたるんだ濕ツぽくやけた音を亂して、ボンボコ、ボンボコと叩き立てた。四十ばかりの婆さん藝者が、出齒目のやうな三味線をガチャガチャ鳴らしながら、潰れた聲を苦しげにふり絞つて、セツパ詰つたやうに唄つてゐた。甚句だ。

いくらベロベロに醉つた揚句にしても、Ｆにも私にも決して面白い筈はなかつた。

——どうだい？　虐げられた人間どもの寄合ぢやないか？

——全くだ。殘酷だ？

——虐げるのは何者だ？

——我々だ。我々人間だ。人間は殘酷だ。

——人間は人間を虐げて平氣でゐるのだ。

——虐げられてゐるものゝ罪でゞもあるやうにナ……

——けれども、お互ひに虐げ合はずには、今の世の中に生活しては行けないぢやないか？

——今の世の中に限つた事はない。いつの世の中だつてさうだ。

——いツそのこと、この際お互ひに、ウンと虐げ合つて了はうぢやないか？

——さうだ。それに限る。それより外に我々の生きる道はない。

——我々の希望は絶望だ。恐怖時代の現出だ。

——血をもつて贖ふのだ。我々にはみんな十字架に上る必要がある。

——十字架よりやバリカアドの上だ……バタリと騒ぎが鎮まつた。

——一杯いたゞかして頂戴よう……精出して働いたんぢやありませんか……よう、議論ばかりしてないでサ……

と、三味線を置くと、婆さん藝者は餉臺の前までズリ出して來て、誰のだか分らぬ猪口を取上げた。

——いや、御苦勞、御苦勞……さア、ウンと飲め、と、矢繼早に注いでやりながら、

——革命の前景氣だ。大いに飲め、大いに……と、私はジレッたくなつて云つた。

——ハハハハハ？今にも始めさうな勢だね。と、Fは笑つた。

——「カクメイ」ツて、なアに？と、乾枯びた雛妓が、二人の間へ割込んで、私の膝の上へ痩せこけた手をのせながら訊いた。

——革命か？ハハハ！革命と云ふのはね、さうさなア……まア、五人男見たやうなものサ。

——五人男？辨天小僧だの、南郷力丸だのツていふ……

——まア、さうサ。

——ぢや、泥棒なの？

——泥棒ぢやないが……困つたナ……とにかく××××××××××事だ。

——ぢや、强盗ぢやありませんか？

——物を盗むんぢやない×××のサ。

——さうすと、義賊ね、鼠小僧見たいな！

——さうサ、まア……貧乏人がみんな鼠小僧になつて了ふんだね……一人殘らずだ……

――へえ？　面白いわね！　あたいも「カクメイ」になりたいわねえ……鼠小僧、あたい、大好きよ。

――アハハハハ！　こりや、痛快だ！　と、Fは手を拍つて嬉しがつた。

――さア、そのつもりで、一つ、何か景氣よくやりませう……と、婆さん藝者が又三味線を取上げた。

Fは眞面目くさつて、「袖萩」を唸り始めた。

××××××××××××××××××來た。

夜ッぴて降りつゞけてゐた雨は、朝方になつて、どうやら降りくたびれたやうに、一寸ばかり霽間を見せた。傘を持たぬ二人は、もうスッカリ醉がさめてゐたので、その間にコソコソと一番の電車に乘つて、逃出すやうに鵠沼へ戻つた。部屋には、まだゆうべのまんま、お鹿さんが二人の爲にキチンと敷いて置いてくれた臥床が、人待ち顏に押並んで待つてゐた。言はず語らず、Fも私もそのまゝその中へもぐり込んで、言はず語らず、そのまゝグッスリと睡入つて了つた。

――あゝ、よく睡た……久しぶりで樂々した。と、目をさますと、Fはグッと伸びをして、大きなアクビを一つした。

――どうだ？　風呂へでも這入つて來ようか？　と、私も目をさまして、ムックリ起返つた。

――うん……もう何時かしらん？

私は脱け出して、机の前へ胡座をかいた。

――一時すぎだ……なるほど、よく睡たものだ……

――お蔭で積日の睡眠不足が一掃されたやうだ……人間は前後不覺に睡るにかぎる。と、Fもノソノソ床の中から這ひ出した。

――起きて見た處で、依然として前後不覺の生活を續けるだけなんだが……と、私も紙卷に火をつけて立上つた。

——ハヽヽ。まづ、そんなもんだ。

風呂から歸つて、珍しく酒をぬいた晝飯をすますと、二人は珍しく尋常の顔をして、いかにもブルジョア然として、ブラリブラリ散歩に出かけたものだ。

砂はまだ濕つてはゐたが、ところぐ\青空の覗いた雲間を漉して、飄渺と薄日がさしてゐた。松林の梢がクッキリと浮出して、鮮かな緑色を見せたりした。

——はじめて來て見たが、中々な靜かないゝところだね。と、家のあるところを離れると、Fはそこら邊を見まはしながら云つた。

——ウン、人間が常寂光土に納まりきれるものならね……と、私は松の間の小さな尼寺の屋根を見ながら答へた。

——常寂光土か……さうサ……ハ、ア、あれかい、例の尼寺といふのは？

——ウン。

——何宗か知らん？

——何宗か知らないが、中將姫の織つたとか稱する曼荼羅がある。見ようか？

——見てもいゝね。若い、美しい尼でも出て來ると面白いがナ。

君の書きさうな小説だ。

——ハヽヽヽヽ！

二人は尼寺へ上り込んで、神妙に曼荼羅の前へ座らせられて、五十ばかりの尼さんから、長々と因縁をきかされた。

——××××××××××ないが、天下はいつも泰平なものだ。と、尼寺を出ると、Fは首を掉りながら呟いた。

——ゆうべの雛妓の方が、まだよほど我々の方へ近いやうだ。

——ハヽハ。あの鼠小僧か……鼠小僧は振るつてた……と云ひかけたが、何を聯想したものか、急に愁然として

——君、貧乏人が子供を拵へるのは、實際罪惡だよ。と、ホッと深い溜息を洩らしながら、Fはいかにも思ひ迫つたや

うに、シミジミと云つた。
少し調子が變だとは思つたが、私はさあらぬ體で、
――なアに、しと……特權者や金持どもが、元來人類全體に共有であるべき筈の地上の富源をば、彼等だけの仲間で壟斷して、子々孫々まで私する爲に、あとからあとからその相續人や擁護者を、續々と殖やしてゆく方が、どのくらゐ罪惡だか分るものか……と、頗るわかりきつた事を云ふと、
――理論はさうだがね……と、Fはそれには取合はず、一層沈痛な聲をして、――これで、君、實際生まれたつて食はす事が出來ないにきまつてるのに……やツぱり、その、一年も逢はずにゐた揚句だとねえ、つい、×××××××……××、××……要するに、つまり……結局、拵へて了ふ始末なんだからね……生まれて來たものこそ全く災難だよ……さう思ふと、僕は八ツ裂にされるやうな氣がする……實際だよ、君……と、慨然として口を噤んだ。
私はそれと察した。が、わざと剽輕な聲を出して、
――なアんだ、妻君、また性懲りもなく孕んだのか？　と、ヅバヅバ突込んだ。
――ウム、實は……と、苦笑しながら口籠つて、Fは頭を掻いた。
――道理でゆうべは猛烈に美人を見たがつたわけだ。ハハハ。例によつてナ×××得し、×××××××××××××××××と見えるね。
――頑強すぎるんで閉口する、全く。
――カポート・アングレーズでも用ひればよいのにサ。氣がきかないね。
と、Fは一寸歩みをとめて、俄に嚴肅な顔をした。さうして、
――さういふ卑怯な振舞は僕には出來ん。と、さも苦るしげに云つた。
私はしくじッたと思つた。が、やゝ片腹痛くも感じたので、

――なぜ？　と、反問して見た。
すると、Ｆは昂然と肩を聳やかして、
――神のする事を人間の小細工で遮ぎるのは冒瀆だ。と、キツパリ答へた。
私は肚の底でフヽんと云つたやうな心持がした。
――冒瀆か……だつて、見す〳〵わかりきつた事を、强ひて苦しむには當らないやうなものだからなア……
――人間の苦しむのは神が惡いのぢやないよ。
――ぢや、誰が惡いのだ？
――勿論、人間自身が惡いのサ
――だから、少しでも苦しまないやうに工夫したらいゝぢやないか？
――併しね、食はせられない子供を拵へる苦痛よりも、冒瀆の苦痛の方が、僕には遙かに大きいからね。
――さうかね……と、私もとう〳〵匙を投げた。さうして、
――どうして神なんてものが信じ得られるんだらう？　と、獨語のやうに呟くと、
――信じられない方がよほど不思議なんだがねえ……と、Ｆは輕く笑ひながら、――併し信仰は各自の體驗によるより外に起りやうのないものだから止むを得ない……と、何の矛盾もなさゝうな顔して云つた。
二人は默々と店家の並んだところまで歸つた。次第に靑空の部分が廣くなつて、殘された灰色の雲は白色に變つた。
――いゝ天氣になつたねえ。このまゝ東京へ歸つて了ふのも惜しいやうな氣がする。
――もう一日、ゆツくり遊んでゆくサ。江の島へでも行つて見ようか？
――さう……さうしてもいゝが……實は、僕はまだ、江の島といふところは、お恥しい話だが、生まれてから一度も行つて見た事がないのだよ。
――江の島なんざ知らなくたつて、神を知らないほど耻辱でもあるまいが……併し、怪しからんもんだね……然

一、辨天小僧菊之助氏へ對して冒瀆の至りだ。

——ハハハ。冒瀆は驚く。さう敵（カタキ）を打たれて見ると、意地でも案内して貰はなければならなくなる。

——さア、それぢや、これから、トラピストの坊さんと無神論者と呉越同舟で、上る悪事のユートピアへ押しかけるか。

相談は纏つた。二人は宿へ戻つて、ドテラを脱いだ。さうしてすぐ裏口から出掛けた。

砂濱へ踏み出すと、私はたまらなく奥さんが戀しくなつた。このあひだ、最後に二人が手をつなぎ合つて歩いた砂濱だ、その時の足跡がまだまざ〳〵と殘つてゐるやうな心持がする。歩きながら、私は時々砂地の上へ遣瀬ない視線を落した。さうしてそのたんびにホッと太息をついた。

はじめのうちは、そんな私だとは思ひもよらず、たゞ〳〵眼前へ展開した、充分に詩趣の豐かな、壺のやうな風景にスッカリ注意を吸收されてゐたFは、わけもなくあつちを向いたり、こつちを向いたりして、

——ウム、こりやいゝ！　こりや頗るいゝ！……どうしてもタイス氣分だね。さうだ。あの砂山の陰へでも行つたら苦行にやつれはてたパフニュースが、例の沙漠の花でも幻想してゐさうな氣がするぢやないか……などゝ、しきりにノンビリした感嘆詞やネゴトを連發してゐたが、あんまり私が押默つて、ふさぎゝつて、返事さへ碌々しないのに、さすがに氣がついたと見えて、

——どうかしたのかね？　ひどく顏色がわるいが……と、忽ちアフリカの夢をさまして、心配さうに訊いた。

——ウム、なアに、少し……どうしたんだか、少しばかり妙にかう……やッぱりアル中の氣味なんだらう……かう、變にセンチメンタルな心持にばかりなるのは……と、私は曖昧に口籠つた。

——センチメンタル？　センチメンタルはかまはんが……寒けでもするんぢやないか？

——いや、からだなンさ大丈夫だが……實は、四五日前、この途を通つたんでね……あの女と……

——それで？

——それで、つまり、センチメタルになつたゞけサ。

——ハハハハハ！　さつぱり分らんが、とにかく戀のある人は羨ましいね……戀は人間を若くする。四十男をロメオにする。フアウストも若返らさるを得ないわけだ。

•——盛んに冷やかすね……冷やかされても今日は一言もない……

最後の接吻をした砂山の下を通りすがつた時、私は急に涙ぐましくなつた。で、歯をくひしばるやうにして、ジツと押しこらへたつもりだつたのだが、心なき眼の隅からは、おかまひなしに、一ト雫ボロリと滾れた。Fは顏を外向けた。さうして物思はしげに左右へ首を振りながら默然として大股でザクリザクリ歩いた。

二人とも無言のまゝで、やがて小一丁も歩いたかと思ふ頃、だんだんに近づく江の島にばかり、凝然とその視線を注ぎながら、

——とにかくだ……さういふ煮え切らない狀態のつゞく事は、兩方にとつて甚だいかん。と、沈痛な聲でFが云つた。

——ウン、いかん……と、私は力なく答へて溜息をついた。

——どうせ喜劇には終りツこのないものなら、一氣にキヤタストローフへ突進して了つた方がよさゝうに思ふがね……その方が或は却つて血路が開けさうな氣もする……九死一生といふ奴サ。

——さア……こつちやア、いつだつてその覺悟でゐるんだが……

——覺悟ばかりぢやない。直接行動サ。

——さう……

——生死嚴頭に立つんだね。

——さうサ……

渡し場へ着いた。

江の島には何がある？　少し風が吹けば、少し波が立てば、きまつてどこか知らん破損するのを常とした、長い〳〵棧橋がある。山の風致をぶち毀して、一段々々無遠慮に築き上げて行つた、カサブタのやうに見苦しい、大きな宿屋がある。實用は勿論、單純なスーヴニールにもなり兼ねる、徒らに安ツぽいマヤカシ物ばかり並べ立てた、所謂名物屋が澤山ある。石段がある。寺がある。神社がある。別莊がある。壺燒がある。さうして富士の人穴まで續いた岩屋まである。それにも拘らず、江の島には何もないのだ。

ない筈だ。江の島は地上だ。地上にないものがありさうな筈はない。それでも二人は地上を踏んで歩いてゐるくせに一つとして地上のものが、お互ひの眼にはとまらないのだ。さうして地上にないものばかり、知らず識らず根氣よく求め暮らしてゐるのだ。

――案外、つまらんところだね。と、斷崖の上の茶店まで、エンヤラやツと引返すと、三十年來の幻想を一遍に破られて了つたFが云つた。

――きまつてるさ。江の島からこの壺燒を除いたら、何にも殘るものはない。しかもこの肝心の蠑螺すら、今では爰でとれるのぢやないさうだ。と、一杯のんだので、大分元氣を恢復して來た私は、そろ〳〵無駄口をきゝはじめた。

――併し、爰から見た色景は、相當に雄大なものだ。

――なアに、海を見晴らす崖の上なら、どこへ行つたつてこの通りさ。別段、江の島でなけりやア、富士が見えぬといふわけぢやなし、あゝいつた海岸が……

――雄大でありさへしたらいゝサ……江の島であつたつて無くたつて……

――雄大はそんなにいゝかね。雄大ぐらい平凡極まるものはないぜ。

――平凡極まるからいゝぢやないか？

──差支はないが、つまらないだけだ。

──人生ではつまらない方が大抵正しいやうだ。

──だから、姦通は必要だ、と、ジョージムーアが云つてゐるよ。

──さうか知らん？

──勿論、パラドックスさ。

──パラドックスは無意味ではいけない。

──併しオーソドックスよりやよツぽど人間的だ。

──悪魔的なんだらう。

──さうサ、無論……それで人間味が出るのサ。

──ハハハ。どうしても人間から神性を剝奪して了はないと、結局承知が出來んものと見える。困つた性分だね。

Fは少々愛想がつきたやうな顔をして、チュウと盃を吸ふと、パッタリ默つて了つた。恐らく酒がまはつた證據であらう、私はまた突然、例の病的な、イライラした、ムシャクシャした、何ともかとも云ひやうのない焦躁に襲はれはじめた。と、斷りもなくズンズン太陽の傾いたのが、ひどく小癪にさはつて來た。次第に糢糊の程度を増して、ウスぼけた富士や箱根や伊豆半島が、とうとう暮雲に韜まれて了つたのが、何だか馬鹿にでもされたやうで、腹立たしくてたまらなくなつた。たゞケバケバと白馬を奔らして、少し波の立つて來たゞけが、一寸ばかり快かつた。

──こんなところで、いつまでグズグズしてたつて下らない……金澤へ行かう、金澤へ……そして徹夜して飲まう……あツ！

もう、かうなつちや駄目だ。酒でなくちや駄目だ……酒だ、酒だ……と、ヨロヨロと立上りさまに、自分で自分の頭をば、突發的にコツンと一つ、力一杯毆りつけながら、恰も氣でも違つたやうに、

──アツ、ハツ、ハツ、ハツ！　と、からだ全體をゆすりあげつゝ、私は思ひきり馬鹿笑ひした。

氣の毒さうに苦笑しながら、Fも續いて茶店を出た。

一様に塗抹された薄墨色の海と空とを、わづかに劃した太く濃い一線で、七里ケ濱から三浦半島へかけた坦らかな海岸が、朧ろにそれと見分けられるトワイライトがまだ殘つてゐた。一つ二つ星も見えた。

――鎌倉はあの邊かねえ？　と、金龜の二階へ陣取ると、何氣なしにFが訊いた。

私は頭がヅキンとした。が、强ひて動じた樣子を見せまいとして、

――さうサ。あすこサ。材木座はあすこさ。天國はあすこさ。地獄もあすこサ。ハハハハハ！　と、却つて抑へきれぬ感情の尻尾を出して了つた。

Fは小首を掉つた。さうして、『どうしたものだらう？』といふ顔をしながら、

――困るねえ、さう神經が昂奮してゐちやア……實際、無理もないけれど……併し……と、云ひかけた時、パッと頭の上の電燈がついた。

――寒くなつた。と呟いて、氣をきかしたやうに、Fは廊下の障子を閉めた。

杯盤が運ばれた。

――來た、來た。早速一つ……と、待兼ねたやうに盃を取上げたが、すぐ氣が變つて、それを下に置き、――これにしよう。この方が面倒くさくなくて……と、私は吸物椀の蓋をとつて、その中へなみ〳〵と注がしたものだ。そして二三杯グイグイと引懸けた。

が、かうした私のわざとらしい薄ツペらな態度が、あまり不自然にも情なくも感じられたものであらう、Fは次第に索然として、白茶けた表情をして、つまらなさうに、氣が進まぬやうに、止む事を得ず杯の數を重ねてゐた。

どうしたのか、飲めば飲むほど、だん〳〵に醉へなくなつた。だん〳〵に言葉數が減つて行つた。そうしてしまひには二人とも全く無言に陷つた。

沈默は暫く續いた。恰も徐ろに醉の發して來る時機でも待つものゝやうに。私は何物にか頭の上から壓しつけられるやうな氣持がした。さうして胸先ばかりジリジリとしきりに炎えた。Fは時々小首を掉つて、貧乏ゆすりなどした　さうして何か云はうとしては、物思はしげに口を噤んだ。

凡ての進展はたゞキツカケだ。キツカケが來なければ低迷はいつまでも續く」さうして低迷にたへきれなくなつた時人は、生ある者は、必ず藻搔く。藻搔くのは生きてる證據だ。さうして藻搔くのは要するに生の進展のキツカケを摸索しつゝある過程にすぎぬ。Fも私も丁度その過程中にあつたわけだ。

やがてキツカケは來た。低迷を突破して、生は進展した。同時に、重苦しく閉ぢた二人の口は、先づ私の唇の方からほぐれた。

――君はさつき片瀨の砂濱で、生死巖頭に立てと云つたやうだね？

――云つた。

と、言葉はまた杜絶えた。が、間もなく、

――それが？　と、今度はFの方から切出した。

――僕は生死巖頭に立たうと思ふ。と、ハツキリ云つて了ふと、私は心の底で『そんな事を輕々しく口へ出して何になる？』と、そばから自分自身をたしなめた。

――と云ふと？　と、Fは半ば目をつぶりながら、追驅けて訊いた。

――やッつけるのサ。と、抛り出すやうに云つて、私は一寸忘れてゐた盃を、いや、吸物椀の蓋を、一ト息にグツと干した。さうして自ら溜飲を下げるやうに、カラカラと笑つた。と、今まで腦の内膜にひツからまつてゐた、花曇の空のやうな陰翳が、見る〳〵剝げ去つてゆくやうな心持がした。

――ハヽヽヽハ！　と、Fは忽ち相貌を崩して笑つた。さうして、――そりやいゝ！　と、いかにも我意を得たものゝやうに、大きく頷いた。

陰翳が剝げるに從つて、丁度それとは反比例に、停滯してゐた私の醉が、一時に赫と腦中へ衝上つて來た。

――さうサ。やツつけるのサ。澤庵禪師の所謂、『ヅンと飛べ、ヅンと飛べ。』だ。と、私はまた獨合點のモノローグをペラペラとやりはじめた。――ウン、今晩、これから行つて、曳張り出して來るんサ……否だと云やア、一ト思ひに絞殺してやる……いや、果して絞殺してやる氣になれるほど、それほどまでに我輩があの女を愛してゐるものかどうか、そいつを一つ、今晩こそためして見たいんだ……つまり、自分自身の本當の性根をば、徹底的に自分自身で叩き出して見るんだね……實際のところ、我輩にはまだ自分ながらハッキリとその邊の消息がよく分つてゐないんだ……さうサ、自分ながらサ……本當にあの女を愛してゐるんだか、ゐないんだかネ……尤も、それは何もあの女に限つたわけぢやない。今迄だつて悉くさうだつたのサ……考へて見ると、我輩はまだ生まれてから、一度だつて本氣に女を愛したといふ經驗がなかつたわけだ。從つて、人間と生まれながら、人間を愛した經驗がなかつたといふわけになる。さうして平氣で今日まで人間を知らずに暮らして來てゐたのだ……苦しいのはそこなんだ　突きつめたいのはそこなんだ。ヅンと飛びたいのはそこなんだ……人間とは何だ？　生活とは何だ？　愛とは何だ？……我輩は哲學を要求してるんぢやない。宗敎を要求してるんぢやない。それに對する科學的立證も、藝術的價値も、そんなものを要求してるんぢやない……單純なたゞそのものになりたいんだ。なりきつて了ひたいんだ。それだけなんだ……

鬱悶しいやうな、煙たいやうな顏をして、そしてその顏を酒と肴とでまぎらはして、又時々眼をつぶツたり開けたりして、Fは默々と小耳を傾けてゐた。が、こゝまで來て、一ト區切り私の駄辯がとぎれたのをシホに、Fはとりあへずまづ、

――ハハハハハ！　と、高笑ひして、自分の口を切る餘地を拵へた。――君はやツぱり宗敎を求めてゐるのだ。僕はどうしてもさう感じられる……人間とか、生活とか、愛とか、さうしたものになりきツて了ひたいといふのが、とりもなほさず、切實な求道心ぢやないか？……僕はさう思ふ。

――求道心か何か、我輩には分らん。我輩には今、たゞあの女を曳張り出すといふ事があるだけだ。その外には、も

ら何にもないのだ……

――それだけでいゝのサ。僕から見りやア、それだけで立派に君が宗教を求めてゐる事になるんだ……ウン、面白い！　大いにやりたまへ！　思ひきつて、やツつけたまへ！……君の宗教が君自身から生まれるところだ……及ばずながら、君の友人の一人として、君の爲に助産婦の役を引受けよう。ハハハハハ！

Fの醉ひはキツカケにぶツつかツて、猛烈に四肢五體の表面へ露出して來たものだ。二人はまた昨夜の松原のやうに聲を合はせて、

――やツつけるのだ！

――やツつけるのだ！

と、異口同音に絶叫すると、颶風のやうにドツと笑つた。さうして三十分ほど經つた後には、二人は提灯を下げた金縮の女中に送られながら、暗い棧板をドシン、グワタリと、危かしげに踏み鳴らしつゝ、凄じい勢で棧橋を渡つてゐた。

終點で電車から轉がり降りると、驀地(マツシグラ)に小町園へ飛び込んだものだ。

――甚だお氣の毒樣でムいますが、今晩はあいにくどうも、お客樣方が一時に立てこんで了ひまして、まるツきりお部屋の明きがムいません……と、帳場に陣取つた馴染のある若主人が、恐る〱、さも困つたやうな顏を拵へて云つた。が、そんな言葉には勿論耳も貸さず、ドシドシ押しあがると、いきなり、上方式の結界の側へ、ドツカと例の大胡座をかき、

――なアに、部屋なんぞに用はない。爰で結構サ。爰でウヰスキイだけ飲ましたまへ。ウン、一時間もゐたら、すぐ退却するよ……まア、いゝさ。さう心配したまふナ。ハハハハハ！　と、私はヅウヅウしく、「到るところ我家」といふ顏して、傍若無人に嘯いたものだ。同樣にFもトボケきつた眼を硝子張のやうにトロンと瞪(ミヒラ)きつゝ、電線をくゞる山

草人形よろしく、グラグラと狹い帳場へのめり込むと、ひしやげたやうに胡座を組んだ。
手がつけられないので、華車な若主人も遊人に襲はれた時のやうに觀念して、云ふがまゝにウヰスキイを一本買つて來させた。いつも奧さんの持つて來てくれるそれと全く同一のレツテルだ。

——さア。そこで、筆と卷紙と封筒だ……例によつて例のところへ手紙を持つてつて貰ふのサ。ハハハハハ！ 可笑しいかね？ 可笑しきや、大ツぴらに笑つてくれ……そんな、內證で、ニヤニヤしてないで……女なンぞに惚れる奴ア、どうせ馬鹿々々しいものサ。きまつてらア。ハハハハハ！ と、ウヰスキーをガブリガブリ飮みはじめながらだらしなく橫ツ倒しになつて、私は大きな字を卷紙の上へ行儀わるく無作法にブツつけて行つた。が、何をどう書いてゐるものやら、自分でもよくは分らなかつた位だから、奧さんが見たら、さぞ叱驚して、恐らく途方にくれる事であらう。と、そんな掛念さへ、私の頭には、まるでもう浮べる餘地も餘裕もなくなつて了つたほど、私はスツカリ酒にのまれきつてゐた。

二三十分すると、持つて行つた手紙をば、後生大事に手に握つたまゝ、使は空しく立戾つて來た。

——奧樣は旦那樣と御一緒に東京へお出懸けになつたさうで、お留守でムいました。と、使に行つた爺さんは、ケロリとした顏をして、部厚な手紙を私の前へ置いた。

——ふうん、旦那樣と一緒にナ？ で、いつ歸つて來るツて？

——東京の方へお泊りになるかも分らないといふ女中さんのお話でした。

——ふうん、東京へね？ が、なぜ手紙を持還つて來たんだい？

へい！ これはその……却つてその……却つてお預りして置かない方がよからうツていふ……へい、へい、やツぱりその女中さんのお言葉だつたもんで……へい、へい！

——ハハハ！ さうかい？……いや、御苦勞 御苦勞……と、口では、「なアに、何の痛痒も感じやしない。」と云つたやうに、さりげなく答へたつもりではあつたのだが、手はいつの間にかウヰスキイの壜をブルブルと握りしめて、

殆んど無意識にそれを引寄せると、仰向いた私は思はずグツとラツパ飲みにしたものだ。

と、見てとると、Fは忽ち猿臂を伸ばして、私の手から矢庭に壜を引ツたくつた。

──何をするツ！ と、眼を三角にして、私が威丈高になると、

──ハヽヽヽヽ！ まア、いゝサ……と、Fは飲込み顔に頷きながら、──これは僕に預けて置きたまへ……さうして、出ようぢやないか、とにかく、爰は……出て、少し歩かうぢやないか？ と、ニツコリしながら、その優しい眼と顎とで促がした。

私は泣きたくなつた。が、言葉だけは荒々しい調子で、

──どこへ行くんだ？ と、喰つてかゝるやうに訊きかへした。

──どこでもかまはん。君の行きたいところへ行かうぢやないか？

──行きたいところなンぞあるもんか！

──なくてもかまはん。足の向いた方へ行くサ。君の好きな劉伯倫のやうにナ……

──劉伯倫は貴族だから、もう嫌ひだ！

──ぢや、二人とも下部になるサ。さうして生殘つた方が埋める事にするサ……それでいゝだらう？ さうして鋤の代りにこのウヰスキイの壜だ。ハヽヽヽヽ！ 面白いぢやないか？

外へ出ると、袂の中へ抛り込んだ手紙を掴み出して、私はそれをズタズタに引裂いた。

──晋の豫讓はきぬをさく……この日の本にかくれなき、武藏坊オ、オ、オ……と、Fはそばから縫手古な聲を出して、暗の中で猛獸のやうに唸りはじめた。

それこそ鼻を撮まれてもわからぬほどに、本當にまツくらな松林の中だ。と、その中をば全くあてどもなく、二人は肩をはじき合つたり、手に手をつないだり離したりして、あツちへユラユラ、こツちへユラユラ、砂地にすべり、木の根につまづき、盲滅法にヨロめき歩いた。

ドシンと尻餅をついた。足を踏みすべらして、穴の中へ落ちたのだ。

—オイ、どうしたい？　と、頭の上でFが云つた。

私は袂の中をかいさぐつて、敷島の袋とマツチとを出した。さうしてパツと火をつけて、悠々と紙巻をふかしはじめた。

—なんだ、穴の中へ落ちたのか？　どこも怪我はしないかい？

—怪我なンぞしてたまるものか……ウヰスキイを貸せよ、ウン、一口飲みたいんだ……ばかに喉が渇く……

—ほう、水も何もないナ……こりや、素敵だ！　と、Fも穴の中へ飛込んで來て、

—それ。と、壜を突き出した。

二人は穴の底へ差向ひにお神輿を据えたまま、氣楽さうに壜をやつたり取つたりした。さうして銜んだ喇叭の口をスポンともぎ放すたび、ルフラスのやうに、エヘラ、エヘラと笑つた。

—ハハハハハ！　穴はチヤンとこの通り堀つてある。わざ〳〵塹なンぞ擔いで來る必要はない。どうだい？

—さうサ。これで上から土砂をかけてくれる衍さへありやア、申分なしだ。

—普化は空中で鈴を振つたが、我々は穴の中でウヰスキイだ。ハイカラなもんサ。

—ハハハ！　明頭來也明頭打か。

—なアに、暗頭來也暗頭打だ。

—それから、虚空來也連架打か。

—さうして、結局、四方八面來也旋風打サ。きまツてらア。

—ウン、旋風打だ！　そこだ、そこだツ！　痛快だ！

—勿論だ！

二人は蹶起して、穴の中から躍り上つた。

門の前で、パッタリ倒れた。

――オイ、どうした？　どうした？　と、氣遣はしげに、私の耳元へさゝやきながら、Fは私の手首を引捉へて、しきりにひツぱり起さうとしたけれど、

――いゝから、ほツといてくれ！　と、その手を振拂つて、私は砕と大地へ獅嚙みついたまゝ、冷たい砂へメリこむばかり、ジヤリジヤリと片頬を擦りつけながら、テコでも起上らうとはしなかつた。

――どうしたんだ、一體？

――どうもしないよ。たゞかうしてゐたいんだ。爰で、このまんま、かうしてゐたいんだ。永遠にかうしてゐたいんだ……

――チョッ！　仕様がないなア……と、呟いたが、やがて何事をか決心でもしたものゝやうに、Fは勢よく、

――よし。と云つた。さうして身を屈(カガ)めて、再び口を私の耳元へ近づけると、

――今ね、たしかなところを突留めて來てやるから、どこへも行かずに、爰で少し待つてゐたまへ。いゝかね？　と云ひすてゝ、Fは怯めず臆せず、大股で門内へ這入つて行つた。

別荘のうしろの砂濱へ打ちつける波の音が、地面へ響いて、ジーン、ジーンと私の鼓膜へ傳はつた。私は胸がいつぱいになつた。さうして、たゞ『死んで了へ！　死んで了へ！』と、心の底で繰返してばかりゐた。

玄關は門を這入つて突當つた植込みの蔭にあつた。と、その植込みへサツと明りがさした。同時に、ボソボソと人の話聲がきこえ出した。一人は無論Fには相違ないのだが、それが果してFの聲だか誰の聲だか私には判然ときゝ分けられなかつた。

間もなく、Fは戻つて來た。

――實際、東京へ行つてゐないのださうだが、上つて待つてゐても差支なからうといふのだ……萬事、あの女中さんが、必ず責任を帶びるといふ事だから、ねえ、さうしようぢやないか……ウン、泥醉してる事も話したサ……そ

れなら、當の事、上つて一ト寝入りした方がよからう、とまで云つてくれてゐる……よく分つた女中さんだ……たから、さうしたまへ。さうしたまへ。

私はボロボロ涙をこぼしながら、Fに輔け起された。恰も拗ねて云ふ事をきかぬ駄々ツ兒が、伯父さんや伯母さん達になだめ賺されるやうに、私は家の中へ連れ込まれると、すぐ敷いてくれた臥床の上へ、手とり足とり、否應なく寝かしつけられて了つた。さうして、それから先は……

ミシミシと人の跫音がしたやうな氣がしたので、私はドキンとして、そツと半眼を見ひらくと、×××。

跫音は二タ間ほど隔てた玄關の板敷から洩れて來る氣勢であつた。私はドキドキする胸の動悸を押し鎮めながら、出來るだけ注意して、奥さんの夢をさまさぬやうに、コツソリと蒲團の中から抜け出すと、懐中電燈を照らし〳〵、忍びやかにぬき足して、ビクビクその跫音の方へ近づいて行つて見た。

が、蜘蛛の巣だらけな、ガランとした玄關の板の間には、踏込むと、思ひもよらず、百雷のやうに轟く私自身の跫音を除いては、鼠一疋ゴソつく物も見當らなかつた。私は土間へ降りて、ジツト耳を澄まして見た。と、庇裏の水溜へ滴り落ちる筧の音が、いかにも寒さうに潺湲と響いてゐた。忽ちバサリと何か高いところからでも地に飛び降りたやうな物音が、門をわたした重い扉の外できこえた。

私は思はずゾクリとしたが、よく〳〵考へて見ると、それはたしかに崖の上の老杉の梢から枝を離れた雪塊に相違なかつた。

『さう。さう、けさから雪が降りつゞけてゐたのだツけ。』と、私は思つたさうしてその二十五丁の雪の急坂をば、喘

ぎく〳〵、滑りすべり氷のやうに冷たくなつて、死身になつて、一心不亂に登つて來た奥さんが、とうとう家を飛出して來た奥さんが、五六時間前、犇と私に縋りついたまゝ、聲をも得立てず、よゝとばかりに泣きくづれたのは、即ちこの扉の外だつたのだ。

ゴトリと腐つた閂をとりはづして、私は徐に扉を開いて見た。と、外は眞白だつた。前の崖から弓手の幽い谷底へかけて、月明りを含んで新に降り積つた一面の雪が、恰も嚴淨な處女の裸體を突きつけるやうに、フックラと盛り上つた曲線を描きながら、目覺めるやうに神寂びた光輝を灼鑠と放つてゐた。

釜の下を焚きつけて置いて、雪降りの朝は、必ず雪掻きを手にしながら、崖に沿うて朱塗りの小堂の橡下まで、傍目もふらず一氣に堀起して行くを例とした、小さい私の作業の跡が、うね〳〵と細い一條の溝をなして、危く壑を劃つた小徑となつて殘されてゐた。

氣がつくと、その上に斑々たる人の足跡があつた。夕刻着いた奥さんの足跡としては、それから後もたえず雪の降りつゞけてゐた事を想ひ出すと、印された跡があまりに生々しすぎるやうな心持がした。不審の影がサツと私の腦中を掠めた。同時にゾツと總毛竪つた。私は内へ這入つて扉を閉めた。堅く〳〵閂を差込んだ。

鼻先の古障子が、けたゝましい音を立てゝ、だしぬけにバタバタと動いたので、私はハツと動顚した。が、氣を取直して、グツと雪燈をさしつけて見ると、そこには、芥褐色に焦げはてた障子の紙の上に、年古りた、暗色の、薄氣味のわるい、大きな蛾が一つ、翅を擴げて、モゾモゾと取着いてゐた。

『は、ア、こいつか？』と、漸く安心はしたものゝ、それにしても、あの新しさうな足跡が、何となく物騷らしい氣がしてたまらなかつた。

で、居間へ還つて、またコツソリと蒲團の中へ横たはると、

——寒いわ。と云つて、奥さんが眼をさました。

——起きたのかい？　火でもおこそうか？

――いゝわ。××××××××××××××××××××××と、××××××××××。

――××、××××××××？

――××、××××××××××？

――え、？

――×××、××××××××××××××××××

――××××××。

――でも、今、どつかへいらしつたでせう？……あたし、恐くて〳〵、本當にどうしようかと思つたわ。

――ハヽハ。そんなに臆病でゐて、あんな山路を登つて來られたね？　女一人でね……あんな雪の中を……

――そりや、あなたに逢ひたい一心ですもの……と云つて、奥さんは思ひ出したやうに歔欷(シヤクリア)げた。奥さんの涙が私の二の腕の上へ温く流れた。私も胸がいつぱいになつた。

――×××。×××××××。

――×××××。××××××××××あゝ、あなた！　あなた！

××××××××××。××××××。××××、×××、××、×××、×××××××××××××、××××××××××に落ちた。

狼狽して跳び起きた時には、もう火は天井へ廻つてゐた。唐紙が紅ゐの焔を噴いて、メラメラと炎上つてゐる最中であつた。二人は黒けなりに卷き込まれた。

――あなた！　あなた！　よくて？　死ぬのよ！　死ぬのよ！……と、絶え入るやうな奥さんの聲がさゝやいた。

喤々たる音が見えた。火焔に包まれた朱塗の堂が見えた。黒煙を吐き出す老杉の林立が見えた……月が見えた。月の上に立つた、髪を振亂した、兩手を擴げて差招いた、奥さんの裸體姿が見えた……

何が何やら私にはまるで分らなかつた。

『どうしたといふんだらう？』と、思ふ間もなく、私はだしぬけに脇側から胸元へかけて、グサリと刺し貫かれた。顎の下へ首を出した氷のやうな棒の穂先には、ピクピクまだ皷動をつゞけたまゝの心臟が、なまなましげに引懸つてゐた。

私は思はずアッと叫んだ……

神代杉の、細かに柾目の通つた、高い、素晴らしい、立派な天井が、ふと仰向いた私の視線を遮ぎつた。私はヤツと目がさめたものだ。臥かされてゐたのは、十二疊ほどの離れの客間であらう。考へて見ると、私のこの部屋へ這入つたのは、これでたしか三度目だ。

支那人の書いた表裝のばかに澁い、床の間の三幅對にも見覺えがあつた。堂々と中央へ据ゑ置かれた、何塗りか知らん、見事な、上品な方卓にも馴染があつた。と、その方卓の上の一隅には、砂にまみれたウヰスキイの壜と、飲みさしの大きな水呑コップとが、甚しく周圍との諧調を破つて、無作法にノサばつてゐた。さうしてそれを越えた方卓の向側には、森閑と入口の襖を背にして、蒼ざめた奥さんが悄然と端座してゐた。恰も今まで見つゞけつゝあつた夢の中からでも、すうとそのまゝに抜け出して來たもののやうに。

私は素直に起上つて、平氣な顔して、卓の前へ胡座をかいた。さうしてコップに殘つてゐたウヰスキーをば、とりあへずグッと飲みほした。

近寄つて見ると、夢の中なる奥さんとは、まるツキリ似ても似つかなかつた。いやにギゴチなく堅くばかりなつて、どこもかしこもスツカリ緊張しきつてゐて、笑顔一つ見せず、石の如く冷たく鯱鉾張つて、無表情に乾枯びた目を伏せたまゝ、濕ほひのない唇をば、高慢くさくキツと結んでゐた。私は少々興がさめた。

と、やがてして、奥さんは咳拂ひを一つした。今までには一度もまだきいた覺えのない、變に他人行儀な、わざとら

しい、そら〳〵しい、よそゆきの咳拂ひだ。さうして、その奇妙な咳拂ひと共に、――ゆうべの行ひと云ひ、またこの間と云ひ……と、奥さんは、いつもとは、殆んど別人のやうな、ひどく納まつた、まるで寄宿舎の舎監のやうな、心にもない嚴格ぶりを裝つた造り聲で、堅苦しく何か云ひ出した。――あなたをさういふお方とは夢にも思はなかつたのです。今迄は色眼鏡をかけてあなたを見てゐたのでした。それが私の目ちがひだつたのです。私の夢はさめました……

私は壜を逆樣にして、殘り少なのウヰスキイをコップの中へ移し入れて見た。それでもまだ八分目あまりあつた。テレ隱しに、これをすかし見るやうにしながら、

――へえ？　そりや、どうも、お氣の毒樣なわけだつたね……とは云ひかけたが、何だか急に馬鹿らしくなつたので、パツタリ口をつぐんで了つた。さうして『ヘン、なアんのこツた！』と、無意味に心の底で呟いた。

きいて見ると、奥さんも、どうやら夢がさめたさうだが、私の夢も、案外にたわいもなく、一溜りもなく、意久地もなく、パタパタと、ノホヽンとさめて了つた。甚だしいトランスミユタシオンだ。自分ながら不思議なやうだ。で、から忽ちさめて了つて見りやア、お互ひにたゞ、それこそ路傍に向き對つた石ころ同樣、アルフアからオメガまで、全く緣もゆかりもない、たゞのエトランジエと、さうしてたゞのエトランジエールとが、かうして無關心な膝つき合はせて、偶然一堂に落ち合つたまでの形ちとなる。滑稽だ。

のみならず、奥樣はどこまでも奥樣だ。たゞの奥樣だ。五百萬圓の大身代の相續者だ。特權者だ。二人の愛兒の養育者だ。母君だ。貞女だ。淑女だ。令夫人だ。さうして私の戀人でも何でもなかつたのだ。反對に、私はたゞの無賴漢だ。正札附の破落戸だ。訴へ出られりやア、脅迫罪にも家宅侵入罪にも、正しく問はれ得る暴漢だ。痴漢だ。不德漢だ。さうしてそれが自業自得なのだ。

『私よりやこの方が可愛いゝんでせう？』と云つて、さうサ、この顏でノメノメとニツコリ笑ひながら、揶揄面にウヰスキイ二本くれたのを、それを眞にうけて本氣になつて、涙まで零して嬉しがつたのは、たしかに三月前だつたが、

今考へると、まるツきりウソのやうだ。

『が、やツぱりさうだ。その言葉どほりになつたわけだ。』と、その時の奥さんのシホらしかつた態度など想ひ浮かべながら、私はさう思つて、默々とコップを傾けた。

突然、そこらあたりを響かして、ガタピシと騒かして、旦那様が、御主人が、夫君が、資産家の跡取りが、特權者が若きブルジョアが、そゝくさと現れた。さうしてどぎまぎと、あたふたと、而も飽くまでその『紳士』たる體面をば滅多に失ふまいと全力を擧げながら、强ひて無內容な威儀を誇張しつゝ、俯向いた奥さんを尻目にかけて、ギクシヤクと座つたものだ。と、座るが早いか、忽ち滔々と喋り出した。

——私は個人としてあなたのやうな人は好きです。あなたを愛します。併し昨夜のやうな不始末をなさつて下すツては、甚だ迷惑に感じます。社會の一員として、紳士として、私はあなたを認めるわけにはまゐりません。まゐらなくなります。それゆゑ、今後は斷然、これかぎり斷然、あなたとは御交際が願はれません。私も、また私の妻もです。さう御承知を願ひます……俥が待つてをります。どうかお歸り下さい……

私は飲みながら、甚だ好奇心を唆られて、穩しく謹聽してゐたが、やがて言葉の切れるのを待つて、

——君は妻君を離緣する氣はないかね？と、いきなり云つて見た。

御主人は目を白黑した。驚いたのか、呆れるのか、怒つたのか、怯えたのか、ガタガタ震へて、ジツと強つた。が、漸く正氣を取戻したやうに、眞赤になつて、吃り〳〵。

——り、ゐ、ん……は、い、た、し、ません！と、そり返つて答へた。

——さうかい？それぢや、まア、いゝサ……まア、せい〴〵妻君を愛してやるサ。これからはネ……と、私はわざと落ちつき拂つて、悠々とコップを口へ持つて行つた。

と、御主人は赫と焦き込んだ。さうして、

——お差圖には及びません！……と、息づまるやうな聲を出した。

私は一つブン毆つてやらうかと思つたが、それではあんまり弱い者いぢめをしすぎるやうな氣もしたので、突差の間に、それだけは思ひとまつた。

コップを空(カラ)にすると、私は立上つた。

——いや、お邪魔さま……まア。せいぜい仲善く暮してゐたまへ……いづれ、そのうちにはまた、改めてお禮に押しかけるから……と、玄關へ出て、泥だらけな下駄を突ツかけながら、冗談半分に嫌がらせを云ふと、式臺の上まで尾いて來た御主人は、しきりに弱味を見せまいとして、

——もうお出では願はれません。紳士として、あなたもお出では出來ないと考へます。と、向きになつて云ひ返した

——我輩は紳士ぢやないから、來たくなりやア、いつだつて來るよ。ハハハハハ！　と、云ひすてゝ、私は外へ出た。で、出る時。一寸顧返ると、奥さんはまだ玄關の衝立の前に佇んでゐた。さうして媚びるやうな、勝誇るやうな、意味ありげな眸子を輝かしつゝ、凝然と私の後姿を見卸してゐた。

私の瞋恚はムラムラと心頭に炎上つた。

『よし、今に見ろ！　貴樣等の社會を粉微塵に破壞してやるから……』と、私は心中で絶叫した。

門前で待ちあぐんでゐた俥へは乘つたが、さて、さしづめ、これと云つて、別段行つて見たいやうなところもなかつたので、とりあへず、また小町園まで立戻つた。空は泣出しさうにドンヨリ曇つてゐた。

座敷へ通ると適當に離れの茶室などを配した、その廣やかな庭の上へ、忽ちザアツと大雨が降つて來た。

——昨晩はお樂しみ……どちらへお泊りで？　と、擽ツたいやうな顏をして、酌をしながら、いつものやうに女中は水を向けたけれど、けふばかりは、私もさすがに無駄口をきく氣にはなれなかつた。で、ムツとしたまんま、

——ウヰスキイをくれたまへ……それから、一番別嬪の藝者を招んでくれたまへ……と、ブツキラ棒に云つて、苦虫を咬み潰したものだ。

――畏りました。と、急に笑顔を引込めた女中は、さう〳〵に出て行つた。

靜々と雨の音をきゝながら、薄墨色にボヤけた部屋の中で、坐蒲團からハミ出た、ブクブクした胡座（アグラ）の腿の上へ默然と片肱を落しながら、イミわれさうにヅキヅキ疼む蟀谷をば、グタりと頬杖へ托しながら、例の、捉まへどころもなく標的もなく、徒らに、支離滅裂に、漠々に私は考へた。たゞジツと考へた。考れば考へるほど、私自身といふものが、いよ〳〵下らなく見えた。いよ〳〵愚かに、いよ〳〵低能に、一層輕佻に一層卑俗に、不用意に、無反省に、さうしてこの嚴肅な生活に人間づけられて、何等の裏書きも署印もされがたい、あまりに頑迷な、あまりに寂寞な自分自身の姿ばかり、ます〳〵明白に眼前へ展開して來るのだ。私はます〳〵苦虫を咬み潰した。

『ヘン、何が生死巖頭だい？ 何が旋風打だい？ ザマを見ろ！ いゝ氣味だ！……惚れても腫れてもゐなかつたんぢやないか？……ホンのお茶番だつたのだ。どいつもこいつも、揃つてみんなお茶番師だつたのだ。Fも、あの女もあの旦那殿も、俺も……

『フン、色眼鏡をかけて見てゐた？ が、さうだ。全くそれに違ひはない。あの女の戀ひこがれてゐたのは、俺といふ、なま〳〵しい、この生きた人間ぢやなかつたのだ。同時に、俺の命がけで引張り出して來ようとした女も、あんな熱のない、卑怯な、月並の淑女ぢやなかつたのだ。

『凡てが誤解だ。抽象的の心の缺陷をば、自分以外の具象のうちへ抛射して、その抛射された陰翳をば直ちにお互ひの本體だときめてかゝつたところから、お互ひの誤解がはじまつたわけだ。さうして素裸の本體が向き合つて、双方で叱驚して了つたのだ。求めてゐた人間とは、まるで似ても似つかない人間同志だつたのだ。

『でも、戀は戀なのだ。戀にはたしかに相違ないのだ。つまり、さうしたものが戀だからなのだ。戀は必ず誤解だからなのだ。抽象的心の缺陷――そんなものは存在する筈はないが――は、決して自己の以外の具象に投影して、さう都合よく充たされるべきものでも何でもないからだ。從つて、戀はプラトニックが本物だ。さうしてプラトニック・ラブ

なんてものは、今の俺には全々用のないものなのだ。云ひかへれば、俺には戀はいらないといふ事になる。

『俺の要求してるのは、たゞ××××××××。××××××××××××××××××××××××××××××××××××××

××××××、××××××××××××××××××。××××××××××××××××××。××××××

××××××××××たのだ。「肉は亭主のもの、心は戀人のもの、」と、さういふ舊式な信條を、あの女はどこまでも守つてゐたかつたのだ。さうしてそれを根本的に破壞されたので、渉と稱するあの女の戀がそれこそ百年の戀が、一も二もなくさめて了つたのだ。Alors, c'est tout! だ。

『が。片はついたのだ。さうサ……さうサ、まア、云はゞボテ髪の切られ與三とでも云つたやうな、ひどく下司張つた、ひどく安ッぽい、それでゐて、一向苦味ばしりのせぬ、辻褄の合はぬヅウタイをさらけ出したゞけの藝當でナ。』さうして訛のあるタンカ一つきれず恥しくもなくオメオメと引退つて來たゞけだナ……

『併し、まア、それは負けて置くサ。どうせ、もう、恥も外聞も、そんな事は始めから捨てゝかゝつてゐる仕事なんだから……ところで、これからは、一體、俺の生活はどうなるんだ？……あの女を引張り出すつもりで、叡山からわざ〱鵠沼まで出かけて來たわけだつたんだが、意外に、かうだら〱急に片がついて了つて見ると、さて、さしづめ、どうしたらいゝものか、一寸見當がつかなくなる……

『鵠沼を引拂つて、また叡山へ立籠るか？　が、先月來たＳとＪからの手紙によると、俺のゐた、あの善光院は燒けたさうだ。何だか俺の今迄の生活に一ト區切りついたやうな心持もする。のみならず、あゝして永年繰返した、實際愚にもつかぬ深山聚落（シンセンジュラク）のバスキユールは、ほと〱俺はもう厭になつた。山へ上つては米味噌の自炊、町へ下つては一現屋の女郎、上つたり、下つたり、下つたり、上つたり……要するに遊戯だ……あんな不徹底の生活はつく〲厭だ……

『いツその事、小式部でも受け出して、千束あたりへ世帶を持つか？　それも面白い。いや、それが本當らしい。いや、その方が本當だ。さうして全提全令のプロレタリアの生活へ邁往するのだ。さうだ。生きた手足の筋肉だけで働く

のだ。さうしてプロレタリアの結合を企てるのだ。さうだ。それに限る……

『が、金の出來ないうちは、その小式部は受け出せぬ……第一、鵜沼を引拂ふ事すら出來ぬ。もう二ケ月以上もゐるのだが。あの宿屋へは鐚一文まだやつてゐないのだ。やらう〳〵と思ひながら、ついまだ女中にさへ心附けもしてやらないのだ……金？　ヘン、プロレタリアになるのに。なぜ金がいるのだ？　小式部が受け出せなけりや、プロレタリアになれないのか？……

『つまり、金があるからだ。金があるから、畢竟、こんなノンキな事ばかり考へるのだ。こんな取りとめのない生活ばかりしてゐるのだ。あればたよる。働く氣がなくなる。勝手な事ばかりして居たくなる。つひ、デイレツタントになる。デカタンになる……今迄がその通りだつたのだ……金？　さうさ、金が出來りや、またそれを繰返すのだ……

『では、地面を賣つた金は、殘らず親父にやつて了ふか？さうだ。それがよからう。きれいサツパリして……だがそれだと外國へはゆけなくなる……フン、外國か？　何しに外國へゆくのだ？　洋行しなけりや、プロレタリアになれないとでも思ふのか？……ばかナ！　なぜ俺はかう馬鹿なんだらう？

俺の考へる事はすべて間違つてゐる。根本的に間違つてゐる……

『併し……併し……かうして根こそぎ自己を否定して見たところで、それが何だと云ふんだ？　否定された自己とは何だ？　又それを否定するものは何だ？　みんな影ばかりぢやないか？　形のない影ばかりぢやないか？　畢竟、影法師と影法師との縺れあつた遊戯ぢやないか？　さうして俺自身の本體はどこにゐるのだ？　どこにもゐやしないぢやないか？　本體などといふものは俺自身には存在してゐないのぢやないか？

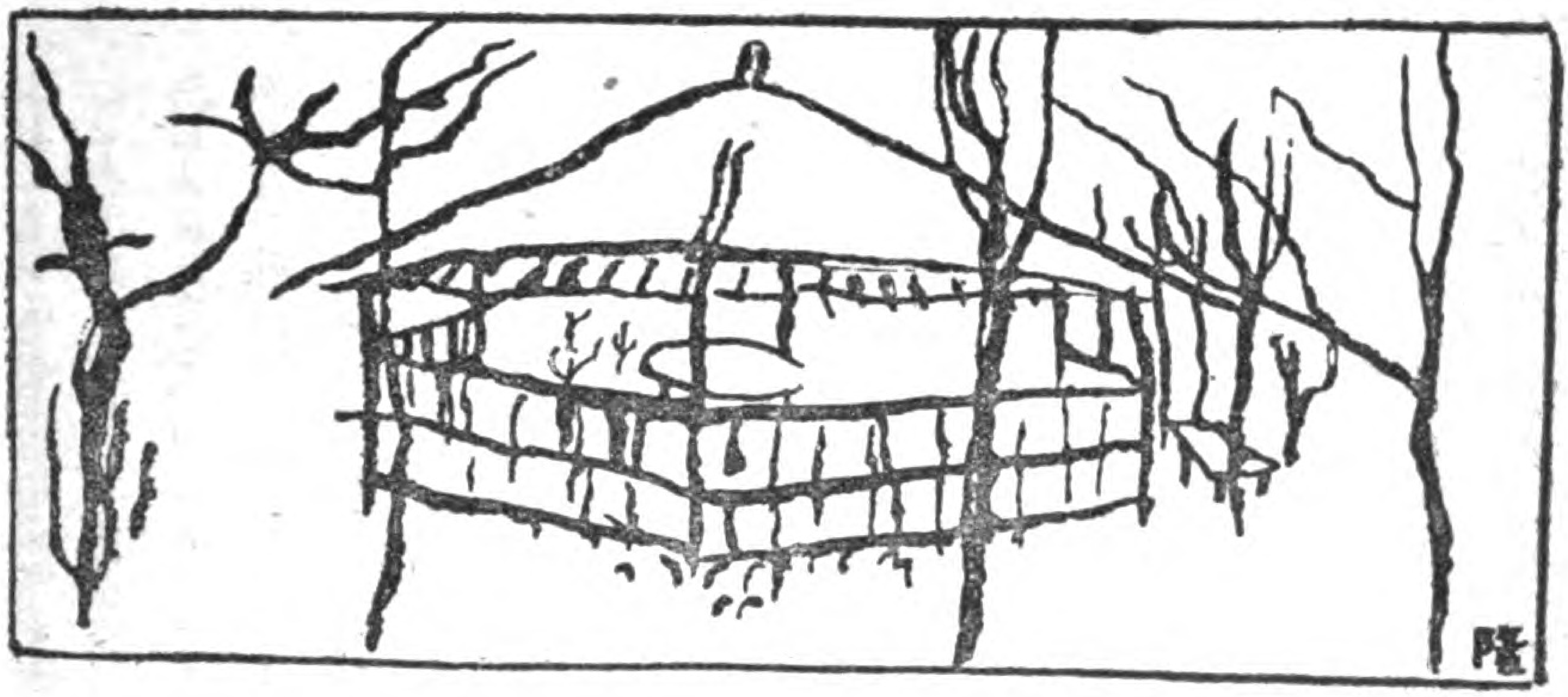
『いや、俺はゐる。たしかに爰にゐる。爰にかうしてゐるのが俺なのだ。爰にかうしてゐるこの男性の一箇の肉塊を俺と稱するのだ。さうしてこの肉塊がこの俺といふ意識につながつてゐる間だけ、俺は縱に生きてゐると思つてゐるだけの話だ。生活とはつまりそれだけのものだ。否定も肯定も、そんな事は始めからありはせぬのだ、腹がすけば食物を要求する。疲勞すれば睡眠を要求する。××××××××××××××。エトセトラ、エトセラ×××さうした

無限の要求を提出するこの肉塊についてゆくだけのものだ。

『然らばこの肉塊は何物だ？　が、その何物かを突きとめるには、やッぱりこの肉塊の要求するまゝについてゆくより外に方法はない。サイエンスといふ方法がある。いろ〳〵な道具を工夫して、出來るだけ正確にそれを見てゆかうといふのだ。藝術といふ方法がある。これもさま〴〵な道具を工夫して、出來るだけ直接にそれと接觸しやうといふのだ。

『さア、また分らなくなつた……サイエンス……藝術……肉塊の要求……内己……サツパリ分らない。一體、俺は今何を要求してゐるのだ？　要求は無限だ。多角多面だ。出鱈目だ。行きあたりバツタリだ。さうしてヘルプレスだ。全く手も足もつけられたものぢやない……』

、ウヰスキイが來たから、ウヰスキイをのんで、藝者が來たから、爪彈きをさせて、さうして瀟條と降る雨聲に和したその低唱の歌澤と、その清元と、その新内とを、恰も遠い〳〵世界から幽妙な音づれのやうに、悶々として、蕩々として、私は聽くともなしに聽きながら、さうして雲霞の如く心頭に蝟集する、凡ゆる妄念雜念に倅々と肉迫されながら、私は終日小町園にゐた。小町園にゐる事さへ忘れてゐた。



暗夜行路

志賀直哉

十五

一つは他に友達もない所から、自然彼は末松とよく會つて居た。然しその頃末松は祇園の三流藝者との新しい關係で幾らか有頂天になつて居る時で、謙作は此方から訪ねて行くやうな場合、多少はその心遣ひもしねばならなかつた。末松の方は又、直子に對する遠慮から謙作を其處へ誘はうとはしなかつた。

或る晩、謙作は出先きから晩く末松の下宿を訪ねた。出掛けるものならもう出掛けて居るだらうと思ひながら行つた。所が、末松はこれから出掛けようとする所で、二人は兩方で一寸氣の毒な想ひをした

「いゝんだ。本統にいゝんだよ」こんなに云ひ、末松は殊更寛いだ風で、火鉢に炭を次いだりした。然し暫くすると矢張り落ちつかぬらしく、

「此所へ呼んでみようか」と云ひ出した。

「呼ぶ位なら、向ふへ行かう。その方がいゝよ」謙作が云つた。

「本統にいゝのかい？　何んだか奥さんに悪いな」末松は恥入つたやうな嬉しさうな顔をして頭を掻いた。

二人は間もなく寒い戸外に出たが、其時はもう九時を過ぎて居た。平安神宮の前

の廣い靜かな通りを眞直ぐに電車路の方へ歩いた。
「何所で呼ばう？」末松が云つた。
「君の不斷行く所でいゝぢやないか」と答へた。
「藝者も赤切符なら、茶屋も赤切符なんだよ。どうもヴアニテイを傷けるからな」末松はこんなに云つて笑つた。「それより何所か料理屋へ行かう」
「肝心の本人が居なかつたら仕方がないね。僕は今飯を食つたばかりだし、君も左うだらう？」
「うむ。だけど、余り賣れ兒でもないから、……」
兎も角、何所かで一度電話を掛ける事にして、二人は電車で祇園の石段下まで行き、近いカフエーに入つた。末松は直ぐ電話口へ立つた。
「うむ」――「うむ」――「うむ」末松は返事ばかりして居たが、
「うむ、ぢやあ、さいなら」ガチヤンど邪見に受話器を掛け、不愉快な顏をしてテーブルに還つて來た。
「六十圓ぢや威張れないが、何しろ癪に觸るな」こんな事を云ひながら、傍に立つて居た給仕女に强い酒を命じた。
「居ないのか」
「大阪の芝居へ行つて、今日は歸らないと云ふんだ。嘘だよ」氣の毒な程、露骨に苛々して居た。彼は何所かで自分以外の所謂旦那と一緒に騷いでゐる其女をまざ〳〵と見るかのやうな不愉快な顏をした。
電話が鳴つて給仕女の一人がそれに出た。
「俺か？　俺なら居ないぞ。左う云つて吳れ」末松は神經質に左う云つた。が、それが當つて居た。
給仕女は送話器を掌でふさぎ、振返つて、
「おゐやすと申したんどつせ」と當惑したやうな顏をした。
「そんなら電話には出ないと斷つて吳れ」

然し結局末松は執拗い茶屋の女將の爲に呼び出され、暫く押問答の末、矢張り茶屋まで行く事を承知して了つた。
「きたない家だよ。――然し居ないなら、急ぐ事もない。もう少し此所へ居よう」彼は續けて強い酒を云ひ、無理にも落ちつかうとした。又、女將に云はれ、直ぐ出向く事も業腹だと云ふ風だつた。そして、
「本統にいゝね？ 何んだかつまらないおつき合ひをさせて、惡いな」と云つた。
「僕はいゝよ」謙作は末松を氣の毒に思ひ、何氣なく左うは云つたが、末松の今の氣分と自分の氣分とが如何にも離れて居る事が顧られ、それが具合惡かつた。實際彼の心は兎もすると、淋しい衣笠村の家に彼の歸りを待ちわびて居る直子の上へ歸つて行つた。彼はそれが末松に映る事を恐れ、出來るだけ自分でも何氣なくして居た。
「花見小路にもう一軒知つてる家があるんだ。初めからそつちへ行く方がよかつた」こんな事を末松はいつて居た。
カフエーを出て、茶屋への途でも末松は未だ茶屋の安つぽい事を氣にして居た。彼は醉つても居たのだ。
そして茶屋へ來ると、矢張り彼はどうしても上がる事を厭やがり高台寺の方の茶屋へ行く事にして、既に十時を過ぎて居たから、茶屋から先へ電話をかけさせ、二人だけでその家へ向かつた。
植込みの奧の小さい中二階に電燈がついて居た。二人は其所へ通された。二十分程すると植込みの踏石を踏む三四人の忙しい履物の響がして、女將と若い藝者二人とが女中に導かれ、賑やかに乘込んで來た。
末松は絶えず苛々しながら、女將に當り散らした。若い藝者達がその女の事で揶揄ひ、彼の機嫌を幾らかでも直さうと努めたが、末松は其手に乘らず、意固地に憎まれ口をきいた。
「何しろ六十回の旦那だからな。威張れねえよ」こんなことを云ひ、左う云ふ女にこんなにも嫉妬を起こす自身を憐む風さえあつた。
女將も無理に呼び出しながら今は持て余まして居た。そしていよ〳〵白らけ切つた座を持ち兼ねると、女將から云ひ出し、其所を引上げる事にした。
謙作は早く直子の所へ歸りたかつた。十二時過ぎまで家を空けた事がなかつたから心配してゐさうにも思へたが、

矢張り彼は一人先へ歸る事も出來なかつた。

寢靜まつた町を五人は平井琴平の境内を拔けて歸つて行つた。脊の低い、癖毛の、一寸美しい藝者が何か末松に揶揄ひながら暗い路で謙作の手を握つた。謙作は握り合した手を其儘自分の二重まわしのポケツトに入れ女の肩を二の腕に感じながら歩いた。彼は前夜直子との散歩で同じ事をした。そして、今、藝者と左うしながら、彼は矢張り眠らずに待つてゐる直子の上を考へた。握り合した手は兩方で握締めなかつた。そして何時か、何方からともなく離して了つた。

茶屋へ歸ると女將は泊る事を勸めたが、末松は藝者二人だけを其所へ泊まらす事にし、直ぐ其家を出た。

二人は何んとなく別れ惡くかつた。謙作の方はそれ程でもなかつたが、末松のどうにも法のつかない左う云ふ場合の氣分は一年前の生活で謙作にも明瞭してゐた。

「二時頃までに歸ればいゝよ」彼はこんなに云つた。

「花見小路の家へ寄つてもいゝかい？」末松が氣兼ねをしながらいつた。

「うん」

「俺は暫く時任の家へは行かないよ、奥さんに具合が惡いから……」こんな事も云つた。

二人は暗い路次を拔けて行つた。其所で末松は一人後になり、立小便をした。丁度同じ方へ拔けて行かうとする、中折帽を眼深に被つた若い男が彼の背後を通り過ぎると、

「失禮」と末松は眞面目な調子に云つた。然し其男は知らん顏で通り過ぎた。

「馬鹿。人が挨拶するのに默つて行く奴があるか」赫として、そして小便を濟ますと、末松は其細長い身體を波打たすやうにして其男の後を追馳けて來た。謙作は暴れ馬でも止めるやうに狹い路次に兩手を擴げ、それを遮つた。其男は急いで行つて了つた。

「おい、今晩俺に喧嘩さして吳れ。いゝか」末松は酒臭い息を吐いて云つた。

「君がやるのはいゝが、俺は關係しないよ」

「それはいゝさ。然し今の奴を撲つてやるよ。何方へ行つた？」末松は謙作の手を振り離なし、往來まで馳けて出ると、其邊を見廻はして居たが、もう其男の姿はなかつた。

花見小路の茶屋は新建ちの余り氣分のない家だつた。それでも前の茶屋よりは幾らか格がいゝらしく、身體の大きな如何にも素人臭い感じの女將が出て來て、

「長いこと」とお辭儀をした。

「太夫さんを呼んで呉れないか」末松が云つた。

「へえ」

「僕はいゝよ。直ぐ歸るから」と謙作は云つた。

女將はそれでいゝのかと末松の顏を見て默つてゐた。

「奥さんに惡くないといゝんだがなあ」末松は具合惡さうに云ひ、然し實は謙作にも泊つて貰ひたいらしい風を見せてゐた。

謙作にはこれまでの左う云ふ習慣から、それ程貞節である良心もなかつたが、左う云ふ事で、末松の前に妻を侮辱する事が何んとなく厭だつた。妻を侮辱する事は間接に自身を侮辱する事だつた。此寧ろ主我的な心持からも彼は矢張り歸らうと思つた。間もなく俥を云ひ、寒い風の吹く往來を遙々衣笠村の方へ歸つて行つた。

二時を過ぎて居た。椿寺の前で俥を乘捨てると、一丁余りの路を彼は走つた。そして家の十何間か手前まで來て、走るのを止めると息を切りながら彼は何氣なく咳をした。その咳で直子が急いで茶の間を出て來るのが女中部屋の硝子窓を透して見られた。

「婆アや。旦那様がお歸りだよ」から大きい聲で云ふのが、彼の所には遠く小さく聞こえて來た。

謙作は門を開ける間も待たず、低い生垣を飛び越へて入つた。

台所口を開け、直子が飛び出して來た。

「あゝ、よかつた、よかつた」と云ひ、直子は両手でとんびの下の手を探し、それを握り締めた。

「寝て居ればいゝのに」

茶の間へ來ると直子は直ぐ前へ廻はり、二重廻はしのホックやボタンを忙しくはづしながら、

「私ね、貴方が路で倒れて居らつしやるかと思つたの……」と云つた。

「奥さんの又、阿呆らしい事をおいやす」と次の間から仙が云つた。

「婆アや、本統だよ――婆アやに左う云はれるんですけど、本統に心配しましたわ。まあ、よかつた、よかつた」

「馬鹿だね。俺が行倒れになつてると思つたのか」彼は笑つた。

「左うよ」

「一時頃にこれから尋ねにいて見よう仰有つて……そんな事したかて、何所へおいきやしたも知れんに」仙は次の間で茶をいれながら笑つた。

「もう茶はいゝよ。早く寝るといゝ」謙作は直ぐ寝間着に更え、寝室に入つた。直子は彼の着物を畳みながら、妙に亢奮して居た。そして「よかつた」と云ふ言葉を頻りに繰返えしながらよく笑つた。謙作は枕に頭をつけ、其方を向いて其晩の話をしたが、亢奮して居る直子はそれを聞かうともしなかつた。

十六

謙作夫婦の衣笠村の生活は至極なだらかに、そして平和に、楽しく過ぎた。が、平和に楽しくと云ふ意味が時に安逸に堕ちる時に謙作は變な淋しさに襲はれた。左う云ふ時、彼は仕事をよく思つた。然し彼にはまとまつた仕事は何も出來なかつた。前に信行を介して話のあつた雑誌社からの催促も受けて居たが、それが出來なかつた。

相不變末松とはよく會つた。末松は謙作がそれを嫌つて居る事を知つて居て、余り連れて來ようとはしなかつたが、それでも三度に一度、或は二度に一度、水谷も一緒について來た。花合はせの遊びをする爲めには三人では物足りなかつた。その必要からも自然水谷が時々仲間に入るやうになつた。

或る時四人で其遊びをして居る時だつた。偶然にも謙作は、それで直子を疑つた、其同じ過ちを危く自身犯かさうとした。丹一の手役がついたと思つてゐると、菊の札に盃がついて居た。彼は此偶然を面白く思ひ、愉快にも感じた。直子のは矢張り見損ひだつたのだ。同じ誤りを何かゞ故意に自身にさせたかのやうにも思はれた。そして事實、その事で直子を少しも非難しては居なかつたにしろ、それが全く猾るでなかつたと思へる事に嬉しかつた。彼はその事を直子に云はうかと思ひ、矢張り云ひにくかつた。疑つた自身が耻じられたからである。

二月、三月、四月、――四月に入ると花が咲くやうに京都の町々全體が咲き、賑はつた。祇園の夜櫻、嵯峨の櫻その次に御室の八重櫻が咲いた。そして、やがて都踊、島原の道中、壬生狂言の興行、左う云ふ年中行事も一ト通り済み、祇園に繋ぎ團子の赤い提灯が見られなくなると、京都も、もう五月である。東山の新緑が花よりも美しく、もくもく、赤味の差した楠の若葉が八坂の塔や清水の塔の後ろに浮き上がつて眺められる頃になると、流石に京都の町々も遊び疲れた後の落ちつきを見せて來る。

實際謙作達も、もう遊び疲れて居た。そして、謙作は其頃になつて直子が姙娠した事を知つた。

六月、七月、それから八月に入ると、よく云はれる如く京都の暑さは可成り酷しかつた。身重の直子にはそれがこたえた。肉附のよかつた頬にも何所か疲れの跡が見られ、ぼんやりと淋しい顔をして居る事などがよくあつた。丁度肉から直子の年寄つた伯母が出て來て、それからは謙作も幾らか心持に屑ぬけが出來た。伯母は大柄な、そして顔に太い縞のある一寸恐しい感じのする人だつた。が、如何にも氣持の明かるい、それに初めて來た家のやうになく總てを自由に振舞ひ、謙作に對してもそれを包むやうな子供扱ひにする所が、實の伯母であるかのやうな親しい感じを謙作にも起こさせた。

余りの暑さに謙作は避暑を想ひ、此氣のいゝ年寄りと三人で何所か涼しい山の温泉宿に二三週間を過ごす事を考へると、子供から全く左う云ふ經驗がなかつたゞけに、彼にはそれが胸の踊る程に樂しく想像された。

彼は直ぐ此思ひつきを二人に話さないでは居られなかつた。

「どうですやろう」伯母は何の遠慮もなく云つた。「今汽車に乘せたら障らんかな」

「未だ大丈夫でせう」謙作は答へた。

「いゝや。そら、此位の暑さは別に障るまいが、それより動かさんがいゝやろう。お湯でお腹の兒が育ち過ぎても困るしな」

折角の思ひつきも此反對でそれつきりになつた。直子の淋しくぼんやりしてゐるやうな事も少なくなつた。月見、花見、猪鹿蝶、左う云ふ舊いやり方の花合せなどをして遊ぶ事もあつた。伯母は一ト月程ゐて歸つて行つた。

九月に入ると、直子も段々元氣になり、謙作がおそく二階の書齋から、降りて來ると、電燈の下に大きな腹をした直子が夜なべ仕事に赤兒の着物を縫つて居る事などがあつた。

「可愛いでしよ」

一尺差しの眞中を糸で釣つた假の衣紋竹に赤い綿入のおでんちを懸け子供の立つた高さに箪笥の環から下げてある。

「うむ、可愛い」

謙作は其所に左う云ふ新しい存在を想像し、不思議な氣がした。それは不思議な喜びだつた。肩上げにくびられ、尻の邊りが丸くふくれてゐる所が後向きに立つた肉附きのいゝ子供をその儘に想はせた。

「あなたは本統は何方がいゝんだ?男がいゝか、女がいゝか」自分でもそんな事を思ひながら謙作は訊いてみた。

「左うね。何方でも生れた方がいゝのよ。どうも、こればかりは神ごとで仕方がないのよ」直子は買うした糸を髮でこきながら済まして答へた。

「伯母さんが左う云つたんだらう」謙作は笑つた。それに違ひなかつた。

赤兒の着物は國の母親の縫つた物が何枚も屆いた。伯母からも洗さらした單衣で作つたおむつが澤山に來た。

「まあ、きたならしい物ばつかり」その小包を解いた直子は豫期の違つた事から顏を赤くしながら云つた。「耻かしいわ。こんなもの……」

「勿體ない事おいやす。かう云ふものは何枚あつたかて足りるものやおへんぜ。きたならしい云ふて、そない洗濯したんでないと、やゝはんには荒うてあきまへんのどつせ」

「これはあなたが着てたんだらう？」謙作には荒い中形のかう云ふものを着てゐた時代の直子が愛らしく想ひ浮んだ。

「左うよ。だから耻かしいのよ。幾ら田舍でもこんなになるまで着てたかと思ふと、伯母さんも本統に氣が利かない」

直子が左う腹立たしさうに云ふと、仙が傍から、

「御隱居はんやからこそ……」と多少厭やがらせの調子に云つて笑つた。

産は十月末か十一月初めと云ふ事だつた。産を病院でするか、自家でするか、萬一國の母親が出て來られないやうなら、病院でする事に決めて置いた。若し早くなると、田舍は穫入れ時で忙しく、一寸出にくいとの事だつた。然し何れにしろ伯母の方は又出て來るに相違なかつた。

或る日思ひがけなく信行が不意に訪ねて來た。それは晴れた氣持のいゝ晩で謙作は直子を連れ、裏の畑道を眞直ぐに金閣寺の方まで散歩して歸つて來ると、信行が洋服に庭下駄を穿き、卷烟草をふかしながら、門の前に立つて居るのを見た。

「やあ」と信行は簡單に頭を下げ、「お前もづつと丈夫だね」と直子に云つた。

「何時？今朝着いたの？」謙作が云つた。

「うむ。急に一寸お前に相談する事が出來たんでね」

謙作が先に立つて、玄關から上がつた。

「お兄樣、御飯は？」と直子がいつた。

「もう濟んだ。――――却々いゝ家ぢやないか」信行は其邊を見廻はしながら云つた。

仙が出して置いた坐蒲團を緣に近かく持ち出し、腰を下ろすと信行は直ぐ云ひ出した。

「實はお榮さんの事なんだがね。――――今、お前の所に三百圓ばかり金あるか？」

「あるよ」
「左うか、そんなら早速それだけでも送つてやるかな」
「どうしたんだ」謙作はお榮が少しも自分の爲に相談もせず信行にばかり賴るやうな所が、左うする氣持は解つて居るが、一寸不滿に感じられた。
「お才かね、あの女はお前も云つてゐたが、矢張り、本杁の親切氣はなかつたらしいんだね。お前の方には知らさなかつたさうだが、此六月からお榮さんはもう天津に居なかつたんだよ。何んでもそれから奉天の方へ暫く行つてゐて、今は大連に居るんだ」
「何をして居るんだ」
「何んにもせずに印判屋の二階で近所の小娘を使つて自炊してるんださうだ。——それはいゝが半月程前に泥棒に入られて今は殆ど無一物になつちまつたと云ふんだがね」
「君の所へ左ういつて來たのかい?」
「一昨日左う云ふ手紙を貰つた」
「馬鹿だな!そんならさつさと歸つて來るがいゝんだ。」謙作は何といふ事なし苛々して云つた。
「俺も左う思ふよ。だけど、其印判屋にも少し借りがあるらしく、直ぐも動けないやうな事が書いてあつたからね。旅費とも三百圓あつたら足りるだらうと思つたが、相憎俺の所に今全で金がないんだ。自家から貰つてもいゝが、その事を今一寸云ひたくないからね。尤もそれだけでわざ〳〵出て來る程の事もないが、今度寺で庫裏の修築をやるんで寄附金を集めてるんだ。——此所の〇〇寺の管長は繪かきだつて?」
「繪かきでもないかも知れないが、兎に角白木屋あたりで、時々見るよ」
「却々高いさうぢやないか。寄附代りに五六枚描いて貰ふんで、それを頼みに行く使をうちの和尙に頼まれたんだよ
まあ、そんな事もあるんで急に出て來た」

「お榮さんは無一物になつたといふだけで、別に心配な事はないんだね」

「痔を病んで居ると云つて來たが、痔と云へばマラリヤだね。あんな所でも左う云ふ病氣があるのかね」

「それは何所だつてあるだらう。然し別に危險な病氣ぢやないだらう？」

「大した事ではないらしいよ。左うだ、その痔で、藥を呑む時間を間違へた爲めに、それがおこつて苦しんだ擧句、すつかり疲れて、うつら〳〵して居ると、暑いんで夜でも開け離して置いた窓から支那人が二人入つて來るのをぼんやりと見てたんださうだよ。例の東京で買ひ集めた藝者の衣裳が三行李とかあつて、それを部屋の隅に積んで置いたんだね。つまりそれが資本で、又同じ商賣を何所かでやる氣だつたらしい。それをすつかり持つて行かれたんだ。泥棒だなと思ひながら、あんまり疲れて居るんで、其儘眠つちまつたんださうだ」

「泣つ面に蜂だね」然し又お榮と會へる事が謙作には妙に嬉しい氣がした。彼は我知らず快活な氣分になつて居た。

「然しそれで早く歸つて來れば大難が小難みたやうなもんだ」

「左うかも知れない」信行も一緒に笑つた。

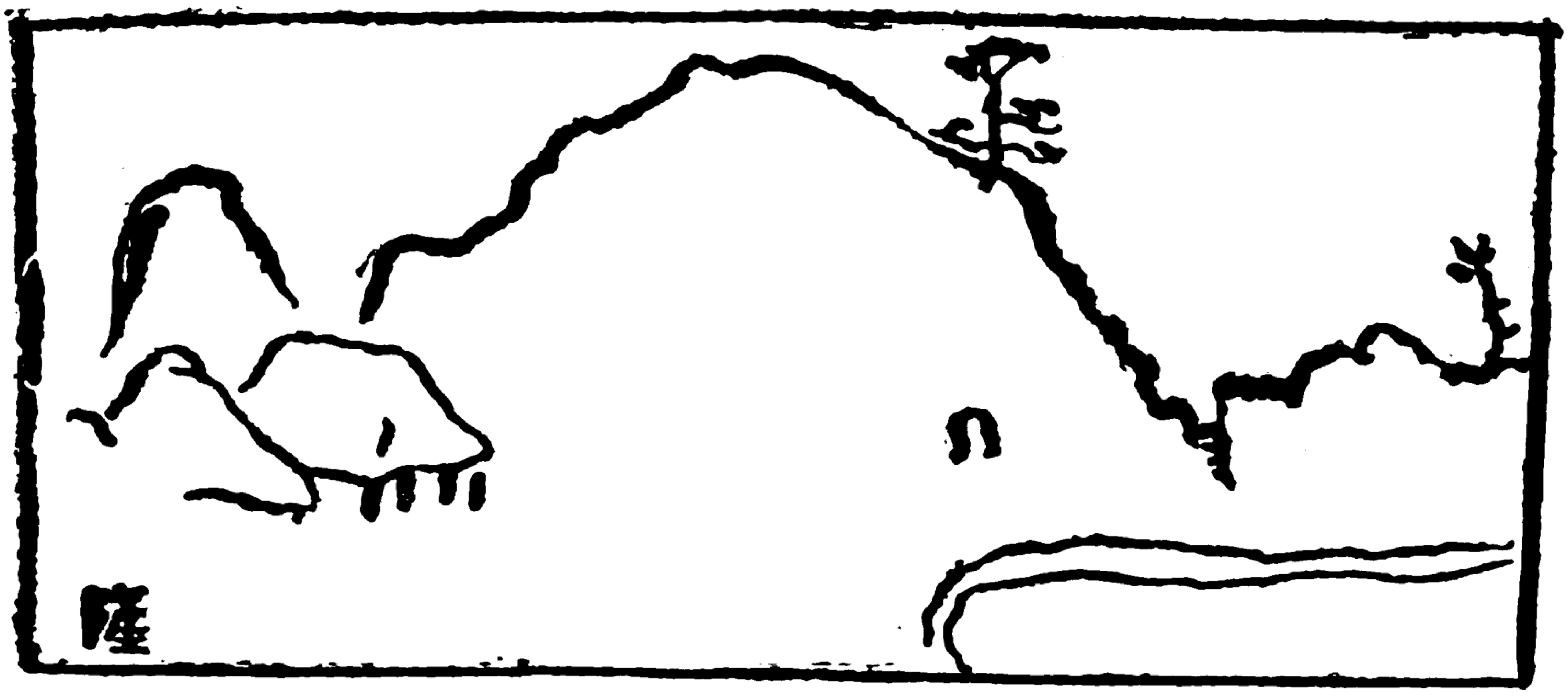
元々謙作はお榮の支那行きには不贊成だつたのだ。間に入つた信行の話が不充分で、それがお榮まで徹しなかつたのである。然し今案外早く歸つて來る事を知ると、「そら、見た事か」とでも云つて、手を差しのべてやりたいやうな氣持になつて居た。

信行は翌日京都での用事を濟ますと、直ぐ矢張り寄附の事で、大阪へ行き、そして歸途又衣笠村に寄つて一泊して行つた。

「どうだい。お前も少し寄附しないか」かういつて信行は角張つた手提鞄の中から、袈裟の古布れか何かを表紙にした鳥の子紙の帳面を出した。

謙作はそれを取上げて見た。「二百圓、——二百五十圓、——三拾圓——拾圓——五百圓、——却々大きんだな。百五拾圓、——これが君か」

「金がないから、拂はないんだ」
「拂はずに只書いて置くのかい」
「そりやあ何時か拂うよ、ある時に…」信行は笑つた。
「お兄様。幾らでもよろしいの？」傍から直子が云つた。
「あゝ、幾らでもいゝよ。二圓でも三圓でも」
「左う？そんなら私五圓奉納しますわ」
「それは、ありがたう。早速これへ書いてお呉れ」
直子は簞笥の上の硯箱を持つて來て、
「貴方は？」と云つた。
「あなたがすればもう澤山だよ。僕は寺なんかがよく保存される事は大賛成だが、自分が寄附するのは不賛成だよ。左う云ふ事はもつと政府で金を出すのが本統だよ」
「猾いのね」
「猾かないさ。然し幾らでもいゝなら、僕は十圓だ。一緒に僕のも書いて置いて呉れ」
謙作は人並はづれて字が下手だつた。殊に毛筆で書くと自分でも下手なのに感心した。そして彼に較べれば直子の方が遙かに人並である所から、近頃は筆の字は大概直子に代筆さす事にして居た。
「いや、ありがたう」信行は墨の乾くのを待つて共帳面を手提に仕舞つた。
晩、三人は寺町、新京極邊を暫く散步した。そして七條驛で、二人は鎌倉へ歸る信行と別れた。（つづく）



お富の貞操

芥川龍之介

一

明治元年五月十四日の午過ぎだつた。「官軍は明日夜の明け次第、東叡山の彰義隊を攻撃する。上野界隈の町家のものは匆々何處へでも立ち退いてしまへ。」――さう云ふ達しのあつた午過ぎだつた。下谷町二丁目の小間物店、小池(こが)屋政兵衛の立ち退いた跡には、臺所の隅の鮑貝の前に大きい牡の三毛猫が一匹靜かに香箱をつくつてゐた。

戸をしめ切つた家の中は勿論午過ぎでもまつ暗だつた。人音も全然聞えなかつた。唯耳にはひるものは連日の雨の音ばかりだつた。雨は見えない屋根の上へ時々急に降り注いでは、何時か又中空へ遠のいて行つた。猫はその音の高まる度に、琥珀色の眼をまん圓にした。竈さへわからない臺所にも、この時だけは無氣味な燐光が見えた。が、ざあつと云ふ雨音以外に何も變化のない事を知ると、猫はやはり身動きもせずもう一度眼を糸のやうにした。

そんな事が何度か繰り返される内に、猫はとうとう眠つたのか、眼を明ける事もしなくなつた。しかし雨は相不變急になつたり靜まつたりした。八つ、八つ半、――時はこの雨音の中にだんだん日の暮へ移つて行つた。

すると七つに迫つた時。猫は何かに驚いたやうに突然眼を大きくした。同時に耳も立てたらしかつた。が、雨は今までよりも遙かに小降りになつてゐた。往來を馳せ過ぎる駕籠舁きの聲、——その外には何も聞えなかつた。しかし數秒の沈默の後、まつ暗だつた臺所は何時の間にかぼんやり明るみ始めた。狹い板の間を塞いだ竈、蓋のない水瓶の水光り、荒神の松、引き窓の綱、——そんな物も順々に見えるやうになつた。猫は愈不安さうに、戸を明いた水口を睨みながら、のそりと大きい體を起した。

この時この水口の戸を開いたのは、——いや、戸を開いたばかりではない、腰障子もしまひに明けたのは、濡れ鼠になつた乞食だつた。彼は殆ど猫のやうに首だけ前へ伸ばしたなり、少時は靜かな家のけはひにぢつと耳を澄ませてゐた。が、人音のないのを見ると、これだけは眞新しい酒莚に古手拭をかぶつた儘、そつと臺所へ上つて來た。猫は耳を平めながら、二足三足跡ずさりをした。しかし乞食は驚きもせず、後ろ手に障子をしめてから、徐ろに顔の手拭をとつた。顔は髭に埋まつた上、膏藥も二三個所貼つてあつた。しかし垢にはまみれてゐても、眼鼻立ちは寧ろ尋常だつた。

「三毛。三毛。」

乞食は髮の水を切つたり、顔の滴を拭つたりしながら、小聲に猫の名前を呼んだ。猫はその聲に聞き覺えがあるのか平めてゐた耳をもとに戻した。が、まだ其處に佇んだなり、時々はじろじろ彼の顔へ疑深い眼を注いでゐた。その間に、酒莚を脱いだ乞食は脛の色も見えない泥足の儘、猫の前へどつかりあぐらをかいた。

「三毛公。どうした？——誰もゐない所を見ると、貴樣だけ置き去りを食はされたな。」

乞食は獨り笑ひながら、大きい手に猫の頭を撫でた。猫はちよいと逃げ腰になつた。が、それぎり飛び退きもせず、反つて其處へ座つたなり、だんだん眼さへ細め出した。乞食は猫を撫でやめると、今度は古湯帷子の懐から、油光りのする短銃を出した。さうして覺束ない薄明りの中に、引き金の具合を檢べ出した。「いくさ」の空氣の漂つた、人氣のない家の臺所に短銃をいぢつてゐる一人の乞食——それは確かに小說ぢみた、物珍らしい光景に違ひなかつた。しかし薄眼になつた猫はやはり背中を圓くした儘、一切の秘密を知つてゐるやうに、冷然と坐つてゐるばかりだつた。

「明日になるとな、三毛公、この界隈へも雨のやうに鐵砲の玉が降つて來るぞ。そいつに中ると死んじまふから、明日はどんな騒ぎがあつても、一日椽の下に隱れてゐろよ。……」

乞食は短銃を檢べながら、時々猫に話しかけた。

「お前とも永い御馴染だな。が、今日が御別れだぞ、明日はお前にも大厄日だ。おれも明日は死ぬかも知れない。よし又死なずにすんだ所が、この先二度とお前と一しよに掃溜めあさりはしないつもりだ。さうすればお前は大喜びだらう。」

その內に雨は又一きり、騒がしい音を立て始めた。雲も棟瓦を煙らせる程、近々と屋根に押し迫つたのであらう。臺所に漂つた薄明りは前よりも一層かすかになつた。が、乞食は顏も擧げず、やつと檢べ終つた短銃へ、丹念に彈藥を裝塡してゐた。

「それとも名殘りだけは惜しんでくれるか？　いや、猫と云ふやつは三年の恩も忘れると云ふから、お前も當てにはならなさうだな。――が、まあ、そんな事はどうでも好いや。唯おれもゐないとすると、――」

乞食は急に口を噤んだ。途端に誰か水口の外へ步み寄つたらしいけはひがした。短銃をしまふのと振り返るのと、乞食にはそれが同時だつた。いや、その外に水口の障子ががらりと明けられたのも同時だつた。乞食は咄嗟に身構へながら、まともに闖入者と眼を合せた。

すると障子を明けた誰かは乞食の姿を見るが早いか、反つて不意を打れたやうに、「あつ」とかすかな叫び聲を洩らした。それは素裸足に大黑傘を下げた、まだ年の若い女だつた。彼女は殆ど衝動的に、もと來た雨の中へ飛び出さうした。が、最初の驚きから、やつと勇氣を恢復すると、臺所の薄明りに透かしながら、ぢつと乞食の顏を覗きこんだ。

乞食は呆氣にとられたのか、古湯帷子の片膝を立てた儘、まじまじ相手を見守つてゐた。もうその眼にもさつきのやうに、油斷のない氣色は見えなかつた。二人は默然と少時の間、互に眼と眼を見合せてゐた。

「何だい、お前は新公ぢやないか？」

彼女は少し落ち着いたやうに、かう乞食へ聲をかけた。乞食はにやにや笑ひながら、二三度彼女へ頭を下げた。

「どうも相濟みません。あんまり降りが强いもんだから、つい御留守へはひこみまゝたがね、――何、格別明き巢狙ひに宗旨を變へた譯でもないんです。」

「驚かせるよ、ほんとうに。――いくら明き巢狙ひぢやないと云つたつて、圖々しいにも程があるぢやないか？」

彼女は傘の滴を切り切り、腹立たしさうにつけ加へた。

「さあ、こつちへ出ておくれよ。わたしは家へはひるんだから。」

「へえ、出ます。出ろと仰有らないでも出ますがね、姐さんはまだ立ち退かなかつたんですかい？」

「立ち退いたのさ。立ち退いたんだけれども、――そんな事はどうでも好いぢやないか？」

「すると何か忘れ物でもしたんですね。――まあ、こつちへおはひんなさい。其處では雨がかかりますぜ。」

彼女はまだ業腹さうに、乞食の言葉には返事もせず、水口の板の間へ腰を下した。それから流しへ泥足を伸ばすと、ざあざあ水をかけ始めた。平然とあぐらをかいた乞食は鬚だらけの顋をさすりながら、じろじろその姿を眺めてゐた。彼女は色の淺黑い、鼻のあたりに雀斑のある、田舍者らしい小女だつた。なりも召使ひに相應な手織木綿の一重物に、小倉の帶しかしてゐなかつた。が、活き活きした眼鼻立ちや、堅肥りの體つきには、何處か新しい桃や梨を聯想させる美しさがあつた。

「この騷ぎの中を取りに返るのぢや、何か大事の物を忘れたんですね。何です、その忘れ物は？え、姐さん。――お富さん。」

新公は又尋ね續けた。

「何だつて好いぢやないか？それよりさつさと出て行つておくれよ。」

お富の返事は突慳貪だつた。が、ふと何か思ひついたやうに、新公の顏を見上げると、眞面目にこんな事を尋ね出した。

「新公、お前、家の三毛を知らないかい？」

「三毛？　三毛は今此處に、──おや、何處へ行きやがつたらう？」

乞食はあたりを見廻した。すると猫は何時の間にか、棚の擂り鉢や鐵鍋の間に、ちやんと香箱をつくつてゐた。その姿は新公と同時に、忽ちお富にも見つかつたのであらう。彼女は柄杓を捨てるが早いか、乞食の存在も忘れたやうに、板の間の上に立ち上つた。さうして晴れ晴れと微笑しながら、棚の上の猫を呼ぶやうにした。

新公は薄暗い棚の上の猫から、不思議さうにお富へ眼を移した。

「猫ですかい、姐さん、忘れ物と云ふのは？」

「猫ぢや悪いのかい？──三毛、三毛、さあ、下りて御出で。」

新公は突然笑ひ出した。その聲は雨音の鳴り渡る中に殆氣味の悪い反響を起した。と、お富はもう一度、腹立たしさに頬を火照らせながら、いきなり新公に怒鳴りつけた。

「何が可笑しいんだい？　家のお上さんは三毛を忘れて來たつて、氣違ひのやうになつてゐるんぢやないか？　三毛が殺されたらどうしようつて、泣き通しに泣いてゐるんぢやないか？　わたしもそれが可哀さうだから、雨の中をわざわざ歸つて來たんぢやないか？──」

「ようござんすよ。もう笑ひはしませんよ。」

新公はそれでも笑ひ笑ひ、お富の言葉を遮つた。

「もう笑ひはしませんがね。まあ、考へて御覽なさい。明日にも「いくさ」が始まらうと云ふのに、高が猫の一匹や二匹──これはどう考へたつて、可笑しいのに違ひありませんや。お前さんの前だけれども、一體此處のお上さん位、わからずやのしみつたれはありませんぜ。第一あの三毛公を探しに、……」

「お默りよ？　お上さんの讒訴なぞは聞きたくないよ！」

お富は殆どぢだんだを踏んだ。が、乞食は思ひの外彼女の權幕には驚かなかつた。のみならずしげしげ彼女の姿に無遠慮な視線を注いでゐた。實際その時の彼女の姿は野蠻な美しさそのものだつた。雨に濡れた着物や湯卷き、──それ

らは何處を眺めても、ぴつたり肌についてゐるだけ、露はに肉體を語つてゐた。しかも一目に處女を感ずる、若々しい肉體を語つてゐた。新公は彼女に目を据ゑたなり、やはり笑ひ聲に話し續けた。

「第一あの三毛公を探しに、お前さんをよこすのでもわかつてゐますさあ。ねえ、さうぢやありませんか？ 今ぢやもう上野界隈、立ち退かない家はありませんや。して見れば町家は並んでゐても、人のゐない町原と同じ事だ。まさか狼も出まいけれども、どんな危い目に遇ふかも知れない。――と、まづ云つたものぢやありませんか？」

「そんな余計な心配をするより、さつさと猫をとつておくれよ。――これが「いくさ」でも始まりやしまいし、何が危い事があるものかね。」

「冗談云つちやいけません。若い女の一人歩きが、かう云ふ時に危くなけりや、危いと云ふ事はありませんや。早い話が此處にゐるのは、お前さんとわたしと二人つきりだ。萬一わたしが妙な氣でも出したら、姐さん、お前さんはどうしなさるね？」

新公はだんだん冗談だか、眞面目だかわからない口調になつた。しかし澄んだお富の目には、恐怖らしい影さへ見えなかつた。唯その頬には、さつきよりも、一層血の色がさしたらしかつた。

「何だい、新公、――お前はわたしを嚇かさうつて云ふのかい？」

お富は彼女自身嚇かすやうに、一足新公の側へ寄つた。

「嚇かすえ？ 嚇かすだけならば好いぢやありませんか？ 肩に金切れなんぞくつつけてゐたつて、風の悪いやつらも多い世の中だ。ましてわたしは乞食ですぜ。嚇かすばかりとは限りませんや。もしほんたうに妙な氣を出したら、……」

新公は殘らず云はない内に、したたか頭を打ちのめされた。お富は何時か彼の前に、大黑傘をふり上げてゐたのだつた。

「生意氣な事をお云ひでない。」

お富は又新公の頭へ、力一ぱい傘を打ち下した。新公は咄嗟に身を躱さうとした。が、傘はその途端に、古湯帷子の

肩を打ち据ゑてゐた。この騒ぎに驚いた猫は、鐵鍋を一つ蹴落しながら、荒神の棚へ飛びかかつた。と同時に荒神の松や油光りのする燈明皿も、新公の上へ轉げ落ちた。新公はやつと飛び起きる前に、まだ何度もお富の傘に、打ちのめされずにはすまなかつた。

「こん畜生！　こん畜生！」

お富は傘を揮ひ續けた。が、新公は打たれながらも、とうとう傘を引つたくつた。のみならず傘を投げ出すが早いか猛然とお富に飛びかかつた。二人は狹い板の間の上に、少時の間掴み合つた。この立ち廻りの最中に、雨は又臺所の屋根へ、凄まじい音を蒐め出した。光も雨音の高まるのと一しよに、見る見る薄暗さを加へて行つた。新公は打たれても、引つ掻かれても、遮二無二お富を捩ぢ伏せようとした。しかし何度か仕損じた後、やつと彼女に組み付いたと思ふと、突然又彈かれたやうに、水口の方へ飛びすさつた。

「この阿魔あ！………」

新公は障子を後ろにしたなり、ぢつとお富を睨みつけた。何時か髮も壞れたお富は、ぺたつり板の間に坐りながら、帶の間に挾んで來たらしい剃刀を逆手に握つてゐた。それは殺氣を帶びてもゐれば、同時に又妙に艶めかしい、云はば荒神の棚の上に背を高めた猫と似たものだつた。二人はちよいと無言の儘、相手の目の中を窺ひ合つた。が、新公は一瞬の後、わざとらしい冷笑を見せると、懷からさつきの短銃を出した。

「さあ、いくらでもぢたばたして見ろ」。

短銃の先は徐ろに、お富の胸のあたりへ向つた。それでも彼女は口惜しさうに、新公の顏を見つめたきり、何とも口を開かなかつた。新公は彼女が騷がないのを見ると、今度は何か思ひついたやうに、短銃の先を上に向けた。その先には薄暗い中に琥珀色の猫の目が仄めいてゐた。

「好いかい？　お富さん。――」

新公は相手をぢらすやうに、笑ひを含んだ聲を出した。

「この短銃がどんと云ふと、あの猫が逆様に轉げ落ちるんだ。お前さんにしても同じ事だぜ、そら好いかい？」

引き金はすんでに落ちようとした。

「新公！」

突然お富は聲を立てた。

「いけないよ。打つちやいけない。」

新公はお富へ目を移した。しかしまだ短銃の先は、三毛猫に狙ひを定めてゐた。

「いけないのは知れた事だ。」

「打つちや可哀さうだよ。三毛だけは助けてやつておくれ。」

お富は今までとは打つて變つた、心配さうな目つきをしながら、心もち震へる唇の間に、細かい齒並みを覗かせてゐた。新公は半ば嘲るやうに、又半ば訝るやうに、彼女の顔を眺めたなり、やつと短銃の先を下げた。と同時にお富の顔には、ほつとした色が浮んで來た。

「ぢや猫は助けてやらう。その代り。——」

新公は横柄に云ひ放つた。

「その代りお前さんの體を借りるぜ。」

お富はちよいと目を外らせた。一瞬間彼女の心の中には、憎しみ、怒り、嫌惡、悲哀、その外いろいろの感情がごつたに燃え立つて來たらしかつた。新公はさう云ふ彼女の變化に、注意深い目を配りながら、横歩きに彼女の後ろへ廻ると茶の間の障子を明け放つた。茶の間は臺所に比べれば、勿論一層薄暗かつた。が、立ち退いた跡と云ふ條、取り殘した茶簞笥や長火鉢は、その中にもはつきり見る事が出來た。新公は其處に佇んだ儘、かすかに汗ばんでゐるらしい、お富の襟もとへ目を落した。するとそれを感じたのか、お富は體を捻るやうに、後ろにゐる新公の顔を見上げた。彼女の顔にはもう何時の間にか、さつきに少しも變らない、活き々々した色が返つてゐた。しかし新公は狼狽したやうに、妙な

瞬きを一つしながら、いきなり又猫へ短銃を向けた。

「いけないよ。いけないつてば。――」

お富は彼を止めると同時に、手の中の剃刀を板の間へ落した。

「いけなけりやあすこへお行きなさいな。」

新公は薄笑ひを浮べてゐた。

「いけ好かない！」

お富は忌々しさうに呟いた。が、突然立ち上ると、ふて腐れた女のするやうに、さつさと茶の間へはひつて行つた。新公は彼女の諦めの好いのに、多少驚いた容子だつた。雨はもうその時には、ずつと音をかすめてゐた。おまけに雲の間には、夕日の光でもさし出したのか、薄暗かつた臺所も、だんだん明るさを加へて行つた。新公はその中に佇みながら、茶の間のけはひに聞き入つてゐた。小倉の帯の解かれる音、畳の上へ寝たらしい音、――それぎり茶の間はしんとしてしまつた。

新公はちよいとためらつた後、薄明るい茶の間へ足を入れた。茶の間のまん中にはお富が一人、袖に顔を蔽つた儘、ぢつと仰向けに横たはつてゐた。（四十一字缺）新公はその姿を見るが早いか、逃げるやうに臺所へ引き返した。彼の顔に形容の出來ない、妙な表情が漲つてゐた。それは嫌悪のやうにも見えれば、恥ぢたやうにも見える色だつた。彼は板の間へ出たと思ふと、まだ茶の間へ、背を向けたなり、突然苦しさうに笑ひ出した。

「冗談だ。お富さん。冗談だよ。もうこつちへ出て來ておくんなさい。……」

――何分かの後、懐ろに猫を入れたお富は、もう傘を片手にしながら、破れ莚を敷いた新公と、氣輕に何か話してゐた。

「姐さん。わたしは少しお前さんに、訊きたい事があるんですがね。――」

新公はまだ間が悪るさうに、お富の顔を見ないやうにしてゐた。

「何をさ！」

「何をつて事もないんですがね。――まあ肌身を任せると云へば、女の一生ぢや大變な事だ。それをお富さん、お前さんは、その猫の命と懸け換へに、――こいつはどうもお前さんにしちや、亂暴すぎるぢやありませんか？」

新公はちよいと口を噤んだ。がお富は頰笑んだぎり、懷ろの猫を劬つてゐた。

「そんなにその猫が可愛いんですかい？」

「そりや三毛も可愛いしね、――」

お富は煮え切らない返事をした。

「それとも又お前さんは、近所で評判の主人思ひだ。三毛が殺されたとなつた日にや、この家の上さんに申し譯がない。――と云ふ心配でもあつたんですかい？」

「ああ、三毛も可愛いしね。お上さんも大事にや違ひないんだよ。けれども唯わたしはね、――」

お富は小首を傾けながら、遠い所でも見るやうな目をした。

「何と云へば好いんだらう？　唯あの時はああしないと、何だかすまない氣がしたのさ。」

――更に又何分かの後、一人になつた新公は、古湯帷子の膝を抱いた儘、ぼんやり臺所に坐つてゐた。暮色は疎らな雨の音の中にだんだん此處へも迫つて來た。引き窓の綱、流し元の水瓶、――そんな物も一つづつ見えなくなつた。と思ふと上野の鐘が、一杵づつ雨雲にこもりながら、重苦しい音を撒き始めた。新公はその音に驚いたやうに、ひつそりしたあたりを見廻した。それから手さぐりに流し元へ下りると、柄杓になみなみと水を酌んだ。

「村上新三郎源の繁光、今日だけは一本やられたな。」

彼はさう呟きざま、うまさうに黄昏の水を飮んだ……

×　×　×　×

明治二十三年三月二十六日、お富は夫や三人の子供と、上野の廣小路を歩いてゐた。

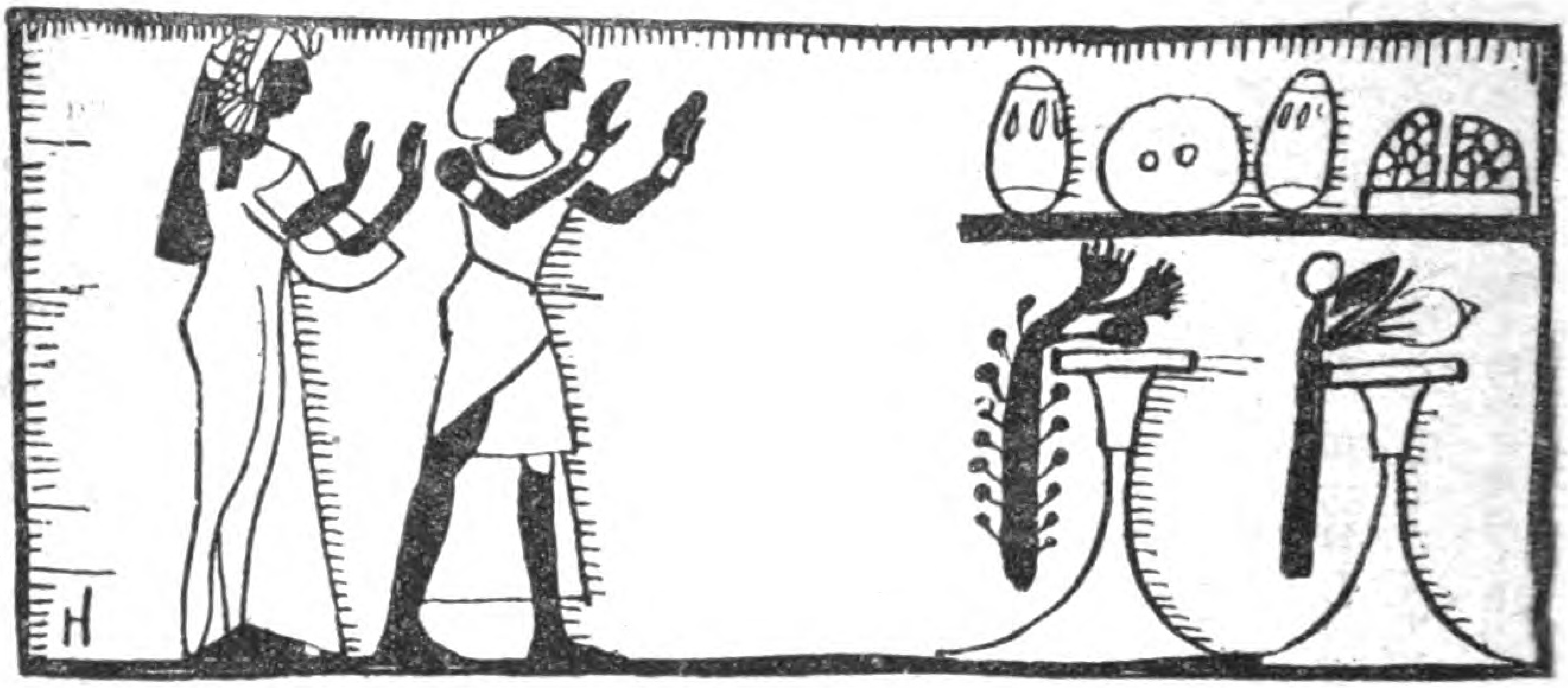
その日は丁度竹の臺に、第三回內國博覽會の開會式が催される當日だつた。おまけに櫻も黑門のあたりは、もう大抵開いてゐた。だから廣小路の人通りは、殆ど押し返さないばかりだつた。其處へ上野の方からは、開會式の歸りらしい馬車や人力車の行列が、しつきりなしに流れて來た。前田正名、田口卯吉、澁澤榮一、辻新次、岡倉覺三、下條正雄――その馬車や人力車の客には、さう云ふ人々も交つてゐた。

五つになる次男を抱いた夫は、袂に長男を縋らせた儘、目まぐるしい往來の人通りをよけよけ、時々ちよいと心配さうに、後ろのお富を振り返つた。お富は長女の手をひきながら、その度に晴れやかな微笑を見せた。勿論二十年の歲月は、彼女にも老を齎してゐた。しかし目の中に冴えた光は、昔と餘り變らなかつた。彼女は明治四五年頃に、古河屋政兵衞の甥に當る、今の夫と結婚した。夫はその頃は、橫濱に、今は銀座の何丁目かに、小さい時計屋の店を出してゐた。……

お富はふと目を擧げた。その時丁度さしかかつた、二頭立ちの馬車の中には、新公が悠々と坐つてゐた。新公が、――尤も今の新公の體には、駝鳥の羽根の前立だの、厳めしい金モオルの飾緒だの、大小幾つかの勳章だの、いろいろの名譽の標章に埋まつてゐるやうなものだつた。しかし半白の髯の間に、こちらを見てゐる赭ら顏は、往年の乞食に違ひなかつた。お富は思はず足を緩めた。二十年以前の雨の日の記憶は、はつきり目の前へ浮んで來た。彼女はその日無分別にも、一匹の猫を救ふ爲に、新公に體を任さうとした。その動機は何だつたか、――彼女はそれを知らなかつた。新公は亦さう云ふ羽目にも、彼女が投げ出して體には、指さへ觸れる事を肯じなかつた。その動機は何だつたか、――それも彼女は知らなかつた。が、知らないのにも關らず、それらは皆お富には、當然すぎる程當然だつた。彼女は新公と目を合せながら、何か心の伸びるやうな氣がした。

新公の馬車の通り過ぎた時、夫は人ごみの間から、又お富を振り返つた。彼女はやはりその顏を見ると、何事もないやうに頰笑んで見せた。活き々々と、嬉しさうに。……

附記　この短篇の前半は四月號の改造にも一度載つた。それを今度載せる事にしたのは、最初からずつと一息に、讀んで頂きたい爲である。作者記



指靈縁起　二部曲

第一部　三幕

山本有三

人物

マニバッダラ　婆羅門、國王の師。登場せず

マヤ　その夫人

アヒンサカ　マニバッダラの弟子。

ナラダ　その友

グプタ　夫人の侍女頭

夫人の侍女

石窟の番人

比丘二人

場所　印度舎衛城下

時代　古代

第一幕

夫人の部屋。

正面に出入の扉がある。右手にも小さい扉があつて、次の間に通ずるやうになつてゐる。左手に窓。窓の外は庭。建築も調度も華麗を極めてゐる。

夜だけれど部屋の中は晝のやうに明るい。

マヤ夫人は侍女のグプタに手傳はせながら、鏡のまへで着物を着かへてゐる。もう旨着終つたところ

マヤ。　もう少し締めて。

グプタ。　この位でございますか。（帶を固くする）

マヤ。　もつと強く。

グプタ。　このくらゐ。

マヤ。　あ、丁度いゝ。あたくし帶がぎゆつとしまつてゐないと氣持が悪いの。お腹が締めつけられるやうでないと。

グプタ。　ですがそれでは……

マヤ。　だつて、恰好が悪かつたら厭ぢやないか。

グプタ。　あの、瓔珞は？

マヤ。　掛けます。

グプタ。　（瓔珞を二つ出して）どちらのにいたしませう。

マヤ。　さうね。兩方貸してご覧。

グプタ。　はい。（マヤに渡す）

マヤ。　（鏡に向つて瓔珞を自分の體につけて見ながら）どつちが似合ふかしら。

グプタ。　どちらもうつりが宜しうございます。

マヤ。　おまへはお世辭がうまい[illegible]。――こつちにしておかう。

グプタ。　さやうでございますか。（不用になつた方の瓔珞を仕舞ふ）

マヤ。　華鬘は出來てゐるかい。

グプタ。　はい、出來てをります。

マヤ。　さう、こつちへ頂戴。

（グプタ華鬘をマヤの頸へかけてやる。）

マヤ。　今日の花は素馨だね。

グプタ。　はい、さやうでございます。香が高くつて、こんなよい花はございません。

マヤ。　けれど、いつも〲同じやうな色ばかりで面白くないね。

グプタ。　わたくしはさうも存じませんけれど……

マヤ。　何かかう變つたものはないだらうかね。

グプタ。　さやうでございますね。奥様のやうに何もかもお掛けになつてしまうと、もう當前のものではとても御意に召しませんから。

マヤ。　ねえ、グプタ。人間の指を切つて、それに銀の糸を通して掛けて見たらどうだらう。

グプタ。　まあ奥様！

マヤ。　ほゝ。それは冗談だけれど、掛けたらきつと綺麗だとおもふよ。

グプタ。　でも奥様、人間の指では華鬘ではなくつて、指鬘になつてしまひます。

マヤ。　ほゝゝゝ、本當にさうだわね。

侍女が少し前から入口のところに來て平服してゐる。

グプタはそれを視ると、すぐその傍にゆく。

グプタ。　ご苦勞さま行つて來て下すつたの。アヒンサカ様はおいでになつて。
侍女。　はい。
グプタ。　で、すぐおいでになるつて。
侍女。　いゝえ、あの明朝上ると仰やいました。
グプタ。　まあ、おまへさんも用の足りない方ね。そんなことぢや何にもならないぢやありませんか。
マヤ。　（二人の方を向いて）どうしたの。
グプタ。　いゝえ、何でございます。この人ではやつぱり無理でございました。あの、わたくしがちよつと行つてまゐります。
マヤ。　來られないといふの。
グプタ。　なあに、わたくしが參りさへすれば、すぐご一しよにお連れ申します。どうかちよつとお待ち下さいまし。
マヤ。　あの、ちつと。
グプタ。　何でございます。
マヤ。　（眼で何かいふ）
グプタ。　大丈夫でございますよ、奥樣。わたくしが心得てをります。

グプタ去る。つゞいて侍女も下がる。
マヤはなほ鏡の前で化粧をつゞけてゐたが、やがて窓のところへ行つて外を見る。
しばらくして侍女を呼ぶ。
侍女が這入つて來る。

侍女。　お召しでございますか。
マヤ。　睡蓮にもつと水を張つておゝき。

侍女。　はい。

侍女は小瓶から睡蓮の鉢に水を注ぐ。

マヤ。　それから、そこの鏡のところをお片づけ。

侍女。　畏りました。

侍女は夫人の化粧道具をすつかり片づける。

マヤ。　あ、それでいゝ。

侍女。　はい。

侍女去る。

やがてグプタが這入つて來る。

グプタ。　奥様。

マヤ。　どうだつたい。

グプタ。　お連れいたしました。

マヤ。　(喜しさうに)　さう。

グプタ。　先生がお留守だからと仰やつて、なか〳〵おいでにならなかつたのでございますけれども……

マヤ。　(微笑しながら)それでおまへ、どうしたの。

グプタ。　奥様に急なご用がおありだからと申しまして、無理〳〵にお連れいたしました。

マヤ。　グプタ。ご褒美を上げるよ。

グプタ。　え、それはもう是非いたゞきませんでは。ほゝゝゝ。あの、そこにお待たせしてあるんですが。

マヤ。　ちや直ぐに。

グプタ。　畏りました。少々お待ち下さいまし。

グプタ去る。間もなくアヒンサカを伴つて這入つて來る。

アヒンサカは二十歳ぐらゐの美しい青年。夫人を見るとその足もとに平伏して恭しく敬禮する。

マヤ。よく入らつしつて下さいましたこと。あら、そんなになすつてはお話も何も出來ませんわ。お頭をお上げ下さいな。（しづかに男の手をとる）

アヒンサカは彼女の手を感ずると一層恐惶してあはたゞしく後ずさりする。

グプタ。アヒンサカ様。おらくになさいましよ。奥様は堅苦しいことはお嫌ひでいらつしやいますから。

アヒンサカ。は、はい。

グプタは次の間に下つて、茶菓やうのものを運んで來る。そして夫人にちよつと、耳打ちをすると邪魔にならないやうに退出する。

マヤ。あなた毎日何をしていらつしやいますの。

アヒンサカ。はい。

マヤ。お退屈でせう。あたくし退屈で退屈で困つてをりますわ。

アヒンサカ。わたくしはそれ程ではございません。

マヤ。さう。では法典を讀んだり、ヴエダを暗誦したりしていらつしやるのですか。

アヒンサカ。はい。

マヤ。でも、あんなこと隨分退屈ぢやありませんか。

アヒンサカ。しかしそれが私達の務めでございますから。

マヤ。いくら務めでも、あなたのやうなお若い方にはたまらないと思ひますわ。ほゝ、その上お留守居役ぢやなほたまりませんわね。

アヒンサカ。どういたしまして。

マヤ。　實は先生は外の人をといつたのですけれど、留守中は信賴の出來るお方でないと困りますから、あたくしからお願ひしてあなたに殘つていたゞくことにしましたの。ほんたうにご迷惑でしたわね。
アヒンサカ。（何かいはうとするがいへないで無言のまゝお辭儀する）
マヤ。　でもあたくし、あなたがゐて下さるので氣丈夫でございますわ。あの年寄の執事だけでは心細いんですもの。
アヒンサカ。　いゝえ、少しもお役に立ちませんで。
マヤ。　あら、そんなに一々お辭儀なんかしないで、もつとおくつろぎなさいましよ。
アヒンサカ。　は、はい。
マヤ。　本當に遠慮なんかぬきにして。
アヒンサカ。　お言葉ではございますが、先生の奧樣は、われ〳〵の奉ずる敎理では母上も同じことでございますから。
マヤ。　まあ、いやですこと。母上だなんて。あなたとわたくしとはたつた二つしか違はないんぢやありませんか。
アヒンサカ。　それはさうでございますが……
マヤ。　子供の時はよく一しよに遊びましたのね。その時分からあたくしはおいはいねで、あなたは弱虫でしたわね。ほゝゝ。
アヒンサカ。（無言）
マヤ。　あなた覺えてゐて。そらいつか二人で森へ遊びに行つた時、あたくしが木の枝をこすつて枯草に火をつけたらそれが急に一面に燃え廣がつて、大きな椰子の木や何かゞもり〳〵燃え出したのを。あなたはあの時聲を出して泣き出してしまひましたのね。
アヒンサカ。（もぢ〳〵しながら）あの、火急のご用と仰やいますのは。
マヤ。　まあ、そんなにせかなくつてもいゝぢやありませんか。

アヒンサカ。　はい。しかし夜が更けてまゐりますから。

マヤ。　かまひませんよ。あたくし同郷(くに)の人が一番懐しいんですの。ゆつくり子供の時の話でもしようぢやございませんか。

アヒンサカ。　はい、しかし……

マヤ。　しみ〴〵お話をしたいと思つてもつい折がありませんでしてね。あなたこちらに入らしつてからもうどの位になりますの。

アヒンサカ。　半年ほどになります。

マヤ。　あら、そんなに前から入らしつてたの、あたくしはつい此間からかとばかり思つてをりましたわ。

アヒンサカ。　さやうでございますか。

マヤ。　それならゐるつてことを、ちよつと知らして下さればようございましたのに。

アヒンサカ。　でも、そのやうなことは。

マヤ。　いゝぢやありませんか。ほゝ、あなたはいつになつてもはにかみやね。おや、　（ふとアヒンサカのかけてゐる念珠を見て）まあ、頼もしいこと。あなたまだこれをかけてゐて下すつたの。あら隠すことはありませんわ。これあたくしがこゝに來る前にお上げした念珠でせう。こんなに汚れてしまつたのに、よくかけてゐて下すつたのね。

アヒンサカ。　（無言）

マヤ。　今度いらつしやる時には新しいのをこしらへておいてあげますわ。

アヒンサカ。　いゝえ、私はこれで十分でございます。

マヤ。　あら、遠慮なんかして。そんなこといはないで、こしらへて下さいつていふものよ。

アヒンサカ。　（無言）

マヤ。　ほゝ、あなたは……

同。
アヒンサカ。　先生はどうして入らつしやるでせう。
マヤ。　何だつて急にそんな事を訊くんです。
アヒンサカ。　何つてことはありませんけれど……
マヤ。　旅ですもの何をしてをりますか……
アヒンサカ。　先生をそんな風にお考へになつては。
マヤ。　どうしてあなたは、そんなに先生のことばかり氣になさるの。
アヒンサカ。　いゝえ、あの……
マヤ。　大丈夫よ、そんなに心配しなくつたつて。
アヒンサカ。　奥様。
マヤ。　なに。
アヒンサカ。　いゝえ、何でもないんです。
マヤ。　あなたは人が惡いのね。
アヒンサカ。　いゝえ、私、そんな……
マヤ。　それなら今どうしたの。
アヒンサカ。　全く、何でもないのでございます。
マヤ。　まあ、をかしな人！
アヒンサカ。（無言）
マヤ。　ねえ、アヒンサカ樣。明日はご一しよに何處かへ遊山に參りませうか。あら、何をそんなにそは〳〵していらつしやるの。もつとおくつろぎなさいましといつたら。

アヒンサカ。　はい。

マヤ。　いやですね。何だつてさう外ばかり氣にして入らつしやるの。

アヒンサカ。　雨が落ちて來たやうでございますから。

マヤ。　さうを。――あら、ほんたうに。まあ、いゝ雨ですこと。アヒンサカ樣。菩提樹の葉を打つ雨の音つていゝものですわね。

アヒンサカ。　あの、奥樣、私、失禮をいたします。

マヤ。　歸るんですか。

アヒンサカ。　お急ぎのご用でございませんでしたら、お暇をいたゞきたうございます。

マヤ。　ぢや、またにいたしますわ。

アヒンサカ。　恐入ります。ではご免を蒙ります。

アヒンサカは悲しく禮をして歸りかける。しかし出口の戸を明けようとすると、どうしても明かないので、つい戸をがた〱させる。

マヤ。　どうしたんですの。

アヒンサカ。　ご免下さいまし、つい戸が明かなかつたものですから。

マヤ。　あら、締つてゐるんですか。どうしたんでせうね。グプタや、戸をおあけ。アヒンサカ樣がお歸りですよ。おや、誰もゐないのかしら。どこへ行つてしまつたんでせう。

アヒンサカはまた戸をがた〱やつて見る。

マヤは立つて戸のところに行く。

マヤ。　あなた鳥渡退いてご覧なさい。

アヒンサカ。　いゝえ、私がやります。奥樣を煩はしましては。

マヤ。　いゝから退いてご覧なさいつてば。

マヤはちよつと戸に觸つて見る。

マヤ。（笑ひながら）アヒンサカ樣。これではいくらやつたつて駄目ですわ。――あなた締め込まれてしまひましたのよ。

アヒンサカ。えゝ。

マヤ。ほんたうにお氣の毒さま。

アヒンサカ。奥樣、ご冗談はどうかお止め下さいまし。

マヤ。あたくし、何もしないぢやありませんか。

アヒンサカ。外の時と違つて、先生がお留守の際ではございますし……

マヤ。それだからどうしたの。

アヒンサカ。（眞面目に）奥樣！

マヤ。なに。――あら、こはい顔をして。あなたあなた、怒つてゐるんですか。え、もつと怒つて頂戴。あたくしあなたの怒つたところが見たいのよ。

アヒンサカ。私をお嬲りになるのでございますか。

マヤ。いゝえ、あたくしそれが好きなのよ。あなたが怒るとそりや初々しくつて、食付きたいほど可愛らしい人ですもの。いつか調弄つたら、あなたあたくしの頬を打つたことがあつたわね。さ、あの時のやうに頬を打つて頂戴。蚯蚓ばれのする程ぴいんと打つて頂戴。

アヒンサカ。（急に哀願するやうに）私は田舍から出て來たばかりの書生です。どうかこのまゝおかへし下さい。

マヤ。そんなことをいつたつて爲方がないぢやありませんか。あたくしが締めたわけぢやないんですもの。

アヒンサカ。どうかそんなことを仰やらないで……

マヤ。ほゝゝ。あなた、こはいんですか。こはいことなんか何にもありやしませんよ。誰もゐやしないんですか

ら……

アヒンサカ。　奥様、何を仰やるのでございます。

マヤ。　あなたは道徳堅固ね。さすがは先生のお弟子だけありますよ。

アヒサンカは夫人の言葉を聞かないやうにして、黙つたまゝ門の戸口に行つて、戸をあけやうとする。

マヤはしばらくの間ぢつとアヒンサカのすることを見てゐたが、突然冷かに

マヤ。　アヒンサカ様。

アヒンサカ。（無言）

マヤ。　あなたどうしても歸るんですか。

アヒンサカ。　どうかお暇を頂ひたうございます。

マヤ（むつとして）えゝお歸り、お歸りとも、嘘つき。畜生！

アヒンサカ。（驚いてマヤを見る）

マヤ。　何だつてそんな眼つきをするの。嘘つきぢやないか、大嘘つきぢやないか。意氣地なし！

アヒンサカ。（無言のまゝ首を垂れる）

マヤ。　おまへさんこゝへ何しに來たの。——先生のゐないことは分りきつた話ぢやないか。馬鹿！　ほんたうにおまへさんのやうな卑怯な男はありやしない。何故そんなしら／＼しい顔をしてゐるの。いくら聖者ぶつたつてあたしにはちやんと分つてゐるんですよ。

アヒンサカ。　奥様。

マヤ。　知りませんよ。おまへさんは恐いんでせう。恐いのにきまつてゐます。そりや婆羅門の妻と不義することは大罪の内の大罪だからね。さ、お逃げよ。早くお逃げといつたら。あゝ、こんなじれつたい人つてありやしない。

アヒンサカ。　奥様！

マヤ。あゝ、くやしい。あたくしこんな恥しい目にあつて！（わあつと泣き伏す）

アヒンサカ。奥様。（傍に寄る）

マヤ。うるさい。あゝ、あたくし見そくなつた。こんな人とは思はなかつた。（起き上りながらヒステリカルに着物をびり／＼と破る）

アヒンサカ。そんなことをなすつては。

マヤ。おまへの知つたことぢやない。お放し。あたしにこんな恥をかゝせるなんて。（と、また着物を裂く）

アヒンサカ。奥様。

マヤ。いゝからうつちやつといとくれ。

マヤはそこらの物を手當次第に壞はす。

アヒンサカ。どうなすつたのでございます。奥様。（また夫人に近づく）

マヤ。うるさい。お放しといつたら。

アヒンサカ。（夫人の腕にしがみついたまゝでゐる）

マヤ。放さないのかい。……何故放さないの。邪魔をすると承知しないよ。

マヤは振りもぎとつて戸口のとこに行く。

アヒンサカ。奥様。

マヤ。（戸を烈しく叩きながら）誰かゐないかい。誰か。

遠くで「はあい」といふ返事が聞える。

マヤ。こゝを明けとくれ。早く、早く、（と、一層烈しく叩く）

アヒンサカ。奥様。

マヤ。お退きといつたら。（突き放す）

やがて外から戸が左右に開く。

マヤ。（アヒサンカを眼下に見下しながら）　さ、戸が明きましたよ。お歸り。早くお歸んなさいといつたら。

アヒンサカ。（無言、うづくまつたまゝでゐる）

マヤ。何故逃げないの。戸を明けてやつたんだから早く逃げたらいゝぢやないか。

アヒンサカ。（無言）

マヤ。煮えきらない人ね。こんなところにゐると立派なおまへさんに傷がつきますよ。早くお歸りといつたら。

アヒンサカ。奥様。

マヤ。知りません。

マヤはグプタが入口のところに立つてゐるのを見ると、いきなりグプタの體に抱きついてわあつと泣出す。

グプタ。（びつくりして）　まあ、奥樣。どうなすつたのでございます。

マヤ。（抱きついたまゝ泣いてゐる）

グプタ。ほんたうに、どうなさいましたのでございます。

マヤ。あたくし、あたくし……

グプタ。まあ、そんなにお泣き遊ばしましては。

マヤ。あたくし……悔しい……

グプタ。（けげんさうにアヒンサカを見て）　アヒンサカ様。これは一體……

アヒンサカ。は、はい。それは何でございます。………

マヤ。（泣きながら）　駄目、駄目。その人のいふことなんか聞いたつて駄目。

グプタ。けれども奥様……

マヤ。（怒りつけるやうに）　やかましいといつたら。

間。

グプタ。　まあ、お部屋がこんなに散かつて…………

マヤ。（悲しさうに破れた着物を見せながら）グプタや、あたくし、こんなに、こんなにされたんだよ。

アヒンサカ。　まあ、奥様、何を仰やるのでございます……

マヤ。　さうぢやないか。さうぢやないか。おまへさんがかうしたんぢやないか。

アヒンサカ。　とんでもない。外のことゝは違ひます。奥様、そんな……

マヤ。　お默り、お默り。今になつて何をいふの。――あゝ、あたくし悔しい――グプタや、すぐに執事を呼んでおいで。

グプタ。（少し驚いて）執事さんでございますか。

マヤ。　何をしてゐるの。はやく呼んでおいでといつたら。

グプタ。　はい、（早足に去る）

マヤはなほ泣きつゞけてゐる。

幕

第二幕

かなり散頽してゐる物置のやうな石窟の内部

天井が低くつて、部屋は餘り大きくない。正面に入口があるが、入口のところからしばらくの間は壁が狭つてゐる。入口には木造の戸ががつしり締つてゐる。

第一幕より數日後。夜。

アヒサンカは坐つたまゝぐつたりと部屋の柱に倚りかゝつてゐる。と、片隅においてあるがらくた物の間からナラダがそつと首を出してあたりをうかがふ。併しアヒサンカはその物音に氣がつかないのか、或は氣がついても動くのが面倒なのか、首を上げようともしない。

ナラダは盜足をし乍らアヒサンカの所に行つて小聲に呼ぶ。

ナラダ。　おい。

アヒンサカ。　（やうやく首を上げる）

ナラダは默つてアヒサンカの手を引張る。

アヒンサカ。　何をするのだ。

ナラダ。　しつ。（小聲に）いゝから俺と一しよに來い。

アヒサンカ。　君はナダラぢやないか。

ナダラ。　さうだ。

アヒサンカ。　どうしてこゝへやつて來たのだ。

ナラダ。　そんなことはどうだつていゝ。おい、早く逃げるんだ。（アヒサンカの手を引張る）

しかしアヒサンカは動かうともしない。

ナラダ。　おい、どうしたのだ。

アヒンサカ。　（無言）

ナラダ。　歩けないのか。

アヒンサカ。　（默つて首を振る）

ナラダ。　それなら直ぐに逃げようぢやないか。

アヒンサカ。　（無言のまゝ動かない）

ナラダ。　何だってそんなにぐづ〳〵してゐるのだ。
アヒンサカ。　駄目だ。
ナラダ。　何が駄目なのだ。
アヒンサカ。　（絶望的に）　どうかこのまゝにしておいてくれ。
ナラダ。　おい、何をいってゐるのだ。ちやんと手筈がしてあるんだから、君さへこゝを拔け出りや……
アヒンサカ。　しかし……
ナダラ。　そんなことをいつてゐたら、君はひどい刑罰をうけなくつちやならないぢやないか。
アヒンサカ。　（無言）
ナラダ。　罪もないのにそんなものを受けるやつがあるか。君が餘り氣の毒だからそれで俺はやつて來たのだ。
アヒンサカ。　有難う。何とお禮をいつていゝか分らない。しかしおれには罪があるんだ。
ナラダ。　つまらないことはいふな。大體のことは俺だつて知つてゐるのだ。
アヒンサカ。　（無言）
ナラダ。　さあ、早く逃げよう。
アヒンサカ。　駄目だ。おれは卑しい人間なんだ。
ナラダ。　おい、君はどうかしてゐるのかい。
アヒンサカ。　そんなことはない。
ナラダ。　だつて君は昨日先生の前で調べられた時、奥さんの言葉を一つ〳〵是認したといふぢやないか。
アヒンサカ。　うむ。
ナラダ。　何故そんなことをするのだ。何故奥さんが誘惑したのだと、本當のことをいはないのだ。
アヒンサカ。　いや、奥さんのいふ方が本當なのだ。

ナラダ。　君は何をいつてゐるのだ。出鱈目のことをいはれて、罪に落されてゐながら、それでもまだそんなことをいつてゐるのか。

アヒンサカ。　事實なんだから爲方がない。

ナラダ。（突然友の手をとつて）おい、アヒンサカ。君は實に見上げた男だな。

アヒンサカ。（びつくりしてナラダを見る）

ナラダ。　いや、君は罪をひつかぶらうといふんだらう。奥さんに道ならぬことがあつたといつては、奥さんばかりかひいては先生のお名前にもかゝはることだから、何もかも自分に引受けてしまつて、世間には口をつぐもうといふんだらう。

アヒンサカ。　そんなことはない。

ナラダ。　いや、如何にも君の考へさうなことだ。しかし君がさういふ心なら、なほさら俺は救ひ出さなくつちやならない。

アヒンサカ。　君は買被つてゐる。おれは決してそんな高潔な男ぢやない。

ナラダ。　ぢや一體どういふのだ。

アヒンサカ。　どうか何にも訊かないでくれ。

ナラダ。　おい、アヒンサカ。俺だよ。この俺に何も隠すことはないぢやないか。何故打明けた話をしないのだ。

アヒンサカ。　濟まない。本當に君の親切を無にして……

ナラダ。　君はまさか奥さんを思つてゐるのぢやあるまいな。

アヒンサカ。（少しあはてゝ）いゝや、そんなことはない。

ナラダ。　さうだらう。あんな淫蕩な夫人に君が惚れる筈はないからな。

アヒンサカ。（無言）

ナラダ。　そんなら何も奥さんをかばつてやることはないぢやないか。第一あの女は、そんなことをしてやつたつてちつとも有難いとは思ひやしないよ。

アヒンサカ。　（そつと涙をふく）

ナラダ。　おい、どうしたのだ。

アヒンサカ。　いや、何でもない。――

ナラダ。　僕はね、此機會に是非奥さんをやつつけたいのだ。先生を誑するのはあの夫人だからね。一體奥さんはどんなことをしたんだ。まづそれを聞かせてくれないか。確證を握つてやつつけさへすりや……

アヒンサカ。　止せ。そんなことをしたつて……

ナラダ。　いや、これは君一人の問題ぢやない。實はね、今までもこの手で二三人やられてゐるんだ。このまゝにしておいたらどんなことになるかしれやしない。

アヒンサカ。　けれど……

ナラダ。　君は何故さう止めるのだ。

アヒンサカ。　君がいくらやつきとなつたつて駄目だからさ。

ナラダ。　どうして。

アヒンサカ。　さうぢやないか。どんなに君がいゝたつて取上げられる筈はありやしないよ。相手は先生の夫人ぢやないか。弟子が百人かゝつたつて奥さんの一言にはかなひやしないよ。その上奥さんはあの通り口が達者だし、何といつたところでみんな言ひくるめられてしまふにきまつてゐるぢやないか。

ナラダ。　ぢや君が爭はないのはそれなんだね。

アヒンサカ。　（無言）

ナラダ。　しかしこのまゝぢや……

アヒンサカ。いや、もう何にもいはないでくれ。――だが、どうしてわたしを直ぐ所刑しないんだらう。もう先生も歸つて來たんだし、昨日調べも濟んだのだがね。

ナラダ。それはわれ〳〵には分らない。

アヒンサカ。餓死させようといふのかしら。昨夜からこゝへ移すと同時に食事を運ばなくなつてしまつたのだ。

ナラダ。食事を運ばない。

アヒンサカ。うむ。こんなことをされるよりは、いつそ一おもひに殺して貰つた方が増しなんだが

ナラダ。馬鹿なことをいへ。君を殺したくないばかりにおれはかうして來てゐるのではないか。

アヒンサカ。いや、殺されるのが當然なんだ。おれは實に卑しい人間なんだ。

ナラダ。何故君はそんなことばかりいつてゐるのだ。

アヒンサカ。(わあつと泣き出す)

ナラダ。おい、どうしたのだ。

アヒンサカ。さつきはいゝ鹽梅の返事をしたけれど、實はおれは奥さんのことをおもつてゐるのだ。

ナラダ。何だつて。

アヒンサカ。この間奥さんに烈しくやり込められた時から、おれは深くおもひ込むやうになつてしまつたのだ。

ナラダ。そんなことがあるものか。信仰の堅い君に限つて。

アヒンサカ。いゝえ、お恥しいがさうなんだ。自分ぢやはつきり氣がつかないでゐたが――さうだ。今おもふと、おれは故鄕にゐた時分から奥さんの魅力にかゝつてゐたらしい。おれがこゝへやつて來たのだつて、先生の名聲を慕つて來たのだか、奥さんがゐたから來たのだか分りやしない。

ナラダ。えつ。

アヒンサカ。それでなくつちや、いくら呼びに來られたつて夜、しかも先生の留守に、奥さんの部屋に行くなんて

ことがあるものか。おれは實に恥知らずだ。

ナラダ。　すると奥さんが最初君を呼びに寄こしたんだね。

アヒンサカ。　いや、奥さんには罪はない。おれが惡いんだ。おれが惡いんだ。（發作的に泣く）

ナラダ。　だつて君は何も道ならぬことをした譯ぢやないんだらう。

アヒンサカ。　いや、さう思つてくれ。さう思つてくれ。おれにみだらな考にとりまかれてゐるのだ。梵天を穢したのはおれだ。教へを破つたのはおれだ。おれはどんなに罰せられたつて飽足りない男なんだ。

ナラダ。　君はひどく興奮してゐるね。そんなに自分を責めることはないぢやないか。君が考へてゐる位のことは……

アヒンサカ。　いや、甘い言葉なんかかけないで、どうか酷く取扱つてくれ。その方がおれは助かるんだ。この、この肉體が寸斷されるか、火炙にでもされない限り、おれの罪は亡びやしない。

ナラダ。　そりや教壇の上からいへば邪淫の心は罪惡だ。しかし君は少し大げさに考へ過ぎてゐる。そんなに自分で自分を苦しめなくつたつていゝぢやないか。

アヒ　サカ。　そんなことはない。そんなことはない。――おいナラダ。おれを蹴飛ばしてくれ。おれの手足をずた〳〵に引千切つてくれ。おれは人非人なんだ。人非人…

ナラダ。　アヒンサカ。おい、氣をおちつけないか。

アヒンサカ。　どうかひどい目にあはせてくれ。おれの此體をぎり〳〵にふん縛つて……

ナラダ。　何をつまらないことをいつてゐるのだ。いゝからおれと一しよに來い。

アヒンサカ。　駄目だ。駄目だ。

ナラダ。　おい、アヒンサカ。こゝに拔穴があるんだ。狹いけれど、どうにかくゞれないことはない。さあ、行かう。

アヒンサカ。　放つといてくれ、放つといてくれ　おれは救ひ出されるやうな人間ぢ　ない。

ナラダ。　そんな大きい聲をして。番人に聞えたらどうする。さあ。（と、なだめるやうにアヒンサカの手をとる）

アヒンサカ。　駄目だ。駄目だ。放してくれ。放してくれ。

ナラダ。　君は奥さんに會つてからすつかりどうかしてしまつたね。

アヒンサカ。　どうなつたつてい丶。どうしたつてい丶。おれは奥さんのために死ぬんなら本望なんだ。

ナラダは急にアヒンサカの手を放す。

アヒンサカ。　（泣き乍ら）　おれは、おれは人でなしだ。うつちやつといてくれ。うつちやつといてくれ。

ナラダ怨めしさうに去る。

アヒンサカはナラダが去ると、地上に突伏して烈しく泣き出す。そしてしばらくの間泣き續けてゐる。と、戸口のところで人聲がする。

番人の聲。　い丶え、いけません。いけません。

グプタの聲。　い丶からお明けなさいといつたら。外のお方ぢやなんですから。

番人の聲。　い丶え、どなたでもお入れすることは出來ません。

マヤの聲。　グプタおどき。――おまへは意固地な人ね。あたくしが分らないのかい。

番人の聲　（急に調子を變へて）　は、これはどうも。

やがて入口の戸が明いてマヤとグプタが這入つて來る。グプタは先きに立つて明を持つてゐる。

グプタ。　（アヒンサカのそばに寄つて）　アヒンサカ様。アヒンサカ様。

アヒンサカ。　（突伏したま丶でゐる）

グプタ。　奥様がおいでゞす。奥様が。

アヒンサカ。　（無言）

マヤ。　アヒンサカ様。

アヒンサカ。　（無言のま丶首を上げる）

マヤ。　あたくしですよ。分りますか。

アヒンサカ。（驚く）

マヤ。　まら、そんなに驚くことはありませんわ。あたくしお禮に來ましたのよ。

アヒンサカ。（けげんさうにマヤを見る）

マヤ。　アヒンサカ樣。有難う。あたくしあなたのお蔭でほんたうに助かりましたわ。――ですが、あなたどうして先生の前に出たとき本當のことを仰やらなかつたの。あたくしは無論あの晩のことを何もかも喋られること丶思つて實は、はら／＼してゐたんですよ。ところがあなたはあたくしの悪いことを一言もいはないんですもの――本當に何とお禮をいつていゝか分りませんわ。

アヒンサカ。（無言）

マヤ。　あなたあたくしのことを怨んでゐないんですか。あんな作りごとをいつたんですのに。本當に濟みませんでしたわね。お詫びの申樣もありませんわ。――まあ、おやつれになつたこと。無理もありませんわね。こんなところに入れられてゐるんですもの。それにもう食事も運んで來ないんですつてね。隨分お苦しいでせう。お察ししますわ。あの、あたくし少し蜜を持つて來たんですけれど　お上りになりませんか。

アヒンサカ。（無言のまゝ首を振り）

マヤ。　お上りになりませんの。――力がつくんですよ――

アヒンサカ。（無言）

マヤ。　あら、こはいんですか。そんなことはありませんよ。あたくし今夜はほんたうに濟まないと思つてお詫びに來たんですから。――まあ、涙なんか流して。どうしたんですの。（しづかに涙をふいてやる）

アヒンサカ。（無言のまゝ婦人の手を拂ふ）

マヤ。　あなた怒つてゐるんですか。

アヒンサカ。（せつなさうに）どうか歸つて下さい。歸つて下さい。

マヤ。　さう仰やられても仕方がありませんわ。あたくしが[illegible]いんですもの。けれどかうしてお詫びに來てゐるんですから、ね、アヒンサカ様…………

アヒンサカ。　そ、そんなお詫びだなんて…………

マヤ。　いゝえ、あたくしあなたに宥していたゞかないと、苦しくつて、苦しくつてたまらないんです。

アヒンサカ。　そんなことはありません。私は罰せられるのが當然なんです。私は、私は……罪障の深い人間なんですから。

マヤ。　罪障が深いなんて仰やられると、あたくしなほ耻しくなつてしまひますわ。あなたをこんなに陷れたのはあたくしなんですもの。ですからせめてどうか……

アヒンサカ。　いゝえ、私になんかかまはないで下さい。私になんか……

マヤ。　ご遠慮なさることはないぢやありませんか　何にも上らなかつたらお疲れになりますわ。――あのね、アヒンサカ様。こゝへは穢しくつて何にも持ち込むことが出來ませんから、あたくし、體へ蜜を塗つて來ましたの。（ふくよかな美しい腕をアヒンサカの前に差し延べながら）お舐んなさらない。

アヒンサカ。（無言）

マヤ。　あら、考へてなんかゐないで……かまはないんですよ。……お舐んなさいましといつたら（強いて腕をアヒンサカの口の前に持つて行く）

間。

アヒンサカ。（無言のまゝ、盗むやうにそつと夫人の腕に口を當てる）

マヤ。　甘いでせう。いゝからもつと／＼お舐んなさいな。

アヒンサカ。（餓鬼のやうに蜜をすゝる）

マヤ。　アヒンサカ様。この間はどうしてあんなに頑固だつたの。……ほゝ、いくらか元氣づいたでせう。……年上の人のいふことは聽くものよ。

間。

マヤ。　何をするの。（突然腕を引込める）

アヒンサカ。（またマヤにすがらうとする）

マヤ。　いけませんといつたら。失禮なことをすると承知しませんよ。（アヒンサカを突放す）

アヒンサカよろ／＼となつて力なく倒れる。

マヤは入口の方に立つてゐるダプタと顔を見合せてにつこりする。

マヤ。　あなたは今日はどうしたの。氣でも狂つたのですか。

アヒンサカ。（力なく）濟みません。濟みません。

マヤ。　あたくしはマニバダラの妻です。滅多なことをすると赦しませんよ。

アヒンサカ。（急に大聲をあげて泣き伏す）

マヤ。　何を泣いてゐるの。あなたは本當に變な人ね。

間。

アヒンサカ。（苦しさうに）奥樣。どうか歸つて下さい。早く歸つて下さい。

マヤ。　え、そりや仰やられなくつても歸りますわ。あたくしのやうなものが長居をしてはご迷惑でせうから、

アヒンサカ。（くやしさうに）奥樣。

マヤ。　なに。

アヒンサカ。　あなたは私をお嬲りにおいでになつたのでせう。

マヤ。　まあ、あなたは何をいつてゐるの。あたくしはさつきからお禮に來たのだと申してゐるではありませんか。

アヒンサカ。いゝえ、嘘です。私、ぢらしに來たのです。私をいら／＼させて、私、苦しむのを見てお喜びにならうつてんです。

マヤ。あなたは疑い深いのね。どうしてそんな風に考へるんです。

アヒンサカ。いや、そんなことはどうだつてようござんす。いゝから、すぐに、すぐに歸つて下さい。」

マヤ。お邪魔をしましたこと。では、アヒンサカ様。さやうなら。

マヤが歸らうとすると、アヒンサカは急に夫人の手を捕へる。

マヤ。あら、あなたまた何をなさるの。

アヒンサカ。待つて、待つて下さい。

マヤ。どうしようつてんです。あなたは道にはづれたことをなさるお方ぢやありませんわね。

アヒンサカ。奥様。私はもう殺される體なんです。ですからどうか……

マヤ。いけません。グプタが見てゐるぢやありませんか。今度こそあなたの方が惡いのよ。今度はちやんと證人がゐるんですから 先生に申上げるにしたつて……

アヒンサカ。奥様、どうしてあなたは……

マヤ。あたくしは女　道を守るだけよ。

アヒンサカ。それではあんまりです。あんまりです。さん／＼人をぢらしておきながら……

マヤ。あら、どうしようつてんです。お放しなさいといつたら。放さないんですか。無體なことをすると番人を呼びますよ。

アヒンサカ。もうどうなつたつて……

アヒンサカは夫人を押倒さうとすると、グプタが急に走り寄つて、アヒンサカを突き離す。

マヤ。まあ、何てことをするんでせう。むつつりした人が一番こはいのね。（グプタと顔を見合せる）

アヒンサカは突離されたまゝ倒れてゐる。

マヤ。（冷かに）アヒンサカ様。あなたあたくしのことをそれ程おもつてゐて下さるのなら。何故この間お呼びした時……

アヒンサカ。あの時は……あの時は……（泣く）

マヤ。ひとが首尾してやつた時はあたくしにさんさん耻をかゝせておきながら、今になつてそんなことをいつたつて……

アヒンサカ。あの時は私が弱かつたのです。しかしもう生命がないと思ふやうになつたら……

マヤ。いやです。いやです。何といつたつていやです。かうなればあたくしも意地ですわ。あなたが剛情だつたんですから、あたくしも剛情を張り通しますわ。

アヒンサカ。（なほすがらうとする）

マヤ。（つき放して）何をするんです。いやだといふと、なほしつこくするのね。

間。

マヤ。アヒンサカ様。あたくしはあなたを罪に陥した女なんですよ。それだのにあなたはどうしてそんなに夢中になるんです。

アヒンサカ。いゝえ、そんなにして下すつたからこそ、私はなほ〱忘れられないのです。

マヤ。まあ、をかしいのね。

アヒンサカ。この間の晩、奥さんがお怒りになつた時　あの時はじめて、私は本當に嬉しいと思つたのです。

マヤ。何ですつて。

アヒンサカ。　奥さんがあんなにお怒りになつたのは、本氣だからです。本氣でなくつては、とてもあんなにお怒りになる筈がありません。あの時奥樣があんまり眞劍だつたので、私は思はず自分が恥しくなりました。あの前までは調弄はれてゐるのか、嬲られてゐるのか分らなかつたから、實は何にも申上げませんでしたが………

マヤ。　駄目です。そんな當推量なんかいつたつて駄目です。あたくしあなたのことなんかちつとも思つてゐるものですか。

アヒンサカ。　奥樣何故お隱しになるんです。奥樣のお心の中は………

マヤ。　お默んなさい。そんな出まかせなことをいつて。

アヒンサカ。　ぢやあれも冗談だつたのですか。

マヤ。　そんなことはどうだつていゝぢやありませんか。それよりもあなたが眞劍ぢやないからいけないんです。

アヒンサカ。　だからこんなに申してゐるではありませんか。

マヤ。　あなたはあたくしを思つてゐるといふんですか。それなら何故あたくしを憎まないの。ほんたうに思つてゐるのだつたら、相手が反いたら憎んで〳〵憎み通すのが當りまへよ。ところがあなたはあたくしをぐい〳〵やり込めないで、有難くもない好意なんか見せようとするから氣に入らないんです。

アヒンサカ。　いゝえ、あれはそんなつもりぢや………

マヤ。　駄目よ、駄目よ。あなたはいつだつて、煮えきらないんだから。

アヒンサカ。　いゝえ、もうあんなことはありません。あんなことは………

マヤ。　危いものよ。

アヒンサカ。　本當です、奥樣。もうかうなれば人間は強いものです。私は奥樣のためならどんなことでもいたします。

マヤ。　まあ、あなた口がお上手ね。

アヒンサカ。　奥様、どうか私を不便だと思つて下さい。

マヤ。　あなたたうとう降参したの。

アヒンサカ。　(首を垂れる)

マヤ。　ぢやあたくしのためならどんなことでもする。

アヒンサカ。　え、どんなことでも。

マヤ。　しかしね、あなたぢや……

アヒンサカ。　もう決してそんなことはありません。

マヤ。　それではあたくしに指鬘を作つて下さらない。

アヒサンカ。　指鬘と仰やりますと。

マヤ。　指の華鬘よ。人間の指を斬つて頸飾を作つて戴きたいの。

アヒンサカ。　では、人を斬るのでございますか。

マヤ。　さゝれ、駄目でせう、あなたにはとても出來やしませんよ。

アヒンサカ。　しかしいくら何でもそれは……

マヤ。　道にはづれたことだといふのですか。それなら何故あなたは人妻に戀慕するのです。人妻に戀することは道にはづれてはゐないんですか。

アヒンサカ。　(無言)

マヤ。　だからあたくし、お止しなさいつて、さつきから申してをりますのよ。こんなこと無理にして貰ひたいわけぢやないんですから。

アヒンサカ。　(決然と)　私、やります。

マヤ。　いゝえ、お止しなさいよ。何にもならないことなんですもの。

アヒンサカ。　いゝえ、どうかやらせて下さい。

マヤ。　だつてあなたに出來ますか。

アヒンサカ。　出來ます。

マヤ。　ほんたうに。

アヒンサカ。　きつとやります。

マヤ。　ぢや、一人の人から指を一本づゝ百本とつて來て下さい。

アヒンサカ。　百人斬るんですか。

マヤ。　あたくしの體は百人の生命ぐらゐの直打はあるでせう。

アヒンサカ。　え、ようごさんす。やりませう。

マヤ。　それをとつて來て下すつたら、あたくしあなたのいふ通りになりますわ。

アヒンサカ。　しかしこのまゝでは。

マヤ。　劍ですか。そんなものはわけはありませんわ。——グプタ、ちよつと番人をお呼び。

グプタ戸口のところに行つて行つて番人を呼ぶ。

番人が這入つて來る。

番人。　何かご用でございますか。

マヤ。　あ、あの、おまへそこに下げてゐる劍をお貸し。

番人。　これでございますか。

マヤ。　あゝ。

番人。　お言葉ではございますが、外のものと違ひまして、これは…………

マヤ。　おまへは何でも「はい」といふ返事が出來ないのね。

番人。　いゝえ、さういふわけではございませんが、これだけはどうも…………

アヒンサカは矢庭に劍を奪つて、その場に番人を斬り倒す。

マヤ。　まあ、あなたは思つたよりも强いのね。さ、指をお落しなさい。

アヒサンカ番人の指を斬る。

マヤ。　（頸飾をはづして、ある程の寶玉をばら〳〵と落してしまひ、白金の紐だけ渡す）これにお通しなさい。

アヒンサカ無言のまゝいはれる通りにする。そして指を通した紐を自分の頸にかける。

マヤ。　あと九十九本よ。

アヒンサカ。　あと九十九本。

アヒンサカは血刀を下げたまゝ、蹌踉として木戸を明けて外へ出て行く。

——幕——

第三幕

舍衞城附近の閼梨加林。

林の中を街道が通つてゐる。道は正面の中央から眞直ぐにずつと奥へ走つてゐるが、可成り先のところで右にうねつてゐる。道の兩側は足も踏込めないほどいつぱいの立木と雜草。道ばたに死體が二つ三つ轉がつてゐる。

アヒンサカも死骸の間に突つ伏したまゝ倒れてゐる。

第二幕の翌朝。未明。梢の方はいくらか白みかけてゐるが、地上はまだ眞つ暗である。

アヒンサカ。　うゝん。うゝん（倒れたまゝ呻いてゐる）

黒い鳥が一羽、ものに驚いたやうに突然叢の間からばた〳〵と飛び立つ、

アヒンサカ。　うむん。うむん。

アヒンサカはなほしばらく唸つてゐたが、急にむつくりと起き上る。血の氣の失せた蒼白い顔は、この世の人とは思はれない行相。頸には人間の指を何本も通した白金の紐をかけてゐる。

彼は起き上つたけれど、何をするために起き上つたのかどわすれをしてしまつて、しばらくの間は血刀を下げたまゝふら〳〵としてゐる。

突然、薄明のうちに椰子の實を見つけると、「これだ」といはぬばかりにその方に飛んで行つて、いきなり刀でそれを切り落す。

アヒンサカは果實を半分に割つて、その汁をだく〳〵と飲みはじめたが、ふとまた何かを思ひ出したらしく、急いで椰子の實をてゝしまう。

それから彼は身をこゞめて、恐る〳〵頸にかけてゐる指鬘に手を觸れる。そして切り取つた指を一本〳〵數へはじめる。

アヒンサカ。（口の中でそつと）一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、九つ…………………………これつきりかしら。

彼は寂しいやうな、もの足りないやうな氣持がすると、まう一度、前よりもずつとゆつくり數へ直す。

アヒンサカ。　一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、九つ…………（ためいきをつく）

無言のまゝ彼はなほしばらくの間指鬘をいぢくつてゐる。そのうちに血みどころな人間の指なんか持つてゐるのに堪へなくなつて、頸からはづすや否や。

アヒンサカ。　えゝ、こんなもの

と、いきなり地上にたゝきつけようとしたが、思切つてさうするだけの勇氣もなく、手頸にかけたまゝまた暫く眺めてゐる。

アヒンサカ。　あゝ。駄目だ。

つひに力なく地上つに倒れてしまう。

彼はながいこと倒れてゐたが、またむく〳〵と起き上る。そして手から滑り落ちた指鬘を拾つて、大事さうに頸にかける。

やがて彼は決するところあるものの如く勢よく出掛けようとすると、ふと何か耳にはいつたので、街道に横倒になつて耳を地に押しつける。それから黙たまゝ、薄明の往來の先をぢつと見つめてゐたが、そつと森の中へ這入つて木の蔭に隱れる。

年老いた比丘が街道を一人しづかにこつちへ歩いて來る。

アヒンサカは比丘を遣り過すと、いきなりうしろから斬りつける。

しかし彼は飛び出す拍子に死骸に躓いたので、あべこべに自分の方が倒れてしまふ。

老比丘は振りむきもせずに歩いて行く。

アヒンサカ。（起き上りながら）待て。

老比丘。　わたしですか。

老比丘が立止まると、アヒンサカはものもいはず斬りつける。

併しまた斬り損ふ。

老比丘。　あなたは自分を斬つてゐるのですよ。

アヒンサカ。　なに。（ちよつとたじ〳〵としたが、氣を取り直して）生意氣なことをいふな。

また斬り込んで行つたがまた失敗する。

彼はなほ幾度か斬らうとするけれど、どうしても斬れないので

アヒンサカ。　畜生　畜生。畜生。

と、叫びながら、持つて行きどころのない鬱憤を急に傍の木に向ける。そして木の枝や雜草を滅茶滅茶に切り飛ばす。

しかし切つても切つても心が癒えないので

アヒンサカ。　駄目だ。

と、突然地に突つ伏して「わあ」と大聲に泣き出す。

老比丘。　どうしたのです。

アヒンサカ。（たゞ泣きつゞけてゐる。）

老比丘。（アヒンサカに近づいて）どうしました。

アヒンサカ。（なほ泣いてゐる）

老比丘。　氣を落つけなさい。

老比丘が抱き起してやらうとすると、アヒンサカは急に猛然として立ち上つて、老比丘を突き離す。

アヒンサカ。　駄目だ。助けてくれ。

かう大聲に叫んで、血刀を振り廻しながら道のない森の中へ逸散に駈け込む。そして叢の中を轉びつ、起きつ、なほ「駄目だ。助けてくれ。」と、泣き叫びながら、どん／＼奥の方へ這入つて行つてしまふ。

老比丘はアヒンサカの後姿をぢつと見送りながら無言のまゝ合掌する。

そこへ若い比丘が街道を走つて來る。

若い比丘。　あ、こちらでしたか。

老比丘。　おまへ來たのか。

若い比丘。　はい。

老比丘。　心配することはない。心配することはない。

若い比丘。　いま向ふへ駈けて行つたのは、あの人殺しの奴ではございませんか。

老比丘。　さうだ。

若い比丘。　お怪我はなさいませんでしたか。

老比丘。（無言のまゝに首を振る）

若い比丘。　助けてくれ、助けてくれと申してをつたやうでございますな。

老比丘。　うム。

若い比丘。　どうしてあんなことをいつてゐたのでせう。

老比丘。（無言）

若い比丘。　ずう〳〵しい奴ですな。人を殺しておきながら助けてくれなんて。

老比丘。（厳に）　ナンダ。

若い比丘。　はい。

老比丘。（默つてアヒサンカの走つて行つた方を指す）

若い比丘。（その方を見る）

アヒサンカの聲が仄かにとぎれ〳〵に聞えて來る。

二人しばらく無言のまま立つてゐる。

若い比丘。（しづかに首を垂れる）

老比丘。　あはれはおまへですよ。

若い比丘。（身にしみて）　はい。

間。だん〳〵夜が明けて來る。

老比丘。　そこに人が倒れてゐるやうではないか。

若い比丘は死骸の傍に走つて行く。

若い比丘。　もう冷たくなつてをります。

老比丘。　さうか。葬つてやらう。

若い比丘。　はい。——あ、こちらにも倒れてをります。

老比丘、　ではいつしよに供養してやらう。

若い比丘。　はい。

二人して死骸を殿の中に葬つてやる。そしてしづかに合掌する。

遠くから、「助けてくれ、助けてくれ」といふアヒンサカの悲痛な叫びがなほ幽かに、切れ〳〵に響いて來る。

と、朝日の爽な光が密林の間を洩れて流れ込む。

――幕――

第一部　終

編輯だより

◇本社招聘にて來朝するアインスタイン教授はいよ〳〵十一月八日マルセイユ發の北野丸に便乘十一月十六日神戸港に決定した。定めし本年末の我國學界を賑はすことであらう。

◇新聞界の面汚し、正義と權威を無視して惡勢力の扶殖を計つた劣等人格者ノースクリフ死す、死は悲しい、しかしタイムスが墮落したのは彼のためであつた、四十六人の愛妾に守られつゝ死んだ彼は彼としての相當の死であつたらう。

◇後藤は外調を辭した、閣上に内 があつてはならぬ、責任逃避の外調は責任内閣にはあり得べからざるもの、加藤友三郎は軍人上りで責任を知るものならば外調は直ぐ廢止せ。

◇友三郎は地力と風貌とに於て權兵衛に劣る、マツ原敬の貧弱なところだ、この人が、この空疎の思想人が思想的に動きつゝ世界の國々の宰相としてどうして仕事が出來やう、高く見積つて海軍次官格だ、しかしそれでも達磨よりいゝ、ましだ、達磨の價は幾何ぞ!

◇信州へ夏期講演へ行つた賀川氏は、出張先で勞働代々に選ばれたが辭退した、そして常念山脈から「全世界ひろしと云へどもアルプスの、峰より見ればいと狹きかな」の一首を編輯子へ。

◇哲學界の一大權威西田幾多郎氏の講演は聽講者四百名を突破し、そして講堂滿員にて其以上は謝絶した、聽講者中に百名の女子があつたこと、佐々木惣一氏始め博士、教授連の多かつたのは流石に今夏講演中の權威として恥ぢないものであつた、だが西田氏の二令孃が病んで數日、今に輕快せざるは痛心に堪えない。一日も早く全快あることを祈る。

◇エスペラント講座に對する歡迎は實に素破らしいものである、毎日〳〵數十通の質問とか、投書とが來る、我社はかく大反響のあつたことを喜んでおる。そして毎月讀者の期待に背かざるやう努力する。アア遂に時代は來たのだ。

◇アントノフはチタ及モスコー代表の瀬踏として來朝した、樺太の半分も讓與し、その他大抵讓歩する意嚮らしい、しかし金を貸してくれとの一項があるには霞ケ關の頭腦もの。

◇片山潜氏は勞農政府顧問格で目下チタにあり、大庭柯公も露都で無事なさうな、和田徳三氏は講演のため上海、青島に出掛ケて十月十日頃歸京する。河上肇氏は山口に、厨川白村氏は別府の講演に。末弘嚴太郎氏は輕井澤の講演に。

◇協調會から勞働者代表が選ばれたのは流石に日本だ、流石に日本の勞働者の雅量は豪い、資本家の手先に從事しつゝある川合、田澤を勞働者の代表に選ぶ大雅量は全く世界的誇りだ。アア。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八十錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	郵稅共不要
壹ケ年	拾壹圓廿錢	郵稅共不要

注文の注意

本誌一頁廣告料	
一等	百圓
二等	七拾圓

⦿本社廣告取次所　博文館弘告舍　日本電報通信社

◇增大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す

◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は壹部郵稅貳拾四錢を申受く(但し支那を除く)

◇見本は發送せず
◇郵稅切手代用は壹割增のこと
◇拂込みは振替によるるが最も便利なり

大正拾壹年八月廿日印刷納本
大正拾壹年九月一日發行

九月特大號 壹圓五拾錢

編輯兼發行者 印刷者　東京市芝區伊皿子町四十番地　平田貫一郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿七番地　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下町一ノ一　改造社
電話芝(長)一六三八　芝二八五四　芝四三〇三
振替東京八四〇二

露西亞饑饉への寄附金

（本社取次前衛社へ）

圓
一、〇〇〇 橋本三郎（新潟）
五、〇〇〇 和氣濟寶石井十次水戸修犬覺不殺（岡山）
一、〇〇〇 藤本重助（兵庫）
一、〇〇〇 田村清吉（群馬）
一、〇〇〇 室中治夫（京都）
一、〇〇〇 井用諒（武藏）
三、〇〇〇 秋山（栃木）
一、〇〇〇 波多野潔（靜岡）
一〇、〇〇〇 三野セツ（天津）
一、〇二〇 山下龜太郎（京都）
三、〇〇〇 栗屋正雄（夕張丸）
一、〇〇〇 Y K（京都）
六六、五〇〇 眞宗本願寺派北海道教區佛教講習會會員一同
七〇、〇〇〇 宮永カンデンスキー（東京）

圓
一、五〇 野本某（愛媛）
二、〇〇 一勞働者（札幌）
〇、四〇 白澤實雄（長野）
〇、五〇 青山省吾（鳥取）
〇、一〇 西園寅志（東京）
〇、一〇 岩谷四郎（東京）
二、〇〇 時友文之助（東京）
一、〇〇 大塚隆藏（東京）
五、〇〇 上村清敏（東京）
五、〇〇 鶴平名智太郎（東京）
三、〇〇 横關愛造（東京）
〇、二〇 田中敏一（東京）
一、〇〇 村田秀治（東京）
三、〇〇 〇〇生（茨城）

圓
五、〇〇 宮伏高信（東京）
一〇、〇〇〇 △△△△（東京）
二、〇〇 山本重彦（東京）
〇、一〇 前田三代男（東京）
〇、五〇 杉田十九二（東京）
一、〇〇 福山無覚（東京）
〇、三〇 小木會潔（東京）
一、〇〇 古木鐵太郎（東京）
一、〇〇 平田貢一郎（東京）
〇、三〇 箕輪青二（東京）
一、〇〇 宮城久輝（東京）
〇、一〇 比嘉賀輝（東京）
〇、一〇 末吉幸吉（東京）
二、〇〇 荳用實藏（横濱丸）
〇、二〇 山本時夫（三重）

國際語

エスペラント講座

工學士 小坂狷二講

學習者諸君へ

◎ エスペラント學習者の陷りやすい癖は、やり始めてみると非常に容易なので、つい氣を弛めることである。兎に角一つの言語を習得するのだから、怠けては到底熟達出來ない。

◎ エスペラントは實用の言語である。讀むと云ふ事以外に大に話すことをも練習せねばならぬ。普及が未だ行屆かぬ日本でも多くの地にエスペラント會がある。それ等の例會に出て練習するがよい。

◎ 御質問等あらば東京市牛込區新小川町三ノ十四小坂方日本エスペラント學會宛で御寄せ下さい。

◎ 少しく讀み書きが出來る樣になつたらば大に海外の同志と文通せられることをおすゝめします。世界中如何なる國にも日本人との文通を欲してゐるエスペランチストは多數あります。

れ、是等は皆 alfabeto 順に字書中に配列されてある。依てエスペラントは全然之を學んだ事のない人にも、此等の各要素を ' を以て區切り書を送れば、受信者は各要素を別々に字引中に捜し求めて、全文の意味を解することが出來る。即ちエスペラントは相手がエスペラントを知る知らぬに關せず、實用し得るのである。その爲めに各國共手紙の中へ封入し得るやうな日方の輕い文法附の字引を發行してゐる（英語のは A Key to Esperanto 佛のは Clef Esperanto, 獨のは Esperanto-Schlüssel あり定價は皆四、五錢である。日本のは『エスペラントの手引』と云ひ定價五錢）

例へば

Mi vid'is mal'jun'ul'in'o'n.

を各要素に就て字引を引けば

Mi 私。

vid' 見+is（動詞過去語尾）ました＝見ました

mal' 正反對を示す接頭字+jun' 若+ul'（接尾字）者+in'（接尾字）女性+o 名詞を示す語尾+n（目的格の語尾）を＝老婆を

依て全文の意味は『私は老婆を見ました』

即ちエスペラントの單語は之を組み立てゝゐる各要素に分つて、字引を引き、全體の意義を悟ることゝなる。それに就ては接頭、接尾字などは一々字引の御厄介にならずともわかる樣に早く覺えてしまふと便利である。

LECIONO III. 第三課

-at'　(今現に何々) されて居る所の〔受身現在〕

-it'　(既に何々) されたる所の〔受身過去〕

-ot'　(これから何々) されんとしてゐる〔受身未來〕

例: flui 流れる: fluanta (現に) 流れてゐる所の、fluinta (既に) 流れ去つたる、fluonta (これから) 流れんとしてゐる所の、ami 愛する: amata 愛されてゐる所の、amita 愛されてゐた所の、amota 愛されんとしてゐる所の、promeni 散歩する: promenante 散歩し乍ら (副詞) promenanto 散歩してゐる の者

〔注意〕(1) 接頭、接尾字も皆夫々語根として取扱はれる、即ち品詞語尾を附して獨立にも用ひられ得る。例: mala 正反對の、eco 性質、ilo 道具、ina 女性の

〔注意〕(2) 接頭、接尾字はエスペラント學習上の謂はゞ鍵である。此等約四十の接頭、接尾字を學習の當所に覺え込んでしまえば、あとの學習は非常に容易にせられる. 力めて早く覺えてしまふようにせねばならぬ。就中 dis-, ek-, ge-, mal-, re-, -ad', -aĵ', -an', -ar', -ebl', -ec', -eĵ', -eg', -et', -ig', -iĝ', -il', -in', -ist', -ul' は次課に進む迄に覺えてしまふ様に。

エスペラントの字引の引き方。エスペラントに於ては語根、接頭、接尾字、語尾 は皆夫々一定の意義を有する語の要素として平等に取り扱は

を稔らす樹): mono 金錢、mon'uj'o 財布。japano 日本人、Japanujo 日本國 (Japan'lando と云ふ組み合せ語を用ふるも可なり)。pomo 林檎、pomujo 林檎の木。

-ul' (或る性質を有する) 者、人・juna 若き、jun'ul'o 若者、青年。riĉa 富みたる、riĉulo 金持、富豪

-um' 一定の意義なき接尾字、或る特殊の語に附けて特殊の新意義の語を作る。依て um のついた語は之を一つの單語として覺えねばならぬ、然し原の語と關係ある故記憶の勞を省かれることが大である。例: malvarma 寒き、malvarmumi 寒冒にかゝる。kolo 頸、kolumo カラー、襟。mano 手、manumo カフス、袖口。vento 風、ventumi 扇ぐ。butono ボタン、butonumi ボタンをかける。nazo 鼻、nazumo 鼻眼鏡。aero 空氣、aerumi 空氣を入れる、曝す。

次の六接尾字は他國語の所謂分詞に當るものである。

-ant' (今現に何々) して居る所の〔發動現在〕

-int' (旣に何々) した、して了つた所の〔發動過去〕

-ont' (これから何々) せんとしてゐる所の〔發動未來〕

-ig' (自ら何々に) なる、する (自動詞を作る): turni 廻はす、turniĝi 回はる。ruĝiĝi 赤くなる、赤まる

-il' (有形の) 道具、(無形の道具たる) 手段: tranĉi 切る、tranĉ'il'o ナイフ。fotografi 寫眞をとる、fotografilo寫眞器

-ind' (何々) さるる價値ある: kredi 信ずる、kred'ind'a 信ずるに足る (信ずる價値ある)。laŭdi 賞讃する、laŭdinda 天晴な。

-ing' 物を挿入して用ひる具: plumo ペン、plum'ing'o ペン軸、kandelo 蠟燭、kandelingo 蠟燭立て

-ist' 從事してゐる者: insturi 教へる、instru'ist'o 教師。labori 働く、laboristo 勞働者。ŝteli 盜む、ŝtelisto 盜賊

-obl' 倍數: du 二、duobla 二倍の

-on' 分數: tri 三、triona 三分の一の。kvar 四、tri kvaronoj 四分の三

-op' 集合數: kvin 五、kvin'op'e 五ツ一所に、五人がゝりで、五人づれで

-uj' 抱容するもの (容器、入れ物、國民を容れる國、果實

-et' 弱、小：varm'et'a ぬるき、mont'et'o 小山、丘、rid'-et'i ほゝえむ

-em' 兎角（何々）し勝ちな、傾向的性質、性癖：koleri 怒る、koler'em'a 怒りッぽき。babili しやべる、babilema おしやべりな

-er' 物質を形成する分子、個體（一ツ）：sablo（一ツ二ツと數へられぬ物質）砂、sabl'er'o（一ツ二ツと数へられる）砂粒、mono（一ツ二ツと数へられぬ）金錢、monero（一ツ二ツと数へられる個體としての形を備へた）貨幣

-ĉj' 男子 }

-nj' 女子 } の名前の略につける愛呼稱（誰々ちやん）。Vilhelmo ウヰルヘルモ（男の名）、Vilhelĉjo, Vilheĉjo, Vilĉjo 又は Vĉjo ウヰッちやん。Mario マリオ（女の名）Marinjo, Manjo マアちやん。

-id' 子、孫：koko 鷄、kokid'o 雛、ヒヨッ子。reĝo 王、reĝido 王子。Joritom'ido 頼朝の子孫

-ig' （他をして何々）せしむ、さす、する（他動詞を作る）：morti 死ぬ、mort'ig'i 殺す。ruĝa 赤き、ruĝigi 赤くする、赤める。

-an' 或る團體の一員（國の民、ある宗教などの徒）ŝipo 船、ŝip'an'o 船員。urbo 市、urbano 市民。Ameriko アメリカ、amerikano アメリカ人。Kristo キリスト、kristano キリスト教徒

-ar' 集團：arbo 木、arb'ar'o 森° vagono 車輛、vagonaro 列車。vorto 語、vortaro 語彙。

-ebl' され得べき（可能なること）：kredi 信ずる、kredebla（信ぜられ得る）信ずべき。fleksi 曲げる、fleksebla（曲げられ得る）撓やかな、柔軟な。

-ec' 性質（日本語の何々さ、英語の -ness, hood, ity, cy, などに當る、-aĵ' の具體的に對して無形抽象的性質を示す）：bela 美しき、bel'ec'o 美しさ。amiko 友 amikeco（友たるの性情）友情。acida 酸き、acideco 酸性（acid'o は酸）

-ej' あることに關する場所：kuiri 料理する、kuir'ej'o 臺所。lerni 學ぶ、lernejo 學校。soldato 兵士、soldatejo 兵營。

-eg' （度合の）强、大・varma 煖き、varm'eg'a 熱き。monto 山、montego 山岳。ridi 笑ふ、ridegi 哄笑す

LECIONO III. 造語法

-in- 『女性』を示す。例: patr'o 父、patr'in'o 母。koko 牡雞、kok*in*o 牡雞。

〔注意〕§ 2 の〔注意〕に述べた通り、例へば patro なる語で o は要するに名詞たる觀念を示す語尾で、『人の子の親たる父』なる觀念は patr' なる語根に含まれてゐる。依て之に先づ女性の意を與へるため in を附して patr'in' なる新觀念を構成し、而して全體が名詞であることを示すため最後に -o を附けるのである。

接尾字 in だけでも 兄弟、伯父、祖父、牡牛、學生…などから自ら姉妹、伯母、祖母、牝牛、女學生など云ふ單語は學ばずして造り出し得るわけで、まことに偉大なる腦力の節約ではないか。なほ接尾字は次の三十餘語がある。

-aĉ' 粗惡: poeto 詩人、poet'aĉ'o へボ詩人。knabo 男の子、knabaĉo 餓鬼。ĉevalo 馬、ĉevalaĉo 駑馬、駄馬

-ad' 連續的動作: kanti 歌ふ、kant'ad'o 歌ふこと、唱歌(すること、即ち動作)(注意: kant'o は單に『歌』)。palori 話す、paroladi (連續的に話す) 演說する。

-aĵ' 物、事(具象的 konkreta な事物): mangi 食べる、mangaĵo 食物。alta 高き、altaĵo 高み、高地(高い處物)

distribu'e)

ek- 動作の瞬間的な開始、發端: iri 行く、ekiri (行くと云ふ動作を開始する) 出發する。krii 叫んでゐる、ekkrii (今迄叫んで居らなかつたのが急に) 叫び出す

eks- 前(何役) 元(何官): ministro 大臣 eksministro 前大臣。oficiro 士官、eksoficiro 退職士官。edzo 夫、eksedzo (前の夫) 先夫

ge- 男女兩方を並べ稱へる: patro 父、*ge*patroj 父母、兩親。sinjoro 紳士、(何々) 氏、君、gesinjoroj 紳士淑女、(何々氏) 夫妻、

pra- 時間的に一層遠きもの: avo 祖父、*pra*avo 曾祖父。nepo 孫、pranepo 曾孫。tempo 時、時代、pratempo 古代、

re- 歸、再、復 (→する動作に對して之を←する意): doni 與へる、redoni 返却する、(英語の give *back*, *re*turn)。veni 來る、reveni 歸る

vic 次位: prezidanto 會頭、*vic*prezidanto 副會頭。grafo 伯爵、vicgrafo 子爵

4. 接尾字。語根に附けて新觀念を作る語。例へば

尾たる母音 o を普通挿入する。

又意味を別つ上から必要上、組み合せた語根間に語尾を挿入することがある。例へば：unu 一、unu'a 第一の、tag'o 日

unutaga　一日の、一日間の　(unu+tag'+a)

unuatago　第一日の　(unu+a+tag'+a)

§ 3. 接頭字。語の頭につけて新観念を造る語で、例へば：

Mal- を語頭につければ『正反對の意味』を表はす。例：juna 若い、*mal*juna 老いたる。dekstra 右の、maldekstra 左の。amiko 友、味方、malamiko 敵。

〔注意〕悪い、低い、薄い、小さい、少ない…など云ふ單語は善い、高い、厚い、大きい、澤山な…の反對の意であるから此等の語に mal' をつけさへすれば出來る、即ち別に暗記する必要はないのである。此の接頭字 mal' だけでも既に單語暗記の苦痛を感ずること幾干であらうか。なほ接頭字に下の八つがある。

Bo-　婚姻によつて生ずる親族關係を示す。例：patro 父、*bo*patro 舅。filo 子息、bofilo 婿。frato 兄、弟、bofrato 義理の兄弟（妻の兄弟、姉妹の夫など）

dis-　分散することを示す。例：ĵeti 投げる、*dis*ĵeti 投げ散らす。doni 與へる、disdoni 分配する（英語の

的に』、antaŭ... 『...の前に』(前置詞)、 antaŭa 『前の、以前の』、antaŭe 『前方に、以前に』、antaŭo 『前部』

§ 2. 語の組み合はせ。日本語と同じ様に二つ以上の單語を並べ合はせて一單語を造り得る。例へば: fero 『鐵』、vojo 『道』を組み合はせて fervojo 『鐵道』

〔注意〕fer'o, voj'o の o は單に名詞たるを示す語尾で、『鐵、道』たる觀念は fer', voj' なる語根に存するわけであるから、組み合せ語を造るには觀念を示す語根を結合して fervoj' なる新觀念を構成し、そして全體が名詞であることを示すために、語尾 -o を最後に加へて fervojo とするのである。例: bel'a 美しき、art'o 技術、belarto 美術、inter... ...の間の (前置詞)、naci'o 國民、internacia 國際間の

語根のみを組み合はせると發音がしにくゝなる場合には任意母音を挿入してもよい。例へば: dorm'i 眠る、ĉambr'o 部屋、室、dormoĉambro 寢室

〔注意〕dormĉambro とすると rmĉ と三つ子音が重なつて發音がわるくなるから母音を挿入したのである。エスペラントの母音は既に學んだ如く皆語尾として意味を持つてゐる。語根間には一番中立的な名詞の語

Lecino III. 造語法

前課でエスペラントの文法を習得した讀者は、そのきもちのよい位な規則正しさに感じられたであらう。文法は此の如く簡單明確で、學習容易であつても、幾萬の單語を一々暗記しなくつてはならぬのでは何にもならぬ。

エスペラントでは巧妙な造語法があつて、僅少の單語を覺えれば、それから次に述べる一定明確な法則によつて多數の他の語を誘導し活用することが出來る。

§ 1　品詞語尾の附け更へ。前課 § 2. に述べた如く四品詞は一定の語尾で示されてゐるのであるから、一の品詞を覺えれば他の同じ意味な品詞は學ばなくても出來る。例へば：fini『終る』なる動詞を覺えれば、fino『終り』(名詞)、fina『終の』(形容詞)、fine『終に』(副詞)などと單に語尾を附け更へて何人も自ら造語し得られる。

助辭にも語尾をつければ夫々其意味の品詞が得られる。例へば：ne『否、いゝえ、ぬ、非ず』(否定を示す副詞的助辭) nei『否定する、いゝえと云ふ』、nea『否定の』、nee『否定して、否定

で返事して下さい。然し手紙で返事しないで。

〔註〕 respond'i 返事す、答ふ、al……に、へ、per……で、をもつて（前置詞） telegramo 電報、leter'o 手紙、leter'e 手紙で（副詞）。

Kion vi faris hieraŭ? 何を君は昨日しましたか。

〔註〕 kio'n 何を、fari 爲す、成す、作る、hieraŭ 昨日（副詞的助辭）

Mi volis lin viziti, sed mi ne povis. 私は彼を訪問したいと思つたが出來ませんでした。

〔註〕 voli 欲する、したく思ふ、viziti 訪問す、sed 然し乍ら povi 出來る。

Vi devas veni kun viaj kuzoj. 君は君の從兄弟をつれて來なければなりません。

〔註〕 devi……すべきである、せねばならぬ 英語の must, veni 來る、kun……と共に、を持つて、を連れて。

Li staris sub la arbo antaŭ la domo de mia onklo. 彼は私の叔父の家の前にある樹の下に立つてゐた。

〔註〕 stari 立つてゐる、sub……の下に（前置詞）、arbo 樹、domo 家、de……の。

〔注意〕 紙數を節約するため一度出た、新單語は後に多く二度と註の處にくりかへさぬことにします。依てよく暗記して。又は字引を買ひ求めて、引いてみられるように。

LECIONO II. 文法

Ĉu ili estas kontenta pri tio? 彼等はその事に就て満足してゐますか。

〔註〕 kontent'a 満足せる、pri...に就て、關して、tio それ、その事。

Jes, ili tre ĝojas pro sia sukceso. そうです、彼等は自分達の成功で甚だ喜んでゐます。

〔註〕 Jes 左様、然り（肯定の副詞的助辭）、tre 甚だ、ĝoj'i 喜ぶ、pro......の爲めに（原因を示す前置詞）、sukceso 成功。

Ĉu vi trinkos bieron? 君はビイルを飲みますか。

〔註〕 trinki 飲む、biero ビール

Ne, mi ne trinkos bieron, sed kafon. いゝえ、私はビールを飲みますまい、然しコーヒーを飲みませう。

〔註〕 Ne 否、いゝえ、......でない、......せぬ（打消の副詞的助辭）、trinki 飲む、sed 然し乍ら（接續詞）、kafo コーヒー

Kio estas en la kesto sur la tablo? 何が机の上の箱の中にありますか。

〔註〕 Kio 何....か、en......の中に、sur......の上に、（前置詞）、kesto 箱、tablo 机。

〔注意〕 kio は『何....か』と疑問詞、即ちそれ自身に『か』の意味あり。從て Ĉu を附けるに及ばぬ。

Respondu al mi per telegramo, sed ne letere. 私に電報

質問文を作らず、日本語と同様 Ĉu なる助辭を用ひてなす)、povi 出来る、能くす、parol'i 話す、Esperant'e エスペランで、(副詞)。

Lia onklo estas pli juna, ol mia patro. 彼の叔父の方が私の父よりも若い。

〔註〕 onkl'o 叔父、patr'o 父、jun'a 若い、pli 一層、もつと (英語の more に當る比較級を作る副詞的助辭)、ol ...よりも (英語の than に當る接續詞)

La frato de Johano estas la plej honesta el miaj amikoj. ヨハノの兄 (弟) は私の友人中で一番正直です。

〔註〕 frato 兄、弟、de ...の (前置詞)、plej 最も、一番 (副詞的助辭)、honesta 正直な、amiko 友人

Se mi havas tempon, mi nepre vin vizitos. 若し私は時間があれば (時間を持つならば) 私は君を訪問しませう。

〔註〕 Se 若し ...ならば (接續詞)・tempo 時、nepr'e 必ず (副詞)、vizit'i 訪問す

Se mi estus riĉa, mi donus al vi multan monon. 若し私が金持であつたら君に澤山のお金をあげるのだが (實は金持でないからあげられぬ、假定法)

〔註〕 riĉa 富みたる、don'i 與ふ、al...に、へ(前置詞)、multa 多くの、mono 金錢。

目的格が移動の方向を示すに用ひられることは前に述べた通りである。

助辭に就ては拙著『エスペラント助辭一覧』（定價五錢）あり、又本講座で漸次出て來ることであらう。

エスペラント文法講義の部を終るに際し讀者に特筆注意したいことは『勿論エスペラントには一の不規則なく、一の除外例がない』と云ふことである。

文法練習短文

Leono estas besto. 獅子は獸である。

〔註〕leon'o 獅子、besto 獸、est'i ある、est'as あります。

Ŝi havas ruĝan rozon. 彼の女は赤いバラの花を持つてゐる。

〔註〕hav'i 持つ、hav'as 持つてゐる、ruĝa 赤い、rozo バラ（の花）

Du ratojn manĝis la kato. 鼠を二匹猫は食べました。

〔註〕rato 鼠、kato 猫、manĝ'i 食す、manĝ'is 食べました。

Ĉu li povas paroli Esperante? 彼はエスペラントで話せますか。

〔註〕Ĉu……か（疑問を示す日本の『か』に當る副詞的助辭。エスペラントでは文中の語の配列は自由、依て英語の如く動詞と主語の位置で

人稱代名詞の目的格は名詞と同様 -n をつける。例へば min 私を、vin あなたを、lin 彼を。

所謂所有代名詞とは人稱代名詞の形容詞化されたものであるから語尾 -a を附けて作る。例へば mia 私の、via あなたの。sia 彼（彼女、それ）自身の（英語の his own, her own などに當る）。

(c) 數詞:

1 unu 2 du 3 tri 4 kvar 5 kvin

6 ses 7 sep 8 ok 9 naŭ 10 dek

100 cent 1,000 mil

十以上の數は單に上記の數詞を組み合はせて作ればよろしい。例 十一 dek unu, 十二 dek du, 十三 dek tri, 二十 dudek, 三百四十五 tricent kvardek kvin 千六 mil ses.

(d) 前置詞の後には主格を置く（英語では about him などと目的格を置くが）。

前置詞の後に目的格の語を置けばその位置への移動を示す（獨逸語も然り）。

En Ameriko アメリカに於て

En Amerikon アメリカの中へ（はいつてゆく）

てゐる。其用法は英佛獨語などの定冠詞と全く同じく不定のもの（どれでもよいある物）に對して、特定（あるきまつた。他のものではない）ものを表示するに用ひられる。

(b) 人稱代名詞:

		單數		複數	
第一人稱		mi	私	ni	吾々
第二人稱		vi	君	vi	君達
第三人稱	男性	li	彼（の男）	ili	彼等 それ等
	女性	ŝi	彼の女		
	中性	ĝi	それ		
	自身	si	自分自身		
	一般	oni	人が、人々が、世人が		

第二人稱で極めて親しい者（夫婦、親友間など）に對しては ci（お前）と云ふ代名詞がある。然し普通の場合には vi を用ひる。

si は英語の himself, herself, itself, themselves に當るもので、單、複數同じ形を用ひること獨逸語の sich と同樣である。

oni はあの人、この人とある特定の人（li, ŝi など）を指すのでなく、一般に『人が、世人が』と云ふ場合に用ひる。

Bela	floro	美しい花 (單數主格)
Belan	floron	美しい花を (單數目的格)
Belaj	floroj	美しい花 (複數主格)
Belajn	florojn	美しい花を (複數目的格)

〔注意〕形容詞は名詞の前、後何れに置いてもよい。口調のよい様に並べる。

文中の語の順序も全く自由である。口調又は語勢 (強く云ひ度い語は自然先へ出る) によつて並べてゆけばよい。

形容詞が名詞と同じ添加語尾をとつて形をそれぞれ、關係を明示することは甚だ必要なことで、韻文などで名詞と形容詞とが顚倒又は離れて居つても直ちに關係がつけられ、形の上でも對照的で美しい。又英佛語と異り、文の語序の拘束なく詞の配列が自由 (ロシヤ語なども然りだが) なのは全く目的格のあるお蔭である。日本語も此の點は幾分英佛語に優つてゐる。

目的格は又移動の方向を示すにも用ひられる。例へば Amerikon アメリカへ (アメリカを指して行くなど)。

元來目的格とは主語の動作の及ぶ行き先きを示すもので、それが移動の方向を示すのに用ひられるのは當然と云はねばならぬ。

§ 3. 助辭:

(a) 冠詞。所謂不定冠詞はなく、定冠詞 la のみが用ひられ

§ 2. 品詞語尾：

品詞		語尾	例	
名詞		-o	kolero	怒り
形容詞		-a	kolera	怒れる
副詞		-e	kolere	怒つて
動詞	不定法	-i	koleri	怒る（と）
	現在時	-as	koleras	怒つてゐる
	過去時	-is	koleris	怒つた
	未來時	-os	koleros	怒るならん
	假定法	-us	kolerus	怒るかも知れぬ
	命令法	-u	koleru	怒れ

一體西洋語の文法變化は人稱とか性とか數とかによる變化であるが、日本文法のは全然異り、品詞變化である。例へば動詞の『かすむ』から『かすみ』(名)、『かすめる』(形)、『かすみて』(副) など。エスペラントも全く日本語と同じ品詞變化で、文法の根帶が全く一致してゐる處が我々日本人にとつて面白く、又有利である點である。

複數 は -j を附加して示す。

目的格 (……を) は -n を附加して示す。

複數又は目的格の名詞を形容する形容詞にも夫々 -j 又は -n を附加して、兩者の關係を明瞭ならしめる。

LA REKONSTRUO — MONATA REVUO DE
POLITIKO, LITERATURO, SOCIAJ AFEROJ, KTP.
PREZO: UNU EKZ. OKDEK SENOJ, JARE DEKDU JENOJ.
OFICEJO: KAIZOŜA, 1 ATAGOŜITAMAĈI, ŜIBA, TOKIO.